四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第六冊

稲木遺跡

1989.3

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第　六　冊

稲　木　遺　跡

1989.3

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

日　本　道　路　公　団

(1) 稲木遺跡航空写真（A・B・C地区）

(2)　稲木遺跡Ｂ地区航空写真（東から）

(3)　稲木遺跡Ｂ地区航空写真（南から）

⑷　銅 鏡（C地区出土）

序　　文

昭和62年12月に開通しました四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）の建設に伴い，昭和57年度から昭和62年度まで路線内の23遺跡について発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の成果につきましては，整理作業の終了した遺跡から順次報告書として刊行し，昭和62年度末までに5冊の調査報告書を刊行しております。

今回第6冊として報告いたしますのは，善通寺市稲木町・下吉田町の稲木遺跡についてであります。調査によって，弥生時代後期の集落跡と墓地，七世紀頃の集落跡の一部が明らかになりました。このうち弥生時代後期の集石墓と壺棺墓などからなる墓地の発掘によって，これまで不明でありましたこの時期の墓制が明らかになるなど，善通寺周辺地域の歴史を解明する資料として注目されております。

本書が，香川県の古代史研究の資料として広く活用され，さらに埋蔵文化財に対する理解と関心が深められる一助となれば幸いであります。

最後になりましたが，発掘調査から遺物の整理・報告に至るまでの間，日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位に多大な御援助・御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表すとともに今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

香川県教育委員会
教育長　林　田　英　樹

例　　言

1．本書は四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）建設に伴う，埋蔵文化財発掘調査報告書第六冊で，善通寺市稲木町・下吉田町に所在する稲木遺跡の報告を収録した。

2．発掘調査は日本道路公団高松建設局から香川県教育委員会が委託をうけ実施した。また，本報告書作成業務は同局の委託を受け香川県教育委員会の指導のもとに財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．本調査は，昭和58年6月1日から60年3月31日までの間で実施した。

4．調査は，予備調査・A地区を岸上康久（現善通寺第一高等学校教諭）・野中寛文（現高松東高等学校教諭）・中本雅之（退職），B地区を真鍋昌宏，C地区を野中・中本・西岡達哉が担当した。

5．調査にあたって下記の協力を得た。記して謝意を表したい。
日本道路公団高松建設局・同善通寺工事事務所・香川県土木部横断道対策室・善通寺市横断道対策室・地元自治会・地元対策協議会

6．報告書の作成は調査終了後から昭和62年度までは香川県教育委員会が実施し，63年度は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが整理作業を実施した。
本書の編集は西岡達哉が担当し，執筆は下記の通り分担した。
第1章第1節……渡　部　明　夫
第1章第2節，第2章，第3章……真　鍋　昌　宏
第4章第3節1－②・④・⑥・⑩，3－⑨，4－①・②・③，第4節4－⑬……野　中　寛　文
第1章第3節・第4節，第4章の上記以外の部分……西　岡　達　哉

7．本書遺構図中の方位は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はT.P.で表示している。また遺構は下記の略号により表示している。

SB	竪穴住居跡・掘立柱建物跡	SK	土坑（土壙）
ST	壺棺墓・集石墓・土壙墓	SD	溝状遺構
SX	不明遺構		

8．本調査では人骨の鑑定を香川医科大学法医学教室恒成茂行教授(現熊本大学医学部)，獣骨の鑑定を香川大学教育学部仲谷英夫助教授に依頼し，玉稿をいただいた。

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　横断道調査の経過 …… 1
第２節　調査に至る経過 …… 7
第３節　遺跡の立地と環境 …… 11
１．遺跡の立地 …… 11
２．周辺の遺跡 …… 14
第４節　調査の方法 …… 19

第２章　Ａ地区の調査 …… 21
第１節　調査の経過 …… 21
第２節　調査の概要 …… 24
１．遺構 …… 24
１）ピット群 …… 24
２）自然河川 …… 24
３）溝状遺構 …… 33
２．遺物 …… 33
１）土器 …… 33
２）石器 …… 37
第３節　小結 …… 41

第３章　Ｂ地区の調査 …… 43
第１節　調査の経過 …… 43
第２節　調査の概要 …… 45
１．土層 …… 45
２．遺構 …… 46
１）B_1・B_2地区の遺構 …… 46
２）B_3地区の遺構 …… 50
(1)　掘立柱建物 …… 50
(2)　溝状遺構 …… 93
(3)　土坑 …… 100

(4) 自然河川（ＮＲ01）……103
(5) ＳＸ01……103
3．遺物……104
1）B_3地区の遺物……104
(1) 掘立柱建物出土の遺物……104
(2) 溝出土の遺物……111
(3) 土坑出土の遺物……126
(4) ピット及び柵列出土の遺物……132
(5) 包含層出土の遺物……138
(6) ＳＸ01出土の遺物……141
2）B_1・B_2地区の遺物……142
第３節　小結……158
1．建物遺構の方位について……158
2．建物遺構の面積について……159
3．稲木遺跡B_3地区の遺構変遷について……160

第４章　Ｃ地区の調査……173
第１節　調査の経過……173
第２節　土層序について……178
第３節　弥生時代の遺構と遺物……179
1．竪穴住居跡……179
2．土坑……197
3．集石墓……202
4．土坑墓……276
5．壺棺墓……281
6．集石遺構……306
7．不明遺構……310
第４節　古墳時代以降の遺構と遺物……314
1．掘立柱建物跡……314
2．土坑……322
3．溝状遺構……324
4．不明遺構……326
第５節　その他の遺構と遺物……339

1．不明遺構 ……339
2．ピット群伴出遺物 ……340
第6節　包含層出土の遺物 ……342
1．第5層出土遺物 ……342
2．第4層出土遺物 ……359
3．第4層包蔵の自然礫群伴出遺物 ……377
4．第3層出土遺物 ……378
第7節　小結 ……385
1．検出遺構の時期考察 ……385
2．埋葬遺構の考察 ……388
3．遺跡の構造について ……394
4．稲木遺跡C地区の位置 ……397
5．集落の変遷 ……398

挿　図　目　次

第 1 章

第 1 図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(善通寺～豊浜間)…… 3
第 2 図　発掘作業風景(B地区)…… 6
第 3 図　整理作業風景…… 6
第 4 図　稲木遺跡位置図…… 11
第 5 図　丸亀平野の扇状地と弥生時代前期の遺跡の分布図…… 12
第 6 図　周辺の遺跡分布図…… 15

第 2 章

第 7 図　断面実測図(1) ……25～26
第 8 図　断面実測図(2) ……27～28
第 9 図　断面実測図(3) ……29～30
第 10 図　断面実測図(4) ……31～32
第 11 図　土錘実測図…… 34
第 12 図　土器実測図(1)…… 35
第 13 図　土器実測図(2)…… 36
第 14 図　石器実測図(1)…… 38
第 15 図　石器実測図(2)…… 39
第 16 図　石器実測図(3)…… 40

第 3 章

第 17 図　土層模式図…… 45
第 18 図　B_1地区ＳＤ01・02平面図 …… 47
第 19 図　B_1地区ＳＤ01・02断面図 …… 48
第 20 図　B_1・B_2地区ＳＤ03断面図 …… 49
第 21 図　掘立柱建物模式図…… 50
第 22 図　ＳＢ01実測図…… 51
第 23 図　ＳＢ02実測図…… 52
第 24 図　ＳＢ03実測図 ……53～54
第 25 図　ＳＢ04実測図…… 55
第 26 図　ＳＢ05実測図…… 56
第 27 図　ＳＢ06実測図…… 57
第 28 図　ＳＢ07実測図…… 58
第 29 図　ＳＢ08実測図…… 59
第 30 図　ＳＢ09実測図…… 60
第 31 図　ＳＢ10実測図…… 61
第 32 図　ＳＢ11実測図…… 62
第 33 図　ＳＢ12実測図…… 63
第 34 図　ＳＢ13実測図…… 64
第 35 図　ＳＢ14実測図…… 65
第 36 図　ＳＢ15実測図…… 66
第 37 図　ＳＢ16実測図…… 67
第 38 図　ＳＢ17実測図…… 68
第 39 図　ＳＢ18実測図…… 69
第 40 図　ＳＢ19実測図…… 70
第 41 図　ＳＢ20実測図…… 71
第 42 図　ＳＢ21実測図…… 72
第 43 図　ＳＢ22実測図 ……73～74
第 44 図　ＳＢ23実測図 ……75～76
第 45 図　ＳＢ24実測図 ……77～78
第 46 図　ＳＢ25実測図…… 79
第 47 図　ＳＢ26実測図…… 81
第 48 図　ＳＢ27実測図…… 82
第 49 図　ＳＢ28実測図…… 83
第 50 図　ＳＢ29実測図…… 84
第 51 図　ＳＢ30実測図…… 85
第 52 図　ＳＢ31実測図…… 86
第 53 図　ＳＢ32実測図…… 87
第 54 図　ＳＢ33実測図…… 88
第 55 図　ＳＢ34実測図 ……89～90
第 56 図　溝方位…… 98
第 57 図　ＳＢ01-ＳＢ03出土土器実測図 …108
第 58 図　ＳＢ07-ＳＢ09出土土器実測図 …109
第 59 図　ＳＢ10-ＳＢ18出土土器実測図 …110
第 60 図　ＳＢ22-ＳＢ32出土土器実測図 …111
第 61 図　ＳＤ04-ＳＤ05(1)出土土器実測図 ……119
第 62 図　ＳＤ05(2)―ＳＤ06出土土器実測図

……120
第63図　ＳＤ07(1)出土土器実測図……121
第64図　ＳＤ07(2)-ＳＤ15出土土器実測図
……122
第65図　ＳＤ16-ＳＤ22出土土器実測図 …123
第66図　ＳＤ23出土土器実測図……124
第67図　ＳＤ25-ＳＤ45出土土器実測図 …125
第68図　ＳＤ46-ＳＤ48出土土器実測図 …126
第69図　ＳＫ01-ＳＫ05出土土器実測図 …129
第70図　ＳＫ06出土土器実測図……130
第71図　ＳＫ08-ＳＫ30出土土器実測図 …131
第72図　ピット(1)出土土器実測図……135
第73図　ピット(2)，ＳＡ出土土器実測図…136
第74図　鉄製鋤先実測図(ＳＰ40)……137
第75図　包含層出土土器(1)実測図……139
第76図　包含層出土土器(2)実測図……140
第77図　包含層出土土器(3)実測図……141
第78図　ＳＸ01出土土器実測図……141
第79図　B_1地区ＳＤ02上層・下層出土土器実
測図……144
第80図　B_1地区ＳＤ01・包含層，B_2地区
ＳＤ03・04出土土器実測図……145
第81図　建物主軸方位(桁行)……158
第82図　遺構変遷図(1) ……163～164
第83図　遺構変遷図(2) ……165～166
第84図　遺構変遷図(3) ……167～168
第85図　遺構変遷図(4) ……169～170

第　4　章

第86図　発掘調査風景……174
第87図　整理作業風景……177
第88図　第1号竪穴住居跡実測図……180
第89図　第1号竪穴住居跡伴出砥石実測図
……182
第90図　第2号竪穴住居跡実測図……183
第91図　第2・3・5号竪穴住居跡伴出鉄
製品実測図……184
第92図　第3号竪穴住居跡実測図……185
第93図　第1・2・3号竪穴住居跡……186
第94図　第1・2・3号竪穴住居跡伴出遺
物実測図……187
第95図　第4号竪穴住居跡実測図……188
第96図　第4号竪穴住居跡伴出遺物実測図
……189
第97図　第5号竪穴住居跡実測図……191
第98図　竪穴住居跡調査風景……193
第99図　第5号竪穴住居跡伴出遺物実測
図(1)……194
第100図　第5号竪穴住居跡伴出遺物実測
図(2)……195
第101図　第5号竪穴住居跡伴出遺物実測
図(3)……196
第102図　第1号土坑実測図……197
第103図　第2号土坑実測図……199
第104図　第3号土坑実測図……200
第105図　第2・3号土坑伴出遺物実測図…201
第106図　第1号集石墓主体部実測図……204
第107図　第1号集石墓伴出遺物実測図(1)…205
第108図　第1号集石墓伴出遺物実測図(2)…206
第109図　第2号集石墓土坑実測図……209
第110図　第2号集石墓伴出遺物実測図(1)…210
第111図　第2号集石墓伴出遺物実測図(2)…211
第112図　第2号集石墓伴出遺物実測図(3)…212
第113図　第2号集石墓伴出遺物実測図(4)…213
第114図　第2号集石墓伴出遺物実測図(5)…215
第115図　第2号集石墓伴出遺物実測図(6)…216
第116図　第2号集石墓伴出遺物実測図(7)…217
第117図　第2号集石墓伴出遺物実測図(8)…218
第118図　第1・2・5・6・8号集石墓伴
出鉄製品実測図……219
第119図　第3号集石墓主体部実測図……220
第120図　第3号集石墓伴出遺物実測図(1)…222
第121図　第3号集石墓伴出遺物実測図(2)…223
第122図　第3号集石墓伴出遺物実測図(3)…225
第123図　第3号集石墓伴出遺物実測図(4)…226
第124図　第3号集石墓伴出遺物実測図(5)…227

第125図　第３号集石墓伴出遺物実測図(6)…228
第126図　第３号集石墓伴出遺物実測図(7)…229
第127図　第４号集石墓土器群実測図……230
第128図　第４号集石墓伴出遺物実測図(1)…233
第129図　第４号集石墓伴出遺物実測図(2)…234
第130図　第４号集石墓伴出遺物実測図(3)…235
第131図　第４号集石墓伴出遺物実測図(4)…236
第132図　第４号集石墓伴出遺物実測図(5)…237
第133図　第４号集石墓伴出遺物実測図(6)…238
第134図　第４号集石墓伴出遺物実測図(7)…239
第135図　第４号集石墓伴出遺物実測図(8)…240
第136図　第４号集石墓伴出遺物実測図(9)…241
第137図　第５号集石墓実測図……242
第138図　第５号集石墓伴出遺物実測図……243
第139図　第６号集石墓土器群実測図……245
第140図　第６号集石墓主体部実測図……246
第141図　第６号集石墓伴出砥石実測図……248
第142図　第６号集石墓伴出遺物実測図(1)…249
第143図　第６号集石墓伴出遺物実測図(2)…250
第144図　第６号集石墓伴出遺物実測図(3)…251
第145図　第６号集石墓伴出遺物実測図(4)…252
第146図　第７号集石墓伴出砥石実測図……254
第147図　第７号集石墓伴出遺物実測図(1)…256
第148図　第７号集石墓伴出遺物実測図(2)…257
第149図　第８号集石墓第１号主体部実測図
……258
第150図　第８号集石墓第２号主体部実測図
……259
第151図　第８号集石墓伴出遺物実測図(1)…262
第152図　第８号集石墓伴出遺物実測図(2)…263
第153図　第８号集石墓伴出遺物実測図(3)…264
第154図　第８号集石墓伴出遺物実測図(4)…265
第155図　第８号集石墓伴出遺物実測図(5)…266
第156図　第８号集石墓伴出遺物実測図(6)…267
第157図　第８号集石墓伴出遺物実測図(7)…268
第158図　第８号集石墓伴出石器実測図(1)…270
第159図　第８号集石墓伴出石器実測図(2)…271
第160図　第８号集石墓伴出石器実測図(3)…272
第161図　第８号集石墓伴出管玉実測図……273
第162図　第９号集石墓伴出遺物実測図……274
第163図　第１号土坑墓実測図……276
第164図　第２号土坑墓実測図……277
第165図　第３号土坑墓実測図……279
第166図　第１・３号土坑伴出遺物墓実測図
……279
第167図　第１号壺棺墓伴出遺物実測図……282
第168図　第２号壺棺墓実測図……283
第169図　第２号壺棺墓伴出遺物実測図……284
第170図　第３号壺棺墓実測図……286
第171図　第３号壺棺墓伴出遺物実測図……287
第172図　第３号壺棺墓伴出砥石実測図……288
第173図　第４号壺棺墓実測図……288
第174図　第４号壺棺墓伴出遺物実測図(1)…289
第175図　第４号壺棺墓伴出遺物実測図(2)…290
第176図　第５号壺棺墓実測図……291
第177図　第５号壺棺墓伴出遺物実測図……292
第178図　第６号壺棺墓実測図……293
第179図　第６号壺棺墓伴出遺物実測図……294
第180図　第７号壺棺墓伴出遺物実測図(1)…295
第181図　第７号壺棺墓実測図……296
第182図　第７号壺棺墓伴出遺物実測図(2)…297
第183図　第８号壺棺墓実測図……300
第184図　第８号壺棺墓伴出遺物実測図(1)…301
第185図　第８号壺棺墓伴出遺物実測図(2)…302
第186図　第９号壺棺墓実測図……303
第187図　第９号壺棺墓伴出遺物実測図……304
第188図　第10号壺棺墓伴出遺物実測図(1)…305
第189図　第10号壺棺墓伴出遺物実測図(2)…305
第190図　第１号集石遺構実測図……306
第191図　第１号集石遺構伴出遺物実測図…306
第192図　第２号集石遺構伴出遺物実測図(1)
……307
第193図　第２号集石遺構伴出遺物実測図(2)
……308
第194図　ＳＸ03実測図……310
第195図　ＳＸ03伴出遺物実測図……311

第196図　旧河道伴出遺物実測図……312
第197図　ＳＸ05実測図……313
第198図　ＳＸ05伴出遺物実測図……313
第199図　第１号掘立柱建物跡実測図……315
第200図　第２号掘立柱建物跡実測図……316
第201図　第３号掘立柱建物跡実測図……317
第202図　第４号掘立柱建物跡実測図……318
第203図　第５号掘立柱建物跡実測図……319
第204図　第２・３・４・５号掘立柱建物跡伴出遺物実測図……321
第205図　第４号土坑実測図……322
第206図　第４号土坑伴出遺物実測図……323
第207図　ＳＤ01実測図……324
第208図　ＳＤ01伴出遺物実測図……325
第209図　ＳＸ06伴出遺物実測図……326
第210図　ＳＸ06実測図……328
第211図　ＳＸ06伴出鉄製品実測図……327
第212図　ＳＸ07実測図……329
第213図　ＳＸ07伴出遺物実測図……329
第214図　ＳＸ08実測図……330
第215図　ＳＸ08伴出遺物実測図……330
第216図　ＳＸ09実測図……331
第217図　ＳＸ09伴出遺物実測図……332
第218図　ＳＸ10実測図……333
第219図　ＳＸ10伴出遺物実測図……333
第220図　ＳＸ11実測図……334
第221図　ＳＸ12実測図……335
第222図　ＳＸ13実測図……336
第223図　ＳＸ13伴出遺物実測図……337
第224図　ＳＸ13伴出銅銭実測図……337
第225図　ＳＸ15埋土層序図……339
第226図　第５層上面ピット群伴出遺物実測図……340
第227図　第４層上面ピット群伴出遺物実測図……341
第228図　第５層弥生土器地区別分布図……342
第229図　第５層出土遺物実測図(1)……345
第230図　第５層出土遺物実測図(2)……346
第231図　第５層出土遺物実測図(3)……347
第232図　第５層出土遺物実測図(4)……348
第233図　第５層出土遺物実測図(5)……349
第234図　第５層出土遺物実測図(6)……350
第235図　第５層出土遺物実測図(7)……351
第236図　第５層出土遺物実測図(8)……352
第237図　第５層出土遺物実測図(9)……353
第238図　第５層出土遺物実測図(10)……354
第239図　第５層出土遺物実測図(11)……355
第240図　第５層出土土製品実測図……356
第241図　第５層出土石器実測図……357
第242図　第５層出土管玉実測図……357
第243図　第３・４・５層出土鉄製品実測図……358
第244図　第４層弥生土器地区別分布図……359
第245図　第４層出土遺物実測図(1)……360
第246図　第４層出土遺物実測図(2)……361
第247図　第４層出土遺物実測図(3)……362
第248図　第４層出土遺物実測図(4)……363
第249図　第４層出土遺物実測図(5)……364
第250図　第４層出土遺物実測図(6)……365
第251図　第４層出土遺物実測図(7)……367
第252図　第４層出土遺物実測図(8)……368
第253図　第４層出土遺物実測図(9)……369
第254図　第４層出土不明遺物実測図……370
第255図　第４層出土石器実測図(1)……371
第256図　第４層出土石器実測図(2)……372
第257図　第４層出土銅鏡実測図……375
第258図　11-Ｇ区自然礫群包蔵遺物実測図……377
第259図　第３層弥生土器地区別分布図……378
第260図　第３層出土竈実測図……379
第261図　第３層出土遺物実測図(1)……380
第262図　第３層出土遺物実測図(2)……381
第263図　第３層出土遺物実測図(3)……382
第264図　第３層出土黒色土器実測図……382
第265図　第３層出土石器実測図……383

表 目 次

第 1 章

第 1 表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業(発掘調査のみ)… 1
第 2 表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)…… 4
第 3 表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)…… 5
第 4 表　稲木遺跡周辺の遺跡地名表…… 14

第 3 章

第 5 表　B_3地区建物遺構一覧表 …… 92
第 6 表　B_3地区溝状遺構一覧表(1) …… 98
第 7 表　B_3地区溝状遺構一覧表(2) …… 99
第 8 表　B_3地区土坑一覧表 ……102
第 9 表　遺物観察表(1)……146
第 10 表　遺物観察表(2)……147
第 11 表　遺物観察表(3)……148
第 12 表　遺物観察表(4)……149
第 13 表　遺物観察表(5)……150
第 14 表　遺物観察表(6)……151
第 15 表　遺物観察表(7)……152
第 16 表　遺物観察表(8)……153
第 17 表　遺物観察表(9)……154
第 18 表　遺物観察表(10)……155
第 19 表　遺物観察表(11)……156
第 20 表　遺物観察表(12)……157

第 4 章

第 21 表　整理作業工程表……176
第 22 表　竪穴住居跡一覧表……179
第 23 表　集石墓一覧表……202
第 24 表　壺棺墓一覧表……281
第 25 表　掘立柱建物跡一覧表……314
第 26 表　竪穴住居跡伴出遺物観察表(1)……401
第 27 表　竪穴住居跡伴出遺物観察表(2)……402
第 28 表　竪穴住居跡伴出遺物観察表(3)……403
第 29 表　竪穴住居跡伴出遺物観察表(4)……404
第 30 表　竪穴住居跡伴出遺物観察表(5)……404
第 31 表　土坑伴出遺物観察表……405
第 32 表　第 1 号集石墓伴出遺物観察表(1)…406
第 33 表　第 1 号集石墓伴出遺物観察表(2)…407
第 34 表　第 1 号集石墓伴出遺物観察表(3)…407
第 35 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(1)…408
第 36 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(2)…409
第 37 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(3)…410
第 38 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(4)…411
第 39 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(5)…412
第 40 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(6)…413
第 41 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(7)…414
第 42 表　第 2 号集石墓伴出遺物観察表(8)…415
第 43 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(1)…416
第 44 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(2)…417
第 45 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(3)…418
第 46 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(4)…419
第 47 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(5)…420
第 48 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(6)…421
第 49 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(7)…422
第 50 表　第 3 号集石墓伴出遺物観察表(8)…423
第 51 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(1)…424
第 52 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(2)…425
第 53 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(3)…426
第 54 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(4)…427
第 55 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(5)…428
第 56 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(6)…429
第 57 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(7)…430
第 58 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(8)…431
第 59 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(9)…432
第 60 表　第 4 号集石墓伴出遺物観察表(10)…433
第 61 表　第 5 号集石墓伴出遺物観察表……433
第 62 表　第 6 号集石墓伴出遺物観察表(1)…434

第 63 表　第 6 号集石墓伴出遺物観察表(2)…435
第 64 表　第 6 号集石墓伴出遺物観察表(3)…436
第 65 表　第 6 号集石墓伴出遺物観察表(4)…437
第 66 表　第 6 号集石墓伴出遺物観察表(5)…437
第 67 表　第 7 号集石墓伴出遺物観察表(1)…438
第 68 表　第 7 号集石墓伴出遺物観察表(2)…439
第 69 表　第 7 号集石墓伴出遺物観察表(3)…439
第 70 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(1)…440
第 71 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(2)…441
第 72 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(3)…442
第 73 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(4)…443
第 74 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(5)…444
第 75 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(6)…445
第 76 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(7)…446
第 77 表　第 8 号集石墓伴出遺物観察表(8)…447
第 78 表　第 9 号集石墓伴出遺物観察表……448
第 79 表　土坑墓伴出遺物観察表(1)……449
第 80 表　土坑墓伴出遺物観察表(2)……449
第 81 表　壺棺墓伴出遺物観察表(1)……450
第 82 表　壺棺墓伴出遺物観察表(2)……451
第 83 表　不明遺構伴出遺物観察表(1)……452
第 84 表　不明遺構伴出遺物観察表(2)……453
第 85 表　不明遺構伴出遺物観察表(3)……454
第 86 表　不明遺構伴出遺物観察表(4)……454
第 87 表　掘立柱建物跡伴出遺物観察表(1)…455
第 88 表　掘立柱建物跡伴出遺物観察表(2)…455
第 89 表　掘立柱建物跡伴出遺物観察表(3)…456
第 90 表　不明遺構伴出遺物観察表(5)……457
第 91 表　不明遺構伴出遺物観察表(6)……458
第 92 表　第 4 層上面検出ピット群伴出遺物観察表(1)……459
第 93 表　第 4 層上面検出ピット群伴出遺物観察表(2)……460
第 94 表　第 4 層上面検出ピット群伴出遺物観察表(3)……460
第 95 表　第 5 層上面検出ピット群伴出遺物観察表(1)……461
第 96 表　第 5 層上面検出ピット群伴出遺物観察表(2)……461
第 97 表　第 5 層出土遺物観察表(1)……462
第 98 表　第 5 層出土遺物観察表(2)……463
第 99 表　第 5 層出土遺物観察表(3)……464
第100表　第 5 層出土遺物観察表(4)……465
第101表　第 5 層出土遺物観察表(5)……466
第102表　第 5 層出土遺物観察表(6)……467
第103表　第 5 層出土遺物観察表(7)……468
第104表　第 5 層出土遺物観察表(8)……469
第105表　第 5 層出土遺物観察表(9)……470
第106表　第 5 層出土遺物観察表(10)……471
第107表　第 4 層出土遺物観察表(1)……472
第108表　第 4 層出土遺物観察表(2)……473
第109表　第 4 層出土遺物観察表(3)……474
第110表　第 4 層出土遺物観察表(4)……475
第111表　第 4 層出土遺物観察表(5)……476
第112表　第 4 層出土遺物観察表(6)……477
第113表　第 4 層出土遺物観察表(7)……478
第114表　第 4 層出土遺物観察表(8)……479
第115表　第 4 層出土遺物観察表(9)……480
第116表　第 4 層出土遺物観察表(10)……481
第117表　第 4 層出土遺物観察表(11)……482
第118表　第 4 層出土遺物観察表(12)……483
第119表　第 4 層出土遺物観察表(13)……484
第120表　第 4 層出土遺物観察表(14)……485
第121表　第 4 層出土遺物観察表(15)……485
第122表　第 4 層包蔵自然礫群伴出遺物観察表……486
第123表　第 3 層出土遺物観察表(1)……487
第124表　第 3 層出土遺物観察表(2)……487
第125表　第 3 層出土遺物観察表(3)……488
第126表　第 3 層出土遺物観察表(4)……489
第127表　第 3 層出土遺物観察表(5)……490
第128表　第 3 層出土遺物観察表(6)……491
第129表　石器一覧表……492
第130表　鉄製品一覧表……493

付　　図

付図 1　稲木遺跡調査区設定図（A・B・C地区）
付図 2　稲木遺跡A地区遺構配置図
付図 3　稲木遺跡B_1・B_2地区遺構配置図
付図 4　稲木遺跡B_3地区遺構配置図
付図 5　稲木遺跡C地区遺構配置図
付図 6　第1号集石墓実測図
付図 7　第2号集石墓実測図
付図 8　第3号集石墓実測図
付図 9　第4号集石墓実測図
付図10　第6号集石墓実測図
付図11　第7号集石墓実測図
付図12　第8号集石墓実測図
付図13　第9号集石墓実測図
付図14　第2号集石遺構実測図
付図15　土層序実測図

図版目次

巻頭図版　(1)稲木遺跡航空写真（A・B・C地区）
(2)稲木遺跡B地区航空写真（東から）
(3)稲木遺跡B地区航空写真（南から）
(4)銅鏡（C地区出土）

第 2 章

図版 1　(1)NR8301全景（東から）
(2)NR8301全景（南から）
図版 2　(1)NR8304全景（西から）
(2)NR8301遺物出土状況
図版 3　(1)NR8301遺物出土状況
(2)ピット群全景（南から）
図版 4　(1)ピット群近景（東から）
(2)ピット群近景（南から）
図版 5　NR8419・NR8420・NR8421全景（南から）
図版 6　A地区出土土器(1)
図版 7　A地区出土土器(2)
図版 8　(1)A地区出土土器(1)
(2)A地区出土土器(2)
図版 9　(1)A地区出土石器(3)
(2)A地区出土石器(4)
図版 10　(1)A地区出土石器(5)
(2)A地区出土石器(6)
図版 11　(1)A地区出土石器(7)
(2)A地区出土石器(8)
図版 12　(1)A地区出土石器(9)
(2)A地区出土石器(10)
図版 13　(1)A地区出土石器(11)
(2)A地区出土石器(12)
図版 14　(1)A地区出土石器(13)
(2)A地区出土石器(14)
図版 15　(1)A地区出土石器(15)
(2)A地区出土石器(16)

第 3 章

図版 16　B_3地区全景写真
図版 17　(1)B_3地区遠景写真（西から）
(2)B_3地区遠景写真（北から）
図版 18　(1)SB01全景（北から）
(2)SB01近景（東から）
図版 19　(1)SB02・03全景（北から）
(2)SB02・03全景（南から）
図版 20　(1)SB02全景（北から）
(2)SB03全景（北から）
図版 21　(1)SB04・05全景（東から）
(2)SB04・05近景（東から）
図版 22　(1)SB06近景（南から）
(2)SB06全景（北から）
図版 23　(1)SB07全景（東から）
(2)SB07近景（東から）
図版 24　(1)SB08・09全景（北から）
(2)SB10全景（西から）
図版 25　(1)SB11・12全景（北から）
(2)SB13・14・15全景（東から）
図版 26　(1)SB16・17全景（西から）
(2)SB18全景（北から）
図版 27　(1)SB21全景（北から）
(2)SB22～25全景（東から）
図版 28　(1)SB22全景（南から）
(2)SB22全景（東から）
図版 29　(1)SB23・24全景（南から）
(2)SB25全景（南から）
図版 30　(1)SB26・27全景（南から）
(2)SB27近景（南から）
図版 31　(1)SB28・29全景（南から）
(2)SB31・32・33全景（南東から）
図版 32　(1)SB30・31・32全景（西から）
(2)SB31近景（西から）
図版 33　(1)SB32近景（西から）

(2)ＳＢ33近景（東から）
図版34　(1)ＳＢ34全景（北から）
(2)ＳＢ34全景（南から）
図版35　(1)ＳＢ13柱穴根石
(2)ＳＢ09柱穴根石
図版36　(1)ＳＢ08柱穴根石
(2)ＳＢ07柱穴詰石（南から）
図版37　(1)ＳＢ08・09柱穴詰石（西から）
(2)ＳＢ24柱穴詰石（西から）
図版38　(1)ＳＢ08・09柱穴詰石（北から）
(2)ＳＢ25柱痕検出状況（西から）
図版39　(1)ＳＫ01（北から）
(2)ＳＫ26（西から）
図版40　(1)ＳＤ05・06・07全景（南から）
(2)ＳＤ05・06・07全景（東から）
図版41　(1)ＳＤ10～13全景（南から）
(2)中央調査区西部全景（北から）
図版42　(1)中央調査区西部全景（西から）
(2)ＳＤ44・45・46全景（北から）
図版43　(1)標準土層
(2)標準土層
図版44　(1)ＮＲ01全景
(2)ＮＲ01土層断面（北から）
図版45　(1)ＳＸ01（上面から）
(2)ＳＸ01（西から）
図版46　(1)東部調査区北半全景（東から）
(2)調査区南半全景（東から）
図版47　(1)中央調査区全景（東から）
(2)西部調査区北半全景（東から）
図版48　(1)中央調査区全景（北から）
(2)西部調査区全景（北から）
図版49　(1)B_1地区ＳＤ01・02南端（南から）
(2)B_1地区ＳＤ01堆積状況（西壁）
図版50　(1)B_1地区ＳＤ02全景（南から）
(2)B_1地区ＳＤ02全景（北から）
図版51　(1)B_2地区ＳＤ03屈曲部（東から）
(2)B_2地区自然流路（北から）
図版52　(1)B_2地区ＳＤ03屈曲部（北から）
(2)B_2地区ＳＤ03屈曲部（南から）
図版53　(1)$B_{1\cdot2}$地区現代水路立割状況（東から）
(2)$B_{1\cdot2}$地区現代水路立割状況（北から）
図版54　(1)$B_{1\cdot2}$地区現代水路立割状況（南から）
(2)B_2地区ＳＤ06・07
図版55　B_3地区掘立柱建物・溝(1)出土土器
図版56　B_3地区溝(2)出土土器
図版57　B_3地区溝(3)・土坑(1)出土土器
図版58　B_3地区土坑(2)・ピット出土土器
図版59　B_3地区柵列・包含層出土土器
図版60　鉄製鋤先
図版61　B_1地区溝出土土器

第４章

図版62　(1)第１号竪穴住居跡検出炭化木材
(2)第１号竪穴住居跡
図版63　(1)第１号竪穴住居跡伴出遺物
(2)第２号竪穴住居跡検出礫群
図版64　(1)第２号竪穴住居跡
(2)第３号竪穴住居跡
図版65　(1)第４号竪穴住居跡
(2)第４号竪穴住居跡伴出遺物
図版66　(1)第４号竪穴住居跡と第５・６・７号壺棺墓
(2)第５号竪穴住居跡検出礫群
図版67　(1)第５号竪穴住居跡
(2)第５号竪穴住居跡伴出遺物(1)
図版68　(1)第５号竪穴住居跡伴出遺物(2)
(2)第２号土坑
図版69　(1)第１号集石墓
(2)第１号集石墓主体部(1)
図版70　(1)第１号集石墓主体部(2)
(2)第２号集石墓(1)
図版71　(1)第２号集石墓(2)
(2)第２号集石墓伴出遺物

図版72 (1)第2号集石墓検出土坑
(2)第3号集石墓(1)
図版73 (1)第3号集石墓(2)
(2)第3号集石墓主体部
図版74 (1)第4号集石墓
(2)第4号集石墓伴出遺物(1)
図版75 (1)第4号集石墓伴出遺物(2)
(2)第4号集石墓伴出遺物(3)
図版76 (1)第4号集石墓伴出遺物(4)
(2)第4号集石墓伴出遺物(5)
図版77 (1)第4号集石墓伴出遺物(6)
(2)第4号集石墓伴出土器群
図版78 (1)第5号集石墓
(2)第6号集石墓
図版79 (1)第6号集石墓伴出土器群
(2)第6号集石墓主体部
図版80 (1)第7号集石墓
(2)第7号集石墓伴出土器群
図版81 (1)第7号集石墓伴出遺物
(2)第8号集石墓
図版82 (1)第8号集石墓伴出遺物
(2)第8号集石墓第1号主体部(1)
図版83 (1)第8号集石墓第1号主体部(2)
(2)第8号集石墓第1号主体部伴出遺物(1)
図版84 (1)第8号集石墓第1号主体部伴出遺物(2)
(2)第8号集石墓第1号主体部(3)
図版85 (1)第8号集石墓第2号主体部
(2)第9号集石墓
図版86 (1)第1号土坑墓
(2)第2号土坑墓
図版87 (1)第2号土坑墓伴出牛歯
(2)第3号土坑墓
図版88 (1)第2号壺棺墓
(2)第3号壺棺墓
図版89 (1)第5号壺棺墓
(2)第6号壺棺墓
図版90 (1)第7号壺棺墓
(2)第8号壺棺墓(1)
図版91 (1)第8号壺棺墓(2)
(2)第9号壺棺墓
図版92 (1)第1号集石遺構
(2)第2号集石遺構
図版93 (1)旧河道伴出遺物
(2)土器破砕遺構
図版94 (1)第1号掘立柱建物跡
(2)第2号掘立柱建物跡
図版95 (1)第4号掘立柱建物跡
(2)第5号掘立柱建物跡
図版96 (1)第4号土坑
(2)SD01
図版97 (1)SX06
(2)SX07
図版98 (1)SX08
(2)SX10
図版99 (1)SX13
(2)SX13伴出甕形土器内容物
図版100 (1)第4層銅鏡出土状況
(2)第5層管玉出土状況
図版101 (1)第1号竪穴住居跡伴出遺物
(2)第3号竪穴住居跡伴出遺物
(3)第4号竪穴住居跡伴出遺物
図版102 第5号竪穴住居跡伴出遺物
図版103 (1)第2号土坑伴出遺物
(2)第1号集石墓伴出遺物
図版104 第2号集石墓伴出遺物(1)
図版105 (1)第2号集石墓伴出遺物(2)
(2)第3号集石墓伴出遺物(1)
図版106 (1)第3号集石墓伴出遺物(2)
(2)第4号集石墓伴出遺物(1)
図版107 (1)第4号集石墓伴出遺物(2)
(2)第5号集石墓伴出遺物
図版108 第6号集石墓伴出遺物(1)
図版109 (1)第6号集石墓伴出遺物(2)
(2)第8号集石墓伴出遺物(1)

図版110　第８号集石墓伴出遺物(2)
図版111　第１号壺棺墓伴出遺物
図版112　第２号壺棺墓伴出遺物
図版113　第３号壺棺墓伴出遺物
図版114　第４号壺棺墓伴出遺物
図版115　第５号壺棺墓伴出遺物
図版116　第６号壺棺墓伴出遺物
図版117　第７号壺棺墓伴出遺物
図版118　第８号壺棺墓伴出遺物
図版119　第９号壺棺墓伴出遺物
図版120　第10号壺棺墓伴出遺物
図版121　旧河道伴出遺物
図版122　(1)ＳＸ07伴出遺物
　　(2)ＳＸ08伴出遺物
図版123　ＳＸ13伴出遺物(1)
図版124　ＳＸ13伴出遺物(2)
図版125　第５層出土遺物(1)
図版126　第５層出土遺物(2)
図版127　第５層出土遺物(3)
図版128　第５層出土遺物(4)
図版129　第５層出土遺物(5)
図版130　第４層出土遺物(1)
図版131　第４層出土遺物(2)
図版132　第４層出土遺物(3)
図版133　第４層出土遺物(4)
図版134　第４層出土遺物(5)
図版135　第４層出土遺物(6)
図版136　第３層出土遺物(1)
図版137　第３層出土遺物(2)
図版138　第３層出土遺物(3)
図版139　(1)第１号竪穴住居跡伴出石器
　　(2)第６号集石墓伴出石器
　　(3)第７号集石墓伴出石器
図版140　第８号集石墓伴出石器
図版141　(1)第５層出土石器
　　(2)第４層出土石器(1)
図版142　第４層出土石器(2)
図版143　(1)第４層出土石器(3)
　　(2)第３層出土石器
図版144　(1)第２号竪穴住居跡伴出鉄製品
　　(2)第３号竪穴住居跡伴出鉄製品
　　(3)第５号竪穴住居跡伴出鉄製品
　　(4)ＳＸ06伴出鉄製品
　　(5)第１号集石墓伴出鉄製品
図版145　(1)第２号集石墓伴出鉄製品
　　(2)第５号集石墓伴出鉄製品(1)
　　(3)第５号集石墓伴出鉄製品(2)
　　(4)第６号集石墓伴出鉄製品
　　(5)第８号集石墓伴出鉄製品
図版146　(1)第５層出土鉄製品
　　(2)第４層出土鉄製品(1)
図版147　(1)第４層出土鉄製品(2)
　　(2)第３層出土鉄製品
　　(3)出土層序不明鉄製品
図版148　(1)第４層出土銅鏡
　　(2)第８号集石墓伴出管玉
　　(3)第５層出土管玉

第１章　調査の経緯

第１節　横断道調査の経過

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業は昭和57年度に始まり，今年度で７年目を迎えた。昭和62年度は，用地未買収のため残されていた観音寺市柞田八丁遺跡の480m²も６月に発掘調査を終了し，これで24遺跡・211,500m²の発掘をすべて終了した。これに伴い，今年度は報告書作成のための整理作業が主体となり，６遺跡・３冊の報告書を刊行した昨年度に続き，次年度にまたがる整理作業も実施している。報告書作成のための整理作業は，順調に進めば，来年度以降には５遺跡の報告と総括編を残すのみとなる。また，各遺跡の報告書とは別に，一般啓蒙用として，昭和60・61・62年度に『語りかける埋蔵文化財　いにしえの讃岐　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』を刊行している。

昨年度で終了した発掘調査は，昭和58年２月から３月にかけて，多度郡条里の検出を目的として善通寺インター予定地付近で開始された。発掘調査実施前には，調査予定遺跡は，17遺跡・60,900m²とみられていたが，57年度の発掘で善通寺市金蔵寺下所遺跡が新たに発見され，かなりの増加が予想された。翌58年度には調査の基地として善通寺市原田町に「香川県埋蔵文化財発掘調査善通寺連絡事務所」を設置し，金蔵寺下所遺跡以下の発掘調査を本格的に実施するとともに，横断道予定路線内の事前調査を実施した。その結果，新たな遺跡の発見が相次ぎ，最終的には24遺跡・211,500m²の発掘調査を実施するに至った。各年度ごとの発掘調査にかかわる遺跡数・面積・人員・経費は第１表のとおりである。

第１表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業　（発掘調査のみ）

内容／年度	遺跡数	面積（m²）	人員 職員	人員 嘱託	発掘調査費（千円）	備考
57	1	1,300	2	1	8,600	
58	7	19,200	8（うち，係長1，庶務1）	4（うち，所長1）	140,000	
59	16	57,900	9（同上）	5（同上）	245,644	
60	14	78,500	10（同上）	7（同上）	312,500	
61	6	54,120	15（同上）	7（同上）	262,027	人員の内，職員２は報告書作成。報告書作成の経費は含まず。
62	1	480	7	0	1,920	報告書作成の経費は含まず。人員は報告書作成の人数。
合計	24	211,500			971,691	

6年に及ぶ発掘調査によって，第2・3表に示すように縄文時代から江戸時代に至る遺跡が発掘された。

縄文時代の遺跡をみると，善通寺市永井遺跡では縄文時代後期の河川跡から，ドングリ・トチなどの堅果類の保存・加工処理場が発見されたほか，縄文晩期の打製石斧を大量に出土した別の河川跡では，川底に14本の杭が打ち込まれていた。

観音寺市一の谷遺跡群では県下で初めて弥生時代前期の竪穴住居跡が2棟検出され，善通寺市矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡で弥生時代中期の集落跡を，善通寺市稲木遺跡C地区・観音寺市一の谷遺跡群で弥生時代終末頃の集落跡を検出した。このうち，矢ノ塚遺跡と西碑殿遺跡の掘立柱建物跡が方形の柱穴掘り方をもち，一の谷遺跡群で舶載と思われる鏡片や平形銅剣片が出土したことなどは注目される。

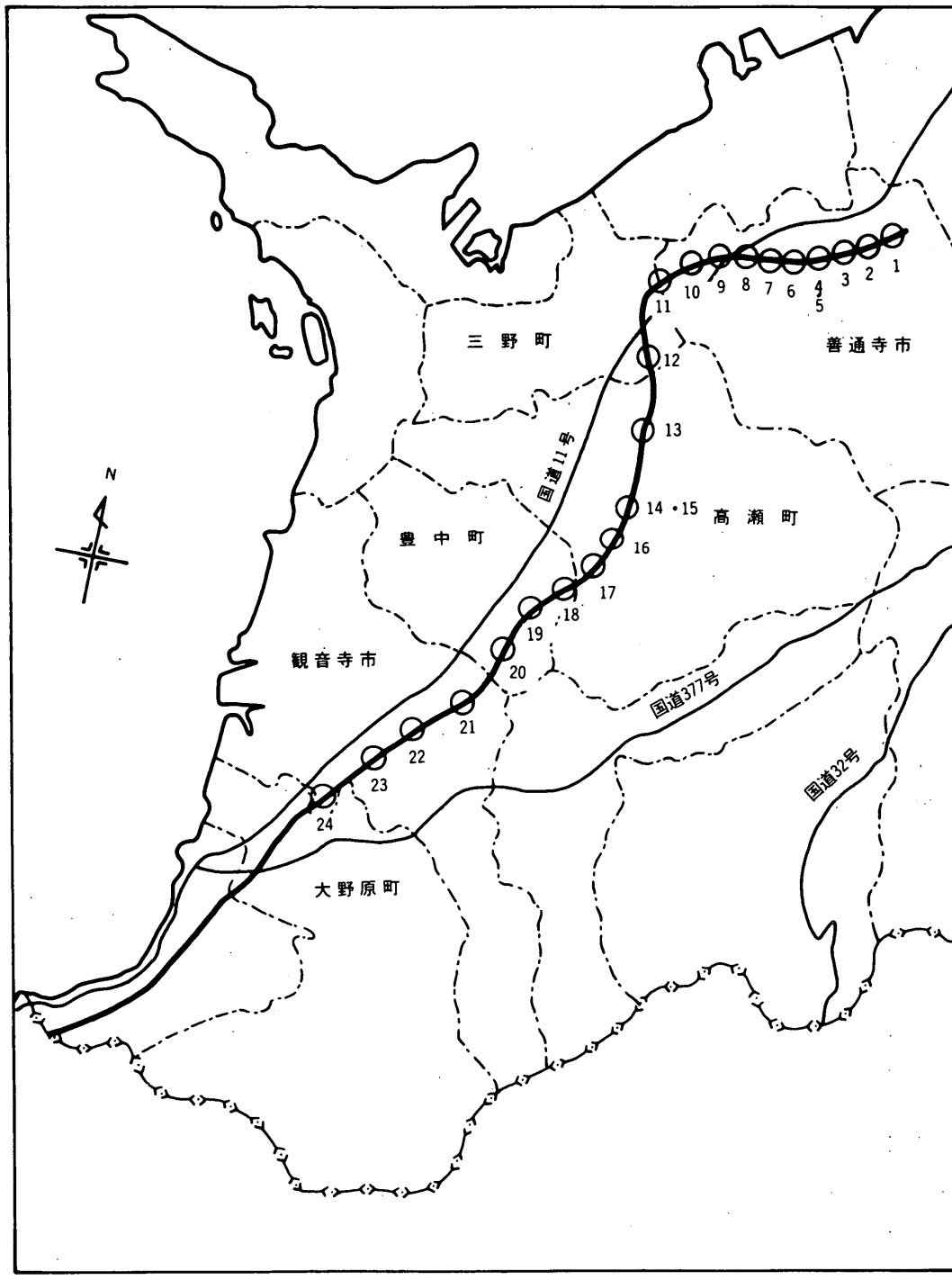
古墳時代では，高瀬町大門遺跡・観音寺市柞田八丁遺跡で6世紀末頃のカマド付竪穴住居跡を特色とする集落跡が検出され，瀬戸大橋架橋に伴って発掘調査された坂出市下川津遺跡の例と共に，県内ではこれまで不明であった古墳時代後期の集落跡として重要である。

古代になると，善通寺市金蔵寺下所遺跡で奈良時代と考えられる30棟以上の掘立柱建物跡や条里の推定方位と一致する溝が検出されると共に，自然河川から斎串・人形・馬形・舟形などの木製祭器・わらじなどが出土した。また，善通寺市稲木遺跡B地区では，飛鳥・白鳳時代の掘立柱建物跡32棟，平安時代前期と考えられる掘立柱建物跡4棟が検出され，丸亀平野の条里や，古代集落，あるいは官衙の解明に貴重な資料を提供することとなった。また，善通寺市稲木遺跡C地区から5枚の「承和昌宝」を納めた土師質甕が出土し，胞衣壺と考えられていることや，善通寺市中村遺跡の平安時代中期頃の溝から「貞」字をもつ銅印が出土したことも特筆される成果であった。

古代末から中世では，多くの遺跡で掘立柱建物跡が検出されており，畿内の和泉産と考えられる瓦器や東播系須恵質土器・輸入磁器・中世陶器などが出土した。また，善通寺市上一坊遺跡や観音寺市一の谷遺跡群で近世の遺跡に本格的な発掘調査のメスがいれられたことも注目される。

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で注目されるのは，初めて沖積平野の本格的な発掘がなされた点である。発掘調査前には60,900㎡と予想されていた遺跡面積が，最終的には211,500㎡となった事実が示すように，これまでほとんど不明であった平野部の遺跡，特に集落跡が大規模に発掘調査された。これによって，平野部に多くの遺跡が存在する事実が確認されると共に，採集土器と墳墓などの少ない資料から想定されていた香川の先人達の暮らしが，豊かでより具体的なイメージを持ち始めてきた。

当報告書作成に伴う整理作業は，文化財専門員真鍋昌宏・技師西岡達哉が担当し，昭和62年4月から開始し，ここに『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第6冊』として刊行の運びとなった。



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜間）

第２表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No.	遺跡名 (旧遺跡名)	所在地	面積(m²)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
1	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町下所	17,000	58. 4. 1～60. 2.28	弥生時代 奈良・平安時代 中世	包含層，自然河川 溝，掘立柱建物跡30以上 溝，掘立柱建物跡５以上	須恵器，土師器，瓦器，木製品（斎串，人形，馬形，刀形，船形，曲物など。以上奈良時代），わらじ(奈良時代)	
2	稲木遺跡 Ｃ地区	善通寺市稲木町下川原	4,000	59. 4. 1～60. 3.30	弥生時代 古墳～平安時代	竪穴住居跡５，集石墓９ 土壙墓３，壺棺墓10 掘立柱建物跡５，埋甕	弥生土器，土師器，須恵器，銅鏡片２，承和昌宝５	本　書
3	稲木遺跡 Ｂ地区	善通寺市稲木町西角	17,100	59. 9.17～60. 2.28	弥生時代 飛鳥・白鳳時代 平安時代	土坑４ 掘立柱建物跡32（内倉庫６），溝 掘立柱建物跡４	土師器，須恵器，鉄製鋤先	本　書
4	稲木遺跡 Ａ地区	善通寺市下吉田町本村東・下所東	300	58. 6.29～59. 2.14	弥生時代 古代	溝 溝	縄文晩期土器，弥生土器，磨製石庖丁	本　書
5	永井遺跡	善通寺市中村町島田・榎田，下吉田町下所西	33,300	60. 5. 7～61.12.24	縄文時代 弥生時代 中・近世	自然河川，土坑 溝，土坑，掘立柱建物跡３ 掘立柱建物跡12，溝，土坑	縄文土器（彦崎ＫＩ，ＫII式，黒土ＢＩ式），土偶１，耳飾２，打製石斧多数，杭14，椀１，鳥形木製品１，堅果類多数（以上縄文時代）	
6	中村遺跡	善通寺市中村町筆岡	9,000	59. 7. 3～59. 9.17	縄文・弥生時代 平安時代 中世 近世	自然河川 溝２ 掘立柱建物跡15，溝，土坑 溝，土坑	銅印「貞」	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊（以下，横断道報告Ｉと略称）62. 3.31刊行
7	乾遺跡 （吉原B_2）	善通寺市中村町乾	2,100	60. 9. 2～60.11.20	弥生時代 近世	湧水池状遺構，自然河川 土坑，自然河川	弥生前期土器	横断道報告Ｉ
8	上一坊遺跡 （吉原B_1）	善通寺市吉原町上一坊	2,800	60.11.13～61. 1.24	中世 近世	掘立柱建物跡24，井戸１，土坑，溝 井戸２，土坑，溝	近世陶磁器	横断道報告Ｉ
9	矢ノ塚遺跡	善通寺市吉原町矢ノ塚，碑殿町矢ノ塚	11,800	59.10. 8～60. 8.30	弥生時代 奈良時代 中世	竪穴住居跡1，掘立柱建物跡12，土坑，溝 掘立柱建物跡17，溝 掘立柱建物跡30以上，井戸２，土坑，溝	弥生土器，須恵器，剣形土製品１，鳥形土製品１，分銅形土製品４，石帯	横断道報告III
10	西碑殿遺跡	善通寺市碑殿町三反畑	5,200	60. 2. 4～60. 4.30 61. 7.28～61. 8.11	弥生時代 奈良時代 中世 近世	掘立柱建物跡数棟 掘立柱建物跡数棟 掘立柱建物跡数棟 一字一石経塚	弥生土器，須恵器 一字一石経，京焼風陶器碗１（以上経塚）	
11	深尾石棺群	三豊郡三野町大見深尾	500	59. 9.11～59.10.23				路線内には存在せず
12	道免窯跡	三豊郡三野町大見道免丸尾	100	59. 9.11～59.10.23	飛鳥・白鳳時代	灰原	須恵器坏・高坏・壺・甕	横断道報告II
13	北条遺跡	三豊郡高瀬町上高瀬北条	100	60. 5. 9				路線内には存在せず

第3表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

No	遺跡名 (旧遺跡名)	所在地	面積(m²)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
14	利生寺遺跡 (利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ区)	三豊郡高瀬町上勝間砂古	3,200	60. 5.22～60. 7.18	弥生時代 中世 近世	土坑5 竪穴住居跡1，ピット 掘立柱建物跡1，井戸1，土坑4	弥生後期土器，中・近世土器	横断道報告Ⅱ
15	大門遺跡 (利生寺遺跡Ⅲ区)	三豊郡高瀬町上勝間砂古	5,500	60. 7.22～61. 1.28	古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡23，掘立柱建物跡1，土坑6，溝23 礎石建物跡1，掘立柱建物跡13，土坑6，石組井戸1，溝9 溝1	須恵器，土師器，中世土器，鞴の羽口，鉄滓	横断道報告Ⅱ
16	利生寺古墳	三豊郡高瀬町上勝間砂古	700	60.12. 2～61. 3.17	古墳時代	横穴式石室1	須恵器，耳環	横断道報告Ⅱ
17	矢ノ岡遺跡 (土佐神社跡)	三豊郡高瀬町上勝間矢ノ岡	2,600	61. 1.28～61. 2.27	古墳時代 中世	竪穴住居跡1 掘立柱建物跡6，溝6	八稜鏡1	横断道報告Ⅱ
18	四ツ塚古墳	三豊郡豊中町笠田笠岡	1,000	59. 4.16～59. 5.14	古墳時代	横穴式石室1	須恵器，耳環	横断道報告Ⅳ
19	財田古墳	三豊郡豊中町上高野	1,000	58. 9.26～58.11.30	古墳時代	横穴式石室1	須恵器，耳環，鉄斧，鉄釘	横断道報告Ⅳ
20	延命遺跡	三豊郡豊中町上高野城ノ岡・八反地	18,000	58.11.28～60. 5.15 61. 9. 1～61. 9.30	弥生時代 中世	溝 掘立柱建物跡，土坑，土壙墓，塚，井戸3，柵	土師器，須恵器，瓦器，青磁	
21	一の谷遺跡群(刈田郡条里)	観音寺市古川町，中田井町，本大町	36,100	60. 5.15～61.12.25	弥生時代 古墳時代～近世	竪穴住居跡31，土坑，溝 掘立柱建物跡33，土坑，土壙墓，溝	弥生土器(前期，後期)，平形銅剣片，銅鏡片，近世陶磁器	
22	石田遺跡	観音寺市池ノ尻町石田	17,200	60. 5. 1～61. 1.11	弥生時代 古墳時代 中世	土坑 掘立柱建物跡3 掘立柱建物跡17，土坑，溝	土師器，須恵器，瓦器，緑釉土器，黒色土器	横断道報告Ⅴ
23	長砂古遺跡	観音寺市池ノ尻町大長	8,900	61. 1.13～61. 8.12	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡1 横穴式石室1 溝，掘立柱建物跡5	弥生土器，須恵器，玉類，馬具，武器，瓦器	横断道報告Ⅴ
24	柞田八丁遺跡(中姫遺跡)	観音寺市柞田町八丁	14,000	61. 4. 3～62. 1.27 62. 6. 5～62. 6.17	古墳時代 中世	竪穴住居跡7，掘立柱建物跡1，横穴式石室1，溝，土壙墓2 掘立柱建物跡47	須恵器，土師器，耳環，越州窯青磁	横断道報告Ⅴ
	合計		211,500	58. 2. 8～62. 1.27 62. 6. 5～62. 6.17 (調査期間は57年度の多度郡条里の発掘を含む。)				24遺跡

第２図　発掘作業風景（Ｂ地区）

第３図　整理作業風景

第2節　調査に至る経過

昭和57年度，多度郡条里下所地区の予備調査から開始した四国横断自動車道(善通寺～豊浜間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は，昭和58年度に入り金蔵寺下所遺跡（旧称多度郡条里下所地区）の本調査と並行して，6月から稲木遺跡A地区及び多度郡条里稲木地区（稲木遺跡B・C地区）の予備調査に着手した。

予備調査は，現在の丸亀平野に見られる条里の名残りと考えられる土地区画（真北から西へ30°を基軸とする）を基準にしたグリッド及びトレンチを設定して開始した。これは，条里制に伴う溝状遺構や条里制施行後の遺構が，この方位に規制されて営まれていたと考えられること，先にも述べたように条里制の名残が現在の地形に生かされていると考えられることによる。

この結果，稲木遺跡（A地区）では，弥生時代前期の土器を含む自然河川が検出されたほか，条里制に伴うと推定される溝状遺構も検出されたが，遺構の広がりが狭く，予備調査トレンチの拡張を行い本調査にかえた。

多度郡条里稲木地区は，予備調査の結果，市道稲木線から同稲木E線の間で大形の柱穴や溝状遺構が多数検出され，E線から国道319号線の間では弥生時代後期後半～末の土器が集中して出土した。

予備調査の成果を検討した結果，多度郡条里稲木地区のうち前者を稲木遺跡B地区，後者を稲木遺跡C地区と呼称し，昭和59年度から本調査を実施した。

稲木遺跡の調査に係わる，昭和58・59年度の調査体制は次の通りである。

昭和58年度

総括　課　長　　遠藤　　啓
　　主　幹　　林　　茂
　　副主幹　　松本　豊胤
庶務　係　長　　下河　芳樹
　　主任主事　酒井　幸子
　　主　事　　前田　和也　(6.1～)

調査　善通寺連絡事務所
　　所　長　　石塚　徳治
　　係　長　　伊沢　肇一
　　主任技師　岸上　康久
　　技　師　　野中　寛文
　　嘱　託　　中本　雅之

昭和59年度

総括　課　長　　遠藤　　啓　(～11.25)
　　磯田　文雄　(11.26～)

主　幹　　林　　茂
　　松本　豊胤
課長補佐　中村　　仁
庶務　係　長　下河　芳樹　(～5.31)
　　宮谷　昌之　(6.1～)
主任主事　酒井　幸子
主　事　　前田　和也

調査　善通寺連絡事務所
所　長　　石塚　徳治（～4.30）
　　入江　　久（5.1～）
係　長　　伊沢　肇一
主任技師　野中　寛文
　　真鍋　昌宏
技　師　　西岡　達哉
嘱　託　　中本　雅之

また，2年にまたがる調査に，作業員として携わっていただいた方は次の通りである。

石村　守	磯崎ハツ子	上村　隆文	小田　典生	大塚　雅
大林　信治	大平　京子	香川キヨ子	金森キヨ子	我部山美江子
我部山幸夫	構口　絹子	鎌谷　周子	神原　正則	北堀　郁子
河野　史郎	島村　太	庄野　義昭	多田サカエ	田村　久雄
中筋　照子	中筋　靖	中津アサコ	中村　貞臣	西岡　英樹
西田　重子	林　和子	林　信子	福崎チヨミ	福崎ヨシノ
藤井マサコ	藤本　節子	古川　芳	真鍋　ナツ	丸岡　昭子
宮川　貢	元木　恵子	森江　昇	森岡　光明	山口ハルミ
山下　君子	山本　崇	中野　弘美	横田八重子	米沢　光子
秋友　勇	荒木トミエ	安藤　英治	池上千枝子	石川　謹章
石川　英之	石原フクエ	伊藤　逸郎	今井　和彦	岩本希誉香
宇野　雅則	大河内　稔	大崎　知子	大嶋　政則	大槻　武
大平　正則	大平　春好	岡部　孝	小野　春代	尾松　浩
香川　貞美	香川　政行	香川　芳子	梶　義章	加嶋　裕美
神余　聡	神餘　正子	鎌野　弘幹	上假屋公明	亀山　宇市
川崎フミ子	川田　信子	川本　良夫	北岡　泰志	北山マサヨ
合田　秀伸	古賀　大	小山　辰男	近藤　正三	重成　操
島田　義見	正　嘉代子	竹内ミユキ	谷川　節子	谷口　正市
常包　寛見	遠山　美樹	中瀬　正夫	中津　博義	中野　夏子
中山　能照	南光美知子	西山　初枝	西山　祥仁	則包　重徳
則包アツミ	則包ツヨミ	法兼　高政	法兼満寿江	萩原　忠

樋口　悦子	樋口　澄枝	平田　智視	平塚フサエ	藤岡　謙二
正宗　繁枝	増田　尚子	松本　明義	松本テルミ	松本　初美
三木　貞子	峰　明秀	三好　勝	矢原　孝作	山下　進
山田　和子	山地ツル子	横田アキミ	横田チヨミ	横田　政彦

次に，本調査は，調査後に想定される周辺開発に伴う調査を考え，国土座標第Ⅳ座標系にあわせて一辺20mの方形区画を設定して行った。この方形区画は横断道調査に対応して，丸亀平野善通寺地区全体に対して行ったが，区画の呼称については遺跡単位で実施している。稲木遺跡では，北から南にA～，西から東に1～の区画番号を用いた。

調査の方法は，遺構面もしくは包含層上面までを重機で掘削し，これより下を人力によって掘削・精査を実施した。土層実測は，原則的に各区画の北・東壁を1／20で実測し，必要に応じて適宜追加実測した。平面実測は，1／20を基本とし遺物出土状況図などは適宜図面縮尺を変更して実施した。また，稲木遺跡B地区をB_1～B_3地区に小区分した際のB_3地区の一部では航空写真測量も実施した。

各地区の調査の経過については，各地区の調査の章で述べる。

報告書作成に向けての整理作業は，四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）建設に伴う調査の拠点として昭和58年に設置された「善通寺連絡事務所」において，発掘調査終了後，注記・復元・一部実測等の基礎的な作業から開始した。

本報告に係わる本格的な整理作業は，発掘調査事業がほぼ終了した昭和62年度に実施した。

昭和62年度は，かねてからの懸案であった香川県の埋蔵文化財調査・研究の拠点ともいうべき県立埋蔵文化財センターが完成したのに伴い，11月1日に坂出（瀬戸大橋調査事業）・善通寺両連絡事務所が廃止・統合され，整理作業の場がセンターに移動し継続された。

報告書に係わる作業は昭和62年度に終了し，昭和63年度に印刷・刊行作業のみ実施した。

なお，昭和63年度には，新たに四国横断自動車道（高松～善通寺間）建設などに伴う埋蔵文化財調査が，かつてない規模で開始されることになり，調査体制強化の目的で(財)香川県埋蔵文化財調査センターに整理も含めた業務が委託された。

稲木遺跡の整理業務に係わる，昭和62・63年度の組織は次の通りである。

昭和62年度

総括　課　長　廣瀬　和孝
　　課長補佐　片山　堯（～5.31）
　　高木　尚（6.1～）
　　副主幹　小原　克巳（6.1～）
庶務　係　長　宮谷　昌之
　　主任主事　前田　和也（～5.31）

整理　善通寺連絡事務所
　　係　長　渡部　明夫

主　事	松下由美子（～5.31）		主任技師	真鍋　昌宏
	三宅　浩司（6.1～）		技　師	西岡　達哉
	水本久美子（6.1～）			

昭和63年度

文化行政課

総括	課　長	廣瀬　和孝
	課長補佐	高木　　尚
	副主幹	野網朝次郎（6.1～）
庶務	係　長	宮谷　昌之（～5.31）
	主　事	横田　秀幸（6.1～）
		水本久美子
調査	係　長	大山　真充
	主任技師	安藤　清和
	技　師	國木　健司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所　長	田丸　秀明
	次　長	小原　克巳
庶務	主　査	加藤　正司
	主任主事	近藤　紀文
	主　事	三宅　浩司
		俟野　英二
整理	係　長	渡部　明夫
	技　師	西岡　達哉

また，担当職員と共に整理に携わった方は次の通りである。

青木　民江	石川ゆかり	猪木原美恵子	小畑三千代	葛西　　薫
鎌谷　周子	川田裕加子	佐藤　広美	曽根　康世	田井　照美
高橋佳緒里	高橋　千恵	武田　幸子	千田嘉恵子	筒井　千景
白玖　昇子	平井美知恵	林　　肇子	藤田由紀子	細川　倫子
真井　典子	三谷　由美	山先　陽子	横田　周子	

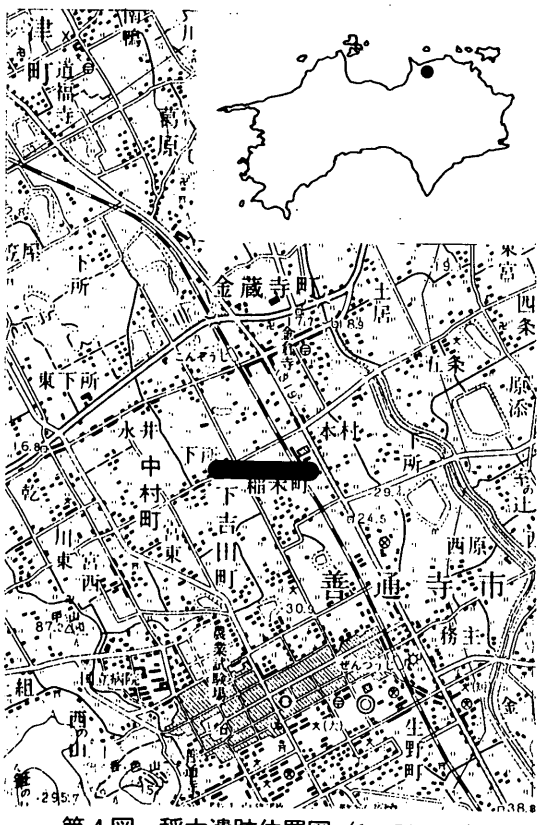
第3節　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

稲木遺跡は，香川県善通寺市稲木町字下川原，字西角，下吉田町字本村東，字下所東地内の水田地に所在し，現金倉川の西岸に位置する。現金倉川は全長約20.5kmを測り，香川・徳島県境を成す阿讃山地に源を発した後，北西流して瀬戸内海へ注ぐ。したがって当遺跡の位置はその下流域に相当する。

ところで,善通寺市域に所在する遺跡が金倉川，弘田川の水利を拠り所として営まれていたことは，多くの研究者の唱えるところであり，あたかも異論をはさむ余地を残していないかの感がある。しかしながらこの点については，今日まで具体的な議論が交わされたことはない。まして地形学・地質学・土壌学見地からの実証性をもつ究明は例をみない。

そこで本節では，稲木遺跡の立地について検討する上において欠かすことのできない善通寺市域の平野部の内在的な生産力について考察してみたい。

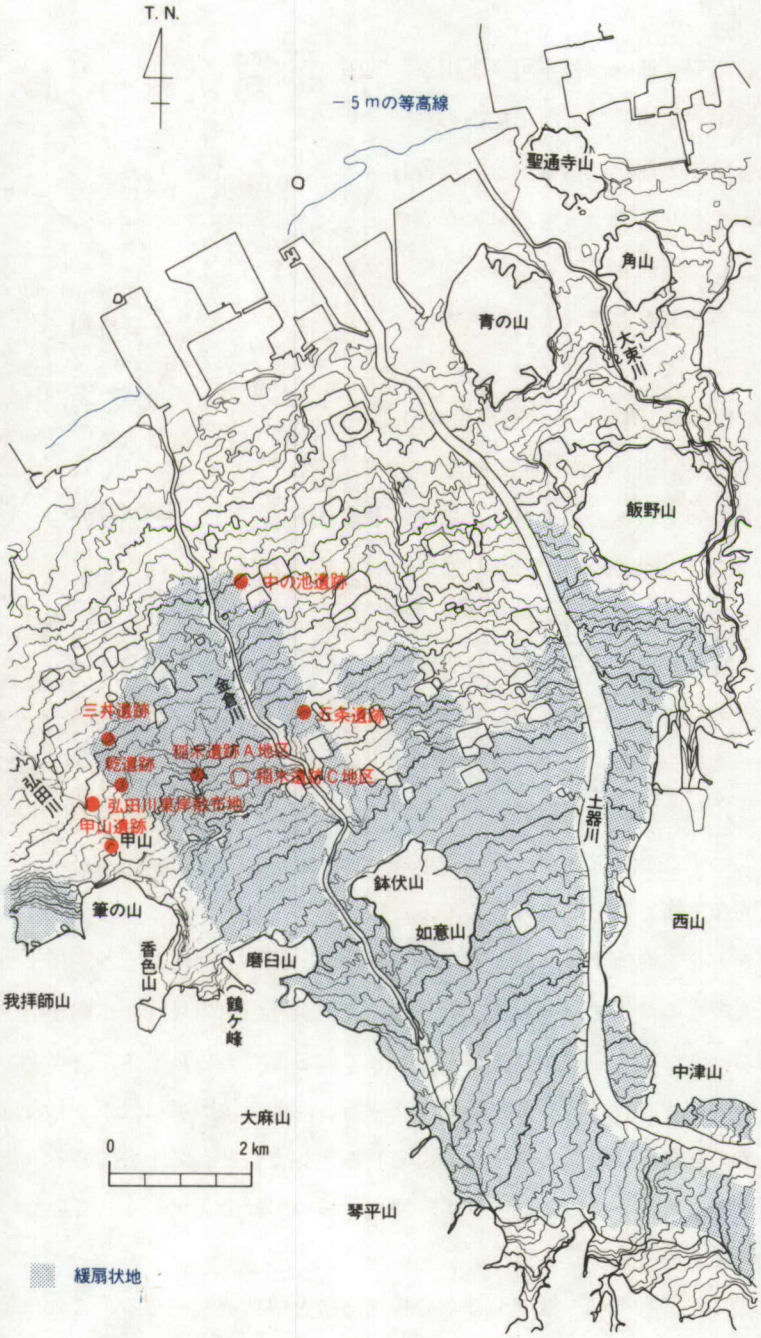


第4図　稲木遺跡位置図（1：50,000）

丸亀市，善通寺市などを擁するいわゆる丸亀平野は，上記の2河川と土器川によって造出された香川県でも最大規模の沖積平野である。そして，従前より河川の良好な水利と，少い降水量を補う多数の溜池の築造によって豊かな生産力を有していると考えられてきた。事実，善通寺市域において多数の埋置が知られている弥生時代の青銅器と，前方後円墳に代表される前期古墳，および後期の群集墳の営造はこれを裏付ける最古の考古学的資料として十分であろう。ただしこの議論は結果から原因を推測しているにすぎず，原因については全く実証されていない。そこで，原因を地理的環境に求めてみようと思う。

第5図にみる様に善通寺市域の低地のうちの相当面積を扇状地が占める。これは等高線のカーブの観察によっても瞭然であろう。周知の様に，扇状地は砂と礫の堆積により形成されるが，このために水はけが良く，流水は伏流して地下を流れる。したがって稲の水田耕作など多量の水を必要とする農作物の生育には適さない地形とされている。

また，「出水」と呼ばれる湧水点は伏流水が扇端部で再び地表に出現する地点の呼称であり，市



第５図　丸亀平野の扇状地と弥生時代前期の遺跡の分布図
（国土地理院土地条件図１：25,000丸亀より作製）

内各所に認められることがこの地形の特徴を良く示している。

したがって上記の性格を有する地形が豊かな生産力を内在しているとは当低考えられない。これらの自然条件下において，丸亀平野に水田耕作による生産力を与えようとするならば，既存の河川，湧水に依存するのみでは不十分なことは自明である。すなわち多くの溜池を築造する必要性は，むしろこの点にあったのではなかろうか。

さて，香川県の弥生時代の灌漑技術を知る資料は皆無である。また，善通寺市の最古の絵図とされている徳治2年(1307年)作製の一円保差図からも，現同市善通寺町の通称大池以外には溜池と考えられる施設は認められない。(註1)

さらに野中寛文氏が差図作製当時においては，農業用水源が池と湧水に限定され，河水の利用がない点を指摘して，用水量が絶対的に不足していた事実を明らかにされておられる成果(註2)などを総合して検討するならば，善通寺平野が豊かな生産力を有し得たのは，溜池築造以降，あるいは，河水の利用開始以降と仮定することは可能であろう。そして弥生時代においては決して，水田耕作が盛行したとは考え難いのである。

ここで私たちは広大な沖積平野を擁することイコール生産力が強大であるという図式が容易に口外することができないことを痛感するのである。

この仮説を裏付ける事実は，弥生時代前期の遺跡の立地からも認められる。第5図が丸亀平野において確認されている遺跡の分布図であるが，甲山遺跡と現弘田川右岸の散布地を除く5遺跡は総て扇状地上に立地する。しかも，稲木遺跡A地区を除く4遺跡の立地は扇端部であり，遺跡地の低位部には海岸平野の低地形が存在するという地形である。海岸平野は水田耕作に適する土壌によって形成されている。当時の人々が，扇端部の高地に居住し，海岸平野の低地を耕地化したことは想像に難くない。すなわち，これが高度な灌漑技術と鉄製農具を持たない弥生時代前期の人々が水田耕作を営む以上，水利を求めるために自然地形に適応せざるを得ない手段であったと考えられる。

ところが，上記の仮説を打破すると考えられる事実が第四紀研究者グループによって明らかにされている。(註3) それによると，弥生時代前期の海岸平野が今日よりも広大であり，耕作可能な低地は想像以上に拡がることが判る。もちろん当時の生産力を評価する上で重要なポイントと考えられるため，解説を要するであろう。

この研究の中心となっておられるのは井関弘太郎氏である。氏は西暦0年頃の遺跡の立地とボーリングデータなどから，当時の海水面の垂直変動を追跡された。その結果，当時の海水面が今日よりも約2～5m低位にあったことを明らかにされたのである。(註4) これは丸亀市，多度津町にかけての現近海底が人工的に改変されていることを考慮したとしても海岸線が数百m以上沖合にあったことを意味するのである（第5図)。

この点から，弥生時代前期の丸亀平野の可耕地は予想外に大規模な面積を占めていたことも憶

測されるが，海岸平野部に立地する遺跡が知られていない以上，速断は避けなければならないであろう。

しかしながら，同時代の中期から後期にかけて海進が認められるとする研究成果(註5)と稲木遺跡以下の後期後半頃の遺跡がむしろ扇状地上に展開せざるを得なくなり，鉄器の使用を開始した事実を念頭に置くならば，あながち憶測とも言い切れないのではなかろうか。

善通寺市域に立地する遺跡の地理学，生態学的な成立要因については，依然多くの課題を残している。今後は広大な沖積平野と河川を擁していることに起因するとした巨視的な観点から，一歩踏み込んだミクロな地形の変化を追跡する研究が不可欠である。

2　周辺の遺跡

第4表　稲木遺跡周辺の遺跡地名表

番号	名称	種類	所在地		概要
			町名	字名	
1		塚（円墳）	下吉田	道西	滅失。詳細不明。
2		〃	〃	〃	〃　〃
3		〃	〃	本村西	〃　〃
4		〃	〃	〃	〃　〃
5		〃	〃	〃	〃　〃
6	九頭神さん	〃	〃	九頭神	〃　〃
7	みこし休め	〃	稲木	石川	〃　〃
8	吉田八幡古墳	前方後円墳	下吉田	本村東	墳丘残存。東西18m，高さ2m。
9	どうらん塚	塚（円墳）	〃	〃	伝承のみ残る。詳細不明。
10	稲木若宮さん	〃	稲木	石川	詳細不明。
11	五社はん	〃	〃	〃	滅失。詳細不明。
12		〃	〃	〃	〃　〃
13		〃	〃	〃	〃　〃
14		〃	〃	〃	〃　〃
15		〃	〃	〃	〃　〃
16	三八荒神	〃	〃	荒神	滅失。長径24m，短径17m，高さ1.8m。葺石。
17	堀之内塚	〃	〃	石川	滅失。詳細不明。
18	つんつん塚	〃	〃	〃	〃　〃
19	あぶみ塚	〃	〃	〃	〃　〃
20		〃	〃	荒神	〃　〃
21	おふく塚	〃	〃	川原	〃　〃
22	本村東古墳	〃	〃	荒神	〃　〃
23	吉田廃寺	寺跡	下吉田	九頭神	瓦出土。
24	善光塚	塚（円墳）	稲木	石川	長径15m，短径3m，高さ1.2m。
25		散布地	〃	〃	弥生土器，須恵器出土。甕棺墓検出。
26		〃	下吉田	本村東	弥生土器出土。
27	石川古墳	円墳	稲木	石川	滅失。管玉出土。
28	石川遺跡	散布地	〃	〃	蛤刃石斧，柱状石斧，打製石包丁，石鍬，石鏃，石匙，石錘出土。
29	九頭神遺跡	〃	下吉田	九頭神	弥生土器出土。竪穴住居跡検出。
30-1 30-2	稲木遺跡D地区	墳墓・集落	稲木	西角	方形の周溝を有する墳墓，小型竪穴式石室，竪穴住居跡検出。
31-1 31-2	〃　E地区	集落	〃	〃	6世紀の竪穴住居跡7基検出。自然河川より横槌，ねずみ返しなどが出土。

稲木遺跡周辺の遺跡，あるいは四国横断自動車道ルート周辺の遺跡については，既に本報告書シリーズの第１冊をはじめ『善通寺市史』第１巻，『新編香川叢書』考古篇などの数種の文献に紹介されている。(註6) そこで，あえて本書ではこれらを詳述することを避け，遺跡地図を作製し，一覧表を掲げることに止めたい。

ただし，以下の善通寺市内の７遺跡に関しては，立地条件，所属時期などの面において本遺跡との類似点が認められ，相互に深い関連をもつことが考えられるために少し紙数をさいて概観し

第６図　周辺の遺跡分布図

てみる。

① 石川遺跡

稲木遺跡の南方0.7kmに位置する。かつて善通寺市立東部小学校に北隣する水田地の地下げ作業中に，弥生土器，磨製蛤刃石斧，磨製柱状石斧，打製石包丁，石鍬，石匙，石錘が出土しており，土器棺に用いられていたものと考えられる大型の土器も検出されたと聞く。これらの出土品の多くは，同市下吉田町在住の森岡俊秀氏が保管されており，当遺跡については氏から種々の御教示をいただくことができた。

氏の話の中で，注目すべき点は現耕作土直下に砂礫層の存在が認められた事実である。形成時期，形成要因などの詳細については一切判明していないが，当遺跡もまた扇状地形に立地していることを裏付けていることが判ろう。

② 九頭神遺跡

前述の石川遺跡の西方0.7kmの水田地と宅地が遺跡地である。微高地上に営まれていた集落遺跡としての性格を有していることが考えられているが，遺跡の規模，性格などの実態は明らかでない。

1986年度の善通寺市教育委員会による市道拡幅のための事前調査の際に，竪穴住居跡群が検出されており，弥生時代後期の土器が出土している。この調査は本稿作成時においても継続されており，調査結果の公表が待たれるところである。

なお，稲木遺跡に次いで，扇状地形の扇端部に近い低位置に立地している。

③ 旧練兵場遺跡

現国立善通寺病院，四国農業試験場用地を中心に，東西1km，南北0.5kmの広大な面積を有すると考えられているが，遺物の出土が散発的であることと，記録資料が残存しないためにその全容を知ることは難しい。

しかしながら，遺物の包蔵量は同時代の周辺の遺跡に比すると群を抜いており，当時の拠点的な遺跡であったことは想像に難くない。

また，現存する資料から知り得る遺跡の性格は集落としての居住域よりもむしろ壺棺墓を主体とする墓地であろう。しかも弥生時代全時代に及ぶ埋葬例が認められたことは注目に値するが，とりわけ後期の墓制は，稲木遺跡，仙遊遺跡，彼ノ宗遺跡をはじめ，山麓地域の箱式石棺墓群などとの関連の解明が課題である。

④ 仙遊遺跡(註7)

1986年7月，住宅建設工事中に偶然発見された箱式石棺墓1基と小児壺棺墓3基から成る遺跡である。特に前者の石材に施された線刻画により脚光を浴びたことは記憶に新しい。総ての遺構が弥生時代後期後半に属すると考えられ，やはり当時の墓制を検討する上での重要な資料である。

当遺跡は前述の旧練兵場遺跡内に包括されていることから，旧練兵場遺跡内部の空間構造を解

明する資料としても興味深いと言える。

⑤　仲村廃寺(註8)（下層遺跡）

旧練兵場遺跡の東端部と推定される位置に所在する。1983，1984年に善通寺市教育委員会により，発掘調査が行なわれており，古代以降の遺構面の下位より，弥生時代後期の竪穴住居跡１基が検出されている。調査面積が限られていたために住居跡周辺の遺構の状況などについては全く判らない。

ところで，調査に携わられた笹川龍一氏は報告書の中で，調査区南部で検出されたＳＤ－06と呼ばれる砂利層を旧金倉川の氾濫原であると指摘されておられる。筆者も基本的にはこの見解に異を唱えるものではないが，扇状地堆積物の砂礫とみなすことによって，より具体性を与えることが可能であろう。

⑥　彼ノ宗遺跡(註9)

稲木遺跡の南西約２kmに位置する。1985年度に善通寺市教育委員会が，弘田川の河川改修工事に伴い，発掘調査を実施している。

検出された遺構には弥生時代中期から後期の竪穴住居跡38基，小児壺棺墓15基などがあるが，遺跡の主体を成すのは終末期の集落跡である。

遺跡は現弘田川が西辺を廻流する点から，微高地形の末端部あるいは扇状地形の端部に立地していることは明白であろう。

また，旧練兵場遺跡に西隣しており，立地条件，検出遺構，出土遺物に類似点が多いことから，前２遺跡同様に旧練兵場遺跡に連続することは十分考えられる。

⑦　稲木遺跡Ｄ・Ｅ地区(註10)

1987年に善通寺市教育委員会により調査が実施された。稲木遺跡Ｃ地区に北隣するが，検出された遺構の性格はＣ地区のそれとは全く異なる。

まずＤ地区においてはいわゆる庄内式併行期に営まれたと考えられる埋葬遺構２基と竪穴住居跡１基が検出されている。ＳＴ01と呼称される埋葬遺構は長軸700cm，短軸600cmを測り，東，西，北方の縁辺部に周溝が穿たれることにより方形周溝墓状の形態を呈する。しかしながら主体部は遺存しない。また周溝内部からは夥しい数量の土器片と円礫が出土している。ＳＴ02は小型の竪穴式石室による埋葬遺構である。隅丸長方形の土坑を穿った後に安山岩の板石１枚と多量の円礫を積み上げて構築されている。土坑を被覆する施設あるいは周辺に共存する遺構は認められていない。竪穴住居跡ＳＨ01は直径約600cmの不整円形の形態を呈しており，Ｅ地区およびＣ地区検出の竪穴住居跡が総て方形あるいは隅丸方形の形態である点と大きく異なっている。

次にＥ地区は弥生時代終末期頃と６世紀代に営まれた集落跡と考えられる。特に後者は稲木遺跡の変遷過程の空白時期を補う資料である。

(註)

1．善通寺市『善通寺市史』第1巻，1977年。

2．野中寛文「讃岐国善通寺領一円保差図について」『宗教社会史研究』2，1985年。

3．藤原健蔵他「瀬戸内海中部における旧海水準の認定」，小野忠熙「考古地理学からみた完新世の海水準変動と海岸平野の形成—本州西端と北部九州の場合—」，共に井関弘太郎他『完新世における旧海水準の認定とその年代に関する研究』，1980年。による。

4．井関弘太郎「日本における2000年B.P.ころの海水準」『名古屋大学文学部研究論集』LXII，史学21，1974年。同『沖積平野』，1983年。

5．註3小野氏論考による。

6．他に矢原高幸『善通寺市の古代文化』，1973年。などを参照。

7．笹川龍一『仙遊遺跡発掘調査報告書—旧練兵場遺跡仙遊I地区－』，1986年。

8．安田和文・笹川龍一『仲村廃寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）』，1984年。

9．笹川龍一『彼ノ宗遺跡－弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』，1985年。

10．松本敏三他『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，1987年。

第4節　調査の方法

発掘調査は予備調査と本調査に大別され，それぞれ目的と方法が異なる。そこで，本節では，各調査について目的を明らかにし，その目的追求のために選ばれた手段について報告する。

なお，一部記述が本章第2節と重複している点と，本稿作成時においては予備調査を担当した職員が全員退職しているため，調査の意としていたところを余さず報告することは難しいことをあらかじめ断っておきたい。

① 予備調査

予備調査は，本調査を計画する際の基礎的な資料を提供することを目的とした。このため，最大25m×6.5mの短冊形のトレンチを15カ所設定し(付図1)，土層序の把握，遺構の性格と密度，包含層の状態の確認，旧地形の推定などの項目について調査を実施した。

しかしながら道路公団による用地買収後の植付保障のために，調査担当者が意図する位置にトレンチを設定することが不可能でありその結果，点在的な配置を余儀なくされたのである。

調査方法は重機を用いて耕作土を除去した後,人力により地山まで掘削を行なう方法をとった。重機を用いた意図は調査期間の短縮である。

② 本調査

予備調査の結果，B地区とC地区について本調査が必要であることが判明した。

前者は主に西暦700年前後の建物跡群からなる遺跡地であり,従前から弥生時代の遺跡として知られていた稲木遺跡の新相であった。

また，後者についてもJR土讃線の東方地区にのみ，遺跡が存在すると考えられていたのであるが，軌道敷西方地区にも展開することが確認できたのである。しかも後述の様に検出面の異なる3時期の遺構から成る複合遺跡であることも明らかにされた。

これらの予備調査のデータに基き本調査の計画を立案した。

ただし，A地区についてのみ，調査の進捗上の都合と種々の制約から，予備調査に継続して本調査が実施され，昭和58年度中に調査を終えている。

本調査の計画と方法については以下の通りである。

1．B地区東半部とC地区は共に全面発掘を基本とする。ただし，B地区西半部は予備調査により，遺跡の拡がりが認められていないため，土層序の再確認と旧地形把握を目的とした調査を行なう。また，C地区東西端部については予備調査不足の感が強いため再度トレンチ調査を行なうものとする。

2．地区割は国土地理院国土座標第Ⅳ座標系に拠り，善通寺市域の全調査対象地区が完全に包括できる範囲に地区名を施すことにした。地区割の最小単位は20m×20mの方形区画である。地区名は付図1を参照されたい。

しかしながら，調査員間の意志の不徹底もあり，地区名の呼称法は統一されていないのが現実となっている。

3．予備調査同様，表土は重機を用いて除去する。また下層遺構検出のために，適宜間層を遺構検出面直上まで重機で掘り下げることにした。いずれも調査期間の短縮化を計るものである。

こうして稲木遺跡の調査に限らず，横断道建設に伴う各調査をはじめ，工事工程に翻弄される大規模調査では重機による掘削が不可欠となったことは確実である。

4．記録方法については以下の通りである。まず地形測量図は道路公団作製の丈量図(500分の１)を利用して用を足した。これは既に遺跡地が総て水田地または畑地化しているために，地形測量の必要性が認められなかったためである。

また，遺構平面測量図と土層断面測量図は実物の20分の１の縮尺で作製することを基本としたが，必要に応じて，10分の１，５分の１，２分の１などの小さい縮尺も使用し，最善の記録保存方法を実施する様注意した。

なお，Ｂ地区東半部分の平面測量についてヘリコプターにより航空測量を実施する。これは香川県下の行政機関による大規模調査における測量方法としては初の試みである。

さらに遺構などの写真撮影は35㎜と60㎜×90㎜フィルムを併用する。

以上の計画と方法により，本調査に着手した。

第２章　Ａ地区の調査

第１節　調査の経過

稲木遺跡は古くから弥生土器等の散布が認められていた。今回この一部が四国横断自動車道（善通寺～豊浜間）の路線と重なることが判明したため，路線内の遺構の有無を確認する目的で，昭和58年６月１日から予備調査を開始した。

予備調査は，稲木遺跡（現Ａ地区）及び多度郡条里稲木地区（現Ｂ・Ｃ地区）を併せて実施した。この段階での調査基準区画の設定は，基本的に現在の丸亀・善通寺平野の水田区画の方位を基準として行っている。

予備調査の結果，稲木遺跡の範囲は従来想定されていたよりも広がり，時代内容も多岐にわたる事が明らかになったため，Ｂ・Ｃ地区については昭和59年度に本調査を実施することとし，Ａ地区から予備調査グリッドを拡張して本調査に移行した。

Ａ地区の調査は，昭和58年10月12日から昭和59年２月９日まで行われ，主として弥生時代前期に位置付けられる自然河川及び奈良時代の条里に伴うと考えられる溝状遺構・時代不明のピット群などを検出した。

調査担当は例言に記した通り，岸上・野中・中本の三名であったが，異動・退職に伴いＢ地区の調査を担当した真鍋が整理報告を分担した。

整理報告にあたっては，Ｂ・Ｃ地区を含めた横断道建設に係る調査区画の統一による，国土座標を基準とした調査区画の設定に基づき，この基準に変更して報告することにする。

調査の詳細な経過については調査日誌（抄）で記述する。

調　査　日　誌（抄）

昭和58年

（６月）

１日　稲木地区の予備調査を開始する。
　５－ＮＳ・ＥＷトレンチの設定作業。（予備調査でのトレンチ番号については，付図１を参照。）

２日　６－ＮＳ・ＥＷトレンチの設定作業。

３日　１，７－ＮＳ・ＥＷ，８，９－ＮＳ・ＥＷ，10トレンチの設定作業。

６日　２－ＮＳ・ＥＷトレンチの設定作業。

９日　本日から重機によって６－ＮＳ・ＥＷ，７ＮＳトレンチの表土掘削を開始する。

27日　５－ＮＳ・ＥＷトレンチの表土掘削。

28日　市道稲木線添いに現場事務所の設置を完了する。

29日　本日から作業員の就労を開始する。
　６－ＥＷトレンチの精査及び掘下げをする。

（7月）

6日　同上第5層掘下げ中に石包丁・須恵器片の出土が見られた。

8日　同上第6層上面でピット群を検出する。柵列状の規則性が見られる。

13日　6－EWトレンチをひとまず休止し，7－NSの掘下げを開始する。第5層上面で，北に向かって落ち込みが検出された。

26日　7－NSトレンチでも同様にピット群を検出する。

（8月）

1日　7－NSトレンチのピット群の掘り下げ及び写真撮影を実施。ピットの無い部分に焦茶粘質土が堆積しており遺構の可能性があるが，一端休止する。
5－EWトレンチの草刈りを実施。

9日　同上第7層上面で，溝状遺構を検出する。引き続き遺構の掘り下げを実施。

11日　同上溝状遺構の写真撮影を実施。
4－EWトレンチの表土掘削を開始する。

12日　遺構面上の包含層から須恵器・中世土器が多数出土する。

22日　4－EWトレンチで溝状遺構2条及び土坑（本調査の結果，柱穴になる。）を検出する。写真撮影終了。

23日　9－EW・NSトレンチ，10－EWトレンチの表土掘削を開始する。

29日　9－EW・NSトレンチの掘り下げ終了。

30日　10－EWトレンチで溝状遺構を検出する。

31日　10－EWトレンチ終了。11－NSトレンチの掘削を開始したが，表土直下で地山を検出したため終了する。

（9月）

1日　2－EW・NSトレンチの掘削を開始する。

7日　同上トレンチで，柱穴多数と溝状遺構を検出する。

8日　同上遺構を掘上げる。また，1－NSトレンチの表土掘削を開始する。

12日　1－NSトレンチで弥生時代後期と考えられる土器を多数検出する。また，包含層以外に土器溜まり状の遺構を検出。
3－EWトレンチの表土掘削を開始する。

22日　8－NSトレンチの表土掘削を開始する。

（10月）

6日　同上調査部分が川状の地形を呈することが判明。

11日　予備調査を終了。結果は，6・7トレンチ部分を稲木遺跡A地区，2～5トレンチ部分を同B地区，1トレンチ部分を同C地区として本調査を実施することにし，そのままA地区本調査に移行する。

（A地区の本調査実施にあたって，稲木遺跡全体に20m方眼の調査区を設定した。この調査区画は，丸亀平野の土地区画に沿う形で設定していたが，報告書段階では国土座標を基準として統一したため最終的にはメッシュ番号を変更して図示している。この部分での混乱をさけるため，調査日誌では旧番号を標示しないで記述する。）

12日　6－EWトレンチを拡張する。

14日　7－NSトレンチを拡張する。

（11月）

10日　先に検出していたピット群の広がりを確認する。

29日　先に検出していた焦茶色粘質土の一部トレンチの掘下げを実施した結果，自然河川もしくは溝状遺構になると考えられる肩部を検出する。

30日　トレンチ部の深掘を終了する。この結果を踏まえて，トレンチ間の掘削を開始する。

（12月）

2日　溝状遺構を平面的に掘り下げた結果，全

体の輪郭が確認されたと同時に，肩部で多くの遺物を検出した。出土遺物の多くは弥生時代前期に属するものと考えられる。

7日　調査地点が，溝状遺構の合流点であることが判明。ＳＤ8301～ＳＤ8304（本文中ではＮＲ8301～ＮＲ8304に改変）と名称を付ける。

16日　同上の遺構掘削を終了する。
9・10トレンチ部の拡張を行う。

昭和59年

（1月）

10日　先に完掘した溝状遺構の北への繋がりを確認するため，県道を挟んで北側に調査区を設定し調査を開始する。

23日　溝状遺構の調査を終了する。
次に完掘した溝状遺構の東側に調査区を設定して調査を開始する。

（2月）

9日　調査区の図面作成及び写真撮影を終了し，本日で稲木遺跡Ａ地区の調査を終了する。

この後，年度末までＢ・Ｃ地区の予備調査トレンチの拡張及び新規調査区設定を行い調査を継続する。

第2節　調査の概要

1．遺構

A地区の遺構としてピット群及び自然河川・溝状遺構が検出されている。

当初，南部調査区を調査した結果，自然河川の繋がりを検出する目的で北部調査区に着手したが，北部の調査区と南部の調査区との間には市道があること，南部調査区の北半は建造物の基礎によって破壊されていることから，明瞭な連続性を確認することはできなかった。

以下，主要な遺構について述べたい。

1）ピット群

自然河川と同様の地山面で検出しているが，一部自然河川の埋土上にも広がっていることから，これよりも後出することは明らかである。また埋土中からも遺物の出土は無く時代は不明である。

検出状況は，一見自然河川に規制されるように配置されているが，先にも述べた通り必ずしもこれに伴う状況にもない。しかし，ピット群の配列が柵状を呈すること等，前述の配置状況をも考え併せると流路が狭くなる自然河川の完全埋没の前後の年代を想定することも可能である。

2）自然河川

自然河川は，大きくは4条から成っている。①NR8412－NR8305－NR8301が南北に流れるこの調査区での中心的な自然河川である。これから東の方向に派生する②NR8304－NR8419，これに流れこむ③NR8420・④NR8421がある。

この他に見られる小さな流れは自然河川の分流としてとらえられる。

(1)　NR8412・8305・8301

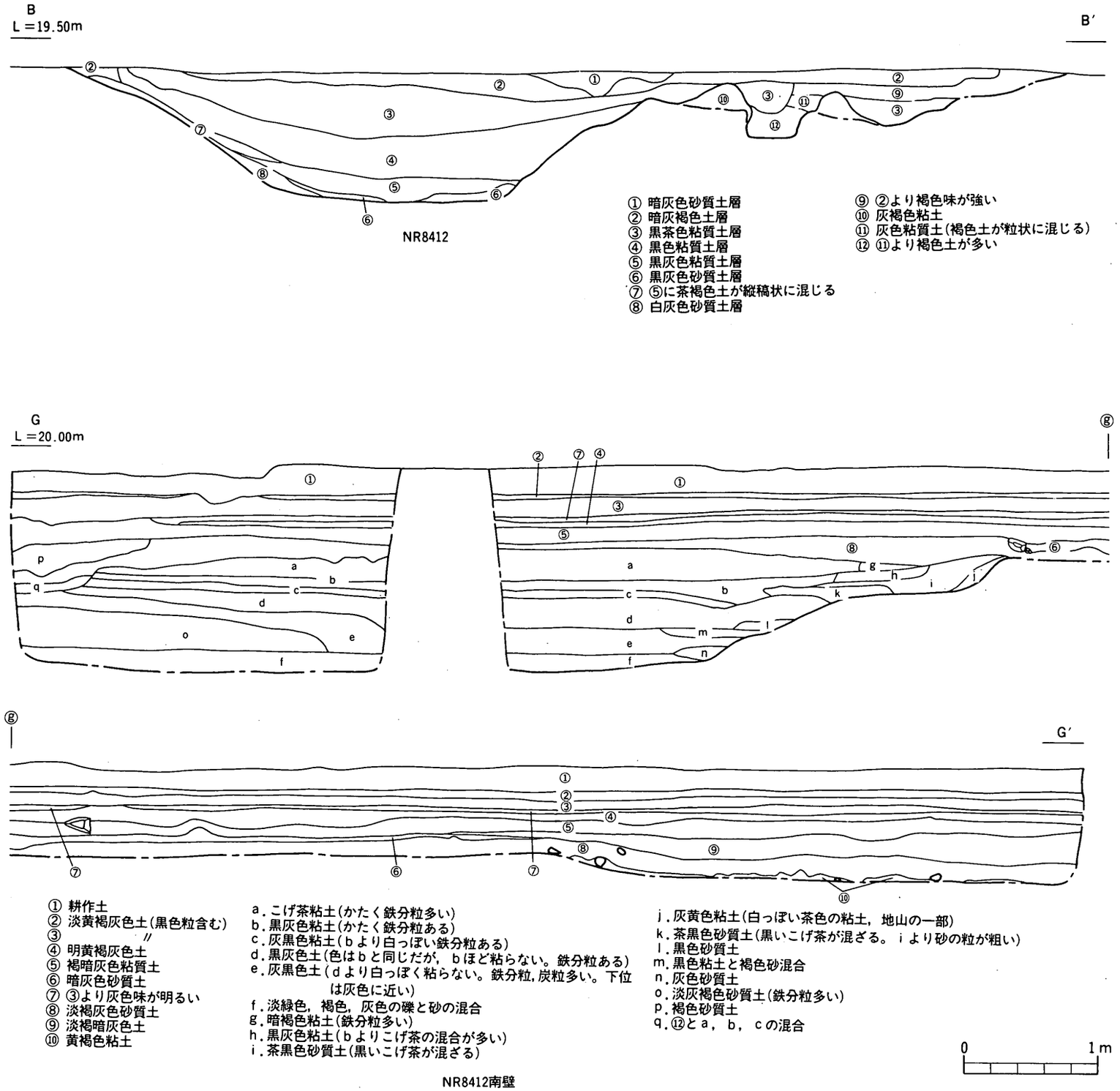
最大幅6.75m，最深部1.40m，断面形状は緩やかなV字状を呈する。埋没状況は，第7図に示したNR8412南壁・中央部，NR8301南壁の土層観察の結果おおよそ8層に分層することが可能で，自然埋没の状況を示している。

出土遺物中，最下層（砂層）から縄文晩期の土器が検出されていることから，自然河川が流れ始めた時期は縄文晩期の頃と推定される。その後，徐々に埋没が進みほぼ全面が埋没したのは弥生時代前期中と推定できる。

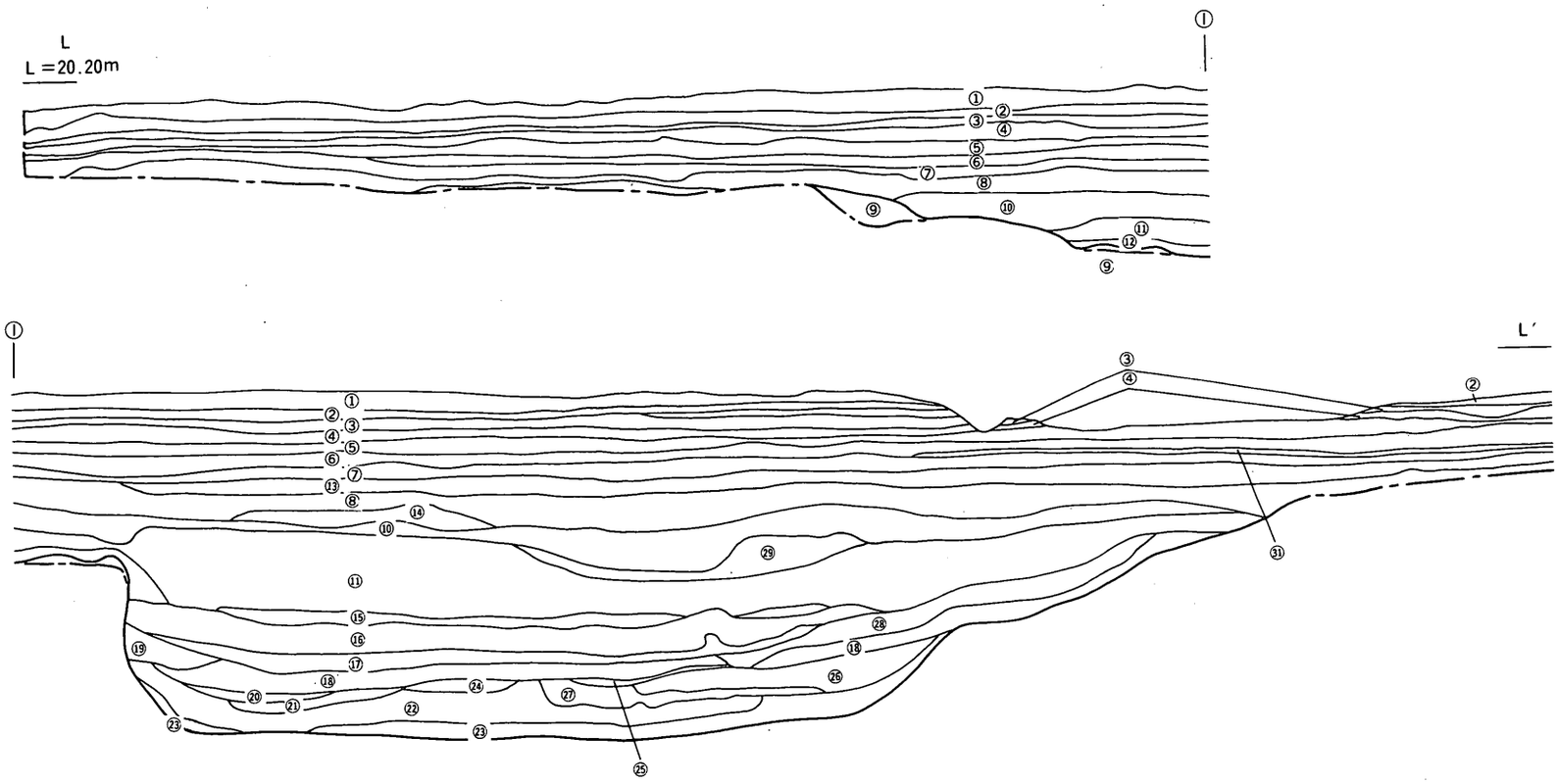
(2)　NR8304・8419

最大幅9.00m，最深部1.25m，断面形状は緩やかなV字状を呈する。埋没状況は，第9図に示したNR8304東壁，NR8419西壁・東壁の土層観察の結果おおよそ19層に分層することが可能で，自然埋没の状況を示している。埋没状況・時期は(1)同様に考えられる。

次にNR8419の流路についてであるが，この調査区の東側市道稲木線を挟んで，B_1地区の調査を実施した結果，調査区内でこれにつながると思われる自然河川はB_1地区SD01しか無く，これを同一河川と想定した場合その屈曲は相当大きくなることが伺われる。


B
L＝19.50m
B′
NR8412
① 暗灰色砂質土層
② 暗灰褐色土層
③ 黒茶色粘質土層
④ 黒色粘質土層
⑤ 黒灰色粘質土層
⑥ 黒灰色砂質土層
⑦ ⑤に茶褐色土が縦稿状に混じる
⑧ 白灰色砂質土層
⑨ ②より褐色味が強い
⑩ 灰褐色粘土
⑪ 灰色粘質土(褐色土が粒状に混じる)
⑫ ⑪より褐色土が多い
G
L＝20.00m
ⓖ
G′
① 耕作土
② 淡黄褐灰色土(黒色粒含む)
③ 〃
④ 明黄褐灰色土
⑤ 褐暗灰色粘質土
⑥ 暗灰色砂質土
⑦ ③より灰色味が明るい
⑧ 淡褐灰色砂質土
⑨ 淡褐暗灰色土
⑩ 黄褐色粘土
a. こげ茶粘土(かたく鉄分粒多い)
b. 黒灰色粘土(かたく鉄分粒ある)
c. 灰黒色粘土(bより白っぽい鉄分粒ある)
d. 黒灰色土(色はbと同じだが, bほど粘らない。鉄分粒ある)
e. 灰黒色土(dより白っぽく粘らない。鉄分粒, 炭粒多い。下位は灰色に近い)
f. 淡緑色, 褐色, 灰色の礫と砂の混合
g. 暗褐色粘土(鉄分粒多い)
h. 黒灰色粘土(bよりこげ茶の混合が多い)
i. 茶黒色砂質土(黒いこげ茶が混ざる)
j. 灰黄色粘土(白っぽい茶色の粘土, 地山の一部)
k. 茶黒色砂質土(黒いこげ茶が混ざる。iより砂の粒が粗い)
l. 黒色砂質土
m. 黒色粘土と褐色砂混合
n. 灰色砂質土
o. 淡灰褐色砂質土(鉄分粒多い)
p. 褐色砂質土
q. ⑫とa, b, cの混合
0
1m
NR8412南壁

第7図　断面実測図(1)

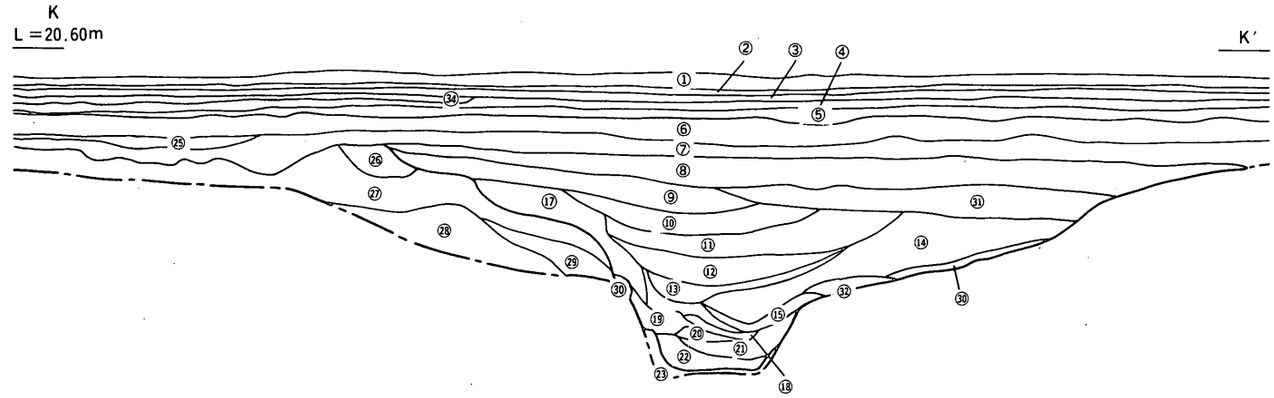


① 耕作土
② 暗灰褐色砂質土
③ 暗黄褐色砂質土
④ 暗黄灰色砂質土
⑤ 暗灰褐色砂質土(②より明るい)
⑥ 暗黄褐色砂質土(③より明るい)
⑦ 暗黄褐色粘質土
⑧ 暗灰色粘質土
⑨ 明黄色粘質土
⑩ 明灰茶色粘質土
⑪ 黒灰色粘質土
⑫ 明黄褐色粘質土
⑬ 明灰色粘質土(褐色を含む)
⑭ 暗茶色粘質土
⑮ 黒色粘質土
⑯ 黒色砂質土
⑰ 暗灰黒色粘質土
⑱ 暗灰黒色砂質土
⑲ 黄灰色砂質土
⑳ 黄灰色砂層(粒子が粗い)
㉑ 灰色粘質土(少量の鉄分を含む)
㉒ 灰茶褐色粘質土
㉓ 白灰色砂礫土
㉔ 灰色粘質土(多量の鉄分を含む)
㉕ 暗灰色砂層(少量の鉄分を含む)
㉖ 〃 (粒子が粗い)
㉗ 〃 (少量の鉄分を含み，㉖より粒子が細い)
㉘ 黒色砂質土(少量の有機物を含む)
㉙ 暗茶色粘質土(⑭より粘い)
㉚ 灰色砂質土(少量の鉄分を含み，②より白っぽい)
㉛ 暗黄褐色砂質土

NR8419西壁

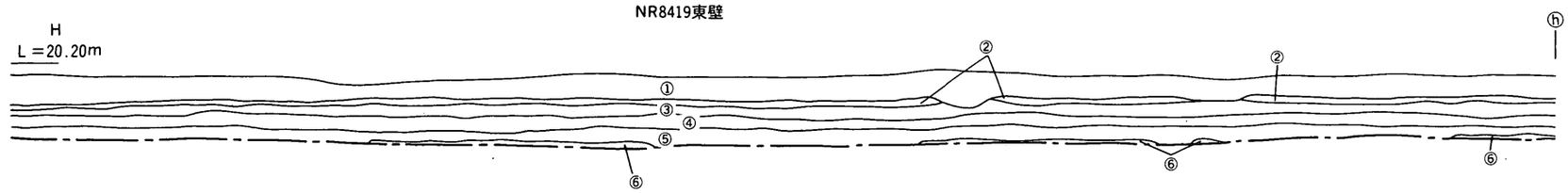
0　1 m

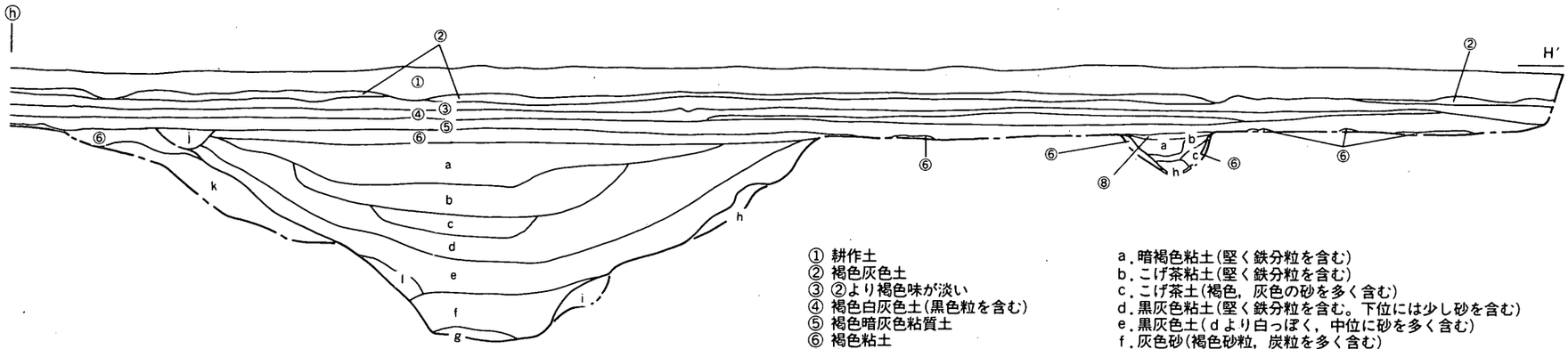
第 8 図　断面実測図(2)



① 耕作土
② 灰色砂質土
③ 暗灰褐色砂質土
④ 暗黄褐色砂質土
⑤ 暗黄灰色砂質土
⑥ 暗灰褐色砂質土
⑦ 明灰褐色砂質土
⑧ 明茶褐色砂質土
⑨ 黒色粘質土(少量の鉄分を含む)
⑩ 〃 (〃 , ⑨より暗い)
⑪ 黒褐色粘質土
⑫ 黒色粘質土(⑨, ⑩より明るい)
⑬ 暗灰色砂質土(少量の鉄分を含む)
⑭ 〃 (多量の鉄分を含む)
⑮ 灰色砂質土
⑯ 暗灰色砂質土
⑰ 暗黒色砂層(粒子が粗い)
⑱ 暗灰色砂層(粒子が細かい)
⑲ 灰色砂質土(⑮より明るい)
⑳ 白灰色砂層(粒子が細かい)
㉑ 白灰褐色砂層(粒子が粗い)
㉒ 灰色砂質土(少量の鉄分を含む)
㉓ 白灰色砂礫土
㉔ 明黄色粘質土
㉕ 黄灰色砂質土
㉖ 暗黄褐色砂層(粒子が粗い)
㉗ 黄褐色砂層(粒子が細かい)
㉘ 灰色砂層(粒子が細かい)
㉙ 暗灰褐色砂層(粒子が細かい)
㉚ 赤褐色砂層(粒子が粗い)
㉛ 明黄褐色砂質土
㉜ 黒色砂質土
㉝ 暗灰色粘質土
㉞ 明黄灰褐色砂質土

NR8419東壁





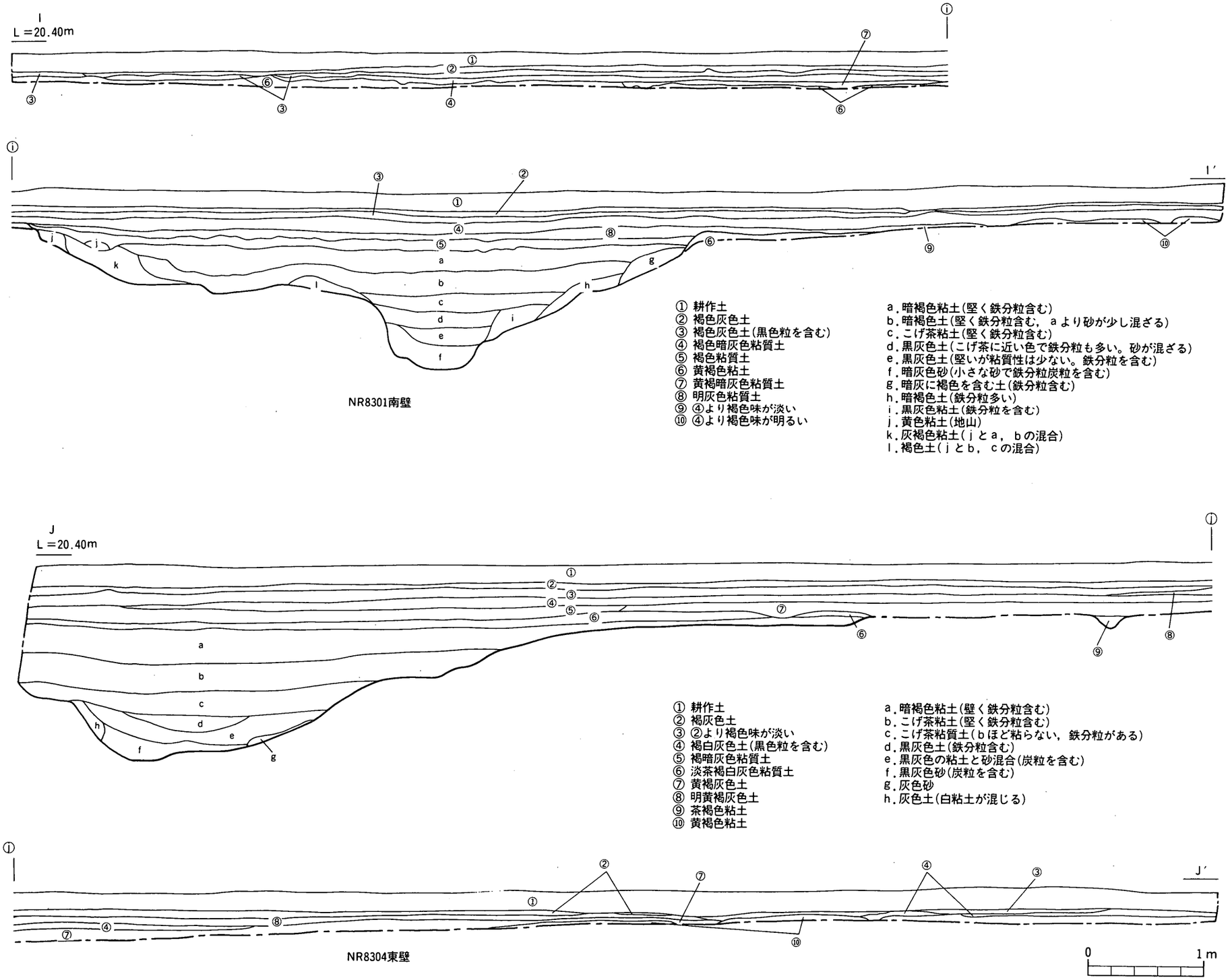
NR8301・8303北壁

① 耕作土
② 褐色灰色土
③ ②より褐色味が淡い
④ 褐色白灰色土(黒色粒を含む)
⑤ 褐色暗灰色粘質土
⑥ 褐色粘土
⑦ ④より褐色味が淡い
⑧ 明黄褐色粘質土

a. 暗褐色粘土(堅く鉄分粒を含む)
b. こげ茶粘土(堅く鉄分粒を含む)
c. こげ茶土(褐色, 灰色の砂を多く含む)
d. 黒灰色粘土(堅く鉄分粒を含む。下位には少し砂を含む)
e. 黒灰色土(dより白っぽく, 中位に砂を多く含む)
f. 灰色砂(褐色砂粒, 炭粒を多く含む)
g. 黒灰色砂(溝底をつくる緑灰色粘土を含む砂)
h. 暗褐色土(鉄分粒が多い)
i. 白, 褐色混合の粘土(地山の粘土の崩れ)
j. 灰色土(鉄分粒を少し含む。ピットの埋土)
k. 暗褐色土(鉄分粒が多い)
l. 白灰色粘土(地山の粘土の崩れ)

0 1m

第9図 断面実測図(3)


I
L＝20.40m
I′
NR8301南壁
① 耕作土
② 褐色灰色土
③ 褐色灰色土(黒色粒を含む)
④ 褐色暗灰色粘質土
⑤ 褐色粘質土
⑥ 黄褐色粘土
⑦ 黄褐暗灰色粘質土
⑧ 明灰色粘質土
⑨ ④より褐色味が淡い
⑩ ④より褐色味が明るい
a．暗褐色粘土(堅く鉄分粒含む)
b．暗褐色土(堅く鉄分粒含む，aより砂が少し混ざる)
c．こげ茶粘土(堅く鉄分粒含む)
d．黒灰色土(こげ茶に近い色で鉄分粒も多い。砂が混ざる)
e．黒灰色土(堅いが粘質性は少ない。鉄分粒を含む)
f．暗灰色砂(小さな砂で鉄分粒炭粒を含む)
g．暗灰に褐色を含む土(鉄分粒含む)
h．暗褐色土(鉄分粒多い)
i．黒灰色粘土(鉄分粒を含む)
j．黄色粘土(地山)
k．灰褐色粘土(jとa，bの混合)
l．褐色土(jとb，cの混合)
J
L＝20.40m
J′
NR8304東壁
① 耕作土
② 褐灰色土
③ ②より褐色味が淡い
④ 褐白灰色土(黒色粒を含む)
⑤ 褐暗灰色粘質土
⑥ 淡茶褐白灰色粘質土
⑦ 黄褐灰色土
⑧ 明黄褐灰色土
⑨ 茶褐色粘土
⑩ 黄褐色粘土
a．暗褐色粘土(堅く鉄分粒含む)
b．こげ茶粘土(堅く鉄分粒含む)
c．こげ茶粘質土(bほど粘らない，鉄分粒がある)
d．黒灰色土(鉄分粒含む)
e．黒灰色の粘土と砂混合(炭粒を含む)
f．黒灰色砂(炭粒を含む)
g．灰色砂
h．灰色土(白粘土が混じる)
0
1m

第10図　断面実測図(4)

(3)　ＮＲ8420

最大幅2.90m，最深部1.20m，断面形状は緩やかなＶ字状を呈する。この地区の地形から見て，南側が高くなることは間違いなく(2)に流れこんでいることがわかる。

(4)　ＮＲ8421

最大幅3.40m，最深部0.63m，断面形状は緩やかなＶ字状を呈する。(2)との合流部分を見ると底面まで達せず，(2)がやや埋没した状況で分岐したことも考えられる。

3）溝状遺構

ＳＤ8417は，ＮＲ8412の埋没後に現在の市道（現水田方向）に平行する形で東西に流れており，条里に伴う溝ではないかと考えられるが，遺物の出土が無く断定するには至っていない。

最大幅1.50m，最深部0.25m，断面形状は緩やかなＶ字状を呈する。

2．遺物

1）土　器

ＮＲ8412・8305・8301出土遺物

1は弥生前期壺形土器である。口縁部片と底部片が出土しており，胎土・色調から同一個体と判断した。口縁部片は内外面の剝落が著しく，僅かに残る表面に三条の弧線が見られる。全体の施文は不明であるが，連弧文の可能性が高い。底部についても同様に内外面の剝落が著しい。

2は弥生前期壺形土器である。口縁部は細くなりながら僅かに外反し，頸胴部の境に一条の沈線が巡らされている。

3は弥生前期甕形土器である。口縁部は所謂「如意状口縁」を呈し，胴部はやや開き気味に延びる。口縁屈曲部からやや下がったところに，僅かな「段」が見られる。段の形成は，強いヨコミガキによるところが大きい。

4は弥生前期壺形土器である。口縁部は大きく外湾気味に伸び，端部は丸く終わる。内外面とも器表が剝落している。

5は弥生前期壺形土器である。口頸部の破片と考えられ，口縁部と頸部の境に所謂「逆段」が見られる。段の直下には一条の沈線が巡らされる。内面には，口縁端部方向から垂直に三条の沈線が施されている。

6・7は弥生前期壺形土器の口縁部片で，口頸部の境に段を持つものである。2点とも横方向のヘラミガキによる段の形成と考えられる。

8は弥生前期壺形土器の胴部片である。破片の上部には頸胴部の境に位置する段が見られ，その直下に二条の沈線が施されている。施文形態としては新しく位置づけられているものである。

9は弥生前期壺形土器の胴部片である。破片の上部には頸胴部の境に位置する段が見られ，その上部に刺突文が施されている。ここで見られる段は通常の沈線にきわめて近い。また，胴部に

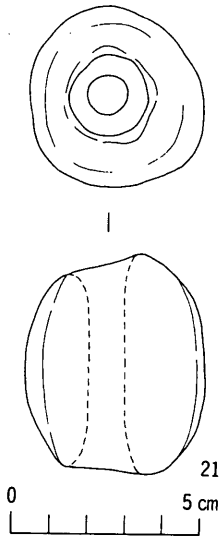
は4条の弧線が施されているが，連弧文ではなく山形文的な文様が考えられる。

10は大形の弥生前期甕形土器である。器形の大形化はあるものの，通常のものと何ら変わることはない。口縁部は所謂「如意状口縁」を呈し，口縁の屈曲部の下に段を有する。内外面共に剝落が著しく調整は不明である。

11～15は底部の破片である。12は突出した平底で形態的には古い様相を留める。13は底部に焼成後の穿孔が見られる。

16は甕形土器の蓋である。頂部に凹みを持ち，八の字形に開く体部を有する通常の形態である。

17は弥生前期甕形土器である。口縁部を欠失しているが，如意状口縁を有するものと考えられる。口縁屈曲部の直下に三条の沈線を巡らしており，この一群の土器のなかで最も新しい様相を呈する。



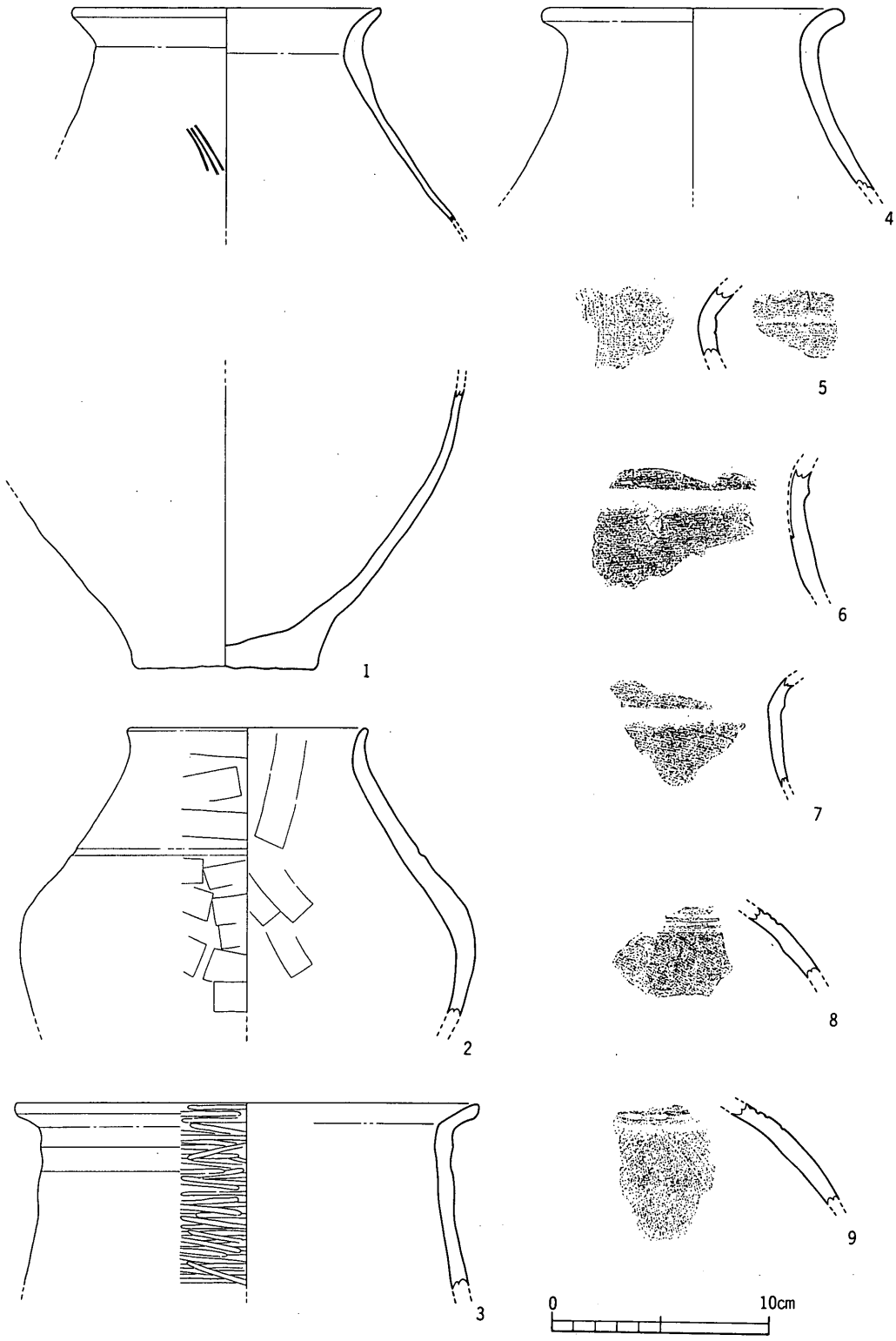
第11図　土錘実測図

18は縄文土器浅鉢の口縁部と推定される。他に類例が見当らないが，胎土・調整・施文から見てこのように考えられる。外面には横方向のヘラケズリが見られ，口唇部に刻み目が施される。

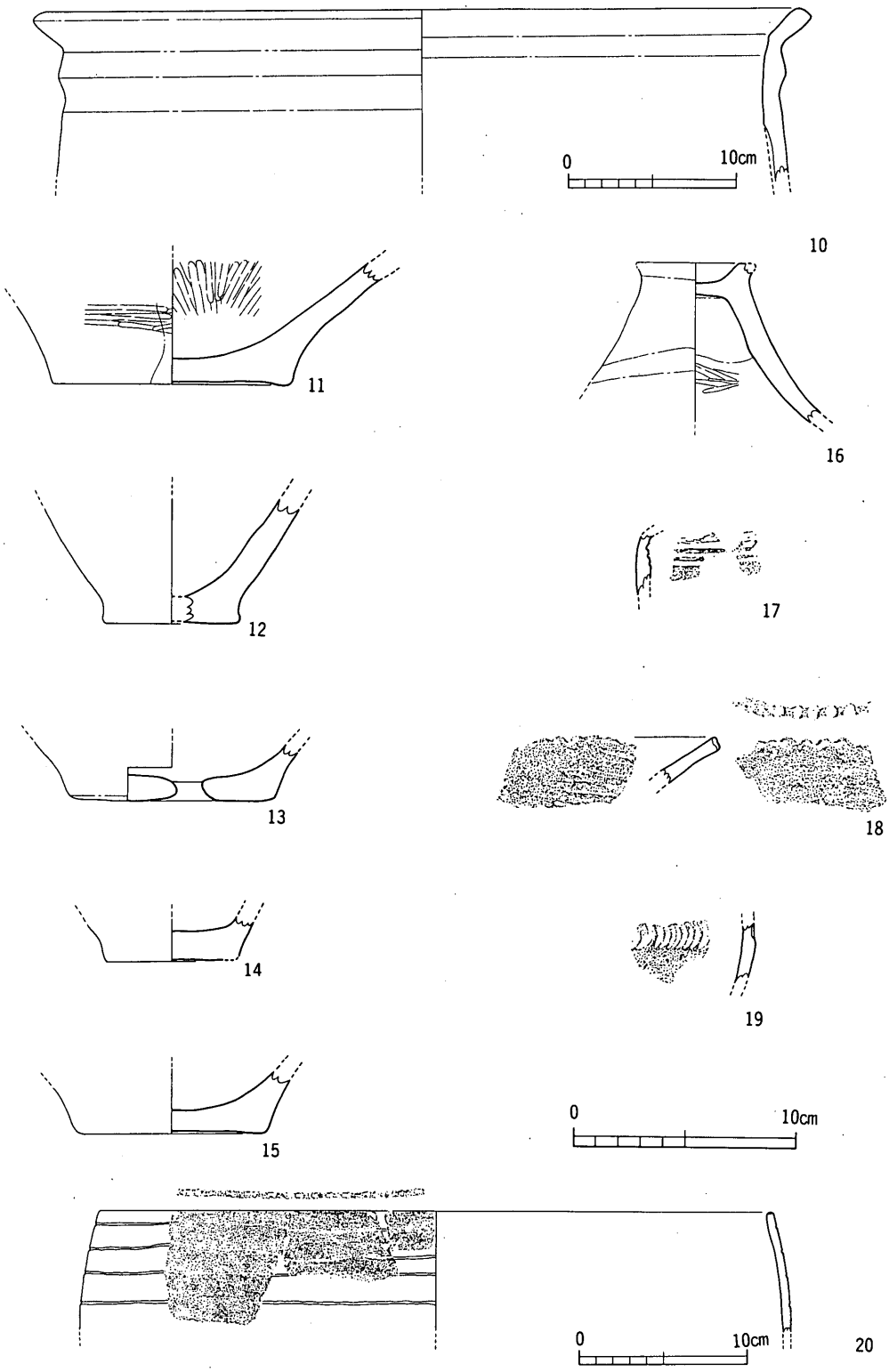
19は縄文土器深鉢の体部と推定される。位置的には頸胴部の境にあたる屈曲部と考えられ，所謂「D字爪形文」が一条施される。小破片ではあるが，所謂「原下層式」に相当する資料と考えている。

20は縄文土器深鉢の口縁部である。外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残り，やや粗雑な感じを与える。口唇部には，疎らな状態で小さな刻みが施されており，他に類例が見られないものの縄文晩期の範疇でとらえられよう。

21は土錘である。鶏卵状を呈し長軸中央に穿孔が見られる。外面は丁寧に仕上げている。



第12図　土器実測図(1)



第13図　土器実測図(2)

2）石　器

ＮＲ8412・8305・8301出土の遺物

1は粘板岩系の石材を用いた半月形の磨製石包丁である。穿孔は通常の二孔であり，両側から穿かれている。刃部には横方向の擦痕が多く見られる。

2は砂岩系の小円礫である。外面に擦痕が見られることから，磨り石とも考えられるが用途は不明である。

3は二次調整のある剝片である。主要剝離面側の調整は非常に薄く，意図した調整かどうかは疑わしい。

4は打製石斧である。砂岩系の石材の三辺に両側面から調整が加えられているが，風化が著しい。取り付け部にあたる端辺には，研いたと考えられる平坦面が認められる。

5は両長側面が折れているが，打製石包丁の可能性がある。主要剝離面・背面共にあまり調整がいきとどいておらず，スクレイパーの可能性も残る。刃部の調整はほぼ片側のみで，背部は刃潰し状を呈する。

6はスクレイパーであるが，形態は不定形である。

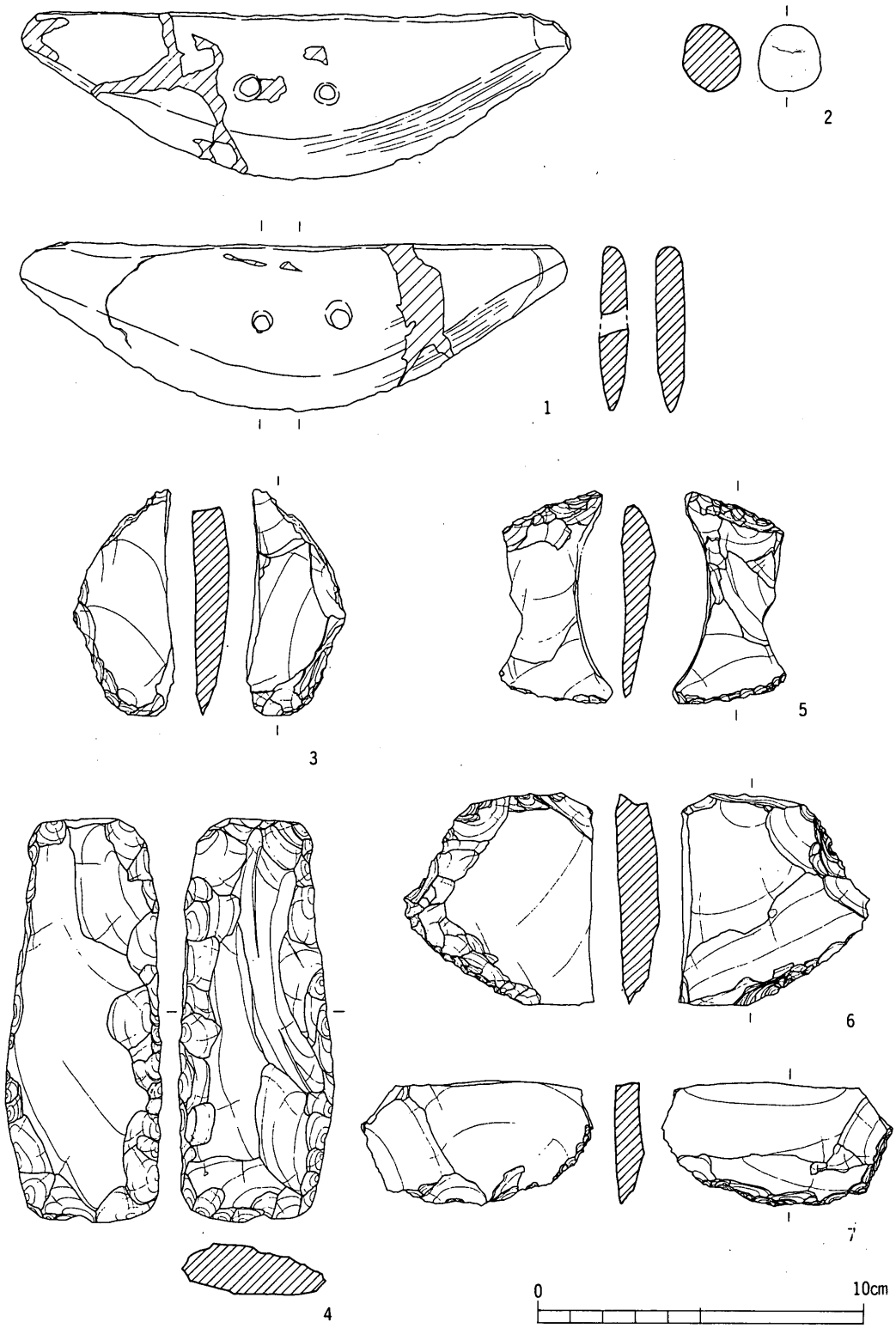
7はスクレイパーである。横長の剝片の一長側縁に片側から調整を加えている。

8～10は石鏃である。8は平基鏃，9は凹基鏃，10は凸基鏃に分類することができる。8・10は小形に属する。

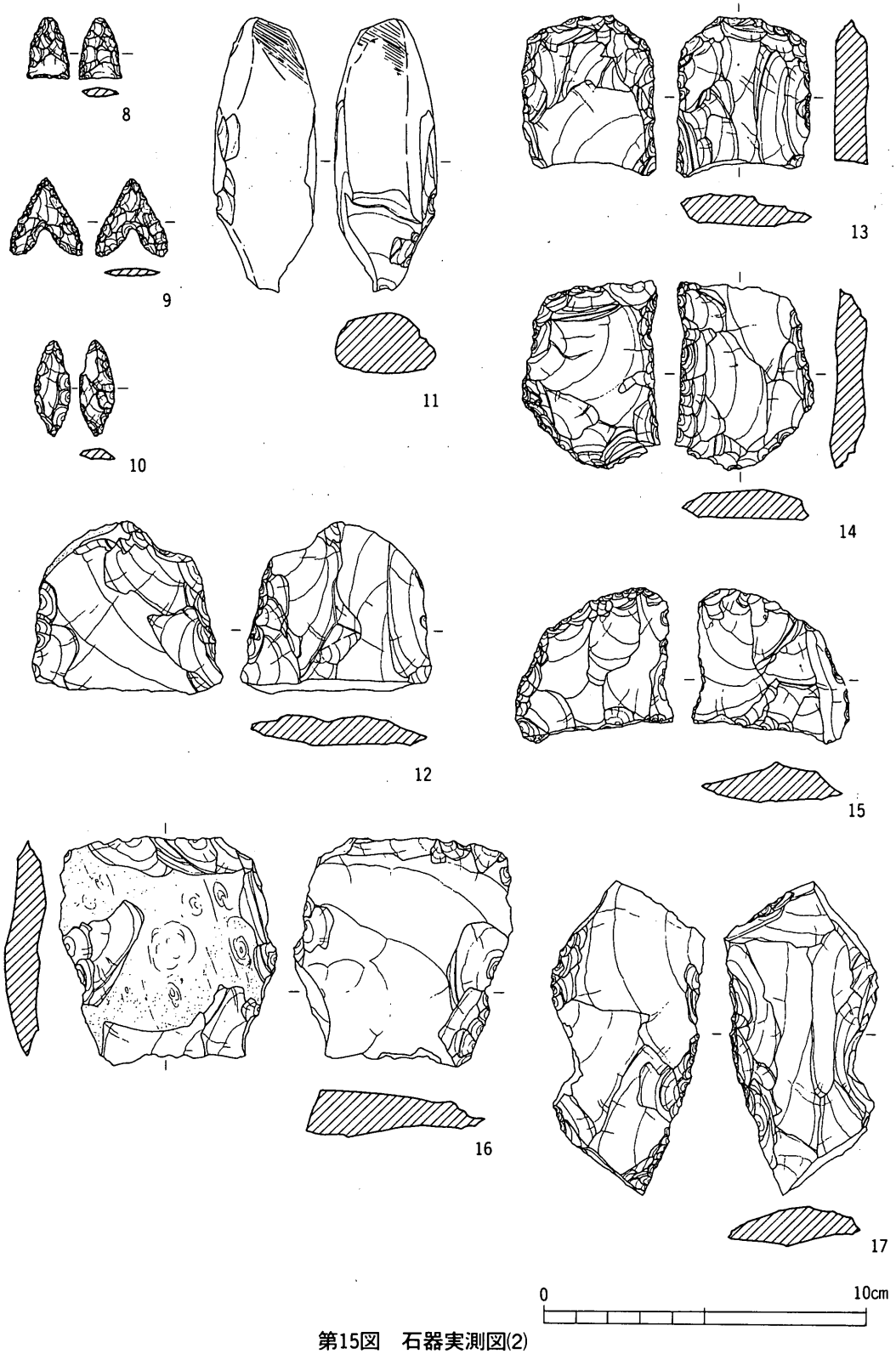
11は磨製石斧の未製品ではないかと考えられる。素材である石材の一短側縁を両面から研磨している。他は自然面の状態を残している。

12～20はスクレイパーである。一側縁の両面調整が見られるもの（12・15・16・17・19・20），二側縁の両面調整が見られるもの（13・14），一側縁の片面調整が見られるもの（18）の三類に分けることができる。形態は不定形で，形態上の分類はできない。

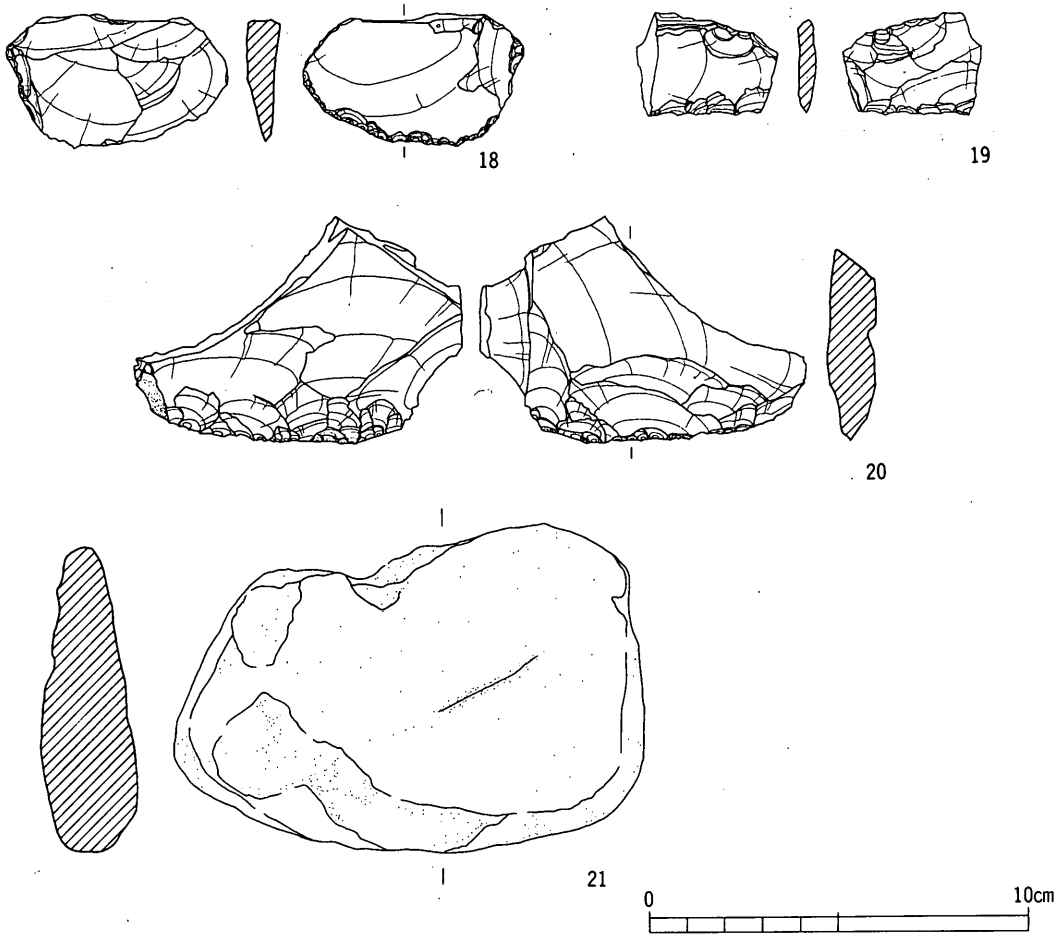
21は石皿と考えられるもので，両面のいたるところに研磨痕が見られる。石材は砂岩系で，研磨痕は均等である。



第14図　石器実測図(1)



第15図　石器実測図(2)



第16図　石器実測図(3)

第3節　小　　結

A地区の調査について，特筆すべき点だけ上げてまとめにかえたい。

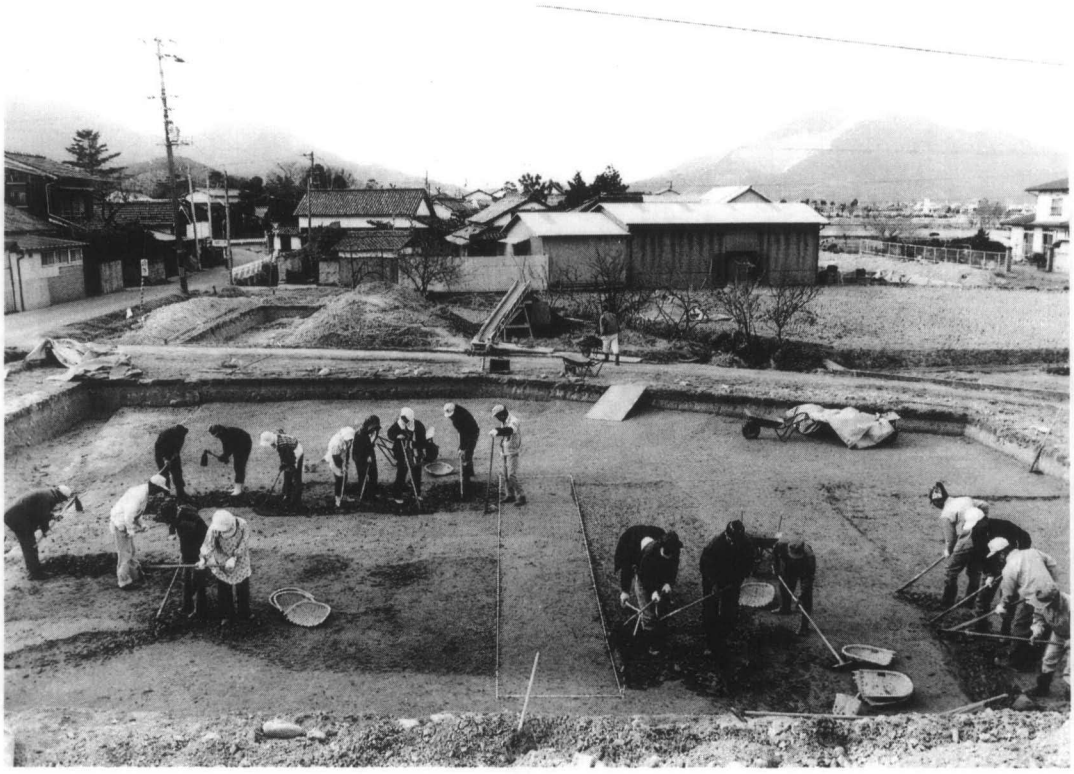
① 遺跡の中心年代は，自然河川から出土している土器等から弥生時代前期前半に位置付けられる。

② 自然河川最下層では，縄文晩期？の土器片も検出されているが，微量であるため明確な位置付けはできなかった。

③ 今回の調査では，自然河川・不明ピット群の検出のみで主たる遺構は調査区内には存在しなかったが，調査の状況及び地形から見て調査区の南西に遺跡の中心が存在することが推定される。

④ 自然河川は，埋土の観察によって徐々に埋没した状況が確認された。また埋土の土質から見て，最下層以外には砂層が形成されておらず，あまり水が流れていなかったことが考えられる。

⑤ 条里に伴うと考えられる溝状遺構（SD8417）の検出があったが，出土遺物が無く時代を明確にはできなかった。



第3章　B地区の調査

第1節　調査の経過

稲木遺跡B地区の本調査は，昭和59年9月17日に開始し，昭和60年2月8日まで約5か月を要した。実掘面積は調査対象面積17,000m²の内，約12,000m²である。

調査は，国土座標を基準とする一辺20mからなる区画の名称とは別に調査区を便宜的にB_1地区～B_3地区に大きく3区分して実施した。

範囲は西からB_1地区（市道稲木線から約25m離れて稲木線と平行する水路まで），B_2地区（水路から市道稲木2号線まで），B_3地区（市道稲木2号線から市道稲木E線まで）とした。この区分は，昭和58年度に実施した予備調査の結果，それぞれ内容が異なることが判明しており，内容区分として位置付けた。

調査はB_2地区から着手したが，この地区では溝状遺構・自然流路を検出したのみで，他の遺構・遺物は検出されなかったため，計7グリッドを調査して終了した。

B_3地区は，予備調査の結果から掘立柱建物群を中心とする遺構の広がりが推定され，最終的には想定通りの遺構が検出された。

B_1地区は，予備調査時に一部検出していたA地区から伸びる弥生時代前期の溝状遺構と条里制に伴う溝状遺構の全面検出が主目的であり，調査の過程でB_1地区・B_2地区の境界にした水路の立ち割りを2箇所で実施した。

調査の方法は前述した通りである。なお，報告に際して調査時の遺構番号を修正し，遺構の種類ごとに東から通し番号を付した。また，掘立柱建物跡等の柱穴出土の遺物については，各々の柱穴番号は省略し各遺構に伴うものとして処理した。

遺構埋土については，半載してこれを確認したが，一層で構成されているものについてはこの記述を省略したものが多い。

調査の進行状況は調査日誌で述べる。

調　査　日　誌（抄）

昭和59年

（9月）

17日　中村遺跡の調査を終了する。現場事務所から調査資材を搬出し，稲木遺跡調査事務所に搬入する。

調査は，H－27・28区の表土掘削から開始する。

19日　H－29・30区表土掘削。H－29区遺構面精査。基本土層は，予備調査で確認した通り，1層耕作土・2層黄白色砂質土（田

床）・3層暗灰色粘質土（遺物包含層）・4層黄白色粘質土（地山）であった。

（10月）

5日　Ⅰ－29区で，予備調査で確認した自然河川の上面を拡張精査。数条の溝を確認する。溝の埋土は3層に区分され，上層から暗灰色砂層・同色の細かい砂・暗灰色粘質土である。

8日　本日から12日まで，作業員さんは全員金蔵寺下所遺跡の調査現場に，航空写真撮影のための清掃作業に行く。

23日　H－22，Ⅰ－21・22区の精査で柱穴を多数検出する。柱穴には，大形のもの・中形のもの・小形のものが見られ，埋土に差が見られた。掘立柱建物跡および柵列になるようである。

（11月）

8日　H－25区の精査で3間×3間の総柱建物を検出する。倉庫跡と推定される。

H・Ⅰ－21区では，溝・土坑・柱穴を掘下げる。土坑の中には，弥生土器を包含するものが見られる。稲木遺跡C地区とは，谷状地形を挟んで向き会っており，同遺跡の広がりと考えられる。

13日　H・Ⅰ－21区では，大形の柱穴を持つ掘立柱建物跡が4棟検出されたほかは，小形の柱穴では建物を明瞭に抽出できなかった。しかし遺物は多く，黒色土器・土師器椀等が検出されることから，小形の柱穴の年代は，平安時代前半と考えられた。

20日　H－23区，精査および柱穴掘り。精査の結果，倉庫跡（総柱）を3棟検出する。

（12月）

7日　B_3地区の約2/3にあたる2400㎡の航空写真測量を実施する。準備のための遺構の掘り上げ・清掃に約4日を要する。このため，金蔵寺下所遺跡・稲木遺跡C地区の作業員さんの応援を受けた。

B_1地区に着手。

13日　B_1地区SD02の精査を終了する。予備調査時には中世の溝と考えられていたが，今回の調査で出土した遺物は須恵器・土師器とも奈良～平安時代に比定される。この結果，条里制に伴う溝の可能性が高くなった。

17日　B_3地区で残っていた，弥生時代と推定される自然河川の掘り下げを実施する。中央部で幅8mを測るが，深さは60cmと浅く，この地域では，過去に大規模な地下げが行われたと推定した。遺物は土器片が少々出土したのみであるが，弥生時代で良いと思われる。

27日　B_1地区，弥生時代の溝を調査する。北端で分岐しているが，市道稲木線の下に伸びるため調査不能であった。分岐したうちのどちらかが，昭和58年度に調査した稲木遺跡A地区のNR8419に続くものと考えられる。

本年の調査を終了する。

昭和60年

（1月）

7日　本年の調査を開始する。

B_1地区とB_2地区の境界にしていた水路を立ち割る。現在の溝の下に重複して年代不詳の溝を検出する。埋土は黒褐色粘質土で，B_2地区SD03につながる可能性が考えられた。

8日　昨日の課題を解決するため，合流予想地点を調査する。この結果，ほぼ直角に曲がってつながることが明らかになった。

10日　B_3地区の北辺に設置されていた工事用道路を，調査の終了した南辺に付け替えてもらう。

17日　G－23～25区の調査をほぼ終了する。掘立柱建物跡を数棟検出する。

28日　G・H－21区精査。掘立柱建物跡1棟，土坑2を検出。掘立柱建物跡は，平安時代と推定される。土坑からは，古式土師器が検出される。

（2月）

4日　調査区内畦畔の除去後の調査。

8日　調査終了。

第2節　調査の概要

1．土　層

稲木遺跡B地区の基本的な土層は，第17図のとおり6層に区分した。

第1層　耕作土

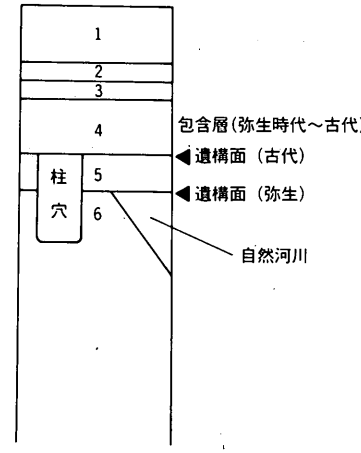
第2層　黄白色砂質土（田床）

第3層　鉄分層（土質は第4層土）

第4層　暗灰色粘質土（遺物包含層）

第5層　暗灰色砂質土

第6層　黄白色粘質土（地山）



1．耕作土
2．黄白色砂質土
3．鉄分層
4．暗灰色粘質土
5．暗灰色砂質土
6．黄白色粘質土

第17図　土層模式図

第1層から第3層は，通常の水田耕作に伴う土層である。

第4層遺物包含層は，弥生時代中期に属すると考えられる石庖丁等の石器や，奈良・平安時代の土器などが出土した。弥生時代の遺物は，石器のみで土器などは見当たらない。稲木遺跡の南側に広がる石川遺跡に関連する遺物の可能性もある。しかし，地点によって全く遺物を含まないところもある。また，遺物の包蔵状況は比較的希薄なところが多かった。

第5層は遺構面で，調査区全面には広がらない。第5層が欠落する地区では，第6層地山が遺構面になる。第5層中には遺物を含まない。

第6層は丸亀平野善通寺地区に共通する，遅くとも弥生時代以降の地山である。この地区では，稲木遺跡の西側に展開する永井遺跡に見られるような縄文土器の包含は認められない。

遺構の検出は，第5層が遺構埋土に近い色調を持つため，その大半は，第6層上面での確認になった。これ以外に各遺構の埋土があるが，各遺構の埋土は粘質土・砂質土や砂層などバリエーションに富んでいる。

2．遺　構

ここでは，検出された遺構を地区別・種類別に記述する。各時代・各時期の遺構変遷については，第3節小結でふれたい。また遺構番号は，B_1・B_2地区で通し番号とし，B_3地区でも同様とした。

1）B_1・B_2地区の遺構

この地区で検出された遺構は，弥生時代と推定される溝状遺構及び平安時代に埋没した溝状遺構・時期不明のピットがある。

ＳＤ01　調査区西南隅で検出された。規模は最大幅1.80m・最深部0.93mを測る。埋土は第19図に示したように，最下層から最上層まで7層に分けられ，徐々に埋没していったことがうかがわれる順堆積である。

流路方向は北西から南東方向に伸び，検出部北端でほぼ直角に分岐する。南端ではＳＤ02が上部に重なっている。遺物は検出されておらず時期は不明であるが，その方向性・埋土の状況・掘削面から見て，Ａ地区との関連が想定され，弥生時代前期頃には埋没したものと考えられる。

ＳＤ02　市道稲木線にほぼ平行して検出された。規模は最大幅3.80m・深さ0.60mを測り，方向はＮ－29°－Ｗである。調査区南端でやや広がる傾向があるものの，比較的安定した状況で検出されている。埋土は第19図に示したように8層に分離することができるが，遺物の取り上げは上層（第ａ層～第ｅ層）・下層（第ｆ層～第ｈ層）に分けている。埋土は上層・下層とも砂で形成されているが，細かな砂ではなく比較的砂粒が大きい点に注目すれば，埋没状況は洪水のような一時的なものであったと考えられる。出土遺物から埋没年代は平安時代の前半に求めることができる。

ＳＤ03　検出長68.80m・最大幅0.75m・深さ0.15mを測り，方向はＮ－61°30′－Ｅである。Ｉ－31ポイントの南側でほぼ直角に屈曲するため，延長方向に二か所トレンチを設定した。この部分は現在水路として使用されており，現在の水路との関係が注目された。この結果ＳＤ03の延長と考えられる溝が検出されたが出土遺物が無く年代決定はできていない。

ＳＤ04　検出長11.30m・最大幅0.5m・深さ0.05mを測り，方向はＮ－32°－Ｗである。北端は自然消滅しており，南端は農道部分にかかるため調査ができなかった。ほぼ中央部でＳＤ05が分岐している。遺物の出土はなかった。ＳＤ03を切っており後出することは明らかである。

ＳＤ05　検出長12.50m・最大幅0.50m・深さ0.05mを測り，方向はＮ－61°30′－Ｅである。東端は自然消滅している。ＳＤ04との分岐点から約2.5mの所から南にむかってＳＤ06が分岐している。遺物は出土していない。

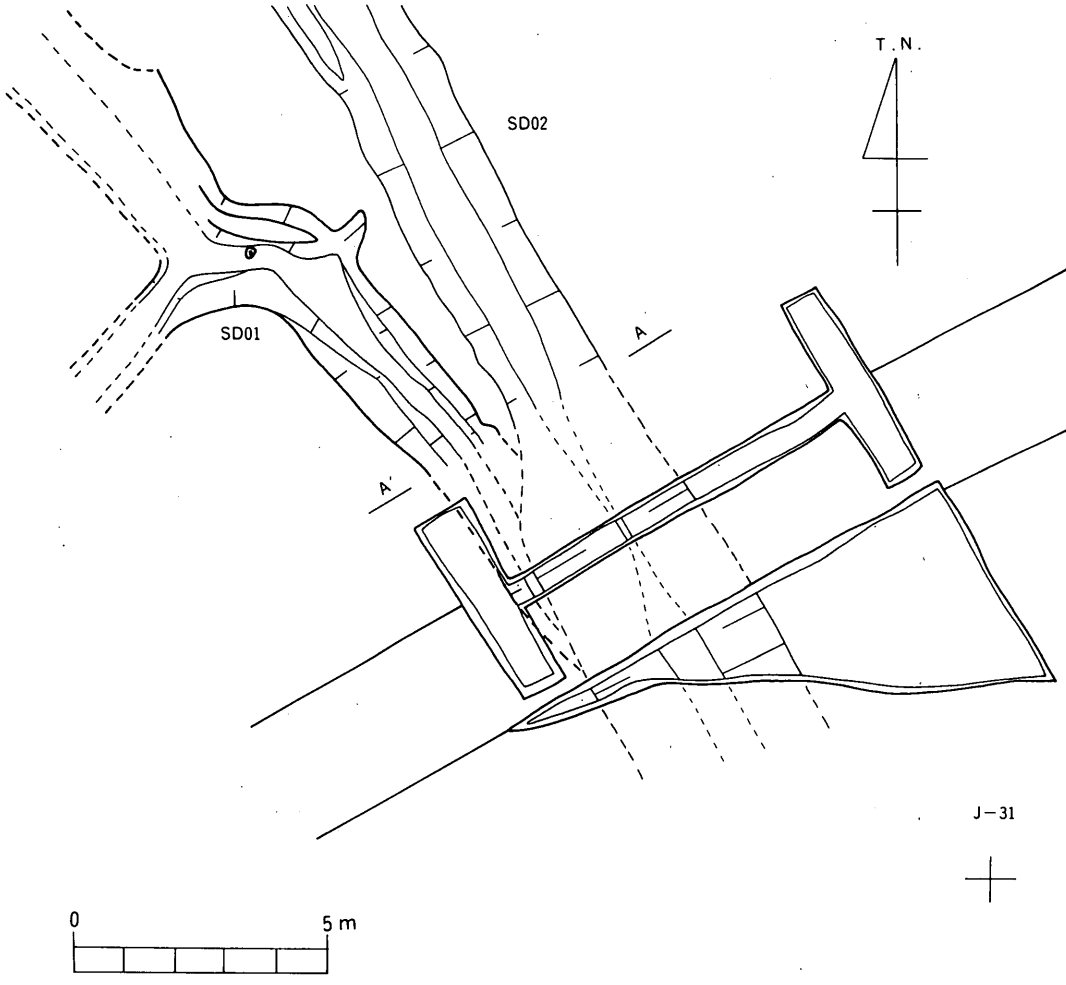
ＳＤ06　検出長37.50m・最大幅0.90m・深さ0.05mを測り，方向はＮ－36°30′－Ｗである。農道を境にして南側ではやや規則性が薄れ，部分的に蛇行を繰り返す。自然流路を切っておりこれ

より後出することは明らかである。遺物の出土はない。

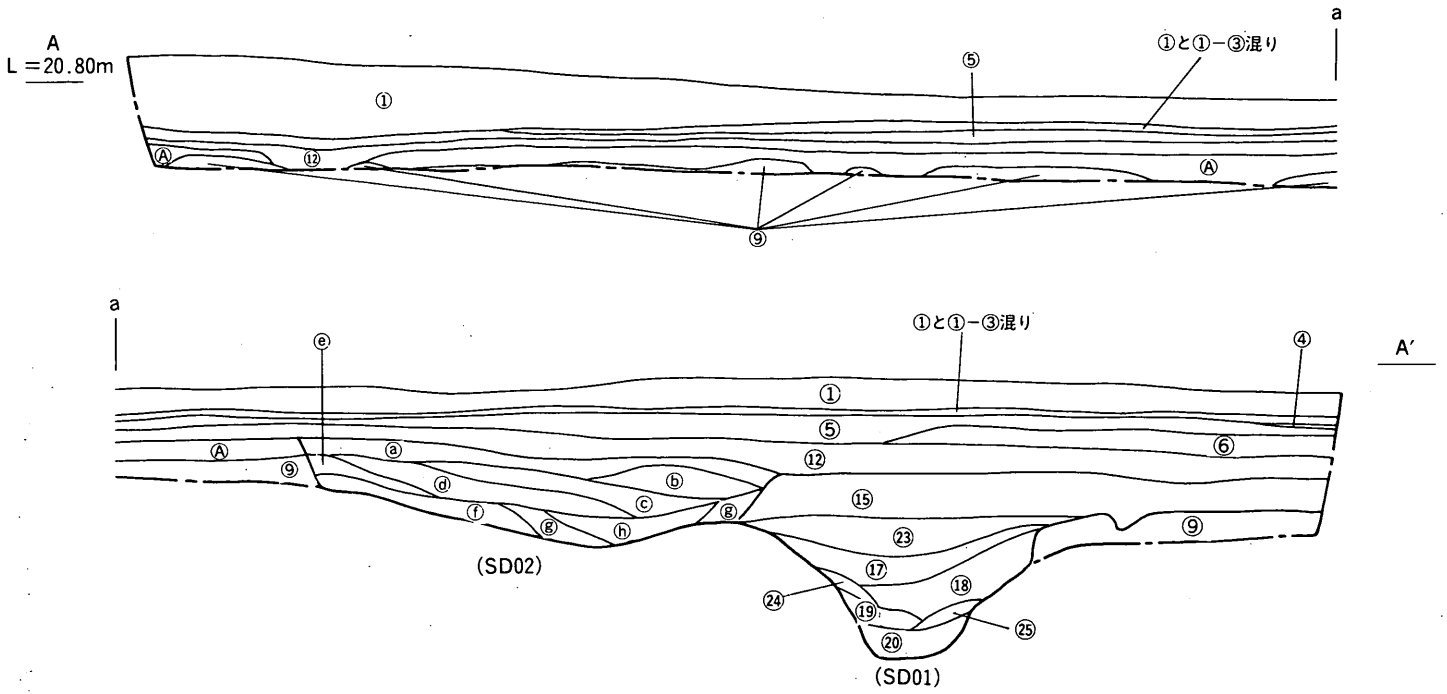
ＳＤ07　検出長38.80m・最大幅1.20m・深さ0.20mを測り，方向はＮ－61°30′－Ｅである。自然流路・ＳＤ06を切っている。東寄りの所に溜りが見られ中央に用途不明の枕木が検出されている。このことから年代は近代以降とすることができよう。

自然流路　不整形なかたちで検出されている。埋土はすべて砂で須恵器の小片が検出されている。南側から北側に流れていたことが推定されるが，北端では自然消滅している。

ＳＫ01　長辺1.40m・短辺0.75m・深さ0.25mを測る。埋土の色調から近代以降と推定されるが，遺物の出土はない。



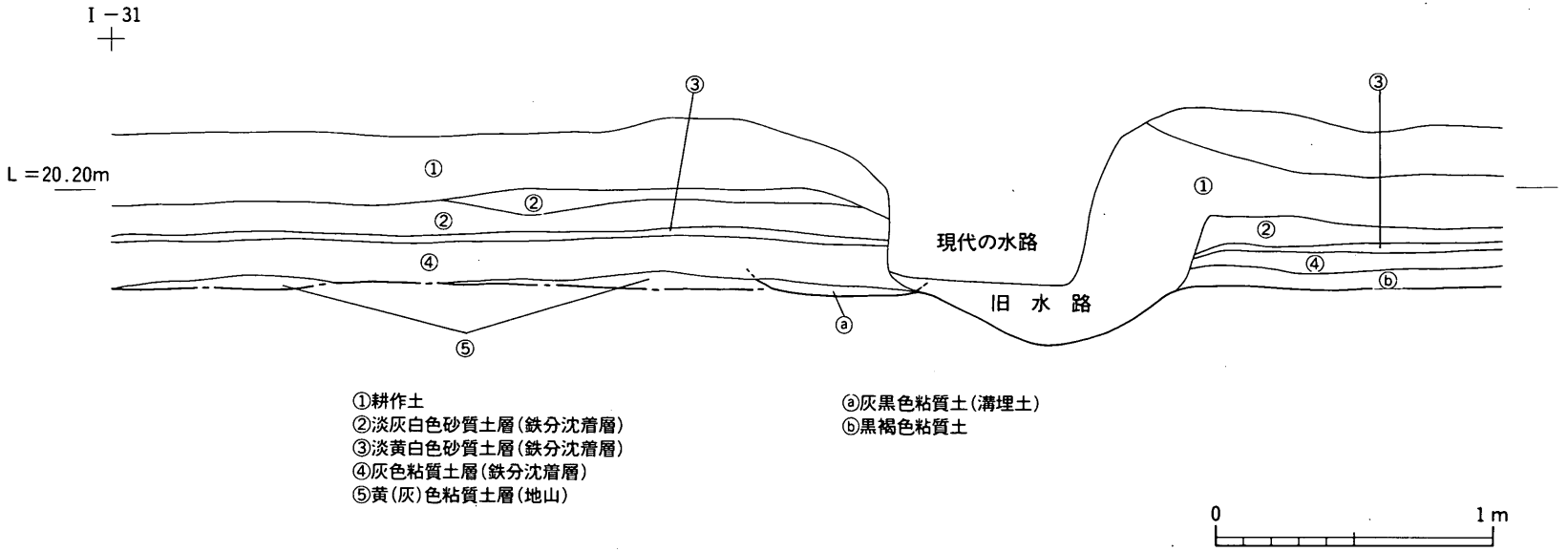
第18図　B_1地区ＳＤ01・02平面図



①耕作土
②淡灰白色砂質土層(鉄分沈着層)
③淡黄白色砂質土層(鉄分沈着層)
④灰色粘質土層(鉄分沈着層)
⑤灰色粘質土層
⑥灰黄色粘質土層
⑦灰黒色粘質土層
⑧灰白色粘質土層
⑨黄(灰)色粘質土層(地山)
⑩淡灰白色砂質土層(黄色が強い)
⑪汚灰白色砂質土層
⑫灰黄色砂質土層
⑬灰黄色粘質土層(⑥よりも粘質が強い)
⑭灰白色砂質土層(鉄分多し)
⑮淡灰黒色粘土(鉄分多し)
⑯灰黒色粘土(鉄分多し)
⑰黒色粘質土層
⑱黒色粘質土層(⑰より黒い)
⑲黒色砂質土層
⑳黒色砂質土層(⑲よりやや淡い)
㉑暗灰色粘質土層(黄味あり)
㉒汚淡灰黒色砂層(地山)
㉓淡黒色粘質土層
㉔黒色粘質土層(より黒い)
㉕灰白色粘質土層(より黒い)
Ⓐ黄灰色粘質土層
ⓐ淡灰白色砂質粘土
ⓑ淡灰色砂層
ⓒ灰色砂層(ⓓより灰色で細かい砂)
ⓓ灰色砂層(細かい砂)
ⓔ淡灰色砂層(細かい砂)
ⓕ淡灰白色砂層(細かい砂)
ⓖ灰色砂層(細砂)
ⓗ淡灰色砂層

0　1m

第19図　B₁地区ＳＤ01・02断面図



第20図　B_1・B_2地区ＳＤ03断面図

2）B_3地区の遺構

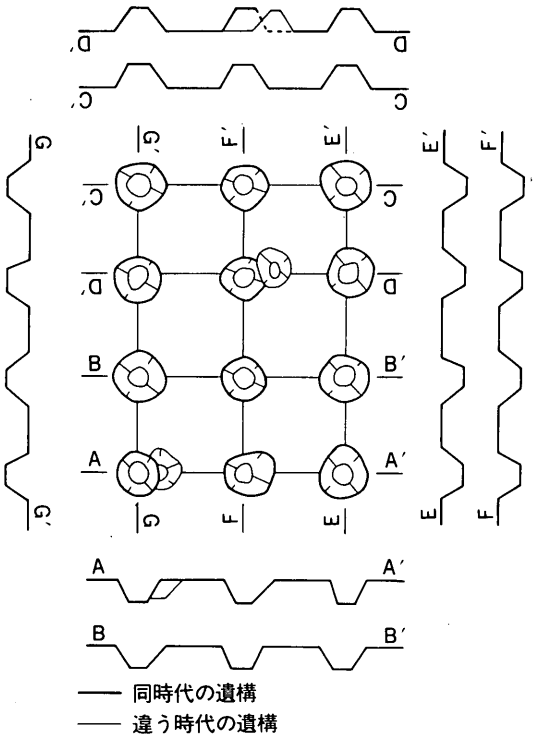
(1) 掘立柱建物

ＳＢ01　梁間２間（4.00m），桁行４間（9.00m），面積36m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－27°30′－Ｗを測る。柱間はほぼ均等で，2.00－2.25mになる。

柱穴は，一辺60cmの方形を呈するものに，径45cmの円形のものが混じる。深度は，深いもので45cmを測る。柱穴底面のレベルはまちまちで，ほとんどのものが平坦になるが，一部二段掘りになるものがある。この内径を基準にすれば，柱の径は約15cm程度と考えられる。

柱穴内に詰め石が見られるものや，柱の抜き取り穴が見られるものもある。

柱穴内からは，第57図１・２に示した土器が出土している。この内羽釜の出土状態は，建物廃棄にともなって入れられたものか，詰め石的な用途で用いられたかは判然としない。ＳＢ01の年代は，この羽釜から見て平安時代の前半から中頃と考えられる。



第21図　掘立柱建物模式図

ＳＢ02　梁間２間（3.40m），桁行４間（6.25m），面積21.25m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－24°30′－Ｗを測る。柱間はほぼ均等で，1.56－1.70mになる。

柱穴は，径50－90cmの円形を呈する。深度は，深いもので70cmを測る。柱穴底面のレベルはまちまちで，平坦面をなすものが多い。また二段掘りのものが見られ，内径から見て柱の推定径は17.5cmである。

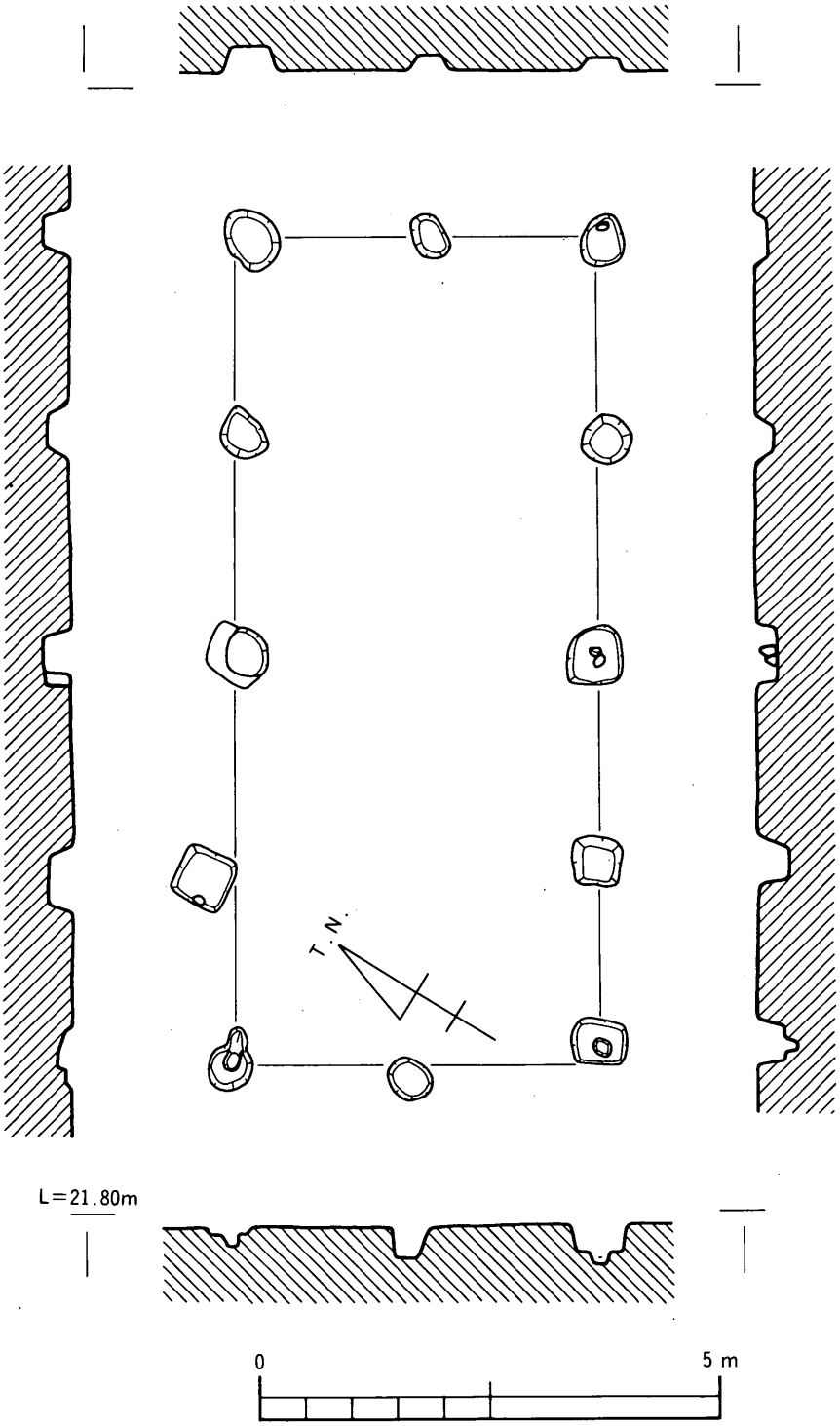
柱穴内からは，第57図３－６に示した弥生土器が出土したが，年代の特定にはならない。

ＳＢ03との間に切り合い関係があり，柱穴の切り合いからＳＢ03より後出すると考えられる。

ＳＢ03　梁間２間（3.70m），桁行３間（5.90m），面積21.83m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－27°－Ｗを測る。また，南桁行側に１間幅の廂が見られる。柱間はほぼ均等で，1.85－1.97mになる。

柱穴は，径60cmの隅丸方形・不整形な方形を呈する。深度は，深いもので65cmを測る。柱穴底面のレベルはまちまちで，平坦面をなすものが多い。

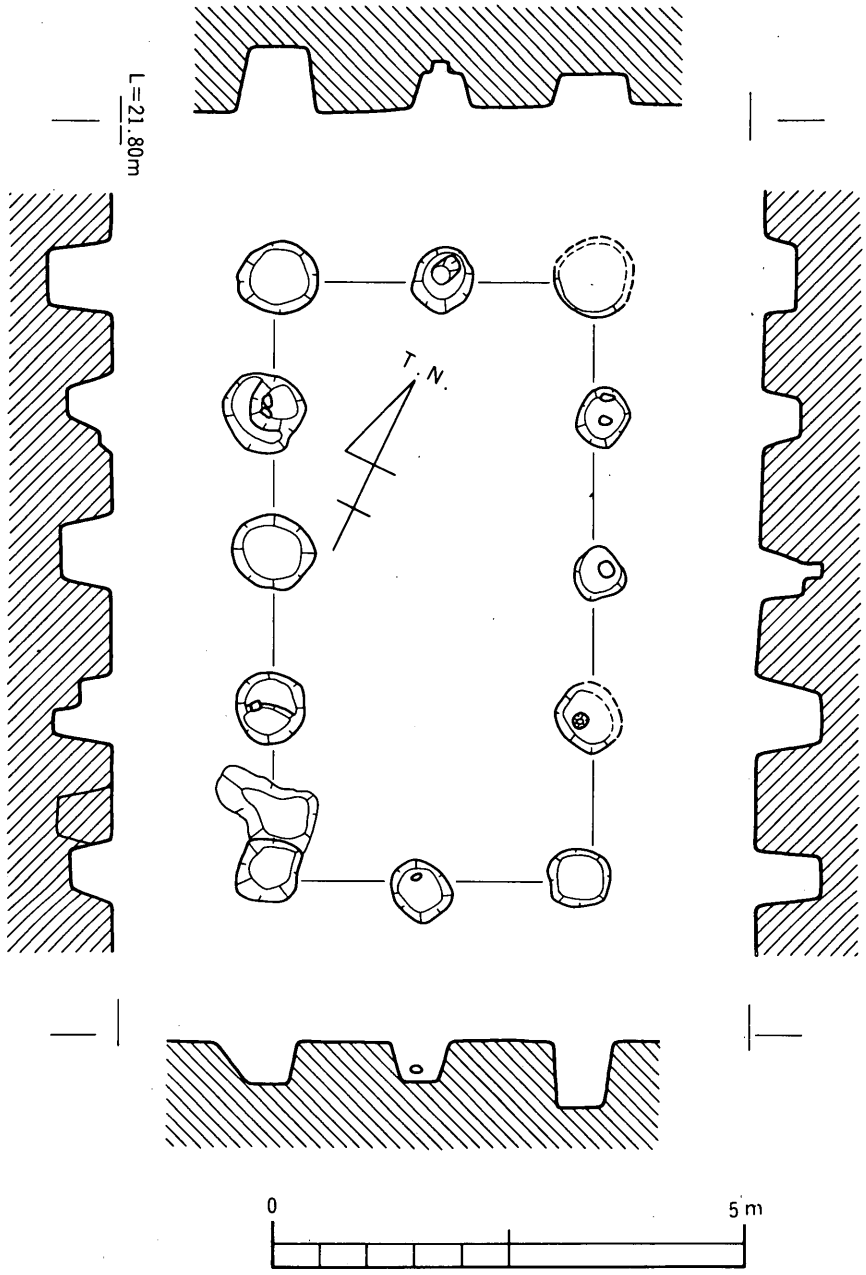
柱穴内からは，第57図７－12に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀の中葉に位置付けられる。



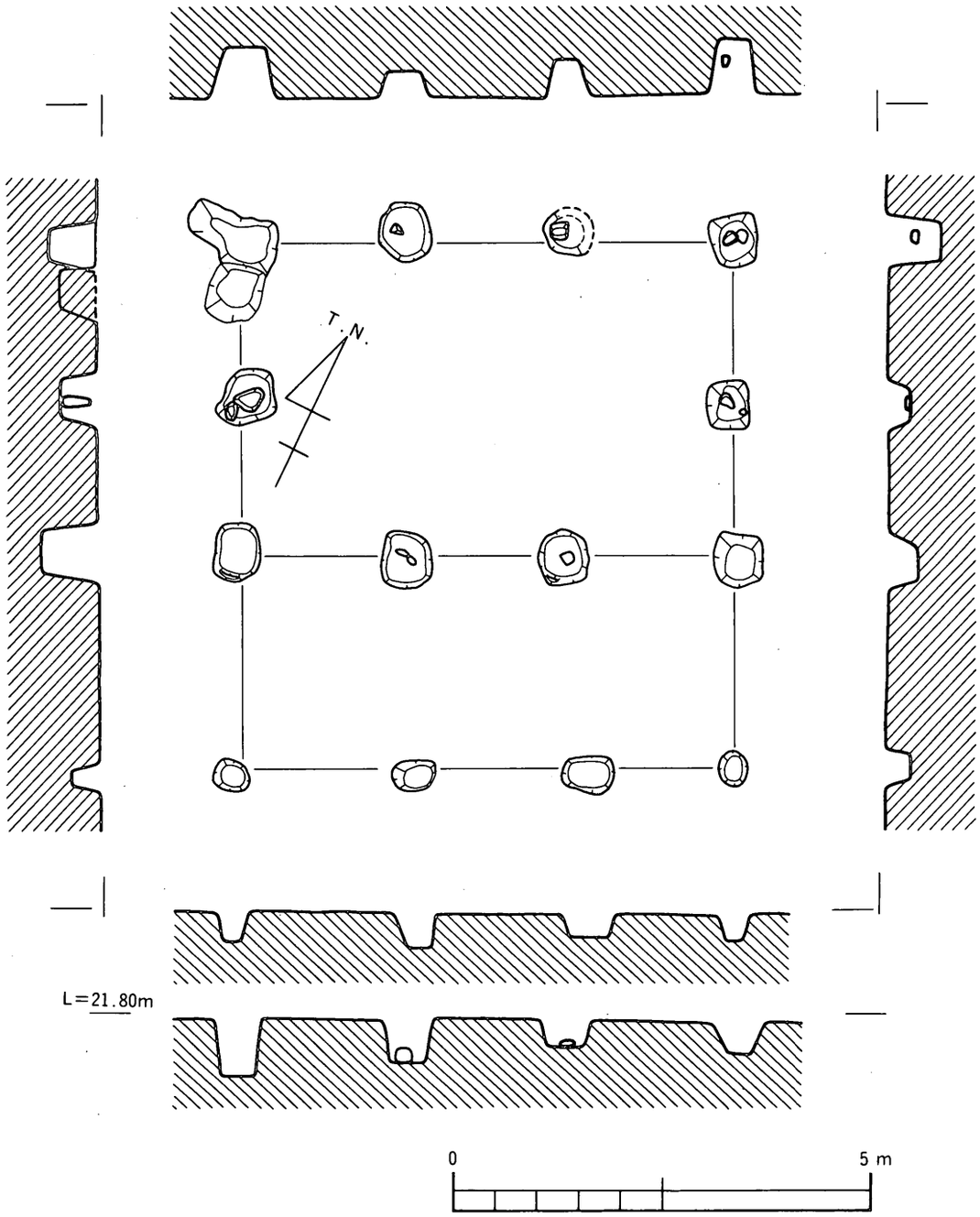
第22図　ＳＢ01実測図

廂は南桁行から2.55m離れて，南桁行の柱穴に対応して３間幅を測る。柱間は1.90－2.00mで，柱穴は建物よりも小形の径35－60cmを測る円形・楕円形を呈する。

ＳＢ02との間に切り合い関係があり，ＳＢ02に先行すると考えられる。



第23図　ＳＢ02実測図

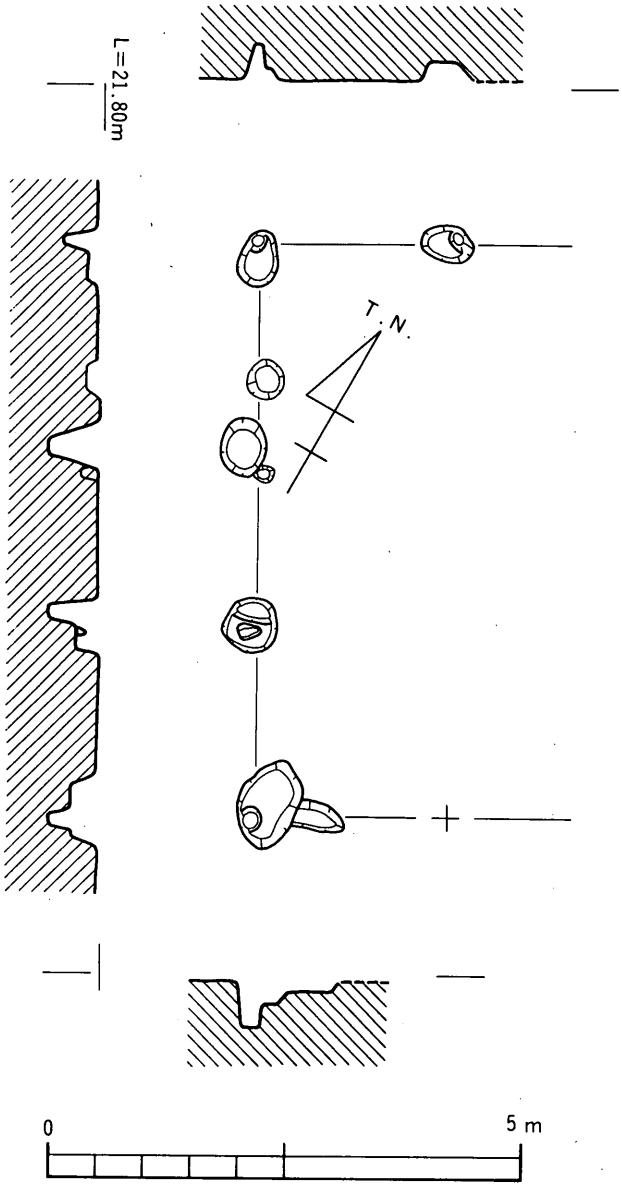


第24図　ＳＢ03実測図

ＳＢ04　建物全体は検出されなかったが，現状で梁間１間（2.00m），桁行３間（6.05m）を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－30°－Ｗを測る。柱間はほぼ均等で，2.00－2.02mになる。柱穴は，径55－70cmの円形を呈する。深度は，深いもので55cmを測る。柱の推定径は12.5cm前後で，抜き取り穴も見られる。

他の掘立柱建物との比較から，２間×３間の可能性が高い。

ＳＢ05と重複するが，柱穴の切り合いが見られず先後関係は不明である。

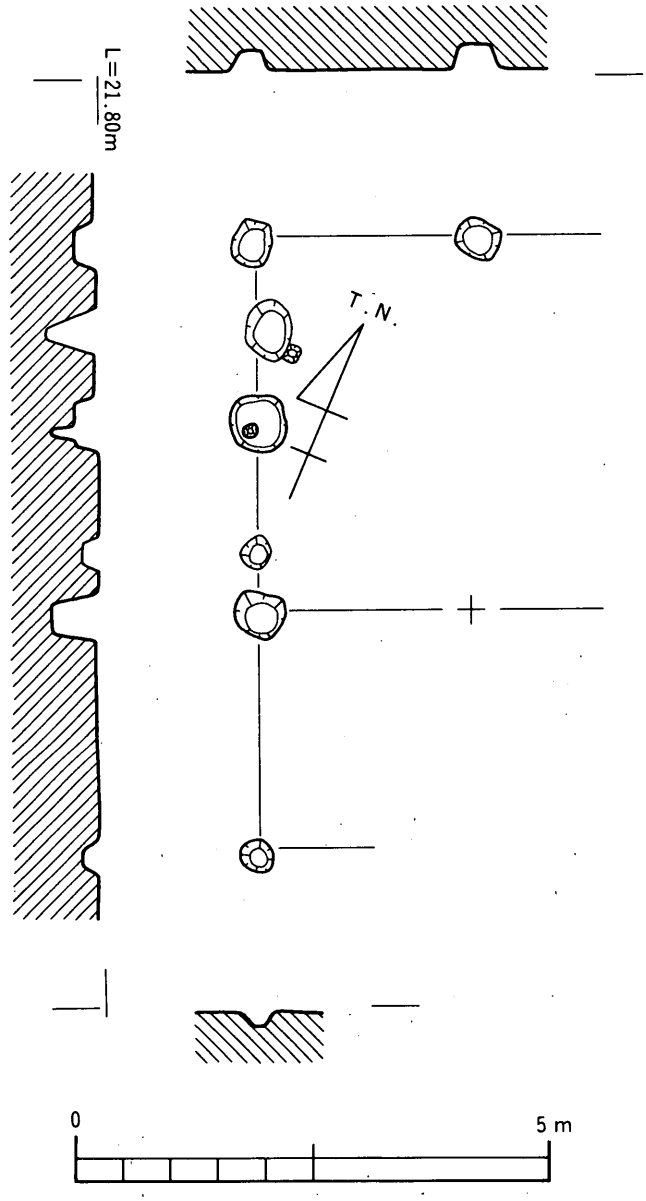


第25図　ＳＢ04実測図

ＳＢ05　建物全体は検出されなかったが，現状で梁間２間（3.90m），桁行１間（2.35m）を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－26°－Ｗを測る。また，南桁行側に廂の一部と想定される柱穴が１穴見られる。柱間は，1.95－2.35mになる。

柱穴は，径50－60cmの円形を呈する。深度は，深いもので53cmを測る。柱穴底面のレベルはまちまちで，平坦面をなす。

廂は，南桁から2.5m離れて西梁間延長上に１穴見られるのみで，柱穴の規模は径35cmを測る。ＳＢ04と重複するが，柱穴の切り合いが見られず先後関係は不明である。



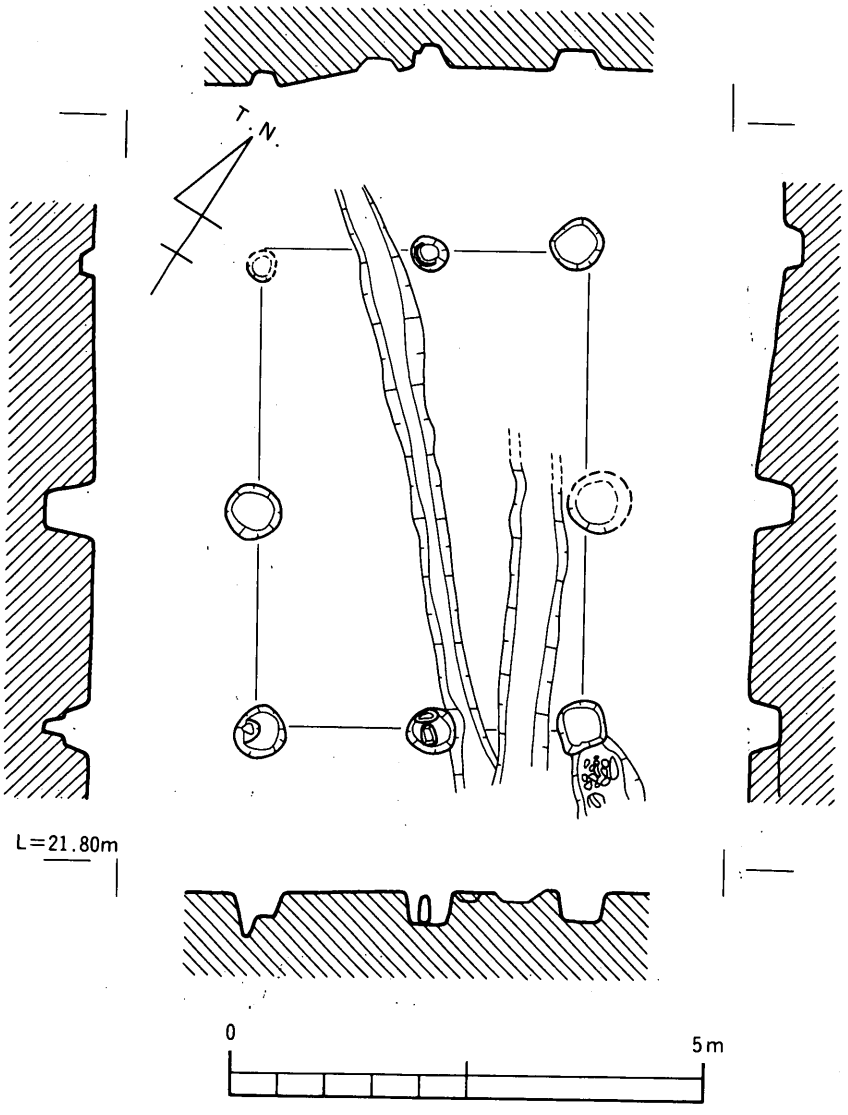
第26図　ＳＢ05実測図

ＳＢ06　梁間２間(3.45m)，桁行２間(5.05m)，面積17.42m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－34°30′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.72m，桁行で2.52mを測る。

柱穴は，径40－60cmの円形を呈する。深度は，深いもので50cmを測る。柱の推定径は12.5cmである。

柱穴の内２穴は他と比較して小形であり，掘立柱建物を復元するうえで示唆に富む資料といえよう。

ＳＤ14を切っており，ＳＤ14より後出する。



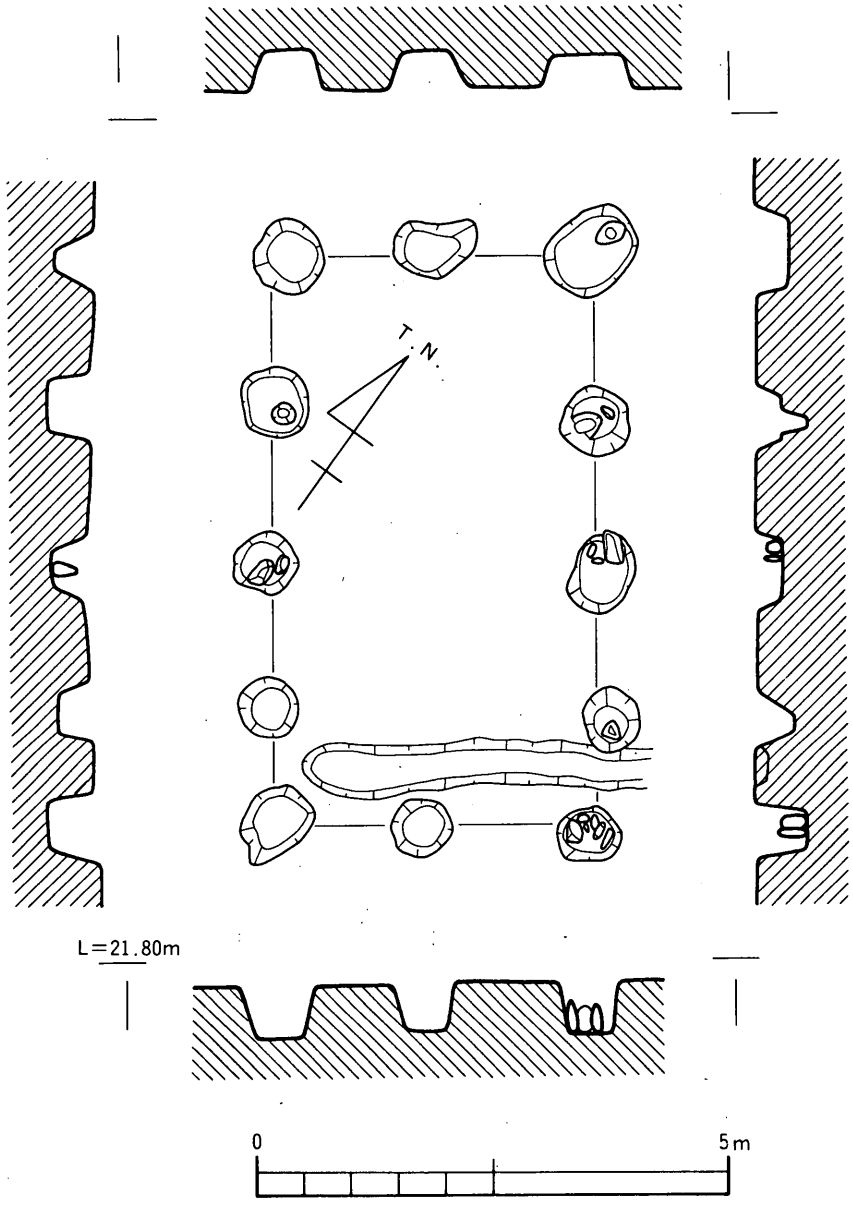
第27図　ＳＢ06実測図

ＳＢ07　梁間２間（3.40m），桁行４間（6.00m），面積20.40m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－32°20′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.70m，桁行で1.50mを測る。

柱穴は，径60－80cmの円形を呈する。深度は，深いもので55cmを測る。柱の推定径は12.5cmである。柱穴内に詰石が多く見られる。

柱穴内からは，第58図13－22に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀中葉に位置付けられる。

ＳＤ17を切っており，ＳＤ17より後出する。

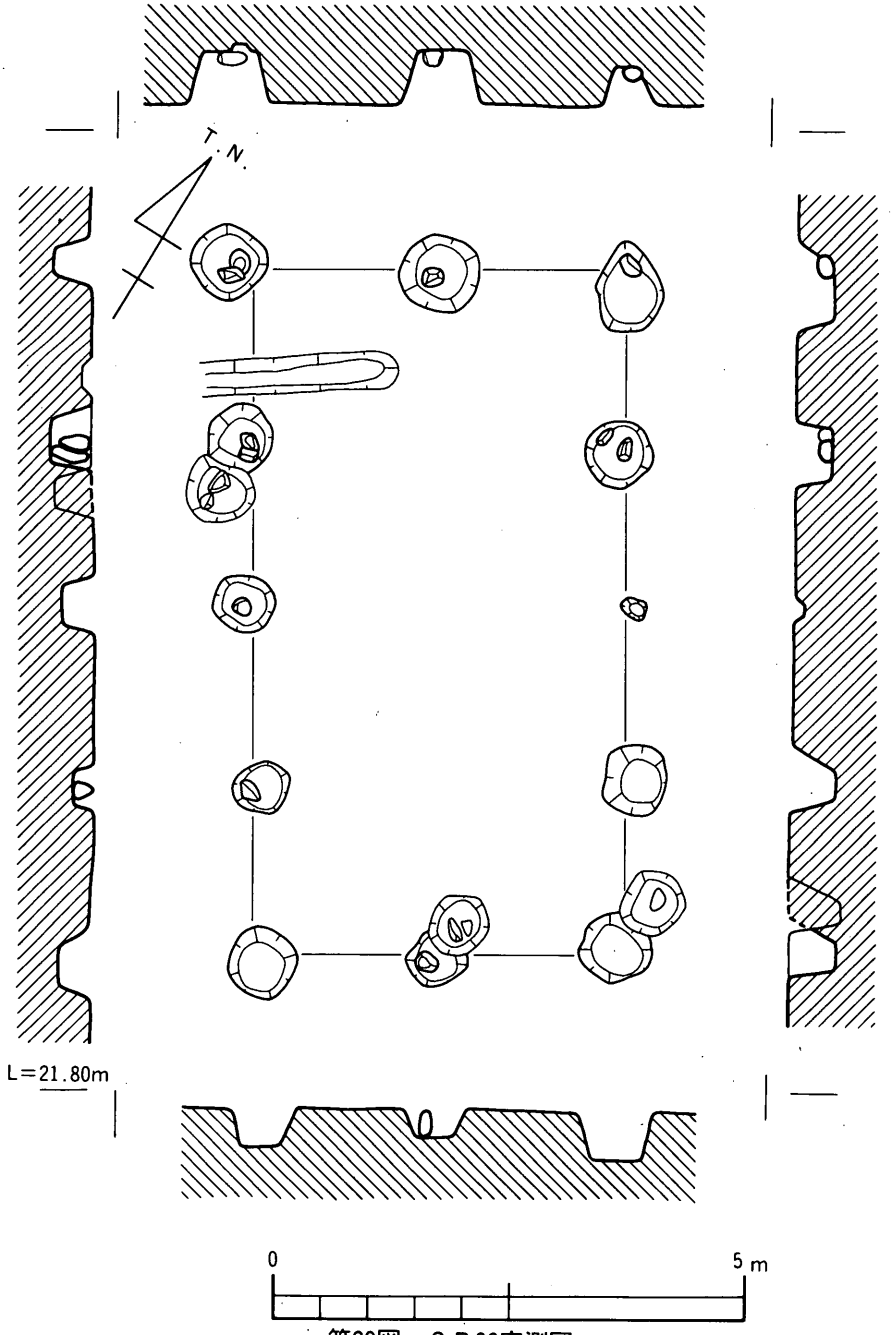


第28図　ＳＢ07実測図

ＳＢ08　梁間２間（3.95m），桁行４間（7.25m），面積28.64m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－32°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.98m，桁行で1.81mになる。

柱穴は，径55－80cmで円形および隅丸方形を呈する。ただ，東桁の中心柱穴は径25cm，深さ10cmを測り，他の柱穴に比べて極端に小さく特異である。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は17.5cmである。四隅に位置する柱穴が他と比べてやや大きい。

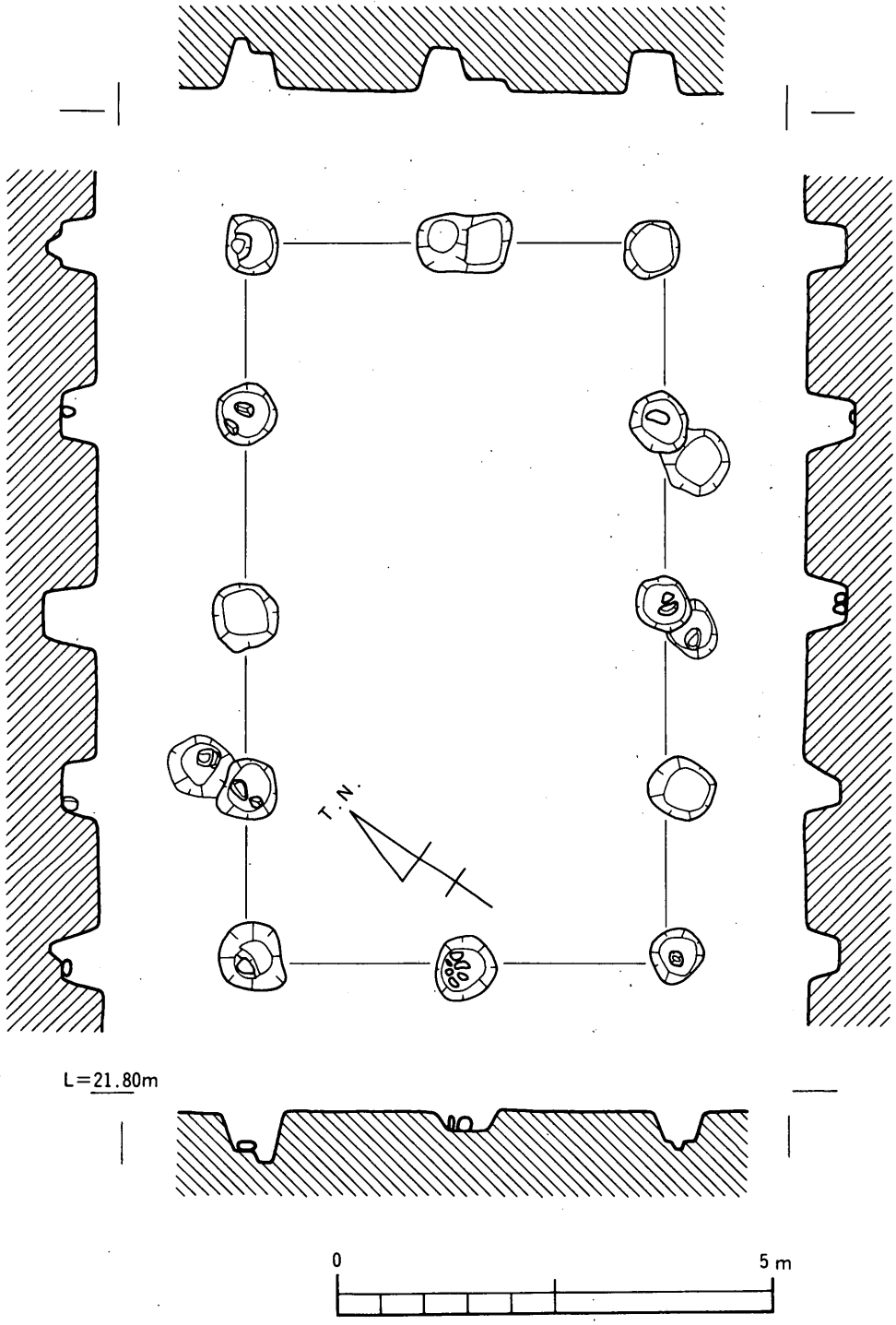
柱穴内からは，第58図23－28に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀中葉に



第29図　ＳＢ08実測図

位置付けられる。

ＳＢ09を切っており，ＳＢ09より後出する。しかし，ＳＢ09の柱穴を２穴共有しており建て替えと考えられる。



第30図　ＳＢ09実測図

ＳＢ09　梁間２間（4.80m），桁行４間（8.25m），面積39.60m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－34°50′－Ｗを測る。柱間は梁間で2.40m，桁行で2.06mになる。

柱穴は，ほぼ均等に径65cmで，深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は15cmである。

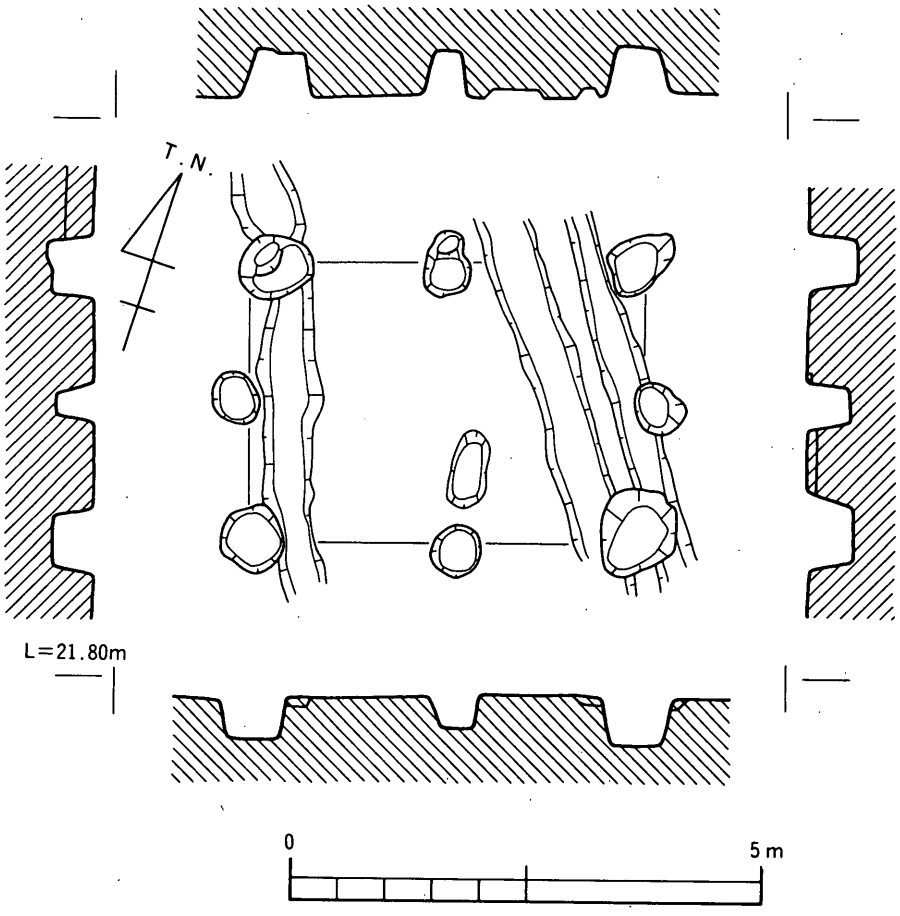
柱穴内からは，第58図29－32に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＢ08に切られており，ＳＢ08より先行する。

ＳＢ10　梁間２間（2.95m），桁行２間（4.20m），面積12.39mを測る。この一群のなかでは小形の部類に属する建物である。建物主軸は，梁間方向でＮ－13°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.48m，桁行で2.10mになる。　柱穴は，径50－80cmで深度は，深いもので50cmを測る。この建物でも四隅に位置する柱穴が大きい。

柱穴内からは，第59図33－41に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀後半から末に位置付けられる。

ＳＤ15・16を切っており，ＳＤ10・12に切られている。



第31図　ＳＢ10実測図

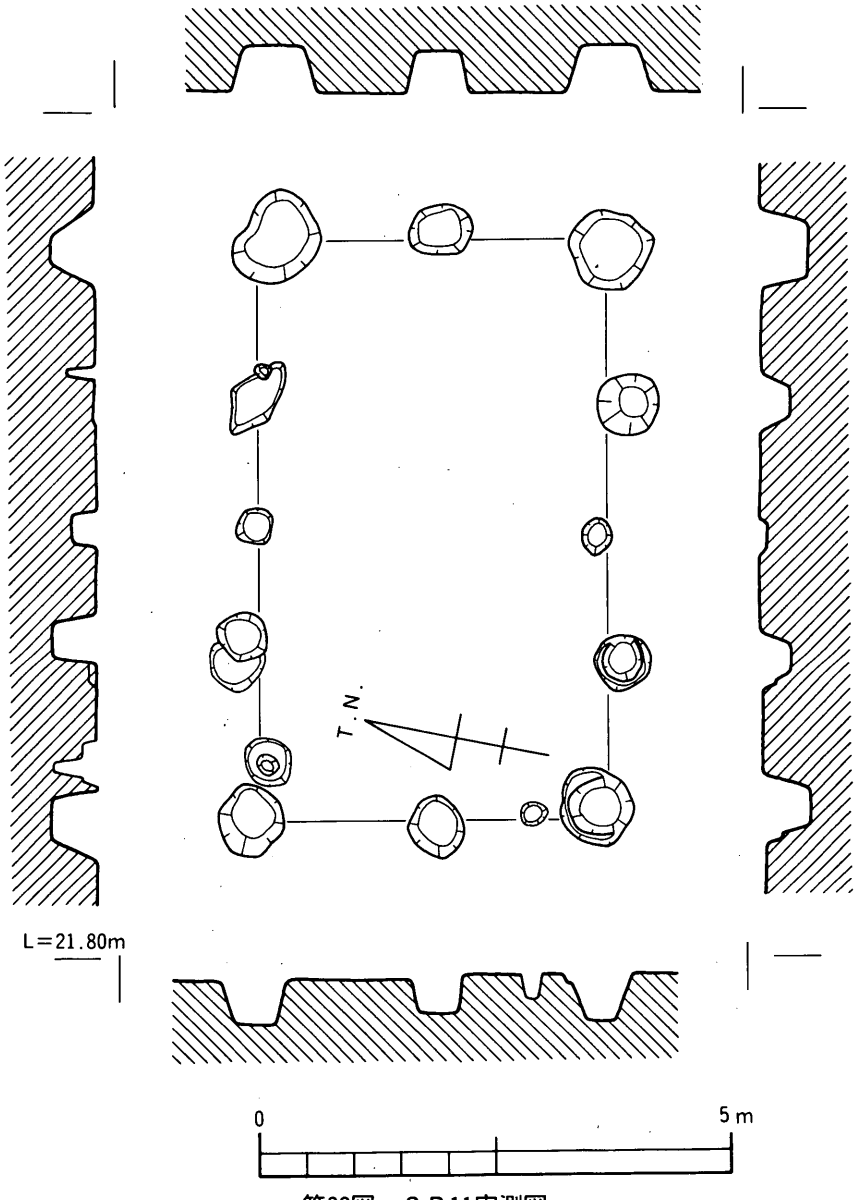
ＳＢ11　梁間２間（3.70m），桁行４間（6.10m），面積22.57m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－8°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.85m，桁行で1.53mになる。

柱穴は，径50－100cmで深度は，深いもので50cmを測る。ただ，桁行の中央に位置する柱穴は２穴とも径40cm，深さ7.5－25cmと小形である。

柱穴内からは，第59図42－48に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀後半から末に位置付けられる。

ＳＢ12に切られており，ＳＢ12より先行する。

ＳＢ12　梁間２間（2.90m），桁行２間（5.45m），面積15.81m²を測る。東桁行では中心の柱穴が見当たらず，北よりに小柱穴がある。ただ，この小柱穴が掘立柱建物を構成する柱穴かどうか



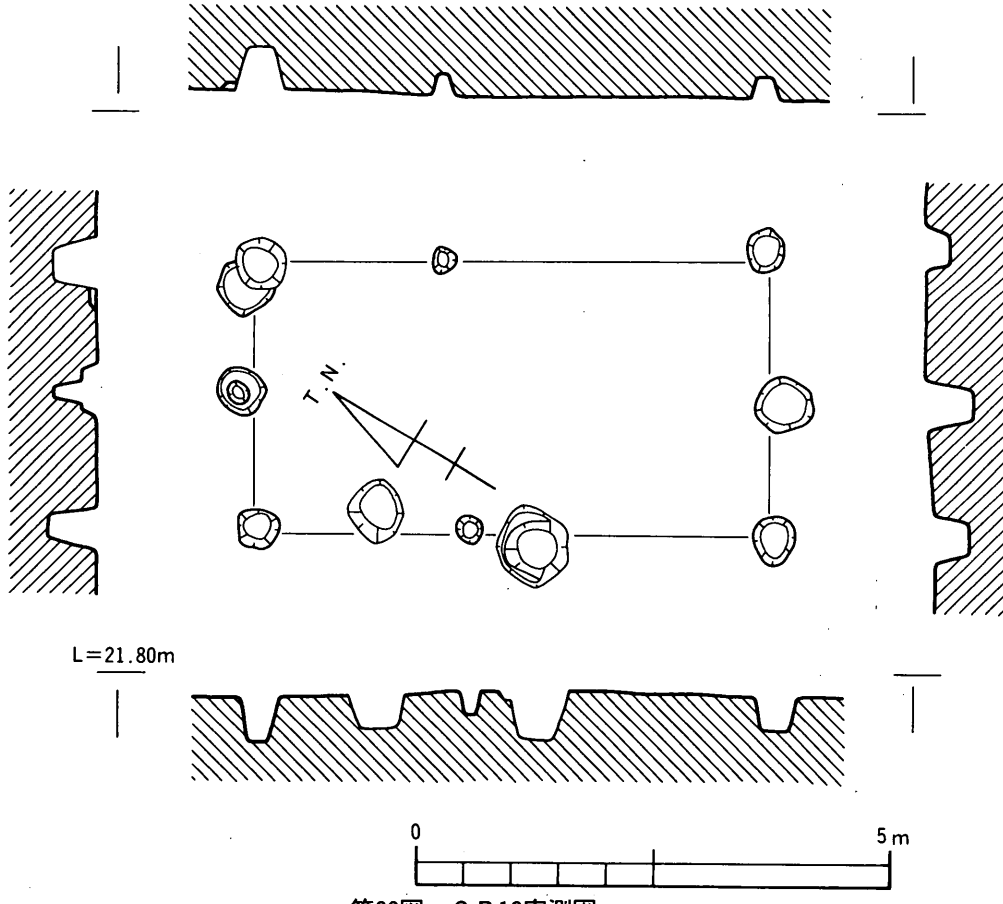
第32図　ＳＢ11実測図

は不明である。建物主軸は，桁行方向でN－27°－Wを測る。柱間は梁間で1.45m，桁行で2.73mになる。

柱穴は，径40－75cmで円形を呈する。深度は，深いもので50cmを測り，柱の推定径は12.5cmである。

他に柱穴が存在しないため，一応2間×2間の建物としておくが，通常規模から考えて2間×3間が想定されよう。

ＳＢ11を切っており，ＳＢ11より後出する。



第33図　ＳＢ12実測図

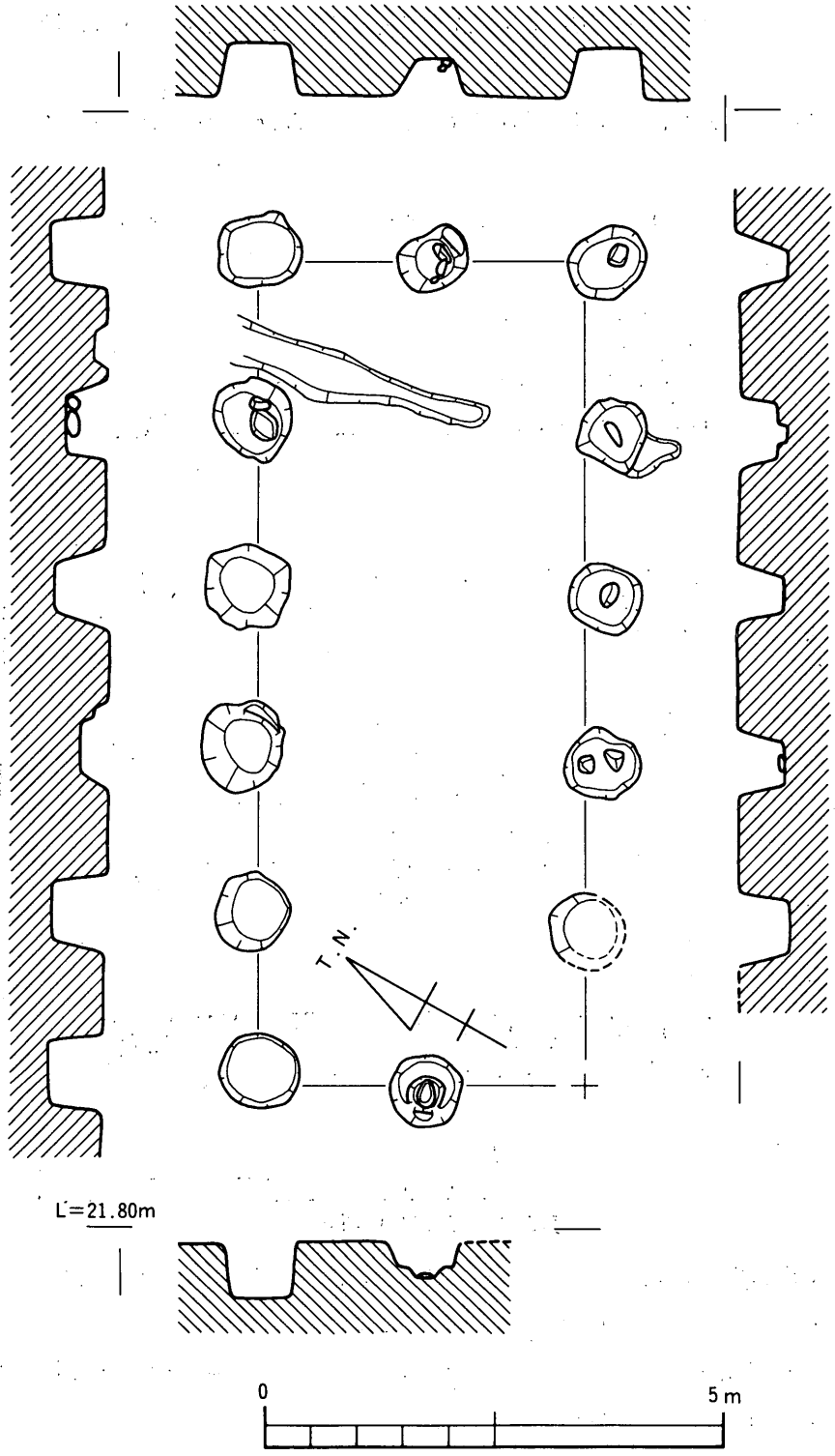
ＳＢ13　梁間2間（3.55m），桁行5間（8.95m），面積31.77m²を測る。建物主軸は，梁間方向でN－30°－Wを測る。柱間は梁間で1.78m，桁行で1.79mになる。

柱穴は，径60－90cmを測り円形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は22.5cmである。柱穴内には，詰め石が多く見られる。

調査区南辺で検出したが，周辺と比較して大形の建物である。

柱穴内からは，第59図49－50に示した土器が出土した。

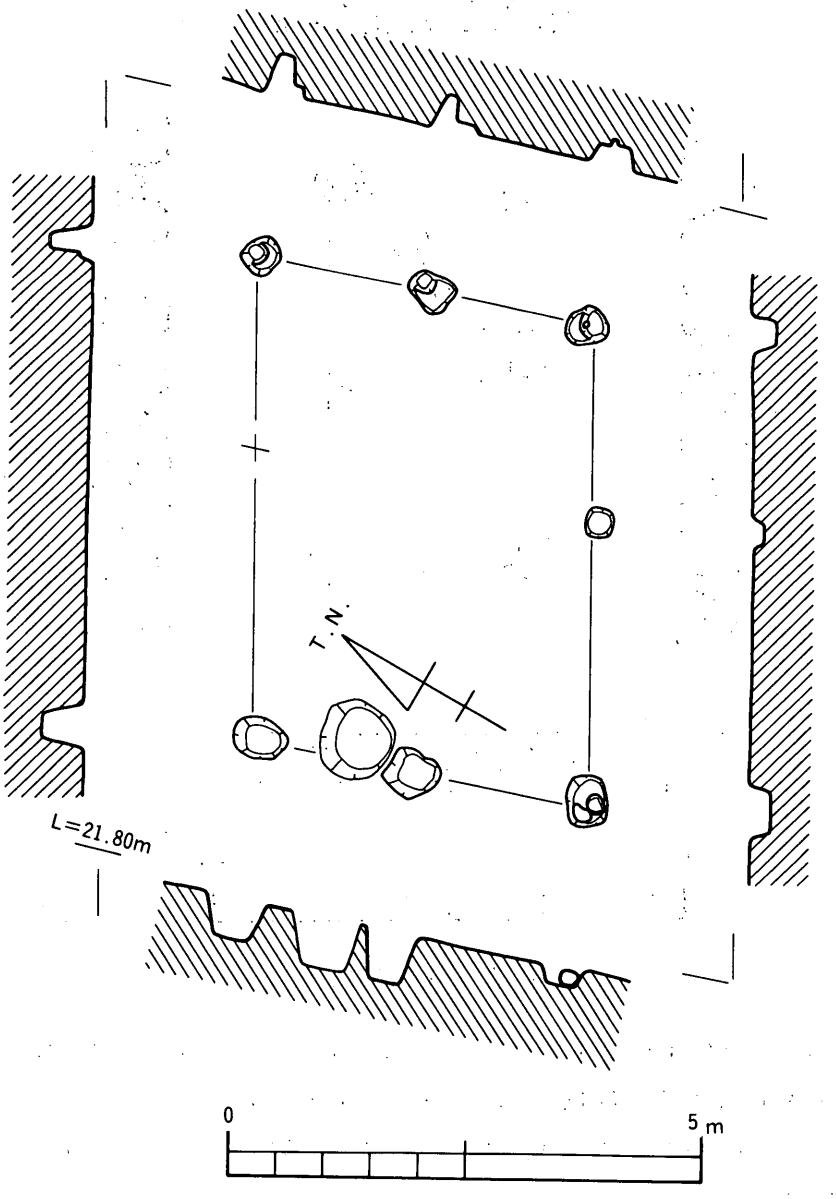
ＳＤ15を切っており，ＳＤ15より後出する。



第34図　ＳＢ13実測図

ＳＢ14　梁間２間（3.65m），桁行２間（5.10m），面積18.62m²を測る。全体形状は長方形にはならず平行四辺形状を呈し，北桁行の中央柱が欠落している。また，南桁行の中央柱もやや東へ偏っている。建物主軸は，梁間方向でＮ－18°40′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.83m，桁行で平均2.55mになる。

柱穴は，径30－55cmで円形を呈する。深度は，深いもので55cmを測り，柱の推定径は15cmである。ＳＢ13の上部に重なっており，柱穴がＳＢ13を切っていることからＳＢ13より後出する。また同じく重複するＳＢ15との間に共有する柱穴があるが，先後関係は不明である。

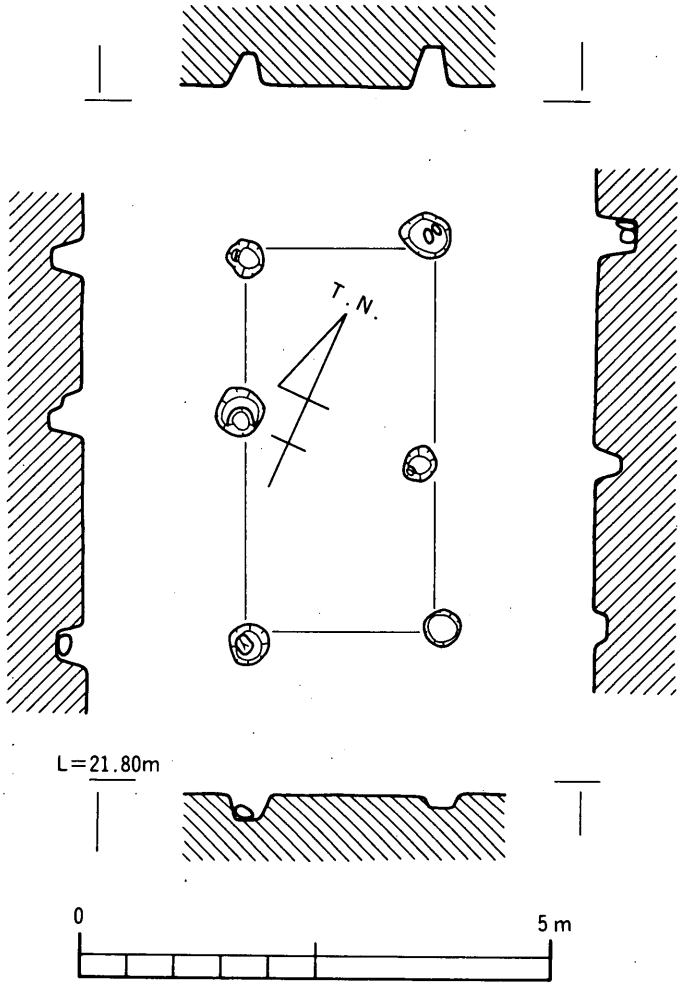


第35図　ＳＢ14実測図

ＳＢ15　梁間１間（2.00m），桁行２間（4.00m），面積8m²を測る。東西両桁行とも中央の柱が桁行の中央には位置しない。建物主軸は，梁間方向でＮ－24°30′－Ｗを測る。柱間は梁間で2.00m，桁行で1.75m及び2.25mになる。

柱穴は，径35－55cmで円形を呈する。深度は，深いもので43cmを測り，柱の推定径は17.5cmである。

ＳＢ14との間に共有する柱穴が見られる。

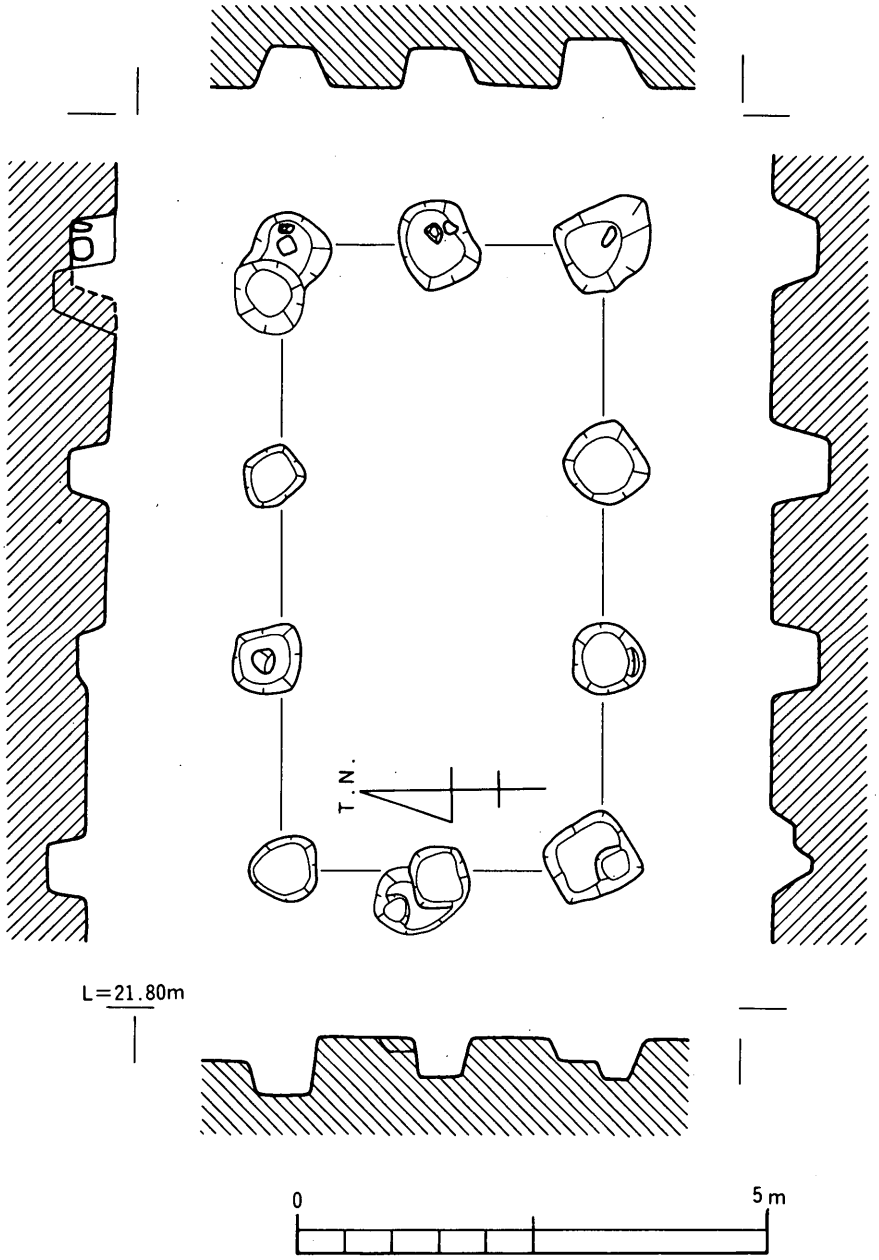


第36図　ＳＢ15実測図

ＳＢ16　梁間２間（3.40m），桁行３間（6.60m），面積22.44m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－0°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.70m，桁行で2.20mになる。

柱穴は，径65－90cmで円形および隅丸方形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は27.5cmである。

ＳＢ17に切られており，ＳＢ17より先行する。なお，東梁の三穴はＳＢ17と共有する。



第37図　ＳＢ16実測図

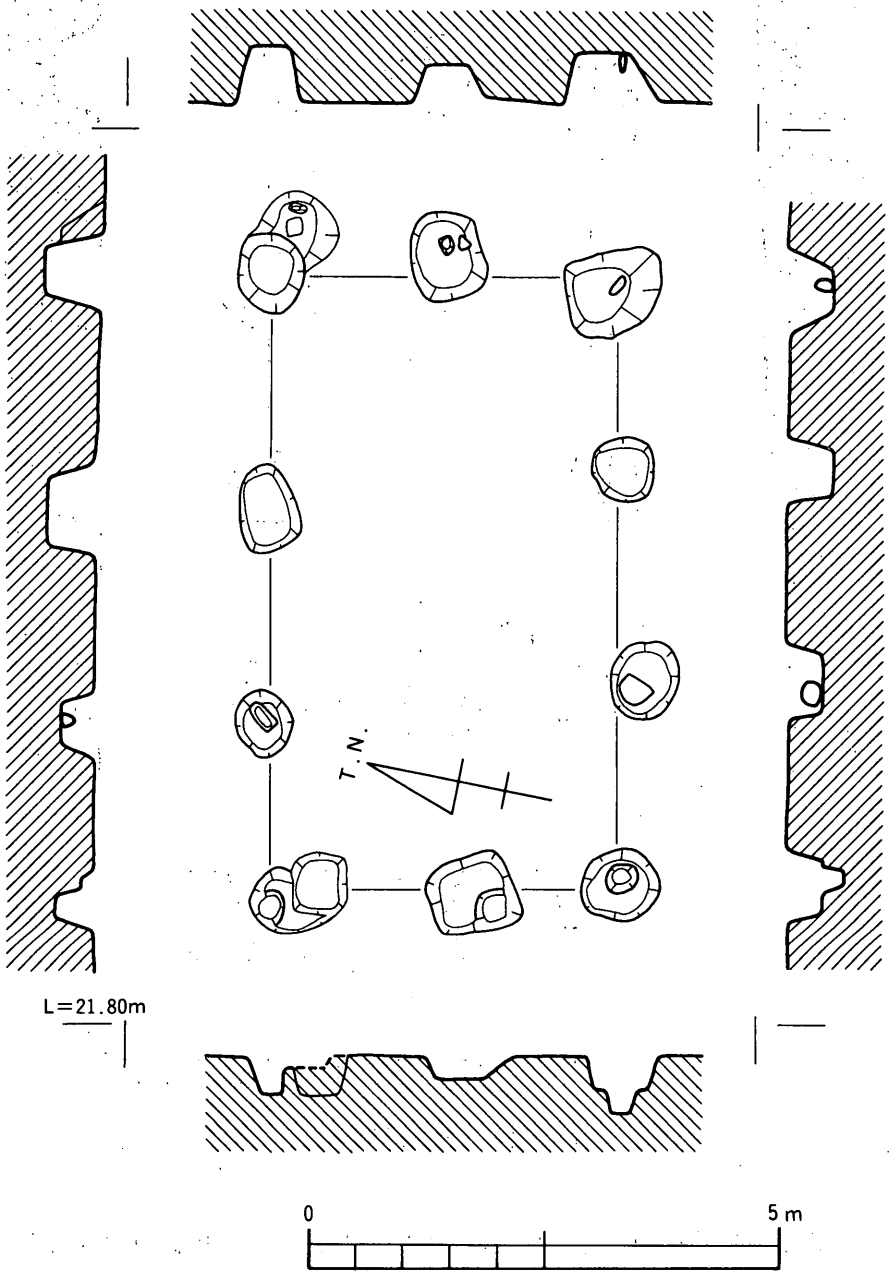
ＳＢ17　梁間２間（3.65m），桁行３間（6.40m），面積23.36mを測る。建物主軸方向は，梁間方向でＮ－12°－Ｗを測る。柱間は梁間方向で1.83m，桁行で2.13mになる。

柱穴は，径70－90cmで円形および隅丸方形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は15－25cmである。

柱穴内からは，第59図51－53に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀代に位

置付けられる。

ＳＢ16を切っており，ＳＢ16より後出する。東梁の三穴はＳＢ16の柱穴を利用しており，建て替えと考えられる。



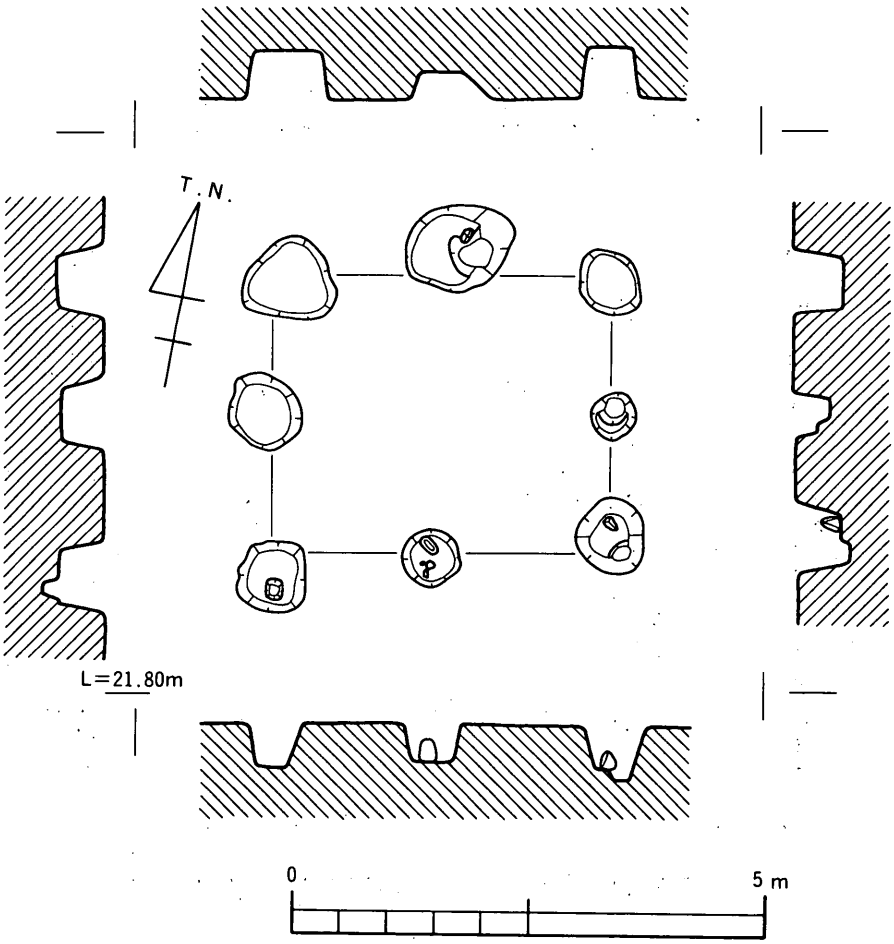
第38図　ＳＢ17実測図

ＳＢ18　梁間２間(2.95m)，桁行２間(3.60m)，面積10.62m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－90°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.48m，桁行で1.80mになる。

柱穴は，径50－110cmで円形および隅丸方形を呈する。深度は，深いもので58cmを測り，柱の推定径は17･5cmである。

この建物も小形の部類に属し，構成する柱穴が不揃いなのが特徴である。

柱穴内からは，第59図54－56に示した土器が出土した。

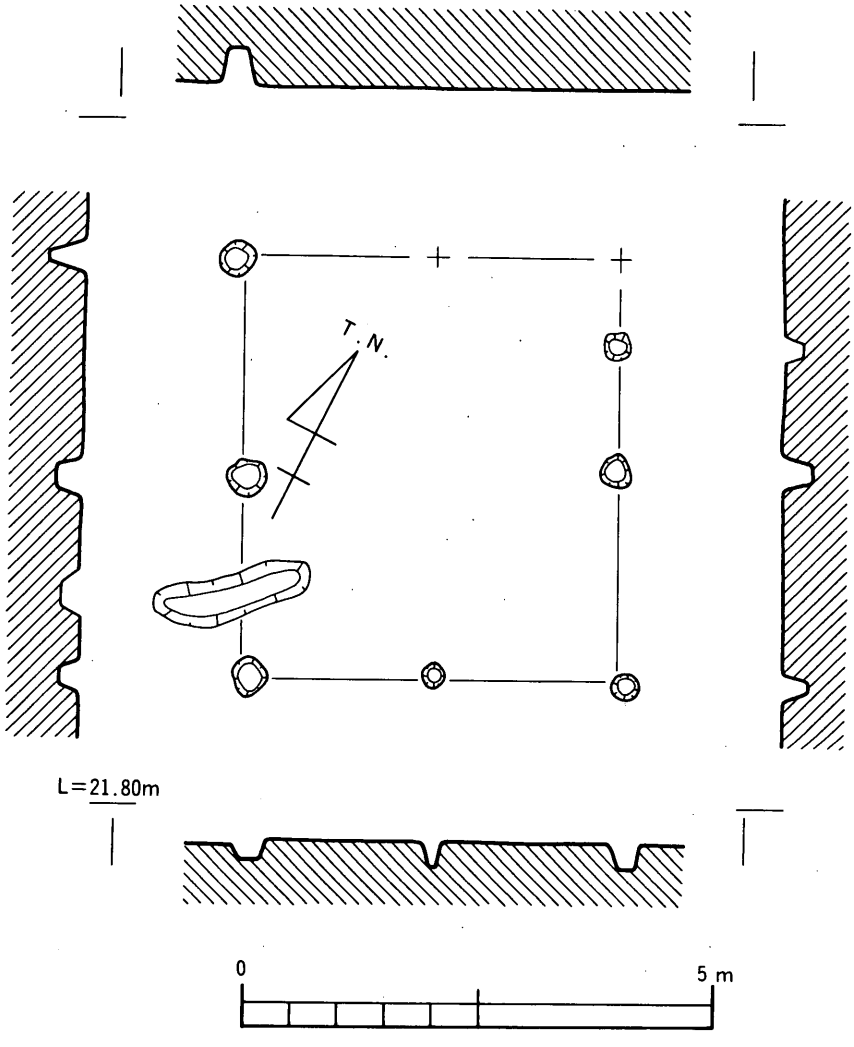


第39図　ＳＢ18実測図

ＳＢ19　梁間２間（4.00m），桁行２間（4.40m），面積17.60m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－28°30′－Ｗを測る。柱間は梁間方向で2.00m，桁行で2.20mになる。

柱穴は，径25－40cmで円形を呈する。深度は，深いもので35cmを測り，柱の推定径は10cmである。

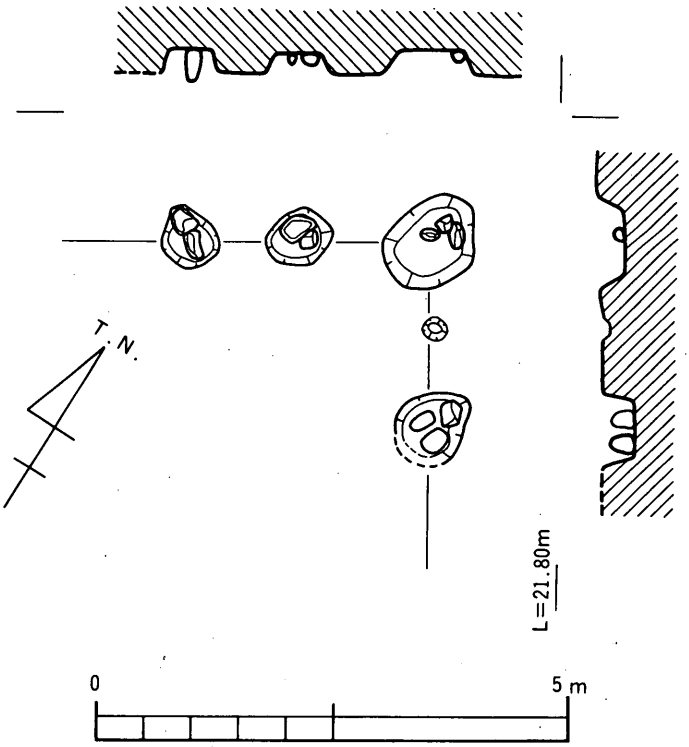
間数は２間×２間と他の例もあるが，ほぼ正方形に近いこと，柱穴が小形であること等，他に例を見ない。



第40図　ＳＢ19実測図

ＳＢ20　完全には検出されなかったが，現状では梁間１間（2.00m）以上，桁行２間（2.50m）以上を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－28°30′－Ｗを測る。柱間は梁間で2.00m，桁行で1.25mになる。ただ建物の方向によっては，梁間・桁行が逆になる場合もありえる。また，梁間の中央に径25cm程度の柱穴が見られるが，この建物には伴わないとして考えている。

柱穴は，径35－95cmで円形を呈する。深度は，深いもので33cmを測る。柱穴内には，詰め石が多く見られる。

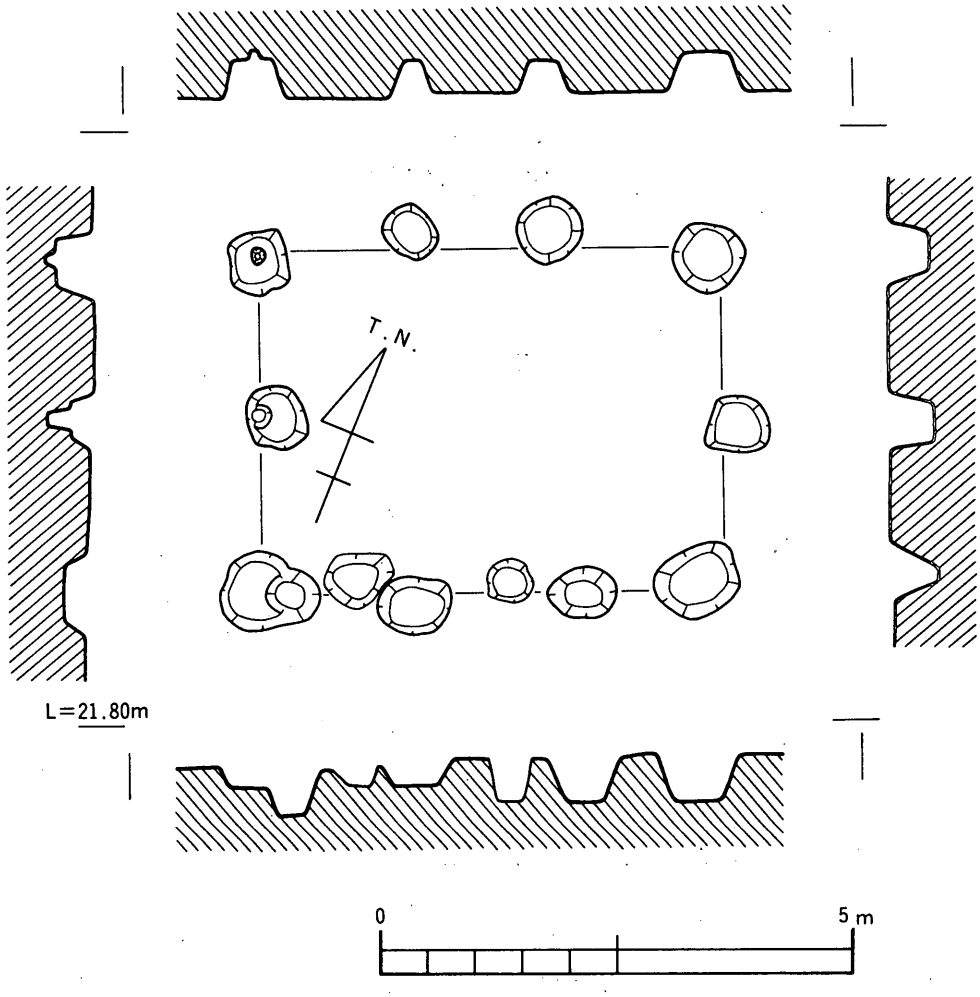


第41図　ＳＢ20実測図

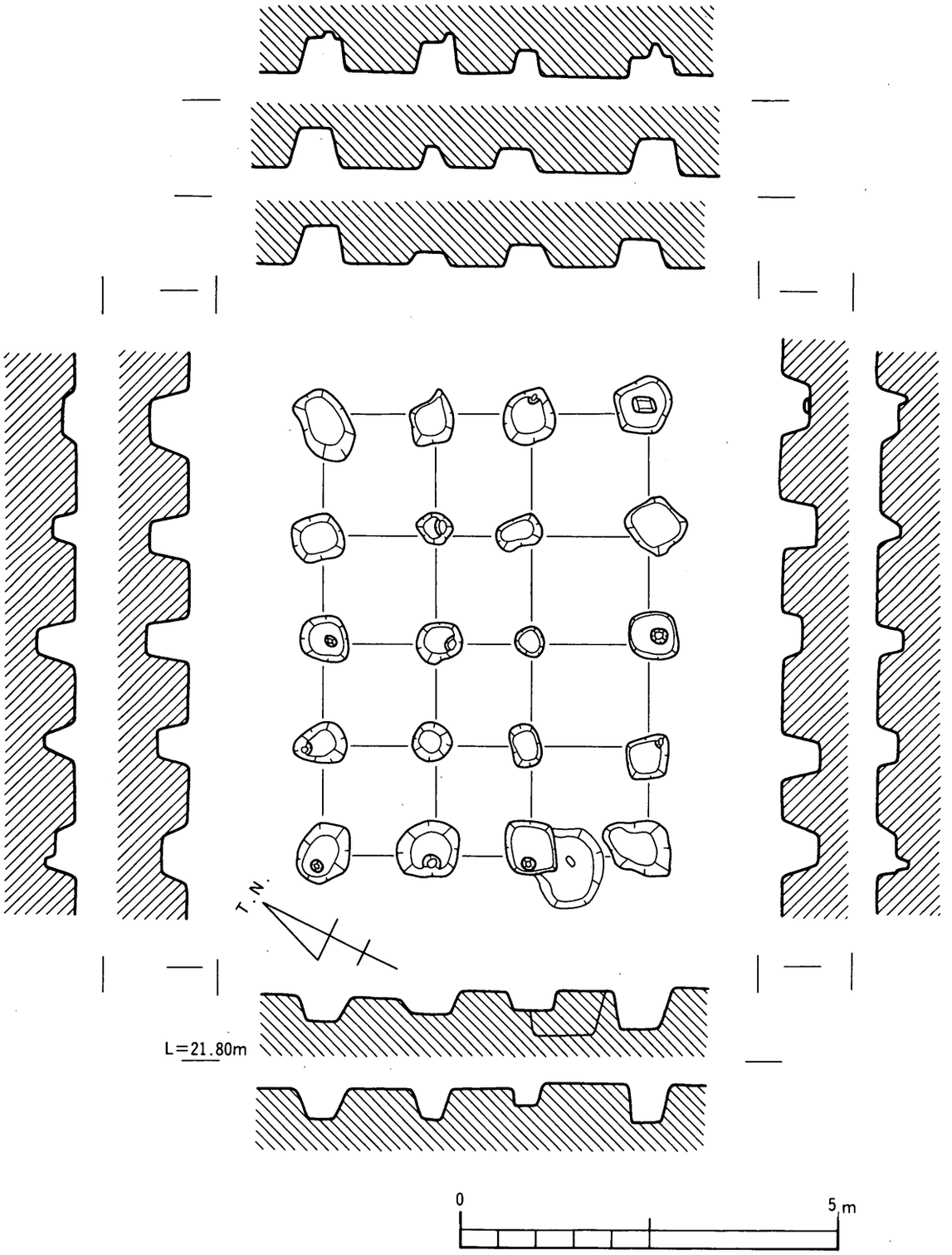
ＳＢ21　梁間２間（3.60m），桁行３間（4.90m），面積17.64m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－22°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.80m，桁行で1.63mになる。

柱穴は，径60－105cmで円形および隅丸方形を呈する。深度は，深いもので50cmを測る。

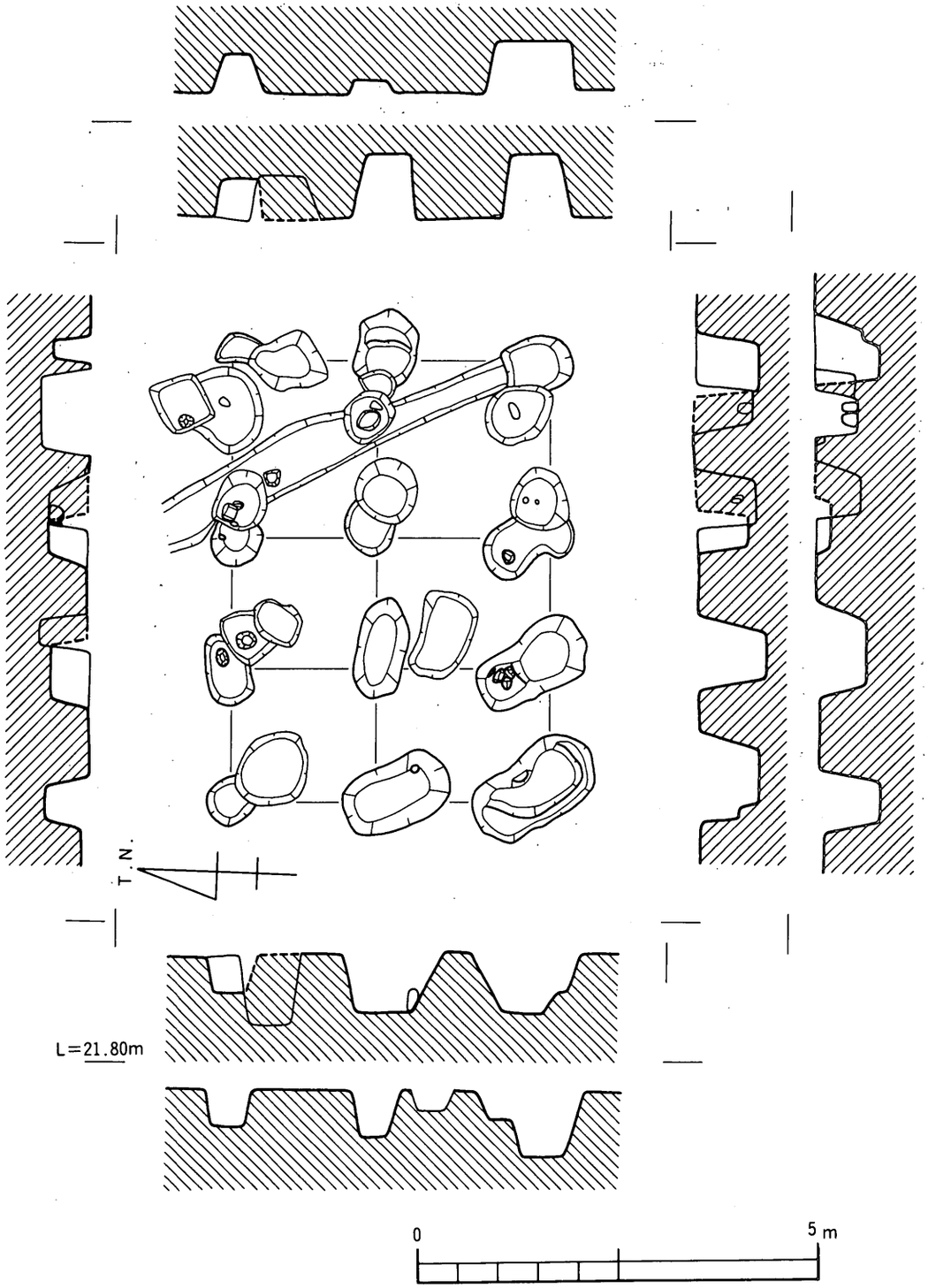
両桁行の対応関係が不揃いである。



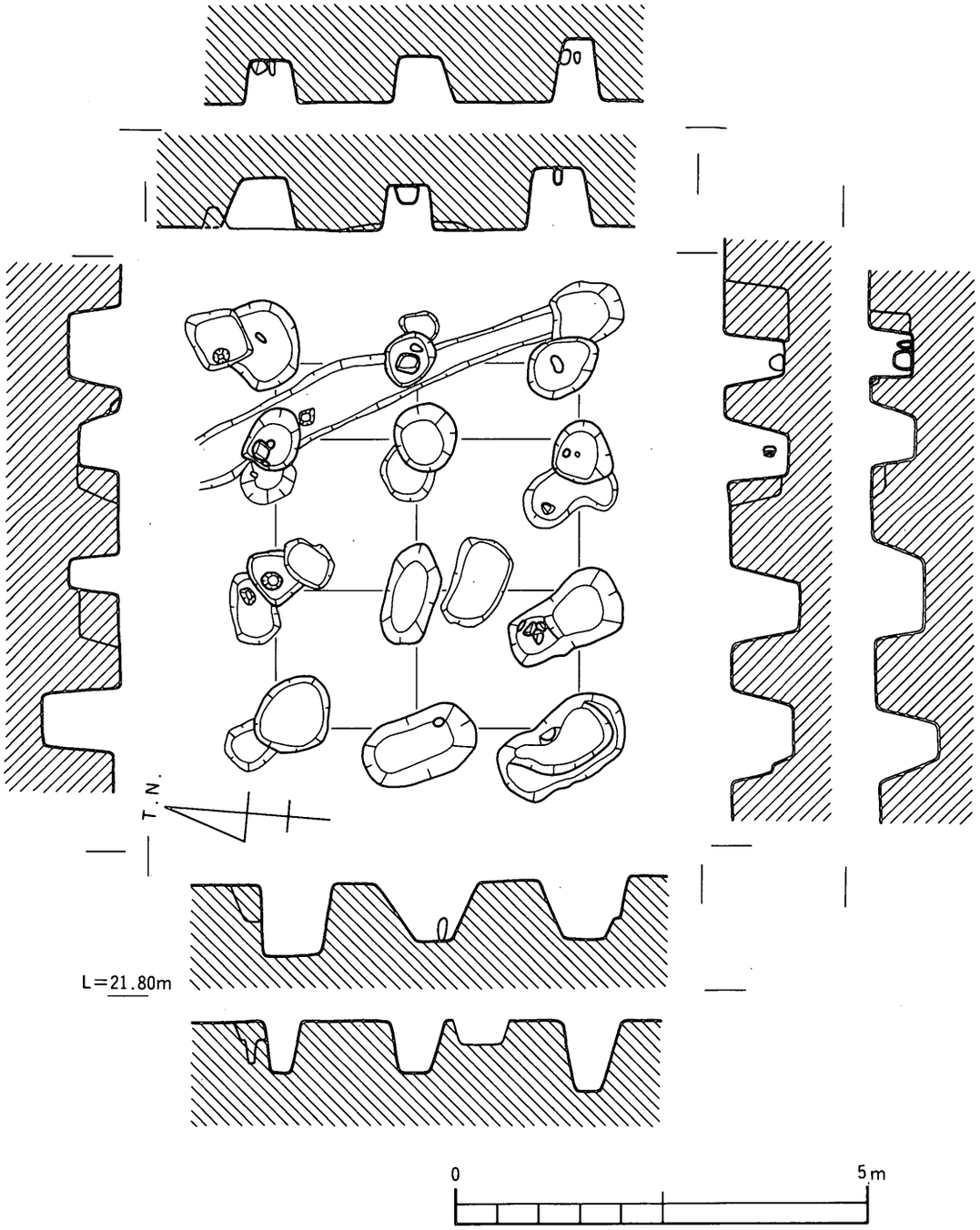
第42図　ＳＢ21実測図



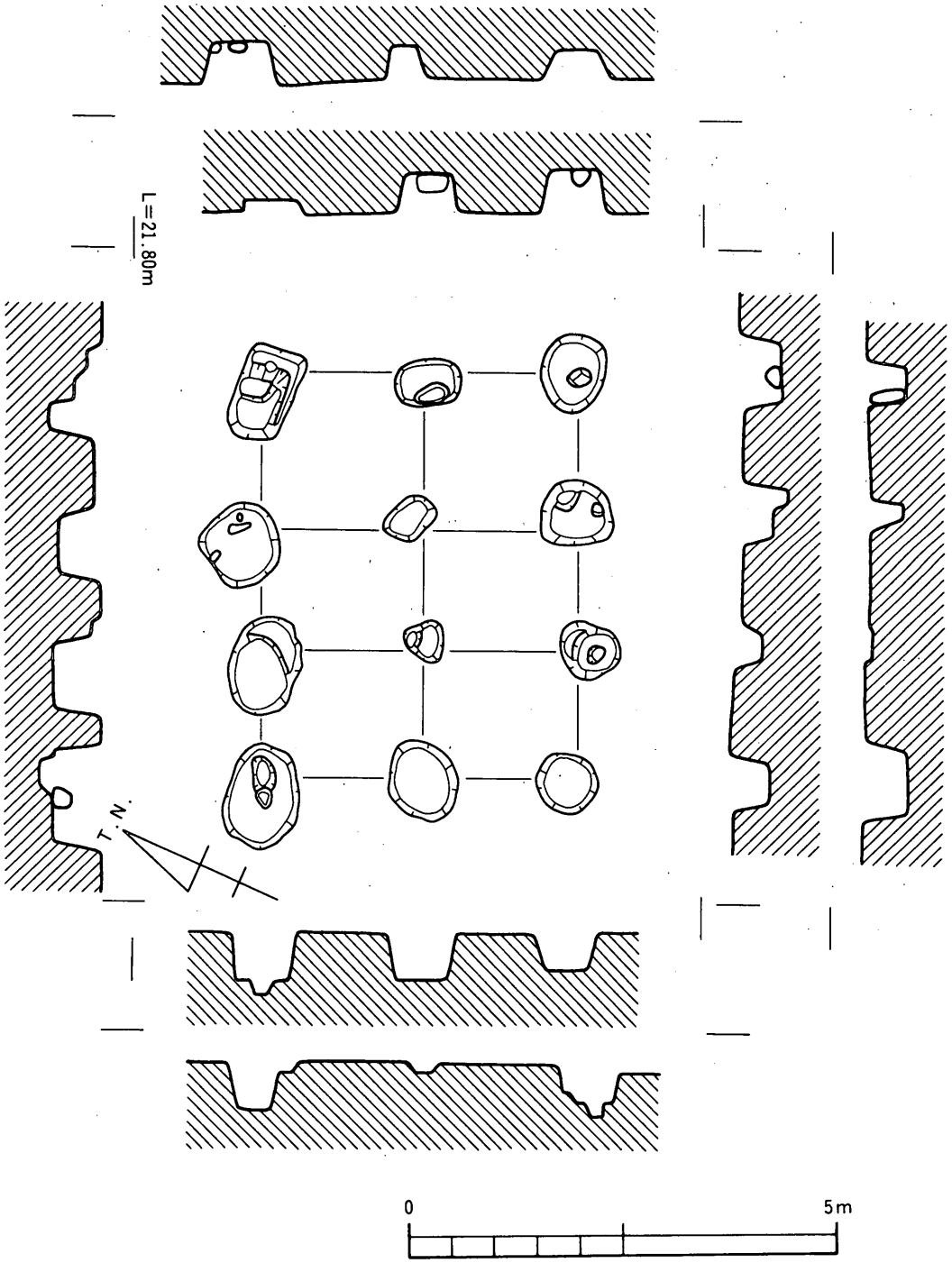
第43図　ＳＢ22実測図



第44図　ＳＢ23実測図



第45図　ＳＢ24実測図



第46図　ＳＢ25実測図

ＳＢ22　梁間３間（4.30m），桁行４間（5.85m），面積25.16m²を測る，総柱の建物である。建物主軸は，梁間方向でＮ－24°30′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.43m，桁行で1.46mになる。

柱穴は，径40－70cmで円形および隅丸方形を呈する。深度は，深いもので50cmを測る。柱穴は，外郭部をなす柱穴が大きく，内郭部が小さい。

柱穴内からは，第60図57に示した土器が出土した。

ＳＢ23・24を切っており，ＳＢ23・24より後出する。

ＳＢ23　梁間２間（3.95m），桁行３間（5.45m），面積21.53m²を測る，総柱の建物である。建物主軸は，梁間方向でＮ－0°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.98m，桁行で1.82mになる。

柱穴は，径60－80cmで円形を呈する。深度は，深いもので75cmを測る。柱穴は建て替えによって２時期のものが重なり長楕円形を呈するものが見受けられるが，埋土の区分によって２時期に分割することはできなかった。

ＳＢ24に切られており，ＳＢ24に先行する。また，ＳＤ40を切っている。

ＳＢ24　梁間２間（3.65m），桁行３間（4.40m），面積16.06m²を測る，総柱の建物である。建物主軸は，梁間方向でＮ－7°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.83m，桁行で1.47mになる。

柱穴は，径65－80cmで円形を呈する。深度は，深いもので83cmを測る。柱穴は建て替えのため上記のような状況にある。

ＳＢ23を切っており，ＳＢ23より後出する。

ＳＢ25　梁間２間（3.70m），桁行３間（4.75m），面積17.58m²を測る，総柱の建物である。建物主軸は，梁間方向でＮ－24°40′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.85m，桁行で1.58mになる。

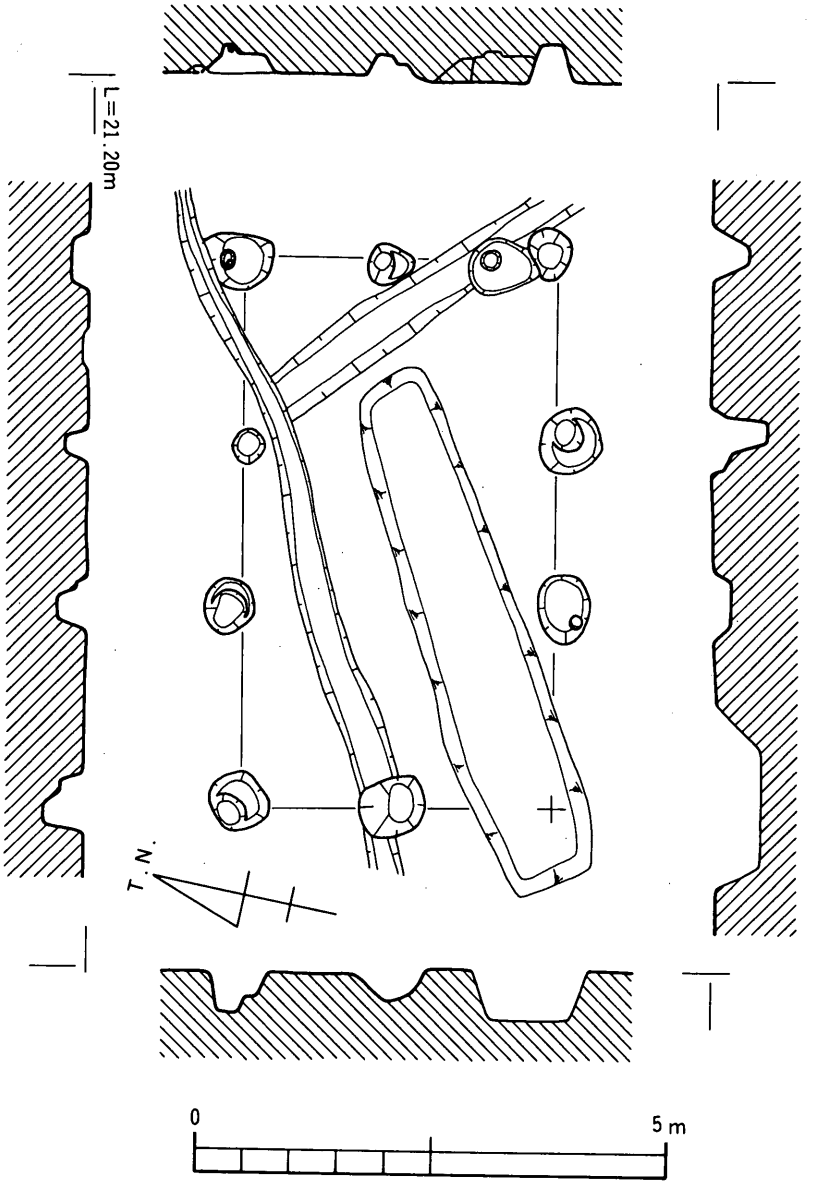
柱穴は，外郭部で70－125cmの円形もしくは隅丸方形，内郭部で50cmの円形を呈する。このように，内郭部の柱穴は外郭部に比べて小形である。深度は，深いもので73cmを測り，柱の推定径は15－25cmである。

柱穴内からは，第60図58に示した土器が出土した。

ＳＢ26　梁間２間（3.30m），桁行３間（5.80m），面積19.14m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－10°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.65m，桁行で1.93mになる。

柱穴は，径35－65cmの円形もしくは隅丸方形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は17.5cmである。試掘調査によって一柱穴を欠損している。

ＳＤ14・27を切っており，ＳＢ27に切られている。ＳＢ27と共有する柱穴が見られる。

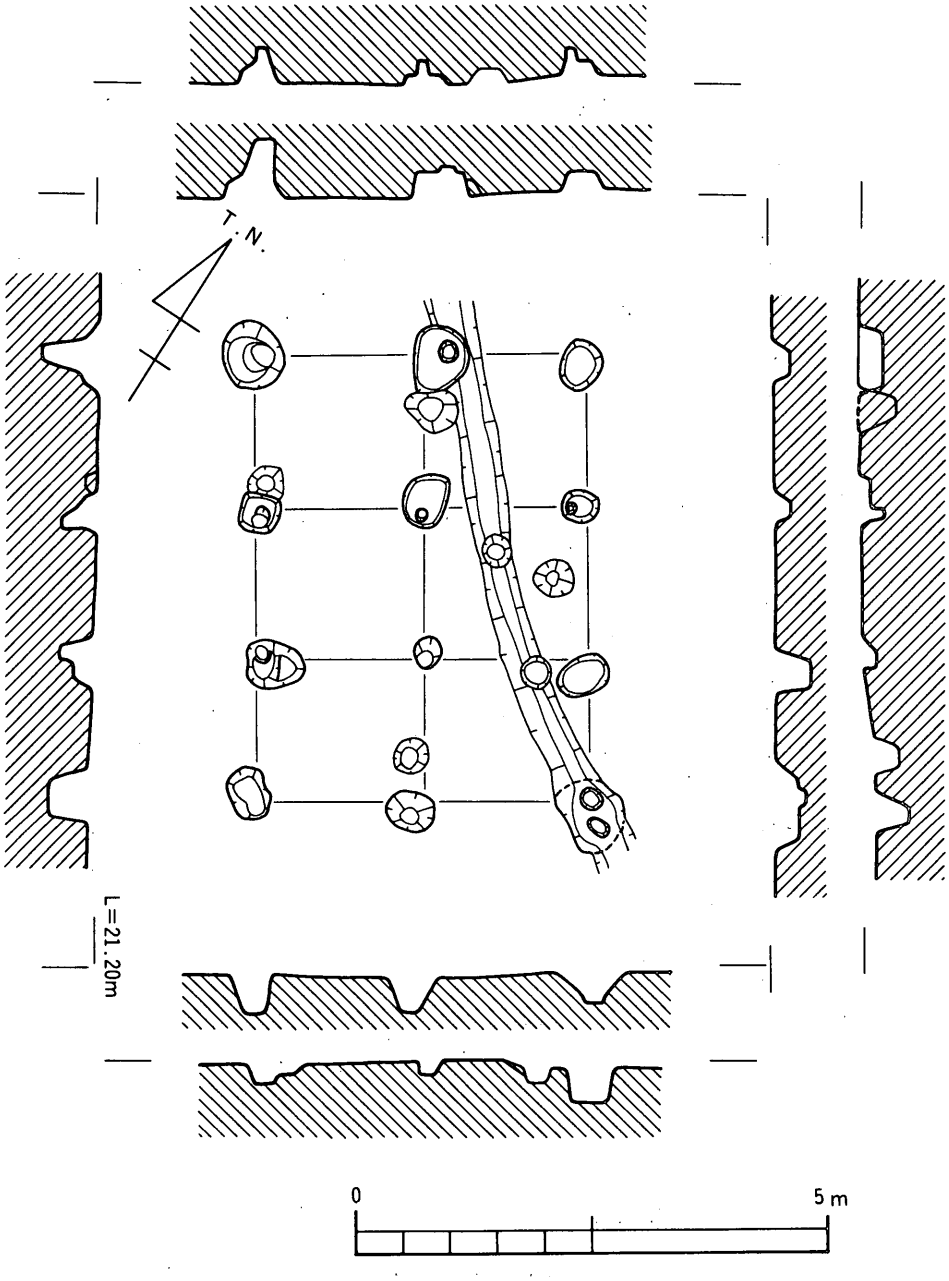


第47図　ＳＢ26実測図

ＳＢ27　梁間２間(3.55m)，桁行３間(4.70m)，面積16.69m²を測る，総柱の建物である。建物主軸は，桁行方向でＮ－32°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.78m，桁行で1.57mになる。

柱穴は，径33－88cmで円形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は15cmである。ＳＢ26に比べて規模の小さい柱穴で構成されている。

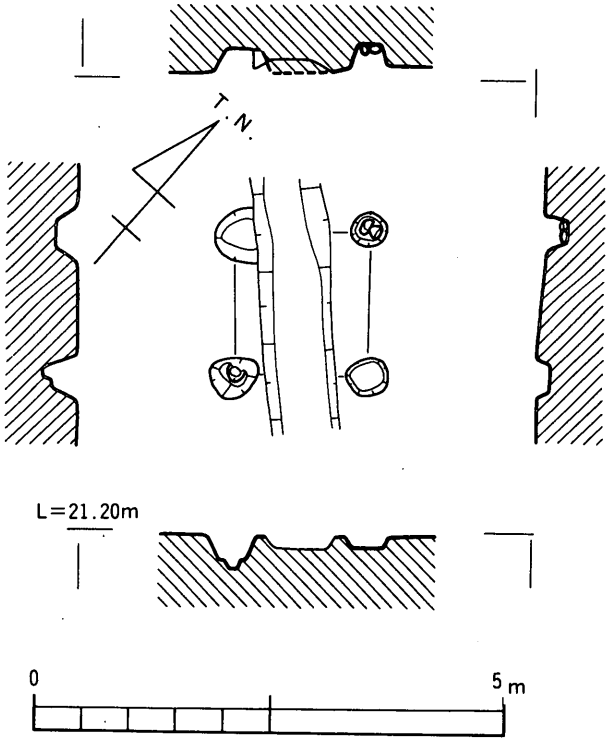
ＳＤ14を切っており，ＳＢ26との間に共有する柱穴がある。



第48図　ＳＢ27実測図

ＳＢ28　梁間１間（1.40m），桁行１間（1.55m），面積2.17m²を測る，１間四方の掘立柱建物である。建物主軸は，桁行方向でＮ－36°30′－Ｗを測る。柱穴は，径40－60cmで円形を呈する。深度は，深いもので35cmを測り，柱の推定径は10cmである。

ＳＤ26（幅75cm）の埋土が柱穴掘り形の一部を覆っており，ＳＤ26の埋没より先行することは明白である。また，ＳＤ26を跨ぐ形で配置されることから，ＳＢ28は建物ではなく橋の機能を持った施設である可能性が高い。このことからすれば，ＳＢ28とＳＤ26は同一年代に機能していたことが考えられる。

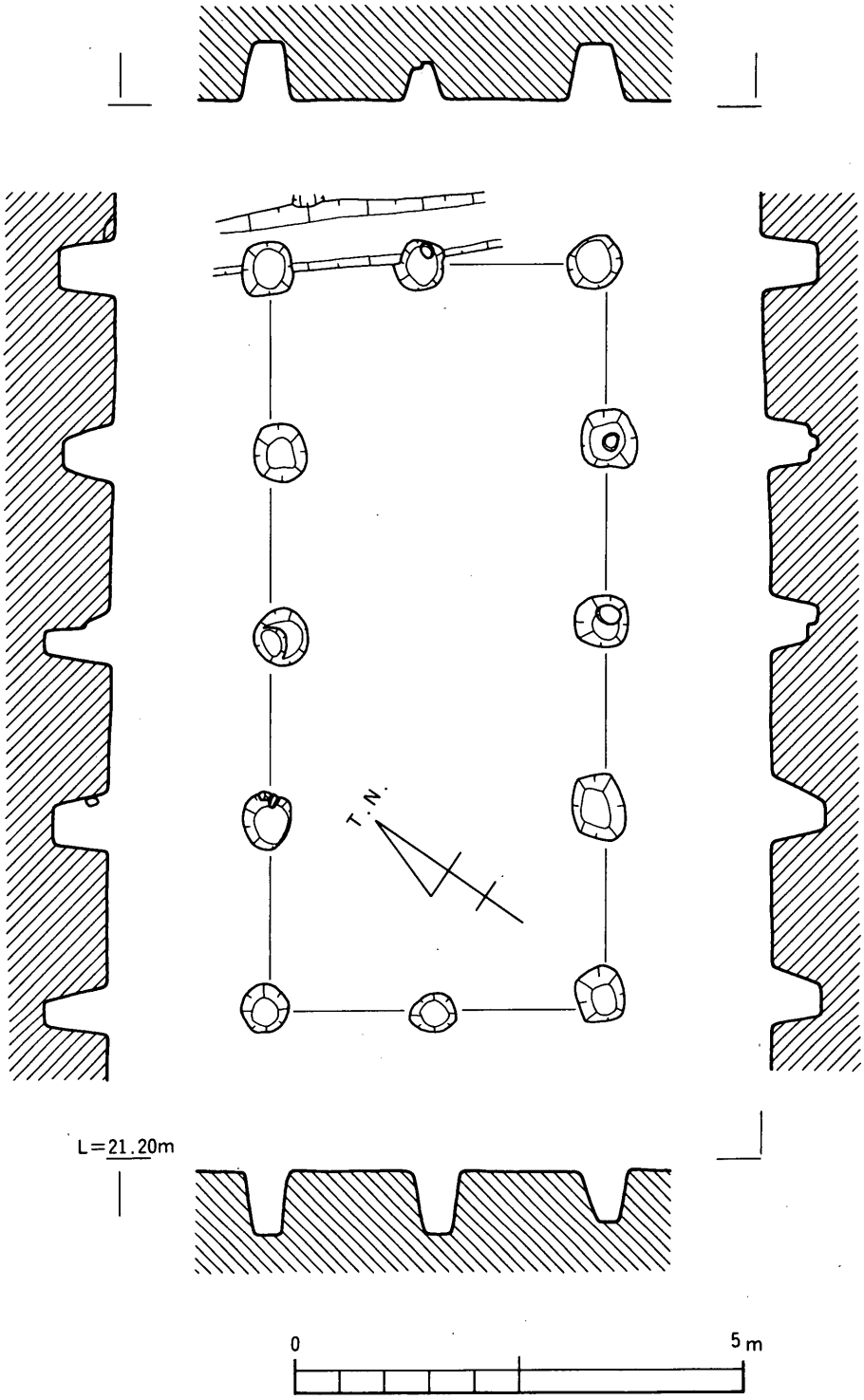


第49図　ＳＢ28実測図

ＳＢ29　梁間２間（3.75m），桁行４間（8.20m），面積30.75m²を測る。建物主軸は，梁間方向でＮ－34°10′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.89m，桁行で2.05mになる。

柱穴は，径50－60cmの円形を呈する。深度は，深いもので70cmを測り，柱の推定径は20cm前後である。比較的均整の取れた柱穴で構成されている。

ＳＤ26を切っており，ＳＤ26より後出する。

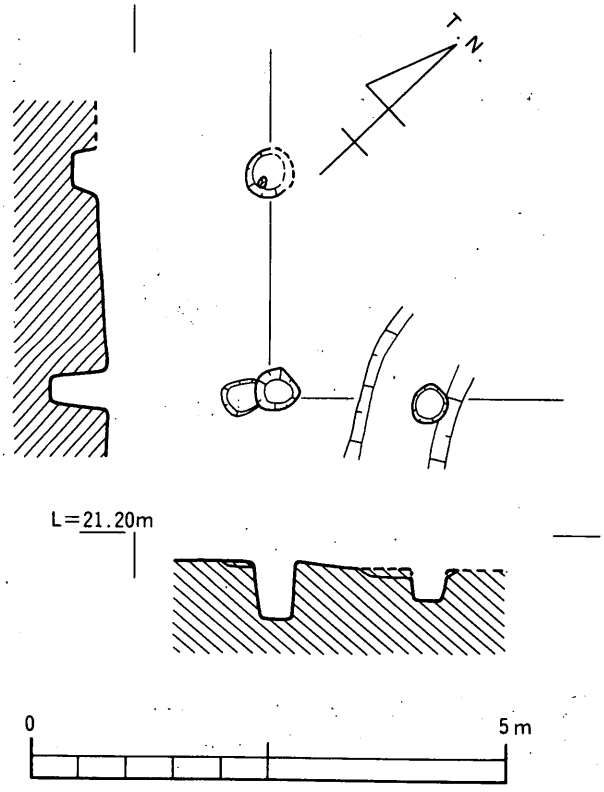


第50図　ＳＢ29実測図

ＳＢ30　調査区の北半で検出されたため全貌を明らかにすることはできなかったが，現状では梁間１間（2.40m）以上，桁行１間（1.70m）以上を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－47°－Ｗを測る。

柱穴は，径40－50cmで円形を呈する。深度は，深いもので60cmを測る。この建物も柱穴規模が小さい。

ＳＤ31を切っており，ＳＤ31より後出する。



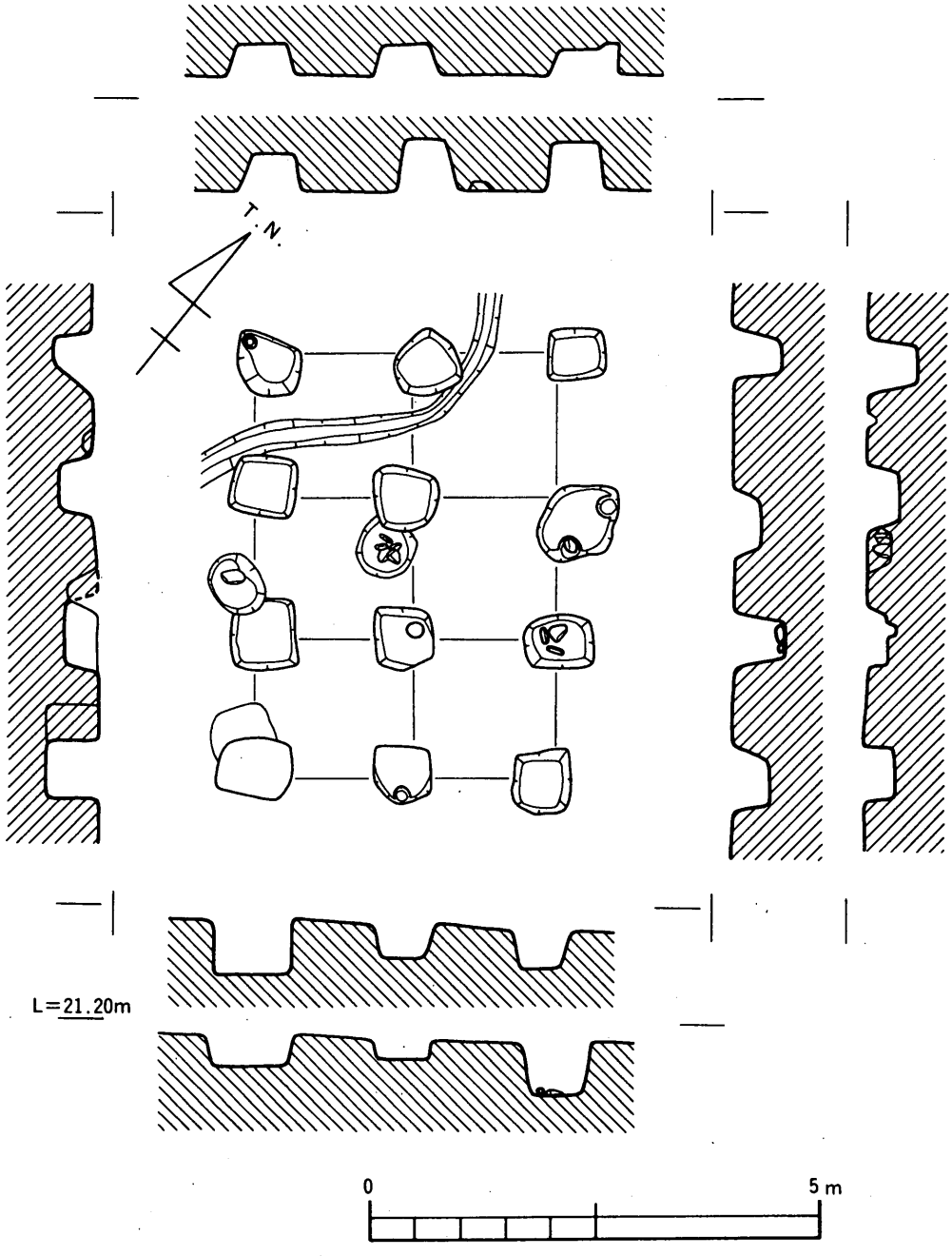
第51図　ＳＢ30実測図

ＳＢ31　梁間２間（3.35m），桁行３間（4.70m），面積15.75m²を測る，総柱の掘立柱建物である。建物主軸は，桁行方向でＮ－37°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.68m，桁行で1.57mを測る。

柱穴は，外郭部・内郭部を問わず径70－80cmで隅丸方形を呈する。深度は，深いもので60cmを測る。

柱穴の形態・規模・柱間共に均整が取れており，他の掘立柱建物よりも後出する建物の状況を現している可能性も否定できない。

ＳＢ32・ＳＤ34を切っており，両者より後出する。



第52図　ＳＢ31実測図

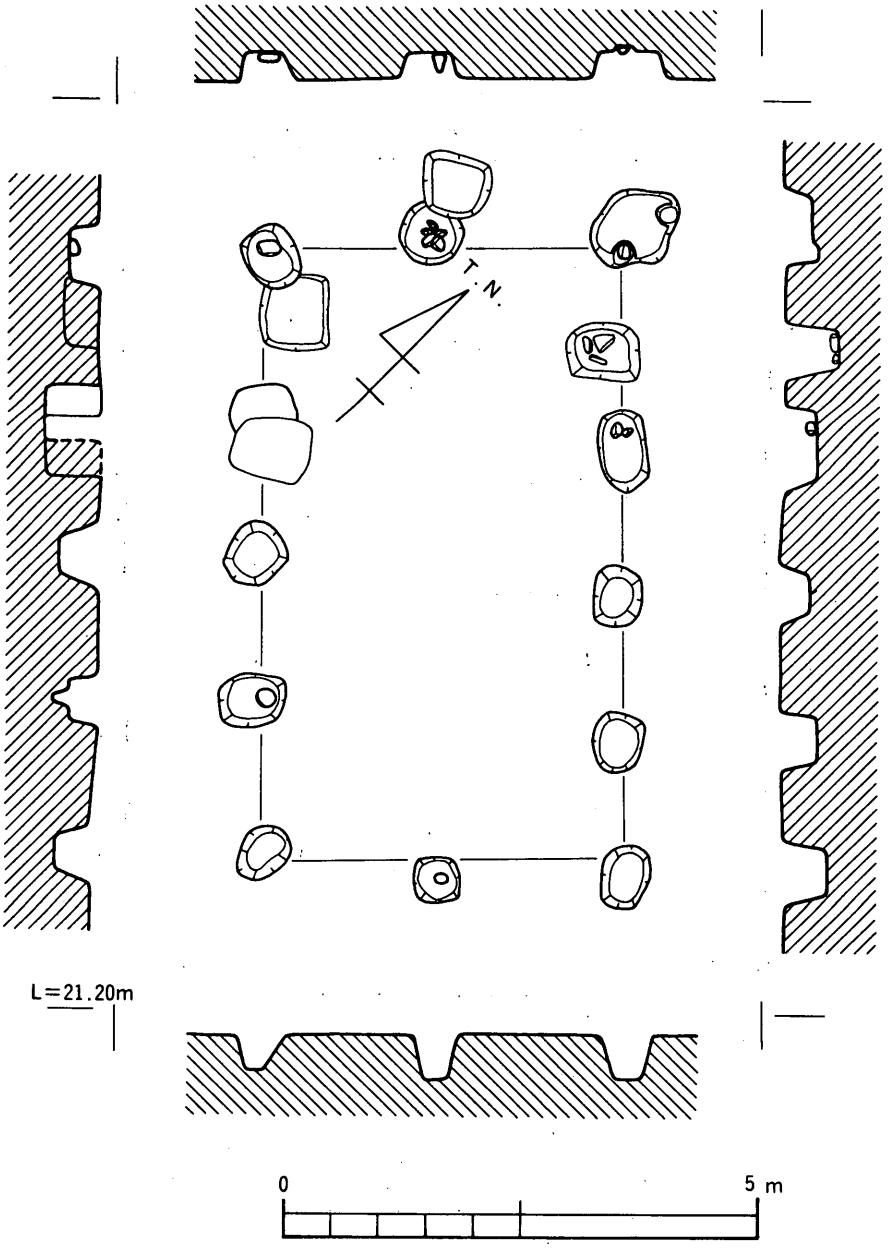
ＳＢ32　梁間２間（3.80m），桁行４間（6.50m），面積24.70m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－44°－Ｗを測る。柱間は梁間で1.90m，桁行で1.63mを測る。

柱穴は，径50－70cmの円形もしくは隅丸方形を呈する。深度は，深いもので60cmを測り，柱の推定径は17.5cmを測る。柱穴規模が小さく，この調査区北部に位置する建物全体が調査区中央部

の建物群との比較で位置付けられる可能性を示唆するものである。

柱穴内からは，第60図59－60に示した土器が出土した。須恵器の形態から見て，７世紀中葉に位置付けられる。

ＳＢ31に切られており，ＳＤ50を切っている。

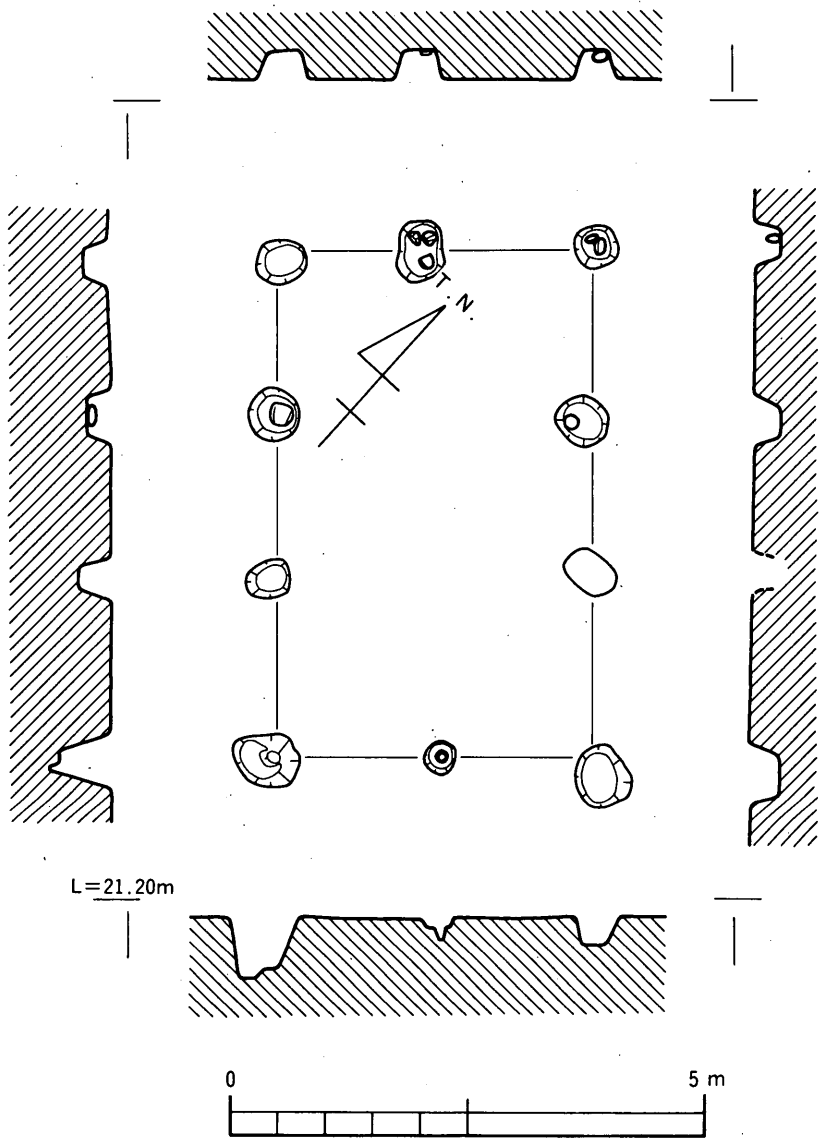


第53図　ＳＢ32実測図

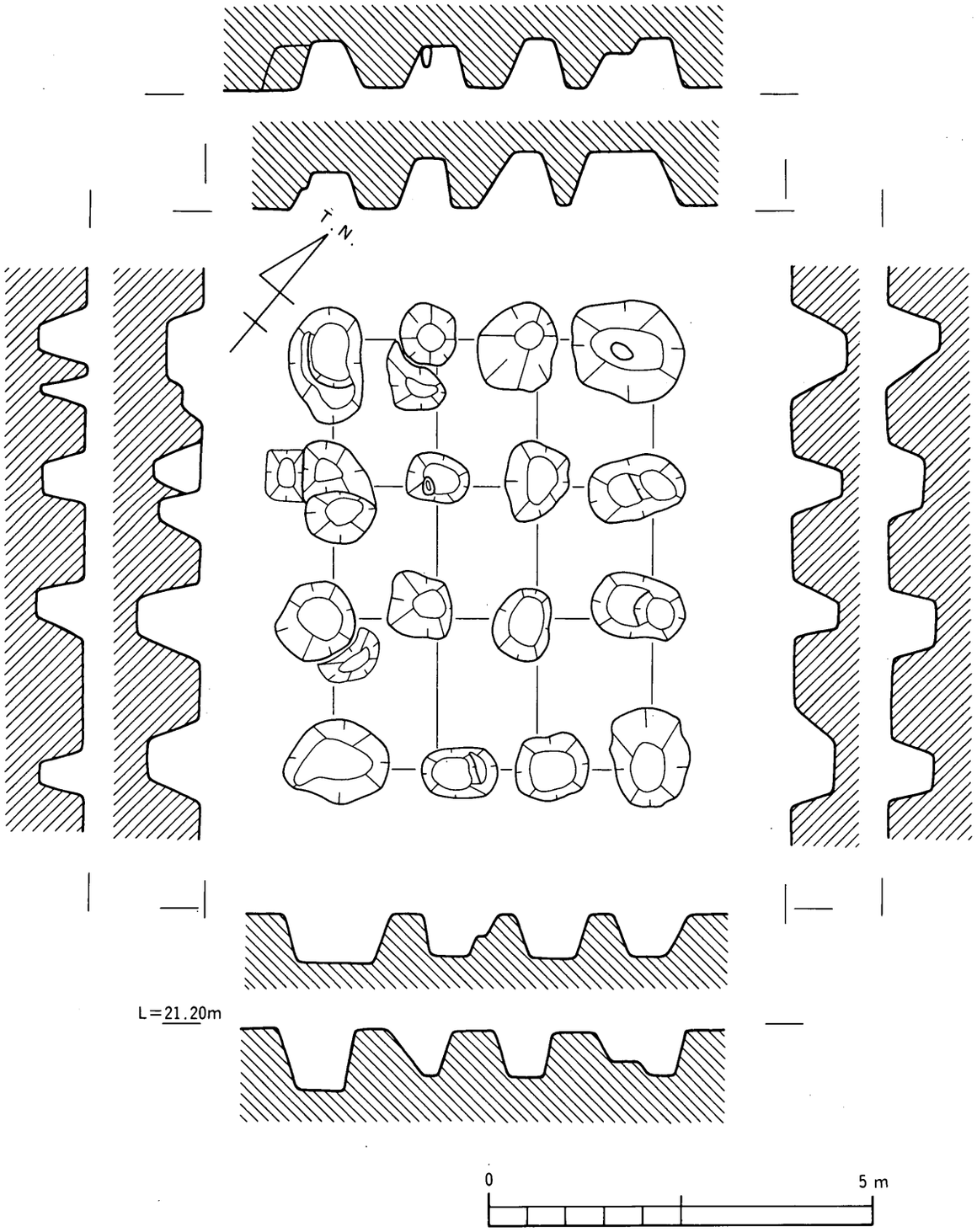
ＳＢ33　梁間２間（3.30m），桁行３間（5.30m），面積17.49m²を測る。建物主軸は，桁行方向でＮ－41°40′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.65m，桁行で1.77mを測る。

柱穴は，径35－65cmで円形を呈する。深度は，深いもので65cmを測る。

南梁間の中央柱穴は他の柱穴に比較して小形であるが，位置的には申し分のない状況で検出されている。



第54図　ＳＢ33実測図



第55図　ＳＢ34実測図

ＳＢ34　梁間３間（4.15m），桁行３間（5.60m），面積23.24m²を測る，総柱の掘立柱建物である。建物主軸は，桁行方向でＮ－41°50′－Ｗを測る。柱間は梁間で1.38m，桁行で1.87mを測る。

柱穴は，径80－140cmの不整円形を呈する。深度は，深いもので80cmを測り，柱の推定径は40cm以下である。

ＳＢ34は，一部に柱穴の切り合いが見られること，柱穴その物が大きいことから２時期以上の建て替えを想定しうるが，埋土での区分は出来なかった。このことから，たとえ建て替えを想定したとしてもほぼ同規模の建物であったこと，年代的にも近接していたことが伺われる。

遺構番号	規模		柱間（平均）		方位		他の遺構との先後関係	備考
	間数（梁間×桁行）	m	梁間	桁行				
SB01	2間×4間	4.00×9.00	2.00m	2.25m	梁間	N-27°30′-W		
SB02	2間×4間	3.40×6.25	1.56m	1.70m	桁行	N-24°30′-W	先行・SB03	
SB03	2間×3間	3.70×5.90	1.85m	1.97m	梁間	N-27°-W	後出・SB02	廂あり
SB04			2.00m	2.02m	桁行	N-30°-W		
SB05	2間×1間	3.90×2.35	1.95m	2.35m	梁間	N-26°-W		廂あり
SB06	2間×2間	3.45×5.05	1.72m	2.52m	桁行	N-34°30′-W	先行・SD14	
SB07	2間×4間	3.40×6.00	1.70m	1.50m	桁行	N-32°20′-W	先行・SD17	
SB08	2間×4間	3.95×7.25	1.98m	1.81m	桁行	N-32°-W	先行・SB09	
SB09	2間×4間	4.80×8.25	2.40m	2.06m	梁間	N-34°50′-W	後出 SB08	
SB10	2間×2間	2.95×4.20	1.48m	2.10m	梁間	N-13°-W	先行 SD15・SD16 後出 SD10・SD12	
SB11	2間×4間	3.70×6.10	1.85m	1.53m	梁間	N-8°-W	後出 SB12	
SB12	2間×2間	2.90×5.45	1.45m	2.73m	桁行	N-27°-W	先行 SB11	
SB13	2間×5間	3.55×8.95	1.78m	1,79m	梁間	N-30°-W	先行 SD15	
SB14	2間×2間	3.65×5.10	1.83m	2.55m	梁間	N-18°40′-W	先行 SB13	
SB15	1間×2間	2.00×4.00	2.00m	1.75m 2.25m	梁間	N-24°30′-W		
SB16	2間×3間	3.40×6.60	1.70m	2.20m	梁間	N-0°-W	後出 SB17	
SB17	2間×3間	3.65×6.40	1.83m	2.13m	梁間	N-12°-W	先行 SB16	
SB18	2間×2間	2.95×3.60	1.48m	1.80m	梁間	N-9°-W		
SB19	2間×2間	4.00×4.40	2.00m	2.20m	桁行	N-28°30′-W		
SB20			2.00m	1.25m	梁間	N-28°30′-W		
SB21	2間×3間	3.60×4.90	1.80m	1.63m	梁間	N-22°-W		
SB22	3間×4間	4.30×5.85	1.43m	1.46m	梁間	N-24°30′-W	先行 SB23・SB24	
SB23	2間×3間	3.95×5.45	1.98m	1.82m	梁間	N-0°-W	先行 SD40 後出 SB24	
SB24	2間×3間	3.65×4.40	1.83m	1.47m	梁間	N-7°-W	先行 SB23	
SB25	2間×3間	3.70×4.75	1.85m	1.58m	梁間	N-24°40′-W		
SB26	2間×3間	3.30×5.80	1.65m	1.93m	梁間	N-10°-W	先行 SD14・SD27 後出 SB27	
SB27	2間×3間	3.55×4.70	1.78m	1.57m	桁行	N-32°-W	先行 SD14	
SB28	1間×1間	1.40×1.55			桁行	N-36°30′-W		
SB29	2間×4間	3.75×8.20	1.89m	2.05m	梁間	N-34°10′-W	先行 SD26	
SB30			2.40m	1.70m	桁行	N-47°-W	先行 SD31	
SB31	2間×3間	3.35×4.70	1.68m	1.57m	桁行	N-37°-W	先行 SD34・SB32	
SB32	2間×4間	3.80×6.50	1.90m	1.63m	桁行	N－44°－W	先行 SD50 後出 SB31	
SB33	2間×3間	3.30×5.30	1.65m	1.77m	桁行	N-41°40′-W		
SB34	3間×3間	4.15×5.60	1.38m	1.87m	桁行	N-41°50′-W		

第5表　B_3地区建物遺構一覧表

(2) 溝状遺構

溝状遺構は，検出された遺構すべてに遺構番号を振った。(ここでは，途中で屈曲したり分岐したりするものについても個々に遺構番号を付けている。)この結果，ＳＤ01からＳＤ50まで50条となった。溝状遺構の埋土は，検出したもののすべてが砂層で単一層であったことから，個々の遺構説明では省略している。

ＳＤ01　検出長17.0m，最大幅0.8m，深さ0.19mを測り，北東方向から南西方向に伸びる。途中でほぼ直角に屈曲してＳＤ07につながる。

ＳＤ02・05を切っており，後出する。

ＳＤ02　検出長6.0m，最大幅0.5m，深さ0.17mを測り，北東方向から南西方向に伸びる。ＳＤ01に切られており，先行する。

ＳＤ03　検出長2.3m，最大幅0.4m，深さ0.09mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

ＳＫ01から伸び，ＳＤ04と合流する。

ＳＤ04　検出長8.0m，最大幅0.5m，深さ0.26mを測り，北東方向から南西方向に伸びる。途中で屈曲して南東方向に伸び，屈曲部でＳＤ03と合流する。

埋土中から，第61図61に示した土器が出土している。この土器から見て，弥生時代後期頃に位置付けられる。

ＳＤ05　検出長36.5m，最大幅1.6m，深さ0.32mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。途中からほぼ直角に北東方向に屈曲しており，この部分をＳＤ06とした。

ＳＫ03を切っており，これより後出する。また建物の復元はできなかったが，多くの柱穴に切られている。

埋土中から，第61図・第62図62－87に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ06　検出長6.5m，最大幅0.9m，深さ0.29mを測る。

埋土中から，第62図88－91に示した土器が出土している。須恵器から見て，ＳＤ05同様７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ07　検出長35.0m，最大幅1.1m，深さ0.22mを測り，北東方向から南西方向に伸びる。

この溝は，ＳＤ01の途中からほぼ直角に屈曲して伸びるが，小さな蛇行が見られる。ＳＤ05にほぼ平行して流れるものの，ＳＤ06と交差する事無く直前で終わっている。

埋土中から，第63図・第64図92－112に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ08　検出長10.0m，最大幅0.4m，深さ0.08mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

ＳＤ09・10　同一の溝であるが，屈曲部分の南北で名称を変えている。検出長37.5m，最大幅0.6m，深さ0.22m（ＳＤ09)，0.15m（ＳＤ10）を測り，北西方向から南東方向に小さく蛇行し

ながら伸びる。

ＳＤ09の埋土中から，第64図113に示した土器が出土している。この須恵器から見て７世紀代に位置付けられる。ＳＤ10の埋土中から，第64図114－121に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ12を切っており，後出する。また，埋土はＳＢ10を切っており，これよりも後出する。

ＳＤ11　検出長13.5m，最大幅0.8m，深さ0.16mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。検出部北端でほぼ直角に屈曲しており，南端でも同様の状況が想定される。

埋土中から，第64図122に示した土器が出土している。この須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＤ12　検出長27.6m，最大幅0.6m，深さ0.15mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

埋土中から，第64図123－128に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭？に位置付けられる。

南端は，ＳＤ10に切られており，ＳＤ13を切っている。また，埋土はＳＢ10を切っている。

ＳＤ13　検出長13.4m，最大幅0.4m，深さ0.18mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

埋土中から，第64図129に示した土器が出土している。この須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

北端は，ＳＤ12に切られている。

ＳＤ14　検出長41.5m，最大幅0.5m，深さ0.2mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

北端はＳＤ27につながり（又は切られ），南端はＳＤ12に切られている。また，ＳＢ06・26・27，ＳＤ22・24・25，ＳＫ11に切られ，ＳＤ21を切っている。

ＳＤ15　検出長13.0m，最大幅0.5m，深さ0.15mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

埋土中から，第64図130に示した土器が出土している。この須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＢ10・13に切られている。

ＳＤ16　検出長16.5m，最大幅0.7m，深さ0.32mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

埋土中から，第65図131－136に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀中葉から後半に位置付けられる。

ＳＤ17　検出長7.7m，最大幅0.5m，深さ0.14mを測り，南西方向から北東方向に伸びている。

ＳＢ07に切られている。

ＳＤ18　検出長22.5m，最大幅0.6m，深さ0.21mを測り，北西方向から南東方向に伸び，ほぼ直角に屈曲して北東方向に伸びる。

埋土中から，第65図137に示した土器が出土している。この須恵器から見て，６世紀末に位置付けられる。

ＳＤ19　検出長7.2m，最大幅0.3m，深さ0.07mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

ＳＤ20　検出長8.8m，最大幅0.7m，深さ0.15mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。

埋土中から，第65図138－141に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初めに位置付けられる。

ＳＤ21　検出長13.0m，最大幅0.5m，深さ0.03mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。

埋土中から，第65図142に示した弥生土器が出土しているが，他の状況から見て混入と考えられる。

ＳＤ14に切られている。

ＳＤ22　検出長10.7m，最大幅0.6m，深さ0.27mを測り，北東方向から南西方向に伸び，西端で広角に屈曲して北西方向に伸びる。

埋土中から，第65図143－148に示した土器が出土している。須恵器から見て，６世紀末～７世紀前半に位置付けられる。

ＳＤ14を切っており，後出する。

ＳＤ23　検出長39.0m，最大幅1.3m，深さ0.23mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。中央東よりでほぼ直角に北西方向に伸びるＳＤ26と分岐し，東端でＳＤ24・25に分岐する。

埋土中から，第66図149－168に示した土器が出土している。この中には，蛸壺も含まれており平野部での出土として特筆される。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

西端は，ＳＫ29に切られており，途中でＳＫ30に切られている。また，ＳＤ31・38・39を切っている。

ＳＤ24　検出長8.0m，最大幅0.6m，深さ0.1mを測る。ＳＤ23から分岐し，ＳＤ14を切っている。

ＳＤ25　検出長9.5m，最大幅1.5m，深さ0.05mを測る。ＳＤ23から分岐し，ＳＤ14を切っている。

埋土中から，第67図169に示した土器が出土している。この須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＤ26　検出長32.0m，最大幅1.0m，深さ0.16mを測り，北西方向から南東方向に伸び，ＳＤ23と合流する。

埋土中から，第67図170－171に示した土器が出土している。須恵器から見て，６世紀末～７世紀代に位置付けられる。

埋土は，ＳＢ28を切っているが，ほぼ同一時期の遺構と考えられる。また，ＳＢ29に切られている。

ＳＤ27　検出長14.0m，最大幅0.5m，深さ0.1mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。ＳＢ26に切られている。また，ＳＤ14を切り（又は合流），ＳＤ26に切られ（又は合流？し）てい

る。

ＳＤ28　検出長2.5m，最大幅0.4m，深さ0.09mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

ＳＤ29　検出長2.0m，最大幅0.4m，深さ0.08mを測り，北から南に伸びる。

ＳＤ30　検出長1.8m，最大幅0.2m，深さ0.03mを測り，東西方向に伸びる。

ＳＤ31　検出長35.5m，最大幅1.0m，深さ0.24mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。

埋土中から，第67図172－173に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＢ30に切られており，ＳＤ32を切っている。南端はＳＤ23に切られているが，合流していた可能性もある。

ＳＤ32　検出長25.5m，最大幅0.8m，深さ0.2mを測り，北西方向から南東方向に伸び，ほぼ直角に屈曲して北東方向に伸びる。全体の形状は，Ｌ字形を呈する。

北端および屈曲部でＳＤ31に切られている。

ＳＤ33　検出長12.8m，最大幅1.3m，深さ0.25mを測り，北西方向から南東方向に伸び，ほぼ直角に屈曲して北東方向に伸びる。全体形状はＬ字形を呈する。途中からＳＤ39が分岐する。Ｌ字形の溝はＳＢ33を半分囲んでいる状況である。

埋土中から，第67図174に示した土器が出土している。この須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＤ34　検出長18.0m，最大幅0.5m，深さ0.1mを測り，北西方向から南東方向に伸び，ほぼ直角に屈曲して南西方向に伸びる。その後，再び屈曲して南東方向に伸び鍵手状を呈する溝である。南端延長上にＳＤ33があるため，本来は同一の溝であった可能性が高い。

溝の途中にＳＫ27が存在し，ＳＢ31に切られている。また，ＳＢ32を半分囲んでいる。

ＳＤ35　検出長4.0m，最大幅0.3m，深さ0.06mを測り，南西方向から北東に伸びてＳＫ28に続いている。

ＳＤ36　検出長7.5m，最大幅0.6m，深さ0.14mを測り，南西方向から北東方向に伸び，ＳＤ39に切られている。

ＳＤ37　検出長7.7m，最大幅0.8m，深さ0.18mを測り，南西方向から北東方向に伸び，ＳＤ39に切られる。ＳＤ39とほぼ平行して走行する。

ＳＤ38　検出長33.0m，最大幅0.9m，深さ0.22mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。２本の溝でＳＤ39とつながる。ＳＤ39とはほぼ平行して走行する。

埋土中から，第67図175－176に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀後半～８世紀初頭に位置付けられる。

中央南よりで東へ拡張して（接して）ＳＫ２４が見られ，ＳＫ２２に切られている。北端は，ＳＤ23に切られている。

ＳＤ39　検出長48.0m，最大幅0.8m，深さ0.22mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。中央南よりで幅4.2mになるが，浅いことから西へのオーバーフローと考えられる。

埋土中から，第67図177－179に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀後半～８世紀初頭に位置付けられる。

北端でＳＤ33と合流し，ＳＤ36・37を切り，ＳＤ23に切られ，ＳＤ43が分岐する。

ＳＤ40　検出長1.2m，最大幅0.5m，深さ0.11mを測り，ＳＤ38とＳＤ39を継ぐ形で存在する。埋没年代はＳＤ38・39と同様であろう。

ＳＤ41　検出長7.3m，最大幅0.4m，深さ0.14mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。ＳＤ42に切られている。

ＳＤ42　検出長16.5m，最大幅0.4m，深さ0.18mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。ＳＤ41を切っている。

ＳＤ43　検出長14.5m，最大幅0.5m，深さ0.16mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。ＳＤ42と平行して走行する。(溝間2.5m)

ＳＤ44　検出長63.0m，最大幅0.8m，深さ0.2mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。途中切れ切れになっているが，本来は連続するものと考えられる。

また，ほぼ中央でＳＤ47が分岐し，ＳＤ48および45の一部が交差したのち南端で二股に分岐する。

ＳＤ45　検出長61.0m，最大幅1.0m，深さ0.23mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。ＳＤ44・45へのバイパスが見られたのち，南端よりでＳＤ46と合流する。

埋土上層から，第67図180－183に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末？～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＤ46　検出長60.0m，最大幅1.7m，深さ0.17mを測り，北西方向から南東方向に伸びる。ＳＤ45との間にバイパスが２本見られたのち，南端よりでＳＤ46と合流する。ＳＤ44－46はほぼ平行している。

埋土上層から第68図184，埋土下層から第68図185－186に示した土器が出土した。須恵器から見て，上層・下層に年代差はなく，７世紀代～８世紀初頭に位置付けられる。

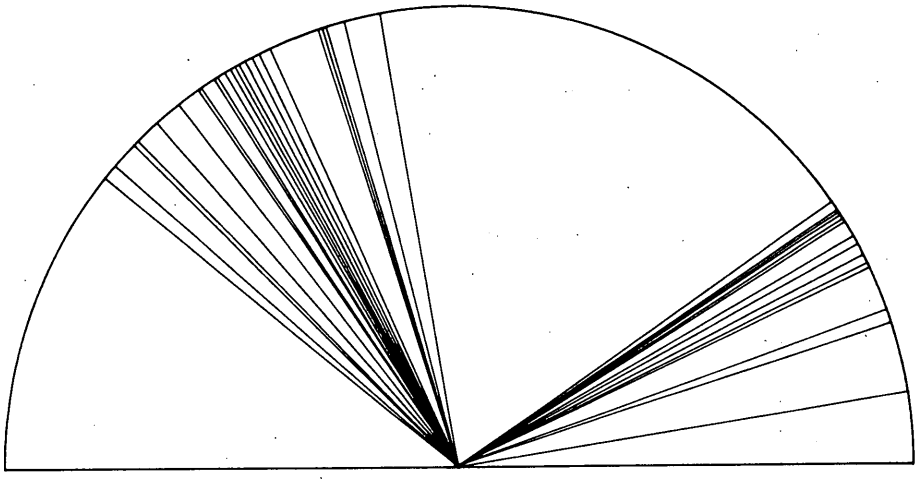
ＳＤ47　検出長1.5m，最大幅0.5m，深さ0.04mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。ＳＤ44から分岐している。ＳＢ34の南側に伸びると推定されたが，検出されなかった。

ＳＤ48　検出長4.0m，最大幅0.7m，深さ0.06mを測り，南西から北東方向に伸びる。ＳＤ45から分岐し，ＳＤ44と交差する。方向性から，ＳＤ37につながる可能性もある。

埋土上層から，第68図187－188に示した土器が出土している。

ＳＤ49　検出長5.0m，最大幅0.6m，深さ0.09mを測り，南西方向から北東方向に伸びる。ＳＤ46から分岐し，西へ伸びる。

ＳＤ50　検出長6.2m，最大幅0.4m，深さ0.11を測り，北西方向から南東方向に伸びる。ＳＢ32及びＳＰ160に切られている。



第56図　溝方位

遺構番号	規模 (m) 検出長	巾	深さ	方位	他の遺構との先後関係	備考
ＳＤ01	17.0	0.8	0.19	N-116°-W	先行　ＳＤ02・ＳＤ05	
ＳＤ02	6.0	0.5	0.17	N-123°30′-W	後出　ＳＤ01	
ＳＤ03	2.3	0.4	0.09	N-49°-W		
ＳＤ04	8.0	0.5	0.26	N-49°-W		
ＳＤ05	36.5	1.6	0.32	N-26°-W	先行　ＳＫ03	
ＳＤ06	6.5	0.9	0.29	N-118°30′-W		
ＳＤ07	35.0	1.1	0.22	N-26°-W		
ＳＤ08	10.0	0.4	0.08	N-26°-W		
ＳＤ09	37.5	0.6	0.22	N-17°30′-W		
ＳＤ10	37.5	0.6	0.15	N-28°-W		
ＳＤ11	13.5	0.8	0.16	N-26°-W		
ＳＤ12	27.6	0.6	0.15	N-32°30′-W	先行　ＳＤ13・ＳＢ10 後出　ＳＤ10	
ＳＤ13	13.4	0.4	0.18	N-27°-W	後出　ＳＤ12	
ＳＤ14	41.5	0.5	0.20	N-51°-W	先行　ＳＤ21 後出　SB06・SB26・SB27・SD12・SD22・SD24・SD25・SD27・SK11	
ＳＤ15	13.0	0.5	0.15	N-14°30′-W	後出　ＳＢ10・ＳＢ13	
ＳＤ16	16.5	0.7	0.32	N-17°-W	後出　ＳＢ10	
ＳＤ17	7.7	0.5	0.14	N-123°30′-W	後出　ＳＢ07	
ＳＤ18	22.5	0.6	0.21	N-30°-W		

第６表　B_3地区溝状遺構一覧表(1)

遺構番号	規模 (m)			方位	他の遺構との先後関係	備考
	検出長	巾	深さ			
SD19	2.0	0.3	0.07	N-29°30′-W		
SD20	8.8	0.7	0.15	N-109°30′-W		
SD21	13.0	0.5	0.03	N-117°-W	後出 SD14	
SD22	10.7	0.6	0.27	N-119°30′-W	先行 SD14	
SD23	39.0	1.3	0.23	N-117°-W	先行 SD31・SD38・SD39 後出 SK29・SK30	
SD24	8.0	0.6	0.1	N-115°30′-W	先行 SD14	
SD25	9.5	1.5	0.05	N-108°-W	先行 SD14	
SD26	32.0	1.0	0.16	N-41°30′-W	先行 SB28 後出 SB29	
SD27	14.0	0.5	0.1	N-118°30′-W	先行 SD14 後出 SB26・SD26	
SD28	2.5	0.4	0.09	N-45°30′-W		
SD29	2.0	0.4	0.08	N-18°-W		
SD30	1.8	0.2	0.03	N-99°-W		
SD31	35.5	1.0	0.24	N-32°30′-W	先行 SD32 後出 SB30・SD23	
SD32	25.5	0.8	0.2	N-32°-W	後出 SD31	
SD33	12.8	1.3	0.25	N-38°-W		
SD34	18.0	0.5	0.1	N-45°-W	後出 SB31	
SD35	4.0	0.3	0.06	N-115°30′-W		
SD36	7.5	0.6	0.14	N-122°-W	後出 SD39	
SD37	7.7	0.8	0.18	N-121°30′-W	後出 SD39	
SD38	33.0	0.9	0.22	N-34°30′-W	後出 SK22・SD23	
SD39	48.0	0.8	0.22	N-35°-W	先行 SD36・SD37 後出 SD23	
SD40	1.2	0.5	0.11	N-124°30′-W	併行 SD38・SD39	
SD41	7.3	0.4	0.14	N-10°-W	後出 SD42	
SD42	16.5	0.4	0.18	N-122°-W	先行 SD41	
SD43	14.5	0.5	0.16	N-123°-W		
SD44	63.0	0.8	0.2	N-29°-W		
SD45	61.0	1.0	0.23	N-29°30′-W		
SD46	60.0	1.7	0.17	N-29°30′-W		
SD47	1.5	0.5	0.04	N-124°30′-W		
SD48	4.0	0.7	0.06	N-108°-W		
SD49	5.0	0.6	0.09	N-122°30′-W		
SD50	6.2	0.4	0.11	N-31°-W	後出 SB32・SP160	

第7表　B_3地区溝状遺構一覧表(2)

(3) 土　坑

土坑の埋土はすべて単一層であるため記述を省略した。

ＳＫ01　長辺4.0m，短辺3.0m，深さ0.27mを測り，不整形な長方形を呈する。竪穴住居の可能性も考慮したが，床面が平坦ではなく凹凸が見られること，柱穴が見られなかったことなどから土坑とした。埋土は単一層で形成され，灰黒色粘質土であった。

出土遺物は，第69図190－198に示したように古式土師器の高坏が多く，祭祀関連遺構の可能性もある。

ＳＫ02　長辺1.0m，短辺は現状で0.4m，深さ0.1mを測る。両側は未掘で，全体形状は不明である。

ＳＫ03　長辺2.9m，深さ0.17mの楕円形と考えられる。東側はＳＤ05とＳＰ27に切られており，西側は未掘である。

出土遺物は，第69図199－201に示したように弥生土器～古式土師器が出土している。

ＳＫ04　長径1.2m，短径1.0m，深さ0.2mを測る。

ＳＫ05　現状で長辺3.0m，短辺1.2m，深さ0.19mを測る。

出土遺物は，第69図202に示した。

ＳＫ06　長径は現状で1.0m，短径は1.2m，深さ0.21mを測る。東半分は未掘である。

出土遺物は，第70図203－212に示した通りで，近世遺構の可能性が強い。

ＳＫ07　一辺1.2m，深さ0.19mの台形状を呈する。

ＳＫ08　長径1.2m，短径0.7m，深さ0.2mの楕円形を呈する。土坑の一部をＳＢ06が切っている。

出土遺物は，第71図213－216に示したように，古式土師器である。

ＳＫ09　長辺は現状で1.8m，短辺は1.3m，深さ0.25mを測る。南半分は調査区外である。出土遺物は図示しなかったが，須恵器の小破片が出土しており，これから見れば７世紀代？に位置付けられよう。

ＳＫ10　長辺1.7m，短辺1.4m，深さ0.19mを測る不整形な土坑である。

ＳＫ11　長径5.8m，短径3.2m，深さ0.3mを測る不整形な土坑である。埋土は汚灰白色砂質土で，ＳＤ14を切っている。出土遺物は，第71図218－220に示した。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＫ12　長径0.7m，短径0.6m，深さ0.22mを測り楕円形を呈する。

ＳＫ13　長径1.2m，短径0.8m，深さ0.11mを測り楕円形を呈する。

ＳＫ14　長径4.4m，短径2.5m，深さ0.23mを測る不整形な土坑である。

埋土からは，第71図221－222に示した土器が出土ている。須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＫ15　長径1.3m，短径0.7m，深さ0.15mを測り隅丸方形を呈する。

ＳＫ16　長径1.0m，短径0.7m，深さ0.09mを測り隅丸方形を呈する。

ＳＫ17　長径0.8m，短径0.7m，深さ0.11mを測る不整形な土坑である。

ＳＫ18　長径2.3m，短径1.1m，深さ0.29mを測り楕円形を呈する。

埋土中から，第71図223の弥生土器もしくは古式土師器が出土している。

ＳＫ19　長径2.5m，短径1.2m，深さ0.24mを測り隅丸方形を呈する。

ＳＫ20　長径1.8m，短径1.2m，深さ0.24mを測る不整形な土坑である。

ＳＫ21　長径1.7m，短径0.5m，深さ0.21mを測る溝状の土坑である。

ＳＫ22　長径2.9m，短径1.4m，深さ0.26mを測る不整形な土坑である。ＳＤ38を切っている。

ＳＫ23　長径1.3m，短径1.0m，深さ0.28mを測る不整形な土坑である。

埋土中から，第71図224に示した土器が出土した。この須恵器から見て，７世紀中葉に位置付けられる。

ＳＫ24　長径2.9m，短径2.0m，深さ0.32mを測る不整形な土坑である。ＳＤ38に接しており，溝の一部を構成すると考えられる。

埋土中から，第71図225－232に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀末～８世紀初頭に位置付けられる。

ＳＫ25　長径3.3m，短径3.0m，深さ0.14mを測る不整形な土坑で，内側に2.5m×2.3mの落ち込みを持つ二段掘りの土坑である。

埋土中から，第71図233－234に示した土器が出土している。須恵器から見て，７世紀代に位置付けられる。

ＳＫ26　長径4.0m，短径2.5m，深さ0.4mを測る不整形な土坑で，底面に起伏が見られる。

ＳＫ27　長径2.3m，短径1.8m，深さ0.87mを測る不整形な土坑であるが，ＳＤ34と一体の施設と考えられ，機能的には水汲み場などが考えられる。

ＳＫ28　現状で長辺4.8m，短辺2.4m，深さ0.33mを測る長方形の土坑である。

ＳＫ29　現状で長辺1.3m，短辺1.5m，深さ0.36mを測る長方形の土坑で，ＳＤ23を切っている。

ＳＫ30　長辺2.6m，短辺1.4m，深さ0.23mを測る長方形の土坑で，ＳＤ23を切っている。埋土中から，第71図235の須恵器が出土しており，７世紀代に位置付けられる。

遺構番号	規　模（m） （長径×短径×深さ）	他の遺構との先後関係	時　期
SK01	4.0×3.0×0.27		古墳時代初頭
SK02	1.0×0.4×0.10		
SK03	2.9×－×0.17		古墳時代初頭
SK04	1.2×1.0×0.20		
SK05	3.0×1.2×0.19		
SK06	1.0×1.2×0.21		近世？
SK07	1.2×1.2×0.19		
SK08	1.2×0.7×0.20	後出　SB06	古墳時代初頭
SK09	1.8×1.3×0.25		7世紀代？
SK10	1.7×1.4×0.19		
SK11	5.8×3.2×0.30	先行　SD14	7世紀末～8世紀初頭
SK12	0.7×0.6×0.22		
SK13	1.2×0.8×0.11		
SK14	4.4×2.5×0.23		7世紀代
SK15	1.3×0.7×0.15		
SK16	1.0×0.7×0.09		
SK17	0.8×0.7×0.11		
SK18	2.3×1.1×0.29		古墳時代初頭
SK19	2.5×1.2×0.24		
SK20	1.8×1.2×0.24		
SK21	1.7×0.5×0.21		
SK22	2.9×1.4×0.26	先行　SD38	
SK23	1.3×1.0×0.28		7世紀中葉
SK24	2.9×2.0×0.32		7世紀末～8世紀初頭
SK25	3.3×3.0×0.14		7世紀代
SK26	4.0×2.5×0.40		
SK27	2.3×1.8×0.87		
SK28	4.8×2.4×0.33		
SK29	1.3×1.5×0.36	先行　SD23	
SK30	2.6×1.4×0.23	先行　SD23	7世紀代

第8表　B_3地区土坑一覧表

(4) 自然河川（ＮＲ01）

ＮＲ01はＨ・Ｉ－23区で検出され，検出長38.00m，最大幅8.8m，深さ0.55mを測る。方向は，Ｎ－41°30′－Ｗで，南から北へ流れていたものと考えられるが，南北端は消滅しており流路の最深部が残存して検出されたため確証はない。南北端の状況から見て，単なる窪地の可能性もあるが，帯状に遺存していることから自然河川とした。

埋土は４層に区分され，上層から第１層灰黒色粘質土，第２層淡黒褐色粘土，第３層灰白色粘土，第４層灰黒色粘土とした。

土層の堆積状況から自然堆積と推定され，黒色系の粘土が多く砂層が形成されていないことなどから，あまり水が流れず淀んでいた状況が推定される。

遺物は埋土中から若干得たが，図化することができない程度の破片のみであり断定は出来ないが，その胎土から見て弥生土器と考えられる。

(5) ＳＸ01

ＳＸ01は，ＳＤ14の埋土を切りこんだ土坑で，土器埋納坑と考えられる状況で検出された。土坑は，第68図189の土器が安置できる程度の径46cmを測り，検出した状況での深さは25cmであった。

出土土器は上半部が後世の耕作によって削られていたが，胴部はほぼ完全に残っていた。

年代は，ＳＤ14を切っていることからこれよりも後出することは確実であるが，埋納されていた土器が弥生土器であることがこの遺構の性格を複雑にしているといえよう。

現状では，弥生土器の再利用と位置付けておきたい。

3．遺　物

1）B_3地区の遺物

(1)　掘立柱建物出土の遺物

掘立柱建物の遺物は，建物を構成する柱穴埋土中から出土したものである。柱穴埋土は，その多くが単層から成っており，建物遺構を建てたときか廃絶に伴うものであるかの区分は出来ていないが，後者の可能性が高い。

ここでは，図化し得る遺物のすべてを抽出して図示した。図化し得なかったもののなかに，年代決定に係わる遺物が存在したときのみ文中で触れることにした。

ＳＢ01

1は，土師質羽釜の口縁部である。体部はほぼ垂直に伸び，外上方へ屈曲したのち垂直に伸びる。口唇部は外面で拡張する。鍔は受口になり，体部から少し水平に伸びた後ゆるやかに外上方へ伸びる。鍔から下半は，二次焼成のため赤変している。

2は，弥生土器の底部である。

ＳＢ02

3は，弥生土器の壺形土器口縁部である。頸部から外上方に伸び，ゆるやかに水平方向に向かい口縁端部に至る。口唇部は丸みを持つ平坦面をなす。

4は，弥生土器の鉢形土器口縁部である。体部は半球状を呈し，口縁端部は水平方向に断面三角形状に張り出し鍔状を呈するものと考えられる。

5は，弥生土器の底部である。

6も，弥生土器の底部である。

3～6は，ＳＢ02の柱穴埋土中から出土したもので，ＳＫ01出土遺物に先行し弥生土器の範⊡でとらえられる資料である。

ＳＢ03

7は，弥生土器の鉢もしくは高坏形土器の口縁部である。体部は外上方に伸び，垂直に屈曲して口縁部を成す。

8は，須恵器坏身で，受け部は受け口状を呈し，立ち上がりは外湾ぎみに直立する。

9は，須恵器坏身で，体部は外上方へ直線的に伸びる。

10は，土師器坏で，平底を持ち外上方へ伸びる。器壁は薄く，焼成が良好である。平安時代に下る資料である。

11は，土師質甕の口縁部である。体部は垂直に伸び，口縁部は外湾ぎみに外上方に伸び，端部を垂直に拡張した口縁部を持つ。

12は，土師質竈の炊き口の破片である。体部は垂直に立ち，炊き口のきり込みは外傾しており，これに添う形でやや外側に覆いを持つ。

遺物の編年的位置付けとして，8が飛鳥II[註]に，10は平安時代に位置付けられる等バラツキが見られる。

ＳＢ07

13は，須恵器坏蓋である。扁平な宝珠つまみを持ち，体部は平坦な面からゆるやかに端部方向に至る。

14は，須恵器坏蓋である。体部はやや丸みを持ち，口縁端部から折り返したようなかえりを付ける。

15は，須恵器坏蓋である。体部はやや垂直に立ち上がりぎみに伸び，かえりは内傾する。外面全面に自然釉が見られる。

16は，須恵器坏身である。体部は高台との境から直線的に外上方へ伸び，高台も対象的に外傾する。全体に磨耗が著しい。

17は，須恵器椀の口縁部である。外面は，強いヨコナデで凹みが見られる。この結果，体部が半球状を呈し，口縁部が外上方へ伸びる形態になっている。

18は，須恵器椀の口縁部で，半球状の体部を持つ。

19は，須恵器甕の口縁部である。頸部から外反して端部は玉縁状につくる。

20は，須恵器壺の口縁部である。頸部から外反して端部は外傾する平坦面を持つ。

21は，弥生土器壺形土器口縁部である。口縁部は，頸部から外反して端部に至る。端部には外傾する平坦面を持つ。

22は，土師器脚付き椀である。脚端部は鋭く終わり脚台には適さず，また径も小さい。蓋の可能性もあるが，既存の資料中に類例が無いため詳細は不明である。

遺物の編年的位置付けとして，14が飛鳥II，13が飛鳥Ｖに比定されよう。

ＳＢ08

23は，土師器椀で半球状の体部を持つ。口縁部直下外面にヨコナデが見られ，やや凹み状を呈する。

24は，須恵器椀で半球状の体部を持つ。口唇部直下外面にヨコナデが見られ，やや凹み状を呈する。

25は，須恵器高坏脚部で低脚になると考えられる。

26は，土師質甕の口縁部で，イチジク形の体部に外反する口縁部を持つ。端部は鋭くとがる。

27は，土師質甕の口縁部で外反し端部は鋭い。

28は，土師質土鍋の口縁部で，口唇部直下をヨコナデすることで外傾する平坦面を持つ。

遺物の編年的位置付けとして，25が飛鳥II，28が中世後半期まで下る可能性がある。

ＳＢ09

29は，須恵器椀で端部は丸く終わる。

30は，須恵器甕の口縁部で，外反して端部に至る。端部は，外傾する平坦面を形成する。

31は，弥生土器甕形土器口縁部で「く」の字に外反する。端部は平坦面を成す。体部内面は縦方向のヘラ削りが見られる。

32は，弥生土器壺形土器口縁部で，端部は下方に拡張して内傾する平坦面を有する。

ＳＢ10

33は，須恵器坏蓋である。体部はふくらみをもって頂部に至る。かえりは端部からの折り返し状を呈し，ほぼ垂直に下る。

34は，須恵器坏蓋である。体部は，平坦に近い頂部から緩やかに下り，垂直に屈曲して端部に至る。

35は，須恵器坏蓋である。体部は頂部方向から緩やかに下がり，垂直に屈曲して端部に至る。

36は，須恵器坏蓋である。平坦な頂部から丸みをもって下がり，平坦面を形成した後屈曲して垂直に下り端部に至る。磨耗が著しい。

37は，須恵器坏身である。丸みを持つ底部から外上方へ直線的に伸びる体部を持ち，端部は丸く終わる。

38は，須恵器坏身である。丸みを持つ底部から外上方へ直線的に伸びる体部を持ち，端部は丸く終わる。

39は，須恵器坏身である。体部は高台部との境から外上方に伸び，脚部は対象的に外下方へ下る。脚端は，つま先上がりになり端部平坦面には凹線状の凹みが見られる。

40は，須恵器高坏の脚部で低脚である。

41は，須恵器椀の口縁部で球状の体部を持つ。口唇部直下外面をヨコナデし凹みが見られる。

遺物の編年的位置付けとして，33・37・38が飛鳥II，34・35が平城Ｉ，36・39が平城IV－VIの範疇でとらえられよう。

ＳＢ11

42は，須恵器坏蓋で，平坦な頂部に扁平なつまみを持つ。

43は，須恵器坏蓋で，口縁端部は細くなり，やや内側に入ったところで垂直に下方に下る短いかえりが付く。蓋は，扁平な感じとなる。

44は，須恵器坏身で，高台が付くものと考えられる。体部は，高台との境から低く外上方へ僅かに伸び，屈曲して外上方へ伸びる。端部は丸く器高は低い。

45は，須恵器坏身である。体部は高台との境から内湾ぎみに立ち上がる。高台は，外傾する。

46は，須恵器坏身である。体部は高台との境から内湾ぎみに立ち上がる。高台は外傾し，ややつま先上がりになる。

47は，須恵器坏身の口縁部である。体部はやや丸みを持って外上方に伸び端部は丸く終わる。

48は，須恵器椀の口縁部で半球状の体部を持つ。口縁部は，端部直下外面を横ナデするためや

や垂直に近い面をつくる。

遺物の編年的位置付けとして，全点とも飛鳥IV－Vの範疇でとらえられる。

ＳＢ13

49は，弥生土器壺形土器頸部片である。頸部に平坦な貼り付け凸帯を持ち，凸帯上平坦面いっぱいを刻んでいる。

50は，弥生土器底部で明瞭な平底を呈する。

ＳＢ17

51は，須恵器坏か椀の口縁部で端部は細く終わる。

52は，須恵器高坏脚部で，脚が人の字状になり平坦面を形成したのち屈曲内傾する。接ち面は三角形になる。

53は，弥生土器底部で，明瞭な平底を呈する。磨耗が著しい。

遺物の編年的位置付けとして，52が飛鳥IIに比定される。

ＳＢ18

54は，須恵器体部片で内外面ともナデ調整である。外面にはヘラ記号である末広がりの三本線が見られる。

55は，土師器甕の口縁部で，頸部からやや内湾ぎみに外上方に伸び，端部は平坦面をなす。

56は，弥生時代に属する土製紡錘車である。

ＳＢ22

57は須恵器坏身の口縁部である。体部は直線的に外上方へ伸びる。

ＳＢ25

58は，須恵器坏蓋の口縁部である。口縁端部は内面で三角形状に肥厚する。これは，内面のかえりの退化形態と考えられる。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥（IV）Ｖである。

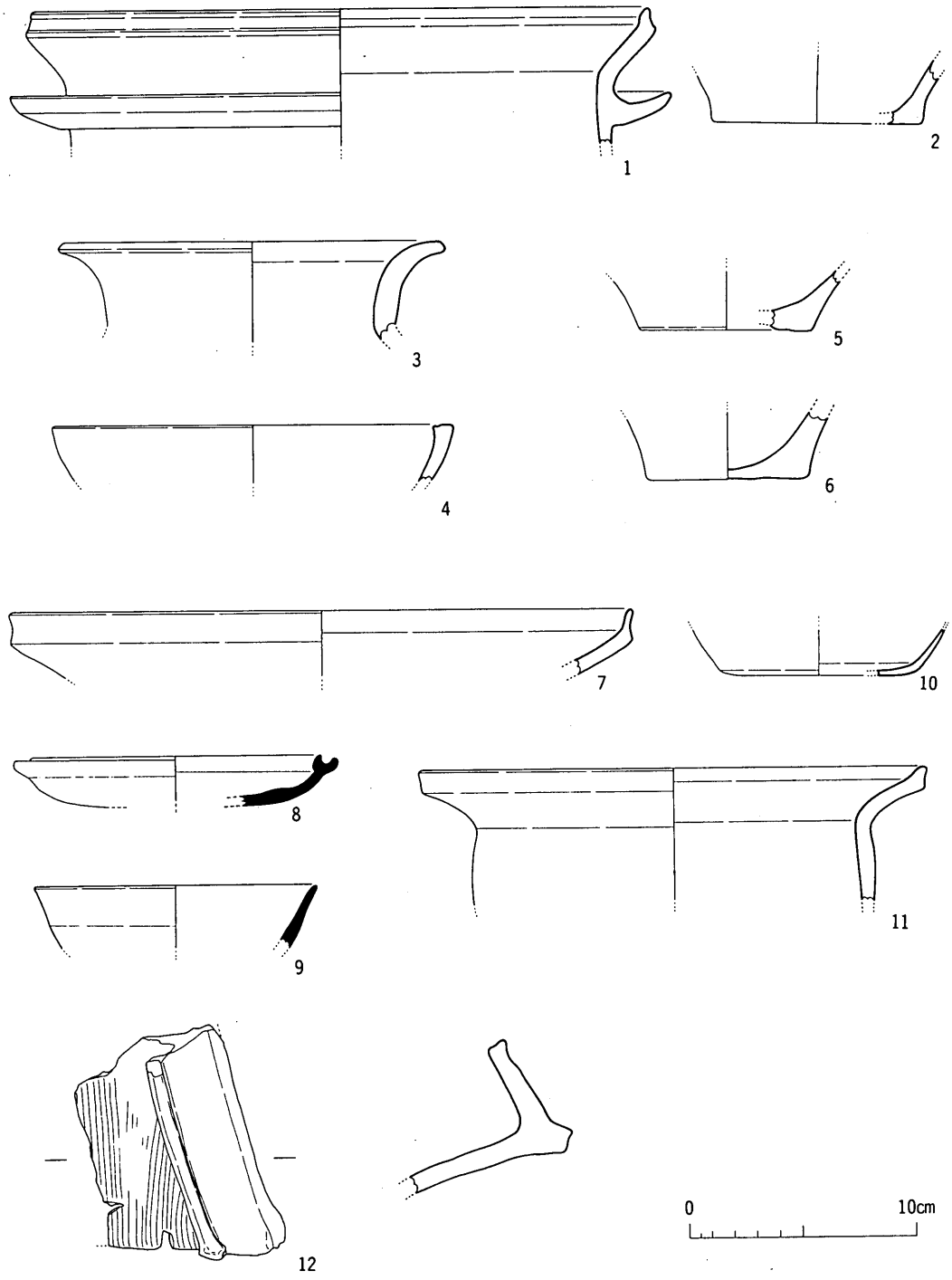
ＳＢ32

59は，須恵器坏蓋である。丸みを持つ頂部からえぐるように外下方に伸びる体部を有し，内側に丸みを持つ断面三角形のかえりが見られる。

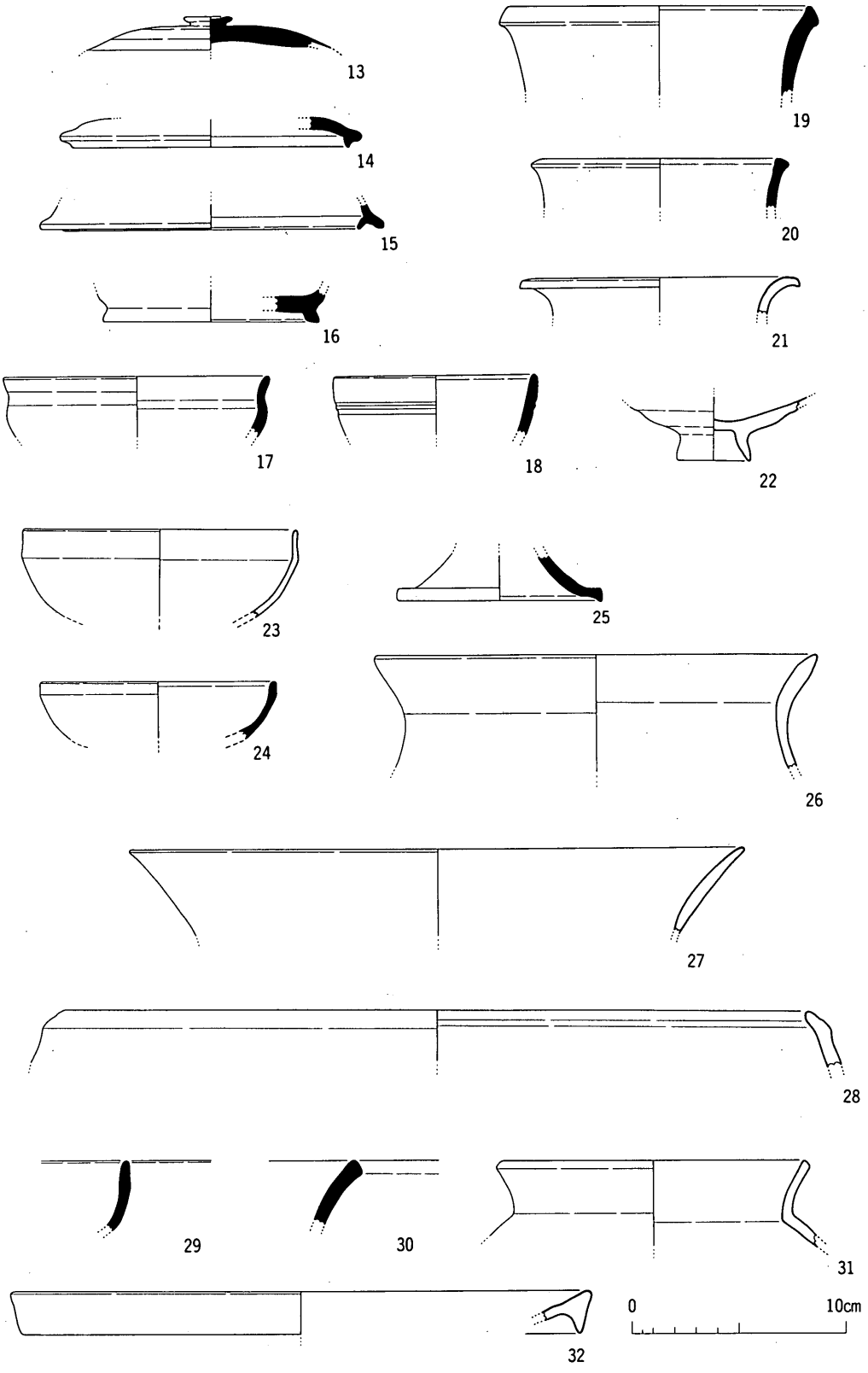
60は，須恵器坏身である。丸みを持つ底部から外上方に伸び，端部は鋭く終わる。

遺物の編年的位置付けとして，60が飛鳥II，59が飛鳥III－IVに比定されよう。

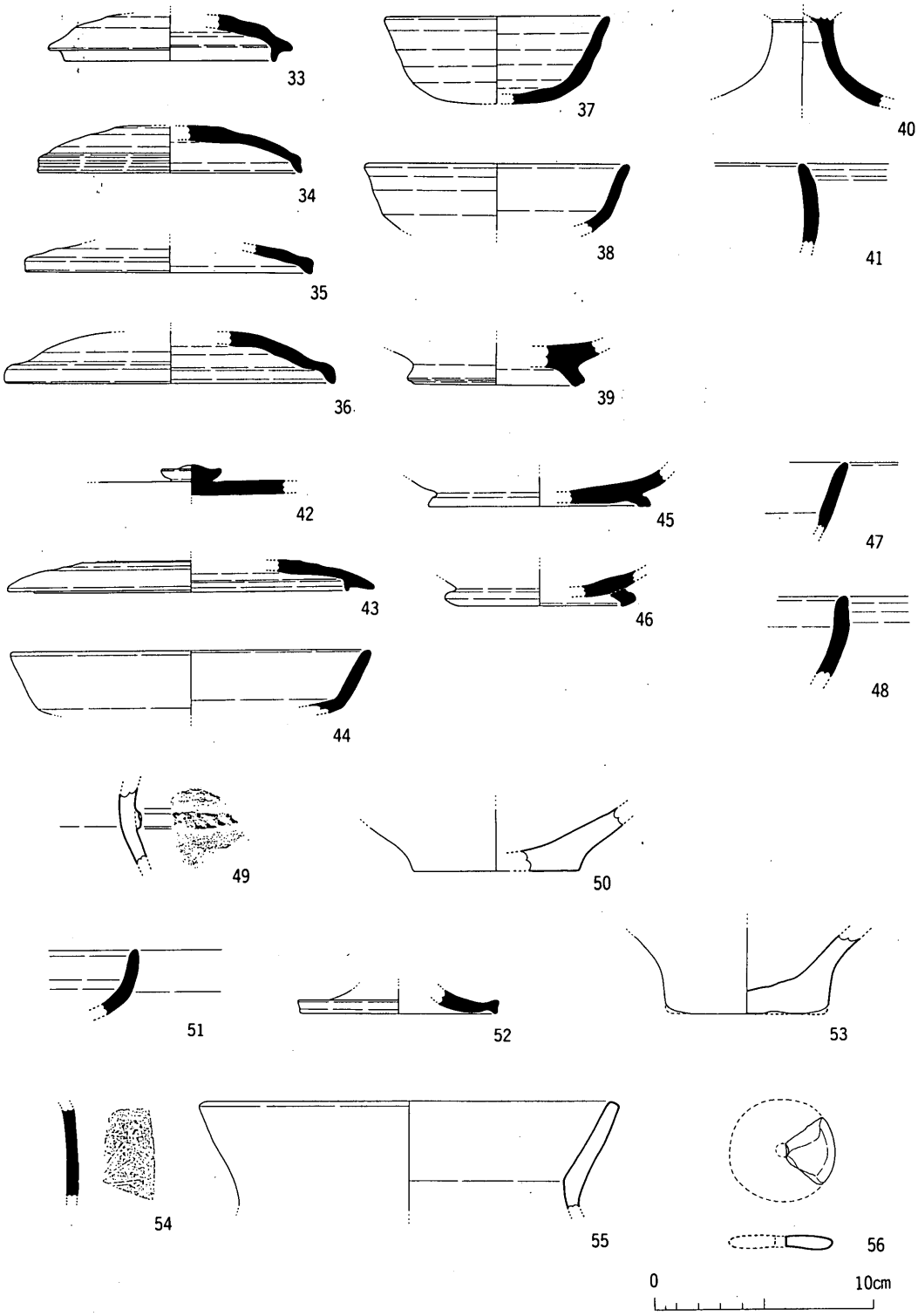
註　飛鳥Ｉ～Ｖ及び平城Ｉ～VIIの区分は下記に拠った。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VII』1976
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』1978



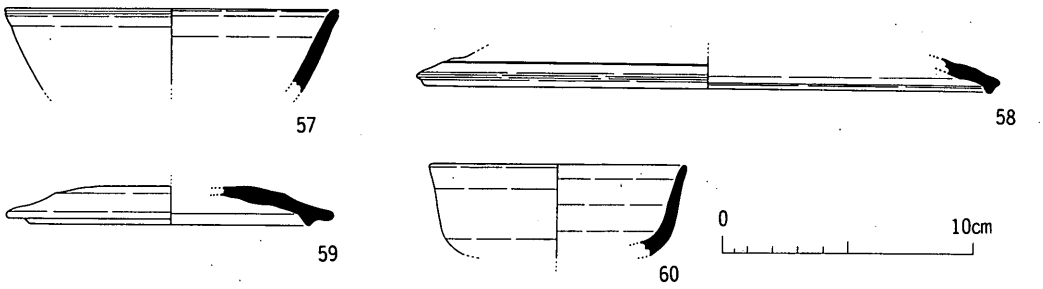
第57図　ＳＢ01―ＳＢ03出土土器実測図



第58図　ＳＢ07―ＳＢ09出土土器実測図



第59図　ＳＢ10―ＳＢ18出土土器実測図



第60図　ＳＢ22―ＳＢ32出土土器実測図

(2)　溝出土の遺物

ＳＤ04

61は，弥生土器の底部で明瞭な平底を有する。

ＳＤ05

62は，須恵器坏蓋で，平坦な頂部からゆるやかに外下方に下がり，垂直に屈曲して端部に至る。頂部にはヘラ削りが見られる。

63は，生焼け須恵器の椀である。底部は切り高台状になっており，体部は半球状を呈する。端部は鋭い。内･外面ともに磨耗している。(見慣れない器形であり，焼成からして土師器の可能性も残る。)

64は，須恵器坏身である。底部は平底でヘラ切りされている。体部は底部から丸みをもって外上方に伸び，端部は外面で肥厚する。

65は，須恵器坏身である。高台は，体部との接線に切り込みが見られ，垂直に下がった後外傾する。体部は高台との接点から外湾しながら外上方に伸びる。

66は，須恵器坏身である。高台は台形を呈する。

67は，須恵器坏身である。体部は内湾しながら外上方に伸び，上部で外反ぎみになる。高台は四角形を呈し，３面が凹面になる。

68は，須恵器坏身である。体部は外上方に伸びた後丸みをもって屈曲し，内湾しながら外上方へ伸びる。高台は外傾が強く，つま先上がりになる。

69は，須恵器坏身である。体部は内湾しながら外上方に伸び，高台は外傾する。器形はいびつで，高台底面幅は約１cmを測り，本来はつま先上がりになると考えられる。

70は，須恵器坏身である。体部は内湾しながら外上方に伸び，高台は丸みをもって外傾する。

71は，須恵器坏身である。体部は，短く直線的に外傾したのち丸みをもって屈曲し，直線的に立ち上がる。高台は短く外傾し，つま先上がりになる。内・外面とも摩滅している。

72は，須恵器坏身である。体部は内湾ぎみに外上方に伸び，高台は外傾してつま先上がりにな

る。底部はヘラ切りである。

73は，須恵器坏身である。体部は外上方へウェーブしながら伸び，高台は外傾しつま先上がりになる。

74－77は，須恵器鉢で，口縁端部外面を強くヨコナデしている。

78－79は，須恵器鉢で，口縁端部外面を強くヨコナデし，口唇部がやや水平に拡張されている。上面は平坦である。

80は，土師器坏身で（蓋の可能性もある。）高台部から外傾し，丸みを持って内湾しながら立ち上がり外反して終わる口縁部を有する。高台は外傾する。

81は，須恵器高坏もしくは坏身で直線的な体部から外反して端部に至る。

82は，須恵器壺・甕の口縁部で外反して伸びたのち，ほぼ直線的に内傾する。

83は，須恵器壺・甕の口縁部で外反して上部に伸び端部外面が断面台形状に肥厚して終わる。

84は，須恵器壺・甕の口縁部で外反して伸びたのち，外面が肥厚する。ヘラ記号が見られる。

85は，須恵器壺・甕の口縁部で外反して伸び，端部外面が断面三角状に肥厚して終わる。口縁部は空気が入って肥厚し，原形をとどめない。

86は，須恵器壺の口縁部で短く外反して伸び，平坦な口唇部を有する。

87は，弥生土器底部片で，やや突出する平底である。

遺物の編年的位置付けとして，64が飛鳥II，68・72・73が飛鳥V，62・71が平城I－IIに比定される。

SD06

88は，須恵器坏蓋である。完形であるが，ひずみが著しい。つまみは扁平で，体部は頂部からゆるやかに下降し，屈曲して垂直に下がり端部を形成する。

89は，須恵器壺・甕の口縁部で，口縁部は外反したのち端部外面が肥厚し，上面には平坦面が形成され内側に拡張する。体部内面には青海波が顕著に見られる。

90は，須恵器椀か壺の口縁部で，口唇部は内傾する。

91は，須恵器椀か坏身の口縁部で摩滅が著しい。

遺物の編年的位置付けとして，88が飛鳥V－平城IIに比定される。

SD07

92は，須恵器坏蓋である。頂部は平坦で体部はここからゆるやかに下り，ほぼ垂直に屈曲して端部に至る。つまみは扁平な宝珠つまみである。

93は，須恵器坏蓋でかえりが見られる。

94－95は，須恵器坏蓋である。

96は，須恵器坏蓋である。体部はゆるやかに下り少し外傾して口縁端部に至る。

97は，須恵器坏身で，体部は高台部から少し外傾し，丸く屈曲してやや内湾しながら立ち上が

り口縁端部で外反する。高台は外傾し，底面が接地する。

98－99は，須恵器坏身である。

100は，須恵器坏身である。体部は高台との境からやや内湾ぎみに立ち上がる。高台はやや内反しながら垂下し，底面はかかと上がりになる。

101は，須恵器鉢もしくは坏身になる。体部は高台との境から短く外傾し，外上方に直線的に伸びる。高台は体部と直角の角度で外傾し，丸みを持って内傾しつま先上がりになる。

102は，須恵器坏身で，内湾しながら立ち上がる口縁部を有する。

103は，黒色土器の椀で，外面は黒色，内面も黒色の可能性がある。体部は内湾ぎみに立ち上がり端部は細く終わる。

104は，須恵器皿の可能性が高く，体部は底部から外傾したのちやや丸みを持って外上方に伸びる。

105は，土師器皿で，底部から丸みを持って上方にのび，底部・体部の境は明瞭になる。

106－107は，須恵器坏身もしくは鉢である。

108は，須恵器平瓶の口縁部片と考えられるが，口径・傾きに不自然さが残る。

109は，須恵器甑の把手部分である。

110は，土師器壺で，焼成温度が高いと推定される。口縁部は短く外傾ぎみに立ち上がり，体部は肩の張った扁平な球形になるものと考えられる。肩部には刷毛目が見られる。(混入の可能性が高い。)

111は，土師質竈の焚き口部分である。口縁部は円形で，体部はイチジク形に末広がりになり，焚き口を方形に切り込んでいる。焚き口にはやや広めの鍔を巡らす。内面は二次焼成による赤変が見られる。

112は，土師質竈の底部である。111と同一個体と考えられる。

遺物の編年的位置付けの明瞭なものの多くが飛鳥Ⅴに比定される。

ＳＤ09

113は，須恵器坏蓋である。内面にかえりが見られる。

ＳＤ10

114は，須恵器坏蓋である。頂部は不明であるが，体部は頂部から直線的に傾斜し丸みを持って垂直に屈曲する。口縁端部のかえりは「コ」の字形を呈する。

115は，須恵器坏蓋である。かえりは断面三角形を呈し，貼り付けによるものと考えられる。

116－117は，須恵器坏蓋である。

118は，須恵器坏身である。高台は外傾し，かかと上がりになる。

119は，須恵器坏身又は坏蓋である。立ち上がり（又はかえり）は短く，消滅直前の形態である。

120は，須恵器高坏の脚端である。

121は，須恵器平瓶の口縁部で口頸部から外反ぎみに立ち上がり，口縁端部で少し内湾する。

遺物の編年的位置付けとして，114・115が飛鳥II－IV，119が飛鳥IV－V，116・117が平城I－IIに比定される。

SD11

122は，須恵器坏蓋で，かえりは内傾して短く伸びる。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥I－IIIに比定される。

SD12

123は，須恵器高台付き壺の高台部分で，体部との境から「八」の字形に短く伸び脚端は丸い。

124は，須恵器坏身と考えられるが，他の器形の可能性も残る。高台は内湾ぎみに外傾し，脚端は細い。

125は，須恵器坏身もしくは椀である。半球状の体部で，口縁端部は丸く終わる。

126は，須恵器椀である。体部はほぼ直立し口縁端部は丸く終わる。

127は，土師器坏身である。高台は外傾し，短く伸びる。

128は，土師質蛸壺の釣り手部分で，頂部を平坦にしている。

SD13

129は，須恵器坏蓋である。頂部は平坦で外下方に伸び，口縁端部は鋭く終わる。かえり部は口縁端部との間で「コ」の字になる。(飛鳥I－IIの資料か？)

SD15

130は，須恵器坏蓋である。かえり部は口縁端部から1.3cm程内側で短く伸びる。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥III－IVに比定される。

SD16

131は，須恵器坏蓋で，外面の一部に自然釉が見られる。器高は低く，かえり部も短い。

132は，須恵器坏蓋で，器高は低く，口縁端部はほぼ垂直に屈曲する。

133は，須恵器坏身で，丸みを持つ平底から屈曲してやや内湾ぎみに立ち上がり，端部は鋭く終わる。

134は，須恵器平瓶の口縁部で，内外面の一部に緑色の自然釉が見られる。

135は，土師器高坏の脚部で，「ハ」の字形に裾が開く。

136は，土師質甕の口縁部で，ほぼ垂直な体部から屈曲して外上方に伸びる口縁部を有する。口唇部は外傾し外側に拡張突出する。

遺物の編年的位置付けとして，133が飛鳥I－IV，131が飛鳥IV，132が平城I－IIに比定される。

ＳＤ18

137は，須恵器坏身である。口径は小さく，底部はヘラ切りの後ナデている。立ち上がりは短い。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥Ｉ－IIに比定される。

ＳＤ20

138は，須恵器坏蓋である。上面は若干の凹凸はあるものの平らで，屈曲してほぼ垂直に下がる端部を有する。

139は，土師器もしくは生焼けの須恵器の坏身で，高台は「ハ」の字状に広がりつま先上がりになる。高台部外面は黒色を呈する。全体に磨耗が著しい。

140は，土師質甕の口縁部で，「く」の字に外傾し口唇部は平坦になる。

141は，土師質甕の口縁部である。体部は口頸部から外下方に直線的に伸び，直角に近い形で口縁部が外上方に伸びる。口縁端部は，口唇部上のナデによって外側に丸く拡張する。

ＳＤ21

142は，弥生土器壺形土器の口縁部で，外湾ぎみにひらく。上端は平坦な面を有し，下半は接合面である。口縁外面には，棒状竹管の刺突と鋸歯文の一部が見られる。

ＳＤ22

143は，弥生土器壺形土器の口縁部で，頸胴部から直線的に外上方に伸びた後，大きく外反し広口になる。口唇部は下方に拡張し，端面に細い凹線が一条見られる。

144は，古式土師器壺の底部で丸底である。

145は，須恵器高坏である。坏部は半球状を呈し，口縁部外面のヨコナデによってやや内湾している。脚部は「ハ」の字形に広がり，端部で屈曲して内傾する。脚部端面は内湾する。

146－147は，須恵器高坏の脚部である。形状は145とほぼ同様である。

148は，古式土師器壺の底部である。底部にはかすかに平底の痕跡を残す。

遺物の編年的位置付けとして，145～147が飛鳥IIに比定される。

ＳＤ23

149は，須恵器坏蓋で平坦な頂部から外傾して伸び，ほぼ垂直に屈曲して端部にいたる。屈曲部は丸く，明瞭な稜は持たない。

150は，須恵器坏身で高台は「ハ」の字形に外湾しながら広がり，つま先上がりになる。

151は，須恵器坏身で，体部は高台との境から外上方に伸び，高台は外傾しかかと上がりになる。器壁は厚く，シャープな感じはない。体部の立ち上がり，高台との境から一旦横方向に伸びないことなど，新しい遺物とも考えられる。

152は，須恵器坏身の高台で，体部との境から短く外傾し，つま先上がりになる。高台端面は平坦で若干幅が広い。

153は，須恵器坏身の高台で，体部との境から短く外傾してかかと上がりになる。体部は内湾ぎみに立ち上がる。

154は，須恵器坏身で，底部は切り高台状に少し高くなるが，ヘラ切りである。体部は内湾ぎみに外上方へ伸び，丸く屈曲して上方に伸び，口縁端部は丸く終わる。

155は，土師器坏もしくは皿で，口縁部は端ぞり状を呈し短く外反する。

156は，須恵器椀で，半球状の体部に内湾する口縁部を有する。口縁端部は細い。

157は，須恵器椀で半球状の体部に，内湾したのち外上方に短く開く口縁部を有する。口縁部には，一か所片口部がつくられている。

158は，須恵器平瓶の口縁部で，頸胴部の境から，直線的に外上方に伸びる。口縁端部に近い側に一条の凹線文が施される。

159は，須恵器平瓶の口縁部で，頸胴部の境から直線的に外上方に伸びる。口唇部は平坦で，内面が若干肥厚する。

160は，須恵器平瓶か壺の体部である。平底の底部は中央がややふくれており，不安定である。体部は底部から内湾ぎみに立ち上がり，屈曲して内傾する。

161は，須恵器壺・甕の口縁部で，体部との境から外反して伸び，口縁端部外面に四角く肥厚する。また，口唇部は平坦な面を持つ。

162は，古式土師器壺の口縁部で，口頸部から外反し端部は細く終わる。

163は，古式土師器壺の口縁部で，口頸部から外上方に伸び端部は丸い。口縁部外面はやや肥厚し波を打つ。

164は，古式土師器の底部で，形骸化した平底を持つ。

165－168は，土師質蛸壺で釣鐘形を呈する。頂部は紐孔に直交する形で，縦長の指押さえが見られる。

遺物の編年的位置付けとして，154が飛鳥II－IV，153が飛鳥IV－V，149が飛鳥V－平城Iに比定される。

SD25

169は，須恵器高坏の脚部である。脚端はつま先上がりになり，かかとは断面三角形状に少し突出する。

SD26

170は，須恵器坏身で，ヘラ切り及びヘラ削りにより底部は平坦になる。体部は，底部から外上方に内湾しながら伸び，受け部及び立ち上がりは折り返しぎみに短く伸びる。

171は，須恵器高台付壺の高台部分と考えられる。外傾する高台部は端面が幅広く，そのまま接地面になる。

遺物の編年的位置付けとして，170が飛鳥I－IIに比定される。

ＳＤ31

172・173は，須恵器高坏の脚部である。形状は共に「ハ」の字に広がり，脚端は，172が屈曲して内傾し，端面は上下に拡張する。173は，下部にのみ拡張する。共に磨耗が著しい。

遺物の編年的位置付けとして，共に飛鳥IIに比定される

ＳＤ33

174は，須恵器坏身で底部はヘラ切りにより平底風になる。体部は底部から外反ぎみに立ち上がり，中位で内湾ぎみに上方に伸びる。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥II前後に比定されよう。

ＳＤ38

175・176とも須恵器坏蓋で，同一個体の可能性がある。175は扁平なつまみを有し，頂部は平坦でほぼ直線的に外下方に伸び，屈曲して垂直に下がる。共に磨耗が著しい。

遺物の編年的位置付けとして，飛鳥Ｖに比定される。

ＳＤ39

177は，須恵器坏蓋で，扁平な宝珠つまみを有し，体部は頂部からゆるやかに傾斜して端部のほうへ下がる。

178は，須恵器坏身で，体部との境から外傾する高台を持つ。高台は少しつま先上がりになる。

179は，須恵器平瓶の口縁と考えられるが，口径が大きく壺の可能性もある。

遺物の編年的位置付けとして，177が飛鳥Ｖに比定されよう。

ＳＤ45上層

180は，須恵器坏蓋で宝珠つまみを持つ。頂部から傾斜し，垂直に屈曲して端部に至る体部を有する。器高は高い。

181は，須恵器坏蓋で，器形は180同様と推定される。

182は，焼成不良の須恵器甕で，口縁部は短く外反して伸び，端部外面が肥厚する。体部は半球状を呈し，外面にカキ目，内面に青海波が見られる。内外面とも黒変している。

183は，古式土師器壺の口縁部である。外反して大きく開く口縁部に，対称形に伸びる体部を有する。口縁端部外面はヨコナデによって凹んでいる。

遺物の編年的位置付けとして，180が飛鳥Ｖに比定される。

ＳＤ46上層

184は，須恵器坏身で，平底の底部から外傾した後内湾する体部を有する。外面は磨耗が著しい。

ＳＤ46下層

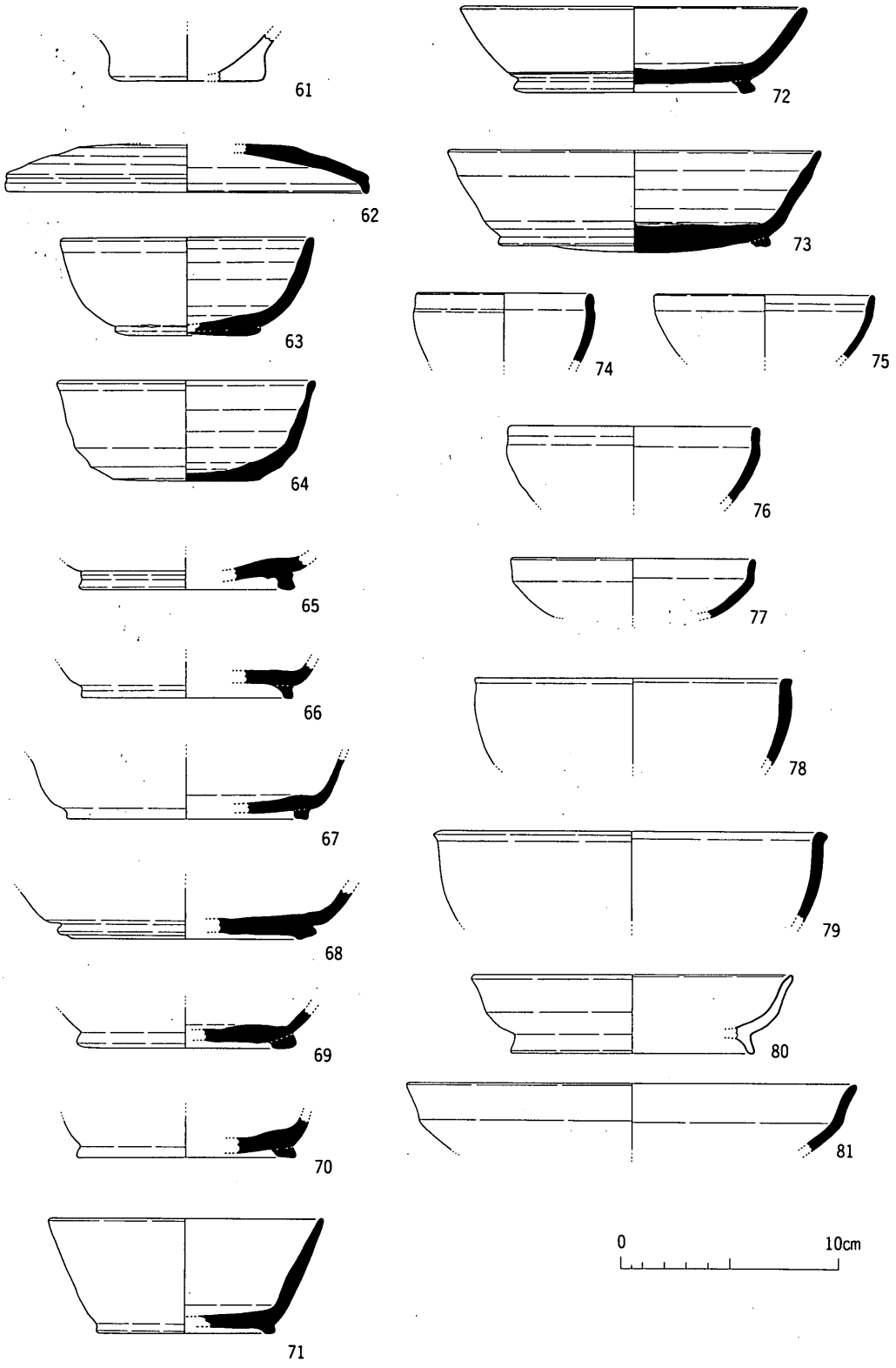
185は，須恵器高台付き壺の高台部と考えられる。体部は短く外傾した後外上方に直線的に伸び，高台は外湾して端部に至る。

186は，須恵器椀の口縁部である。

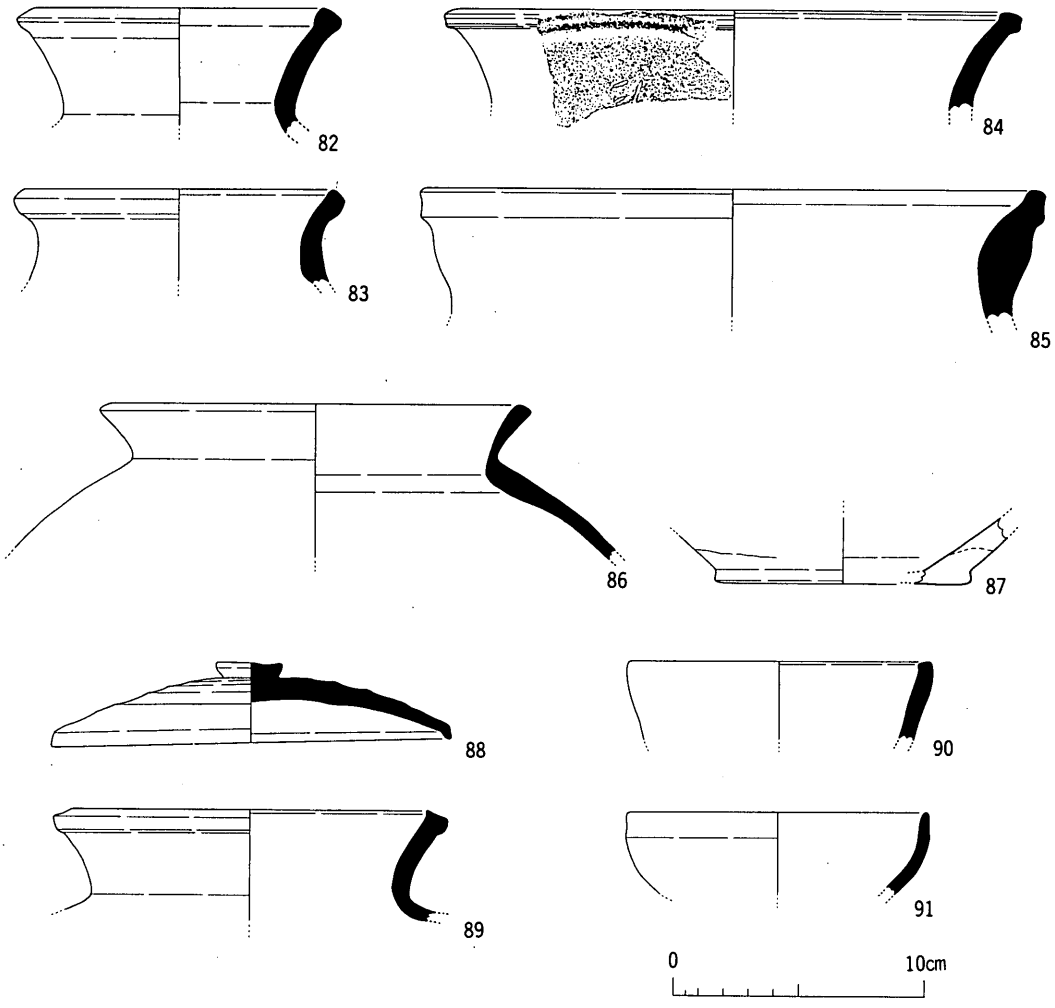
ＳＤ48上層

187は，須恵器坏身の体部で，底部との境から外上方へ直線的に伸びる。

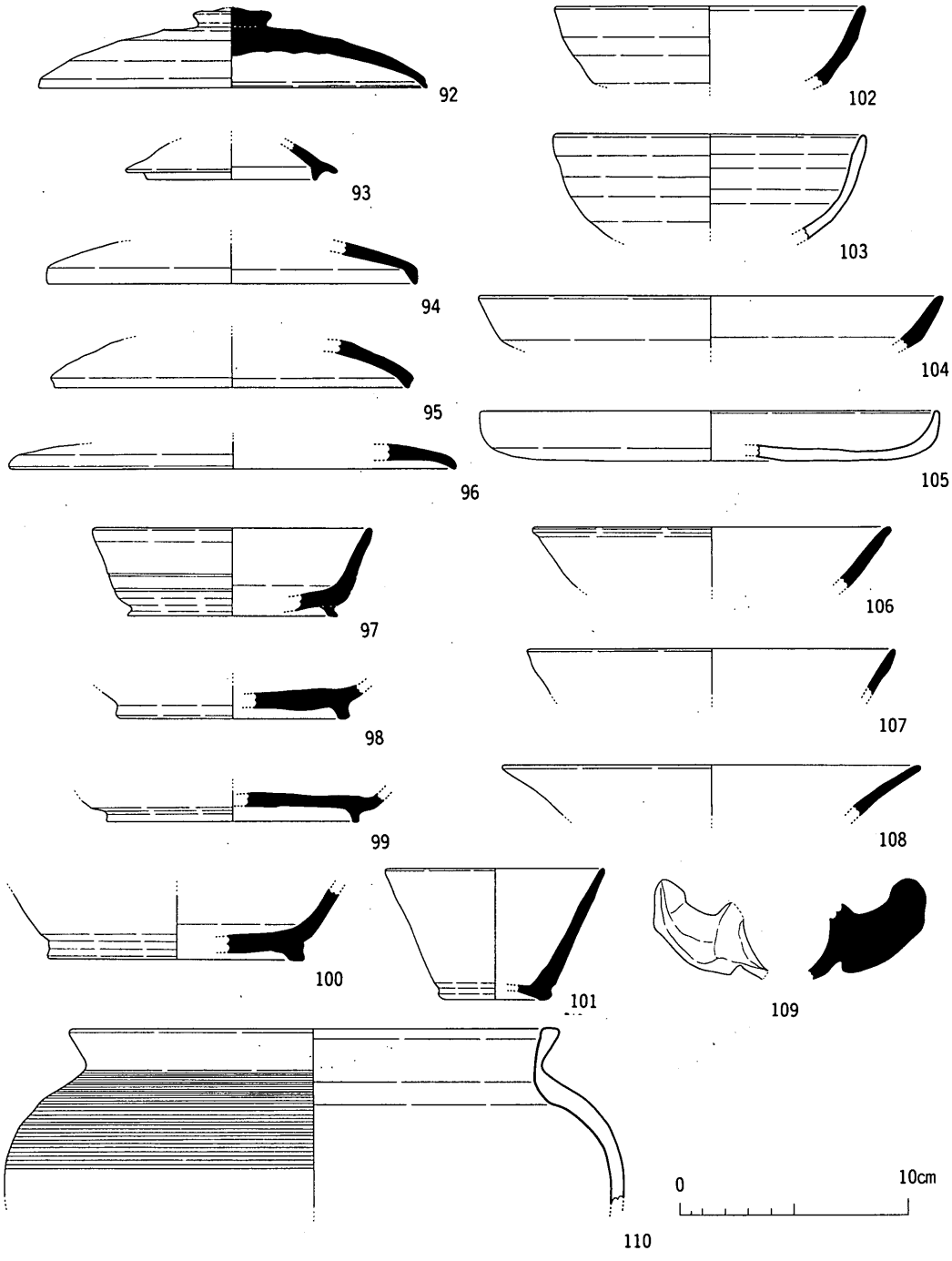
188は，土師器甕である。口縁部は体部との境からやや内湾ぎみに外上方に伸び，体部はこれと対称に外下方に伸びる。器壁は厚く，砂粒が多く目に付く。



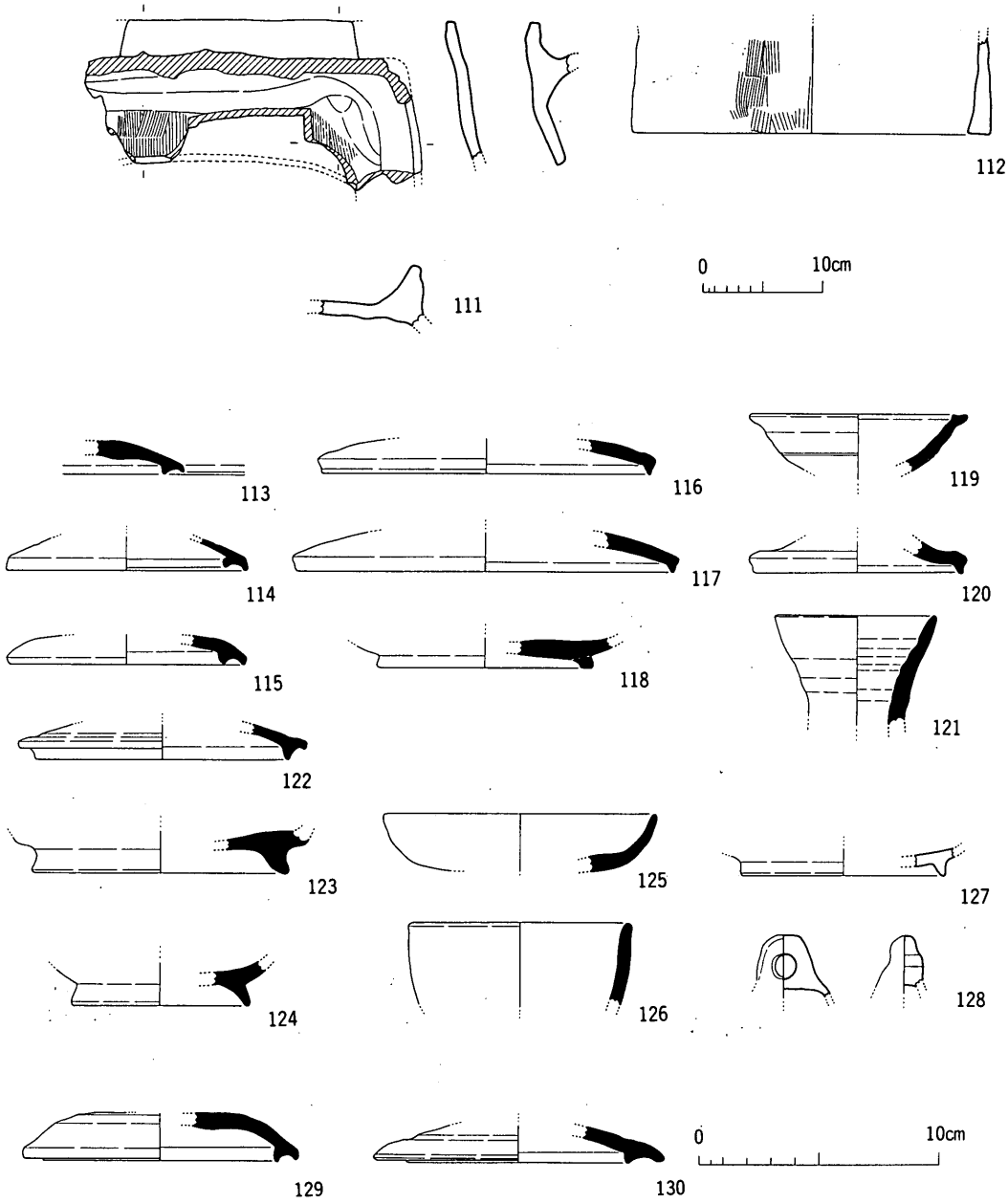
第61図　ＳＤ04―ＳＤ05(1)出土土器実測図



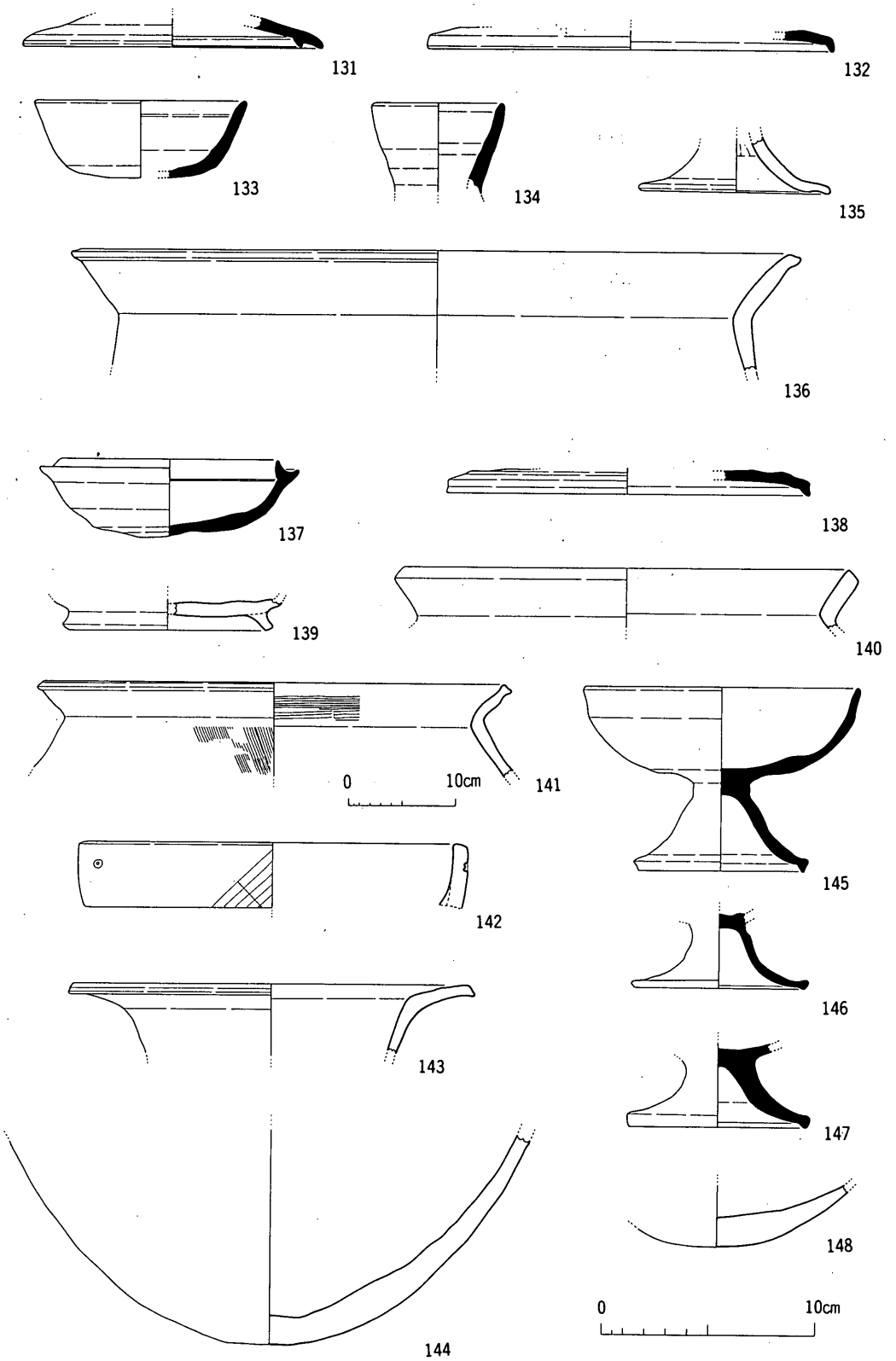
第62図　ＳＤ05(2)―ＳＤ06出土土器実測図



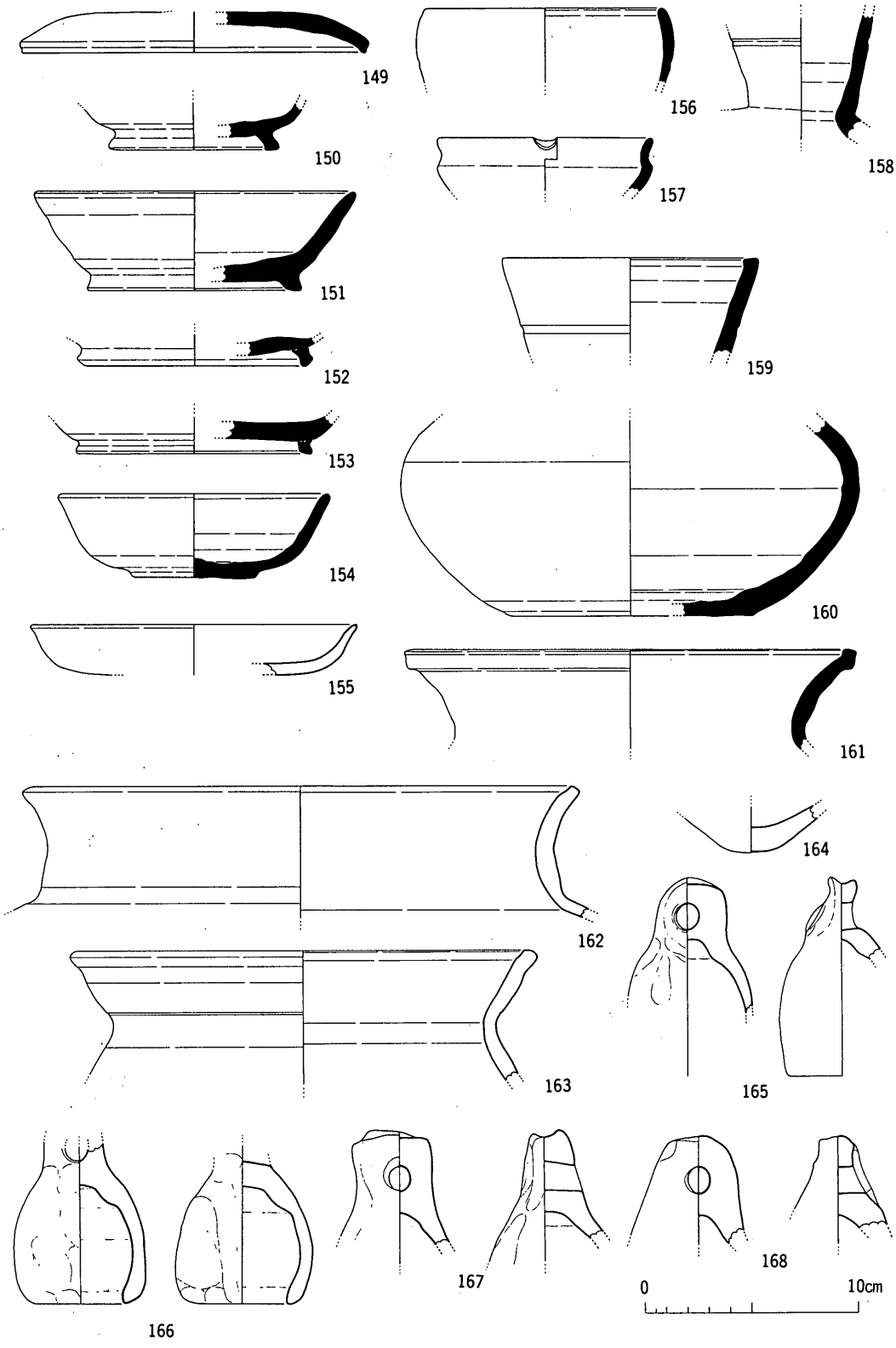
第63図　ＳＤ07(1)出土土器実測図



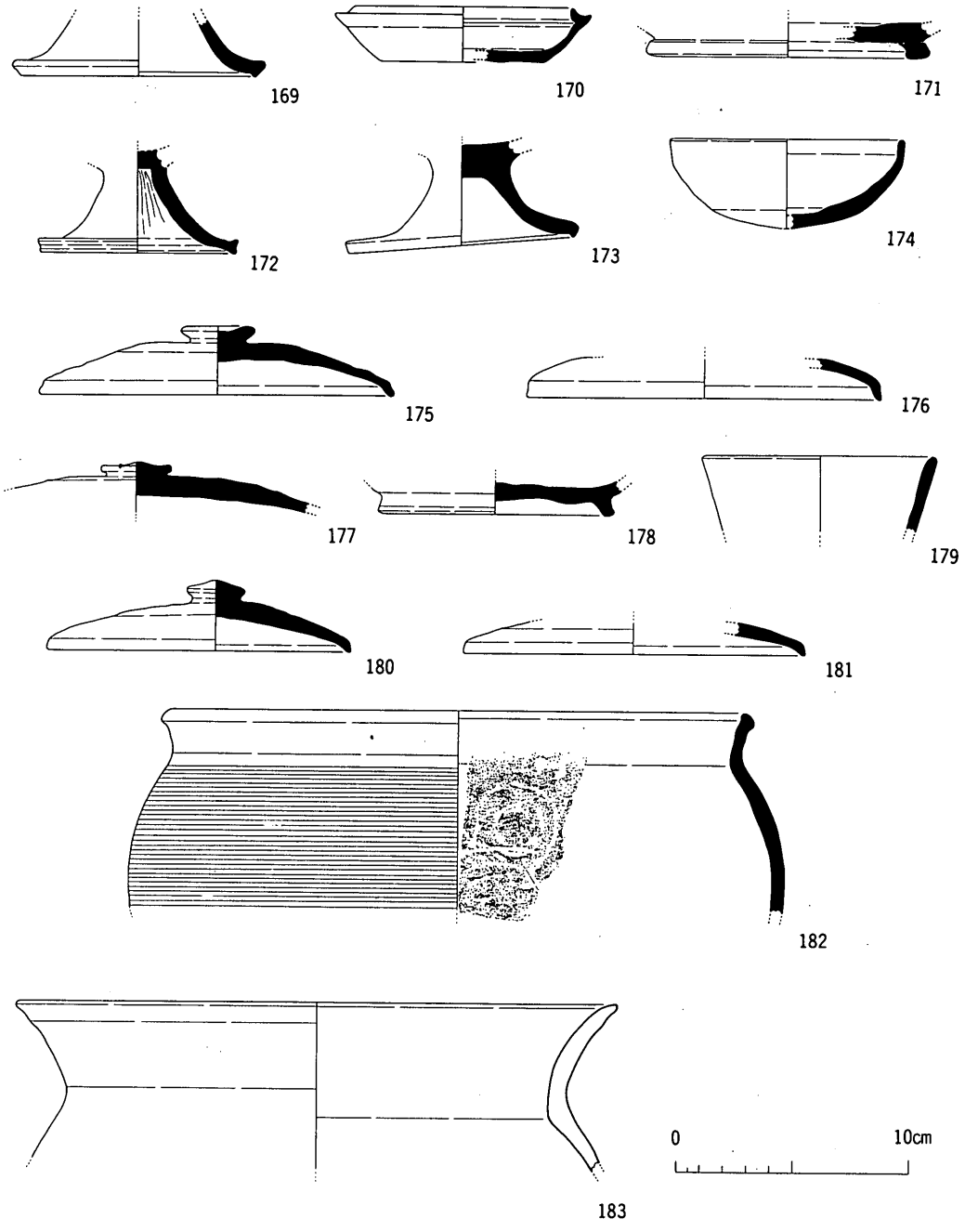
第64図　ＳＤ07(2)―ＳＤ15出土土器実測図



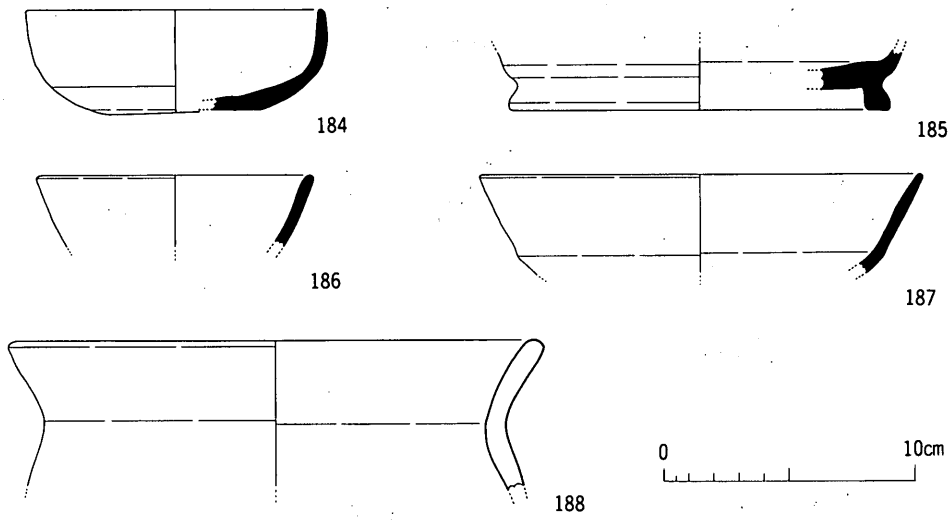
第65図　ＳＤ16―ＳＤ22出土土器実測図



第66図　ＳＤ23出土土器実測図



第67図　ＳＤ25―ＳＤ45出土土器実測図



第68図　ＳＤ46―ＳＤ48出土土器実測図

(3)　土坑出土の遺物

ＳＫ01

190は，古式土師器の壺で，球形の体部に外反する口縁部を有する。口縁端部外面が少し肥厚する。体部内面には指頭痕，外面は刷毛目，口縁部は内外面ともナデ調整である。

191は，古式土師器高坏である。坏部は，脚部との境から外上方に伸び，段を形成して再び外上方へ直線的に伸びる。脚部は下ぶくれになり，屈曲して平らに広がり端部に至る。

192・193・195－198は，古式土師器高坏で，191と同様の形態を有する。

194は，古式土師器高坏である。形態は191とほぼ同様であるが，口唇部に平坦面を持つ点が異なる。

全点とも，布留式併行期に属するものと考えられる。

ＳＫ03

199－201は弥生土器底部片である。３点とも平底で，磨耗が著しい。

ＳＫ05

202は，須恵器坏身で，平底の底部から外上方にやや外湾しながら伸びる体部を有する。

ＳＫ06

203は，須恵器壺の口縁部である。体部は球形で，口縁部は細くなって終わる。

204は，土師質土鍋もしくはほうろくの口縁部である。口唇部は内外面に拡張して「Ｔ」字形になり，体部は半球状を呈する。口唇部及び内面は黒色を呈し，煤の付着が認められる。

205は，204と同一個体片と考えられるが，下半に大きな円孔が見られる。

206は，須恵器高台付き壺の高台部である。高台は体部との境から短く外傾し，かかと上がりになる。体部は外上方に直線的に伸びる。

207は，土師質土鍋の口縁部である。体部は半球状を呈する。口縁部は外反し，端部に向かって徐々に器壁が厚くなる。外面には煤の付着が認められる。

208は，瓦質と考えられる羽釜である。口縁部はほぼ直立し，体部は半球状を呈する。鍔は先端がやや下がりぎみに水平に伸びる。鍔下外面には煤の付着が認められる。

209は，土師質土鍋の口縁部で，体部は底部方向から内湾ぎみに外上方に伸び，屈曲して内上方に伸び端部に至る。

210は，土師質土鍋の口縁部で，体部は垂直に立ち上り屈曲して内上方に伸び，端部は丸く終わる。外面屈曲部下に断面台形の鍔状の凸体が付く。

211は，土師質ほうろくの口縁部で，外面には煤の付着が認められる。

212は，土師質大甕の口縁部である。口縁部の断面形は逆三角形状を呈し，口唇部は丸みを持つ。

中世から近世にかけての遺構と推定される。

ＳＫ08

213は，弥生土器椀形土器である。底部は平底であるが，稜線が不明瞭になりつつある。体部は底部との境から内湾ぎみに立ち上がる。

214は，弥生土器椀形土器である。底部は小さ目の平底で，稜線が不明瞭になりつつある。体部は，底部との境からやや内湾ぎみに外上方に立ち上がる。

215は，小型坩で，やや尖底ぎみの底部を持つ小形の体部に内湾しながら上方に長く伸びる口縁部を有する。内外面とも磨耗が著しい。

216は，弥生土器の底部で平底である。外面には刷毛目が見られる。

ＳＫ09

217は，須恵器壺の体部である。体部は底部から内湾ぎみに立ち上がる。底部はヘラ切りの後ナデている。

ＳＫ11

218は，須恵器坏蓋である。頂部方向からゆるやかに傾斜して垂直に屈曲し，端部に至る。

219－220は，弥生土器の底部である。２点とも体部との境がやや曖昧にはなるものの平底を呈する。磨耗が著しい。

遺物の編年的位置付けとして，218が平城Ｉ－IIに比定される。

ＳＫ14

221は，須恵器椀の口縁部である。口縁部はほぼ直立し端部は細くなる。体部は口縁部から内側に直線的に屈曲する。

222は，須恵器坏蓋である。口縁部は頂部方向からなだらかに傾斜する。内面のかえり部は断面三角形を呈し，内向きに傾斜する。

遺物の編年的位置付けとして，222が飛鳥IVに比定される。

ＳＫ18

223は，弥生土器の底部である。明瞭な平底から外湾して外上方に伸びる体部を有する。

224は，須恵器坏蓋で，頂部方向から緩やかに傾斜し，内面に内傾する断面三角形状のかえりがある。

遺物の編年的位置付けとして，224が飛鳥IVに比定される。

ＳＫ24

225は，須恵器坏蓋で扁平な体部に扁平な宝珠つまみを有する。

226・227は，須恵器坏蓋である。

228は，須恵器坏身である。高台はやや内湾ぎみに外傾し，つま先上がりになる。体部は外上方に伸びる。底部はヘラ切りの後ナデている。

229は，須恵器坏身である。高台は内湾しながら内傾した後，屈曲して外傾し端部に至る。体部は水平に伸びる。

230は，須恵器高坏である。坏部は脚部との接合点から内湾しながら上方に立ち上がる。

231は，須恵器高坏の脚端部である。色調・焼成などから230と同一個体と考えられる。

232は，土師器甕の口縁部で，体部との境からやや内湾ぎみに外上方に立ち上がる。

遺物の編年的位置付けとして，226・227が飛鳥Ｖに比定される。

ＳＫ25

233は，須恵器坏蓋で宝珠つまみはとれている。頂部から外下方に丸みをもって傾斜した後外傾し，端部は丸く終わる。内側に内傾するかえりが見られる。器高は高い。

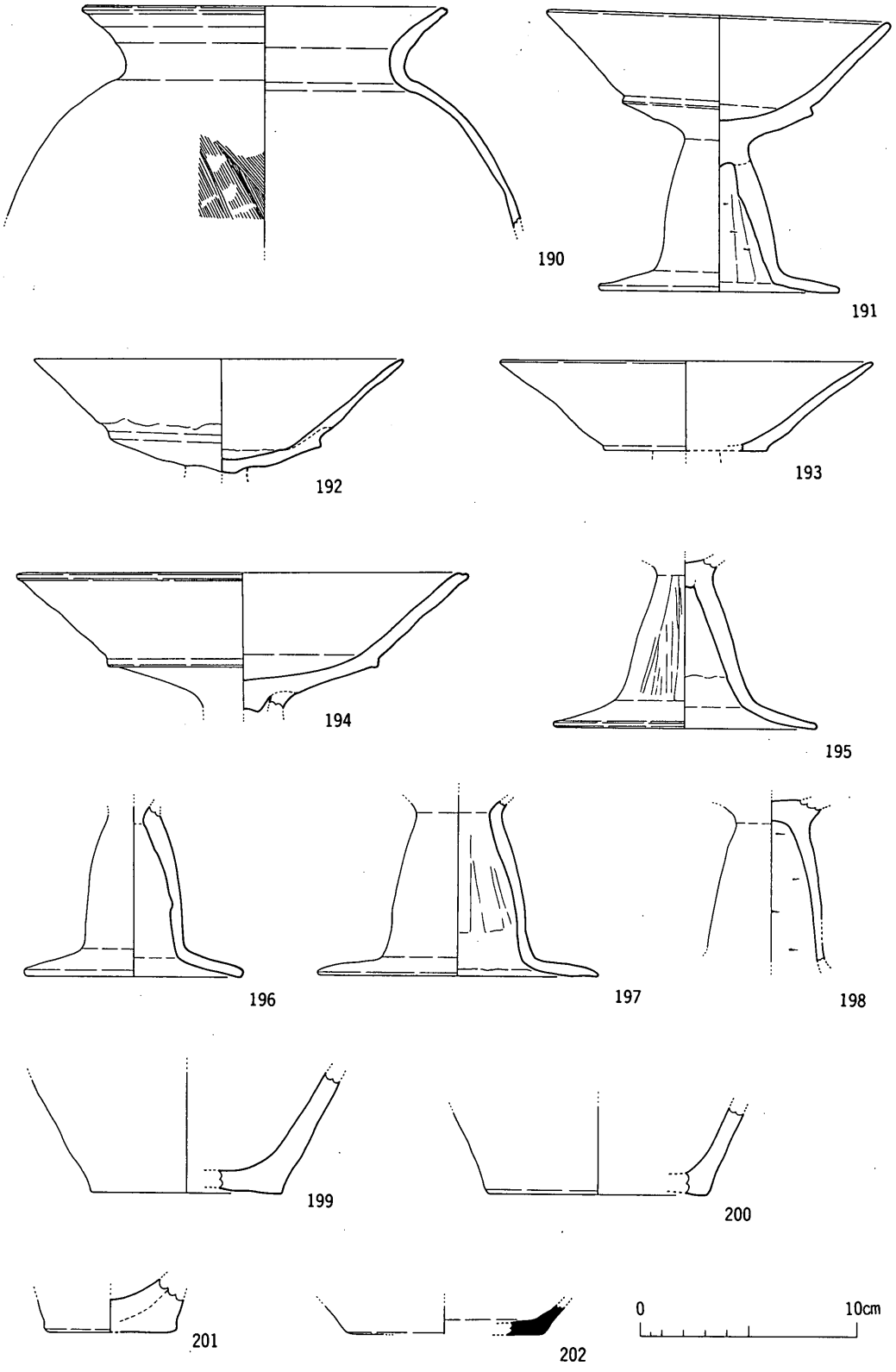
234は，須恵器高坏の脚部で，坏部との境から「ハ」の字状に広がり，屈曲して内傾する断面三角形状の端部を有する。

遺物の編年的位置付けとして，233が飛鳥IIに比定される。

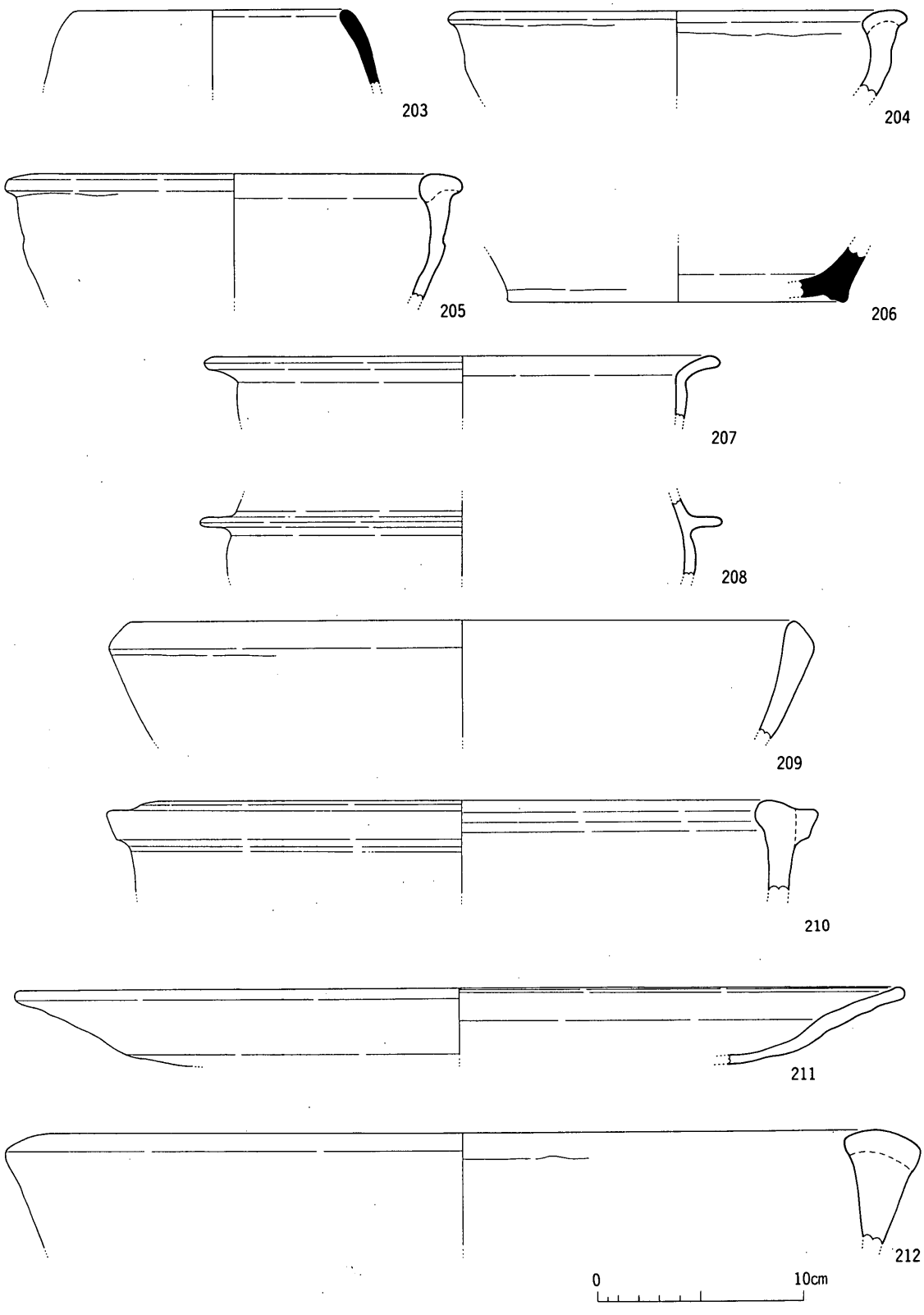
ＳＫ30

235は，須恵器坏蓋である。頂部は平坦でゆるやかな傾斜で端部に至る。外面は自然釉が見られる。内面には内側に三角形状のかえりを持つ。

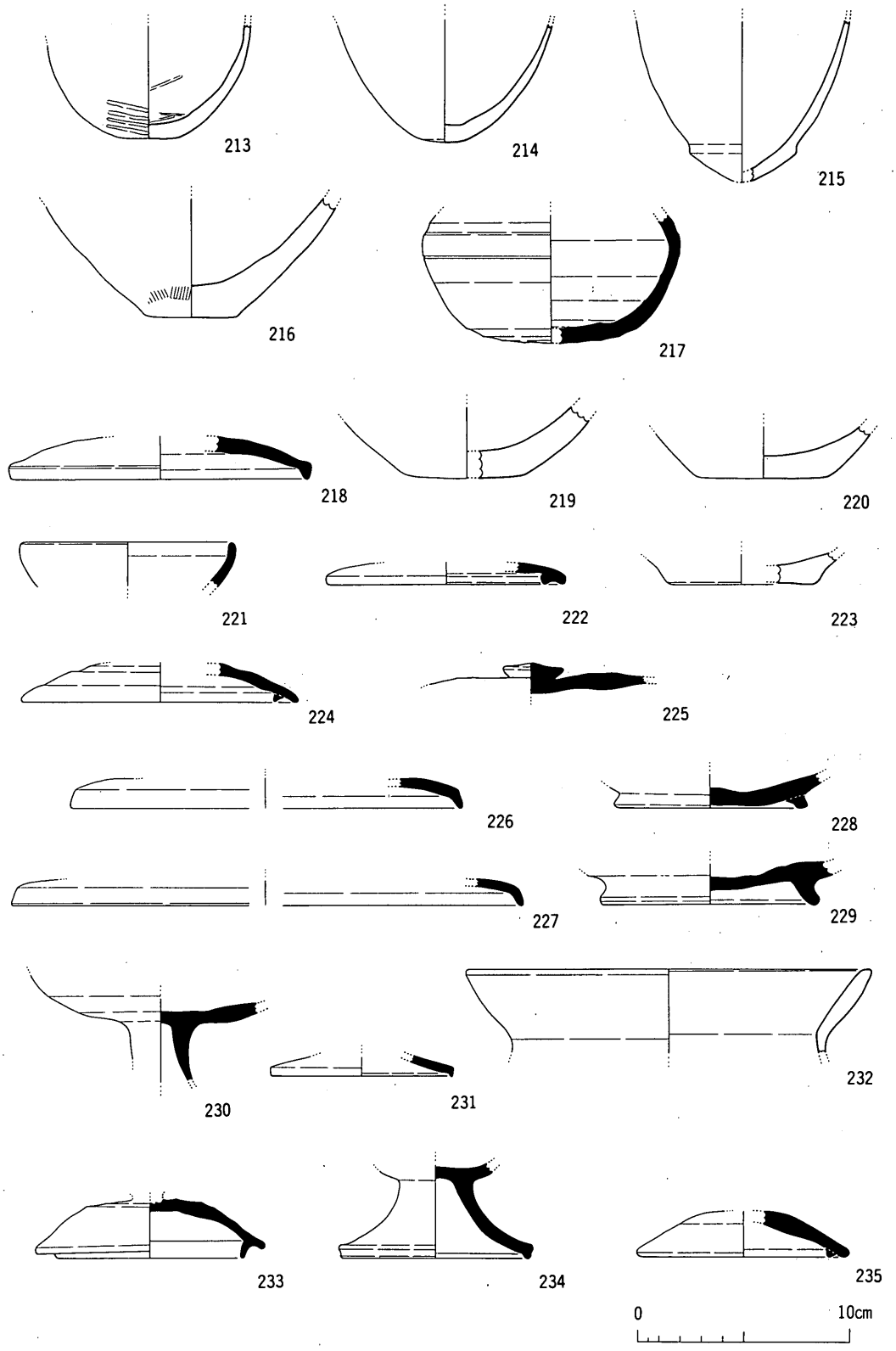
遺物の編年的位置付けとして，飛鳥II－IVに比定される。



第69図　ＳＫ01―ＳＫ05出土土器実測図



第70図　ＳＫ06出土土器実測図



第71図　ＳＫ08―ＳＫ30出土土器実測図

(4) ピット及び柵列出土の遺物

ＳＰ11

236は，土師器坏で高い高台を持つ。坏部は高台との境から外湾する。高台部は境から外下方に伸び，端部に平坦面を持つ。先端は，すこしかかと上がりになる。

ＳＰ13

237は，土師質小皿で，平底から外反した後短く内湾する口縁部を有し，端部は丸く終わる。底部はヘラ切りと考えられるが，磨耗が著しいため明確ではない。

ＳＰ14

238は，須恵器系の椀で，口唇部・体部外面は黒変している。

ＳＰ15

239は，瓦器椀である。磨耗が著しく，内面の暗文は観察できない。外面には指頭圧痕が多く見られる。和泉型瓦器の可能性が高い。

ＳＰ16

240は，土師質小皿で，平底の底部から内湾ぎみに立ち上がり，外傾して端部に至る。底面はヘラ切りである。

241は，須恵器系椀である。瓦器を意識した器形・調整を持つが，焼成が異なる。内面には横方向のミガキが見られる。

ＳＰ35

242は，黒色土器椀である。体部は高台との境から内湾ぎみに外上方に立ち上がり，高台部は外傾して端部は丸い。内面が黒変しているが，摩滅が著しく暗文は不明である。

ＳＰ40

243は，須恵器坏身で，平底の底部から内湾ぎみに外上方に立ち上がり，少し外反して端部に至る。底部はヘラ切りで器高は深い。

244は，須恵器坏身で形態は243と同様である。焼成は不良で，内外面とも磨耗している。

第74図は「Ｕ字形」鉄製鋤先である。先端部が欠落しており全長は不明であるが，推定約35cm，最大幅23.5cm，抉り部は19.5cmを測る。左右で約１cm長さが異なる。断面形状はＹ字形を呈し，刃部で約５㎜の厚みを持つ。基部及び先端部は１cm前後と厚くなる。抉り部に土器が置かれていたことから，土器の一部が錆着して遺存していた。このことは，埋納時点では木質部が付いていなかったことを伺わせる。

ＳＰ41

245は，土師器椀の口縁部で，底部方向から内湾しながら立ち上がり，口縁端部がわずかに外傾する。

ＳＰ44

246は，土師器椀の高台部分である。高台は外傾して端部は丸い。全体的に磨耗が著しく，調整は不明。

ＳＰ50

247は，土師質小皿の口縁部で，内湾ぎみに外上方へ伸び，端部は細く終わる。

ＳＰ53

248は，土師器椀の高台で，断面三角形の高台を有する。

249は，土師器椀の口縁部である。

ＳＰ56

250は，土師質小皿で，平底の底部から外反する口縁部を有する。

ＳＰ59

251は，内黒の黒色土器椀である。外形は内湾ぎみに立ち上がり，端部が外傾する口縁部を有する。

ＳＰ63

252は，土師器椀である。体部は直線的に外上方に伸び，端部でやや内湾する。口径に比べて器高が浅く，坏の可能性もある。

253は，土師器椀で，高台が取れている。

254は，須恵器系椀で，内底に格子状の暗文が見られる。高台は外傾し，断面は三角形を呈する。

ＳＰ68

255は，内黒の黒色土器椀で，高台との境から内湾ぎみに立ち上がり，端部は細く終わる。口縁部外面は所々黒変している。内面の暗文は，磨耗により観察できない。

256は，須恵器系椀である。

257は，土師器椀で，体部は高台との境から低く直線的に伸び，屈曲して外上方に直線的に伸びる。高台はほぼ垂直に下がる。

ＳＰ70

258は，須恵器壺もしくは椀である。体部は内湾ぎみに上方に伸び，屈曲して内傾し端部は細く終わる。

ＳＰ73

259は，土師質甕で，いちじく形の体部に内湾ぎみに外上方に伸びる口縁部を有し，口唇部は平坦になる。内面には稜が見られる。

ＳＰ89

260は，土師器椀で，高台との境から低く外上方に直線的に伸び，屈曲して外上方に伸びる。高

台は，体部との境から少し内傾し，屈曲して外傾し，つま先上がりになる。

ＳＰ93

261は，須恵器坏身である。内外面とも磨耗が著しい。

ＳＰ108

262は，土師質甕の底部である。底部は丸底ぎみで坏部には指頭痕が多く見られる。

ＳＰ133

263は，弥生土器底部で，平底ではあるが稜が不明瞭になっている。内外面とも磨耗が著しい。

ＳＰ135

264は，古式土師器椀で，半球状の体部を持つ。内外面とも磨耗が著しい。

ＳＰ141

265は，須恵器坏身で，体部は高台との境から内湾ぎみに外上方に伸び，高台部は垂直に短く伸びる。継ぎ目には著しいヨコナデが観察される。

ＳＰ145

266は，須恵器鉢である。体部は直線的に構成され，口唇部は内側に拡張する端面を有する。

ＳＡ01

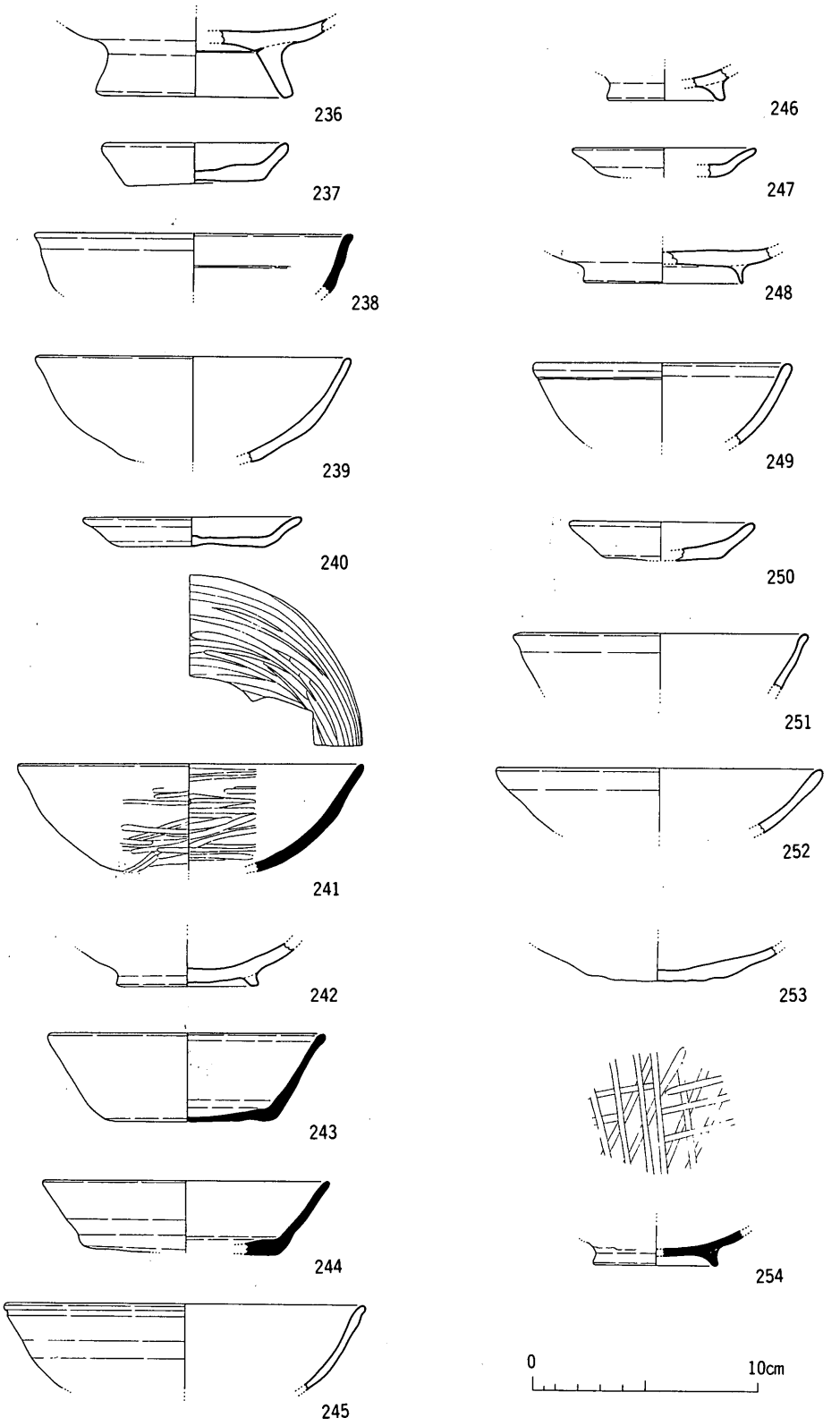
267は，土師器小皿で，平底の底部から外湾した後口縁部付近で内湾する体部を有する。

268は，土師器小皿で，ヘラ切りの平底底部から外湾した後口縁部付近で内湾する体部を有する。底部が厚く，重量感がある。

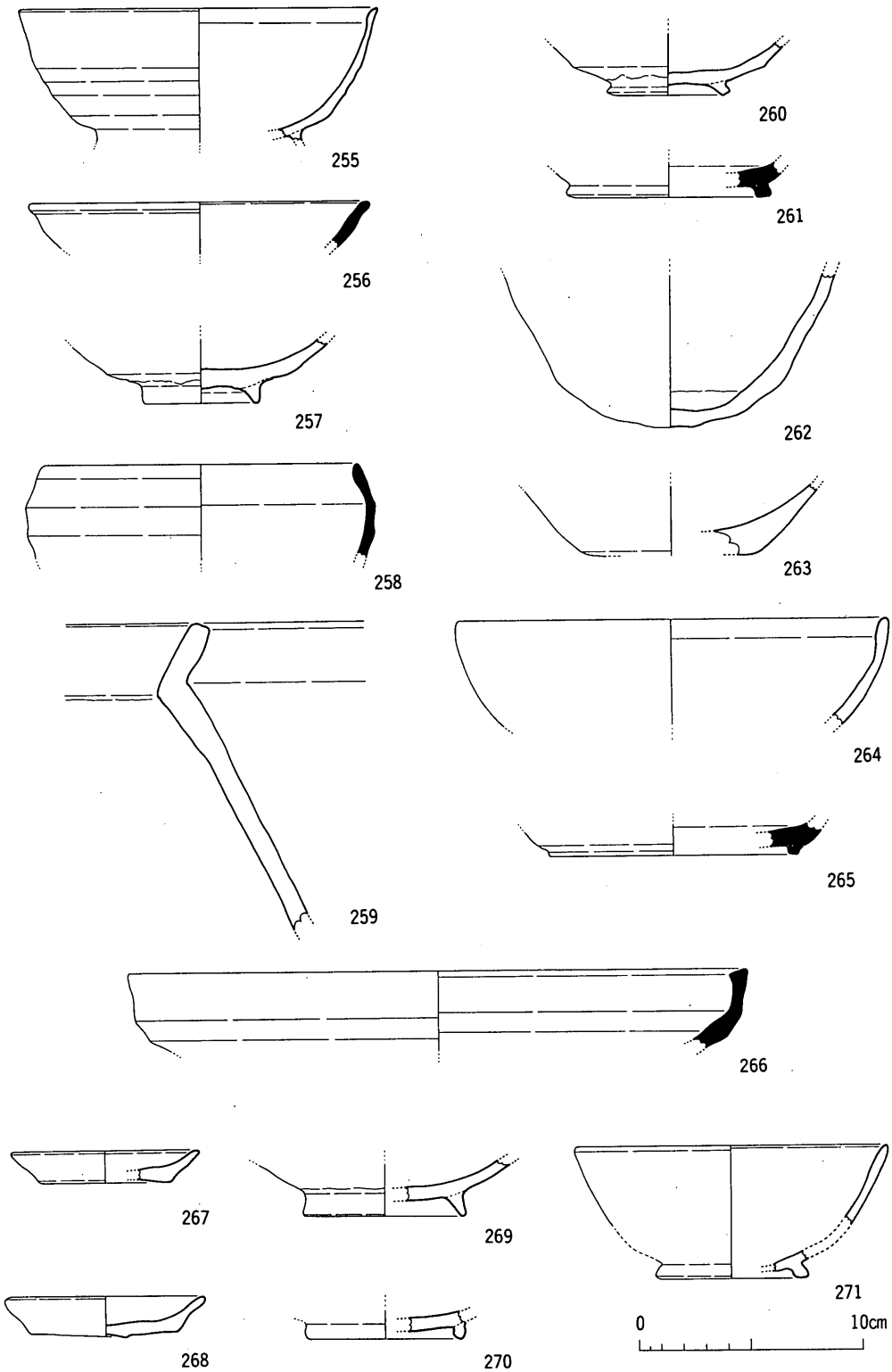
269は，土師質椀で，体部との境から外傾する高台を有し，体部は外上方に伸びる。

270は，内黒の黒色土器椀で，高台は内湾する。

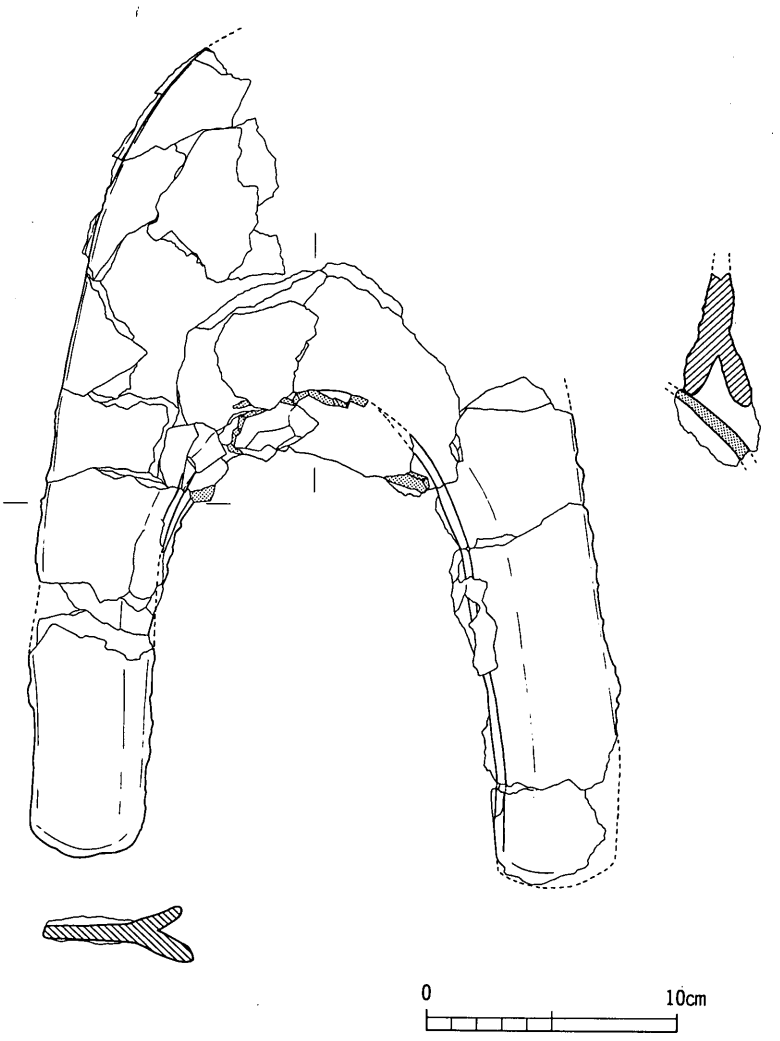
271は，内黒の黒色土器椀で，高台は内湾し，口縁部も内湾したのち細くなって終わる。口縁部外面が帯状に黒くなっている。



第72図　ピット(1)出土土器実測図



第73図　ピット(2)，ＳＡ出土土器実測図



第74図　鉄製鋤先実測図（ＳＰ40）

(5) 包含層出土の遺物

272～310は須恵器である。

272～282は坏蓋であるが，口縁部内面にかえりを持つもの（272～277）と，無いものとに分けられる。年代的には遺構のそれにほぼ重複するものと考えられる。

283～301は坏身である。283～284は坏身側に立ち上がりを持つもので，283は6世紀代に遡る資料と考えられる。285～287は平底である。285は，体部が球形で口縁部直下に強い横なでが見られる等の特徴から坏では無く椀とも考えられる。288～301は高台を持つ。300は，高台部は内湾し体部が大形化するものであろう。

302は，高坏脚部として図化しているが壺口縁部の可能性もある。

303は，器形不明である。底部の張り出しは2方向のみで，上面が円形を呈するものか，楕円形を呈するものかの判別ができない。図示したように，端部はすべて生きておりドーナツ状の製品である。

304～310は壺・甕である。

311～313は須恵器か土師器かの判別ができず，ここでは生焼けの須恵器と考えておく。311・312の2点はヘラ切りを明瞭にとどめる平底を有し，体部は外上方に直線的に延びる。口縁端部は，丸みを持っておわる。

314～316は土師器である。

314は皿もしくは盤である。315は甕の口縁部で，外上方に延びる口縁部の外面が肥厚する。端部は細く終わる。316は口縁部内面に面取り状の部分が見られる。

317～318は黒色土器である。2点とも内面が黒変しているが，摩滅が著しく暗文等は観察できない。

319は緑釉陶器である。器形は坏で，深い体部を有する。胎土は須恵器と同様である。釉薬は黄緑色を呈し体部内面の全面と外面の口縁部直下にのみ施釉されている。

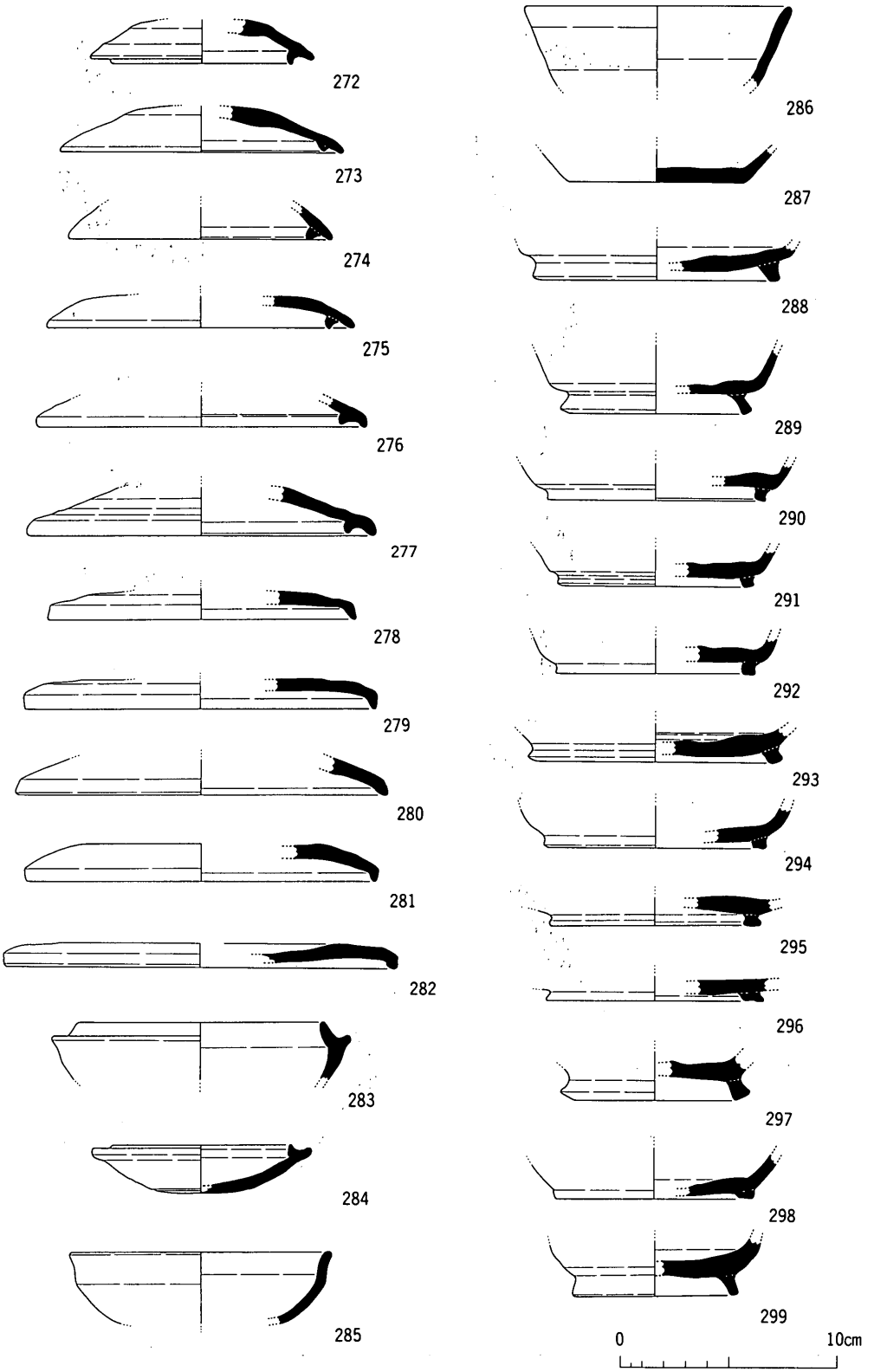
320～321は近世に属する遺物である。320は瓦質の鍋と考えられる。321は備前焼きと考えられる灯明皿である。

322～325は弥生土器の口縁部及び底部である。時期的には弥生時代の後期中葉～末に位置づけられる。

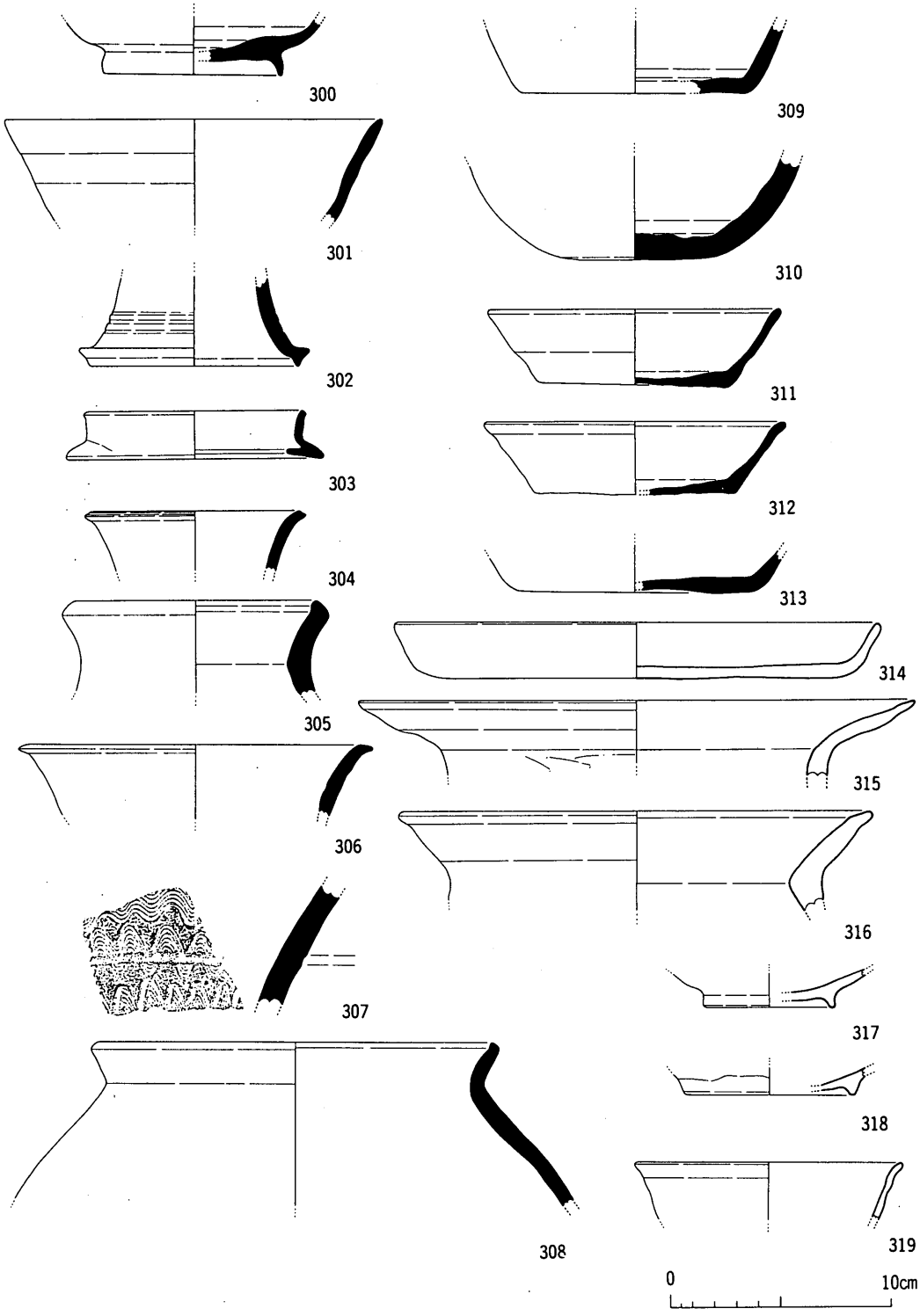
326は弥生時代の紡錘車で，調整は不明。

327は吊り鐘形の蛸壺である。

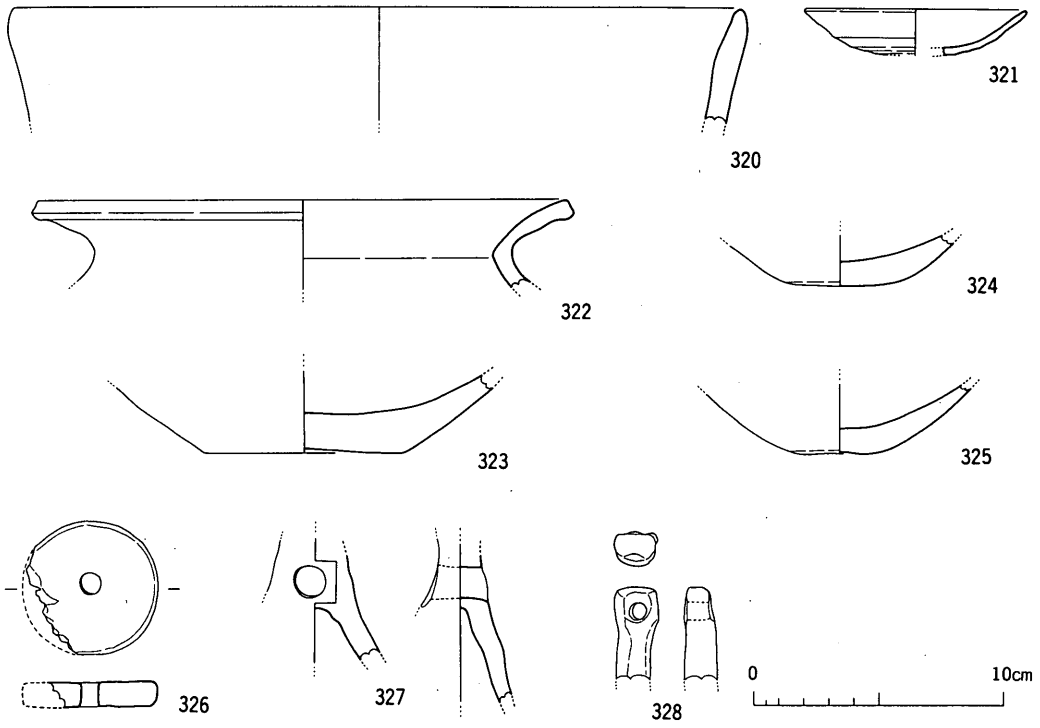
328は棒状有孔土錘である。頭部は方形に成形されている。



第75図　包含層出土土器(1)実測図



第76図　包含層出土土器(2)実測図

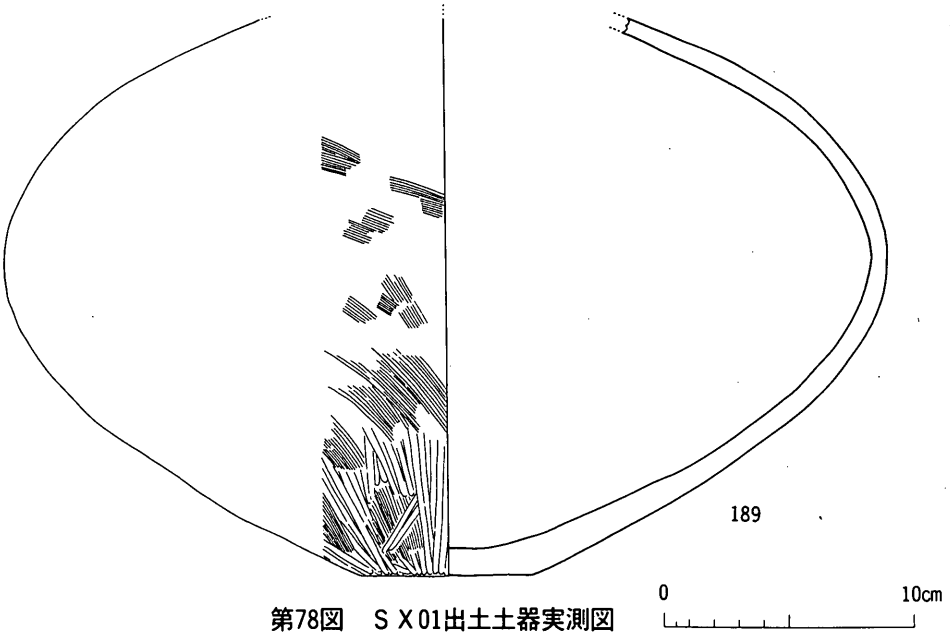


第77図　包含層出土土器(3)実測図

(6)　ＳＸ01出土の遺物

189は口縁部が欠落しているが弥生土器壺形土器の胴部である。胴部の最大径36cm，器高22.3cm，底径７cmを測る。胴部最大径はほぼ中位にあり，卵形を呈する。底部は明瞭な平底である。

調整は外面上部が摩滅して不明であるが，中位にハケ目，下位にはハケ目後ヘラミガキが施されている。内面は，観察されるかぎりナデ調整が全面に施されている。



第78図　ＳＸ01出土土器実測図

2）B_1・B_2地区の遺物

ＳＤ02出土遺物（329～351・354）

ＳＤ02は埋土が大きくは２層に分離されることから，上層の遺物と下層の遺物を分けて記述する。

上層の遺物（329～336）

329は須恵器椀の口縁部である。体部は球形で口縁部直下に強いヨコナデが見られる。

330は生焼け須恵器の坏身である。底部にはヘラ切りが観察される。

331は須恵器皿もしくは盤の破片である。底部はヘラ切りで口縁部は丸く終わる。

332は須恵器坏であり，高台との接点から外上方に直線的に延びる体部を有する。胎土には砂粒が多く見られ，色調が灰黒色を呈するのが特徴である。

333は須恵器坏身の高台部分である。高台は外傾し，ややつま先上がりになる。

334は須恵器の椀の部類であろう。底部が比較的小さく外上方に鋭角的に延びる体部を有する。

335は所謂「切り高台」の土師器椀である。外見上は突出する平底を持ち体部は外上方に直線的に延びる。

336は土師器の椀で，平底を呈する。摩滅のため，調整は不明である。

下層の遺物（337～351・354）

337は須恵器坏蓋である。この一群の遺物中でもっとも古く位置付けられる。

338～340は須恵器坏身である。高台の形状は338・340が外に踏張る形のものである。体部は339・340が高台との境から少し延びたのち外上方に広がるものである。全体的に丸みを持つ体部といえよう。

341～342は土師器坏である。共にヘラ切りの平底を有する。

343～344は所謂「切り高台」の土師器椀である。343は344に比べて体部の立ち上がり角度が鋭角になり，底部も安定性がある。344の底部は外方向に拡張され明瞭な平底が形成されている。

345は底部に円盤充塡することで上げ底状を呈している土師器であるが，器形は不明である。弥生土器の可能性もある。

346は黒色土器の底部である。内面のみ黒変している。

347は土師器坏で，平底の可能性が高い。内外面とも横方向の細かなヘラ磨きが施されている。胎土は精緻で，やや堅い感じがある。

348は須恵器壺の底部であろう。

349は343同様の土師器と考えられるが，体部がやや丸みを持って立ち上がることから，坏ではなく別の器種も想定されるが，不明である。

350は須恵器高坏の脚部である。三方に三角形の透かし孔が見られ上方には凸帯があることから，長脚二段の脚部であろうと考えられる。

351は土師質竈の底部破片であろうと考えられる。外面には荒い刷け目が見られる。

354は須恵器高台付き壺の高台部分である。

包含層出土遺物

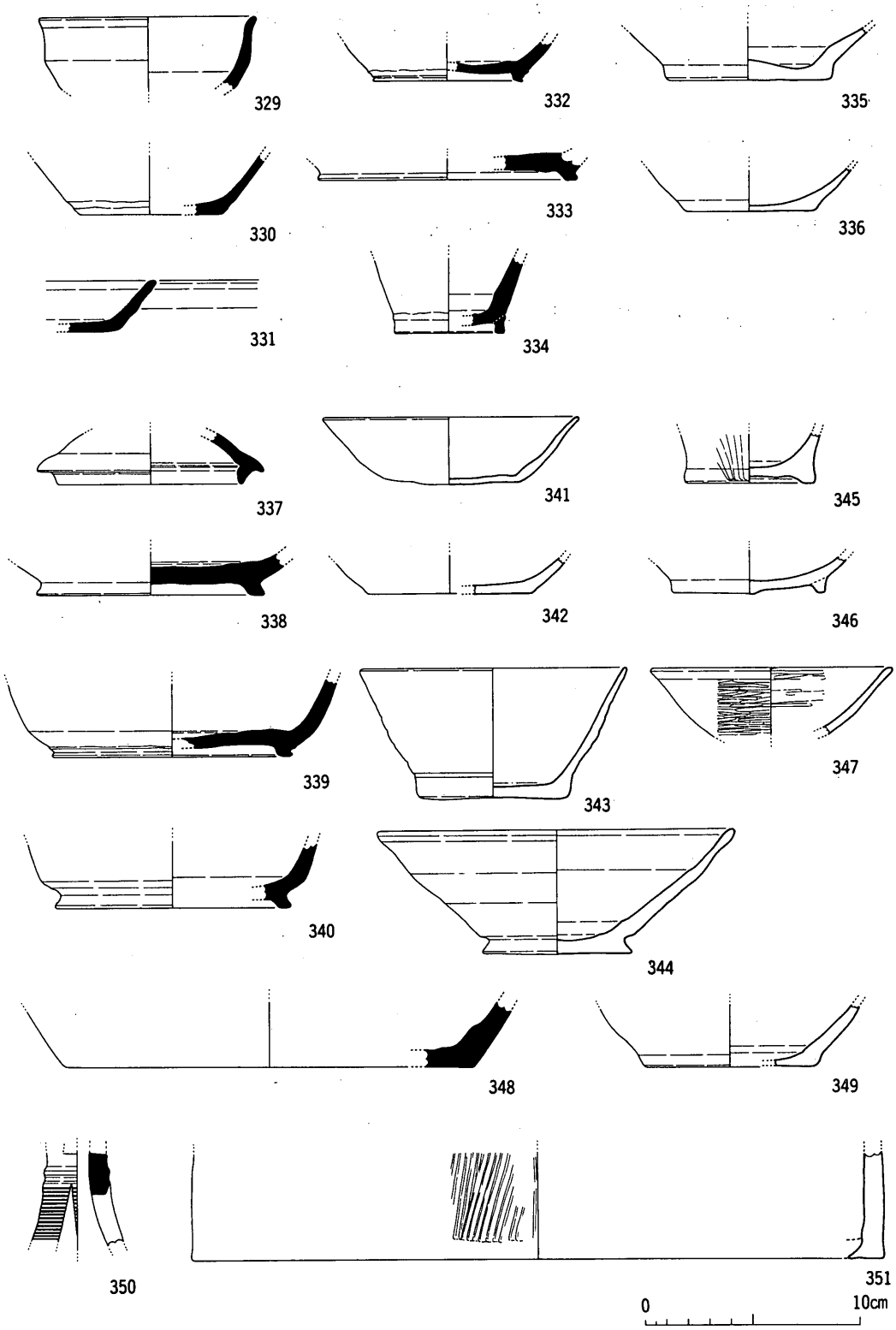
352は須恵器坏身である。

ＳＤ04

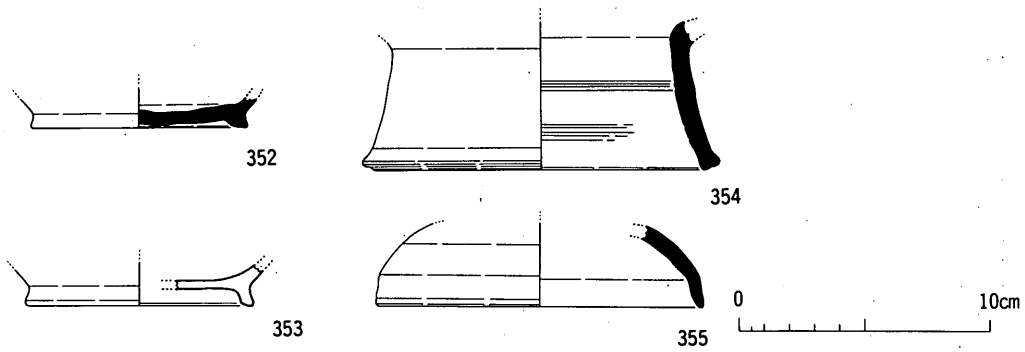
353は土師器坏である。全体的に摩滅しており調整は観察できない。

ＳＤ03

355は須恵器坏蓋である。年代的には６世紀に遡るものかもしれない。



第79図　B₁地区ＳＤ02上層・下層出土土器実測図



第80図　B_1地区ＳＤ01・包含層，B_2地区ＳＤ03・04出土土器実測図

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
1	B_3SB01	土師質土器	羽釜	1/6	27.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 鍔接合部 指頭圧痕・ナデ	外面鍔より下全面と口縁の一部にスス付着
2	B_3SB01	弥生土器	−	−	−	−	9.0	ナデ	ナデ	
3	B_3SB02	弥生土器	壺	1/7	16.4	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
4	B_3SB02	弥生土器	鉢	1/11	17.6	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
5	B_3SB02	弥生土器	−	−	−	−	7.5	ナデ	ナデ	
6	B_3SB02	弥生土器	−	−	−	−	7.2	指頭圧痕・ナデ	指頭圧痕・ナデ	
7	B_3SB03	弥生土器	鉢又は高杯	1/7	13.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
8	B_3SB03	須恵器	坏身	1/12	12.7	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)	
9	B_3SB03	須恵器	坏身	1/12	12.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
10	B_3SB03	土師器	坏	−	−	−	8.6	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切りか糸切りか不明	
11	B_3SB03	土師質土器	甕	1/12	22.0	−	−	回転ナデ（口頸部） 指頭圧痕，ナデ（体部）	回転ナデ（口頸部） 板ナデ（体部）	
12	B_3SB03	土師質土器	竈	−	−	−	−	指頭圧痕，ナデ	指頭圧痕，ハケ目 (10条/2.2cm)	端の方にスス付着
13	B_3SB07	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ	回転ヘラ削り(左)(坏部) 回転ナデ（つまみ部）	
14	B_3SB07	須恵器	坏蓋	1/38	12.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
15	B_3SB07	須恵器	坏蓋	1/30	13.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	外面に自然釉がかかる
16	B_3SB07	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ	
17	B_3SB07	須恵器	椀	1/17	12.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
18	B_3SB07	須恵器	椀	1/10	9.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
19	B_3SB07	須恵器	甕	1/7	14.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
20	B_3SB07	須恵器	壺	1/10	11.0	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
21	B_3SB07	弥生土器	壺	1/10	12.8	−	−	磨滅して不明	横ナデ	
22	B_3SB07	土師器	椀	−	−	−	−	部分的にハケ目,8条/1.2cm (脚部内面)磨滅して不明	磨滅して不明	
23	B_3SB08	土師器	椀	1/20	12.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
24	B_3SB08	須恵器	椀	1/12	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
25	B_3SB08	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	9.4	回転ナデ	回転ナデ	
26	B_3SB08	土師質土器	甕	1/8	20.4	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
27	B_3SB08	土師質土器	甕	1/20	28.7	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
28	B_3SB08	土師質土器	土鍋	1/30	34.2	−	−	横ナデ	横ナデ	外面口縁部下にスス付着
29	B_3SB09	須恵器	椀	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
30	B_3SB09	須恵器	甕	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	

第9表　遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
31	B_3SB09	弥生土器	甕	1/7	14.0	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
32	B_3SB09	弥生土器	壺	1/14	26.6	−	−	横ナデ	横ナデ	
33	B_3SB10	須恵器	坏蓋	1/12	9.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
34	B_3SB10	須恵器	坏蓋	1/10	12.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右) 部分的にハケ目のようなもの残る	
35	B_3SB10	須恵器	坏蓋	1/22	13.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
36	B_3SB10	須恵器	坏蓋	1/12	15.0	−	−	回転ナデ,部分的に普通のナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	
37	B_3SB10	須恵器	坏身	1/3	10.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,ナデ(底部)	
38	B_3SB10	須恵器	坏身	1/12	11.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
39	B_3SB10	須恵器	坏身	−	−	−	7.4	回転ナデ	回転ナデ	
40	B_3SB10	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	−	回転ナデ ナデ(脚部内面上部)	回転ナデ	
41	B_3SB10	須恵器	椀	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
42	B_3SB11	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ	回転ヘラ削り,ナデ(坏部) 回転ナデ(つまみ部)	
43	B_3SB11	須恵器	坏蓋	1/7	14.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
44	B_3SB11	須恵器	坏身	1/15	16.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
45	B_3SB11	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り,ナデ(底部)	
46	B_3SB11	須恵器	坏身	−	−	−	7.4	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り,ナデ(底部)	
47	B_3SB11	須恵器	坏身	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
48	B_3SB11	須恵器	椀	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
49	B_3SB13	弥生土器	壺	−	−	−	−	ナデ	ナデ 貼り付け突帯の上を 刻み目(頸部)	
50	B_3SB13	弥生土器	−	−	−	−	7.6	磨滅して不明	磨滅して不明	
51	B_3SB17	須恵器	坏又は椀	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
52	B_3SB17	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	8.9	回転ナデ	回転ナデ	
53	B_3SB17	弥生土器	−	−	−	−	7.0	ナデ 指頭圧痕(底部と体部の境)	剝落して不明	
54	B_3SB18	須恵器	−	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ ヘラ記号	
55	B_3SB18	土師器	甕	1/10	18.2	−	−	横ナデ	横ナデ	
56	B_3SB18	−	土製紡錘車	1/5	−	−	−	ナデ	ナデ	
57	B_3SB22	須恵器	坏身	1/11	13.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ 口縁端部に凹線らしきもの1条入る	
58	B_3SB25	須恵器	坏蓋	1/16	22.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
59	B_3SB32	須恵器	坏蓋	1/8	11.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
60	B_3SB32	須恵器	坏身	1/10	10.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	

第10表　遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
61	B_3SD04	弥生土器	−	−	−	−	6.8	磨滅して不明	磨滅して不明	
62	B_3SD05	須恵器	坏蓋	1/6	16.4	−	−	回転ナデ 仕上げナデ(頂部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
63	B_3SD05	須恵器	椀	1/4	11.4	4.4	6.6	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ ヘラ切り(底部)	生焼け
64	B_3SD05	須恵器	坏身	1/6	11.6	4.5	6.8	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(右), 仕上げケズリ	
65	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	9.6	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り,ナデ	
66	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	9.6	回転ナデ	回転ナデ	
67	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ	
68	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	10.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)ナデ(底部)	
69	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)ナデ(底部)	
70	B_3SD05	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	
71	B_3SD05	須恵器	坏身	1/2	12.5	5.2	10.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左), ナデ	
72	B_3SD05	須恵器	坏身	1/4	15.4	3.9	9.8	回転ナデ 仕上げナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)(底部)	
73	B_3SD05	須恵器	坏身	1/2	16.8	4.6	12.4	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)(底部)	
74	B_3SD05	須恵器	鉢	1/9	7.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
75	B_3SD05	須恵器	鉢	1/9	9.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
76	B_3SD05	須恵器	鉢	1/12	11.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
77	B_3SD05	須恵器	鉢	1/13	11.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
78	B_3SD05	須恵器	鉢	1/15	14.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
79	B_3SD05	須恵器	鉢	1/11	17.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
80	B_3SD05	土師器	坏身又は坏蓋	1/5	14.6	3.6	11.0	回転ナデ	回転ナデ	
81	B_3SD05	須恵器	高坏又は坏身	1/20	20.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
82	B_3SD05	須恵器	壺又は甕	1/5 (口縁部)	11.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
83	B_3SD05	須恵器	壺又は甕	1/6 (口縁部)	12.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
84	B_3SD05	須恵器	壺又は甕	1/9 (口縁部)	21.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ ヘラ記号(口縁部)	
85	B_3SD05	須恵器	壺又は甕	1/14 (口縁部)	23.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
86	B_3SD05	須恵器	壺	1/5 (口縁部)	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
87	B_3SD05	弥生土器	−	−	−	−	10.2	ナデ	ナデ ヘラのあと(体部下方)	
88	B_3SD06	須恵器	坏蓋	完形	15.6	3.1	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
89	B_3SD06	須恵器	壺又は甕	1/7 (口縁部)	14.0	−	−	回転ナデ(口縁部) タタキ目(青海波)(頸部〜体部)	回転ナデ	
90	B_3SD06	須恵器	椀又は壺	1/6 (口縁部)	15.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	内面に自然釉がかかる

第11表　遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
91	B_3SD06	須恵器	椀又は坏身	1/6	11.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
92	B_3SD07	須恵器	坏蓋	1/4	16.8	3.5	−	回転ナデ 仕上げナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
93	B_3SD07	須恵器	坏蓋	1/7	7.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
94	B_3SD07	須恵器	坏蓋	1/20	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
95	B_3SD07	須恵器	坏蓋	1/8	15.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
96	B_3SD07	須恵器	坏蓋	1/17	19.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
97	B_3SD07	須恵器	坏身	1/10	12.0	3.9	9.2	回転ナデ	回転ナデ	
98	B_3SD07	須恵器	坏身	−	−	−	10.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)ナデ(底部)	
99	B_3SD07	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	
100	B_3SD07	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)ナデ(底部)	
101	B_3SD07	須恵器	鉢又は坏身	1/7	9.4	5.7	5.0	回転ナデ	回転ナデ	
102	B_3SD07	須恵器	坏身	1/11	13.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
103	B_3SD07	黒色土器	椀	1/15	13.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(不明)	
104	B_3SD07	須恵器	皿	1/21	20.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
105	B_3SD07	土師器	皿	1/6	19.6	2.2	19.4	磨滅して不明	磨滅して不明	
106	B_3SD07	須恵器	坏身又は鉢	1/7	15.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
107	B_3SD07	須恵器	坏身又は鉢	1/7	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
108	B_3SD07	須恵器	平瓶	1/7	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
109	B_3SD07	須恵器	甑	−	−	−	−	ナデ	ナデ	
110	B_3SD07	土師器	壺	1/6	20.0	−	−	回転ナデ(口縁部) カキ目(体部)	回転ナデ	生焼け
111	B_3SD07	土師質土器	甕	1/4	26.0	−	−	ナデ(口縁部) ハケ目(10条/2.2cm)	ナデ 指頭圧痕	
112	B_3SD07	土師質土器	甕	−	−	−	29.0	指ナデ	指頭圧痕,ハケ目(11条/2.3cm)	
113	B_3SD09	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
114	B_3SD10	須恵器	坏蓋	1/5	8.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
115	B_3SD10	須恵器	坏蓋	1/10	8.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
116	B_3SD10	須恵器	坏蓋	1/12	13.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
117	B_3SD10	須恵器	坏蓋	1/13	15.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
118	B_3SD10	須恵器	坏身	−	−	−	8.8	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ	
119	B_3SD10	須恵器	坏身又は坏蓋	1/7	8.9	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
120	B_3SD10	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	8.6	回転ナデ	回転ナデ	

第12表　遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
121	B3SD10	須恵器	平瓶	2/3 (口縁部)	6.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
122	B_3SD11	須恵器	坏蓋	1/10	10.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
123	B_3SD12	須恵器	高台付き壺	−	−	−	10.6	回転ナデ	回転ナデ	
124	B_3SD12	須恵器	坏身	−	−	−	7.2	回転ナデ	回転ナデ	
125	B_3SD12	須恵器	坏身	1/10	11.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
126	B_3SD12	須恵器	椀	1/9	9.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
127	B_3SD12	土師器	坏身	−	−	−	8.4	回転ナデ	回転ナデ	
128	B_3SD12	土師質土器	蛸壺	−	−	−	−	指頭圧痕,ナデ	指頭圧痕ナデ	
129	B_3SD13	須恵器	坏蓋	1/8	9.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左),ナデ	
130	B_3SD15	須恵器	坏蓋	1/9	9.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
131	B_3SD16	須恵器	坏蓋	1/8	12.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
132	B_3SD16	須恵器	坏蓋	1/13	18.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
133	B_3SD16	須恵器	坏身	1/4	10.0	3.6	7.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ	
134	B_3SD16	須恵器	平瓶	1/4 (口縁部)	6.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	内外面部分的に自然軸がかかる
135	B_3SD16	土師器	高坏,脚部	1/3	8.8	−	−	回転ナデ しぼり(脚部上部)	回転ナデ	
136	B_3SD16	土師質土器	甕	1/11	33.0	−	−	横ナデ	横ナデ	
137	B_3SD18	須恵器	坏身	3/4	10.0	3.5	6.8	回転ナデ 仕上げナデ	回転ナデ ヘラ切り,ナデ	
138	B_3SD20	須恵器	坏蓋	1/8	16.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)	
139	B_3SD20	土師器	坏身	−	−	−	9.8	磨滅して不明	回転ナデ	
140	B_3SD20	土師質土器	甕	1/9	20.6	−	−	横ナデ	横ナデ	
141	B_3SD20	土師質土器	甕	1/17	43.0	−	−	ハケ目(7条/1.5cm), 横ナデ(口縁部) ナデ	横ナデ(口縁部) ハケ目(7条/1.5cm)	
142	B_3SD21	弥生土器	壺	1/10	16.8	−	−	横ナデ	横ナデ 鋸突文、刺突文	
143	B_3SD22	弥生土器	壺	1/8	20.4	−	−	横ナデ	横ナデ	
144	B_3SD22	古式土師器	壺	−	−	−	−	指ナデ	磨滅して不明,黒斑有	
145	B_3SD22	須恵器	高坏	1/2	12.6	8.5	8.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ(坏部底部)	
146	B_3SD22	須恵器	高坏,脚部	1/2	−	−	8.4	回転ナデ 磨滅が激しい	回転ナデ 磨滅が激しい	
147	B_3SD22	須恵器	高坏,脚部	1/2	−	−	8.6	回転ナデ	回転ナデ	
148	B_3SD22	古式土師器	壺	−	−	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
149	B_3SD23	須恵器	坏蓋	1/5	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明),ナデ	
150	B_3SD23	須恵器	坏身	−	−	−	8.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	

第13表　遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
151	B₃S D23	須恵器	坏身	1/5	14.8	4.6	9.8	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	
152	B₃S D23	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	
153	B₃S D23	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(底部)	
154	B₃S D23	須恵器	坏身	1/3	12.4	3.9	5.8	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,ナデ(底部)	
155	B₃S D23	土師器	坏又は皿	1/6	13.2	2.4	−	回転ナデ	回転ナデ	
156	B₃S D23	須恵器	椀	1/7	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
157	B₃S D23	須恵器	椀	1/10	8.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	片口有
158	B₃S D32	須恵器	平瓶	1/2 (口縁部)	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ　凹線1条	
159	B₃S D23	須恵器	平瓶	1/9 (口縁部)	11.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	内面に部分的に自然釉がかかる
160	B₃S D23	須恵器	平瓶又は壺	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)(体部下半) ヘラ切り,ナデ(底部)	
161	B₃S D23	須恵器	壺又は甕	1/6 (口縁部)	20.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
162	B₃S D23	古式土師器	壺	1/9	25.2	−	−	横ナデ 指頭圧痕,(頸部)	指頭圧痕,横ナデ	
163	B₃S D23	古式土師器	壺	1/8	21.2	−	−	横ナデ 口縁端部に凹線らしきもの1条	横ナデ	
164	B₃S D23	古式土師器	−	−	−	−	2.6	剝落して不明	剝落して不明	
165	B₃S D23	土師質土器	蛸壺	1/2	−	−	−	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	
166	B₃S D23	土師質土器	蛸壺	ほぼ完形	−	−	−	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	
167	B₃S D23	土師質土器	蛸壺	1/2	−	−	−	ナデ	指頭圧痕,ナデ	
168	B₃S D23	土師質土器	蛸壺	1/3	−	−	−	ナデ	指頭圧痕,ナデ	
169	B₃S D25	須恵器	高坏,脚部	1/14	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
170	B₃S D26	須恵器	坏身	1/6	9.4	2.3	7.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	
171	B₃S D26	須恵器	高台付き壺	−	−	−	12.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	
172	B₃S D31	須恵器	高坏,脚部	3/4 (脚部)	−	−	8.4	回転ナデ しぼり(脚部上部)	回転ナデ	
173	B₃S D31	須恵器	高坏,脚部	2/3 (脚部)	−	−	9.6	回転ナデ	回転ナデ	
174	B₃S D33	須恵器	坏身	1/4	9.8	3.8	−	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(左)	
175	B₃S D38	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	――――	――――	
176	B₃S D38	須恵器	坏蓋	1/5	15.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 部分的にヘラの痕がある	
177	B₃S D39	須恵器	坏蓋	3/4	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)(頂部)	
178	B₃S D39	須恵器	坏身	1/3	−	−	10.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)(底部)	
179	B₃S D39	須恵器	平瓶	1/8 (口縁部)	9.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
180	B₃S D45 上層	須恵器	坏蓋	1/2	11.6	3.0	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) ナデ(頂部)	

第14表　遺物観察表(6)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
181	B_3S D45 上層	須恵器	坏蓋	1/5	14.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
182	B_3S D45 上層	須恵器	甕	1/8	24.4	−	−	回転ナデ(口縁部) タタキ目(青海波)(体部)	回転ナデ(口縁部) カキ目(体部)	生焼け
183	B_3S D45 上層	古式土師器	壺	1/6 (口頸部)	25.6	−	−	ナデ	ナデ	
184	B_3S D46 上層	須恵器	坏身	1/2	11.6	4.0	6.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右) ヘラ切り(底部)	
185	B_3S D46 下層	須恵器	高台付き壺	1/4 (底部)	−	−	15.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ	
186	B_3S D46 下層	須恵器	椀	1/4	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	外面に自然釉がかかる
187	B_3S D48 上層	須恵器	坏身	1/12	17.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
188	B_3S D48 上層	土師器	甕	1/7	20.6	−	−	横ナデ(口縁部) ヘラ削り(体部)	磨滅して不明	
189	B_3G-23 SX01	弥生土器	壺	1/3	−	−	6.8	ナデ	ハケ目10条/cm(体部中位) ハケ目10条/cmの上を ヘラミガキ(体部下位)	外面に黒斑
190	B_3S K01	古式土師器	壺	1/5	16.4	−	−	横ナデ(口縁部) ハケ目(10条/cm)(体部)	横ナデ(口縁部) 指頭圧痕,ナデ(体部)	
191	B_3S K01	古式土師器	高坏	3/4	15.4	12.6	11.2	ナデ ヘラ削り(脚部)	ナデ	脚部内面に黒斑あり
192	B_3S K01	古式土師器	高坏	3/4 (坏部)	17.2	−	−	ナデ	ハケ目12条/cmの上を 横ナデ	部分的に黒斑
193	B_3S K01	古式土師器	高坏	1/6 (坏部)	17.0	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	外面に黒斑
194	B_3S K01	古式土師器	高坏	1/2 (坏部)	20.8	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	外面に黒斑
195	B_3S K01	古式土師器	高坏,脚部	1/2	−	−	12.2	ナデ(下方) しぼり目	ナデ(下方) ハケ目6条/cm,板ナデ	部分的に朱がかかる
196	B_3S K01	古式土師器	高坏,脚部	1/4	−	−	10.2	磨滅して不明	ナデ	
197	B_3S K01	古式土師器	高坏,脚部	2/3	−	−	13.0	ヘラ削り,ナデ ナデ(下方)	ナデ	
198	B_3S K01	古式土師器	高坏,脚部	1/2	−	−	−	ヘラ削り	ナデ	
199	B_3S K03	弥生土器	−	1/5 (底部)	−	−	8.8	磨滅して不明	磨滅して不明	外面に朱がかかる
200	B_3S K03	弥生土器	−	1/13 (底部)	−	−	10.0	磨滅して不明	磨滅して不明	
201	B_3S K03	弥生土器	−	1/2 (底部)	−	−	6.0	磨滅して不明	磨滅して不明	
202	B_3S K05	須恵器	坏身	1/7 (底部)	−	−	9.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,ナデ	
203	B_3S K06	須恵器	壺	1/8	12.6	−	−	板ナデ	板ナデ	
204	B_3S K06	土師質土器	土鍋又はほうろく	1/9	22.0	−	−	ナデ	ナデ	内面と口縁部に部分的にスス付着
205	B_3S K06	土師質土器	土鍋又はほうろく	1/12	21.8	−	−	ナデ	ナデ	口縁部にスス付着
206	B_3S K06	須恵器	高台付き壺	1/8	−	−	16.0	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)ナデ	
207	B_3S K06	土師質土器	土鍋	1/16	24.8	−	−	ナデ	ナデ	外面にスス付着
208	B_3S K06	瓦質土器	羽釜	−	−	−	−	ナデ	ナデ	鍔下方から体部にかけてスス付着
209	B_3S K06	土師質土器	土鍋	1/17	32.0	−	−	横ナデ	横ナデ(口縁端部) ナデ	
210	B_3S K06	土師質土器	土鍋	1/8	29.2	−	−	横ナデ	横ナデ	

第15表　遺物観察表(7)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
211	B₃SK06	土師質土器	ほうろく	1/10	42.4	−	−	ナデ	ナデ	外面にスス付着
212	B₃SK06	土師質土器	大甕	1/20	44.0	−	−	横ナデ	ナデ	
213	B₃SK08	弥生土器	椀	3/4	−	2.8	−	ナデ	タタキ目(2条/cm) (体部下方) 磨滅して不明	外面下方に黒斑
214	B₃SK08	弥生土器	椀	1/3	−	−	2.2	磨滅して不明	磨滅して不明	
215	B₃SK08	弥生土器	小型坩	1/2	−	−	−	ナデ	ナデ	
216	B₃SK08	弥生土器	−	−	−	−	4.4	ナデ	磨滅して不明 少しだけハケ目(8条/cm)が残る(底部付近)	外面底部付近に黒斑
217	B₃SK09	須恵器	壺	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ,回転ヘラ削り(左)(底部付近) ヘラ切り,ナデ(底部)	
218	B₃SK11	須恵器	坏蓋	1/4	13.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
219	B₃SK11	弥生土器	−	−	−	−	5.6	ナデ	ナデ	
220	B₃SK11	弥生土器	−	−	−	−	6.2	磨滅して不明	磨滅して不明	
221	B₃SK14	須恵器	椀	1/12	9.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
222	B₃SK14	須恵器	坏蓋	1/10	9.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
223	B₃SK18	弥生土器	−	−	−	−	7.0	ナデ	ナデ	
224	B₃SK23	須恵器	坏蓋	1/5	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
225	B₃SK24	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ 仕上げナデ(頂部)	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)(頂部)	
226	B₃SK24	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
227	B₃SK24	須恵器	坏蓋	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
228	B₃SK24	須恵器	坏身	−	−	−	9.2	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部分)	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
229	B₃SK24	須恵器	坏身	−	−	−	10.2	仕上げナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
230	B₃SK24	須恵器	高坏	−	−	−	−	回転ナデ しぼり目(脚部)	磨滅して不明	生焼け
231	B₃SK24	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	8.4	磨滅して不明	磨滅して不明	生焼け
232	B₃SK24	土師器	甕	1/8	18.8	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
233	B₃SK25	須恵器	坏蓋	4/5	8.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)	つまみの痕残る
234	B₃SK25	須恵器	高坏,脚部	−	−	−	8.6	回転ナデ	回転ナデ	
235	B₃SK30	須恵器	坏蓋	1/5	8.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)(頂部)	外面に自然釉がかかる つまみの痕残る
236	B₃P-11	土師器	坏	−	−	−	8.8	ナデ	ナデ	
237	B₃P-13	土師質土器	小皿	4/5	8.2	1.8	6.2	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
238	B₃P-14	須恵器系	椀	1/11	14.0	−	−	ナデ	ナデ	
239	B₃P-15	瓦器	椀	1/11	13.8	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明 指頭圧痕(体部下方)	
240	B₃P-16	土師質土器	小皿	2/5	9.6	1.3	3.2	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部分)	回転ナデ ヘラ切り(底部)	

第16表　遺物観察表(8)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
241	B₃P-16 P-7	須恵器系	椀	3/4	13.2	−	−	ナデ,ヘラミガキ	ナデ,ヘラミガキ(口縁部) 指頭圧痕,ヘラミガキ(体部下半)	
242	B₃P-35	黒色土器	椀	−	−	−	6.4	磨滅して不明	ナデ ヘラ切り(底部)	
243	B₃P-40	須恵器	坏身	2/3	12.0	3.9	7.4	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(左),板目(底部)	
244	B₃P-40	須恵器	坏身	1/2	12.6	3.25	8.2	回転ナデ	回転ナデ 底部は不明	
245	B₃P-41	土師器	椀	1/9	15.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
246	B₃P-44	土師器	椀	−	−	−	5.2	回転ナデ	回転ナデ	
247	B₃P-50	土師質土器	小皿	1/6	8.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
248	B₃P-53	土師器	椀	−	−	−	7.0	ナデ	ナデ 底部は不明	
249	B₃P-53	土師器	椀	1/10	11.2	−	−	ナデ	ナデ	
250	B₃P-56	土師質土器	小皿	1/4	8.0	1.7	5.4	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
251	B₃P-59	黒色土器	椀	1/6	12.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
252	B₃P-63	土師器	椀	1/3	14.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
253	B₃P-63	土師器	椀	−	−	−	−	剝落して不明	磨滅して不明 ヘラ切り(?)(底部)	
254	B₃P-63	須恵器系	椀	−	−	−	5.4	ナデ,ヘラミガキ	ナデ	
255	B₃P-68	黒色土器	椀	1/6	15.6	−	−	ナデ	ナデ	
256	B₃P-68	須恵器系	椀	1/7	15.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
257	B₃P-68	土師器	椀	−	−	−	5.0	ナデ	ナデ ヘラ切り,ナデ(底部)	
258	B₃P-70	須恵器	壺又は椀	1/5	13.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
259	B₃P-73	土師質土器	甕	−	−	−	−	ナデ	ナデ	
260	B₃P-89	土師器	椀	−	−	−	5.4	ナデ	ナデ ヘラ切り,ナデ (底部)	
261	B₃P-93	須恵器	坏身	−	−	−	9.0	回転ナデ	回転ナデ	
262	B₃P-108	土師質土器	甕	−	−	−	−	指頭圧痕,指ナデ	指頭圧痕,ナデ 板ナデ(底部)	
263	B₃P-133	弥生土器	−	−	−	−	−	ナデ	ナデ	
264	B₃P-135	古式土師器	椀	1/15	19.0	−	−	ナデ	ナデ	
265	B₃P-141	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ	回転ナデ	
266	B₃P-145	須恵器	鉢	1/21	27.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)	
267	B₃SA01 ②	土師器	小皿	1/3	8.4	1.4	2.9	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
268	B₃SA01 ③	土師器	小皿	1/2	8.8	1.7	6.4	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部),板目	
269	B₃SA01 ③	土師質土器	椀	−	−	−	7.2	ナデ	ナデ	
270	B3SA01 ③	黒色土器	椀	−	−	−	6.8	ナデ	ナデ	

第17表　遺物観察表(9)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
271	B₃SA01 ②	黒色土器	椀	−	13.8	5.9	3.4	ナデ	ナデ	
272	B₃H-21 イコウ面	須恵器	坏蓋	1/4	8.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ(頂部)	
273	B₃H-22 第3層 表土(3)	須恵器	坏蓋	1/6	11.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右)(頂部)	外面に部分的に自然釉がかかる
274	B₃G-27 第4層 (三角地)	須恵器	坏蓋	1/8	9.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	内面に自然釉がかかる
275	B₃G-24 第1層	須恵器	坏蓋	1/8	11.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
276	H-36 第4層	須恵器	坏蓋	1/8	12.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) (頂部)	
277	B₃G-24 第1層	須恵器	坏蓋	1/12	13.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(右) 頂部)	
278	B₁H-32 第1層	須恵器	坏蓋	1/7	14.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ(頂部)	
279	B₃H-24	須恵器	坏蓋	1/7	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) (頂部)	
280	B₃H-28 第3層	須恵器	坏蓋	1/10	16.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
281	B₃H-24 第3層	須恵器	坏蓋	1/10	16.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) (頂部)	
282	B₃G-24 第1層	須恵器	坏蓋	1/7	17.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
283	B₃H-29 第3層	須恵器	坏身	1/9	11.2	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
284	H-36 第4層	須恵器	坏身	1/4	8.2	2.2	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) 回転ナデ(底部)	
285	B₃H-22 第3層 表土(3)	須恵器	坏身	1/7	11.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) (頂部)	
286	B₃G-24 第1層	須恵器	坏身	1/6	12.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
287	B₃H-27 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	8.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,回転ナデ	
288	B₃G-24 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	11.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ(左)(底部)	
289	H-36 第4層	須恵器	坏身	−	−	−	8.9	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り,回転ナデ	
290	B₃H-24 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	
291	B₃H-24 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	9.0	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	生焼け
292	B₃H-22 第3層 表土(3)	須恵器	坏身	−	−	−	9.2	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明) (底部)	
293	B₃G-24 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	11.6	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	
294	B₃G-24 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	10.2	回転ナデ	回転ナデ	
295	B₃H-28 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	9.6	回転ナデ	回転ナデ	
296	B₃H-28 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	10.0	回転ナデ	回転ナデ	
297	B₁H-32 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	8.8	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,回転ナデ(底部)	
298	B₃G-24 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	9.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,ナデ(底部)	
299	B₃G-25 第1層	須恵器	坏身	−	−	−	7.6	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
300	B₃I-22 第3層	須恵器	坏身	−	−	−	8.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	

第18表　遺物観察表(10)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
301	B_3 グリッド 不明	須恵器	坏身	1/8	17.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
302	B_3H-22 第3層	須恵器	高坏,脚部(?)	−	−	−	10.4	回転ナデ	回転ナデ	
303	B_3G-24 第1層	須恵器	−	1/7	9.6	2.2	−	回転ナデ	回転ナデ	
304	B_3G-22 第1層	須恵器	壺	1/5	9.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
305	B_3H-22 第3層 表土(3)	須恵器	壺	1/7	10.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
306	B_3G・H-22・23 第1層	須恵器	壺	1/11	14.8	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
307	B_3G-24 第1層	須恵器	甕	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ,波状文	
308	H-36 第4層	須恵器	甕	1/5	17.8	−	−	回転ナデ(口頸部) タタキ目(青海波)(体部)	回転ナデ(口頸部) タタキ目,カキ目(体部)	
309	B_3G-24 第1層	須恵器	壺	−	−	−	10.2	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ ヘラ切り, 回転ナデ(底部)	
310	B_3I-22 第3層 表土(2)	須恵器	壺	−	−	−	6.8	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り,部分的に 回転ヘラ削り(右)(底部)	
311	B_3H-21 イコウ面	須恵器	坏身	2/3	13.0	3.4	8.2	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	外面部分的にスス付着、生焼け
312	B_3H-21 イコウ面	須恵器	坏身	1/3	15.4	3.3	9.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	内外面部分的にスス付着生焼け
313	B_3G-24 第4層	須恵器	坏身	−	−	−	11.2	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	生焼け
314	B_3 グリッド 不明	土師器	皿又は盤	1/2	21.8	2.5	18.8	磨滅して不明	磨滅して不明	
315	B_3H-23 第4層	土師器	甕	1/9	25.0	−	−	ナデ	ナデ(口縁部) 板ナデ(頸部〜体部)	口縁部内外面に黒斑
316	B_3H-22 第3層	土師器	甕	1/10	21.0	−	−	ナデ	ナデ	外面に黒斑
317	B_3G-24 第1層	黒色土器	椀	−	−	−	6.0	ナデ	ナデ 底部不明	
318	B_3H-28 第3層	黒色土器	椀	−	−	−	7.6	ナデ	ナデ	
319	B_3H-23 第4層	緑釉陶器	坏	1/12	11.6	−	−	――	――	
320	B_3H-24 第3層	瓦質土器	鍋	1/17	29.0	−	−	ナデ	ナデ	
321	B_3H-28 第3層	備前焼	灯明皿	1/13	8.6	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(底部)(頂部)	内外面に部分的にススぶしきもの付着
322	B_3H-23 第4層	弥生土器	甕	1/13	21.0	−	−	磨滅して不明	磨滅して不明	
323	B_3H-22 第3層	弥生土器	−	−	−	−	8.0	磨滅して不明	磨滅して不明	外面黒斑
324	B_3H-24 第3層	弥生土器	−	−	−	−	4.6	磨滅して不明	磨滅して不明	外面に黒斑
325	B_3G-23 第1層	弥生土器	−	−	−	−	3.0	磨滅して不明	磨滅して不明	
326	B_3H-21 イコウ面	−	土製紡錘車	−	−	−	−	ナデ	ナデ	
327	B_3H-31 表土(2)	土師質土器	蛸壺	1/4	−	−	−	ナデ	ナデ	
328	B_3I-22 第3層 表土(2)	土師質土器	土錘	1/2	−	−	−	ナデ	ナデ	
329	B_1SD02 上層	須恵器	椀	1/9	10.0	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
330	B_1SD02 上層	須恵器	坏身	−	−	−	6.6	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	生焼け

第19表　遺物観察表(11)

挿図番号	出土遺構	種類	器種	残存率	法量(cm)			調整		備考
					口径	器高	底径	内面	外面	
331	B₁S D02 上層	須恵器	皿又は盤	−	−	−	−	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ削り(方向不明)(底部)	
332	B₁S D02 上層	須恵器	坏	−	−	−	7.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
333	B₁S D02 上層	須恵器	高台付坏	−	−	−	12.0	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
334	B₁S D02 上層	須恵器	椀	−	−	−	5.2	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	
335	B₁S D02 上層	土師器	椀	−	−	−	7.8	磨滅して不明	磨滅して不明	
336	B₁S D02 上層	土師器	椀	−	−	−	6.2	磨滅して不明	磨滅して不明	
337	B₁S D02 下層	須恵器	坏蓋	1/7	8.4	−	−	回転ナデ	回転ナデ	
338	B₁S D02 下層	須恵器	坏身	−	−	−	10.6	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	
339	B₁S D02 下層	須恵器	坏身	−	−	−	11.2	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ ヘラ切り(底部)	
340	B₁S D02 下層	須恵器	坏身	−	−	−	11.0	回転ナデ	回転ナデ 底部不明	
341	B₁S D02 下層	土師器	坏	完形	12.0	3.0	6.5	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ ヘラ切り	
342	B₁S D02 下層	土師器	坏	−	−	−	7.4	磨滅して不明	磨滅して不明	
343	B₁S D02 下層	土師器	椀	1/4	12.2	6.0	7.0	回転ナデ	回転ナデ	
344	B₁S D02 下層	土師器	椀	1/2	16.4	5.8	7.0	ナデ	ナデ	
345	B₁S D02 下層	土師器又は弥生土器	−	−	−	−	6.0	磨滅して不明	ヘラミガキ，ナデ	
346	B₁S D02 下層	黒色土器	椀	−	−	−	7.0	ナデ	ナデ ヘラ切り(底部)	
347	B₁S D02 下層	土師器	坏	1/8	11.0	−	−	ナデ(口縁端部) ヘラミガキ（体部）	ナデ(口縁端部) ヘラミガキ（体部）	
348	B₁S D02 下層	須恵器	壺	−	−	−	19.0	回転ナデ	回転ナデ	
349	B₁S D02 下層	土師器	−	−	−	−	8.2	ナデ	磨滅して不明	
350	B₁S D02 下層	須恵器	高坏，脚部	−	−	−	−	回転ナデ，カキ目	回転ナデ しぼり目	透しが入る(数不明)
351	B₁S D02 下層	土師質土器	竈	−	−	−	32.0	磨滅して不明	ハケ目(5条/cm)，ナデ	底部にスス付着
352	B₁I-32 第4層	須恵器	坏身	−	−	−	8.6	回転ナデ 仕上げナデ(見込み部)	回転ナデ ヘラ切り，ナデ(見込み部)	
353	B₂S D04	土師器	坏	−	−	−	9.0	磨滅して不明	磨滅して不明	
354	B₁S D02 下層	須恵器	高台付き壺	1/3	−	−	13.0	回転ナデ	回転ナデ	
355	B₂S D03	須恵器	坏蓋	1/10	−	−	13.0	回転ナデ	回転ヘラ削り，ナデ	

第20表　遺物観察表(12)

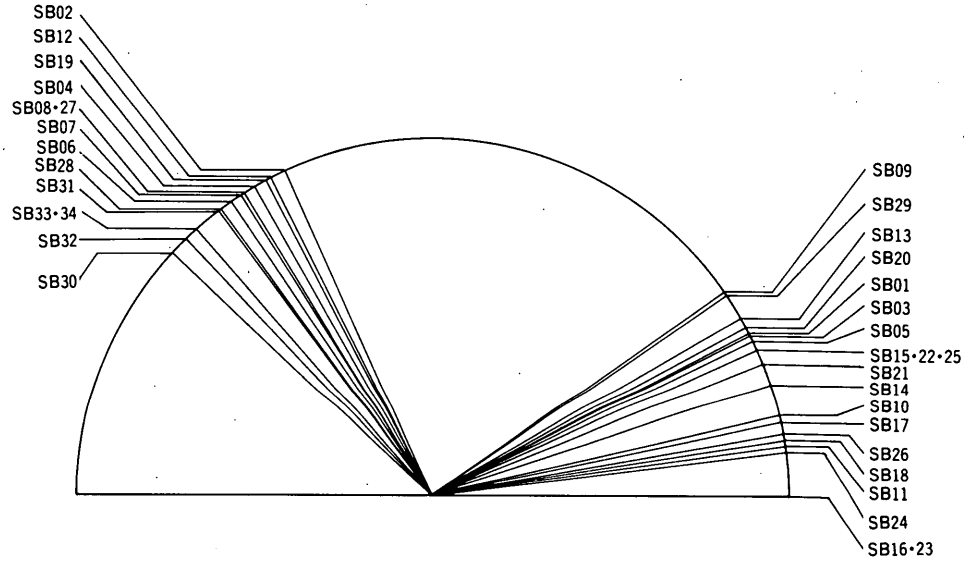
第3節　小　結

稲木遺跡B地区の調査では，前節で述べたように多くの成果が得られた。この内特筆される遺構として，B_1地区で検出された条里制に関連すると考えられる溝（ＳＤ02）や，B_3地区の建物群が相当する。本節では，主としてB_3地区の遺構変遷を概観し，当時の集落構造の一端を明らかにすることでB地区のまとめにかえたい。

1．建物遺構の方位について

掘立柱建物の年代を決定する方法として，柱穴埋土から出土した遺物が参考になる。しかし，遺物の項でも触れたように，年代を決定するに足りる遺物の出土は無かった。次の方法として，建物の方位に注目してみる。

建物遺構の中には，重複するものや切り合い関係が見られるものがあり，年代差があることは明瞭である。しかし建物の年代は先にも述べたように，その遺存状況からして明確にはしにくく，ここでは建物主軸方位を中心に考えたい。但し，出土遺物から明らかに年代的に後出するＳＢ01等は除外した。



第81図　建物主軸方位（桁行）

方位を基準として考えた場合，次の４グループに区分される。

1）　N－0°－Wに軸を持つもの。

　　ＳＢ16・23

2）　N－7°～13°－Wに軸を持つもの。

　　ＳＢ10・11・17・18・24・26

3）　N－22°～37°－Wに軸を持つもの。

ＳＢ02・03・04・05・06・07・08・09・13・20・21・22・25・27・29・31

4）　N－41°40′～47°－Wに軸を持つもの。

ＳＢ30・32・33・34

また，この４グループの内，１）・２）・４）のグループでは，各建物の主軸方向が南北か東西方向に一定しており，混在していない。このことからすれば，両者が混在している３）のグループを主軸方向で二分することが可能であると考えたい。この結果，

３Ａ）　主軸が南北方向にあるもの

ＳＢ02・04・06・07・08・27・31

３Ｂ）　主軸が東西方向にあるもの

ＳＢ03・05・09・13・20・21・22・25・29

に細分することが可能である。ただこのことは，建物の配置が「コ」の字形にはならないことが前提となる。

次に年代についてであるが，現在の水田区画（条里制の遺存と考えられている）の方位は，おおむね３)のグループに示されるようにN－27°～28°30′－W前後を中心とした方位にある。このことは，３）に属するものが１）～４）のグループ間では新しい時期に属する建物群の可能性が高いと考えられる。

また，飛鳥・白鳳に属する寺院址などの多くは真北を基準としていることも念頭においておく必要がある。

以上のことから，１)－２)－３）の順に基準方位そのものが変化すると考えられる。

ただ，４）グループはＳＢ31・32の切り合い関係から３）グループよりも古いことが明らかであること，１)・２）グループは建て替えがいくつか観察されることから時間的に連続すると考えられることなどから，最終的には１)－２)－４)－３)の順に変遷したことが伺える。また，ＳＢ08・09の切り合い関係から３Ａ）は３Ｂ）よりも古いと考えて一応５期に区分しておく。

２．建物遺構の面積について

次に建物規模（面積）について考える。面積の分布から見て，次のように４区分することが出来る。

１）	8－13m²	3棟
２）	15－26m²	21棟
３）	28－32m²	3棟
４）	36－40m²	2棟

棟数から見てもわかるように，２）のグループが平均的な建物で，１）は小形，３）は大形，４）は特大形に分類することが出来る。

4）の特大形建物はⅦ期・Ⅷ期（後述する遺構変遷小期による）に見られ，3）の大形建物はⅥ期・Ⅶ期に見られる。このことから，建物群が最も集中するⅥ期・Ⅶ期になって大形建物が出現することがわかる。しかし，大形建物出現の契機がどのようなものであったかは不明である。

3．稲木遺跡B_3地区の遺構変遷について

以上掘立柱建物の時期区分をもとに，この地区の変遷を概観する。なお，溝状遺構については出土遺物から見た年代は参考に留め，建物方位に合致することを前提として区分したところもある。

〔Ⅰ期〕　弥生時代？

弥生時代の自然河川（ＮＲ01）が見られる。ＮＲ01は，その埋土の状況から弥生時代でも古い時期の所産と考えられるが，出土遺物が伴わないため不明である。本文中でも触れたが，自然河川と考えるには若干無理もあるが，ただの窪地としてとらえることにも問題が残るためここでは自然河川としておく。

〔Ⅱ期〕　弥生時代末～古墳時代前期

検出された遺構には，ＳＫ01・03・08・18の土坑及びＳＫ01に続くＳＤ03・04がある。この内ＳＫ03がもっとも古く弥生時代後期後半頃，ＳＫ08が後期末頃，ＳＫ01が布留式併行期に位置付けられる。同時代の遺構は，B_3地区の東側で谷筋を挟んで立地するＣ地区（本書掲載）や，B_3地区の前方100～150mで県道拡幅に伴って昭和61年度に調査が実施されたＤ・Ｅ地区にも見られ，広範囲に遺構が存在することが判明している。[註1] Ｄ・Ｅ地区の詳細は報告書に譲るとして，弥生時代後期後半にはＣ地区が稲木遺跡の中心となり，後期末～古墳時代初頭にはB_3地区の一部を含めてＤ・Ｅ地区に中心が移動するものと考えられる。ただ，時間的に両地区間で重複することも考えられる。

〔空白期〕　Ｂ地区では遺構を検出していないが，県道に伴うＤ・Ｅ地区の調査で６世紀に位置付けられる竪穴住居が検出されている。[註2] 前半から後半までの資料の出土があり，稲木遺跡内での集落立地を考えるうえで興味深い資料といえる。

〔Ⅲ期〕　集落の初現期である。掘立柱建物は，先の分類による１）グループがこの時期に相当し，梁間方向で主軸が真北を向くＳＢ16・23が出現する。ＳＢ23は，総柱の倉庫跡である。

この時期に伴う溝としてＳＤ14・22・26を考えている。しかし，埋土中の遺物が７世紀第１四半期頃に比定されることと，溝主軸が真北から西に振っていることとが，問題として残る。これは溝の時期決定が，主として遺物によっていることにある。これらの溝が，主軸方向に規制される建物よりも後出する可能性もあるが，現状では建物群をこの時期よりも先行させる根拠が無い。また，建物方向に合致する溝は検出さ

れておらず，集落構造は不明である。

〔IV期〕　2）グループに属するＳＢ10・11・17・18・24・26が当該期に比定される。

建物は，梁間方向で主軸が真北からやや西に振る。先に少し触れたが，ＳＢ17・24はＳＢ16・23の建て変えであること，共有する柱穴も見られることから後続する建物群と考えている。

溝はＳＤ15・16が当該期であり，主軸方向はほぼ建物群に平行する。ＳＤ15・16ともＳＢ10に切られておりＳＢ10は後出することになるが，時間差はさほどないと考えられる。

建物群のうち，ＳＢ24は総柱の倉庫になる。ＳＢ26は他の建物からやや離れて位置しており，調査区外の北側に別の建物群が集中する可能性がある。

この時期の建物群の中心はＳＢ11とＳＢ17で，各々にＳＢ10・18の小建物が付属し，倉庫も周辺に見られる。

建物間には規則的な配置は認められない。

〔Ｖ期〕　調査区西北隅で検出された一群で４）グループに属する。

建物の中心はＳＢ32・33で，ＳＤ33・34がこれに伴う。溝の性格は，その位置から見て雨落ち溝と考えられる。

このグループを構成する建物のうち，ＳＢ34は総柱で倉庫と考えられる。ＳＢ30は，調査区外北側に伸びており，規模は不明である。

ＳＤ14・27も当該期と推定されるが，主軸方向が異なり同一時期とは断定できなかった。

〔VI期〕　３Ａ）グループがこの時期に相当する。この時期を構成する建物として，ＳＢ02・04・06・07・08・27・31が見られる。

先にも述べたように，VII期との区分は主軸方向によっている。ＳＢ08はＳＢ09に切られており，若干ではあろうが先行することは疑い無い。

この時期の建物群は，調査区の南半に居住用と考えられる建物群を配し，北半に総柱の倉庫群を配置している。このことは，集落の主要建物に付属していた倉庫が，集落全体に付属することを表し，倉庫の位置付けに変化をもたらしたものか，集落の性格が変化したものと考えられる。

〔VII期〕　３Ｂ）グループがこの時期に相当する。

調査区内での掘立柱建物の分布は，大きくは３群に分けられる。東に位置付けられるＳＢ03・05は南辺に廂を持つ建物で，ＳＤ01・05・06・07によって「コ」の字形に囲まれている。

中央南群は，ＳＤ９～13・23・38～39に囲まれた区画の中で，東辺に主たる建物，

西辺に建物，北辺に倉庫群を配置する。

中央北群は，ＳＤ31を挟んで建物と倉庫が見られる。

B_3地区西辺には，ＳＤ44～46の三条の溝がほぼ平行して伸びており，遺跡の西辺を画しているものと考えられる。

このように，全体的に建物の規則的な配置は認められないものの，比較的整ってきた状況が伺われる。

〔Ⅷ期〕　この時期は，Ⅲ期～Ⅶ期に位置付けた大形建物とは一線を画し，時代的にも隔たりがある。出土遺物から見て，平安時代の中頃から後半に位置付けられる。

ＳＢ01は柱穴がやや方形に近い形を呈するが，この建物以外は柱穴規模が極端に小さくなり，ほとんどが円形を呈している。ＳＢ01の南側では当該期の柱穴を数多く検出しているが，建物が復元できたものはない。また，ＳＢ14・15は重複すると同時にややいびつな形態を呈する。このことからして，当該期の建物遺構ではコーナー部分の角度が直角にはならず，いびつな柱材を使用した建物が多かったとも考えられるが，柱穴埋土も同一であったため復元に対する検証は出来ていない。

地区が異なるが，B_1地区ＳＤ02について少し触れておく。本文中でも述べたように，方位が現在の水田区画に平行すること，埋没年代が10世紀前後と推定されることから，条里制に伴う溝状遺構と考えている。機能していた年代が，埋没時期からどれくらい遡るかは不明である。

埋土はすべて中砂で構成された砂層を形成しており，比較的急激な埋没状況を呈するものと考えている。同様の例は中村遺跡[註3]でも観察されており，埋没年代もほぼ同様である。このことは，これ以降同一の溝を使用していないことからもわかるように，平安時代中頃に大規模な区画整理が行われたことを意味するものと考えている。

以上のように稲木遺跡の変遷をⅠ期からⅧ期まで概観した。この内，大形建物群が出現するⅢ期からⅦ期までは，柱穴・溝・土坑の埋土等から出土した遺物によってほぼ７世紀～８世紀初頭の百年間に位置付けられる。またⅧ期の遺構は，10～11世紀と考えている。

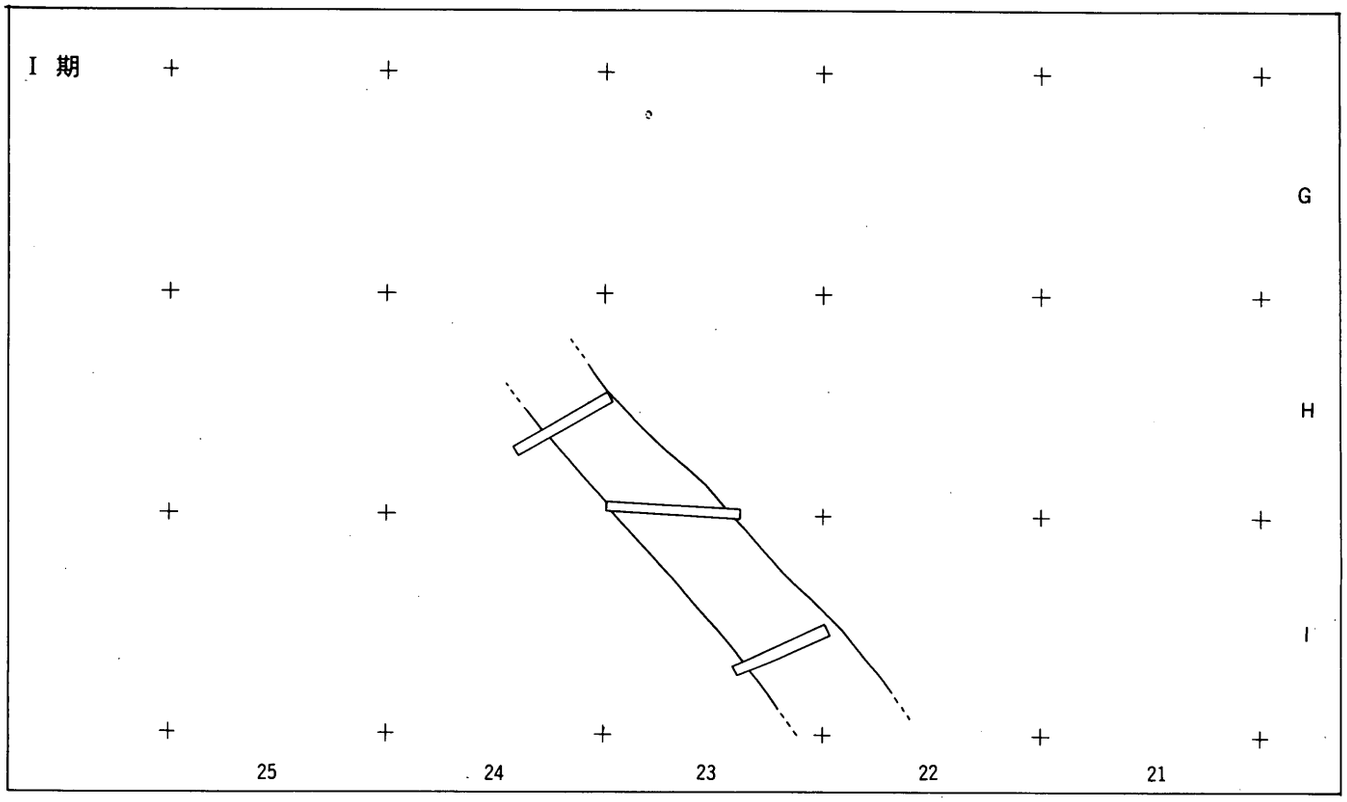
最後にⅢ期～Ⅶ期の遺構の性格について述べたい。これらの時期に共通する事項として，

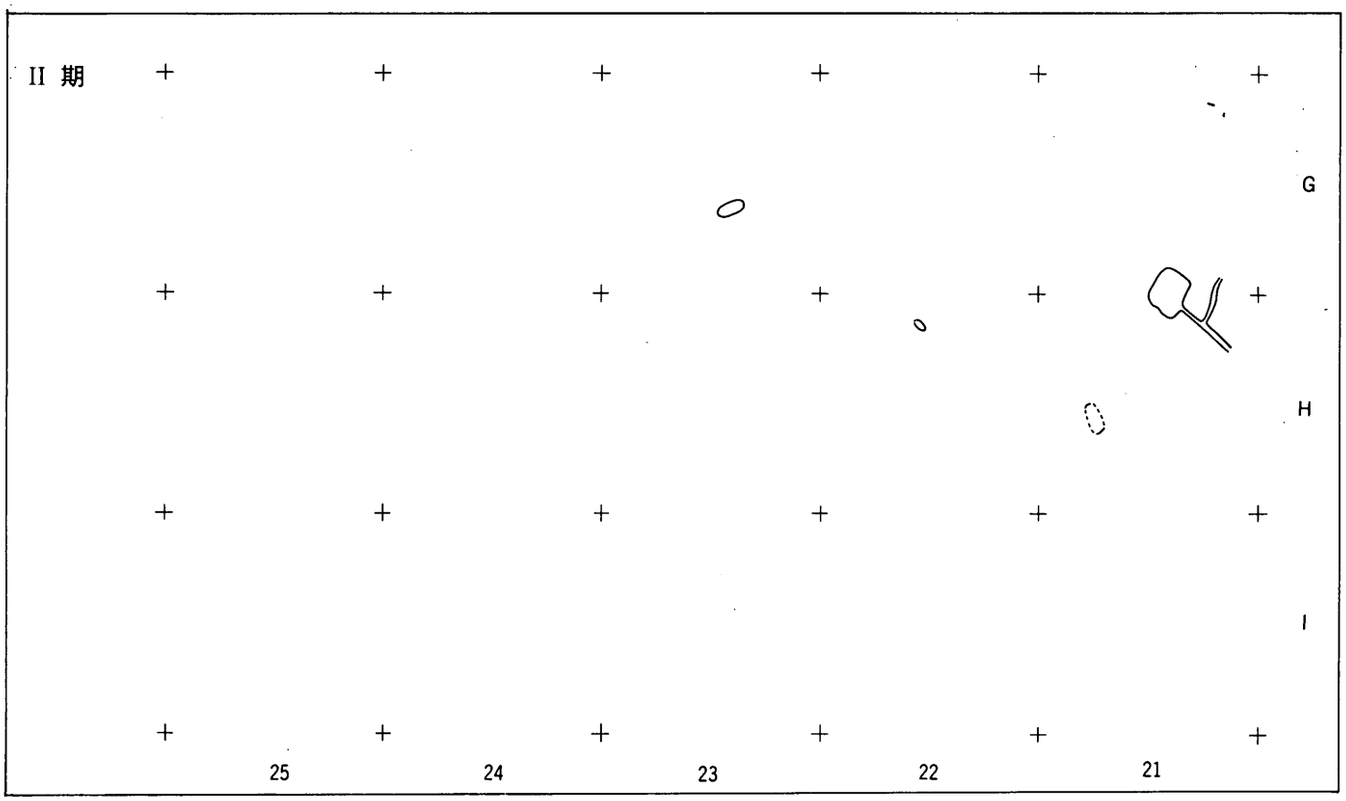
○　建物の柱穴規模が大きいこと。

○　配置に規則性はないが，比較的方向が揃っていること。

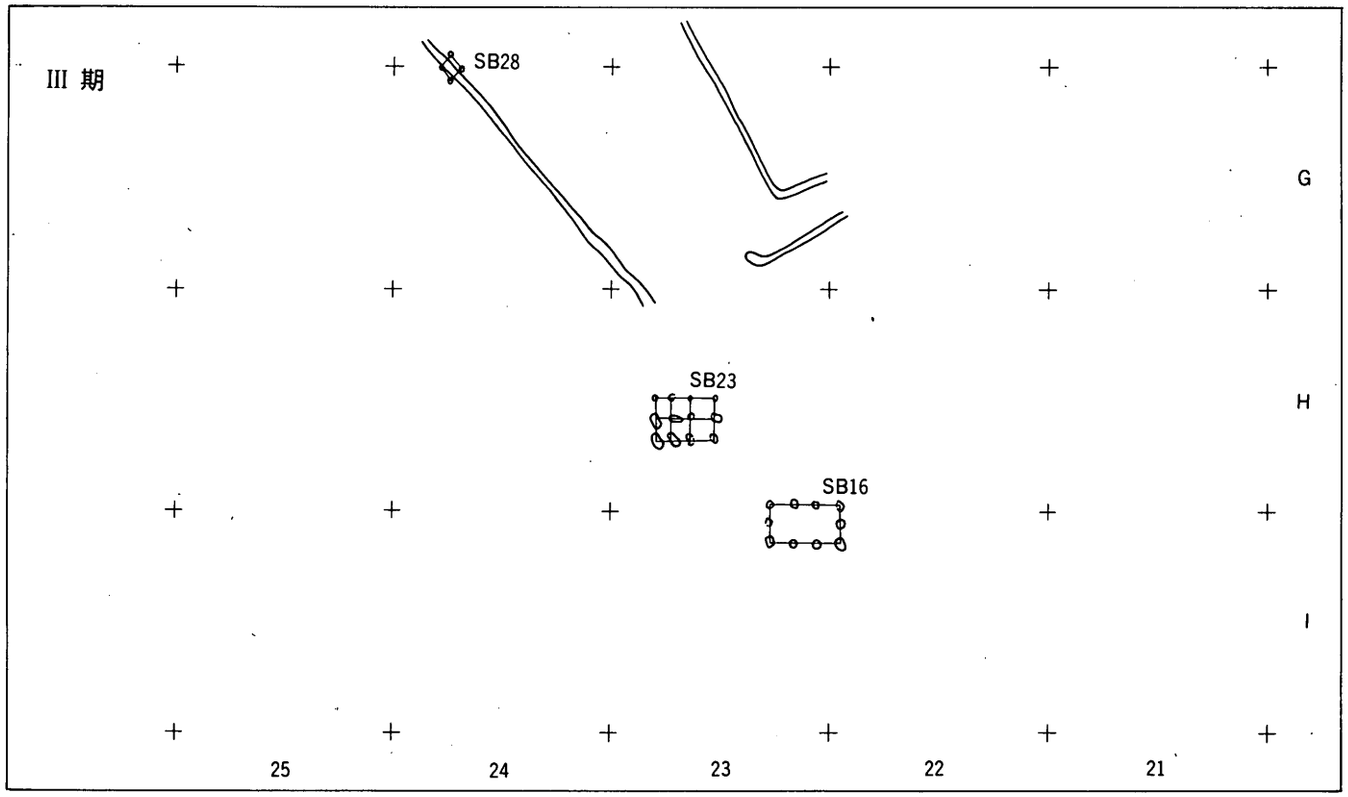
○　建物の柱穴からまとまった遺物の出土はなかったが，溝状遺構出土遺物から見て７世紀～８世紀初頭であること。

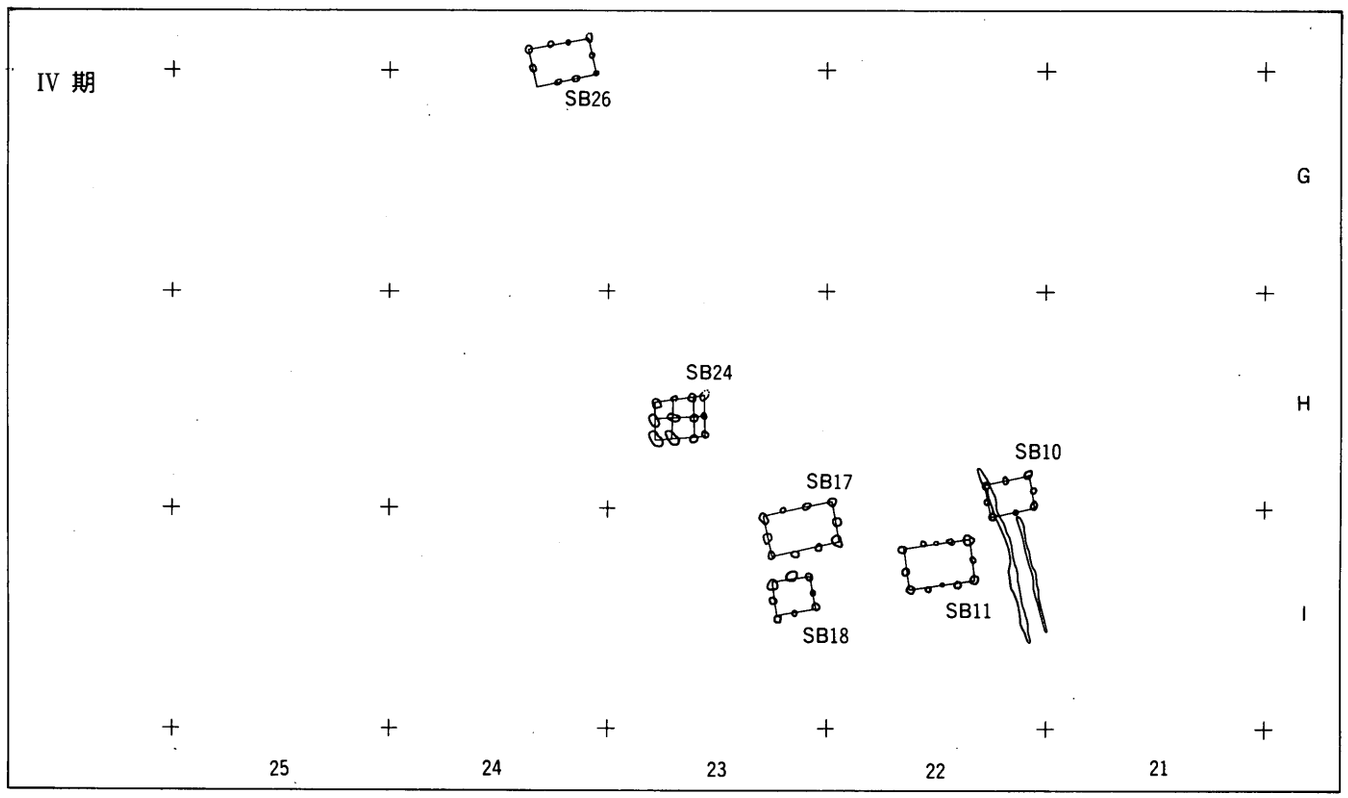
○　建物規模は平均約21m²を測るが，40m²を測る大形の建物も見られること。



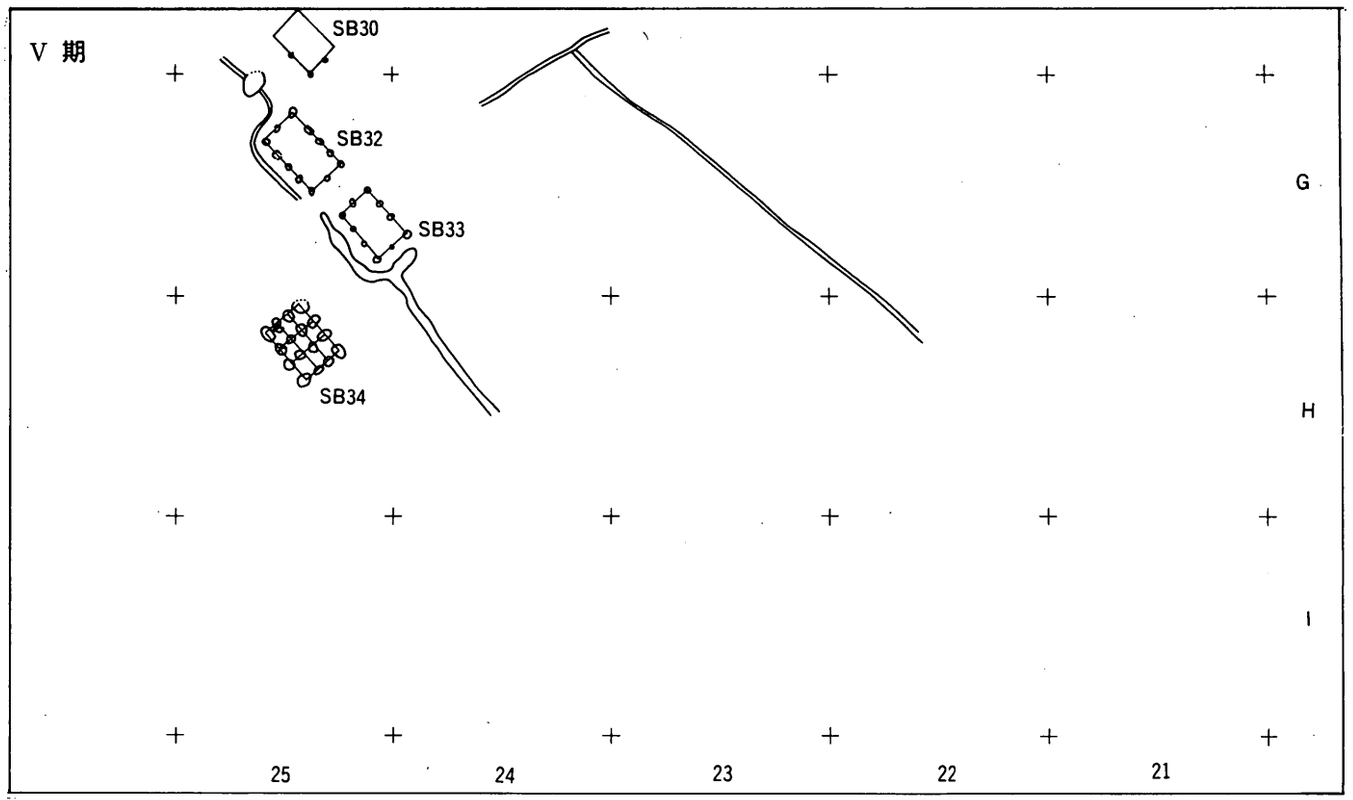


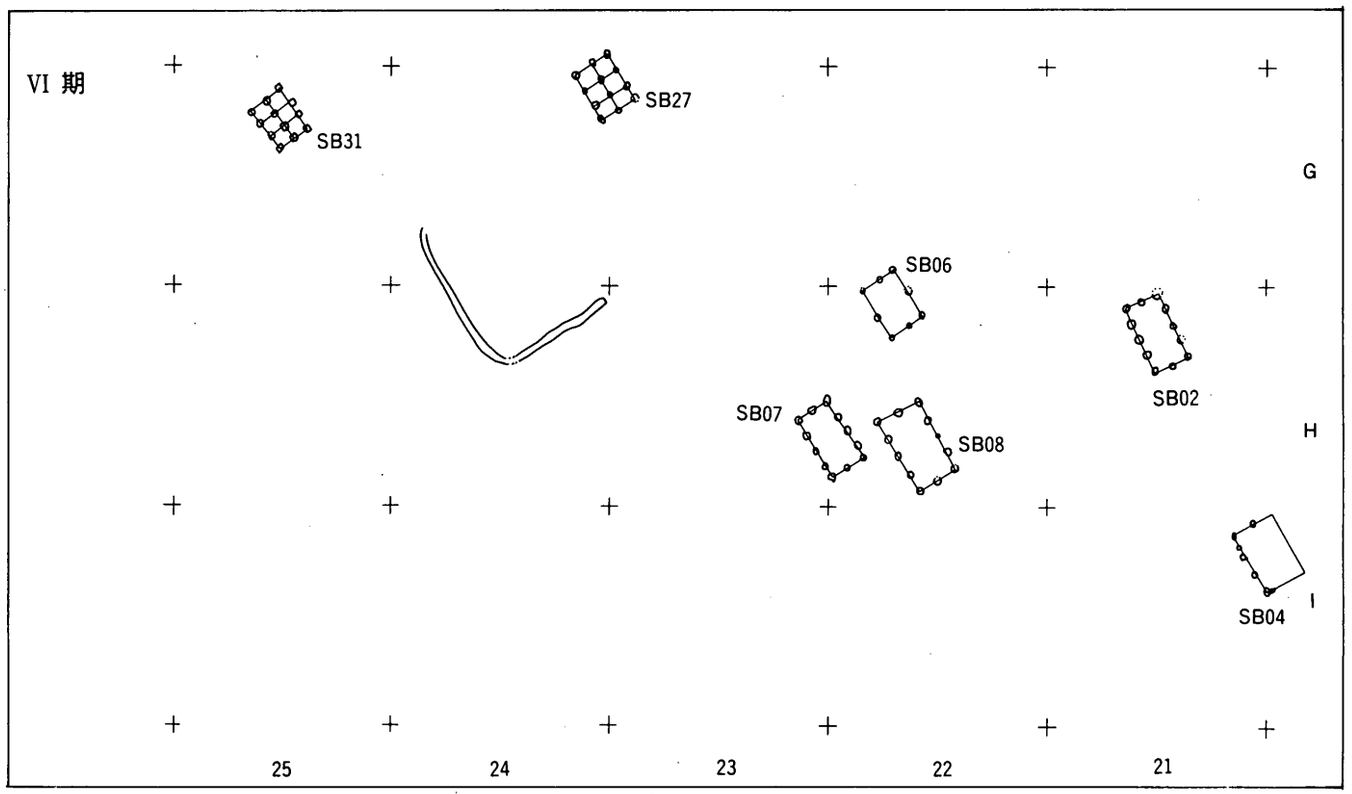
第82図　遺構変遷図(1)


III 期
SB28
SB23
SB16
G
H
I
25
24
23
22
21

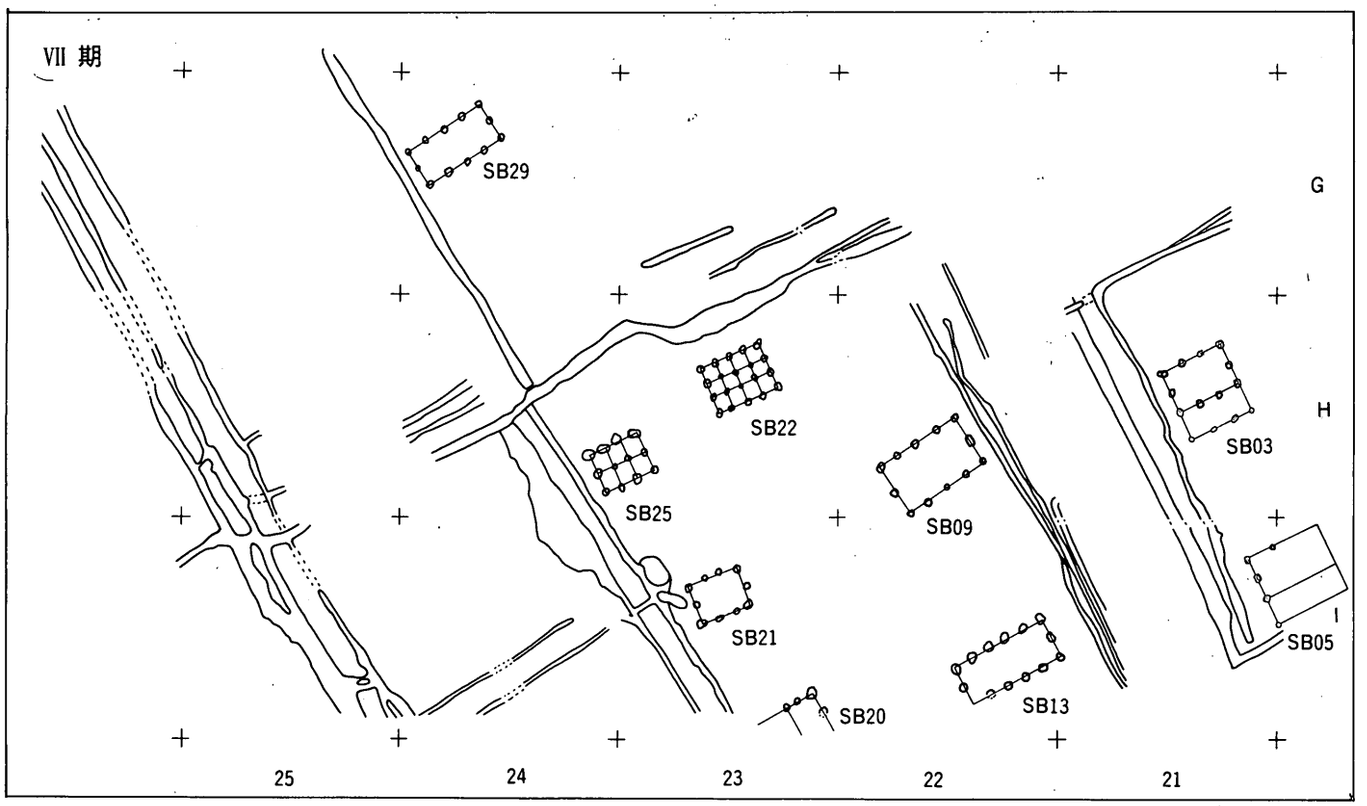

IV 期
SB26
SB24
SB17
SB18
SB10
SB11
G
H
I
25
24
23
22
21

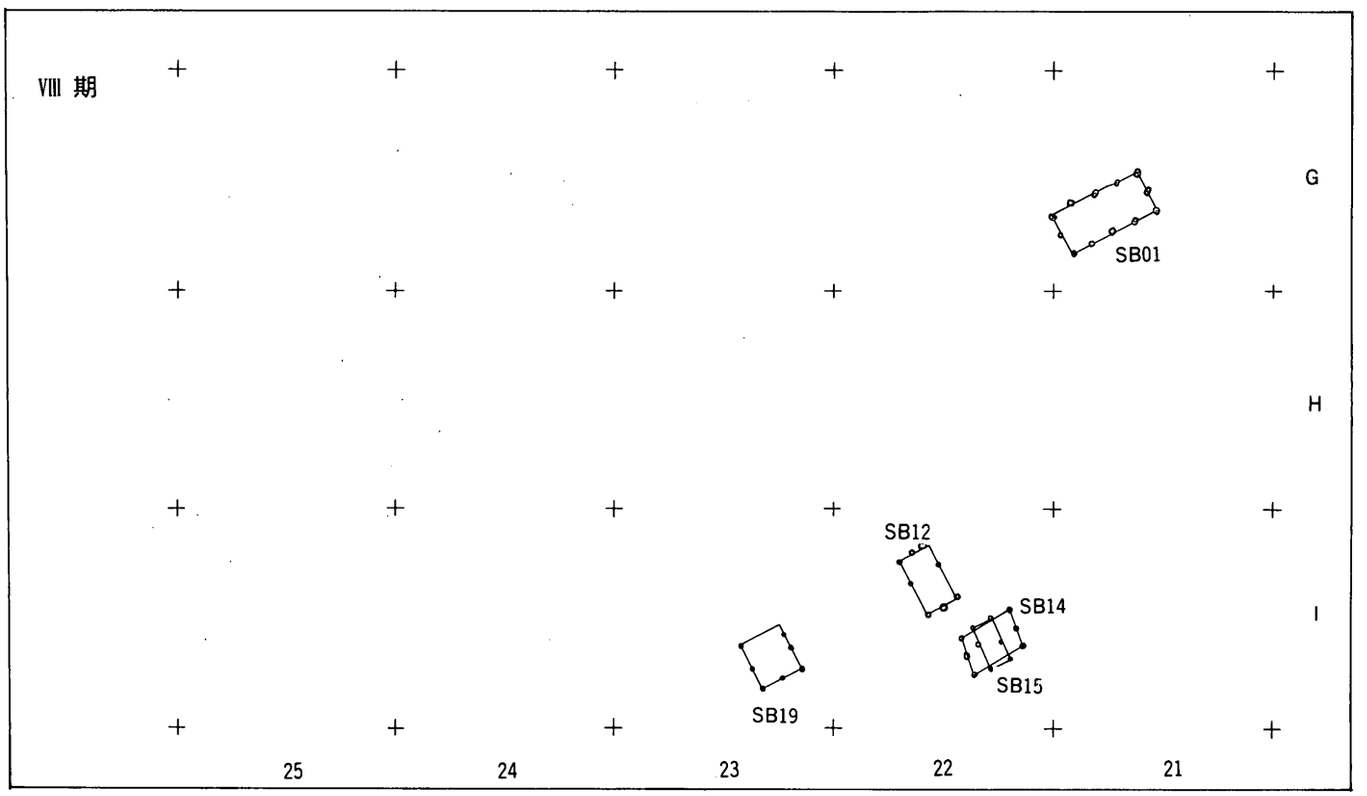
第83図　遺構変遷図(2)


V 期
SB30
SB32
SB33
SB34
G
H
I
25
24
23
22
21


VI 期
SB31
SB27
SB06
SB02
SB07
SB08
SB04
G
H
I
25
24
23
22
21

第84図　遺構変遷図(3)


VII 期
SB29
SB22
SB25
SB09
SB03
SB21
SB05
SB13
SB20
G
H
I
25
24
23
22
21


VIII 期
SB01
SB12
SB14
SB15
SB19
G
H
I
25
24
23
22
21

第85図　遺構変遷図(4)

○　倉庫と考えられる総柱の建物が多く見られること。

等がある。

以上の点からB_3地区の建物群の性格を考えた場合，次の２つの考え方が可能である。

1　建物規模も大形ではなく，建物配置にも特別な状況が伺えないことから，この時期の一般的な集落とする考え方。

2　年代的に律令制度施行前であることを前提に，後の官衙等につながる遺構であるという考え方。

ふたつの考え方共に同時期の県内資料が乏しく比較・検討できないが，現在までの調査例から見て，７世紀前半まで竪穴住居が存続する[註4]こと，奈良時代の始まりと共に消滅することなど，当時の社会的影響を多く受けていることは明らかである。これを前提とすれば，一般集落としてとらえることにやや躊躇を覚える。

今後，資料の増加を待って再度検討を加えたい。

註１　『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　昭和62年　善通寺市・香川県教育委員会

2　同上

3　「中村遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第一冊　昭和62年　日本道路公団・香川県教育委員会

4　「大門遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第二冊　昭和62年　日本道路公団・香川県教育委員会

「柞田八丁遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第五冊　昭和63年　日本道路公団・香川県教育委員会

他に瀬戸大橋建設に伴い調査された坂出市下川津遺跡等にも例がある。

第4章　C地区の調査

第1節　調査の経過

予備調査と本調査に分けて経過を報告する。

①　予備調査

予備調査についてはC地区関係の調査日誌を掲げるに留める。

日誌抄

1983年6月1日　岸上，野中，中本により予備調査が開始される。

6月28日　現場事務所（3間×4間，プレハブ2階建）落成。

6月29日　現場作業員の就労を開始する。この日以降は主にA，B地区の調査に終始した。

9月8日　調査の主力がC地区に移る。

9月13日　C地区に濃密な弥生土器の包含層が存在することが判明した。16日以降は再びA，B地区の調査に主力が置かれることになる。

10月11日　調査区全域において農作物の収穫が終了したため，散発的なトレンチ調査からグリッド設定による全面発掘を計画する。

ところで，善通寺市地域の調査が国土座標第Ⅳ座標系に準拠した地区割（南北ラインが真北を指す）を基本としていたことを先に述べたが，この時点では現存する方格地割を生かした地区割（南北ラインが真北から30°西へ振る）を行なった。これは現地割が条里制遺構を反映したものであると仮定する場合に，検出遺構が土層観察用畦畔に直交するという利点があるのである。

1984年2月22日　C地区の調査再開。JR土讃線，満濃用水豊原幹線間（約275m²）の調査に着手。この調査は3月13日まで続けられ，弥生土器の群集部分を検出した。

3月5日　C地区南部（約2220m²）掘削開始。

3月16日　予備調査終了。

② 本調査

C地区の本調査は，まず予備調査データを補強することから始めた。すなわち10－Ⅰ，11－Ⅰ，12－Ⅰ区南端部に試掘坑を設定し，重機を用いて無遺物層まで掘削した結果，弥生時代後期，古墳時代後期，平安時代の3時期の遺構が埋没していることと，弥生土器が濃密に包蔵されていることを確認した。

また，遺跡範囲を確定することを目的として，土讃線以西の地区と新湯出水以東の地区において，トレンチ調査を行ない，遺跡の東西規模を明らかにした。これによると，東端部は，新湯出水の地点であり，西端部は軌道敷以西約40mの位置にある。したがって，C地区の規模は東西約160mを測ることが判明したのである。

しかしながら，以上の作業は本来，予備調査の段階で実施すべきであり，本遺跡の調査が予想外に手間取った要因の一つがこの点にあることは否定できないであろう。さらに，調査期間を長期化させる要因の一つには，集石墓という県下初見の遺構を検出した点があげられよう。筆者ら調査員にこの遺構の調査経験がなく，暗中を摸索し続けたことが事実である。

調査は遺跡地全域について，当初の計画通り全面発掘を行なった。しかしながら，土讃線軌道敷，満濃用水豊原幹線，新湯出水などは，依然機能を続けていたため，その下部については調査を断念せざるを得ず，遺跡地中央部および縁辺部に未知の部分を残したことは惜しまれる点である。

第86図　発掘調査風景

ところで，本調査の開始と同じ時期に，道路公団の工事関係者の動きが激しくなり，とりわけ国道319号線，ＪＲ土讃線の高架工事を控えていた本遺跡周辺は騒然とした様相を呈している。

こうした動きの中から，工事用道路仮設の話がもち上がり，当初排土置場としていた北半部について，一部を工事用道路としての利用を認めるに至った経緯は見逃すことができない。

さて，掘削は南半部の９－Ｈ・Ｉ，10－Ｈ・Ｉ，11－Ｈ・Ｉ，12－Ｈ・Ｉ，13－Ｈ区の９区画から開始した。12－Ｉ区では，南端部トレンチ調査によって既に露出していた第５号集石墓の調査が当面の課題とされ，11－Ｉ区においても，Ⅲ層除去後に墳頂部の露見した第１号集石墓の調査が主力であった。

一方，遺跡の東部に当たる９－Ｈ，10－Ｈ，11－Ｉ区では，Ⅲ層上面において掘立柱建物跡と胞衣壺を検出している。

第１，５号集石墓について，基盤をなすⅥ層上面まで覆土を除去し，墳丘全体を検出し終えた直後に11－Ｈ，12－Ｈ，13－Ｈ区において，第２，３，４号集石墓の墳頂部を確認している。しかしながら，第１，５号の形態が判明した時点では，これらの遺構を墳墓と認める確証がなかった。そこで遺存状態の良好な前者について，十文字に土層序観察用畦畔を残し，４分割する掘削方法により内部構造と下部構造の調査を実施した。もちろんこの調査方法についても，調査担当者の中に異論がなかったわけではない。封土の掘削は総ての集石墓の墳丘を検出し，配置を明らかにした後でも遅くはないとする意見はその一例である。ただ，集石墓の調査の調査全体に占める比重が高く，調査期間を決定する重要なポイントと考えられたため，遺構の性格を早急に明らかにする必要に迫られ，前述の方法に拠るに至ったのである。

断割調査の結果，第１号集石墓については，主体部と考えられる土坑による下部構造を有することが判り，埋土中より小型のヤリガンナ１点と桃核４点を見出した。

さらに，10－Ｈ区より壺棺墓２基を検出したことにより，当遺跡の埋葬地としての性格を確実にした。壺棺墓はこの後にも出土数が増加しており，全調査区より，10基（うち２基は10－Ｉ，12－Ｉ区南端部の試掘時に出土。）が検出されている。

ところで，筆者らは集石墓，壺棺墓を調査することにより，遺跡の性格を埋葬地とする自信を深めたわけであるが，12－Ｉ区の第４号竪穴住居跡の出現によって居住域，墓域という色分けは簡単でないことも認識した。

南半部の調査終了は11月６日である。

一方，土讃線軌道敷以西の調査区では，15－Ｈ区の掘立柱建物跡の調査を行ない，下位の砂礫層上面に竪穴住居跡３基を検出している。このうち第３号竪穴住居跡が，遺跡の最も西端部に位置し，しかも後世の河道により西半部分を削り取られた状態で検出された点などから，遺跡が濫流する河川の氾濫原内に立地し，洪水による災害を被り易い条件下に営まれていたことが判明した。

15－Ｉ，16－Ｈ・Ｉ区の河道跡（ＳＸ04）については，トレンチ調査により遺物の遺存状態が悪く，包蔵量が少い事実を確認したため，全面掘削を避けている。

なお，土讃線以西では，他に集石遺構１基，土坑墓１基，土坑１基などを検出して10月18日に調査を終了した。

北半部の調査の重点は10－Ｇ区の第８号集石墓の調査にあったが，特に他の集石墓の調査成果から，覆土，封土，基盤土の分離が不明瞭であった点を反省して，表土（耕作土）除去後，II層以下の土層序観察用畦畔を設定し，墳丘の検出と断割りを実施した。

また，10－Ｆ，11－Ｆ区検出の第５号竪穴住居跡は埋葬地と居住地が近接して立地する一例と言える。

埋葬遺構には，12－Ｇ区検出の土坑墓２基もあり，ＳＴ22に牛歯が埋納されていたことは特筆すべきであろう。

北半部は南半部に比して，遺跡を特徴付ける遺構が少いが，ピットの検出数の増加は著しい。この要因としては，北半部の調査時には土壌を識別する技量が増大していたことなどが考えられる。しかしながら，基盤が砂と礫から成るために遺構の検出が困難を伴うものであったことは事実である。その他に土坑２基，総柱の掘立柱建物跡１棟がある。

以上の経過により，1985年３月30日に現場調査を終了した。

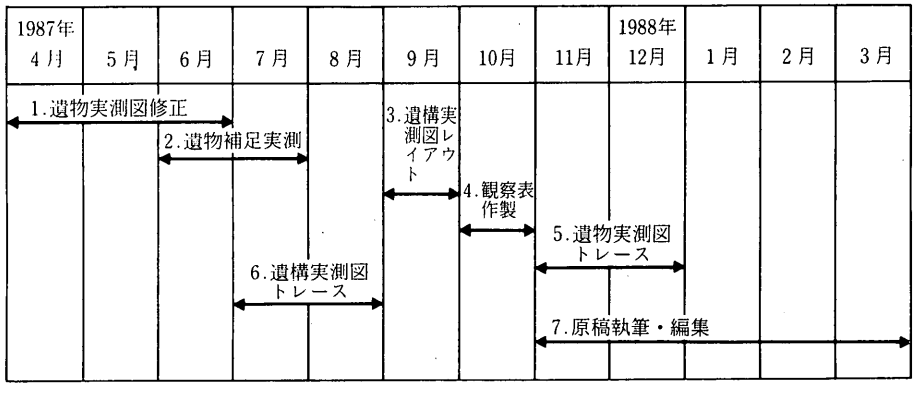
ところで，調査が整理作業を行ない，報告書を刊行することによって完了することは改めて述べるまでもないことである。

そこで，稲木遺跡の整理作業経過についても報告する義務を果そうと思う。

整理作業は香川県教育委員会文化行政課善通寺連絡事務所と香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

まず，昭和59年度の発掘調査に併行して，出土遺物の基礎整理作業（復元作業と分類作業を含む）と実測作業に着手，昭和60年度12月まで継続した。この間に21ヶ月を要したわけであるが，最大の問題点は，整理作業が調査担当者の手を離れていた点にあった。本格的な整理作業は，昭

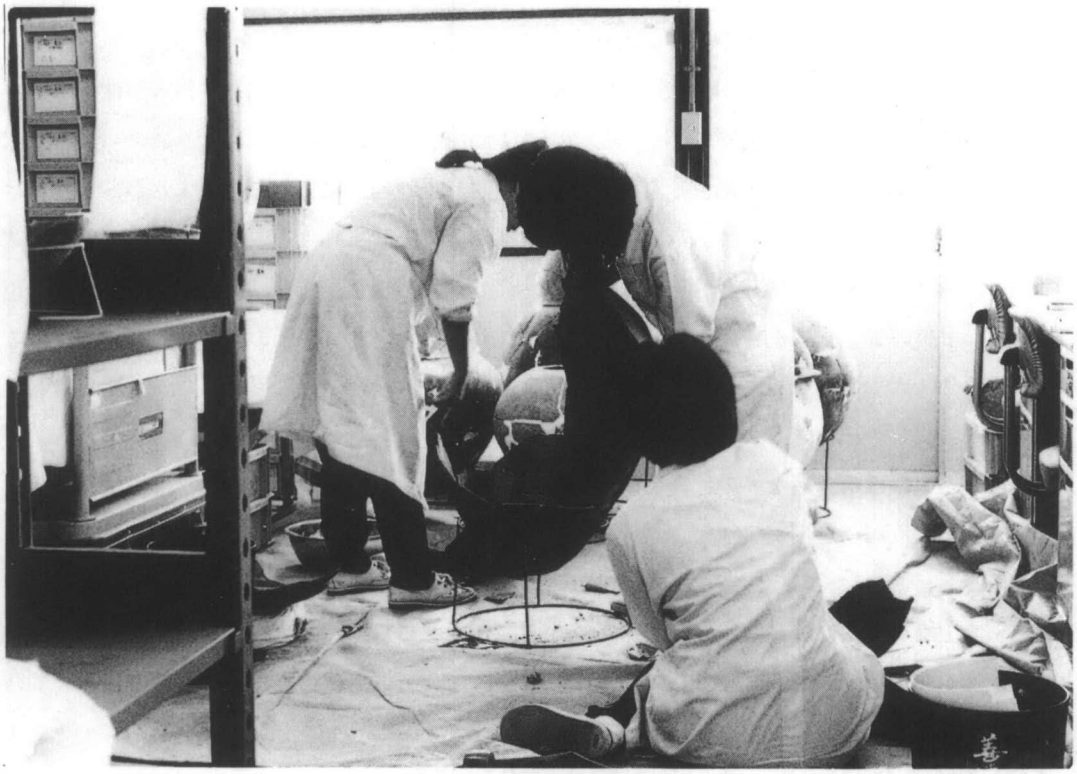
第21表　整理作業工程表



和62年度4月から3月までの12ヶ月を費した。

昭和62年度の整理作業工程の概略は，第21表に掲げる通りである。

なお，本整理を行なう上での問題点は，発掘調査終了後，既に2ヶ年が経過していた点と，調査担当者4名（予備調査を含める）のうち3名が在職しなかった点にあると考えている。



第87図　整理作業風景

第2節　土層序について（付図15）

発掘調査により確認された土層序は，耕作土を除き総て自然堆積によるものであり，人為的な堆積層を検出していない。ただし，古墳時代以降の遺構が主として耕作土直下において検出された点と，遺存状態に大差が認められた点から，古墳時代以降においては人為的な掘削により地形の改変が行なわれたことは容易に推測できる。

さて，確認された土壌は次の7層に大別することができる。

第1層（Ⅰ層）[註1]（近，現代の耕作土である黒色腐植土層。），第2層（Ⅱ層）（鉄分が沈着するために赤色を帯びる褐色砂質土層である。近，現代の水田跡に伴う土壌と考えられる。いわゆる「床土」か。），第3層（Ⅲ層）（黄褐色砂質土層。弥生土器，土師器，須恵器を包蔵するが，とりわけ須恵器の出土が多くみられる。），第4層（Ⅳ層）（褐色砂質土層。弥生土器と少量の須恵器を包蔵する。），第5層（Ⅴ層）（褐色粘質土層。多量の弥生土器を包蔵する。），第6層（Ⅵ層）（黄褐色砂質土。少量の弥生土器を包蔵する。），第7層（Ⅶ層）（最大径5～10cmの砂岩の円礫が混在する砂層であり，人工遺物を包蔵しないために本調査においては最終の掘削層とした。しかしながら形成時期は明らかにできていない。[註2]）

これらの土壌は第7層上面の比高の変化が激しいことを除き，他はほぼ水平な堆積状況を示している。ところが，土壌が流水により形成されたことは明らかであり，各土壌中に砂礫がレンズ状に包蔵される。したがってこれらの砂礫層は各土壌を細かく分断するために，調査対象地区全面に同一の土壌が一様に広がる状況は認められない。このなかで，弥生時代後期後半の遺構群を被覆する第4，5層は広範囲にわたって堆積しており，当時の生活遺物を良好な状態で包蔵しているために特に丁寧な掘削が要求されたのである。

（註）

1　本書においては，土層序の呼称法として例えば第1層とⅠ層の両者を併用したが，大意は存在しない。

2　善通寺市域における横断道建設に伴う発掘調査では，遺物を包蔵しない広範囲に及ぶ厚い礫混じりの砂層をいわゆる地山と認定して最終の掘削層としたが，その形成時期を判定する資料は得られていない。

第3節　弥生時代の遺構と遺物

1．竪穴住居跡

①　分布状態

総数5基を検出した。第1～3号竪穴住居跡（ＳＢ01～03）は，土讃線軌道敷以西の調査区（15－Ｈ，16－Ｈ区），第4号竪穴住居跡（ＳＢ04）は，調査区南部（12－Ｉ区），第5号竪穴住居跡（ＳＢ05）が，調査区北部（10－Ｆ，11－Ｆ区）に所在している。総てＶ層を除去した後に地山である砂礫層直上において検出されており，埋土中より弥生時代後期の遺物が出土していることから，大概的には，同時代に機能し，埋没したことは間違いなかろう。この点については後に詳述する。

ここでは，遺跡の構造上における住居跡の位置問題について若干解説しておく。

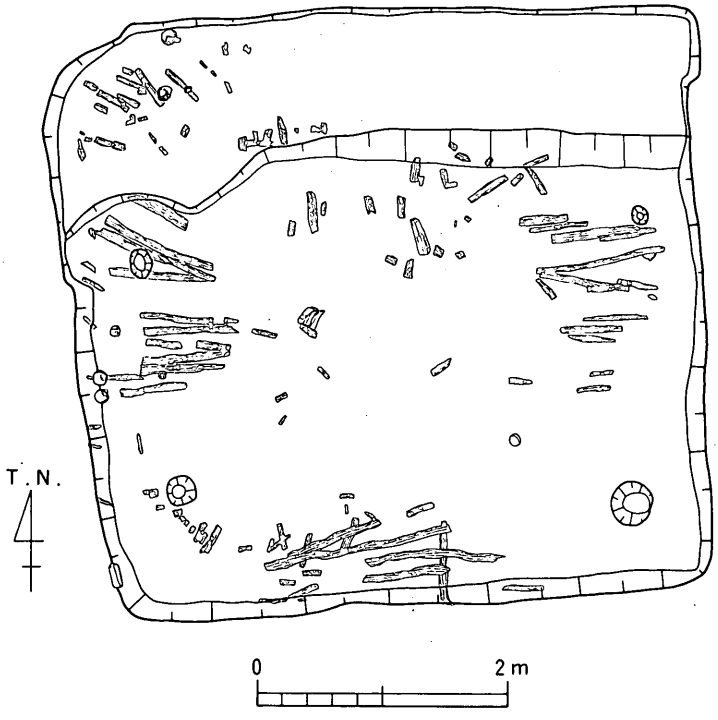
まず，ＳＢ01～03に注目すると，第1号土坑墓を除き，その周囲に埋葬施設が認められないことから，あたかも集石墓群をはじめとするいわゆる墓域に対する居住域としての性格を持ち合せているかの様相を呈している。しかしながら，他の2基の住居跡が各々の位置を占地することはこの考えを否定するものであろう。むしろ上記の埋葬施設群を取り囲む位置関係とみることはできないであろうか。すなわち，墓地の周囲に居住地が立地するのである。この点については，遺跡が調査地区外の南北方に拡がることと，軌道敷下部などの未調査地区を残していることを考えると，資料不足は否定できないため乱暴な発言をしていることを断っておかなければならない。

第22表　竪穴住居跡一覧表

名　称	略号	位　置	形　態	規　模 L×W	主軸方位	特　記　事　項
第1号竪穴住居跡	ＳＢ01	15,16-H	隅丸方形	500×470	N-1°-W	焼失家屋。北壁にベッド状遺構を有する。床面直上に焼土塊2基が遺存する。
第2号竪穴住居跡	ＳＢ02	15－H	隅丸方形	480×430	N-19°-W	埋土中に礫群が遺存する。
第3号竪穴住居跡	ＳＢ03	16－H	隅丸方形	590×520	N-17°-W	東壁に舌状の施設を有する。
第4号竪穴住居跡	ＳＢ04	12－I	隅丸方形	420×380	N-12°30′-W	小規模。
第5号竪穴住居跡	ＳＢ05	10,11-F	隅丸長方形	640×520	N-32°-W	東西南壁にベッド状遺構を有する。

L：長軸　W：短軸　　単位cm

② 第１号竪穴住居跡（ＳＢ01）（第88図）



第88図　第１号竪穴住居跡実測図

床面直上から多量の炭化木片が出土した。炭化木片の残存幅は数cm，残存長は数cm～150cmであり，形状は直状のものはほとんどなく，大部分は若干であるが屈曲している。断面形態は，西壁付近のものが円形であるのを除き，他の大部分は半円形である。出土位置は，床面中央部に希薄で，他は壁面近くまで比較的密に遺存している。炭化木片の大部分は，その一端部を中央部に向ける放射状の位置にある。また，これに直交するものが南壁近くの位置で少量検出されている。南壁付近において検出された炭化木片は住居跡外部から床面へ転落した状態で出土しており，さらに，この炭化木片に重複した状態で直交する位置の炭化木片が平行して３本出土している。

西壁面には，やや外傾する壁面に貼り付いたような状態で，垂直方向の位置にある炭化木片が約10～40cmの間隔で検出された。なお，この炭化木片は，径3.5cmの丸材が使用されている。

炭化木片を除去して完掘した結果，平面形態は不整な隅丸方形，平面規模は470×500cm，深さ30cm，主軸方位Ｎ－１°－Ｗであることが判った。遺構は最大20cmの礫を包蔵する砂礫層を掘削して構築されている。埋土もほぼ同様な砂礫層である。

床面施設としては北壁面に幅100～150cm，高さ20cmの長方形のベッド状遺構に似る施設が設けられている。同遺構を形成する土壌は基盤土層と区別できるものである。主柱穴は４個を有する。

柱穴径は12～28cm，深さ8～16cm，最も大きい南東隅の1個には縁辺部に盛土状のものが遺存している。住居跡中央部からやや南方に寄った床面直上部から，焼土塊が2基検出された。これらは最大径80～120cmの不整形なもので，外表面から数cmは淡橙色を呈していた。東側の同塊上面からは，斜め上方に開口された弥生土器の鉢形土器が2点検出された。また西壁面から3点の完形の鉢形土器が斜め上方へ開口させた状態で出土している。床面中央部の床面直上と南西隅の肩部より砥石がそれぞれ1点出土している。

③ 第1号竪穴住居跡伴出遺物

(1) 弥生土器（第94図1～12）

床面直上より出土した遺物は4，9～12であり，他は埋土の上位から出土している。したがってセット関係を把握し得るほどの資料とは言えない。

壺形土器

1は無頸の壺形土器であり，長い口縁部がラッパ状に外反する。端部はやや肥厚し，横位にナデることにより面を有する。2は小型品である。やや直線的に外反する頸部を有するが，口縁部，肩部との接点の屈曲は弱く，漸移的と言える。1同様口縁端部に面を有する。

甕形土器

3は出土頻度の高い資料である。内面に指頭圧痕が残るほど器壁が薄く成形されており，口縁部，端部の造作も精緻である。口縁部内面に強いナデ調整を施すことにより，上端部が突出した形態となる。やや内湾する形態であることも特徴の一つにあげられる。

鉢形土器

8の器壁は薄く，精製された器形である。9～12は，床面直上より出土した一括資料である。口縁部から胴部にかけては個々の形態が酷似している。しかしながら前2者が平底であるのに対して，後2者は丸底である。この点からこの器形に関しては底部の形態上の差異から時期差を求めることは難しいことが判る。

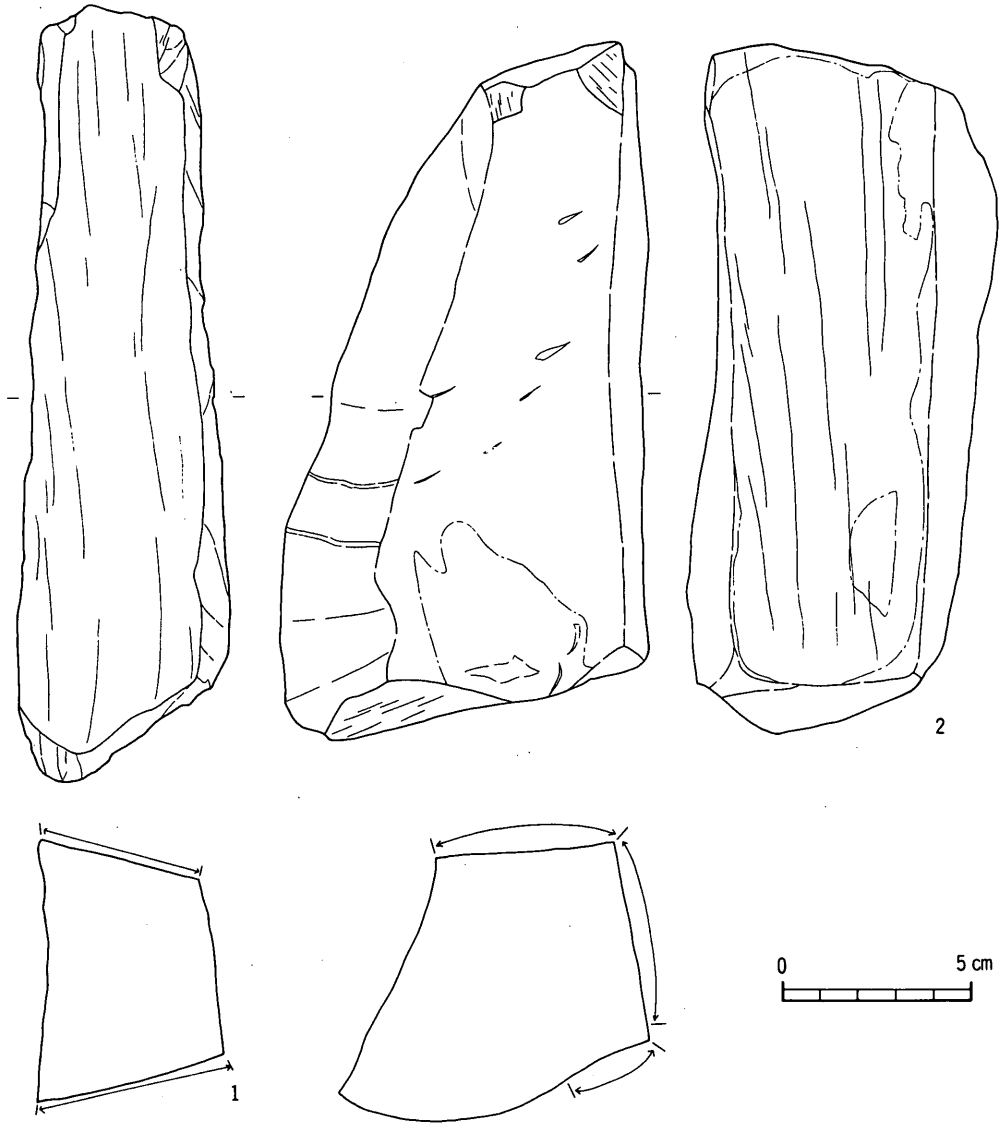
その他の器種

4．5は共に口縁部が緩く内湾して立上がり，底部が緩カーブを描く形態である。両者に形態上の差異は見出し難い。また，成形・調整技法に特異な技術差も認められない点を考えると，両者に時期差を求めることはできないであろう。なお，この器種は善通寺市彼ノ宗遺跡，および坂出市下川津遺跡検出の竪穴住居跡においても出土例が知られており[註1]，弥生時代後期後半頃には普遍的に使用されていたものと考えられるが，その系譜，使途などの解明はなされておらず，本稿においてもこれらの疑問点を明らかにするには至らなかった。

(2) 石器（第89図）

砥石2点がある。いずれも砂岩を原材料にしており，1は方柱状の石材を長軸方向に半裁して使用したことが断面の形状から判る。また2は使用面を除き，各面に自然面が認められることか

ら不整形な形態のまま使用されたものと考えられる。1は2面，2は3面に総て長軸方向の使用痕が残る。



第89図　第1号竪穴住居跡伴出砥石実測図

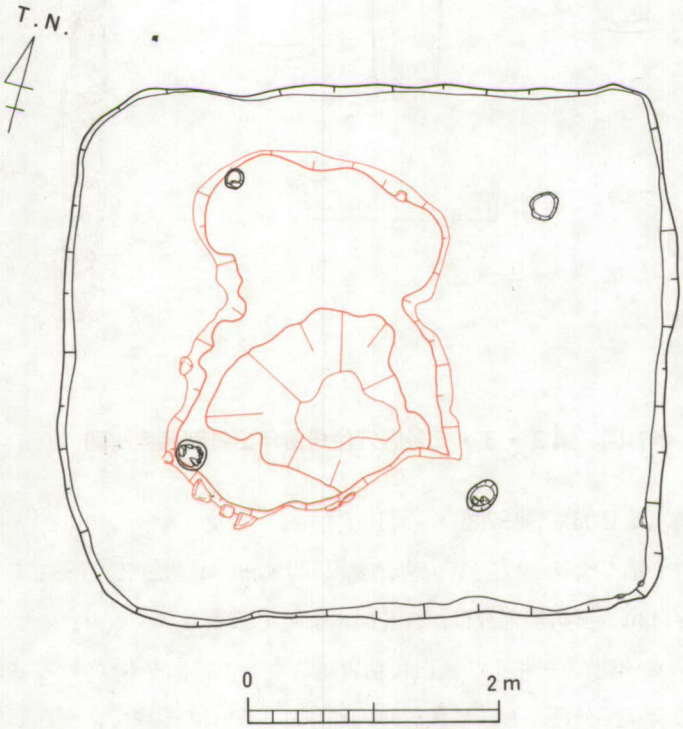
④　第２号竪穴住居跡（ＳＢ02）（第90図）

430×480cmの隅丸方形の平面形態を呈する竪穴住居跡である。主軸方位はＮ－19°－Ｗである。掘りかた中央部の172×272cmの範囲において数cmから20cm規模の礫群を検出した。礫間からは弥生土器片が出土している。礫群は住居跡床面からは遊離しており，しかも住居の掘り込み面よりやや低い位置にある点から，遺構が浅く緩やかな凹みとなる程度に埋没した時期に形成されたものと考えられる。

遺構は，砂礫層を掘削して構築されている。埋土も基盤層と同様に礫を多量に含むが，シルト質の土壌と弥生土器小片を含む点で区別できる。

床面からは４個の主柱穴が検出された。柱穴を結ぶ線と竪穴各辺は平行しない。

床面直上においては遺物は存しない。



第90図　第２号竪穴住居跡実測図

⑤　第２号竪穴住居跡伴出遺物

(1)　弥生土器（第94図13～16）

遺物量が少なく，遺存状態は悪い。また，総ての遺物が床面からは遊離した位置から出土している。

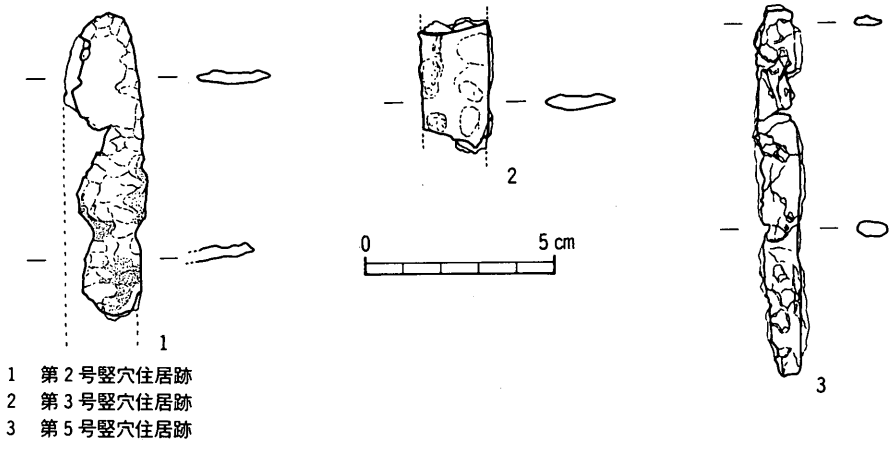
13，15が埋土中に存在した礫群より出土した遺物である。完存する遺物は全くない。また，住居跡埋没時に礫群が所在したことに起因すると考えられるが，埋土中に包蔵される遺物も少量である。

16は高杯形土器の脚部である。端部を肥厚して，ナデ調整を施す技法は，弥生時代中期後半以来の系譜がたどり得よう。(註2) しかしながら既に凹線文は認められない。

住居跡の埋没時期と礫群の形成時期の時間差を明確にすることはできない。

(2) 鉄製品（第91図1）

埋土の上位より1点出土している。劣化が著しく，原形を留める部分が少ないが，一側縁部のみに刃部が作成されている点から刀子の可能性が強い。



1　第2号竪穴住居跡
2　第3号竪穴住居跡
3　第5号竪穴住居跡

第91図　第2・3・5号竪穴住居跡伴出鉄製品実測図

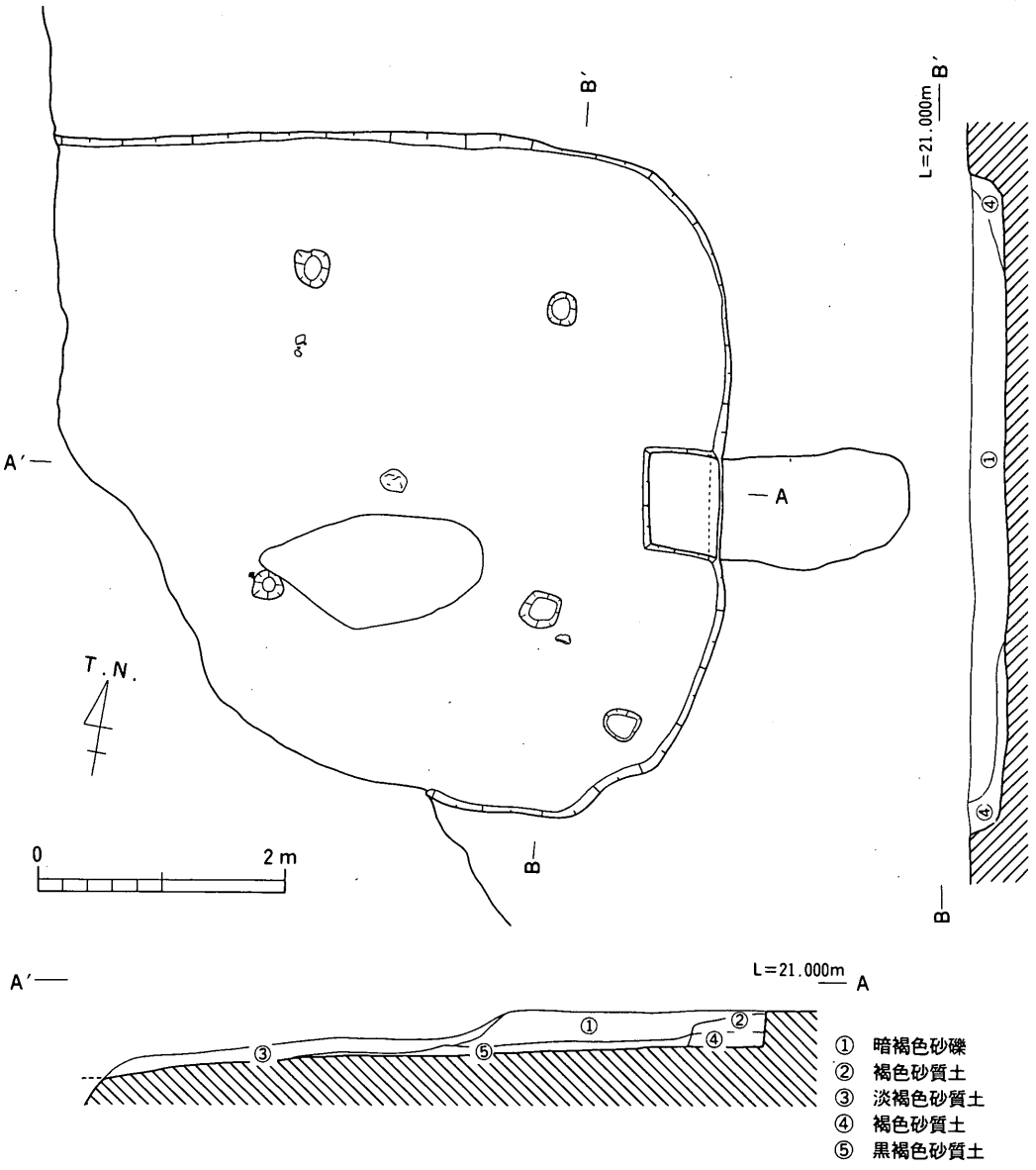
⑥ 第3号竪穴住居跡（SB03）（第92図）

平面形態は隅丸方形，主軸方位N－17°－W，復元規模520×590cmの竪穴住居跡である。南西隅部を頂点とする1辺2～3mの三角形部分は，SX04によって破壊されていた。

東壁面外部に80×147cmの規模の三和土状灰白色粘質土による舌状部を有する。厚さは数mm確認されたのみである。この舌状部分は，さらに住居跡内部へ80×50cmの規模で，平面形態が方形に続く。三和土状灰白色粘質土の下位は砂礫層で形成される。

床面からは4個の主柱穴が検出されている。また床面中央部からやや南西方の位置において不整形な平面形態の浅い土坑を検出している。断面形態は皿形を呈し，木炭の小片を含む灰色土によって埋没している。

埋土中から，ほぼ完形の甕形土器1点が出土している。また，最大径30cmの不整形な黄褐色粘土塊を1個検出している。同質の粘土は当遺跡内では産しない点から他所から持ち込まれたものと考えられる。



第92図　第３号竪穴住居跡実測図

⑦　第３号竪穴住居跡伴出遺物

この住居跡についても時期を特定し得る良好な資料は検出されておらず，器種構成にも恵まれていない。この要因の一つには，住居跡の廃絶直後に南西隅を削取する河道が形成されたことがあげられよう。住居跡の埋没が壁面直近を除いて短時間に進行しており，埋土の大部分は河道によって運搬された土砂である可能性が高い。

(1)　弥生土器（第94図17～28）

壺形土器

17は明確に弥生時代後期後半頃の形態を有する広口の器形である。口縁部の内・外面に横位のナデ調整を施すことによって端部を肥厚させた後に端面にヘラ描鋸歯文を施す。原形は大型品であったことが推測されよう。20は長く外反する口縁部と小規模な平底が特徴である。

甕形土器

21は器高が高いために砲弾型を呈する。外面全面にヘラ磨きを施しており，内面も板状原体を用いてナデ調整を施すことによって丁寧に仕上げている。

その他の器種

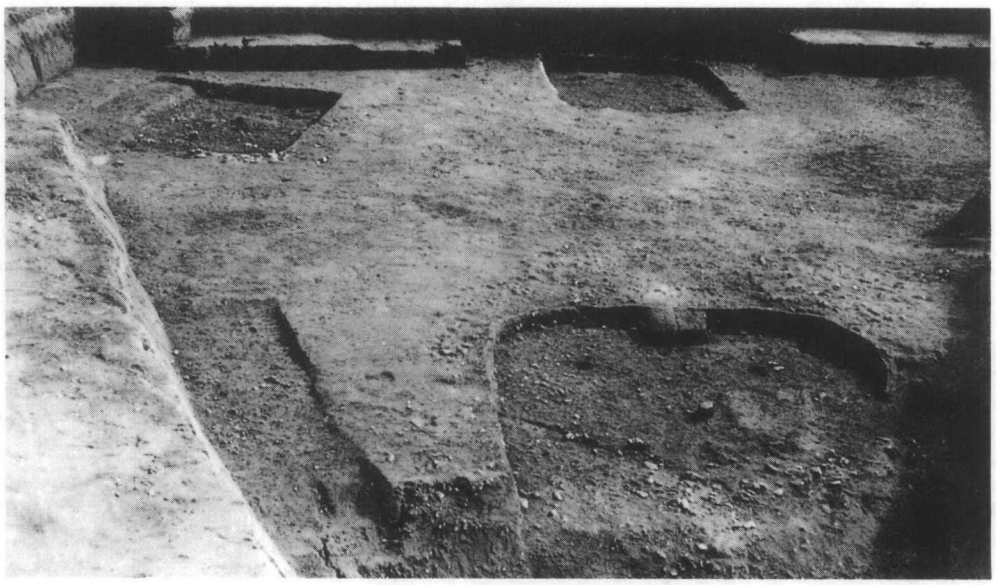
22～24はいわゆるミニチュアの模造土器に似る小型品である。23，24の外面に指頭圧痕も認められるが，全体の造作は丁寧と言える。したがって，ミニチュア土器が非実用的な粗製品であることを特徴としていることを考えるとこれらの性格はむしろ実用品と考えるべきである。25は脚台付の甕形土器であろうか。

⑵　土製品（第94図29）

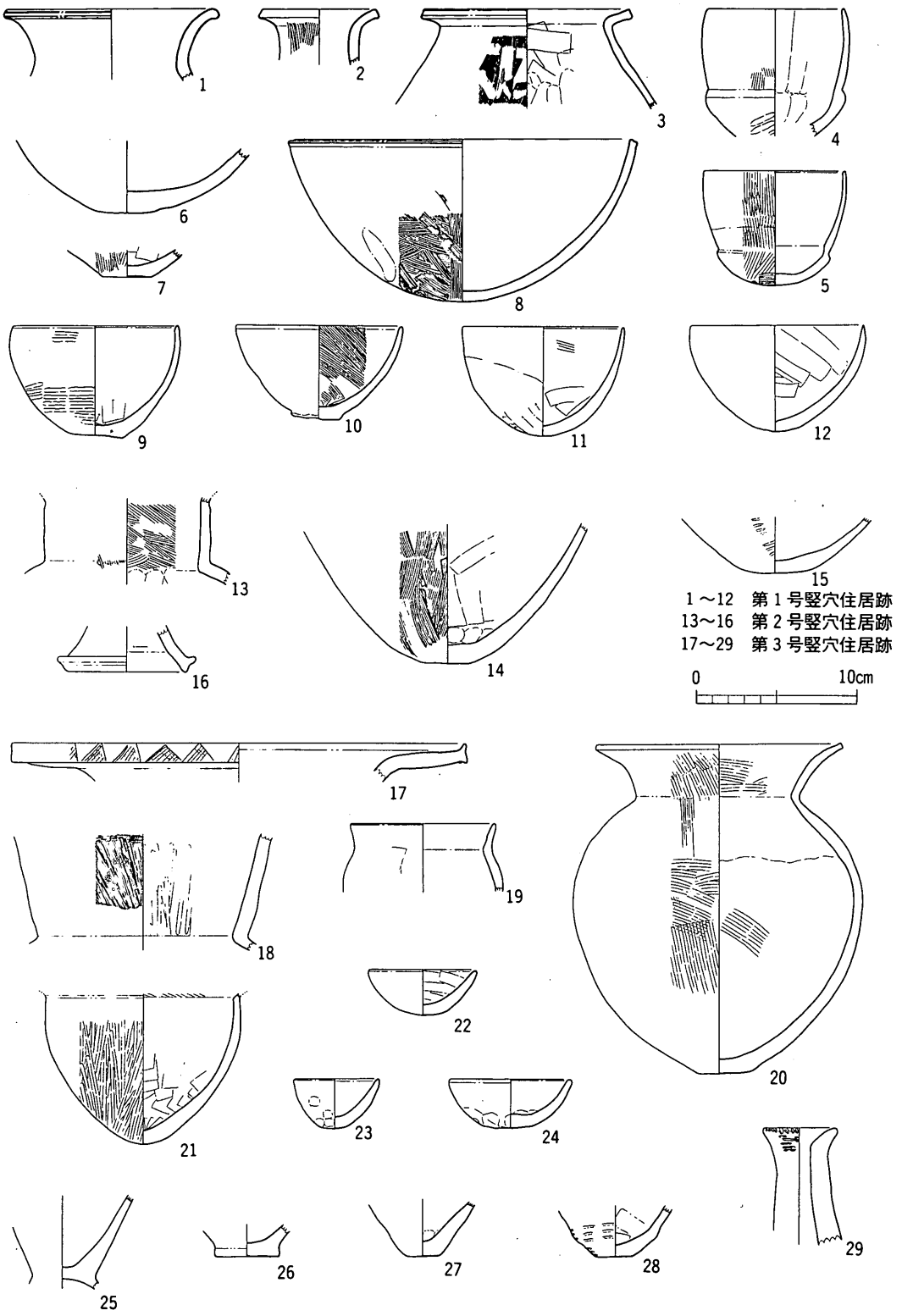
29は支脚形土製品である。支脚形土製品は弥生時代前期末の北部九州に初源があり，同後期以降中国地方，畿内，関東地方へ伝播した器種である。(註3) 上端部がラッパ状に開き，端部に刻目を施す形態は善通寺市域の遺跡に出土例を多くみる。29は上端部を水平にレイアウトしたが，その使途を考えると本来欠損部以下は大きく湾曲し，上端部に傾斜面を有することは想像に難くない。

⑶　鉄製品（第91図２）

残存長3.5cmの刀子の破片が１点出土しているが，刃部に鋭利さがない点から基部周辺と考えられる。

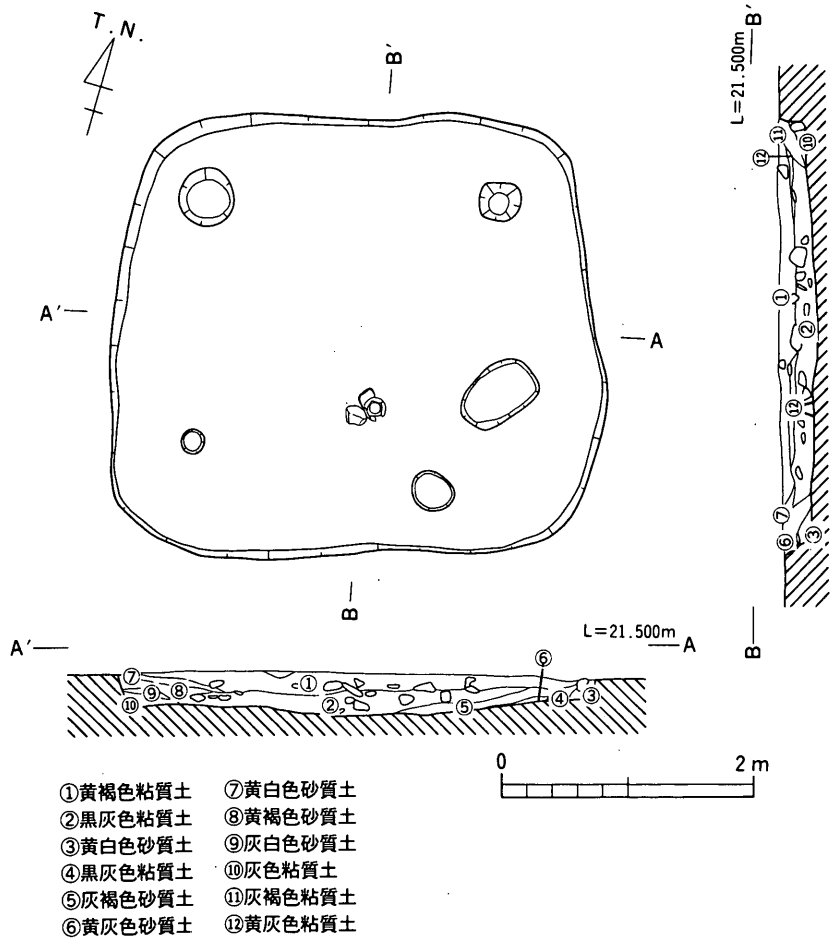


第93図　第１・２・３号竪穴住居跡



第94図　第１・２・３号竪穴住居跡伴出遺物実測図

⑧　第４号竪穴住居跡（ＳＢ04）（第95図）



第95図　第４号竪穴住居跡実測図

長軸422cm，短軸382cmを測り，平面形態が隅丸方形を呈する。壁面の傾斜は急であり，基盤が砂礫層であることを考慮すると，遺存状態は良好であると言える。また，床面は住居跡中央部がやや深く掘削されているため緩い傾斜をもつ。この部分に堆積の少い焼土層がほぼ円形に認められており，炉跡としての性格をもつものと考えられる。

主柱穴は４個穿たれているが，床面東南部の１個により不整形な位置関係となっている。深さはいずれも床面以下10cm未満と浅い。これは柱を固定する性格が弱く，屋根材あるいは梁材を有しない限り機能しないことを意味するものと考えられる。

床面東部に長楕円形の浅い（７cm前後）ピットが認められるが，貯蔵用に穿たれたとは考え難く，性格は全く不明である。

炉跡に南接する位置に，頸部以上が完存する二重口縁の壺形土器１点と自然石２個が遺存している。いずれも原位置を保っているものと考えられ，床面に固定されている。特に前者は頸部以下を破棄し，口縁部を水平にして置かれていることから支脚形土製品あるいは器台形土器と同様

な使途が考えられるのではなかろうか。なお，床面直上より出土した遺物は，この壺形土器1点のみであり，他は総て床面から遊離する位置から出土しており，細片が多い。住居跡の廃絶に当り，遺物が総て持ち去られたものか，本来，持ち得なかったものか，明らかにすることはできないが，埋没の状態は，特に壁面部の層序から自然埋没の様相を呈しており，廃絶後，漸時的に埋没したものと思われる。

また，埋土中に多量の小円礫と石塊を包蔵しており，埋没の途上において洪水などの強い自然の力が加えられていることも判る。

この住居跡の特筆すべき点に，壺棺墓3基（第5～7号）が極めて近接した位置に埋納されている点があるが，この性格付けについては後の記述を待ちたい。

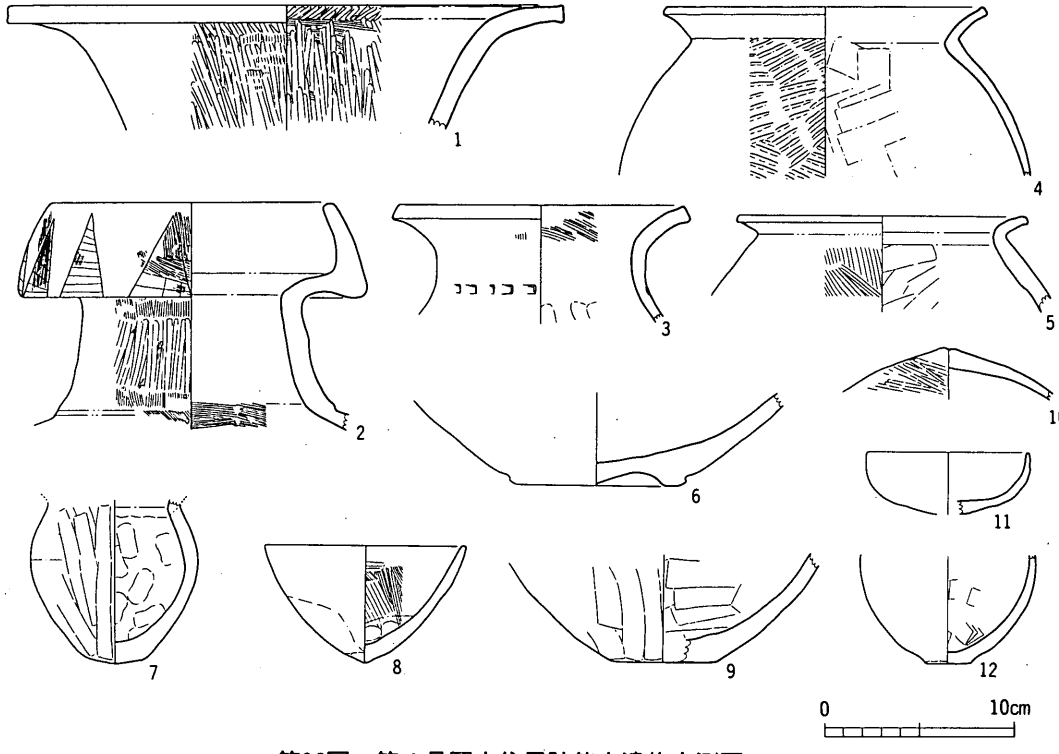
⑨ 第4号竪穴住居跡伴出遺物

既に述べた様に床面直上より出土した遺物は，第96図2の壺形土器が1点あるのみであり，他は埋土中に包蔵されていた遺物である。

(1) 弥生土器（第96図）

壺形土器

2は二重口縁と内傾する直線的な頸部が特徴であり，口縁部外面にヘラ描鋸歯文が施される。また，造作が丁寧であり，特に頸部外面が縦位のヘラ磨き調整により，入念な仕上りとなってい



第96図　第4号竪穴住居跡伴出遺物実測図

る。1もまた丁寧な仕上げがなされており，内外面に縦位のヘラ磨き調整の痕跡が認められる。口縁部が広く外反し，ラッパ状を呈する形態である。大型の壺形土器の一部であろう。7，12は小型の壺形土器の胴部片である。実用品か否か疑問点を残す。

甕形土器

4，5いずれもく字に外反する口縁部を有するが，端部の造作が若干異なる。4は内面を強く横位にナデることにより上端部が突出した形態である。

鉢形土器

8は小型品である。この器種は竪穴住居跡に限らず，集石墓あるいは包含層中から多く出土しており，当時の普遍的な器種であったことが判る。この資料の特徴は尖底を有する点である。

その他の器種

10はヘラ磨き調整により，非常に丁寧な造作をしている遺物である。器形は蓋形土器と考えられるが，遺存している部分が少く，断定する根拠はない。11は粗い造作の小型の皿形土器。

⑩　第5号竪穴住居跡（ＳＢ05）（第97図）

平面規模520×640cm，主軸方位N－32°－Wの不整形な隅丸長方形の竪穴住居跡である。基盤は砂礫層である。北東隅部分については，調査区外に存在するため調査できていない。埋土の中位から，多量の弥生土器片と円礫が出土している。弥生土器は，ほぼ完存するものから細片のものまで，種々の残存率のものが認められる。円礫については拳大から人頭大のものがみられる。これらはおそらく埋没過程において土器片と伴に人為的に投棄された遺物と考えられる。

内部施設についてはベッド状遺構が北壁を除く3壁面部に設けられている。基盤層と同一の砂礫層であることから地山整形によって造り出されたことが判る。主柱穴は床面から4個検出されている。柱穴径は36～48cm，深さ16～24cmを測る。床面中央部において小規模な土坑を1基検出している。

ベッド状遺構の南西隅部分の床面直上から，完形の甕，高杯，鉢形土器と椀形の小型品が出土している。また，これらの土器群から東方約20cmの位置において転倒した状態の鉢形土器1点が遺存している。

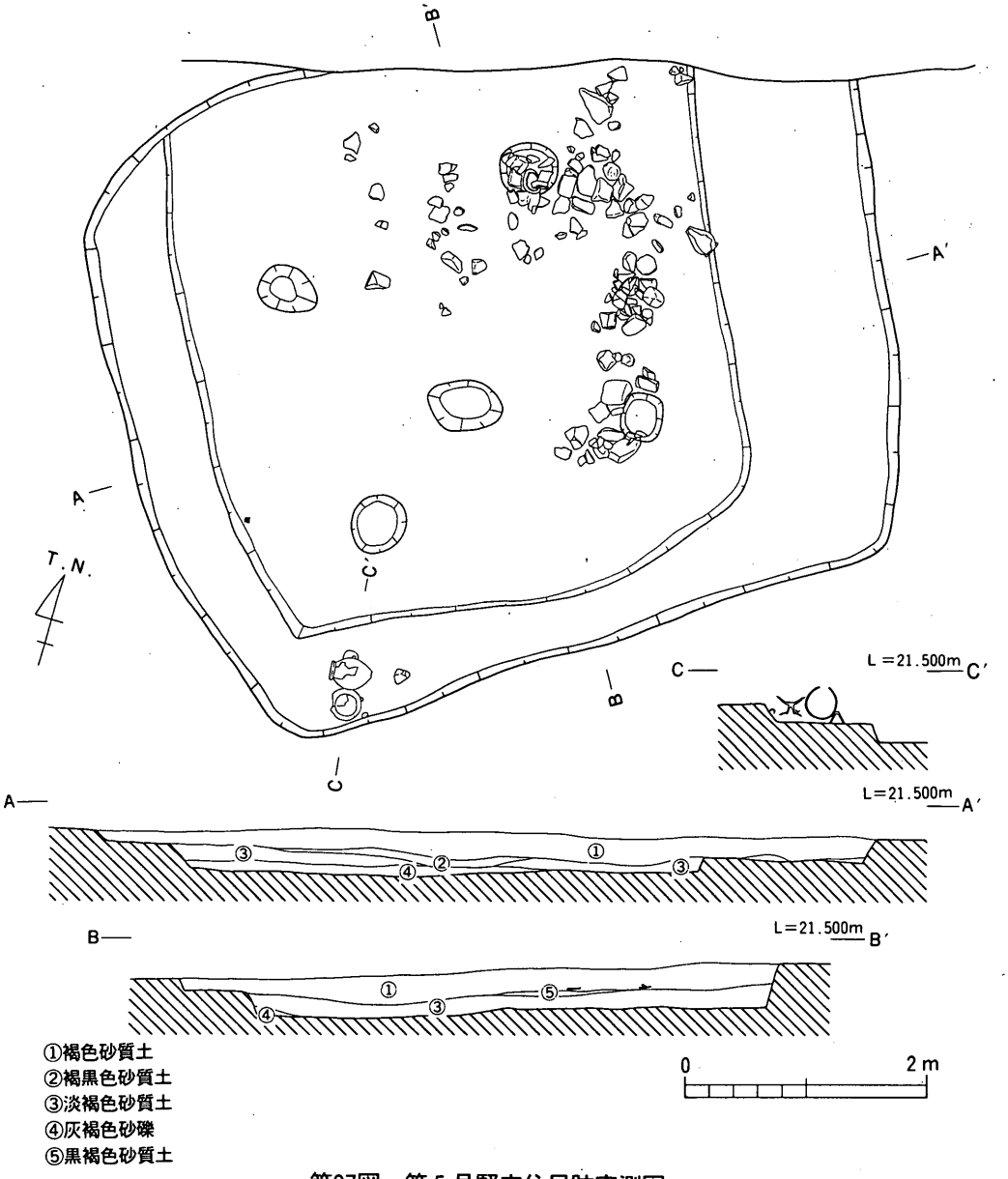
⑾　第5号竪穴住居跡伴出遺物

(1)　弥生土器（第99～101図）

南西隅のベッド状遺構面直上において出土した遺物（5，20）の遺存状態が良好であり，一括性を有すると判断される。また床面直上においても4，7などのほぼ完存状態にある遺物が入手できた。したがって上記の遺物については同時期のセット関係にあると考えることは可能であろう。

壺形土器

1は頸部が直立し，口縁部が水平気味に開口する。最大径が上胴部に位置するために肩の張る形態を呈する。2の二重口縁の口縁部片は外面に7条の沈線文と半裁竹管文が施される。3の口



第97図　第５号竪穴住居跡実測図

縁部は広く水平気味に開口し，上端部が突出する形態である。内面は櫛描波状文によって加飾される。４はラッパ状に開口する口縁部と珠算玉状を呈する胴部を有する。口縁端部はナデ調整により凹面化する。なお，胴部に焼成後に穿たれた孔が１個認められるが，穿孔土器の性格については壺棺墓の報告に委ねる。

甕形土器

５の最大径は胴部中位に位置し，球体状の形態を呈する。口縁部は二重口縁の形態であり，端

部が内傾する。内面のヘラケズリ調整によって器壁が薄く仕上げられている点と外面の丁寧な造作が特徴である。6～8は水平に屈曲する口縁部を有し，最大径が上胴部に位置する肩の張る形態である。口縁部内面のナデ調整により，上端部がやや突出する。胴部内面のヘラケズリ調整により器壁は非常に薄い造作である。9は受け口状を呈し，最大径が下胴部に位置する。

底部は18を除き，平底である。15は指ナデにより突出した形態とする。

高杯形土器

20は口縁部が短く，緩く外反する。端部は細い成形である。脚部に屈曲は認められず，脚端部に至るまで緩く湾曲する。端部は丸い成形である。

鉢形土器

23は小型品であるが，深い器形である。口縁端部を内傾し，やや突出する底部を有する。24の口縁部は，く字に外反して，端部を肥厚する。25は直線的な胴部を有するために容量が小さい。底部は脚台状を成す。内外面に指頭圧痕が顕著である。26，27は規模は異なるが，共に器高に比して口径の大きい浅い器形である。また口縁部をわずかに外反する点も共通する。28の口縁部形態は26，27に共通するが，やや胴が張る点が異なる。29は椀形の形態である。30は口縁部が内傾し，胴部は球形を呈する。内外面に夥しい数の指頭圧痕を残しており，厚い器壁を有する粗製品である。

その他の器種

31は椀形の胴部とやや内湾する長い口縁部を有する。あるいはＳＢ01出土の４，５に類する器形と考えることもできよう。

32，33は内外面に指頭圧痕を残す粗製品である。小型の器形であり，実用品か否か判断が難しく，ミニチュアの模造品とも考えられる。

単孔式の甑形土器(註4)を２点図化した。34は尖底状の形態であり，35は突出する平底の中央部を穿孔した器形である。

(2) 鉄製品（第91図３）

埋土中位よりヤリガンナ１点が出土した。先端部を若干欠損するもののほぼ完存しており，残存長9.7cm，最大幅１cmを測る。刃部は先端部ほど細い成形であり，ほとんど反らない。

（註）

1　彼ノ宗遺跡ＳＴ12・21・22，下川津遺跡ＳＨ8611に類例がみられる。笹川1985年。と大山真充他『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅷ）下川津遺跡Ⅱ』，1987年。による。

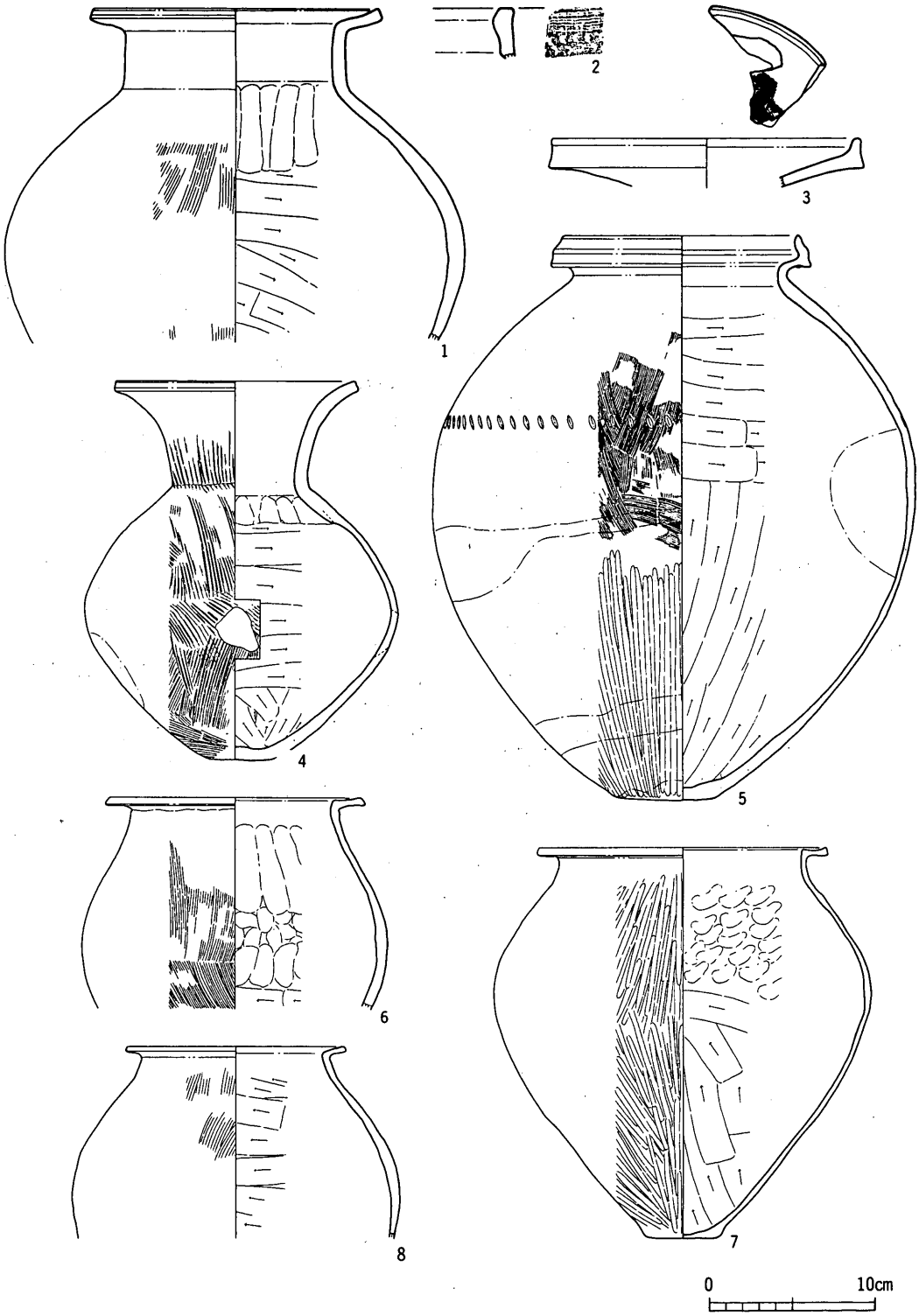
2　香川県詫間町紫雲出山遺跡に初源をみることができる。小林行雄・佐原真他『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究－』，1964年。

3　大橋信弥氏の形態分類によると当資料が該当するタイプは存在しない。しかしながらＡまたはＣタイプの亜種と考えることが可能であろう。大橋信弥「支脚形土器の系譜」『古代研究』第17号，1979年。

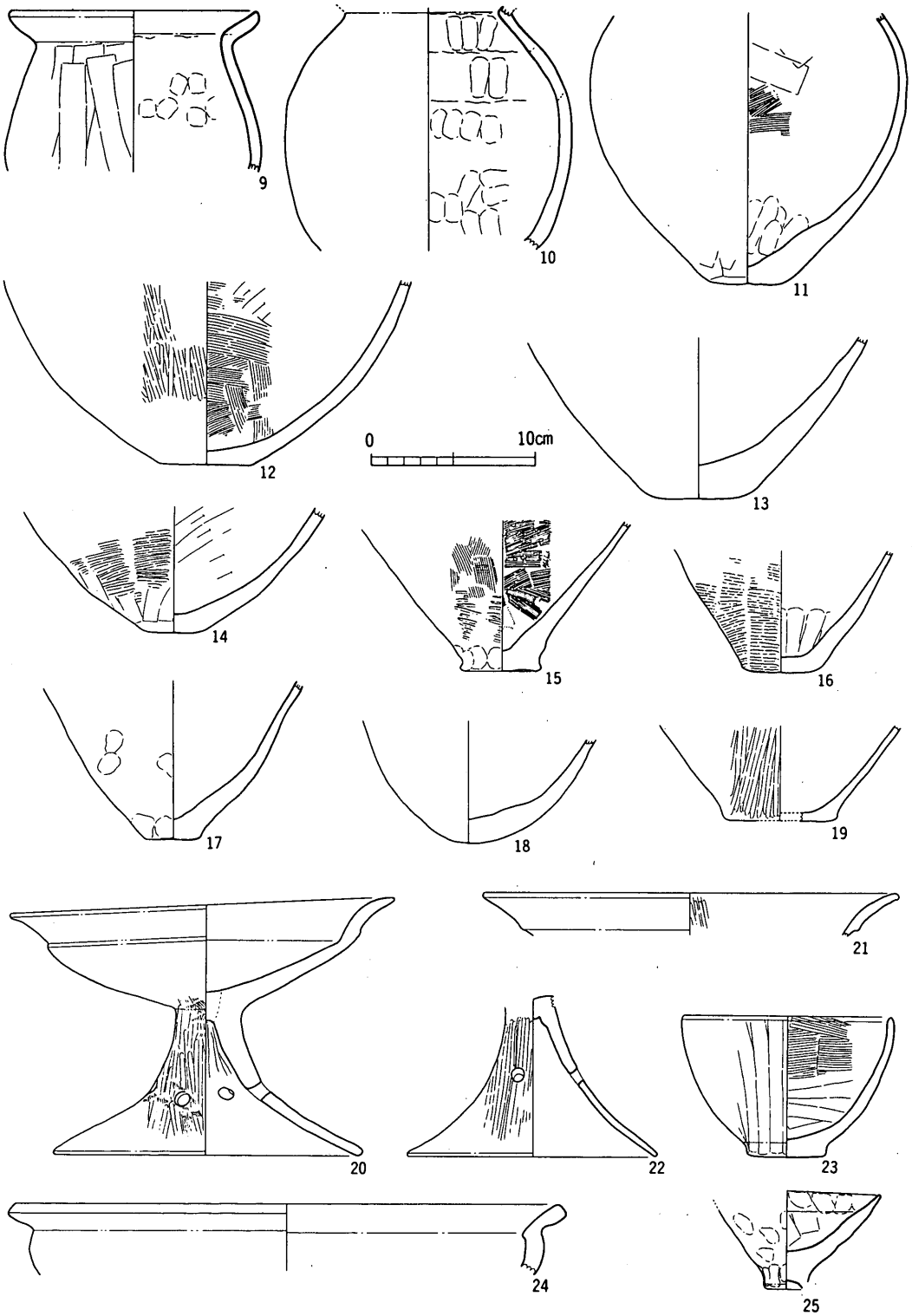
4　底面に１個または複数の穿孔を施した甕形土器と鉢形土器（特に焼成前の穿孔）については蒸し器としての使途が通説となっており，「甑」の名称を与える例が圧倒的に多い。木下正史「古代

炊飯具の系譜」『和歌森太郎先生還暦記念・古代・中世の社会と民俗文化』，1976年。はこれに賛同する見解の一例である。ところが岩崎卓也「甑小考」『信濃』第18巻第4号，1966年。に代表される様に上記の見解に異議を唱える例も少なからず目にすることができる。しかしながら筆者はこの疑問点を解く材料をもちあわせておらず，また当遺跡出土資料からも解答は得られていない。そこで本稿においては焼成前あるいは焼成後にかかわらず，底面に穿孔を有する土器を甑形土器と仮称することにしたい。これは単に通説に従ったまでのことであり，主体性のない呼称法であることを断っておく。なお孔数により単孔式（1個の穿孔）と多孔式（2個以上の穿孔）に大別する。

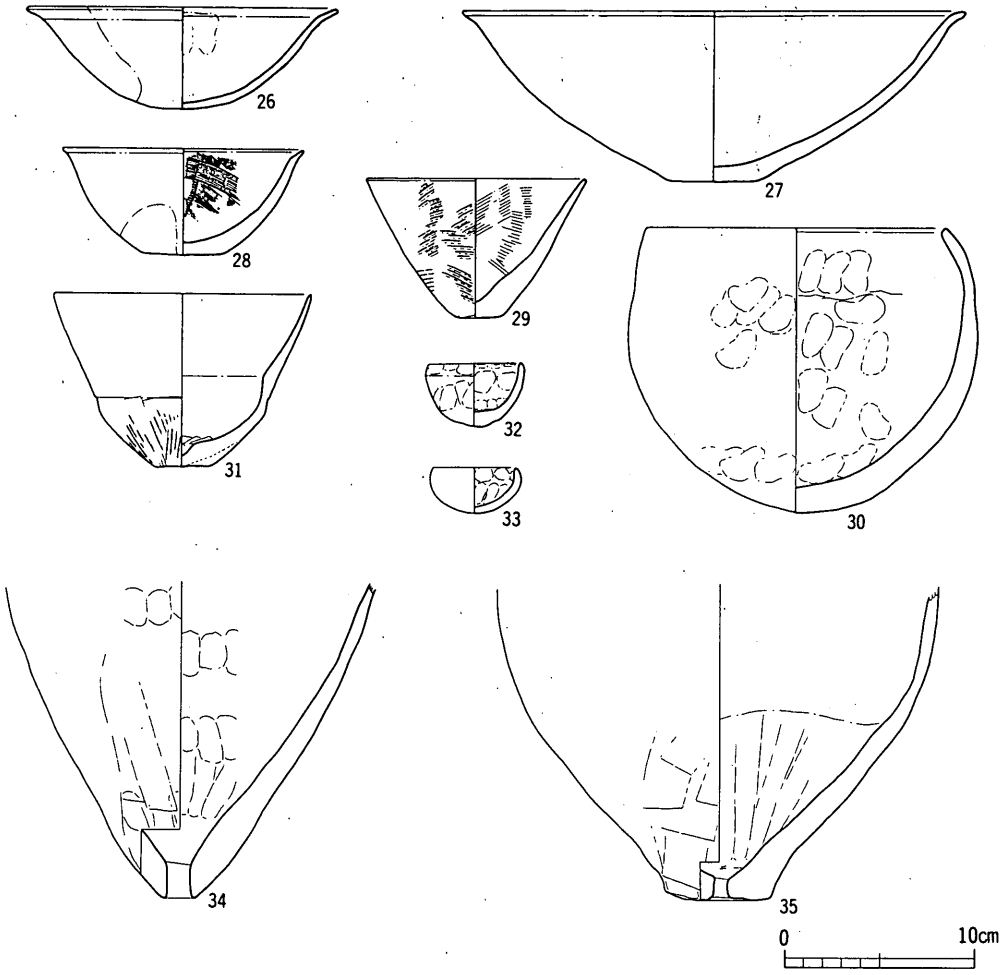
第98図　竪穴住居跡調査風景



第99図　第５号竪穴住居跡伴出遺物実測図(1)



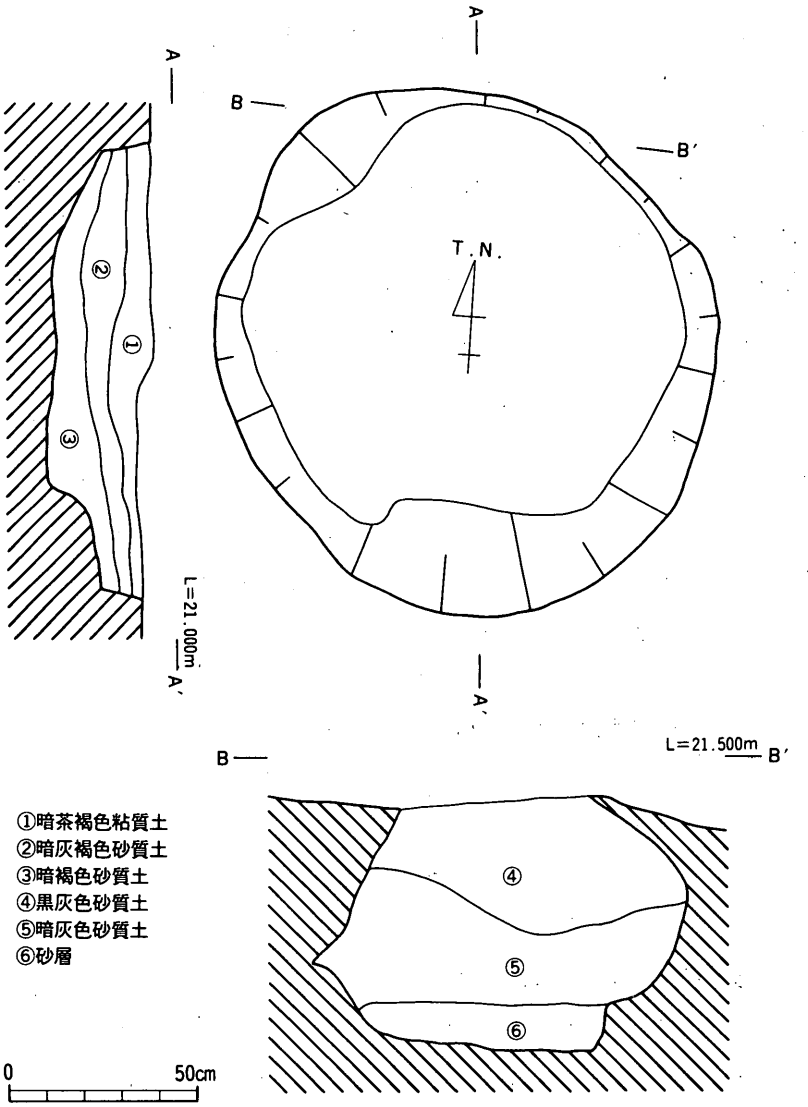
第100図　第５号堅穴住居跡伴出遺物実測図(2)



第101図　第５号竪穴住居跡伴出遺物実測図(3)

2．土　坑

①　第１号土坑（ＳＫ01）（第102図）



第102図　第１号土坑実測図

12－Ｈ区北端部において検出した不整形な円形の土坑である。

遺存する規模は直径130cm前後，深さ65cmであるが，過度の掘削により，上半部分を削取したために原形は把握し難い。しかしながら，12－Ｈ区北壁の層序から土坑の壁面の形態を復元することは可能である。これによると，縦断面がいわゆる「袋状」を呈していたことが判る。この形態

を有する土坑の検出例は当遺跡では他にない。埋土は上位より黒灰色砂質土，暗灰色砂質土，茶色砂質土の3種類に分けられる。これらの堆積の状態は，あたかも人為的に埋められたかの様相を呈しており，壁面の崩壊，転落の痕跡はない。

遺物は，弥生土器片が少量であり，図化の可能な遺物は遺存しない。

遺構の性格を明らかにする遺物は得られなかったが，あるいは九州地方を中心として，弥生時代前期中半以降に発達する「袋状貯蔵穴」に類似する形態上の特徴を有しているとも考えられよう。ただし，周辺に住居跡などの居住遺構を検出しなかったことは，この推察の弱点である。

② 第2号土坑（ＳＫ02）（第103図）

12－Ｉ区に所在する。ＳＴ05の北方約2ｍに位置し，第4号住居跡との距離は約4ｍを測る。調査時において検出作業が難行したため遺構の上半部を削取している。この結果，確認できた遺構の規模は，長径97cm，短径67cm，深さ17cmである。

平面形態は楕円形を呈し，壁面の傾斜は急である。また，床面は西部から東部へ緩く傾斜する。

この土坑の特徴は埋土に多量の円礫を包蔵する点である。また，3個体分の甕形土器が出土しており，1点は完存している。礫と完形の土器は共に床面から遊離しているが，偶然，埋没したとは考え難く，両者は有機的な関連を有していたことは疑いない。

なお，埋土及び，甕形土器内部からは他に遺物は出土していない。

この土坑の性格については不明である。

③ 第2号土坑伴出遺物（第105図1～3）

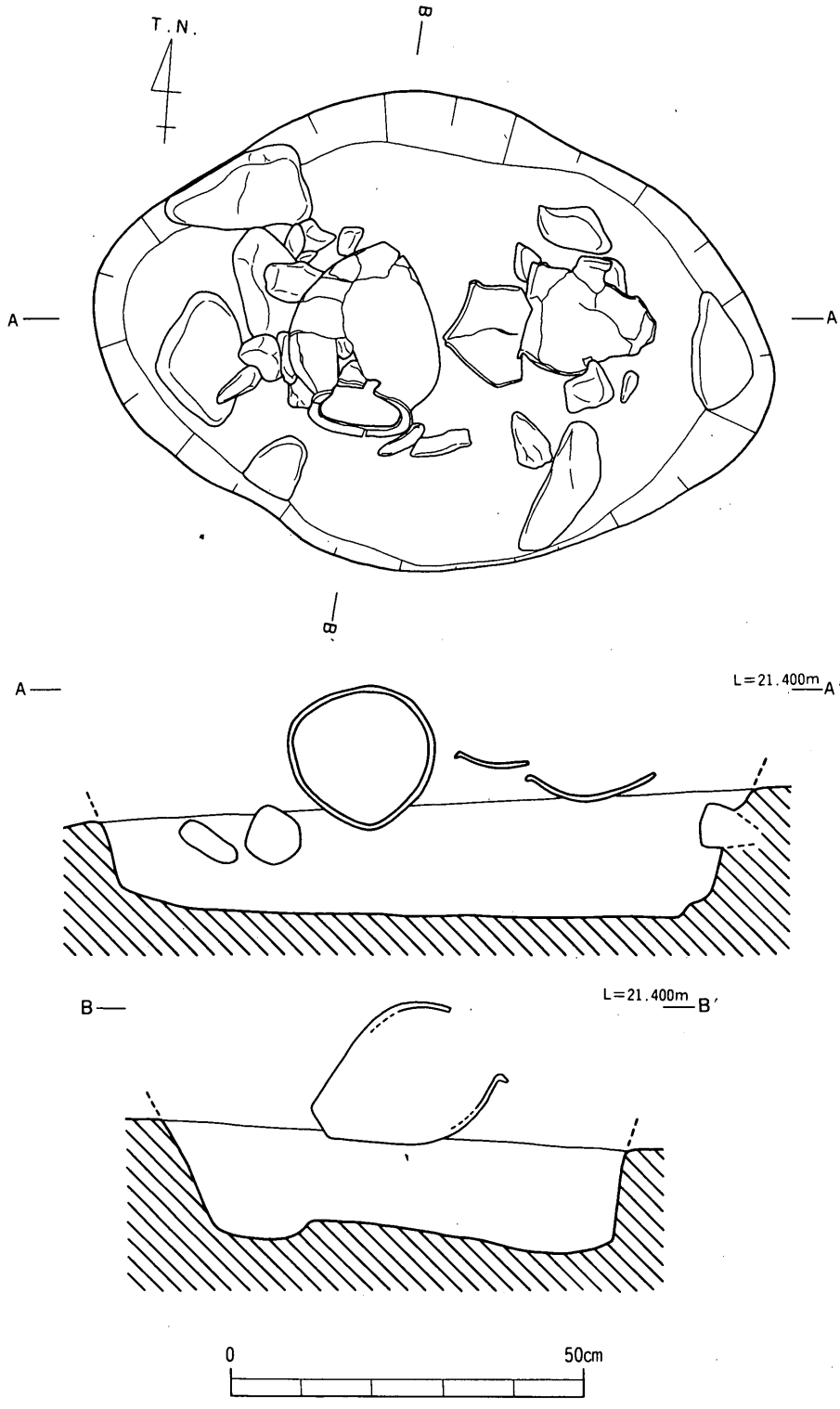
出土遺物は総て弥生土器である。1は口径と胴部の最大径が近似した値を示し，長胴の形態である。口縁部は水平気味に開口した後に，上端部を突出することによって受け口状を呈する。2の口縁端部の造作は1と共通するが，頸部が鋭く屈曲し，さらに肩が張る形態である。3は緩く湾曲して外反する口縁部を有し，端部を肥厚する。

④ 第3号土坑（ＳＫ03）（第104図）

15－Ｉ区東部において検出した不整形な土坑である。特に北部の壁面の屈曲が激しい。遺存する土坑の規模は長軸長192cm，深さ9cmであるが，壁面がかなり緩く傾斜するために，床面は長径96cm，短径37cm，と小規模である。また床面中央部に長径10cm，深さ6cmのピットを1個検出した。このピットの役割については上部構造に伴う遺構の痕跡，土器などを固定あるいは埋設する施設などが考えられるが，実証する資料は得られていない。

埋土に包蔵されていた遺物は総て弥生土器の破片であるが，摩耗は進んでいない。また，出土位置が床面直上であり，しかも土坑の最深部に集中することから，当遺構が機能していた時期に極めて近接する時期の遺物と言えよう。他には小礫が床面直上から出土しているのみである。

この土坑の性格についてもここで明らかにすることはできないが，出土遺物からは埋置された状況は認められない。したがって埋葬施設などの遺構は考えられない。むしろ生活空間の中で普

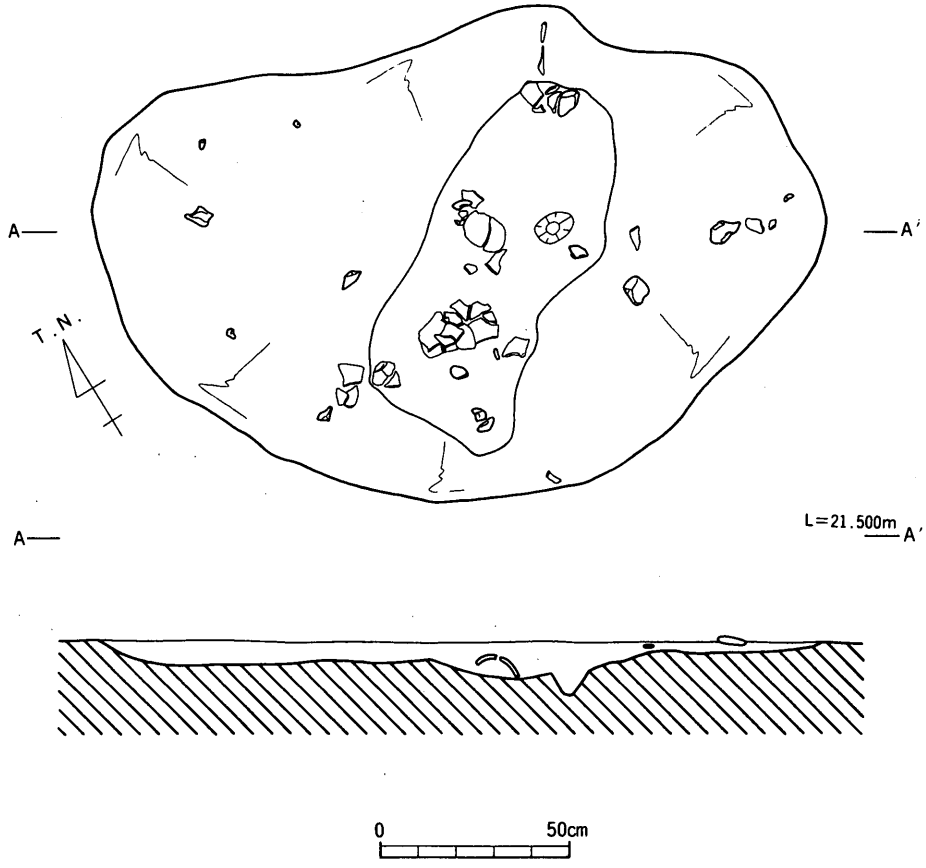


第103図　第２号土坑実測図

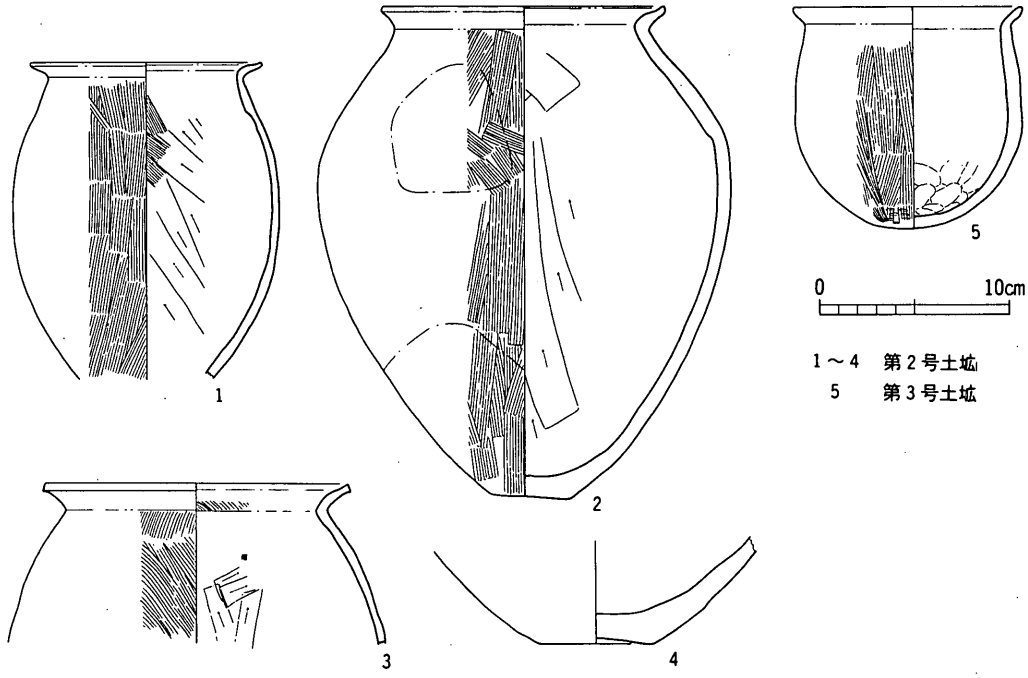
断に利用されていた遺構と考えるべきであろう。

⑤　第３号土坑伴出遺物（第105図５）

遺物は少量である。鉢形土器１点を図化した。く字に外反した短い口縁部を有する小型の器形である。最大径が口径に近似した値を示すことから胴部は球体状を呈する。底部は丸底の形態である。



第104図　第３号土坑実測図



第105図　第2・3号土坑伴出遺物実測図

3．集石墓

① 分布状態

総数９基が検出されている。第８号集石墓を除き，他は遺跡の南半部に集中する。これらに規則性をみつけることは難しいが，近接する遺構間に集合性を与えるならば，次の３グループを考えることは可能であろう。すなわち遺跡西部に位置する第３，４号集石墓，中央部の第１，２，５，６，７，９号集石墓，遺跡の北東端部の第８号集石墓の各グループである。各々を順にA，B，Cグループと呼称する。

第23表　集石墓一覧表

名称	略号	位置	墳丘		主体部			特記事項
			形態	規模 L×W×H	形態	規模 L×W×D	中心軸方位	
第１号集石墓	ST11	11 － I	長楕円形	350×250×35	1.隅丸方形 2.不整形	151×142×17 85× 81×13	N-45°-W	
第２号集石墓	ST12	11 － H	長楕円形	600×400×45				墳頂部に標石を有する。 墳丘南端部において土坑を検出。
第３号集石墓	ST13	12,13-H	円　形	300×300×30	隅丸長方形	207×107×17	N-47°30′-W	標石を有する。
第４号集石墓	ST14	12 － H	方　形	500×500×20				北辺部において廃棄土器群を検出。 南辺部に鉢形土器５個体が供献される。
第５号集石墓	ST15	12 － I	長楕円形	170×120×20				基盤層直上において焼土面を検出。
第６号集石墓	ST16	11 － H	円　形	300×300×20	長楕円形	212×128×16	N-87°30′-W	墳丘中央部に土器群を有する。
第７号集石墓	ST17	11 － H	不整形	400×350×？				遺存状態が悪い。
第８号集石墓	ST18	10 － G	長楕円形	1750×750×47	1.隅丸長方形 2.隅丸長方形	450×166×42 193× 78×10	N-24°-E N-55°-E	２基の墳丘から成る可能性を有する。
第９号集石墓	ST19	10,11-I	方　形	450×？×？				墳丘中央部と縁辺部に土器群を有する。

L：長径　W：短径　H：高さ　D：深さ　　単位cm

② 第1号集石墓（ＳＴ11）（付図6）

1．立　地

遺跡南部の11－Ⅰ区において検出した。Ｂグループにおいて南部に位置し，ＳＢ04との距離は約7ｍを測る。

遺構は，Ⅲ層掘削中にその墳頂部が露出したため，覆土を除去した結果，Ⅵ層を基盤として構築されていることが判明した。

2．形態と規模

円礫と弥生土器片が東西約10m，南西約6ｍの広範囲に散在し，封土は著しく破壊されているために旧状を留めない。遺存する封土の規模は最大径約500cm，最高部約35cmであり，形態は不整形な長楕円形を呈する。したがって，周囲に拡散した石材と遺物は，封土の崩壊により，原位置を失ったと考えられる。

3．構　造

(1) 上部構造

封土の厚さは，最大約35cmを測り，内部に円礫と弥生土器片を包蔵する。これらは，墳丘の構築時に人為的に混入されているが，遺存状態が悪く，完存する遺物はない。

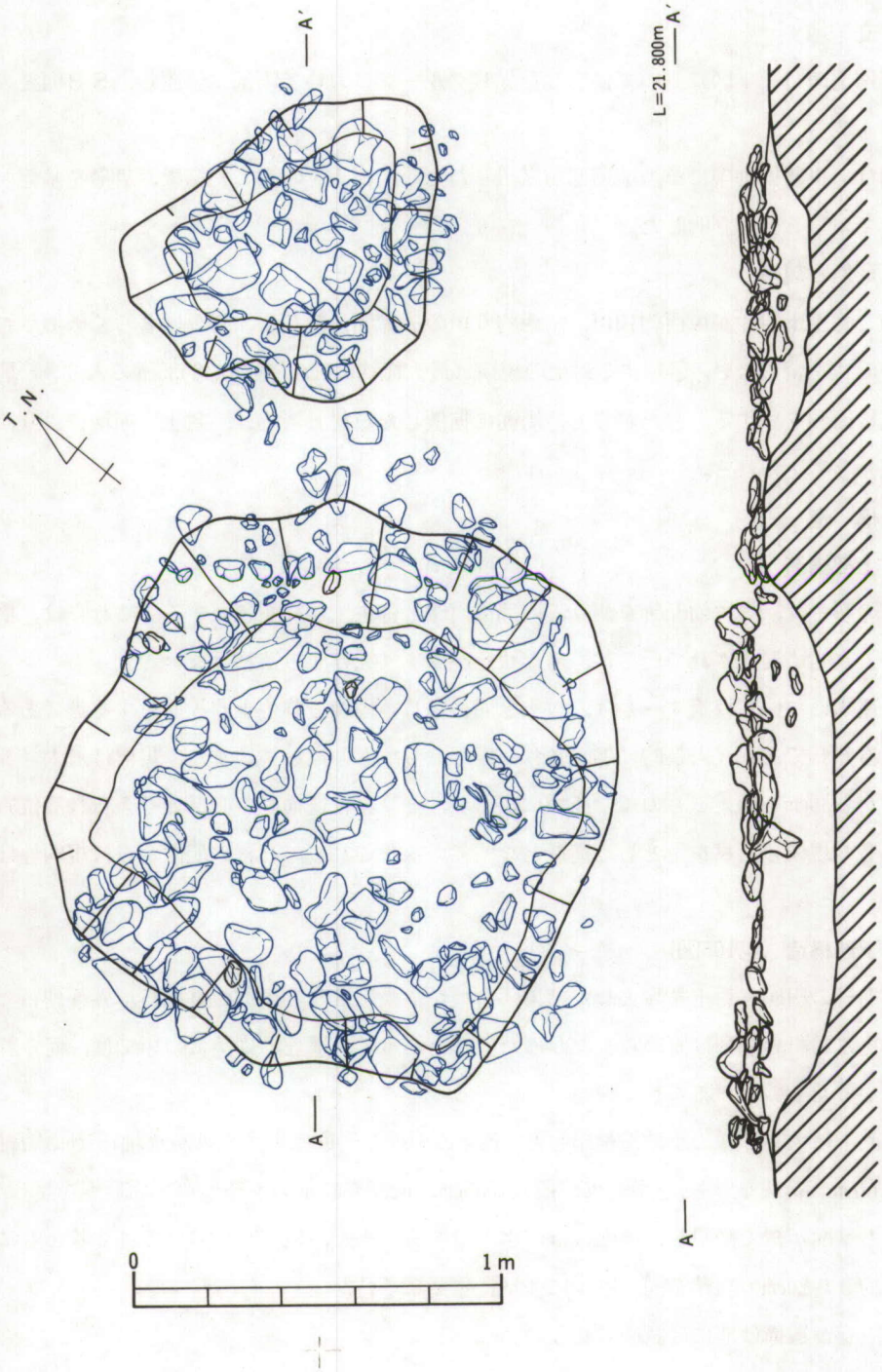
この遺構について特筆すべきは，封土上面に夥しい円礫と弥生土器片を有する点である。石材は総て自然石であり，人為的に加工された痕跡をもつものはない。また，規模は最大径5cm以下のものから30cmを超えるものまで多種に及ぶが，とりわけ遺構の中心部と考えられる位置について，後者の規模の石材を主とした構造となっている。これらの石材の配置からは規則性は認められない。

(2) 下部構造（第106図）

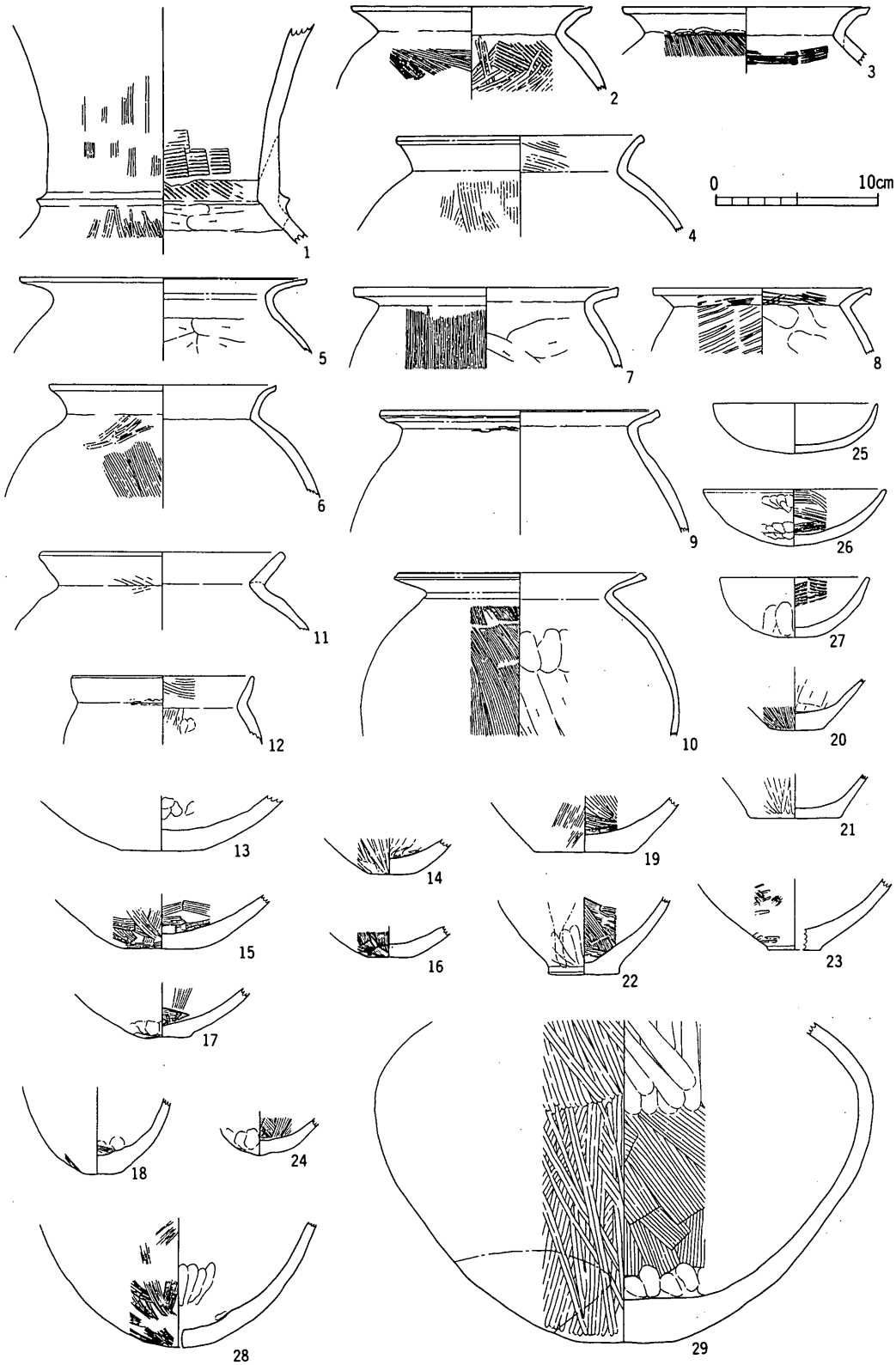
墳丘内外の円礫と封土を除去した結果，古墳から検出される墳裾の基底石，外護列石などの性格を有する石材の配列は認められなかった。したがって，墳丘の構築については，何ら計画性をもたなかったものと考えられる。

封土直下に大小2基の土坑を検出した。各々の規模と形態は大型土坑が長軸151cm，短軸142cm，最深部17cmの隅丸方形を，小型土坑が最大幅85cm，最深部13cmの不整形な平面形態を呈している。いずれも壁面が緩く傾斜し，床面はほぼ水平である。また，検出時においては2基ともに埋土の上位に約5～20cmの円礫を同レベルに多量に包蔵していた。

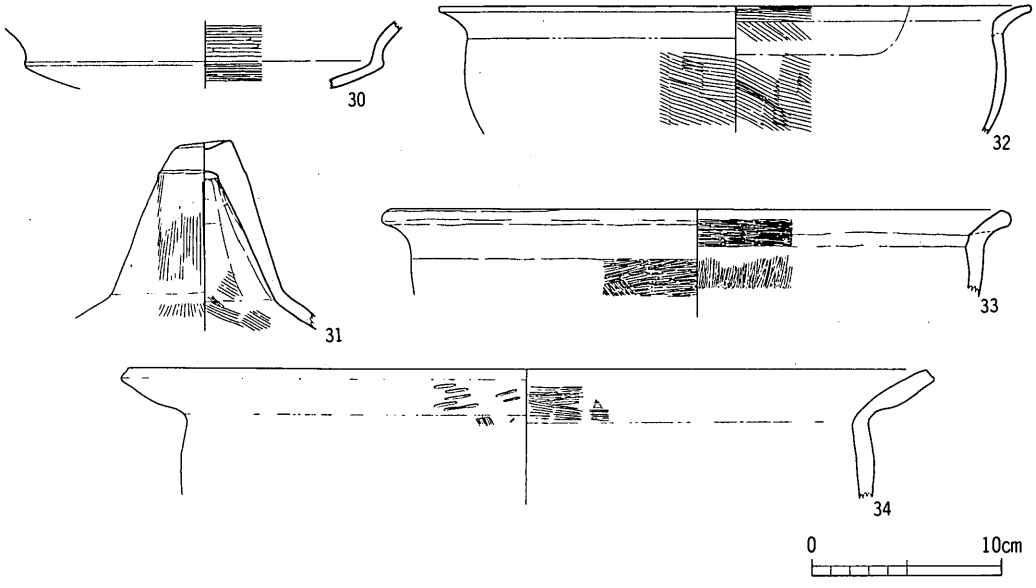
基盤を穿つ遺構は他には認められない。



第106図　第１号集石墓主体部実測図



第107図　第１号集石墓伴出遺物実測図(1)



第108図　第１号集石墓伴出遺物実測図(2)

４．伴出遺物概要

封土上面から多並の弥生土器片が出土しており，封土内部に包蔵されていた数並を凌ぐ。特に墳丘の南部上面において，転倒した状態で出土した鉢形土器は遺存状態が良い。あるいは，原位置を保っていることも考えられる。土器内部から炭化した桃核が１個体分出土している。

主体部と考えられる大型土坑からは小型のヤリガンナ１点，炭化木材片，炭化した桃核が３個体分以上が出土している。

５．伴出遺物

(1)　弥生土器（第107，108図）

壺形土器

図化の可能な遺物は１点である。ラッパ状に外反する口縁部を有する。大型品であったものと考えられる。

甕形土器

総てく字の形態の口縁部を有する。2～8は口縁部が湾曲して外反し，端部に横位のナデ調整を施すことによって，小さい面を造出する。9は受け口状の口縁部である。特に外面のナデ調整が丁寧であり，稜線を形成する点が特徴である。10は最大径が胴部上位に位置するために肩が張る形態である。口縁端部を肥厚して，端面を凹面化する。胴部内面にヘラケズリ調整が施されており，器壁が薄く仕上げられている点が特徴である。11，12の口縁部は直線的に外反する。12は屈曲点の角度が鈍い。また共に胴が張らない形態である。

壺形土器あるいは甕形土器の底部と考えられる遺物は以下の3形態に大別することができる。13～18は変化点の不明瞭な平底であり，丸底風の平底と呼べよう。19～21は平底，22～23はやや突出する平底である。

高杯形土器

杯部1点，脚部1点を図化した。30は屈曲部が突出する形態であり，内面に丁寧なヘラミガキ調整が施されている。31はく字に屈曲する脚部を有する。いわゆる挿入法により杯部と接合されていたことが判る資料である。

鉢形土器

総て外反する口縁部を有する。32，34はやや胴が張り，29の形態と酷似する33は口縁部内面と胴部外面のヘラミガキ調整が特徴である。

その他の器種

24は粗製の遺物であるが，原形は判然としない。外面に多くの指頭圧痕が認められる。

28は丸底の形態の底部であり，焼成前に孔が穿たれている。甑形土器と呼称できる資料である。

29は墳丘上面に倒立して埋置されていた大型の鉢形土器である。全体に丁寧な調整が施されているが，とりわけ外面におけるヘラミガキ調整の痕跡が顕著である。最大径が胴部上位にあることから肩が張る形態であり，底部は丸底風の平底を呈する。

(2) 鉄製品（第118図1）

大型土坑よりヤリガンナの先端部が1点出土している。刃部が茎部に比して幅広になる形態であり，わずかな反りを有する。刃部の最大幅は1cmである。

③ 第2号集石墓（ＳＴ12）（付図7）

1．立　地

11－Ｈ区において，Ⅲ層掘削時に確認され，Ⅳ，Ⅴ層を除去した後に墳裾を検出した。Ｂグループの最北部に位置するが，Ａ，Ｃグループのほぼ中間部を占地している。周囲に共伴する居住遺構は検出されなかった。

2．形態と規模

ＳＴ11同様，石材の転落は著しく，東部分に破壊のために原形を留めていない部分が認められる。そこで，遺存する封土の状態から旧状を復元するならば，長径約600cm，短径約400cmの不整

形な長楕円形の墳丘が想定される。なお，封土の高さは約45cmである。

また，墳丘の南端部に接する位置の基盤直上において，遺存状態の良好な弥生土器と円礫の集中部分を検出した。この部分については，遺物が原位置にある可能性が強い出土状況を示すことから，当遺構の構築時に墳丘外への拡張部分として設けられた施設と理解できる。

3．構　造

(1)　上部構造

封土上面は最大径５～30cmの円礫によって被覆されており，石材の間隔に多量の弥生土器を包蔵する。封土内部にも石材と土器片の混入が認められるが，上面に露出する遺物量に比すると少量である。

封土の内外に埋設されている石材は総て自然石であり，人為的に加工された痕跡は全く認められない。また，これらの配置の状態からは規則性を見出すことは困難である。しかしながら西半部に大型の石材が集中しており，この部分を墳丘の中心部とする意識が表われているものと考えられる。

ところで，復元される墳丘のほぼ中央部に最大径30cmの大型の石材が認められる。墳丘の最高部に相当することから，あるいは標石として用いられたことも考えられる。

(2)　下部構造（第109図）

封土除去後に検出された遺構は，南端部に東西方向に穿たれた土坑が１基である。その規模は長軸約460cm，短軸約120cm，最深部約17cmを測り，平面形態は東端部が不整形な長楕円形を呈する。壁面は垂直に近く穿たれており，床面はほぼ水平である。内部から出土した遺物は少く，石塊数個が埋没していたのみである。

この土坑の性格について，主体部と考えるには封土との位置関係から，かなり無理があろう。他の同遺構に類例をみない点から，現在は性格不明の遺構と報告せざるを得ない。

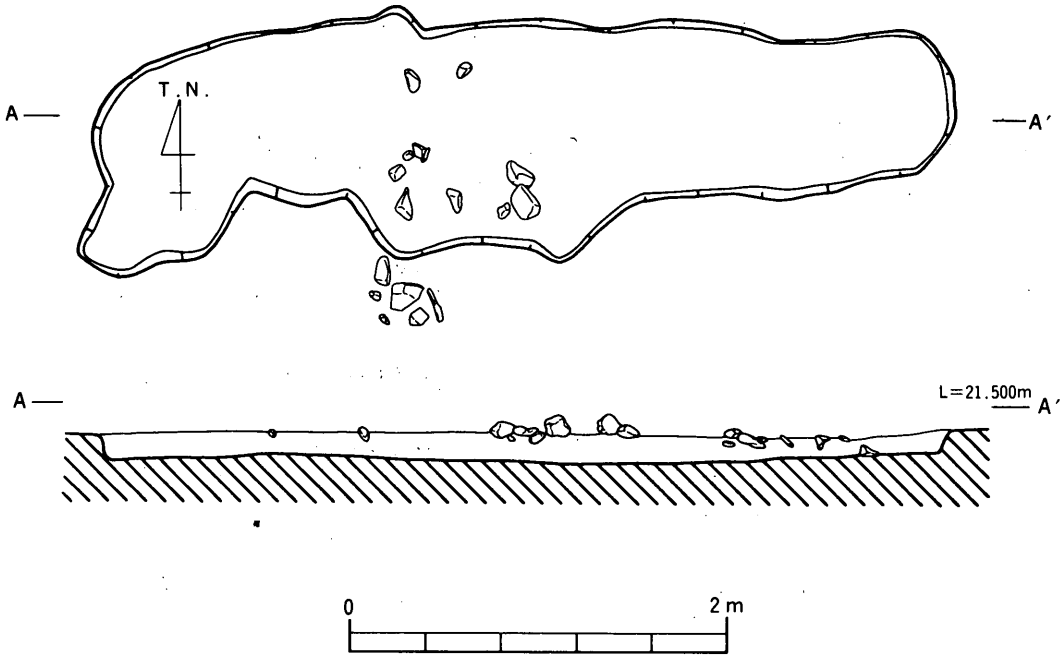
封土は下位ほど石材と遺物の混入が少く，基盤層上面においてはほとんどこれらを認めていない。

基底石などの施設は全く有しないことが判った。

4．伴出遺物概要

墳丘上面において検出された遺物量は多いが，完存する遺物，または復元の可能な遺物は少量である。この点については埋設時期に既に遺物が破損していたこと，あるいは，埋設後に散逸したことが要因としてあげられるが，遺物に摩耗の痕跡が少い点から前者の可能性が強いのではなかろうか。とりわけ墳頂部と南端部の拡張部分における遺物の遺存状態が良好である。この事実もまた，遺構の中心位置の推定の手がかりとすることができる。

弥生土器以外の遺物としては，製塩土器の脚台部２点と前述の土坑からいわゆる鉄製打ちグワ１点が出土している。



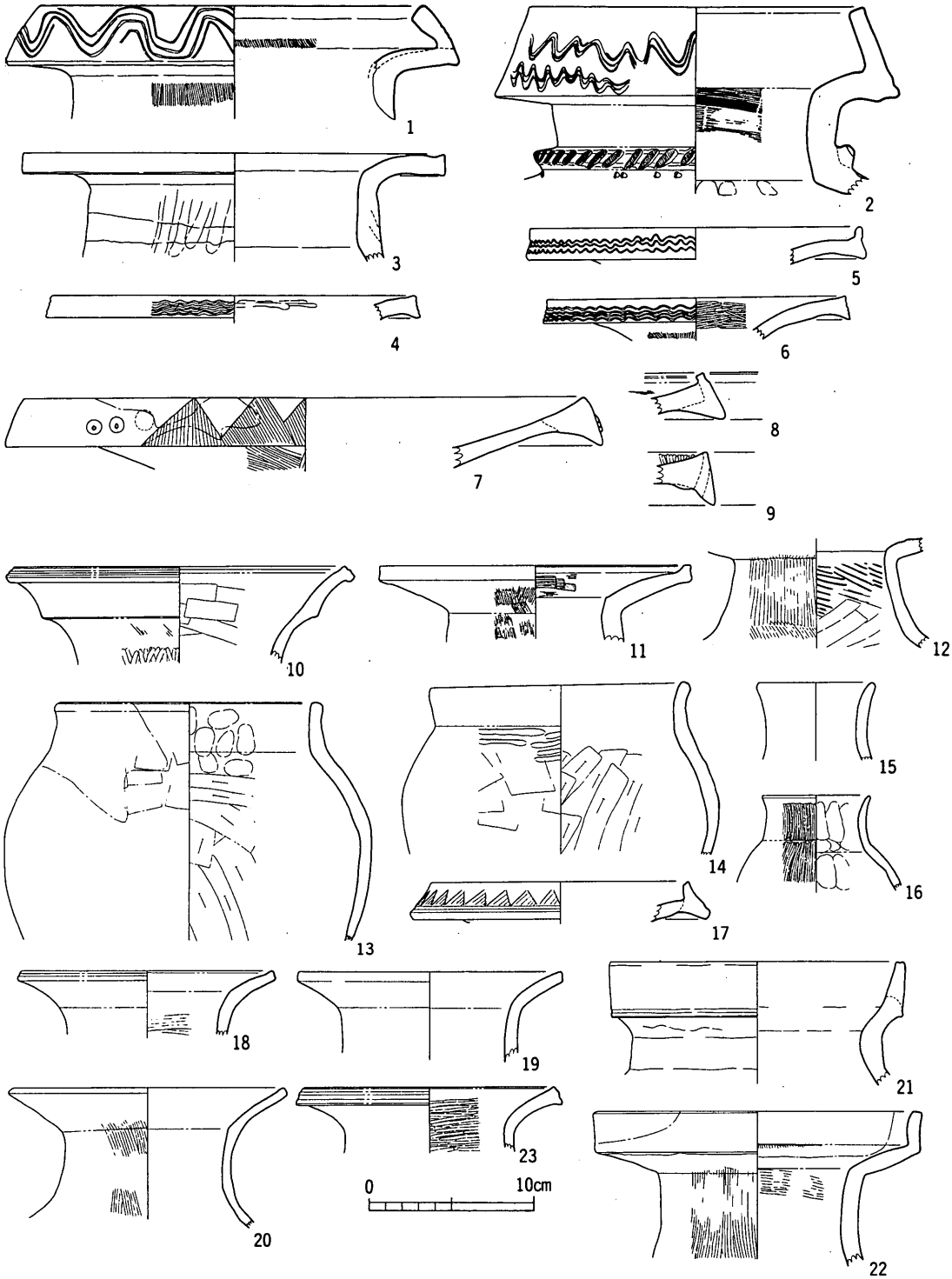
第109図　第２号集石墓土坑実測図

５．伴出遺物

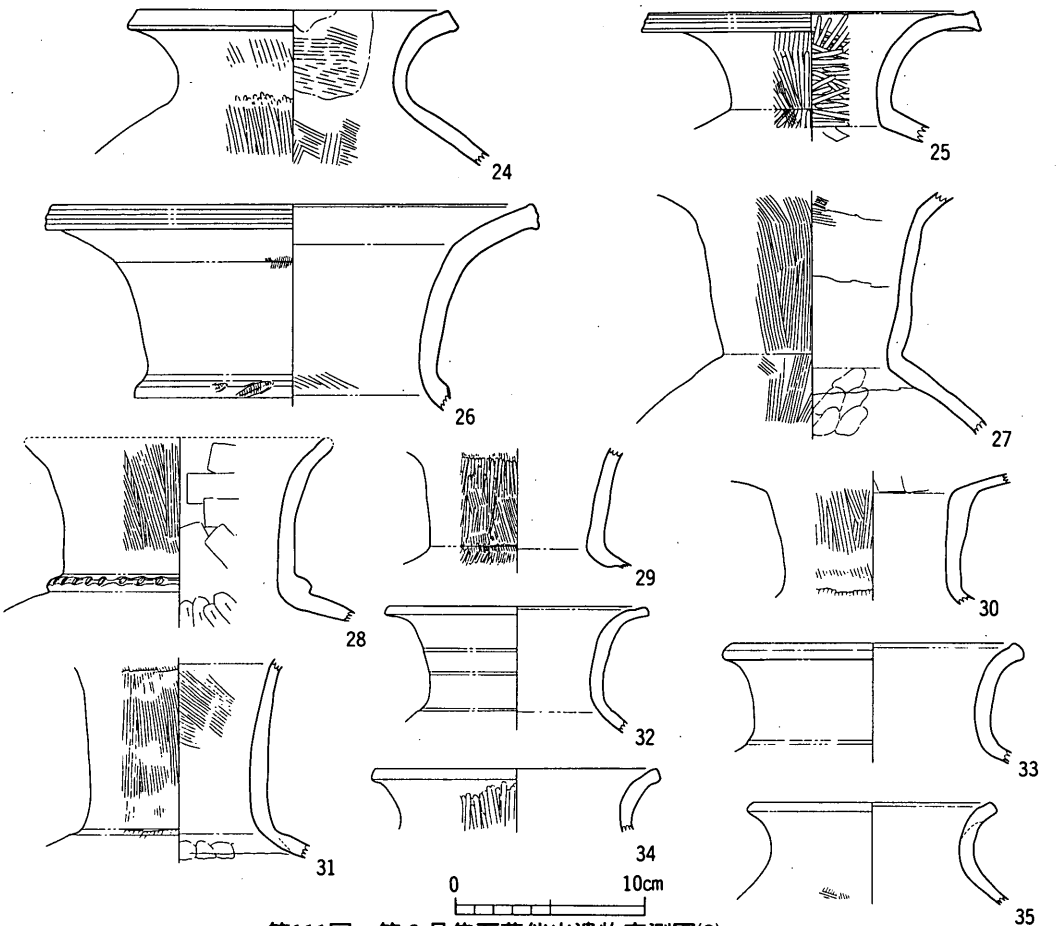
(1)　弥生土器（第110～117図）

壺形土器

１，２は二重口縁の形態を有する大型品である。口縁部は内傾して立上がり，端面を形成する。また外面に櫛描波状文を施し，頸部に突帯文を貼付するなど装飾性に富む資料である。３は直立する頸部と水平に広がる口縁部を有する。４～６の口縁部はラッパ状に広く開口した後，端部を肥厚して櫛描波状文を施す。内面のヘラミガキ調整による丁寧な仕上げが特徴である。１，２同様，「飾る」土器と考えられる。７～９は口縁端部に粘土紐を貼付して大きく肥厚し，さらに下端部を垂下する。端面は円形浮文，ヘラ描鋸歯文を施すことにより加飾される。10の口縁部は受け口状の二重口縁の形態である。端部を肥厚して端面に２条の凹線文を施す。11，12は内傾する頸部とく字に広く開口する口縁部を有する。14，15は短く直立する口縁部を有する点が特徴である。胴部内面にヘラケズリ調整を施すものの，器壁は厚い造作となっている。15，16の口縁部は緩く外反するが，ほぼ直立する形態である。肩の張りは弱い。いわゆる長頸壺形土器の頸部が短小化した形態と考えられる。17は４～６に類する器形であり，飾ることを意図して作製されたことが

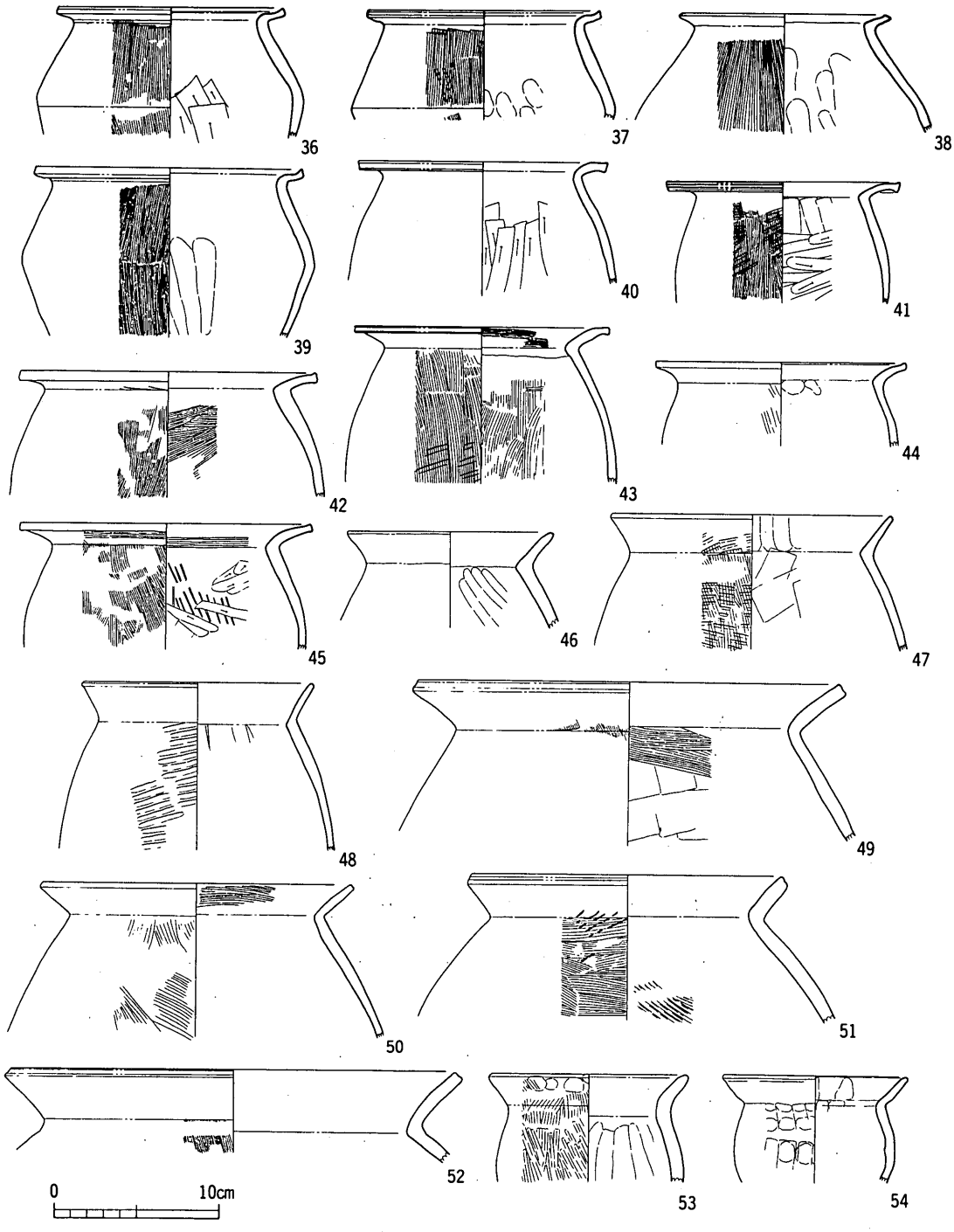


第110図　第２号集石墓伴出遺物実測図(1)



第111図　第２号集石墓伴出遺物実測図(2)

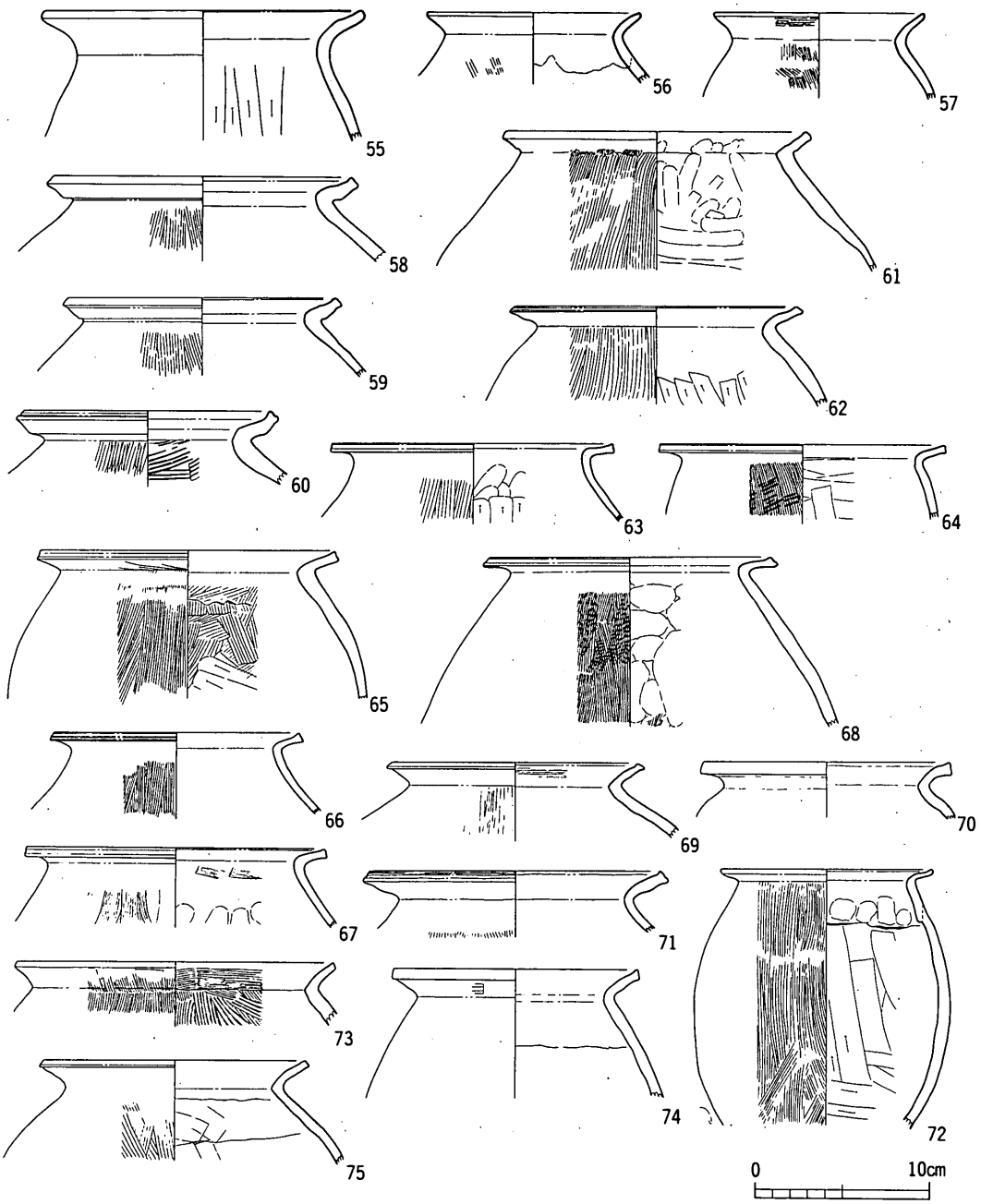
考えられる。上記の遺物に比して口縁下端部をより大きく垂下する。18～20は湾曲の弱い外反する口縁部が特徴である。21の口縁部は直立して立上がる。屈曲部は外部へ突出した形態である。22は直立する頸部と直立して立上がる口縁部を有する二重口縁の器形である。23は口縁端部を上下に肥厚して，端面に２条の凹線文を施す。内面にヘラミガキ調整の痕跡が顕著である。24，25は口縁部の湾曲が大きい器形である。共に端部を肥厚して面を形成するが，25については端面に凹線２条を施す。丁寧な造作の資料と言える。26～31は外反する長い頸部を有し，口縁部がく字に広く開口する。頸部の屈曲が急であることから胴部は肩の張る形態が復元できる。32～35は口縁部の屈曲が弱く，頸部から端部にかけて緩く湾曲する形態である。端部内面のナデ調整により，やや受け口状を呈する。



第112図　第２号集石墓伴出遺物実測図(3)

甕形土器

36～39の口縁部は端部内面の強いナデ調整により受け口状の形態となる。胴部は中位に最大径があり，く字の鋭角的な断面形態である。40～45の口縁部は湾曲して水平気味に開口し，端部が上下に肥厚する。端面はナデ調整により凹面化するもの以外に，凹線文を施すもの（41）がある。46～52は直線的な口縁部がく字に外反する。端部は丸く成形するものと凹面化するものに大別で



第113図　第２号集石墓伴出遺物実測図(4)

きる。大型品が多い点が特徴である。53，54は口径が胴部の最大径を凌ぐ形態の小型品である。55～57の口縁部は屈曲部の湾曲が緩く，端部を丸く成形する。58～62は口縁部外面に屈曲部を有し，内面をナデ調整によって凹面化する。このために受け口状の形態となる。端部は方形に成形する。63～68はほぼ水平に開口する口縁部を有する。端部を肥厚し，端面を凹面化することによって三角形の断面形態となる。肩部の形態から球形の胴部形態を成すもの（64，65，68）とく字の断面形態を成すもの（63，66，67）に2分できる。72は受け口状の短い口縁部を有する長胴の形態である。

底部は平底（76～87），突出する平底（88～95），変化点が不明瞭な丸底風の平底（96～102），脚台を有する資料（105～110）の4形態に大別できる。105は突出する平底から派生する形態と考えられる。109は外面に多くの指頭圧痕を残す粗製品であり，他に出土例をみない。あるいは大型の製塩土器の脚台部であろうか。

高杯形土器

112，113は口縁部内面に横位のナデ調整による複数の緩い稜線が認められる。杯部は外部へ突出する屈曲部を有する。115は112，113と同一の系譜が考えられるが，口縁部内面の調整が簡素であり，稜線は1条確認されるのみである。116～119は口縁端部を丸く成形する。口縁部が長大化するために深い杯部を有する。120の口縁部は端面を凹面化するために端部はやや肥厚する。他の部位の形態は116～119に類似する。

脚部は屈曲部を有する形態が主であり，これらは総て端部を丸く成形する（121～125）。126，127は装飾性に富む器形である。129については脚端部を上下に肥厚する。

126は精緻な胎土を用いて作製された特殊な器形であり，丁寧な仕上げが施されている。杯部の刺突文にみる様に装飾性の強い遺物である。

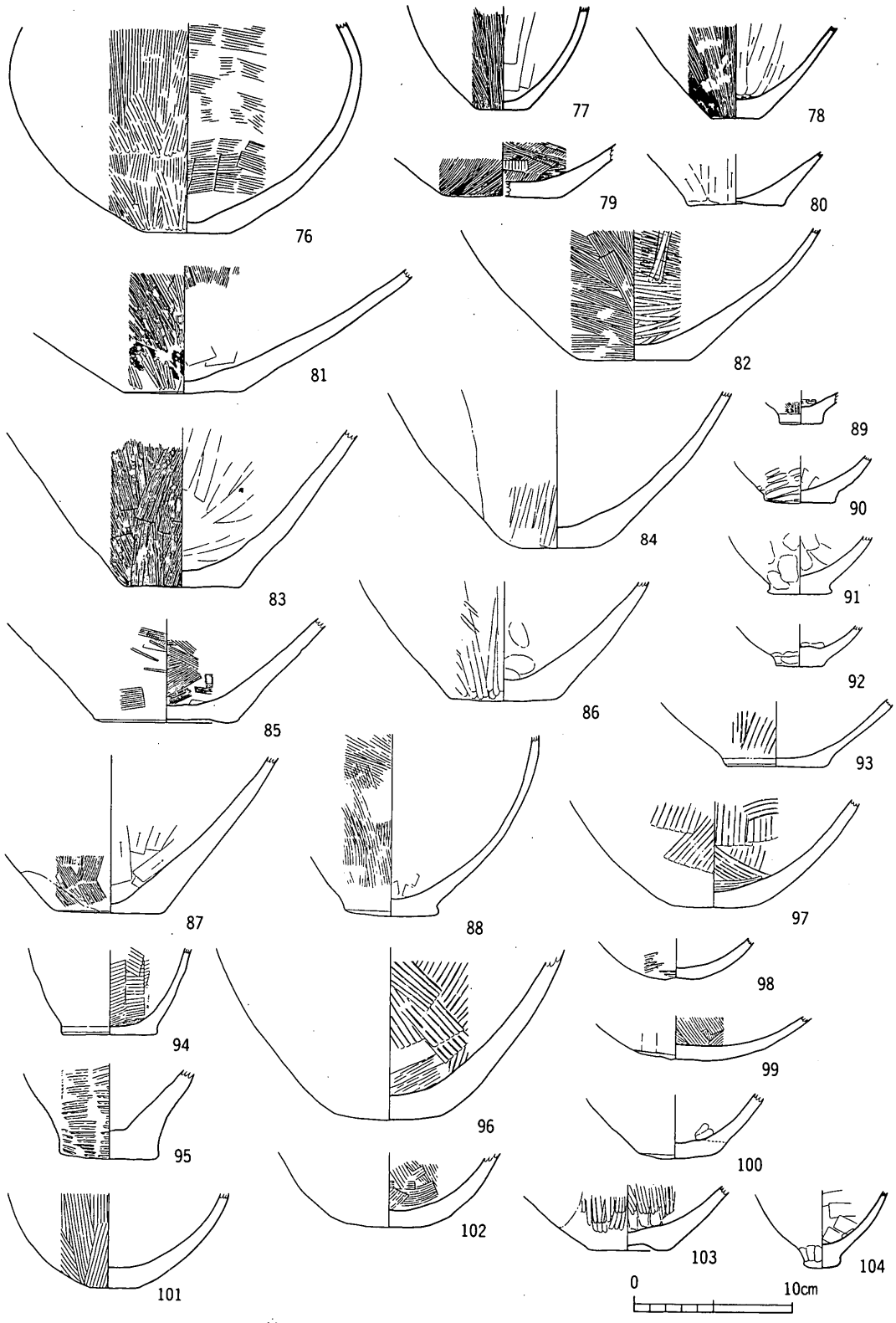
鉢形土器

130～136は大型の深い器形であり，特に胴が張るために容量が大きい。130，131は口縁部が緩く湾曲して外反する。端部は上下に若干肥厚し，端面を凹面化する。134～136の口縁部は総てく字に外反するが，端部は凹面化するものと丸く形成するものに分類できる。やや胴が張る形態を呈する。132，133は胴部最大径が口径を凌ぐ形態である。137～139は胴の張らない深い器形である。140～145は口縁部と底部の形態は種々が存在するが，口径が器高の約2倍の数値を示す浅い器形である点が共通する。146，147は小型の椀形の器形である。148は器高が低く，皿形の形態を呈する。

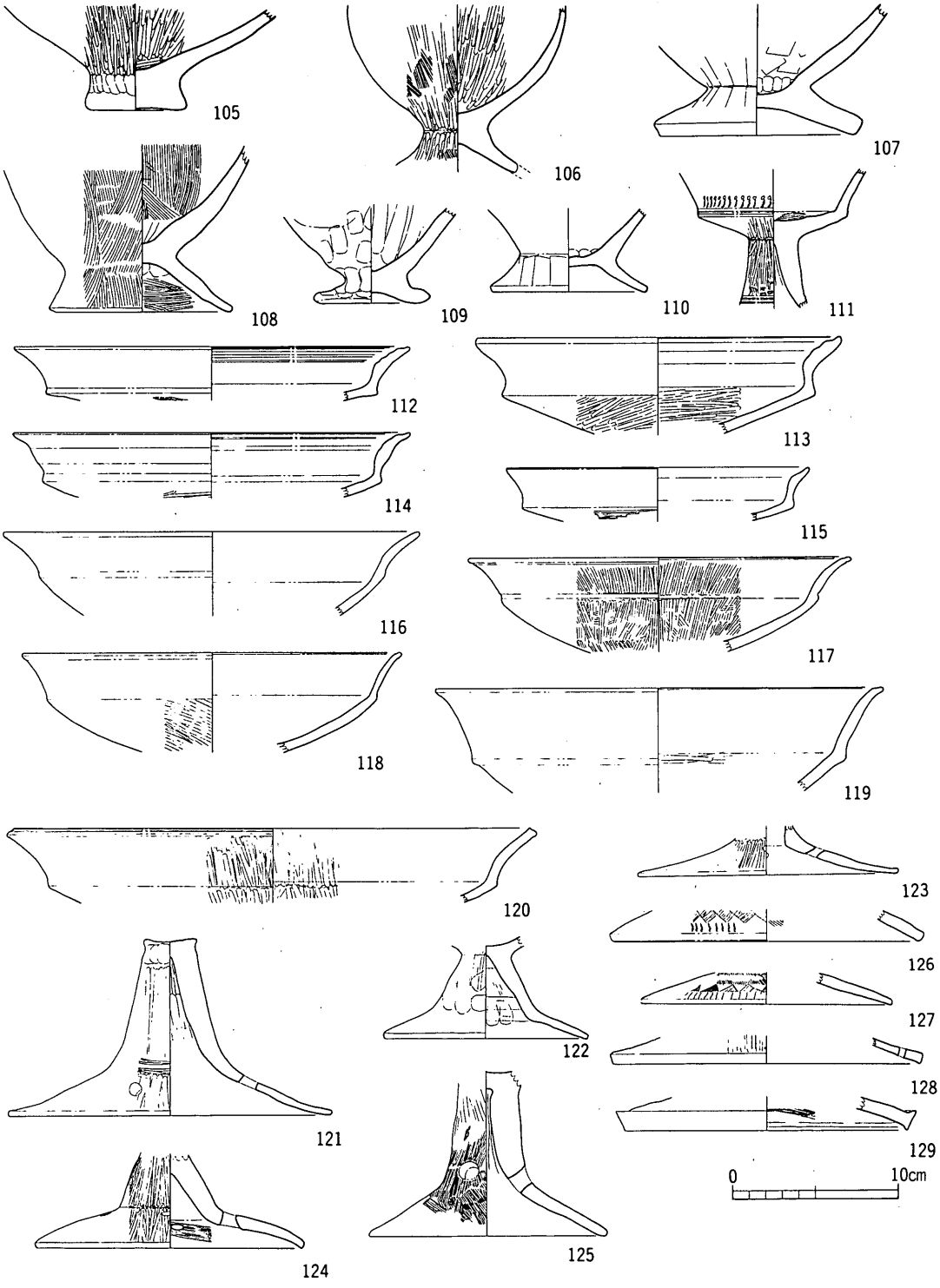
その他の器種

甑形土器は5点を図化した。底部の形態は149，150，153は尖底，151は丸底，152は平底である。また，孔はいずれも焼成前に穿たれたものであり，152が多孔式である以外は単孔式である。

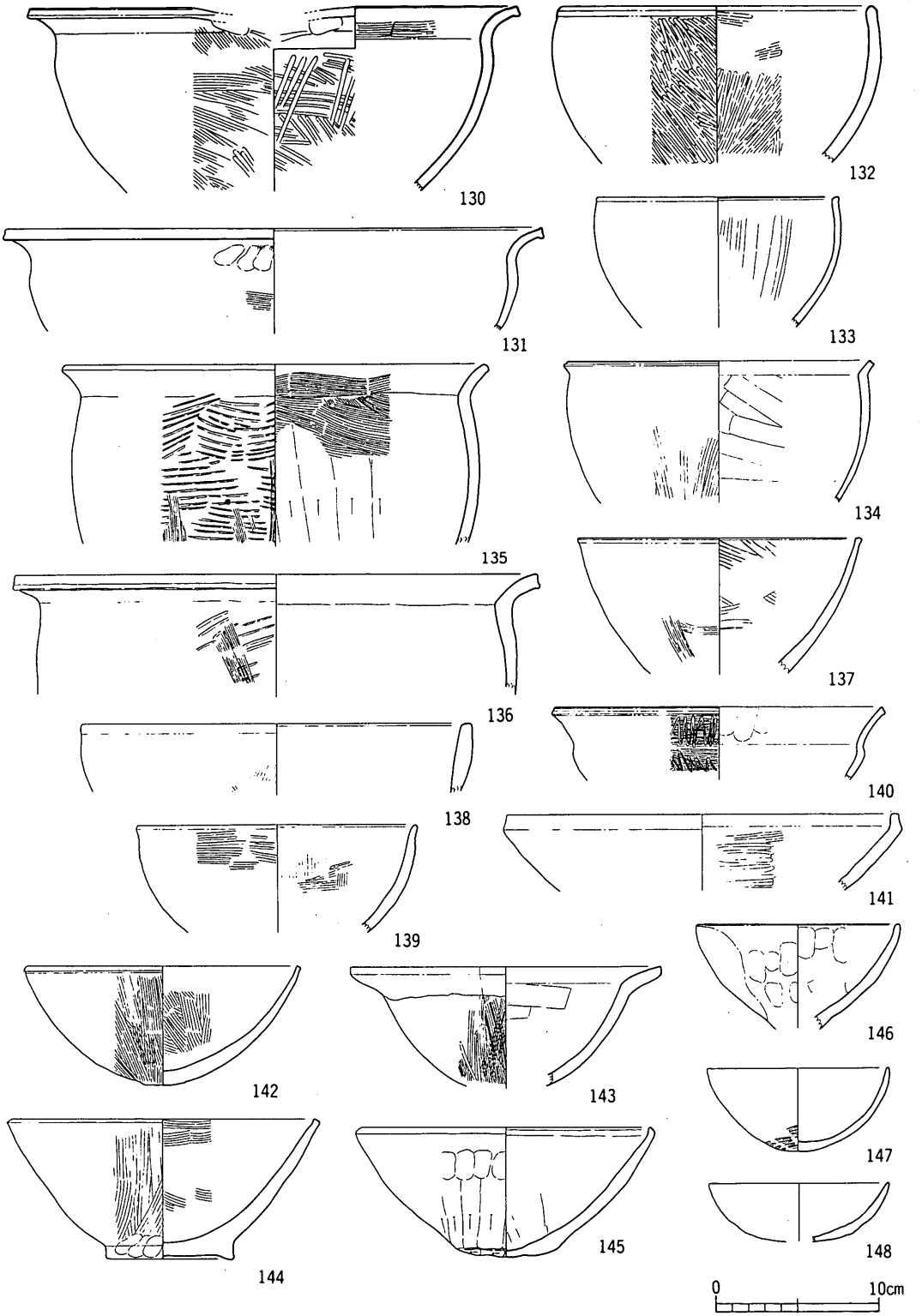
154は鉢状の器形が考えられる。口縁部が内傾し，端部が最も肥厚する。外面にタタキ目が顕著



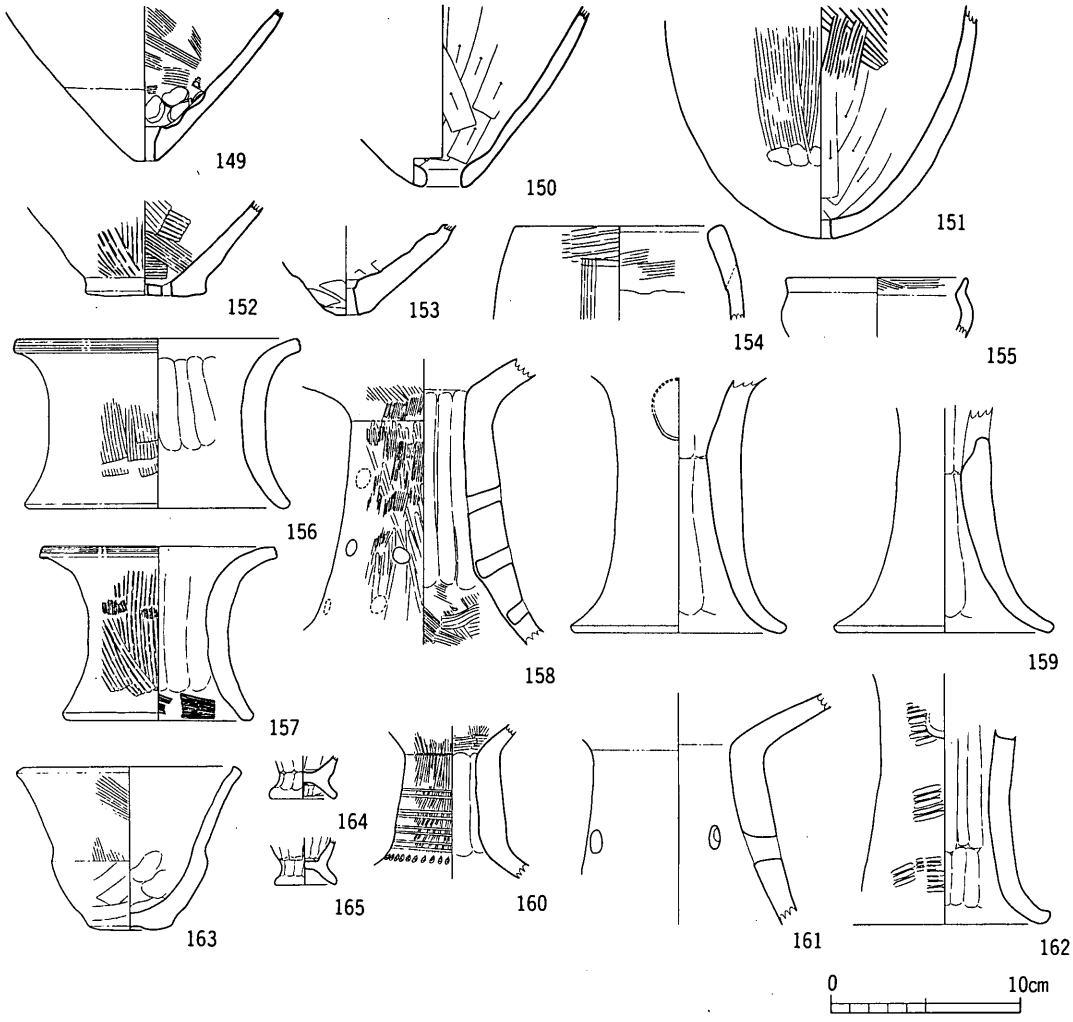
第114図　第２号集石墓伴出遺物実測図(5)



第115図　第２号集石墓伴出遺物実測図(6)



第116図　第２号集石墓伴出遺物実測図(7)



第117図　第２号集石墓伴出遺物実測図(8)

である。

155も小型の特殊な形態の遺物である。浅い鉢状の器形が考えられようか。

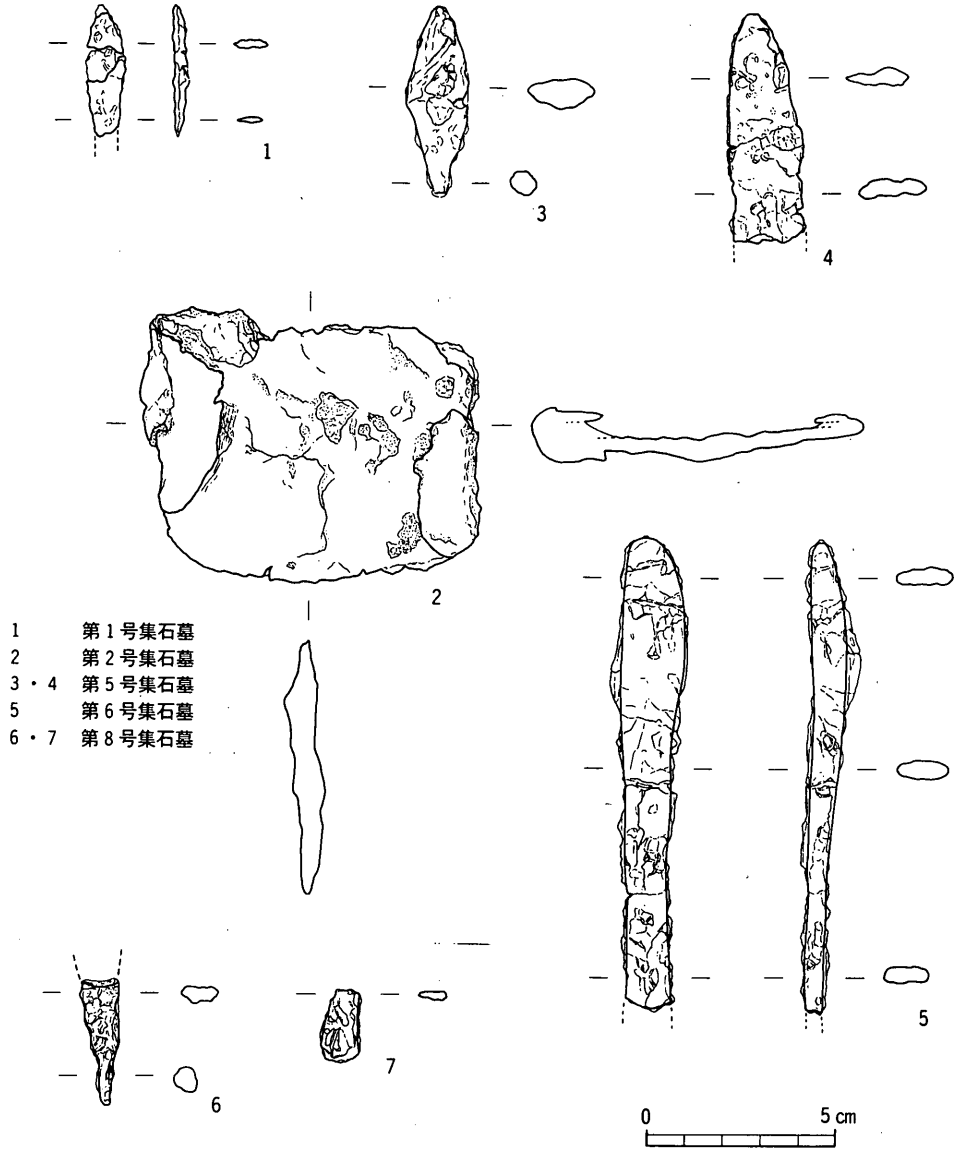
器台形土器は３形態が出土している。156，157は器高が低く，上端部から脚端部にかけて緩く湾曲する形態である。上端部はナデ調整により面を形成した後，凹線文を施す。158，160，161の上部はく字に広く外反し，また脚部の湾曲も大きい。さらに円形の透孔が多く穿たれる特徴を有する。159，162の横断面は隅丸長方形の形態である。上部に大型の透孔１個が穿たれる。

163の口縁部は外反して広く開口する形態であり，胴部は椀形を呈する。ＳＢ05出土資料（第101図31）と同器種である。

164，165はいわゆる製塩土器の脚台部と考えられる粗製品であり，内外面に指頭圧痕を多く残している。真鍋氏の形態分類(註１)によるとＩ－５類に類する資料である。

(2)　鉄製品（第118図２）

封土下の土坑より鉄製鍬先が出土している。これは都出比呂志氏により「打ちグワ」と呼称されている[註2]農耕具である。厚さ5㎜前後の長方形の鉄板の両側縁部を約1.5cm内側に折り曲げた形態であり，ほぼ完存している。長径8.8cm，短径7cmを測る。



第118図　第1・2・5・6・8号集石墓伴出鉄製品実測図

④　第３号集石墓（ＳＴ13）（付図８）

１．立　地

12－Ｈ区と13－Ｈ区との区画境において検出した。同遺構中，最も西部に位置する。Ａグループに属し，ＳＴ13とは約７ｍの距離にある。遺構は礫混りの砂層上面に構築されている。

未調査地に接して立地するため，西部に近接する遺構についてのデータは入手し得なかった。

２．形態と規模

東西約500cm，南北約600cmの範囲に円礫と弥生土器の破片が散在する。

墳丘は径約300cm，高さ約30cmの封土をもつ不整形な円形プランである。この部分は特に石材と土器片が集中している。使用されている石材の規模は，最大径５～20cmのものが中心であり，特に墳頂部と考えられる位置に径30cmの最大規模の円礫があり，前述のＳＴ12同様，標石としての役割を有していたことも考えられる。

３．構　造

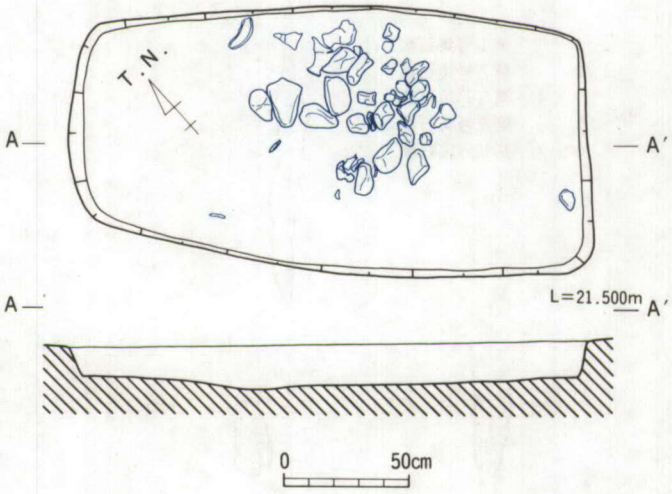
(1)　上部構造

前２者と異なり，封土の上位，下位共に多量の円礫と土器片を包蔵するが，遺物の遺存状態は上位ほど良好である。石材と遺物の配置には規則性をもたない。

(2)　下部構造（第119図）

基盤直上においては，基底石などの施設をもたないことから，墳裾を明確にすることはできない。また，墳丘の構築技術を知る手がかりも少い。

封土直上に，ほぼ隅丸長方形の土坑１基を検出している。埋土は黒色土塊の混在する白色砂質土である。規模は，長軸長207cm，最大幅107cm，最深部17cmを測り，中心軸の方向は真北から西に47°５′振る。埋土から多量の弥生土器の破片が出土しているが，床面直上において検出された遺物はない。また，土坑を性格付ける遺物は出土していない。



第119図　第３号集石墓主体部実測図

4．伴出遺物概要

多量の弥生土器が検出されているが，完存する遺物はない。したがって，これらの遺物についても構築時において既に破片として混入されたものと思われる。

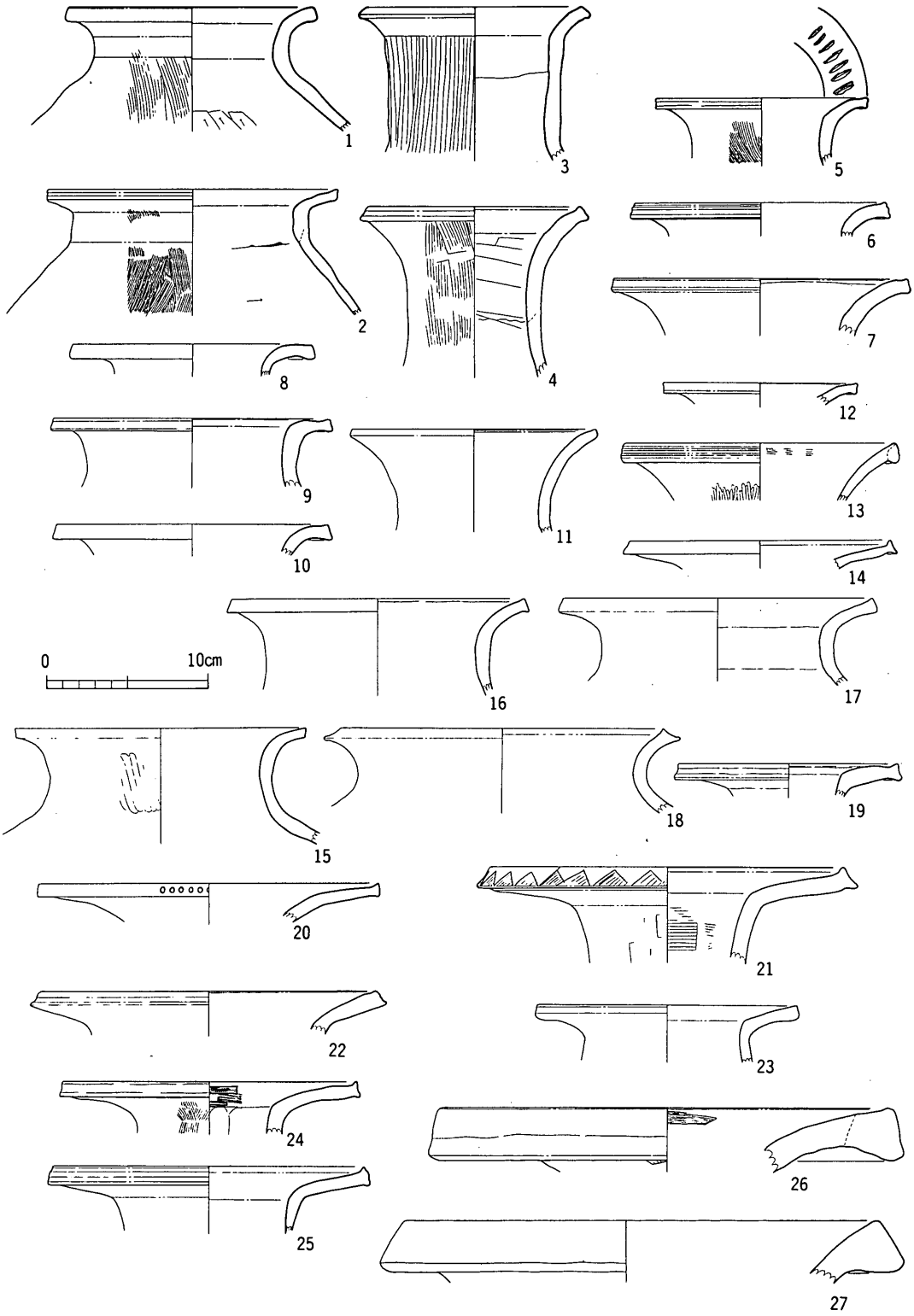
他の同遺構から出土しない遺物としては，小型器台１点とヘラ描の線刻文様を施した壺形土器の胴部片１点がある。

5．伴出遺物

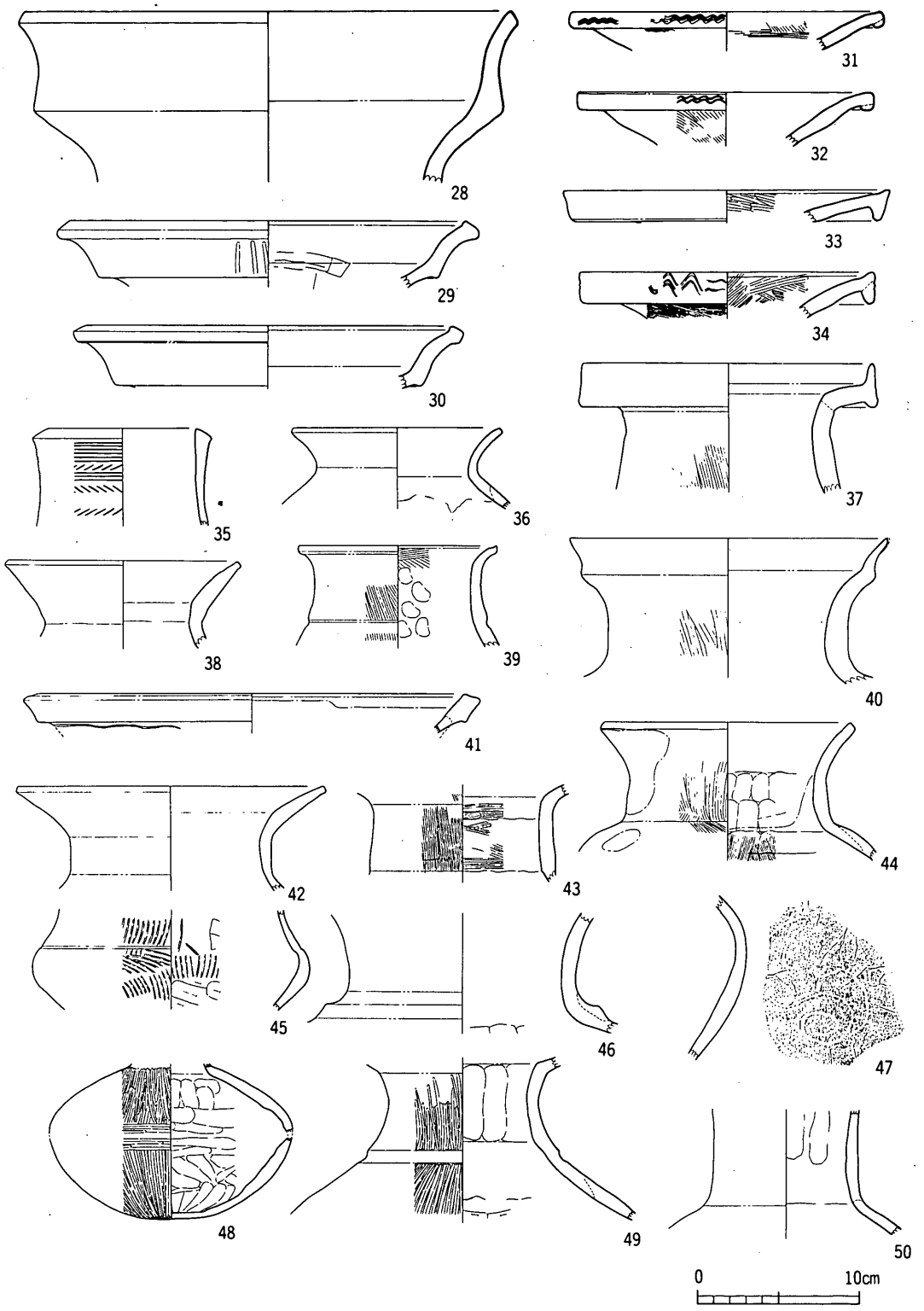
(1) 弥生土器（第120～126図）

壺形土器

1，２の形態上の特徴は直立する短い頸部と直線的な肩部である。３は直立する頸部と緩く外反する口縁部を有する。口縁端部はやや肥厚して，端面を造出する。４は頸部以上が緩く外反する形態であり，屈曲部は認められない。口縁端部の造作は３と共通する。５～７の口縁部の形態はラッパ状を呈する。端部は肥厚して凹線文を施すもの(6)もある。頸部が短い点も特徴の一つと言えよう。８～10についてもやはり直立する短い頸部を有するが，口縁部はほぼ水平に屈曲する。端部は肥厚して凹面化する。11は頸部が不明瞭であり，大きくラッパ状に開口する口縁部を有する。端部内面に横位のナデ調整を施すことにより，受け口状の形態を造出する。12～14については遺存状態が悪いために，頸部以下を復元することは難しい。12，14の口縁端部は端面を凹面化することにより上下に広く肥厚する。13はいわゆる「玉縁」状に肥厚した後に５条の凹線文を施す。15～18は口縁部以下が緩く内湾しており，屈曲点が不明瞭な形態である。16～18は口縁端部が肥厚する。19～25は直線的に内傾あるいは外反する頸部と水平気味に広く開口する口縁部を有する器形である。端部は強い横位のナデ調整により，大きく肥厚し，端面の凹面化が著しい。さらに端面はヘラ描鋸歯文，竹管文で加飾されている。26，27は厚い器壁の大型品である。特に口縁端部を大きく肥厚して垂下する点が特徴である。二重口縁を有する28～30も大型品と考えられる一群である。とりわけ29，30については端部の造作が丁寧である。31～34は口縁下端部に粘土紐を貼付して垂下することにより，広い端面を形成する。さらに端面は櫛描波状文によって飾られる。したがってこの器形は加飾することを目的として製作された遺物であることが推測できよう。口縁部が直線的に大きく外反する点も特徴である。35はやや外反気味に直立する円筒状の頸部を有する。口縁端部の器壁が最も厚く，外傾する面を形成する。頸部は沈線文が施文される。36はく字に外反する口縁部を有する。肩が張らない器形である。37の口縁端部は上下に広く拡張するために二重口縁の形態となり，上端部は垂直に立上がる。38は湾曲の弱い直線的な口縁部がラッパ状に開口する形態である。39はやや内傾気味に直立する頸部と外反する短い口縁部を有する。口縁端部は内面に横位のナデ調整を施すことにより，受け口状を呈する。40の口縁部は外反して立上がり，二重口縁の形態となる。41は遺存状態が悪いために器形を決定することは難しいが横位のナデ調整によって丁寧に仕上げられた口縁部の一部と考えられる。42は短い頸部とラッ



第120図　第３号集石墓伴出遺物実測図(1)



第121図　第３号集石墓伴出遺物実測図(2)

パ状に大きく拡がる口縁部を有する。44は内傾する短い頸部と外反する口縁部を有する。肩部に湾曲が認められることから球形の胴部形態が考えられよう。45は胴部中位が突出した形態である。47は壺形土器の胴部中位から下胴部にかけての破片であり，ヘラ状の原体を用いて線刻画が描かれている。２条の沈線により，「Ｓ」字形が描かれているが，両端部において両線は交わり，下端部では１条の沈線として「渦巻」状の文様を構成する。48の胴部は最大径が器高を凌ぐために扁平な形態である。特に外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。

甕形土器

51，52の口径は胴部の最大径と近似した値を示す。やや長胴気味の小型の器形が考えられる。53～56は口縁部の屈曲が鈍く，胴部は球形の形態である。内面にヘラケズリ調整の痕跡が明瞭である。57～62の口縁端部は内外面のナデ調整により，三角形の形態になり，受け口状を呈する。また胴部は上位に最大径が位置するために肩が張る形態である。またこの群の資料は器壁を薄く仕上げる点が特徴である。63～69の口縁部は内面に強い横位のナデ調整を施すことにより受け口状に成形し，端面を凹面化する。器壁は薄い。71～73は緩く湾曲する口縁部を有し，端部をナデ調整により上下に肥厚する。74，75の口縁部はほぼ水平に外反する受け口状の形態である。肩部は内湾する。76，77は口縁下端部をやや垂下する。79～83は厚い器壁を有する点を特徴とする。口縁部は短い造作であり，屈曲部に横位のナデ調整を施すことにより，疑似的な頸部を造出する。なお，81～83については口縁部内面のナデ調整により，受け口状に成形される。84～89は口縁端部をやや丸く成形する器形である。90～95は端部が内傾して立上がる二重口縁の形態である。特に93～95については下端部が垂下する特徴を有する。96は胴部外面にタタキ目の痕跡が顕著である。しかもこの痕跡は口縁部外面にも認められることから，口縁部がいわゆる「叩き出し」の技法(註３)によって成形されたことが判る。

底部は総て平底の形態であり，完全な丸底は存在しない。115が丸底風平底であり，108，111～113は突出する平底の形態を成す。119は器種の判然としない遺物である。

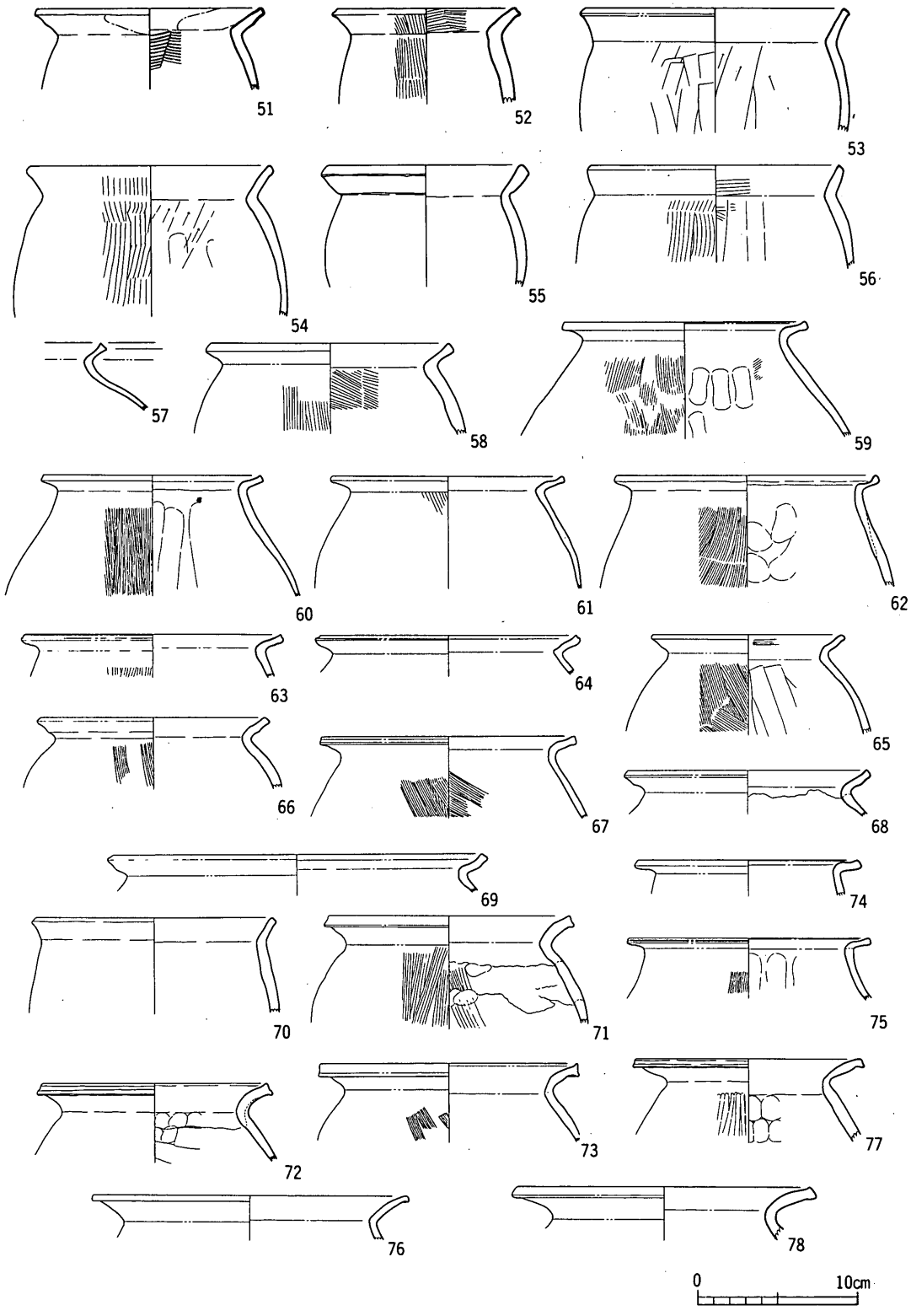
高杯形土器

杯部は口縁部の形態により３群に分類できる。122は長く外反する口縁部を有し，端面を形成する。123，124は端部を肥厚して水平面を造出し，凹線文を施す。125は口縁部内面を肥厚するが，端部は細く，丸い成形である。また屈曲部がやや突出する形態である。

脚部に明瞭な屈曲点を有する資料は認められず，総て緩く八字状に拡がる形態である。129の脚端部は肥厚した後に２条の凹線文を施す。

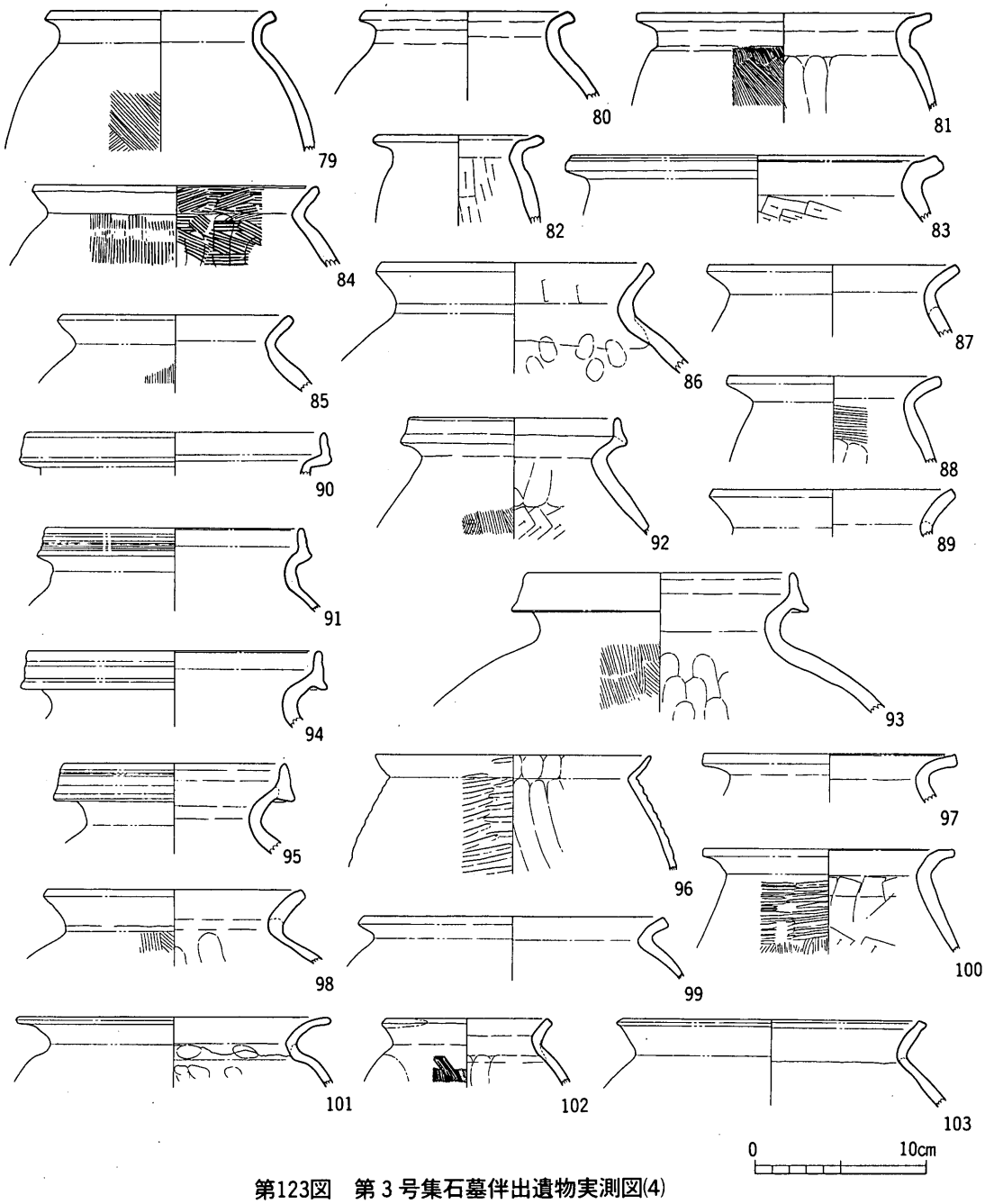
鉢形土器

142～144は小型品であるが，容量の大きい器形である。口縁端部は丸く成形されており，底部はいずれも平底の形態である。145，146の口縁部は水平な端面を有し，１条の凹線を施す。147は直線的な胴部を有する器形である。148は口径が器高を大きく凌ぐために浅い形態である。く字に

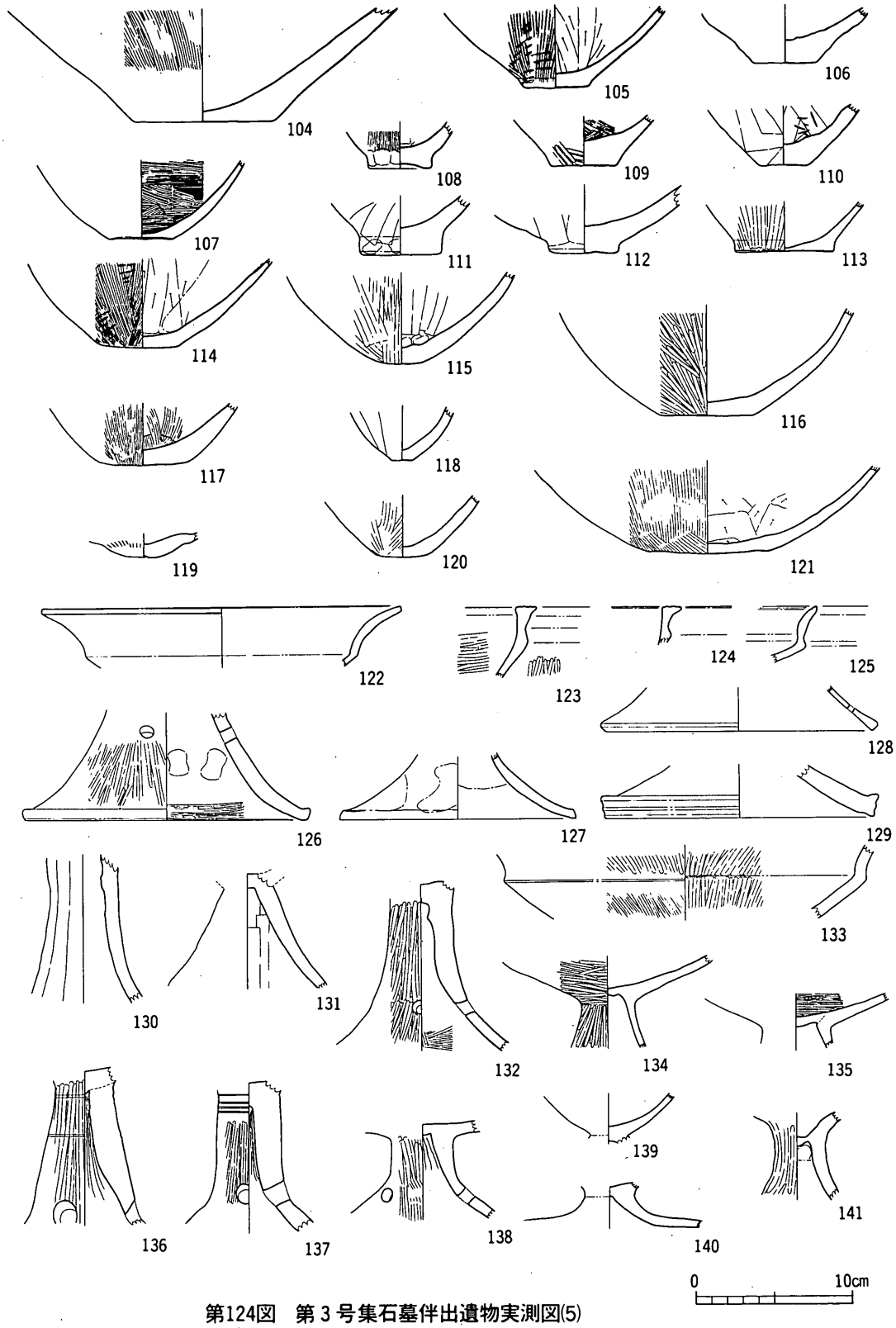


第122図　第３号集石墓伴出遺物実測図(3)

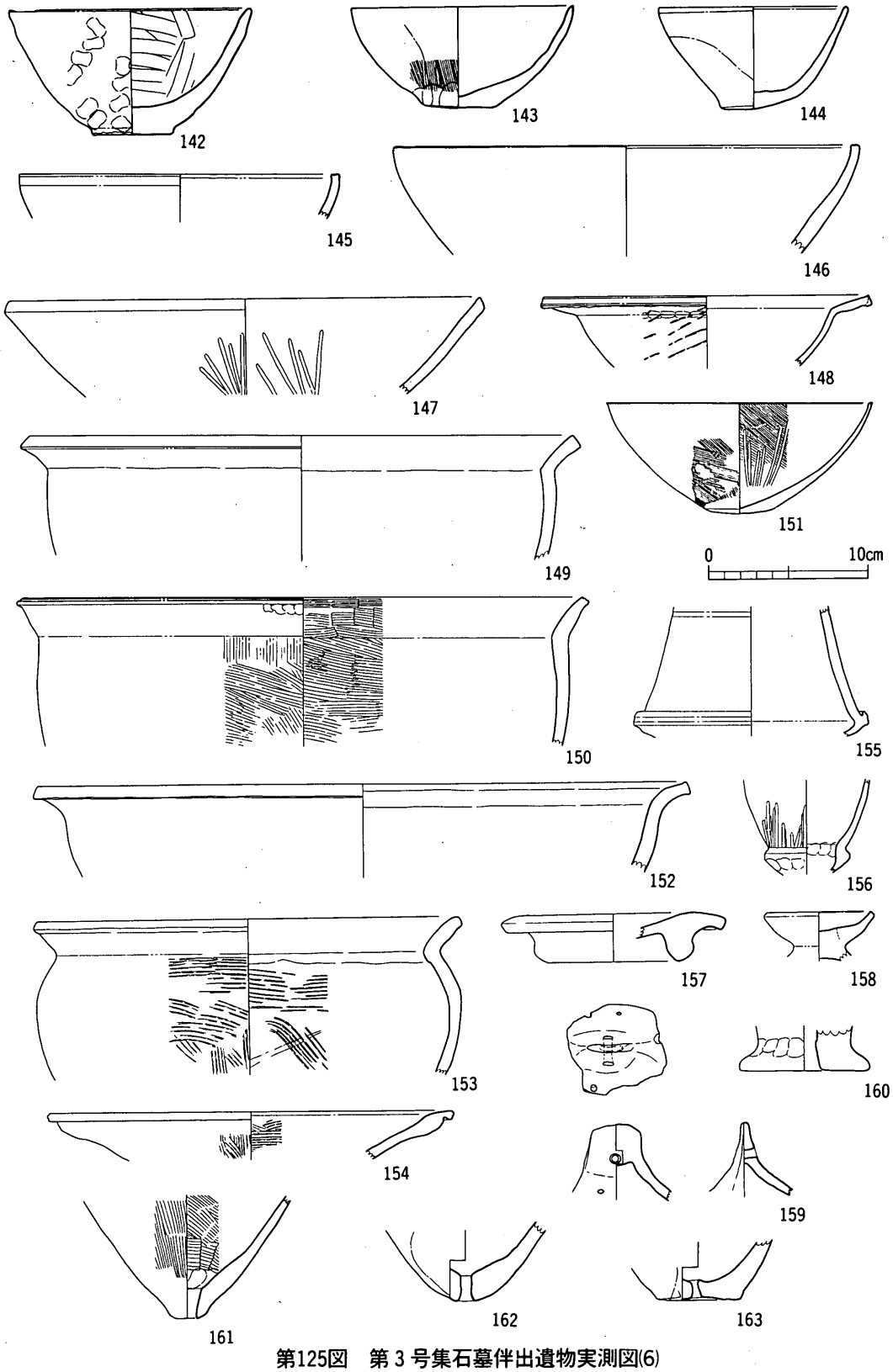
外反する口縁部を有し,端部はナデ調整により凹面化する。149，150も鈍くく字に外反する口縁部を有し，端面を形成する。胴の張らない深い形態の大型品であると考えられる。151は148同様浅い器形である。152の口縁部は緩く湾曲して外反し,端部を肥厚する。口径は大型であるが，浅い器形が考えられよう。153は149，150に比して胴が張り，最大径が口径を凌ぐ。154を鉢形土器と決定する根拠はないが，浅い皿形の器形が想定できる。



第123図　第３号集石墓伴出遺物実測図(4)



第124図　第３号集石墓伴出遺物実測図(5)



第125図　第３号集石墓伴出遺物実測図(6)

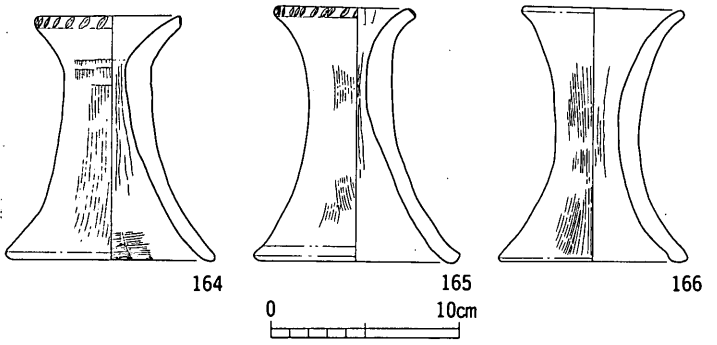
その他の器種

155は器形復元の難しい遺物であるが脚台を有する形態と考えられる。(註4) 丁寧な造作の遺物であり，その特殊な形態から非日常的な遺物ではなかろうか。

157は器種が判然としないが脚台としての機能を有するものであろうか。

158は小型器台片と考えられる。

159は蓋形の遺物である。固定用の孔が3個穿たれている。また釣手部にも穿孔を有する。



第126図　第3号集石墓伴出遺物実測図(7)

160の使途についても不明であるが，器壁が厚く，支える機能を有していることは想像に難くない。したがって器台形土器に類する資料である。

焼成前の穿孔を有する甑形土器の底部を3点図化した。尖底（161），丸底（162），平底（163）の3形態に分類することができる。

⑤　第4号集石墓（ＳＴ14）（付図9）

1．立　地

12－Ｈ区南部において検出した。Ａグループに属するが，周囲に共伴する遺構は認められない。礫混じりの砂層を基盤とする。

2．形態と規模

覆土除去の際に誤って墳丘の封土を破壊したために，墳頂部が所在していた遺構の中央部から南部にかけての部分を失った。したがって，検出し得た部分は，墳裾部に限られる。残存する規模は東西約500cm，南北約500cm，墳丘の最高部約20cmである。平面形態はほぼ正方形を呈していると考えられる。

墳丘の構築に用いられた石材は最大径30cmまでの円礫であるが，特に大規模な石材が集中する部分がない点が，前述の3基の同遺構と異なる特徴である。上記以外にこの遺構の特徴としては北辺部に弥生土器の濃密な集中部分を有する点と南墳裾部に完存する鉢形土器列が検出された点があげられる。両遺構は，この種の遺構の性格を判断する際に重要な位置を占めると考えられるが，この点については，4．伴出遺物概要で詳しく報告し，ここでは出土した事実のみを報告する。

3．構　造

(1)　上部構造

過度の掘削により，封土の大部分を失ったため，旧状については不明な点が多い、とりわけ墳頂部の下位の構造を知る手がかりはない。

石材は，封土上面に密集しており，内部に包蔵される量は少い。特に墳裾部を除いて，基盤直上においては，ほとんど認められない点が特徴である。したがって，基底石，外護列石などの施設は有しない。すなわち，構築時の計画性を知る資料は存在しないのである。

封土に包蔵される遺物は弥生土器の破片のみである。墳裾部の遺物ほど遺存状態が良好と言える。

(2) 下部構造

基盤層上面に遺構は検出されなかった。遺構が埋葬施設の性格を有するものであれば，主体部を有する遺構と有しない遺構各々について埋葬方法の検討が必要である。

4．伴出遺物概要

北辺部に集中する弥生土器群と南辺部の鉢形土器列は，遺存状態が良く，原位置を保っていると考えられる。前者には，原形に近い形状まで復元することが可能な遺物が数点含まれていることから，埋設時には完形であった可能性が強い。しかしながら，各々の破片からは土器群内部で移動した痕跡が認められる点は注意する必要があろう。すなわち後者が破損しながらも原位置にあることから，同一条件下に埋没したとすれば両者の異なる状況は認められないはずである。以上の事実から，前者の土器群は埋設前に他所において破壊した遺物をこの位置に集積したものと判断される。

第127図　第４号集石墓土器群実測図

後者は，墳丘の形態を明確にするために有効な資料である。この土器列が「L」字を呈することより，墳丘の南西隅部分の位置と南辺部が直線的に構築されていることが判る。さらに5個体総てが正しく設置されていることから，実用を目的とした遺物と考えることができよう。すなわちこれらを「供献」による遺物と認めることはできないであろうか。上記以外の特異な遺物としては，製塩土器2点がある。

5．伴出遺物

(1) 弥生土器（第128～136図）

壺形土器

1～4は直立する短い頸部とく字に外反する口縁部を有する。端部はやや肥厚した形態である。5～7の口縁部は水平気味に広く開口する。端部はナデ調整により凹面化し，上端部を突出する形態である。8，9は内傾する頸部を有し，緩く外反した口縁部は端部のナデ調整により三角形の形態を呈する。10，11は長頸の壺形土器の形態が考えられる。器壁が非常に薄い点が特徴である。12～21，24は二重口縁を有する器形であるが，口縁部の形態は3種に分類することが可能である。12～14の口縁部は湾曲して外反し，端面を形成する。18～20は直線的に外傾して立上がり，21，24はほぼ垂直に立上がる形態である。22，23の特徴は直立する短い頸部とく字に外反する短い口縁部を有する点である。また端部を強いナデ調整により，凹面化する。26～28はやや受け口状の短い口縁部を有する。28は器壁の厚い器形である。29は口縁部が水平気味に広く開口し，端部を肥厚する。頸部の存在は不明瞭。胴部は最大径を中位に有し，胴の張る球体状を呈する。内面にヘラケズリ調整の痕跡が顕著である。30は口縁部が直立する特異な形態である。器壁が厚く，大型品であることが考えられる。31は内傾する頸部と大きく外反する長い口縁部が特徴である。32の口縁部外面にタタキ目の痕跡を観察することができる。したがって，「叩き出し」の技法により成形されたことが判る。34は直線的な胴部を有する小型品である。35はく字に外反する口縁部を有し，端部を肥厚する。41は頸部が大きく外反し，口縁部が立上がる形態の大型品である。43は胴部上位に最大径が位置し，肩が張る形態である。最大径が胴部高を凌ぐために扁平な形状を呈する。44の胴部は中位に屈曲点を有する形態であり，く字の断面形態となる。46～54は器壁の厚い直立あるいは外反する頸部を有する大型品である。

甕形土器

55～60の口縁部は水平気味に外反し，内面と端部の強いナデ調整により，上端部の突出する受け口状の形態となる。また肩部が内湾するために最大径は胴部上位に位置し，肩の張る形態である。肩部内面の指ナデ調整の痕跡が明瞭である。62，63は屈曲の弱い短い口縁部と球形の胴部が特徴である。65，68は口縁端部を肥厚して沈線1条を施す。66，69，70は口縁部を外湾して端部を肥厚する。胴の張る形態である。胴部内面のヘラケズリ調整により，器壁が薄く仕上げられている。71は口径が胴部最大径を凌ぐ形態である。端部を肥厚して端面を凹面化する。72の口縁部

は内湾して受け口状を呈する。胴部内面にヘラケズリ調整の痕跡が顕著である。74の口縁部もやや内湾する受け口状の形態である。75は器高の低い小型品であるが，器壁の厚い造作である。口縁部が特に小さく成形される。76は最大径が器高を凌ぎ，胴の張る扁平な形態である。77，80は大型品であるが，鉢形土器の形態も考えられる器形である。78，83の口縁部は先端部が細く成形された後に小さい端面を造出する。82，85の口縁部は直立気味に外反し，端部にほぼ水平な面を形成する。86は口縁端部が肥厚して二重口縁状の形態を呈する。端面は2条の凹線文を施す。

底部については87のみ脚台部を有するが，他は平底(95，96，99～126)，突出する平底(91～93，97，98)，丸底（88～90，94）の3形態に分類し得る。

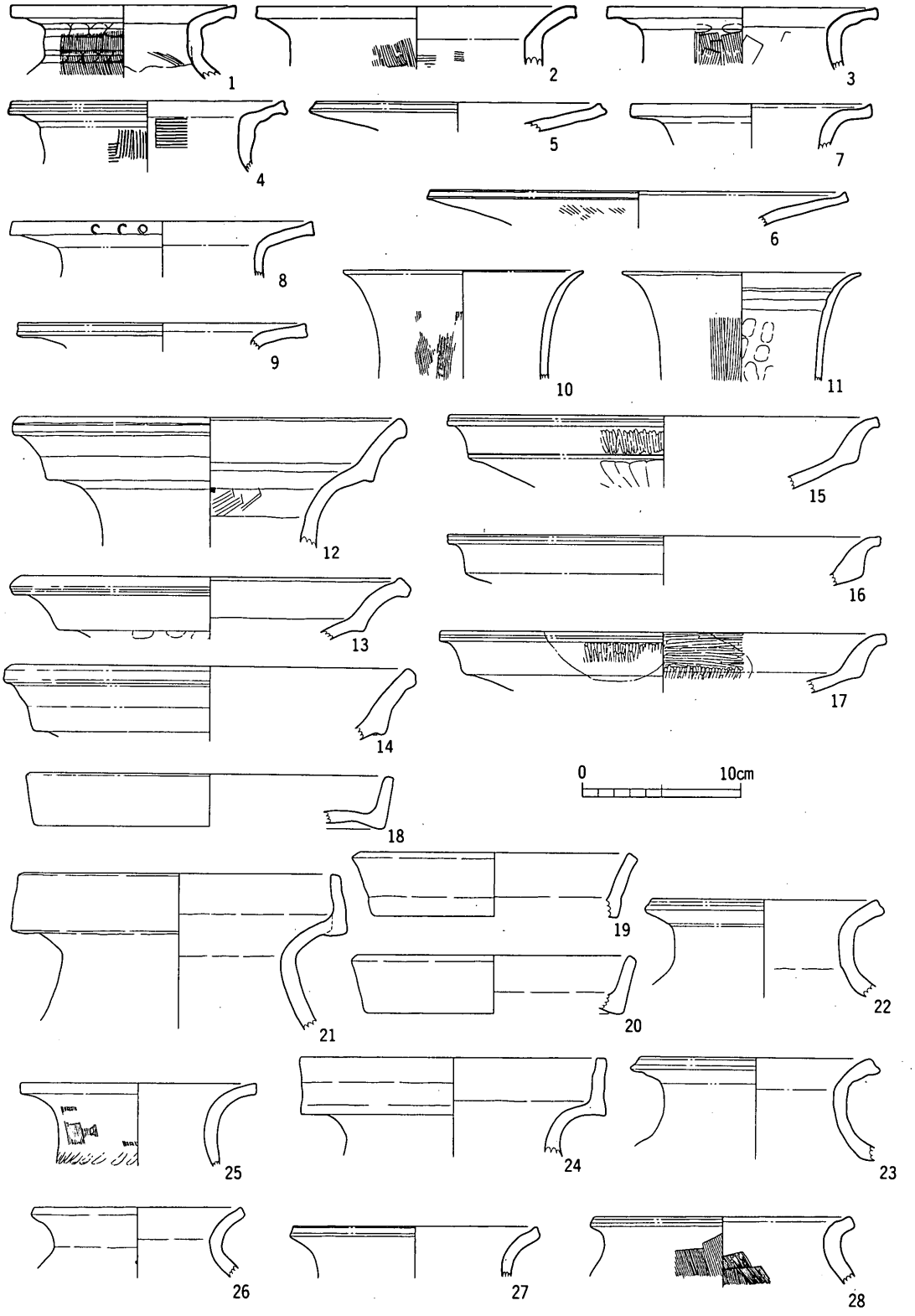
高杯形土器

127，128，130は杯部の屈曲部以上の部位の長さが屈曲部以下の部位の長さに比して極めて短い形態である。口縁部は湾曲して外反した後，端部を丸く成形する。130の屈曲部はやや突出する。129は屈曲部以上の部位が長大化して屈曲部以下の部位長さを凌ぐ。口縁部の湾曲も大きい。130同様屈曲部が突出する形態である。131は口縁部を肥厚する。屈曲部はやはり突出した形態である。

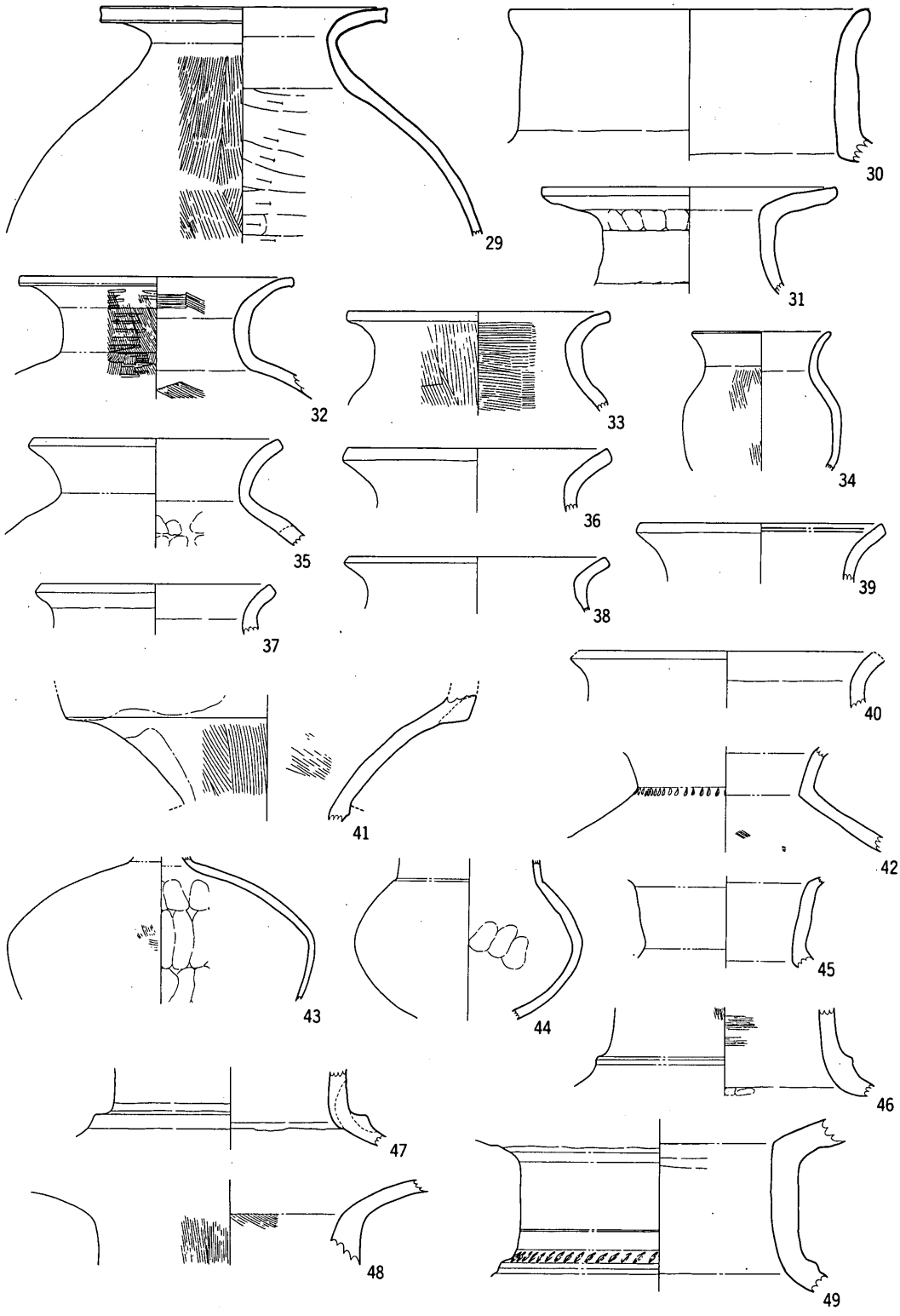
脚部は145を除き，総て緩く湾曲して八字に開く形態である。脚端部はやや肥厚する。145は湾曲しない筒状の形態であり，大型の器形が考えられる。144については杯部は屈曲部を有しない皿状の形態が考えられる。

鉢形土器

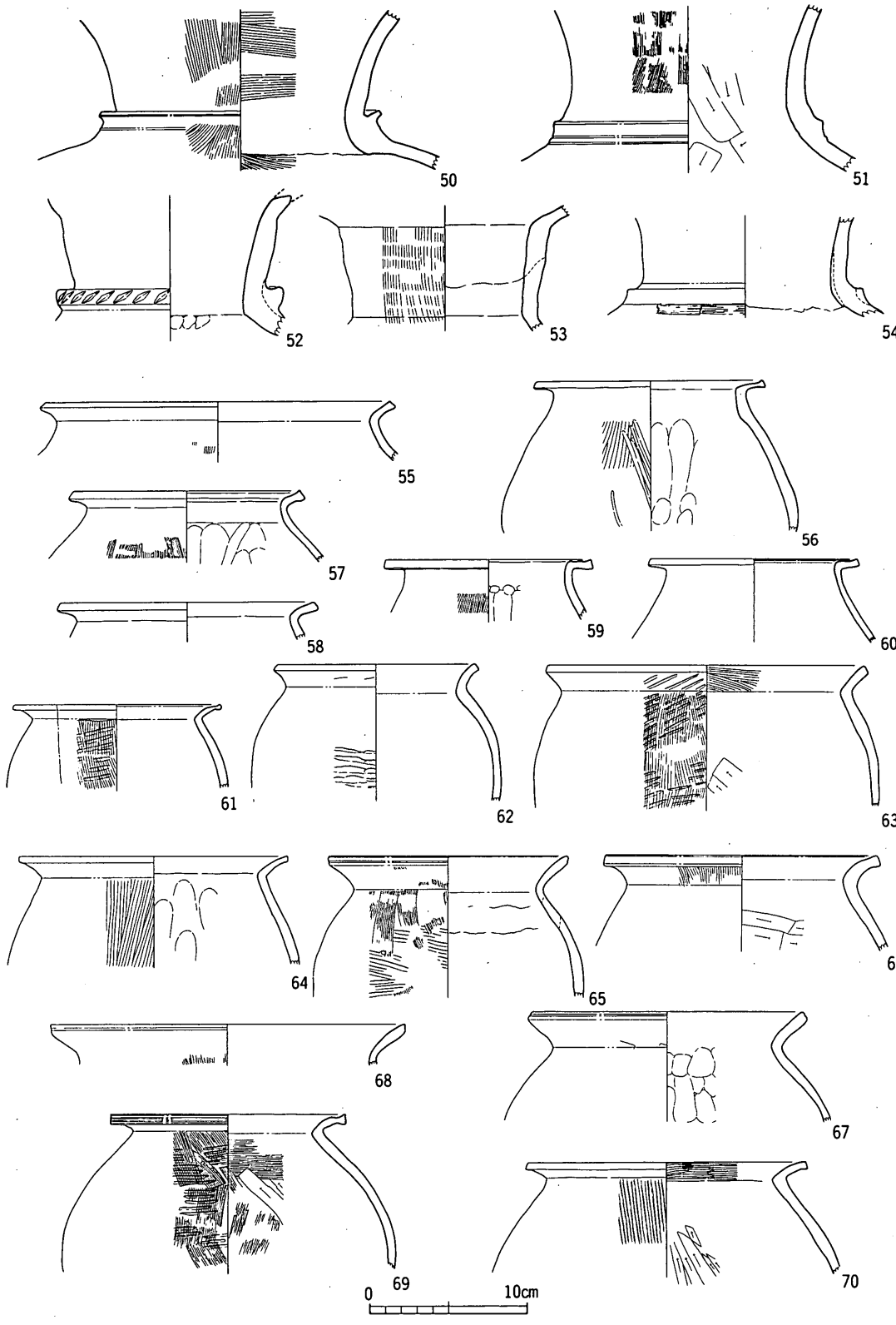
148～150はく字に外反する口縁部を有し，胴部の最大径が口径を凌ぐ形態である。152，153は胴の張らない深い器形である。152の口縁部は直角に屈曲する。154は小型の深い椀形の器形である。155，156も基本的には152，153に類する形態の遺物であるが，器高がやや低いために容量は小さくなる。157は154の小型化した形態と考えられるが，平底を有する。158，159，161～163は口径の大きい浅い形態の群である。158は直線的な胴部であるために容量は極めて小さい。159，162は口径が器高を圧倒的に凌駕するために皿状の形態となる。161は底部にヘラケズリ調整の痕跡が顕著である。164，165は口縁部がやや緩く外反する胴の張らない形態の大型品である。166は口縁部がやや内湾して受け口状を呈する。167の口縁部はく字に外反した後端部を丸く成形する。148～150に類する形態であろう。168の口縁部はやや外反する。



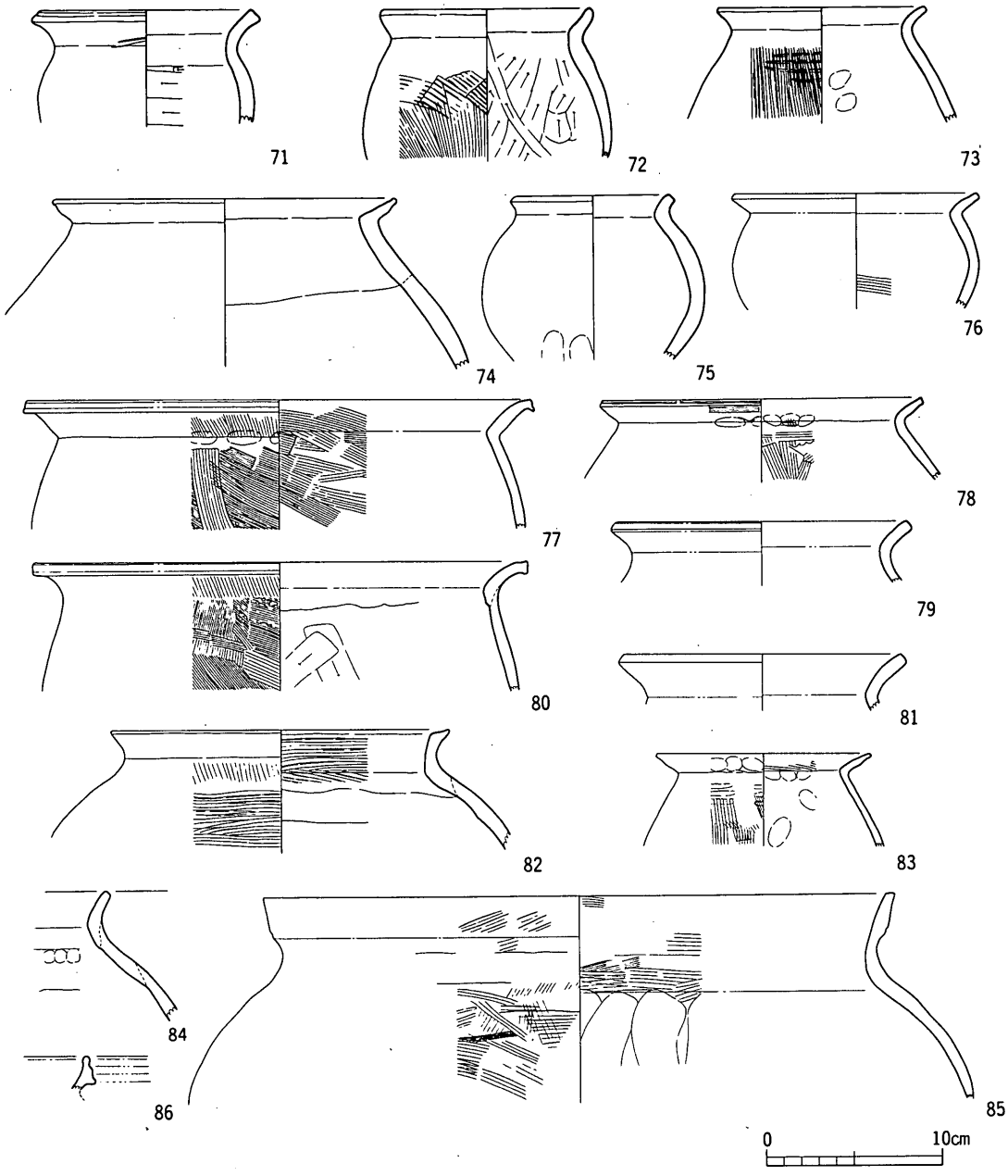
第128図　第４号集石墓伴出遺物実測図(1)



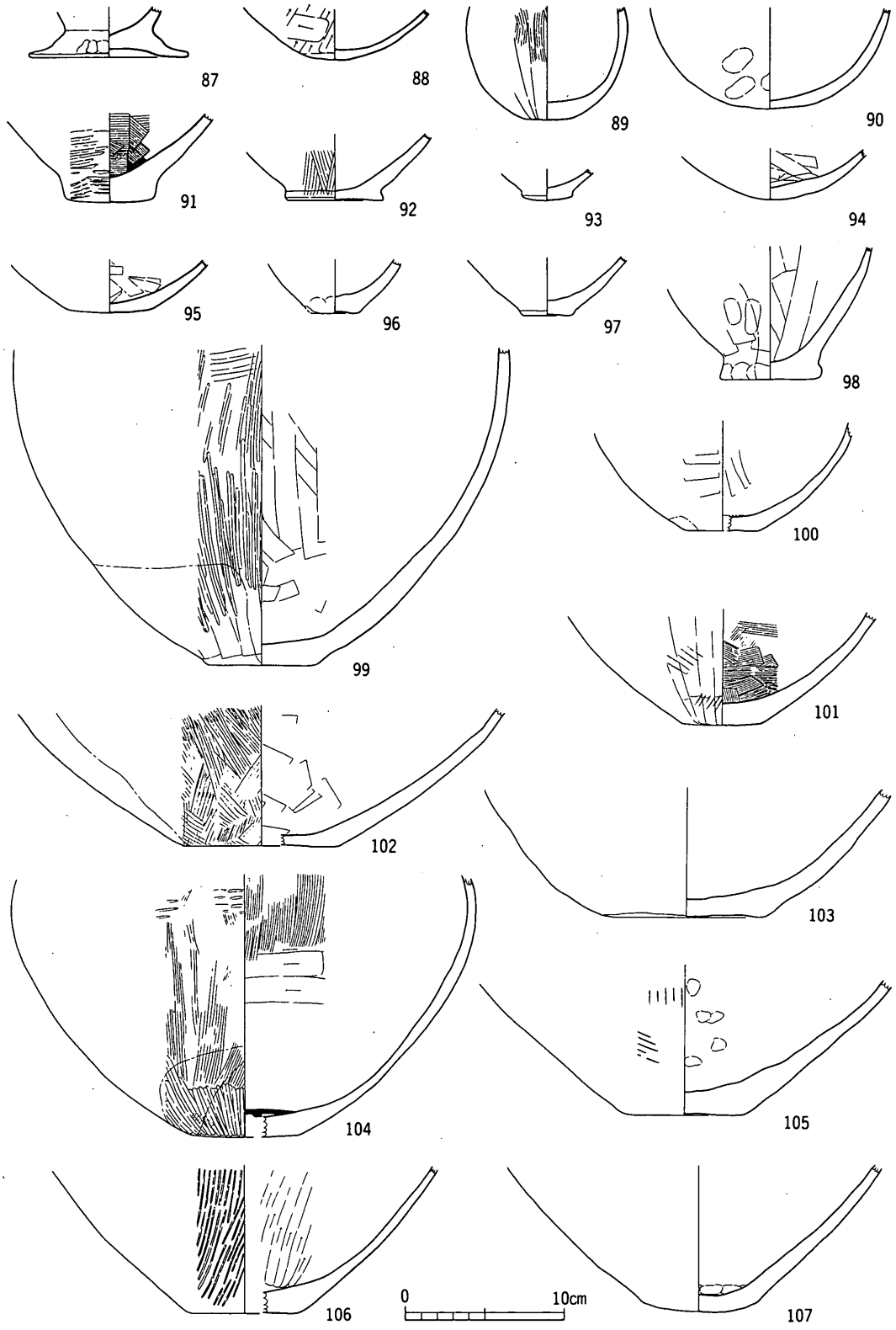
第129図　第４号集石墓伴出遺物実測図(2)



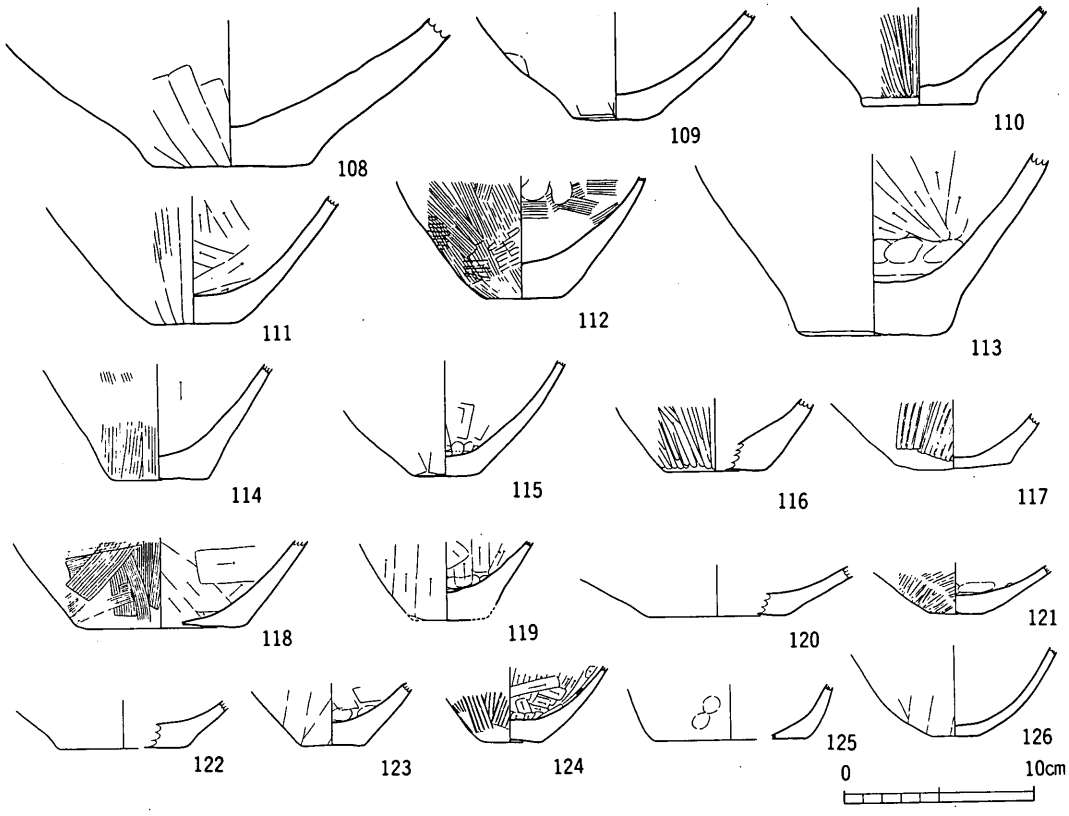
第130図　第４号集石墓伴出遺物実測図(3)



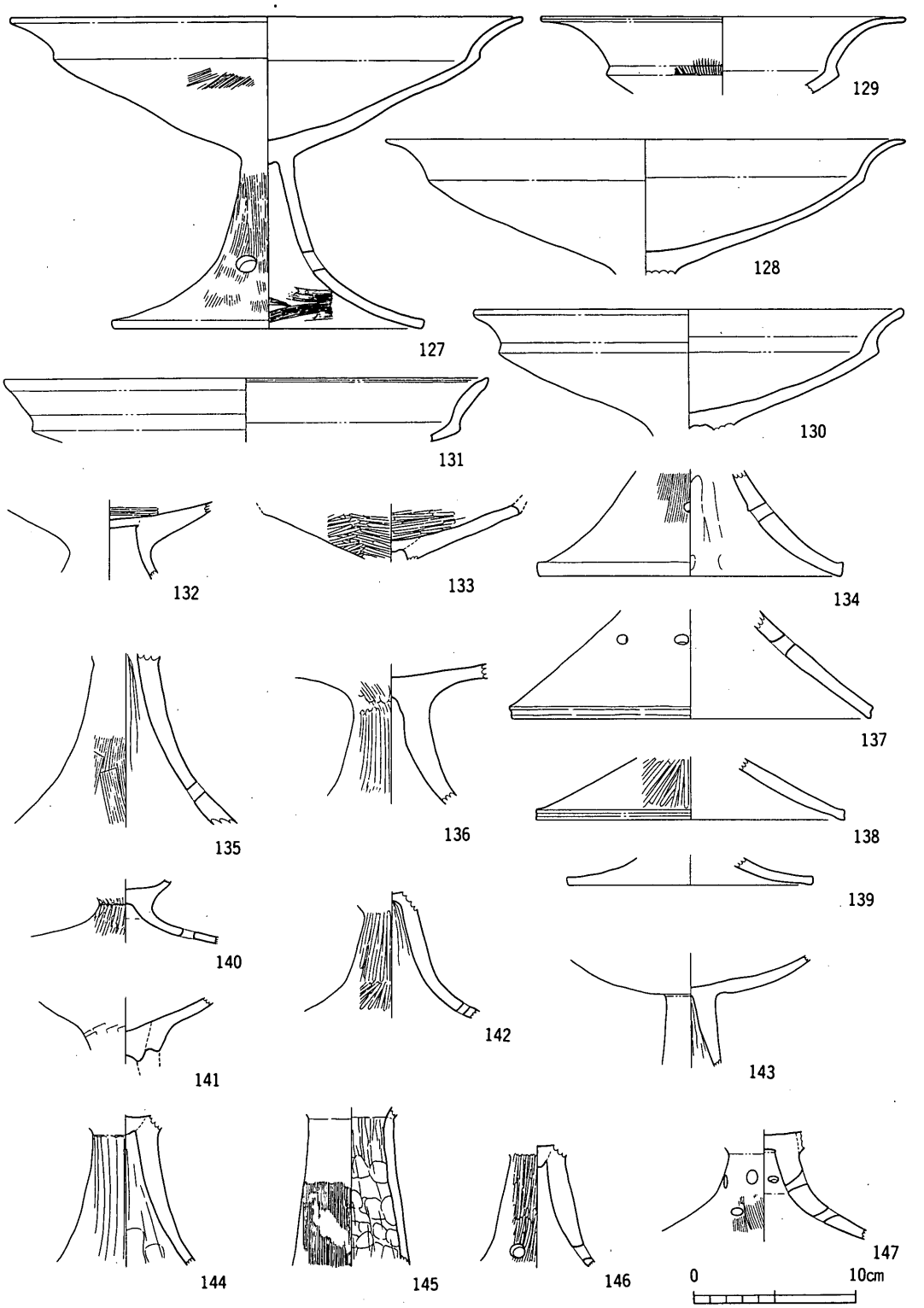
第131図　第４号集石墓伴出遺物実測図(4)



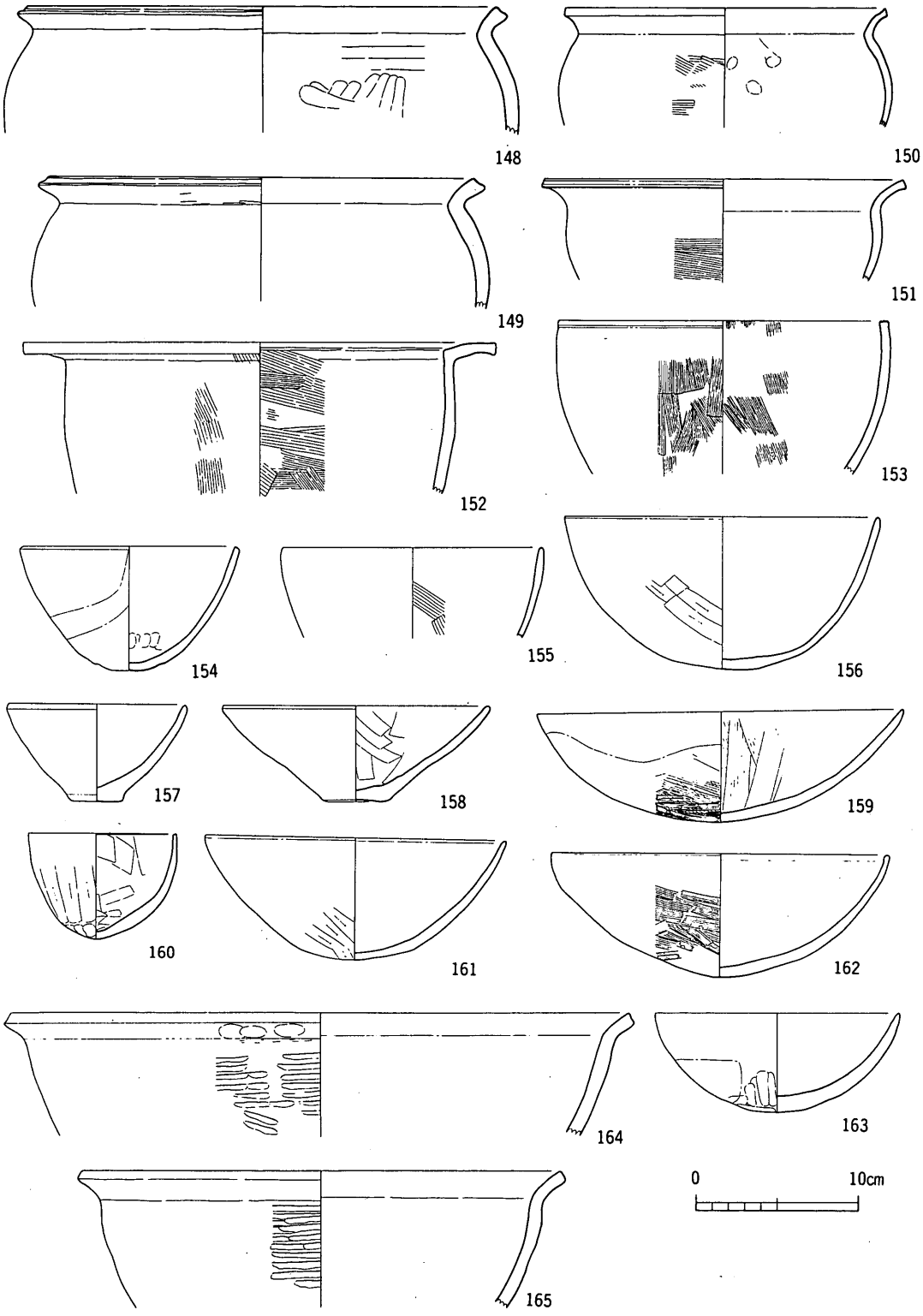
第132図　第４号集石墓伴出遺物実測図(5)



第133図　第４号集石墓伴出遺物実測図(6)



第134図　第４号集石墓伴出遺物実測図(7)



第135図　第４号集石墓伴出遺物実測図(8)

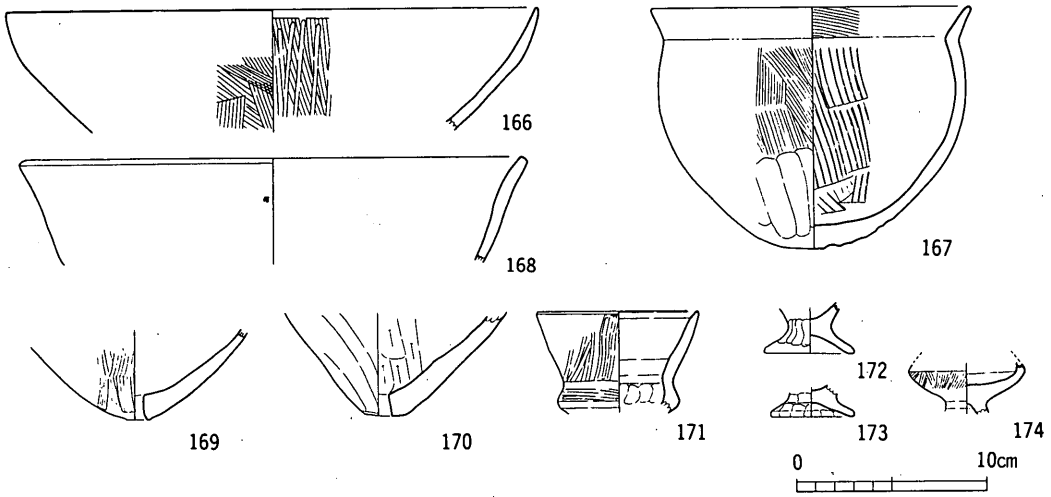
その他の器種

甑形土器は2点出土しているがいずれも焼成前に穿孔された単孔式の器形である（169，170）。

171は直線的な口縁部を有する形態であり，外面のヘラミガキ調整の痕跡が顕著である。

172，173は製塩土器の脚台部である。

174の上部形態は171の形態が考えられようか。ただし脚台部を有する器形である。この遺物については容量が極小である点と精巧な造作である点などから非日常的な性格を有することが推測される。



第136図　第4号集石墓伴出遺物実測図(9)

⑥　第5号集石墓（ＳＴ15）（第137図）

1．立　地

12－Ⅰ区南端部において検出した。第4号竪穴住居跡の埋没後に，その東隣に一部を重複する状態で構築されている。第1号集石墓との距離は約7ｍを測り，周囲に3基の壺棺墓と第2号土坑が所在する位置である。Ｂグループ中最も南西部に占地している。

2．形態と規模

本調査開始当初に実施したトレンチ調査の際に，重機により墳丘の封土を削取したために遺存状態は著しく悪化している。確認し得る墳丘高は約20cmであり，石材の多くは基盤直上において検出した。平面形態は長楕円形である。規模は長径170cm，短径120cmを測る。

石材は最大径5～30cmの円礫が用いられている。

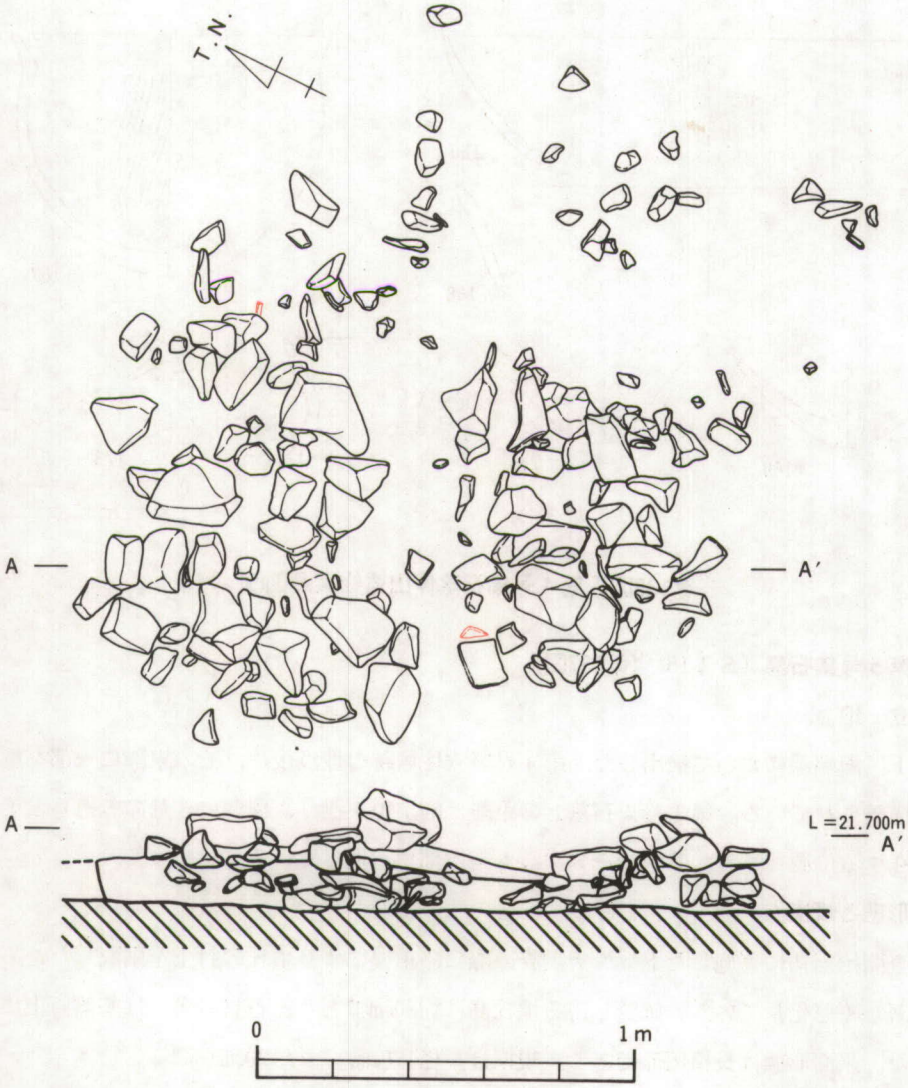
封土及び，基盤直上から出土する弥生土器は少量である。

3．構　造

(1)　上部構造

残存する石材の上位にも多量の円礫が存在していたことは，トレンチ調査時に確認されている。しかしながら，これらも復元することは難しい。ただし，石材の配置に規則性が認められなかった点が，他の遺構と類似する特徴である。また，封土内に包蔵されていた遺物が破片に限られる点も共通点の一つである。

封土除去後に基盤直上において検出された礫群からも規則的な配置は認められていない。



第137図　第５号集石墓実測図

さらに，この遺構の特徴としては，基盤直上に薄い焼土の層序が確認された点があげられる。この焼土層に近接した位置からは完形の甕形土器が１個体出土している。

(2) 下部構造

封土下には遺構は有しないが，ＳＢ04との関連について明らかにしておく。この２者の遺構については検出面が異なる点と一部が重複する点から明らかに先後関係にある。しかしながら，ＳＢ02にみられる様に住居跡の埋設途上において，埋土中に焼土を伴う礫群が設けられる例があり，当遺構についてもその可能性が完全にないと断定することは性急であろう。もちろん埋葬施設か否かの判断を下すことは難しい。

４．伴出遺物概要

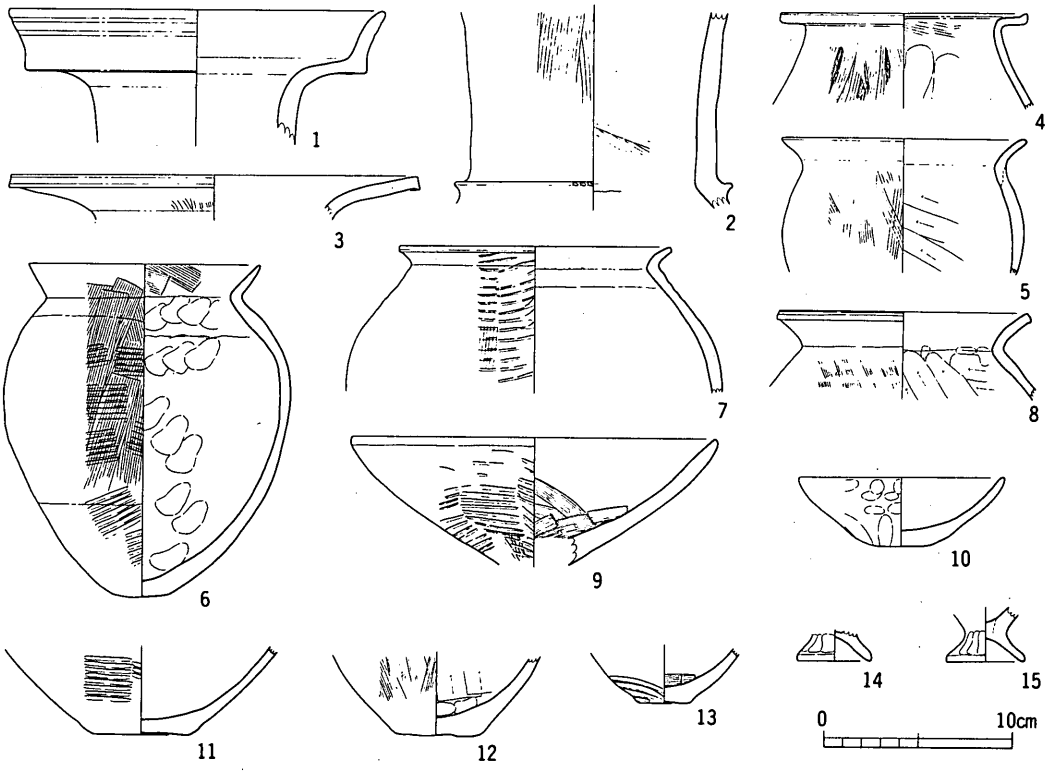
基盤直上から出土した完形の甕形土器１点の他に，主なものとして製塩土器２点，鉄鏃１点，鉄製刀子１点などがある。

５．伴出遺物

(1) 弥生土器（第138図）

壺形土器

１は二重口縁の形態であり，直立する頸部を有する。３の口縁部は広く水平気味に開口して下



第138図　第５号集石墓伴出遺物実測図

端部をわずかに肥厚する。

甕形土器

4は口縁部が水平に屈曲し，内面の強いナデ調整により，上端部が突出した形態となる。このため受け口状を呈する。肩部は内湾する形態である。5の口縁部は緩く湾曲して外反する。口径と胴部最大径が近似する値を示す。6が完存する遺物である。く字に外反する口縁部は端部を丸く成形しており，やや内湾する。底部は丸底風の平底である。7は口縁部外面に胴部から連続するタタキ目の痕跡が認められることから「叩き出し」の技法により成形したことが判る。短い口縁部が特徴である。8は口縁端部をやや肥厚して凹面化する。

底部は3点を図化したが，総て平底である。13は底面にもタタキ目の痕跡を認めることができる。

その他の器種

製塩土器の脚台部2点を図化した。Ⅰ－5類に分類できる遺物である。

(2) 鉄製品（第118図3，4）

鉄鏃1点(3)と刀子1点(4)が墳丘西部より出土している。3は鏃身部が完存しており，長さ5cm，最大幅1.6cmを測る。4は先端部のみが遺存するが，刃部の最大幅は2cmである。

⑦ 第6号集石墓（ＳＴ16）（付図10）

1．立　地

11－Ｈ区に所在する。Ｂグループのほぼ中央部に位置し，ＳＴ11，12との距離は各々約3ｍと約6ｍである。

2　形態と規模

東西約4.5m，南北約6ｍの範囲に円礫と弥生土器の破片が散在するが，墳丘は北半部に中心をもつと考えられる。その規模は，径約300cm，高さ20cmを測る。形態は不明瞭であるが，ほぼ円形を呈する。したがって特に南部に多量にみられる円礫は墳丘の崩壊，もしくは転落によるものである。封土上面に露見する石材の規模は，最大径10～20cmものが主体となっており，標石として用いられたと考えられる礫は検出していない。

墳丘の中央部に弥生土器の集中する部分がある。ＳＴ14の土器群と類似する遺構ではなかろうか。遺物の包蔵量は縁辺部ほど希少である。

3　構　造

(1) 上部構造（第139図）

石材の配置に規則性を有しない点が他の遺構との類似点であり，墳丘中央部に土器の集中部分が存在する点がこの遺構の特徴である。

土器群の遺物が良好な状態で遺存し，復元可能な遺物を含む点からＳＴ14同様，破壊後，埋設されたことが考えられる。さらにこれらの遺物中には「供献」を目的とした遺物も含むものと考

第139図　第６号集石墓土器群実測図

えられる。

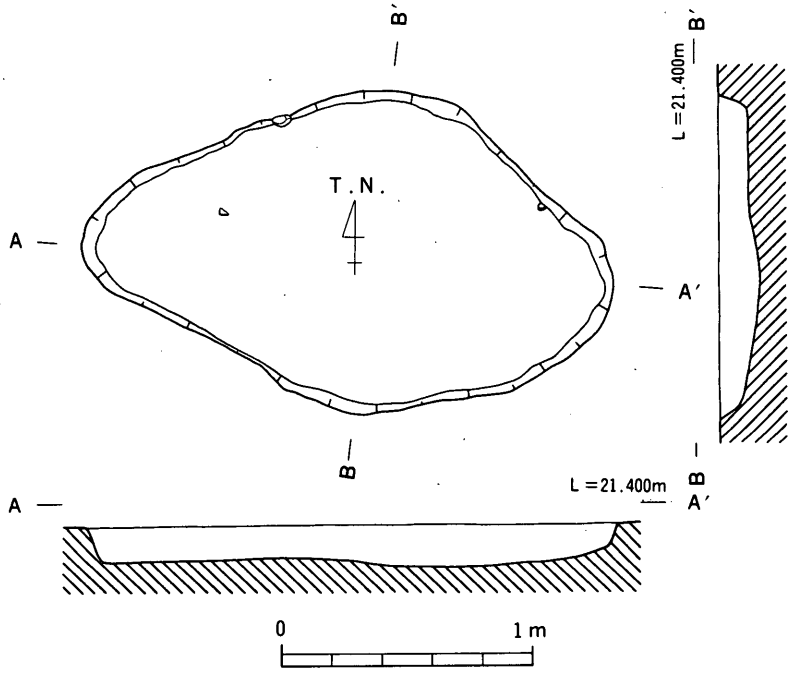
封土中に包蔵される石材と遺物量は少量であるが，墳丘中央部の土器群は封土中にも遺物の厚い堆積の状況がみられる。その拡がりは，径約70cm，厚さ約20cmに及ぶ。

基底石，外護列石，周溝などの施設は有しない。

(2) 下部構造（第140図）

基盤層を掘削して設けられた土坑１基を検出した。土坑の埋土は黒色砂質土である。規模は長軸212cm，短軸128cm，最深部16.5cmを測る。形態は不整形な長楕円形を呈し，壁面の傾斜は急である。また，床面は東部が深く，西半部がほぼ水平な構造であり，床面には施設を有しない。埋土に包蔵されていた遺物は少量の弥生土器のみであり，総て破片である。

この土器の性格については，ＳＴ11，13，18において検出した土坑と形態を異にする点から，特異な性格を有することも考えられる。しかしながら上部構造に類似性があり，埋葬施設である可能性は強い。



第140図　第６号集石墓主体部実測図

４．伴出遺物概要

墳丘中央部の土器群に混入していた遺物のなかに，ほぼ完形の甕形土器１点がある。その他には非実用的性格の強い小型の甕形土器２点，支脚形土製品２点，ヤリガンナ１点などが出土して

いる。

また，石材の中に砥石１点が混在している。

５．伴出遺物

(1) 弥生土器（第142～145図）

壺形土器

１は胴部の最大径に比して器高の大きい長胴形態である。口縁部から胴部にかけては変化点が不明瞭であり，緩く湾曲する。頸部はやや外反し，口縁部はラッパ状に開口する。口縁端部は細く丸い成形である。２，３はほぼ直立する頸部を有する肩の張る形態である。４の各屈曲部も不明瞭であるが，内湾する頸部と湾曲して外反する口縁部を有する。６は外傾する頸部と水平に開口する口縁部を有する。端部を肥厚した後に４条の凹線文を施す。８の口縁部の形態も６に類する。９，11は二重口縁を有する器形の口縁部と考えられる。外面は竹管文とヘラ描鋸歯文によって飾られる。器壁の厚い大型品である。10の胴部は球体状を呈し，肩が張る形態である。口縁部が緩く外反して上端部がやや突出する。12は器壁の厚い大型品である。二重口縁を有し，屈曲部が突出する形態である。

甕形土器

13～16の口縁部は外湾して端部をやや肥厚する。端面は弱いナデ調整により仕上げられるために丸味を残す。胴部内面は上位までヘラケズリ調整が施される。17は最大径が胴部上位に位置し，肩が張る形態である。外面の調整は口縁部までタタキ目が認められることから「叩き出し」の技法により成形されたことが判る。18は長い口縁部が特徴である。20についても13～19に類する口縁形態と考えられる。胴部はやや長胴の形態である。21，24，25の口縁部は屈曲が弱く，直立気味の形態を呈する。胴部は湾曲が鈍いために胴の張らない長胴形である。27は口縁部内面と端部に強いナデ調整を施すことにより，端部が突出する受け口状の形態である。胴部内面にヘラケズリ調整を施し，器壁を薄く仕上げる。31の口縁形態も27に類すると考えられるが，より水平気味に外反する。28～30，32～34は二重口縁の形態である。28の端部が外反する以外は，他は直立あるいはやや内傾して立ち上がる。胴部中位に緩い屈曲部を有するために断面形態はく字状を呈する。

底部は総て平底の形態であるが，45，46はやや突出する形態である。44，46については底部にもタタキ目が施される。

高杯形土器

52は浅い杯部である。屈曲部以上の部位が屈曲部以下の部位に比して小さい。口縁端部にナデ調整を施すことにより，水平気味の端面を形成する。53，56は口縁端部が丸い形態である。やはり屈曲部以上の部位が小規模である。

鉢形土器

57は口縁部をく字に外反して端部を肥厚する。やや肩の張る形態である。58は口径は大きいが，

器高が低いために浅い器形である。口縁端部をやや肥厚する。59の口縁部は直線的にやや外傾し，端部はナデ調整により水平な面を造出する。屈曲部外面には突帯を設け，刻目を施す。内外面全面にハケ目調整の痕跡が明瞭である。60は短い口縁部がほぼ直立し，端部を肥厚した後に端面に凹線文２条を施す。胴部の最大径が口径を凌ぐ形態である。

その他の器種

61～65は普遍的に出土する甕形土器に比すると小型品である。62は器壁の厚い造作であり，長胴形を呈する。61，63は胴部の最大径が器高と近似した値を示す。64，65は口径が最大径を凌ぐ形態である。

66は単孔式の甑形土器。焼成前における穿孔である。

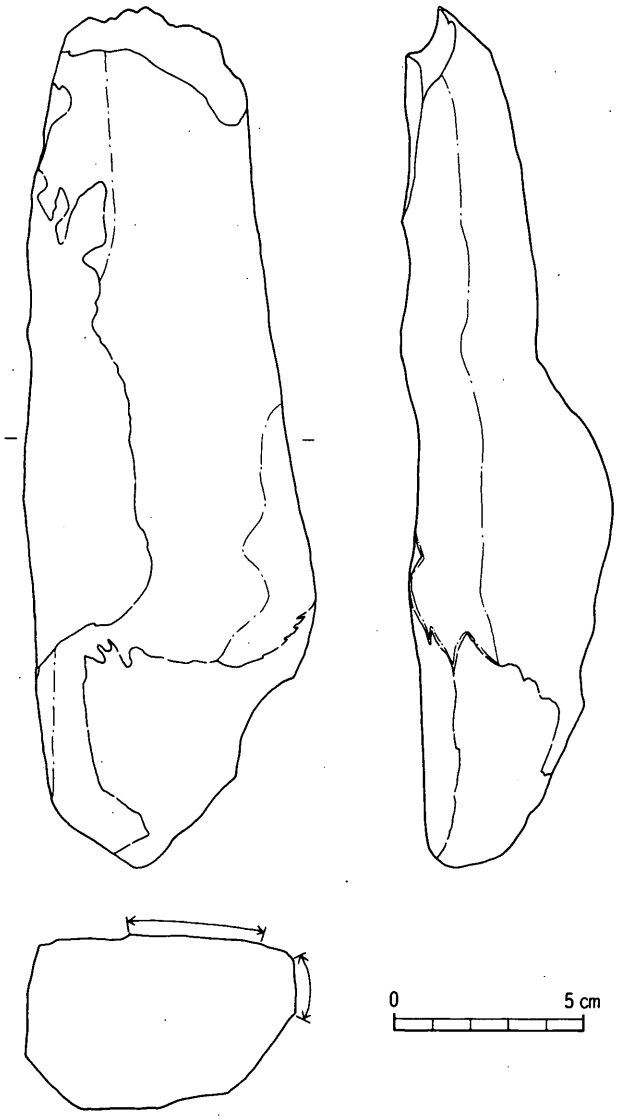
70は台付甕形土器の脚台部であろうか。なお，いわゆる台付甕形土器は弥生時代後期の特に東海地方以東の地域において普及した器種である。

(2) 土製品（第145図67～69）

67～69については形態と製作技法に差異が認められることから同一の機能を有し得るのか否か断定することは難しい。しかしながら，ここでは支脚形土製品の脚部として報告したい。いずれも上端部を破壊しているために形態は不明である。

(3) 石器（第141図）

砥石１点が封土の上位より出土している。長楕円形の石材を長軸方向に半裁して利用しているために半円形の断面形態を呈し，側面には自然面を残す。使用された部分は半裁面と自然面の

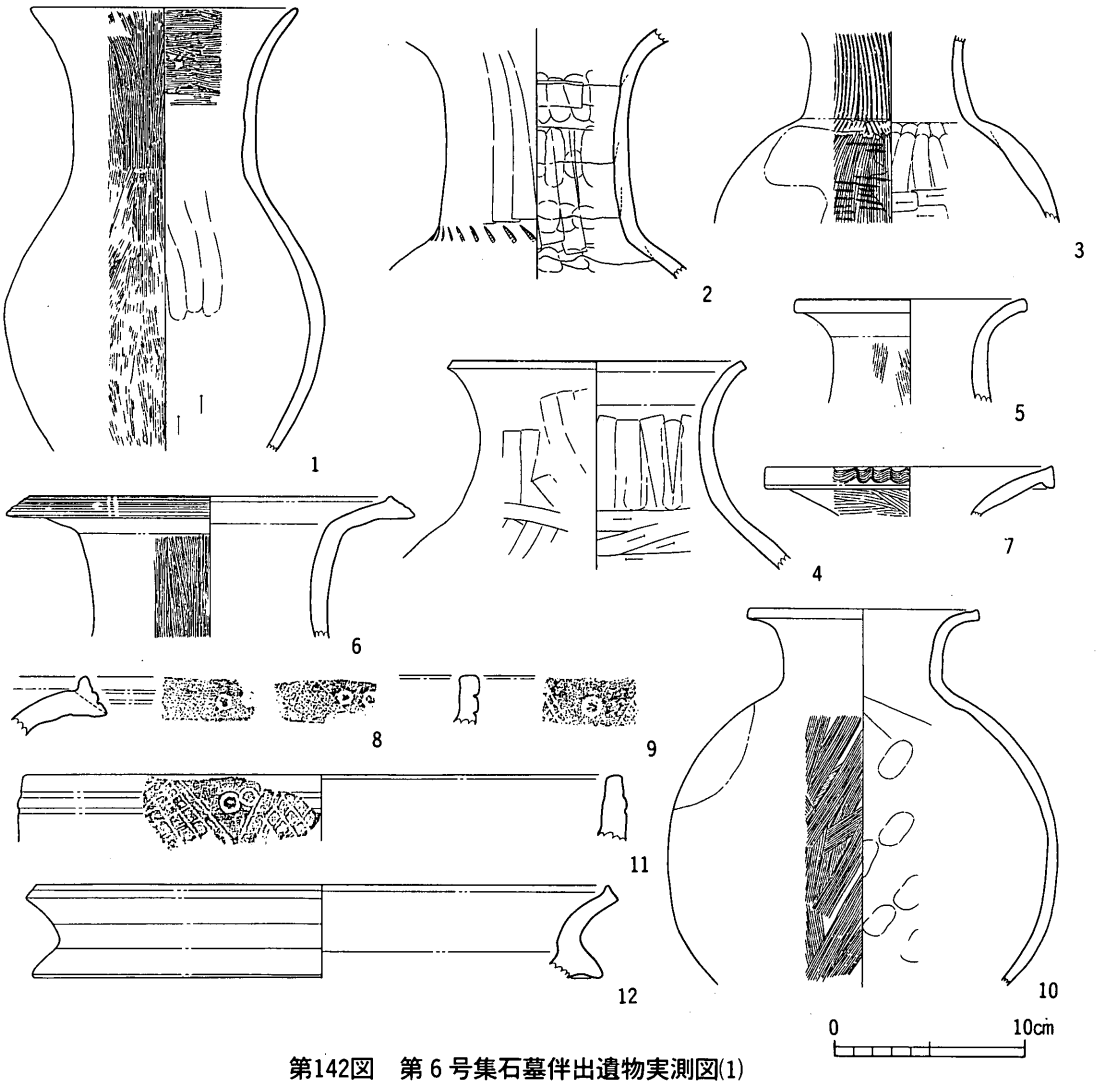


第141図　第６号集石墓伴出砥石実測図

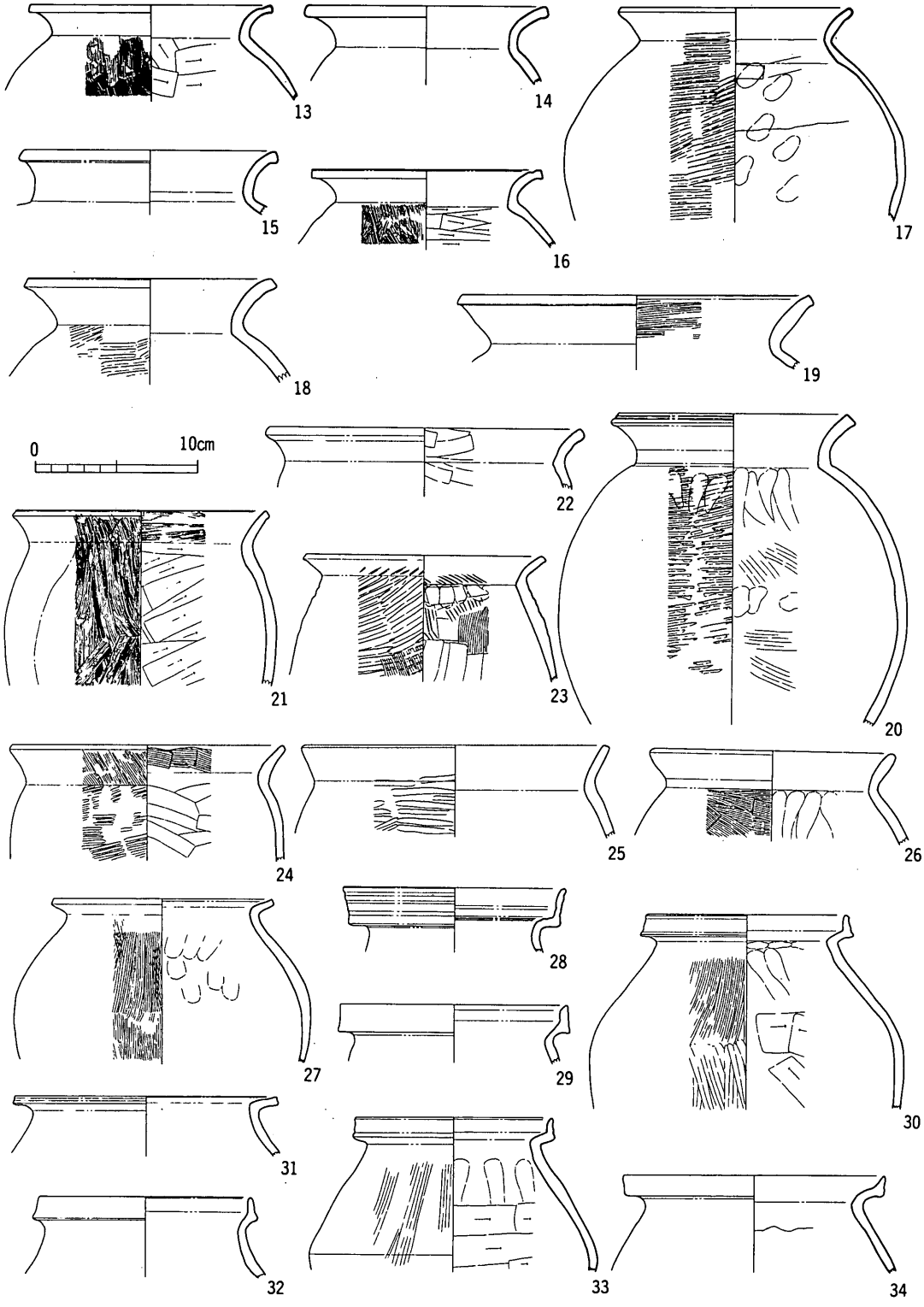
一部である。長軸方向の使用痕が認められる。

(4) 鉄製品（第118図５）

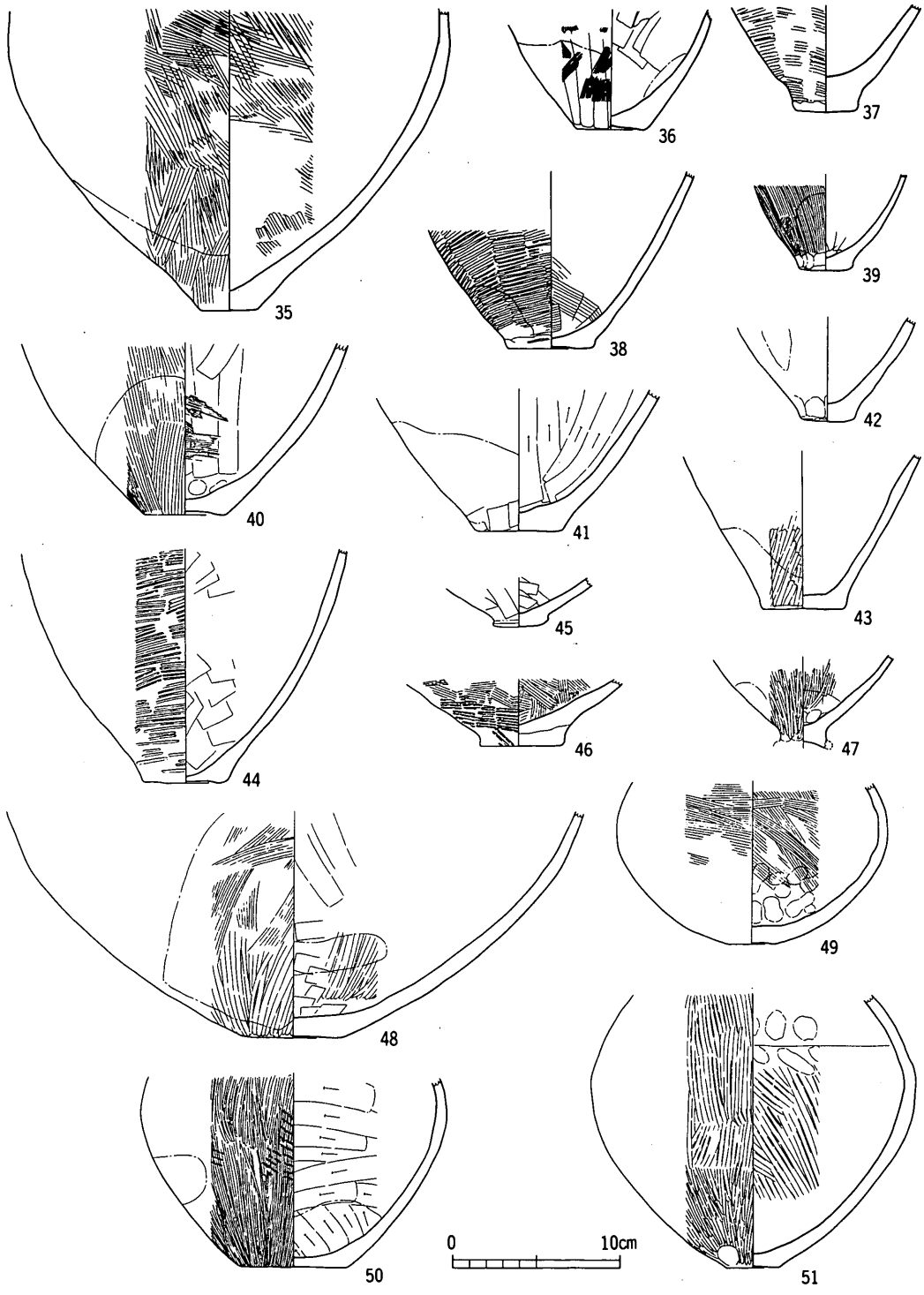
封土中よりヤリガンナ１点が出土している。基部を欠くものの残存長は12.5cmを測る。茎部に比して刃部がやや幅広くなる形態であり，先端部が反る。



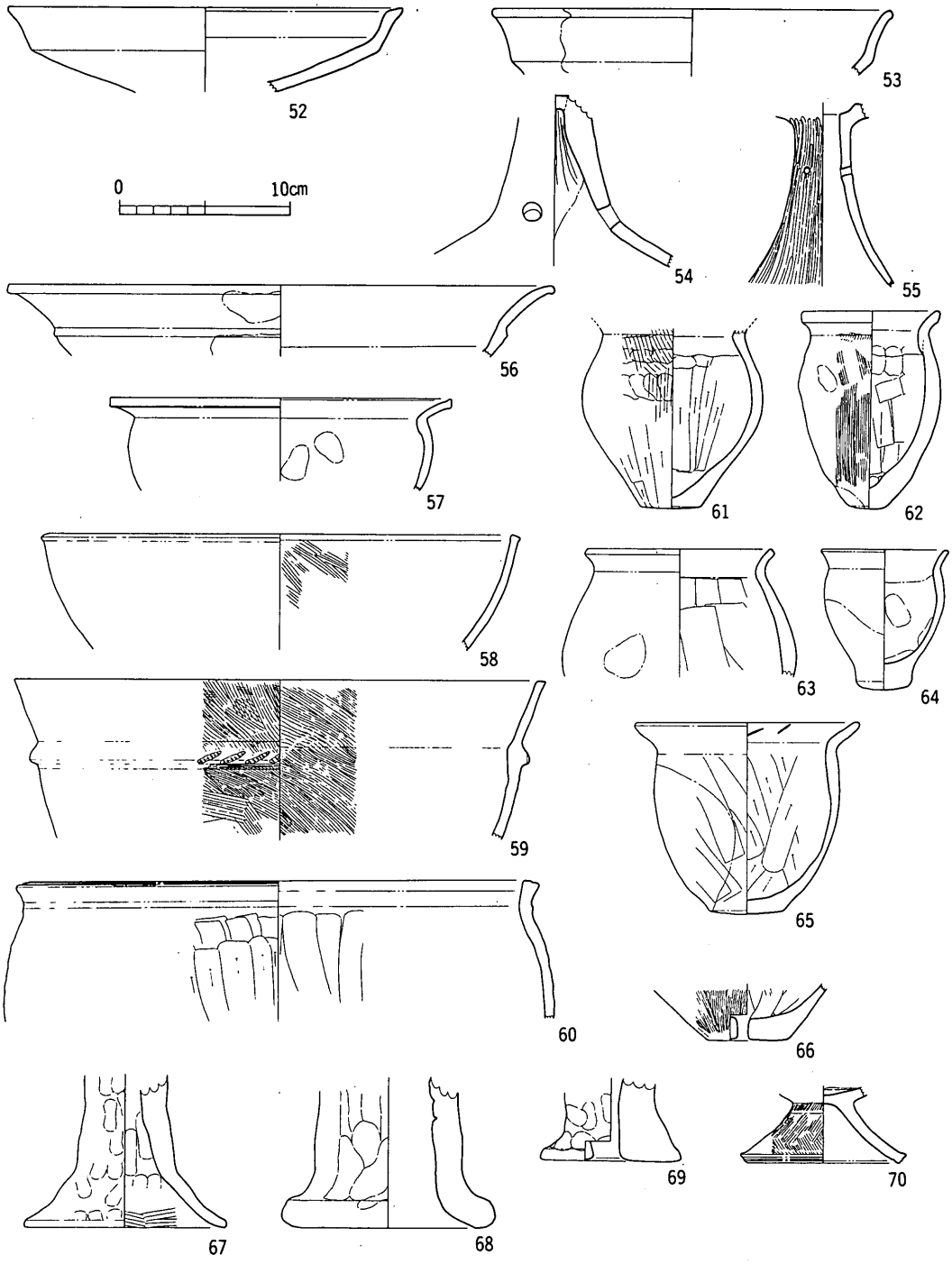
第142図　第６号集石墓伴出遺物実測図(1)



第143図　第６号集石墓伴出遺物実測図(2)



第144図　第６号集石墓伴出遺物実測図(3)



第145図　第６号集石墓伴出遺物実測図(4)

⑧ 第７号集石墓（ＳＴ17）（付図11）

１．立　地

11－Ｈ区において検出した。Ｂグループ東端に所在し，ＳＴ18との距離は約15mを測る。

２．形態と規模

遺存状態が悪く，石材は東西約４m，南北約3.5mの範囲に散在するが，封土が遺存しない。このため遺構の形態は判然としない。

また東北部と南西部に若干石材の集中する部分を検出することができた。いずれもほぼ基盤層直上に埋置されており，石材は径５～30cmの円礫が用いられている。この点がこの遺構の特徴であるがその配置に規則性は認められない。

３．構　造

(1) 上部構造

検出時に既に封土を有しなかったために，墳丘の構造については不明である。

基盤層直上に多量の石材が埋置されている点については前述したが，基底石あるいは外護列石と同様の性格をもつ配置は認められない。遺物の遺存状況は他と比して良好である。特に中央部において復元可能な遺物を検出している。

(2) 下部構造

基盤層直上の石材と遺物を除去した結果，東西約280cm，南北約210cmの範囲に厚さ約３～５cmの極めて浅い黒色粘質土の堆積を認めた。しかしながらこの堆積部分を人為的な遺構と決定する積極的な根拠は乏しい。したがって，埋葬施設としての性格を有するものか否かの結論が下せないことはもちろんである。黒色粘質土中からは，少量であるが，弥生土器の破片が出土している。周溝などの施設は認められない。

５．伴出遺物概要

基盤層直上において，遺存状態の良好な弥生土器を採取した。多くは破片であるが，摩耗の進度が弱いことから，遺構の構築時に既に破損した遺物を埋蔵したことが考えられる。ただし，集中の状態は希薄である。

復元の可能な遺物は遺構の中央部に存在することから，あるいはこの位置が墳丘の中央部に相当する可能性もある。使用された石材に中に砥石１点を検出することができた。

４．伴出遺物

(1) 弥生土器（第147，148図）

壺形土器

１は頸部から口縁部にかけて緩く外反するためにラッパ状の形態となる。口縁端部は横位のナデ調整により肥厚し，端面が凹面化する。２，３は１に比して口縁部の屈曲が急であり，水平に開口する。２の端部は内面の強いナデ調整により上端部が立ち上がる。３は肩部と頸部の接点の

屈曲が鋭い。また，1～3はヘラミガキ調整による丁寧な仕上げが特徴である。4は直立する頸部に内湾する口縁部が連続するが，屈曲点は不明瞭である。端部は肥厚して凹面を形成する。口径が頸部径に比して圧倒的に大きい。5は頸部が短く，二重口縁を有する。6のラッパ状の口縁部を有する点は1に共通するが，口径が頸部径を大きく凌ぐ点は4に似る形態と言えよう。8は頸部の形態が1～3に共通する。頸部と肩部の接点は緩く屈曲し，肩の張りが弱い。

甕形土器

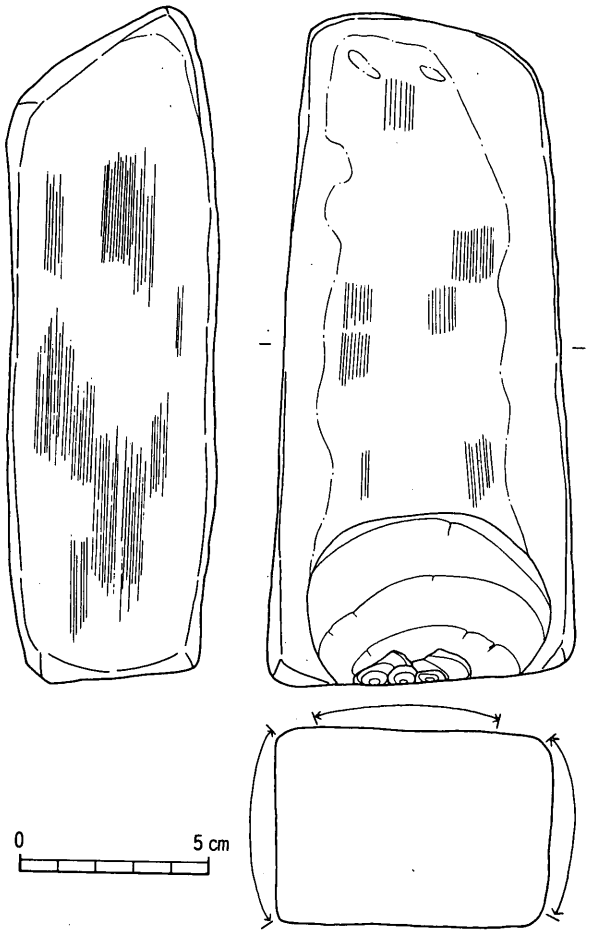
9の口縁部は緩く湾曲した後にく字に外反する。最大径が胴部中位に位置する。10～12，16は鋭くく字に屈曲する口縁部を有する。11の最大径は胴部上位に位置するが，他は総て9と同様の形態であり，胴の張りも弱い。成形技法の特徴としては11の胴部内面に縦位のヘラケズリ調整がみられる。14，15の口縁部は短く，屈曲が非常に弱い。18，19，22～24は最大径が胴部中位に位置する。このうち18，22，23は器高に比して最大径が小さい。これに対して19，24は最大径が器高に近似した値を示すか，あるいは凌駕する。このため球形に近い形態である。特に24はほぼ球体の胴部を有する。21の最大径は胴部上位に位置し，肩が張る。

高杯形土器

29の杯部は内外面にヘラミガキ調整が施されており，脚部外面にもその痕跡が認められる。

鉢形土器

30は口縁部がわずかに外反して端部が丸く成形される。31は椀形の小型品である。粗雑な造作のために歪曲しており，内外面には指頭圧痕を多くみることができる。外面のヘラケズリ調整が特徴的である。32はいわゆる「片口」の形態である。口縁部はく字に外反して端部を平面化している。造作は内面についてヘラミガキ調整によ

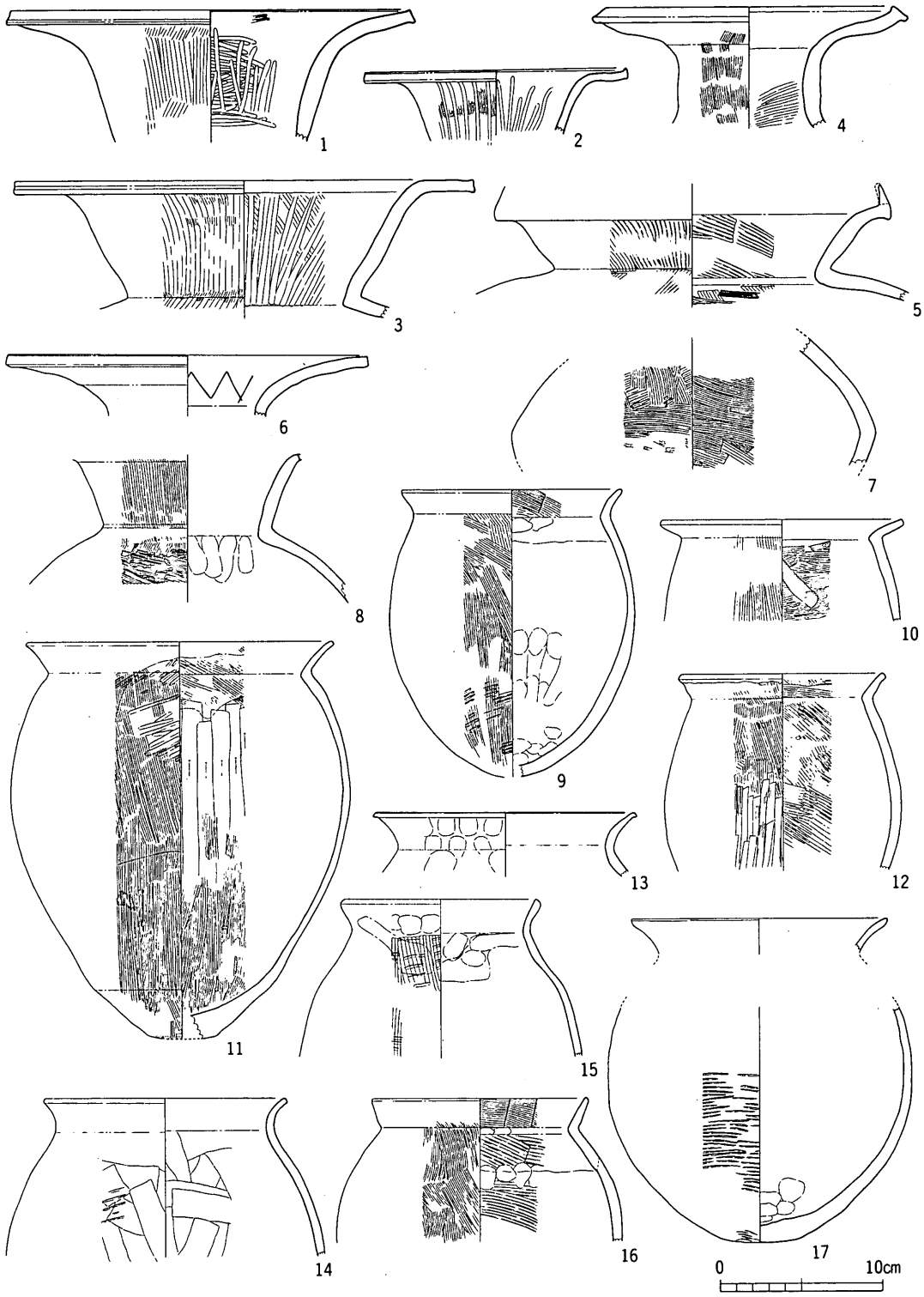


第146図　第7号集石墓伴出砥石実測図

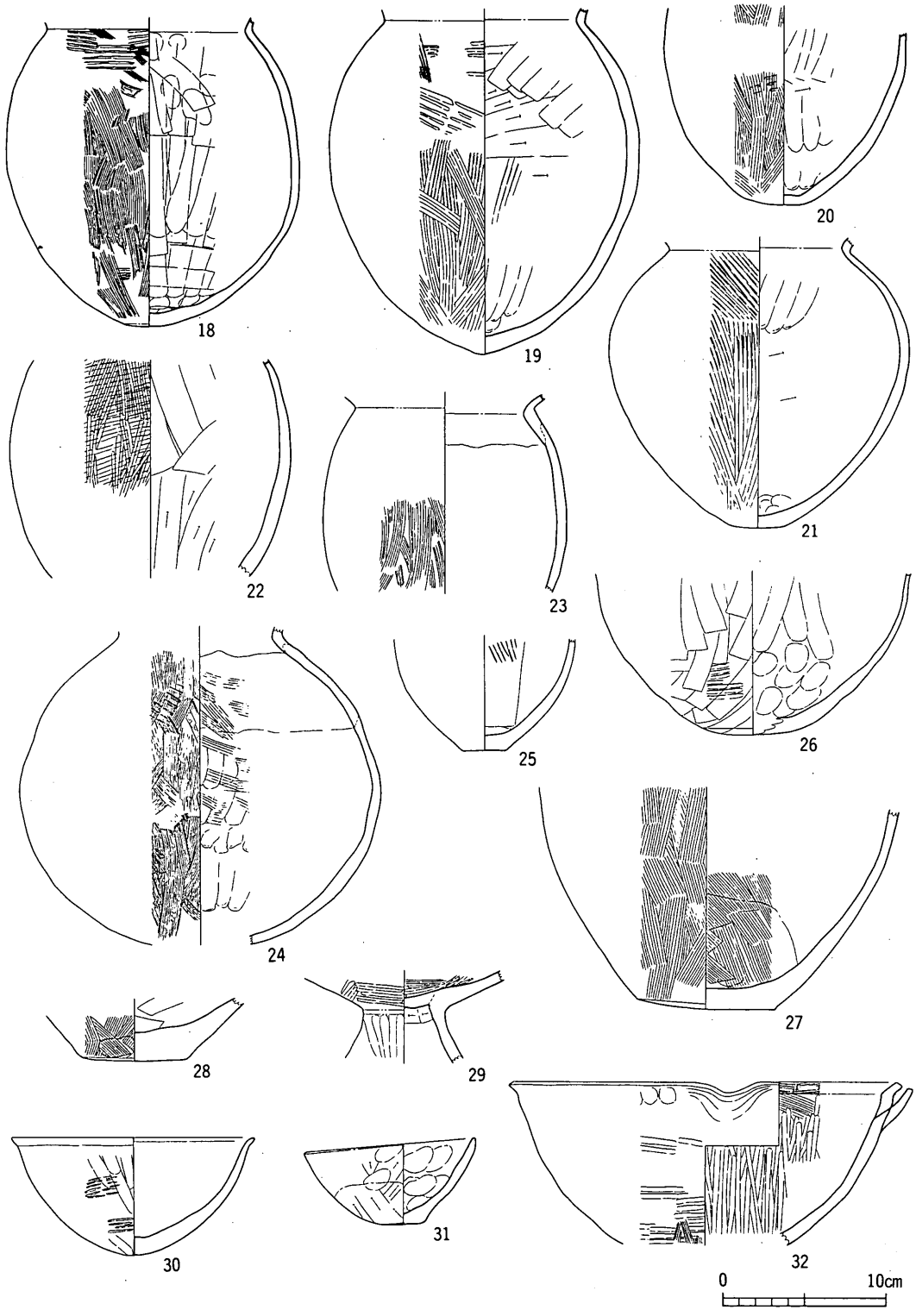
りとりわけ丁寧に仕上げられている。これは実用性を重視した意図によるものと考えられる。

(2) 石器（第146図）

封土除去中に砥石１点が出土している。方柱状の整った形態を呈することから砂岩の石材を人工的に整形したことが判る。３面に長軸方向の使用痕が認められる。



第147図　第７号集石墓伴出遺物実測図(1)



第148図　第７号集石墓伴出遺物実測図(2)

⑨ 第８号集石墓（ＳＴ18）（付図12）

１．立　地

調査対象地区の北東端部を占地しており，ＳＢ05の東南方約20mに位置する。周辺に同一の性格を有する遺構を伴っていないために一基のみで群を形成している。

なお墳頂部はⅢ層中に埋没していたことが確認されている。

２．形態と規模

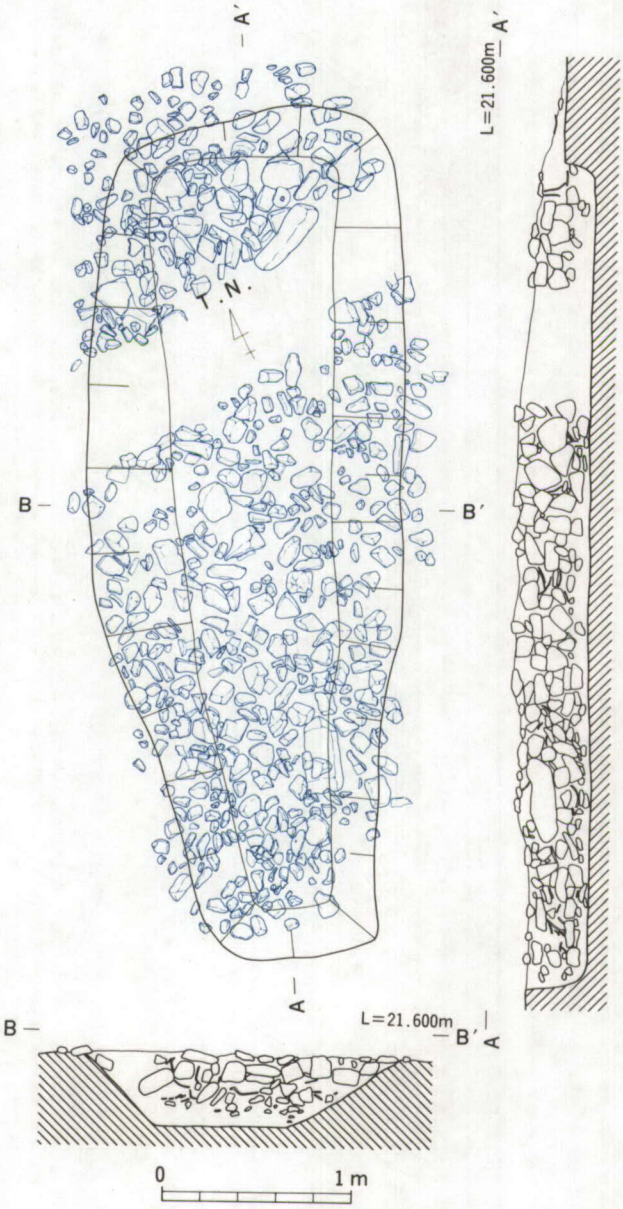
平面形態は不整形な長楕円形を呈し，長径1,750cm，短径750cm，最高部47cmを測る。これは全集石墓中最大の規模である。ただし，墳丘のほぼ中央部を鞍部として頂部が２ケ所に認められることからあるいは２基の墳墓が融合していることも考えられる。しかも3.構造(2)下部構造に報告する様に，各頂部の下層において各々に主体部が検出されたことも上記の推測の根拠の一つとなっている。しかしながら墳裾を明確にする列石，あるいは溝などが検出されなかったことから原形の復元は難しい。

３．構　造

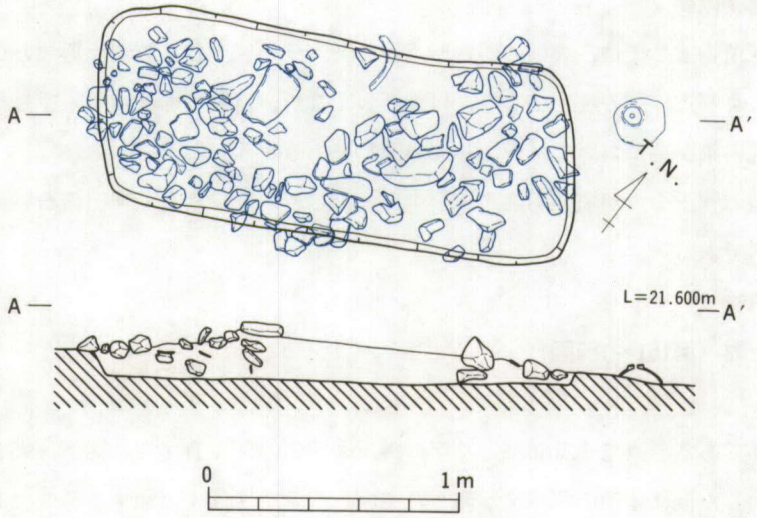
(1) 上部構造

墳丘は円礫と褐色のシルト質の土壌によって構築されており，石材中には若干ではあるが花崗岩角礫の混入も認められる。また赤変した石材が出土しているが，被熱によるものか否かは未確認である。

墳丘上面および封土中より出土した弥生土器は相当量にのぼる。特に北辺中央部における遺物の遺存状態が良好である。



第149図　第８号集石墓第１号主体部実測図



第150図　第８号集石墓第２号主体部実測図

(2) 下部構造

墳丘は最大幅約９ｍの帯状に堆積した黒褐色砂質土を主たる基盤としている。

下部構造としては上記の基盤層を掘削して構築された主体部と考えられる２基の土坑を検出することができた。東部に位置する大型の土坑を第１号主体部，西部の小規模な遺構を第２号主体部と呼称する。前者は墳丘東部の頂部直下，後者は西部の墳頂部よりやや北西部に離れた墳裾に近い位置に所在する。次に個々について報告をする。

第１号主体部（第149図）

土坑は不整形な隅丸長方形を呈し，特に南半部分の幅が北半部分に比して小規模な平面形態である。全長450cm，最大幅166cm，最深部42cmを測り，壁面部は４辺ともに約45°の角度で外傾している。床面はほぼ水平に掘削されている。中心軸はＮ－24°－Ｅの方向性を有する。

埋土は褐色砂質土であり，最大40cmの円礫を多量に混入している。

埋土中に包蔵されている弥生土器は二次的に被熱されて赤変した高杯形土器１点と鉢形土器１点を除き，総て小破片である。

第２号主体部（第150図）

規模は全長193cm，最大幅78cm，最深部10cmである。両短辺が長辺に対して直交しないために歪んだ隅丸長方形の平面形態を呈する。

埋土は上位に砂岩円礫を多く包蔵する。

伴出した遺物は総て弥生土器であり，床面から遊離した位置から出土している。

4．伴出遺物概要

特筆すべき遺物としては，大型の器台形土器，ミニチュア土器，製塩土器などが出土している。

また封土および主体部の埋土中より，打製石包丁2点，打製削器2点を入手したが，これらの打製石器は他の集石墓においては伴出しない遺物である。

さらに小型の管玉1点が墳丘南部の礫群中に埋没しており，集石墓伴出の石製装飾具類としては唯一の資料である。

5．伴出遺物

(1) 弥生土器（第151～157図）

壺形土器

1は大型品である。直立する頸部とく字に外反する口縁部を有する。端部は大きく肥厚し，広い端面を造出した後に4条の凹線文が施されている。2～8は1に類する形態であるが，頸部が小型である。また口縁部はより水平に開口する。4，5，7は端部に広い面を有し，ヘラ描鋸歯文，凹線文で加飾される。9，10は口縁部と頸部との屈曲部が不明瞭であり，ラッパ状に外反する。11～13は二重口縁を有する。特に11については精巧な造作である点と，厚い器壁を有する点から異質な土器と言えよう。14～16は口縁部が直線的に広く開口する大型品である。端部を大きく肥厚した後にヘラ描鋸歯文，円形浮文を施した装飾性の強い遺物である。17は口縁部が外反して立ち上がり，二重口縁を成す。18，19に共通する特徴は口縁端部を肥厚することにより二重口縁状の外観を呈する点である。しかしながら頸部の形態は異なる。20～22についても二重口縁を有する。口縁部が内傾し，頸部の短い形態である。遺存状態は20が最も良好であり，ほぼ球形の胴部を有する大型品である。23は直立する頸部と広く水平に開口する口縁部から成る。24～26は頸部が直立し，口縁部は緩く外反する。共に小型品であるが，24の胴部は上位に最大径があり肩部が張る。底部はやや上げ底気味の平底である。27は口縁端部を垂下して広い面を造出する。口縁部が大きく開口する大型品であると考えられる。28の口縁部は直線的に開口する。端部を肥厚して2条の凹線文を施す。29はわずかに口縁端部が外反して立ち上がるために二重口縁の形態を呈する。頸部の位置が不明瞭な器形である。30，31は内傾する短い頸部とく字に外反する口縁部を有する。特に30は口縁部，頸部の内外面に横位のヘラミガキ調整が施されており丁寧な造作である。32の水平に開口する口縁部形態は23のそれに類するものであろう。頸部は直線的であり，内傾する。33は頸部から口縁部が緩く湾曲し，ラッパ状の口縁部を有する。頸部の遺存状態は悪いが，36の長頸形の形態が考えられる。34は28同様長い口縁部を有することを特徴とするが，28に比してその湾曲が大きい。口縁部と頸部の屈曲部は明瞭であり，内面に鋭い稜線を形成する。35は口縁部から胴部にかけて緩い孤を描く。35，37は胴部内面のヘラケズリ調整と外面のヘラミガキ調整の痕跡が特徴である。37は肩の張らない形態が考えられる。39，40は大型品であるが，遺存状態が悪い。41，42は胴部の最大径が中位に位置し，胴部高を凌ぐ形態である。口縁部と頸

部を欠損しているが，33，36に類する形態が考えられよう。

甕形土器

43，44は口縁部がく字に外反し，端部を横位のナデ調整により凹面化する。45～49は口縁部内面に横位に強いナデ調整を施した結果，上端部が突出する。このため受け口状の形態を呈する。成形および調整の技法上の特徴は肩部内面の指頭圧痕と胴部内面のヘラケズリ調整である。47～49は45，46に比して肩部が内湾する形態であるために最大径は上胴部に位置する。50，51は大型品である。口縁部はく字に鋭く外反する。52，53は特に口縁先端部を水平に屈曲するために内面に稜線を有する。頸部以下の形態は前2者と同一である。54～60についてもく字に外反する口縁部を有する点は上記の遺物と共通する特徴である。端部を肥厚して端面は凹面化する。57，59，60の口縁部はより水平に近く屈曲する。61，62は胴部の最大径が口径を超えない形態である。63が最も肩が張る形態である。64についてはあるいは鉢形土器に類することが考えられる。器壁が厚く，内面に指頭圧痕を多く残す異質な製品と言えよう。65は最も口縁端部が肥厚する。67の特徴は胴部内面のタタキ目調整と底部内外面のヘラケズリ調整の痕跡である。口縁部は「叩き出し」の技法による成形である。

底部は屈曲の弱い平底（68，73，78～80，82～85）と突出する平底（69～71，74，75）の2種類に大別される。

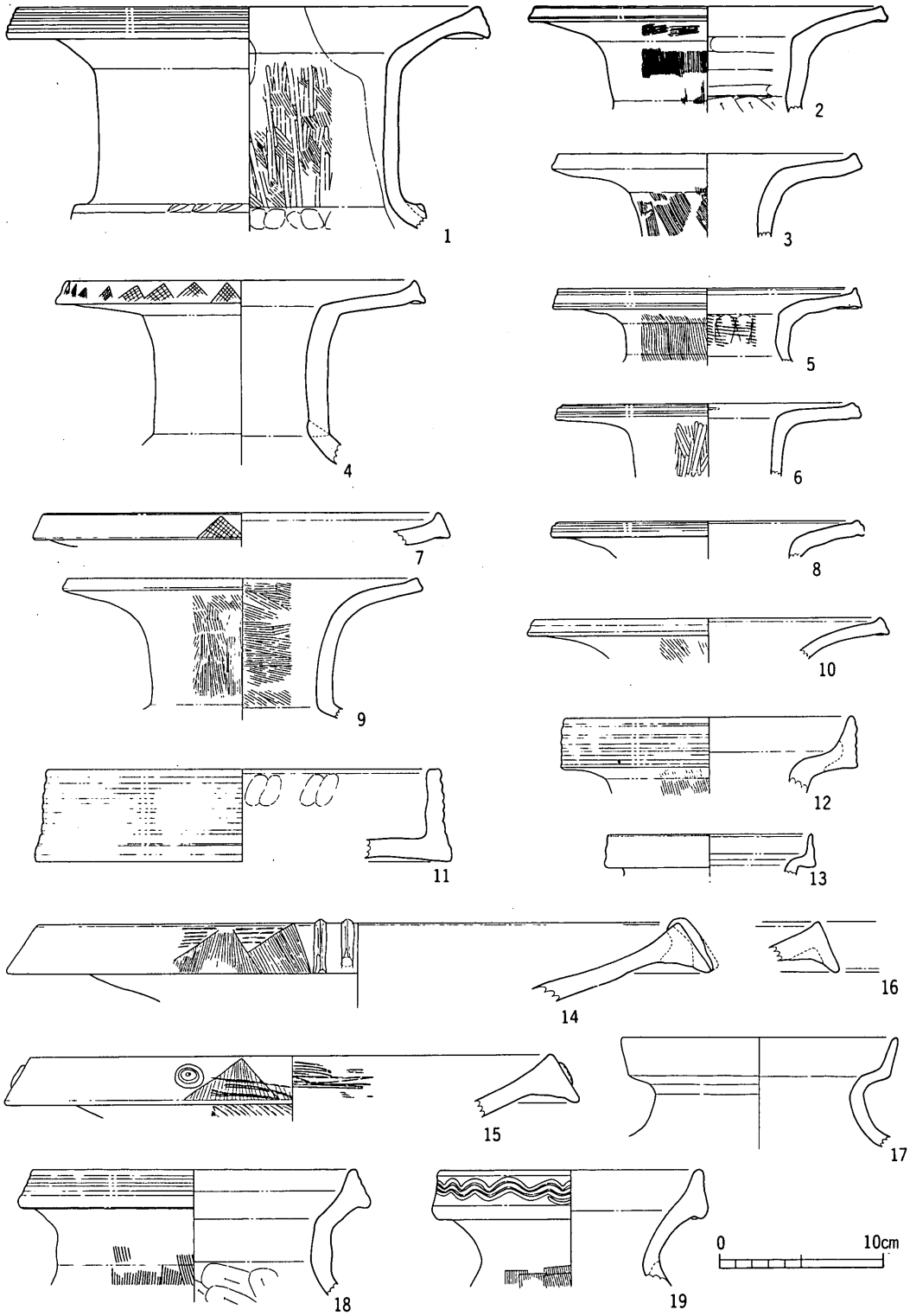
高杯形土器

98～100，104～108は外反する短い口縁部を有する。前者が丸い端部を有するのに対して，後者は端面を形成しており，口縁部の湾曲も鈍い。杯部の内外面にヘラミガキ調整が施され，丁寧な造作である点は共通する特徴である。102は杯部の屈曲部以上の部位と屈曲部以下の部位の長さがほぼ等しく，口縁部が直線的な形態である。深い杯部を有する点も注意しなければならない。103，106の口縁部の形態は93に類似する。屈曲部が突出する形態を呈する点が特徴である。107は屈曲部以上の部位が長大化しており，これによって深い杯部を有する。110は皿形の浅い杯部を有する精巧な資料であり，明らかに他の資料とは系譜を異にしている。

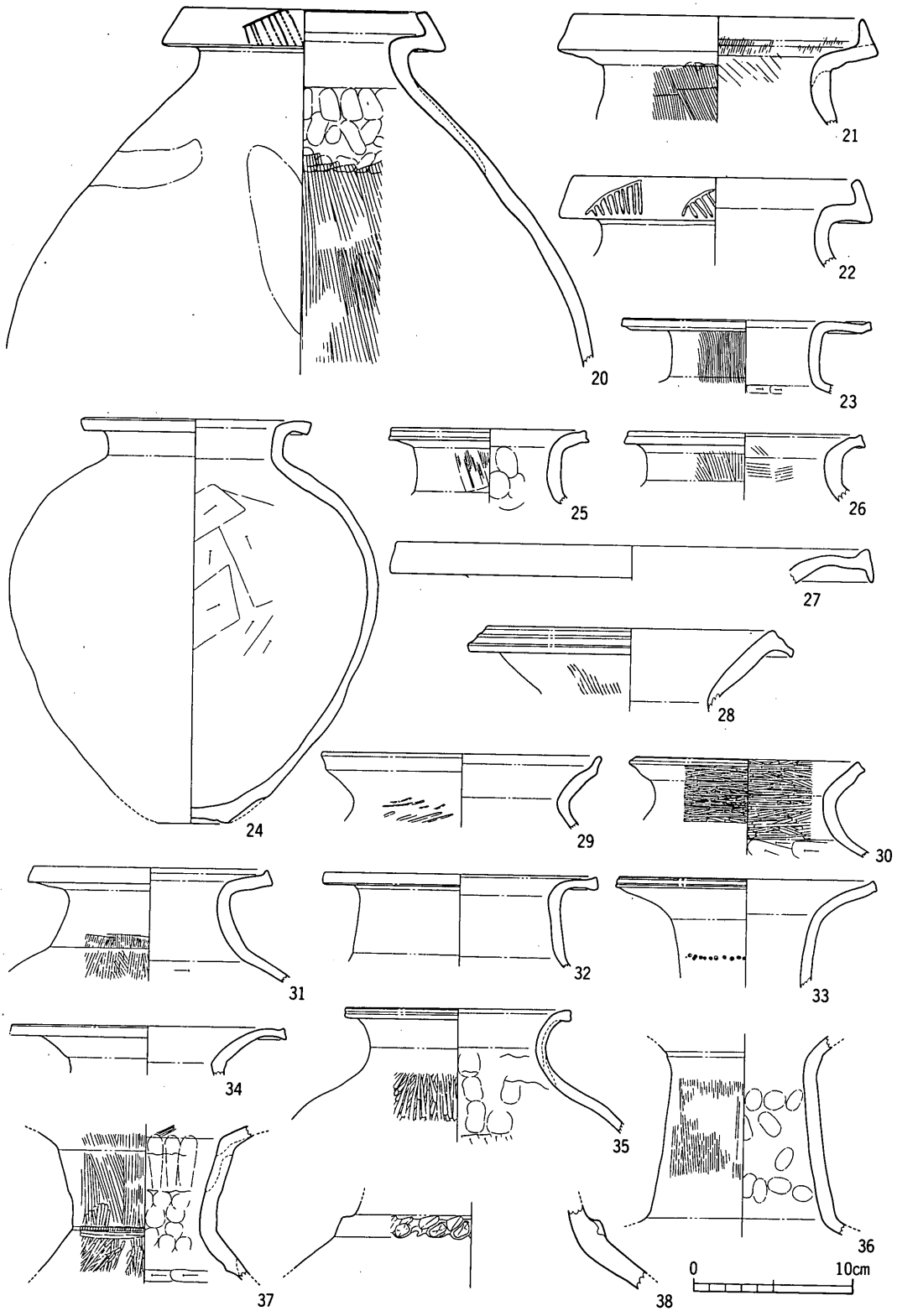
脚部は屈曲部を有する遺物（115，123，126）と有しない遺物に大別できよう。脚端部は総て肥厚して端面を形成する。111は端面に2条の凹線文の痕跡をみることができる。

鉢形土器

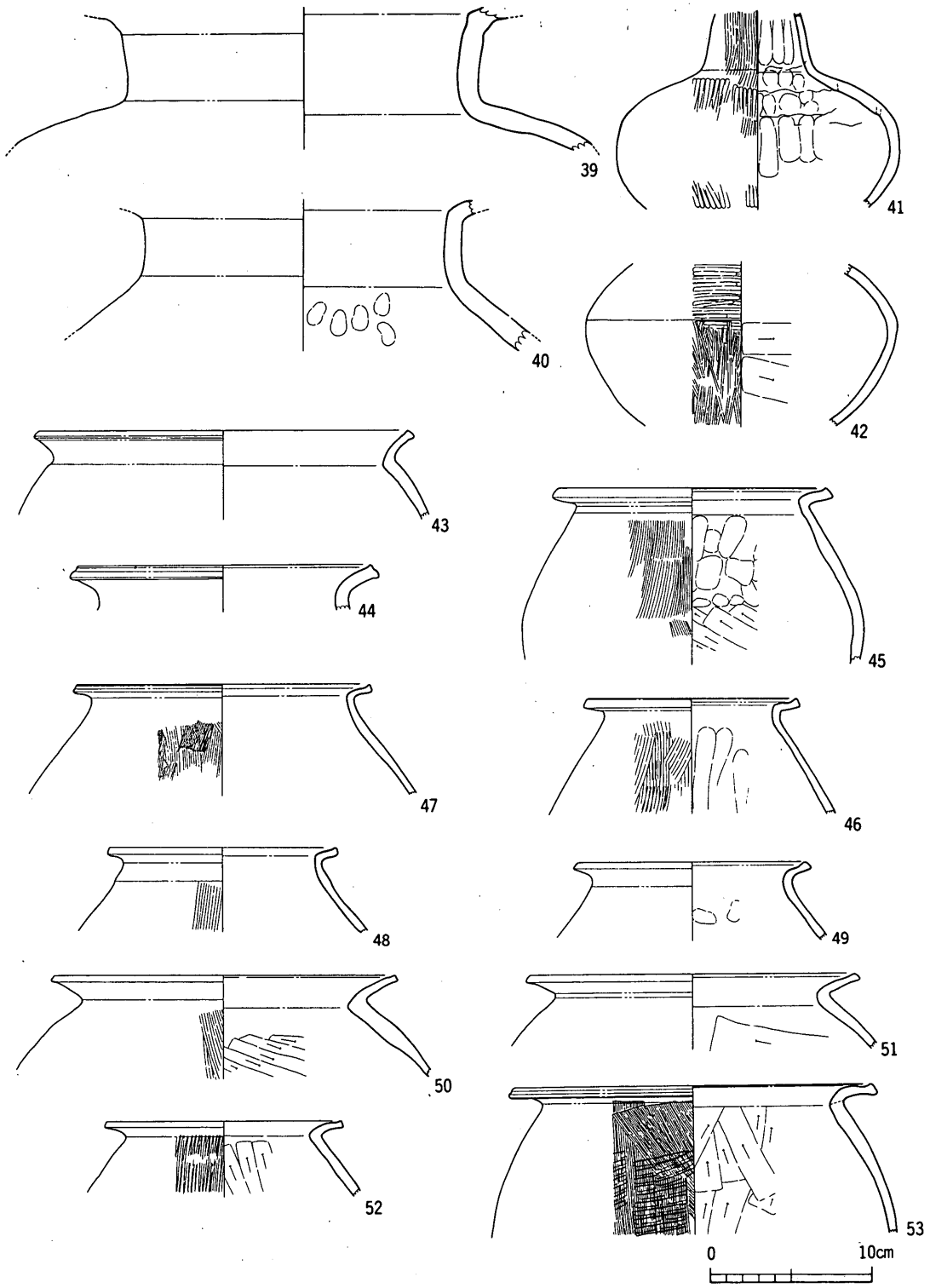
88～91は口縁部がく字に外反し，端部がナデ調整によって凹面化する。胴部上位に最大径があり，口径に近似した値を示す。89を除き他は大型品である。92，93を鉢形土器と決定する根拠は少いが，92の口縁形態は弥生時代中期後半から後期前半の資料に類例がみられる。(註5) 93は口縁部内面の段が顕著である点と内面にヘラミガキ調整が丁寧に施されている点が特徴である。



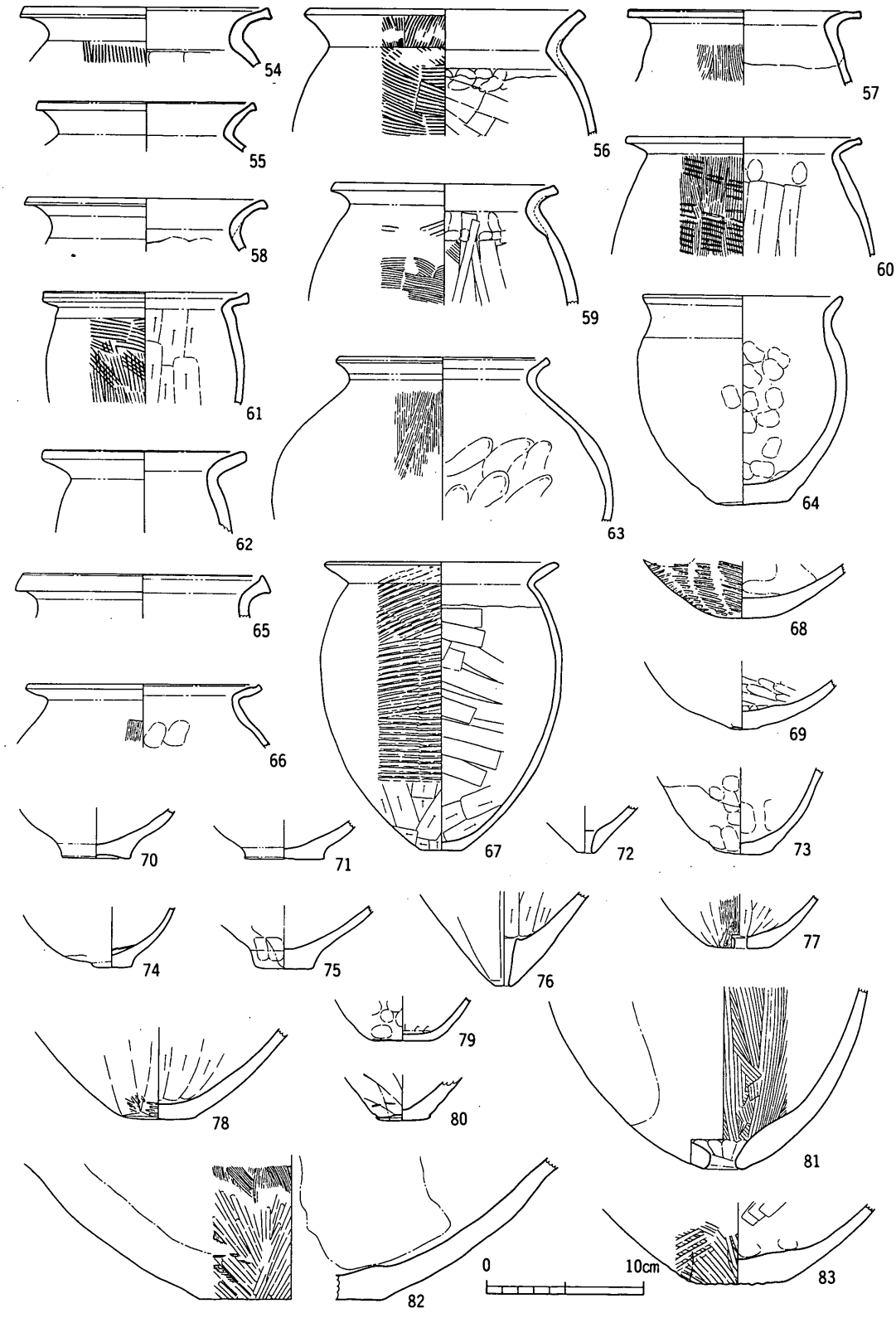
第151図　第８号集石墓伴出遺物実測図(1)



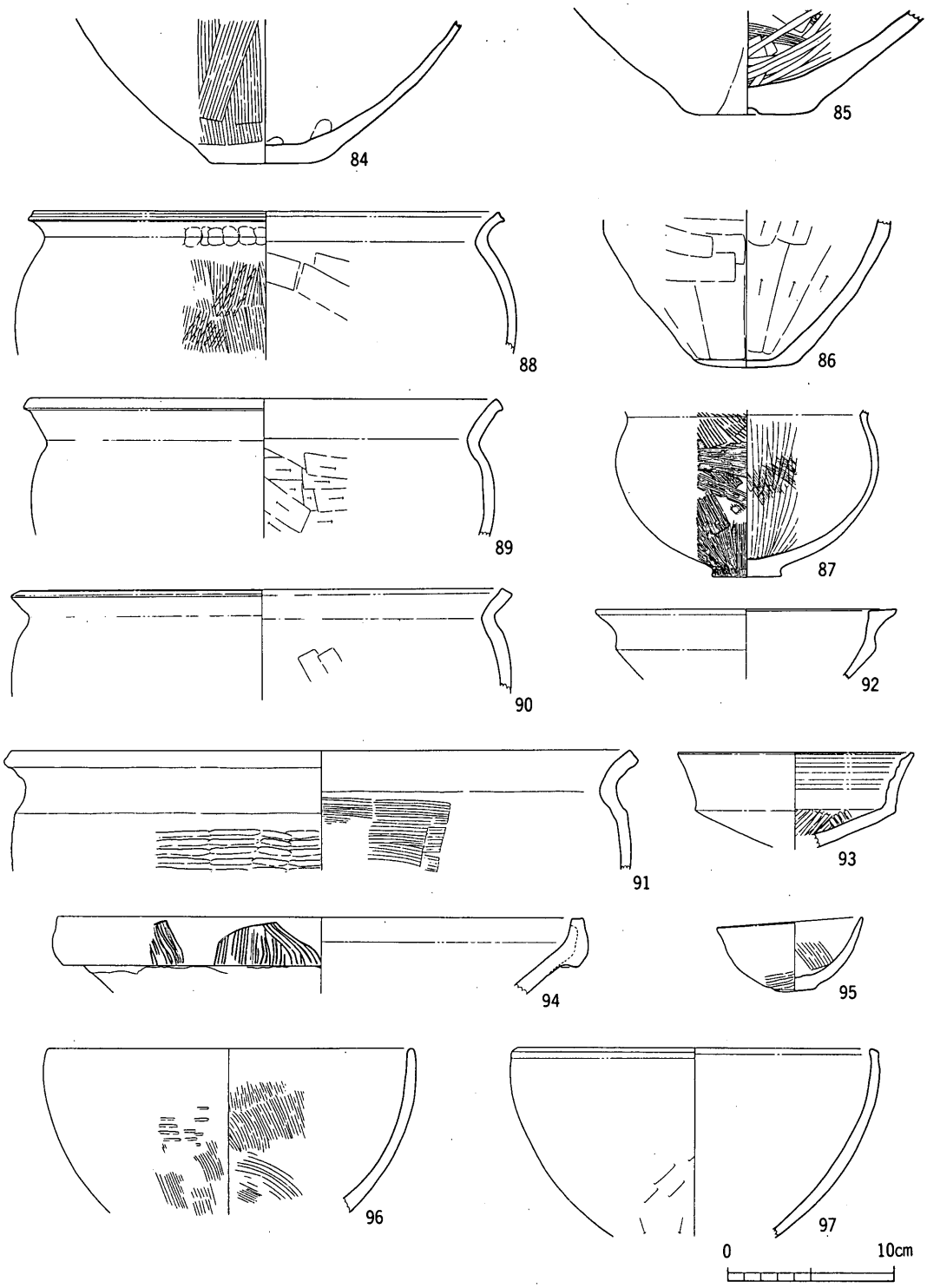
第152図　第８号集石墓伴出遺物実測図(2)



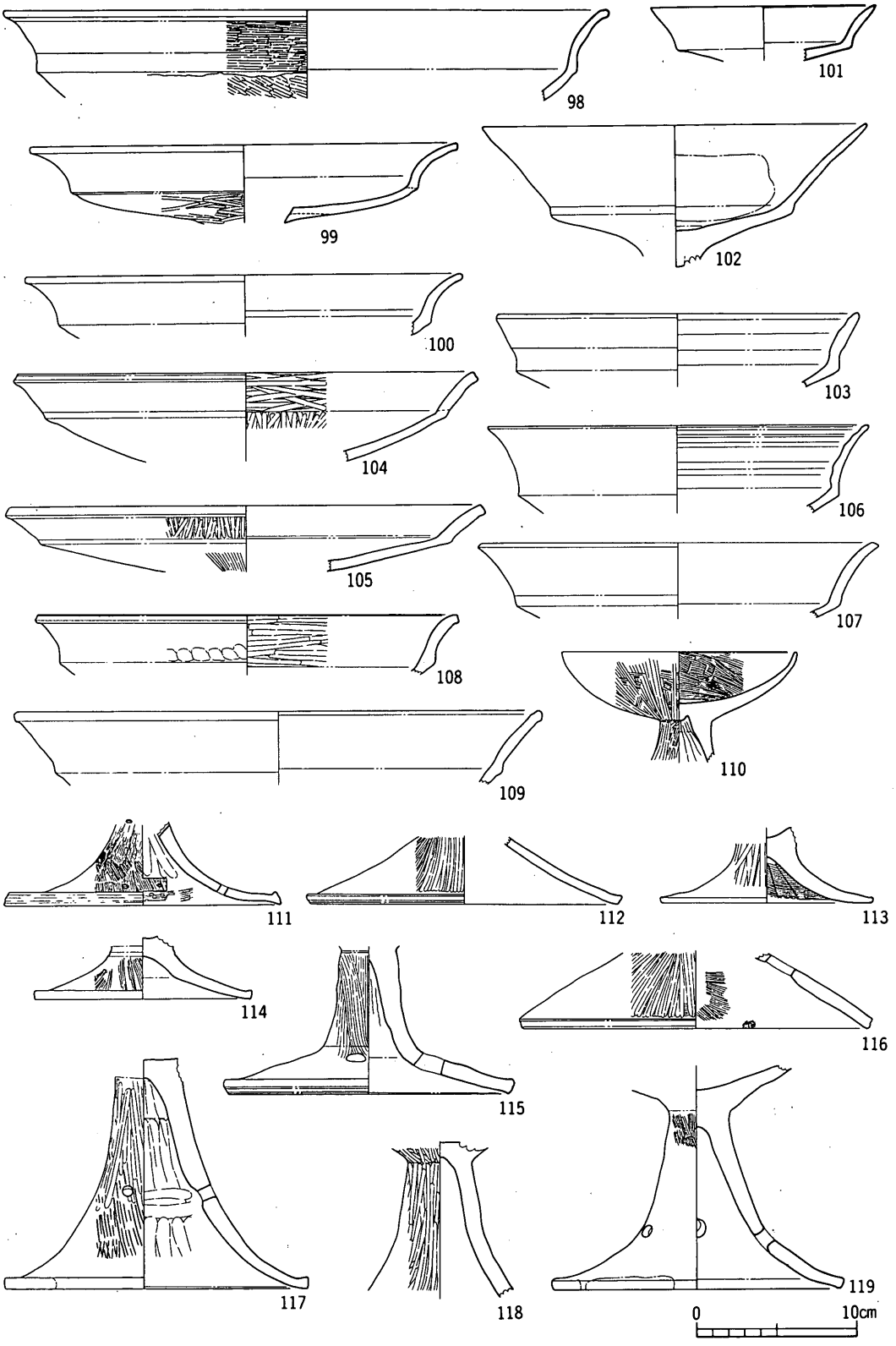
第153図　第８号集石墓伴出遺物実測図(3)



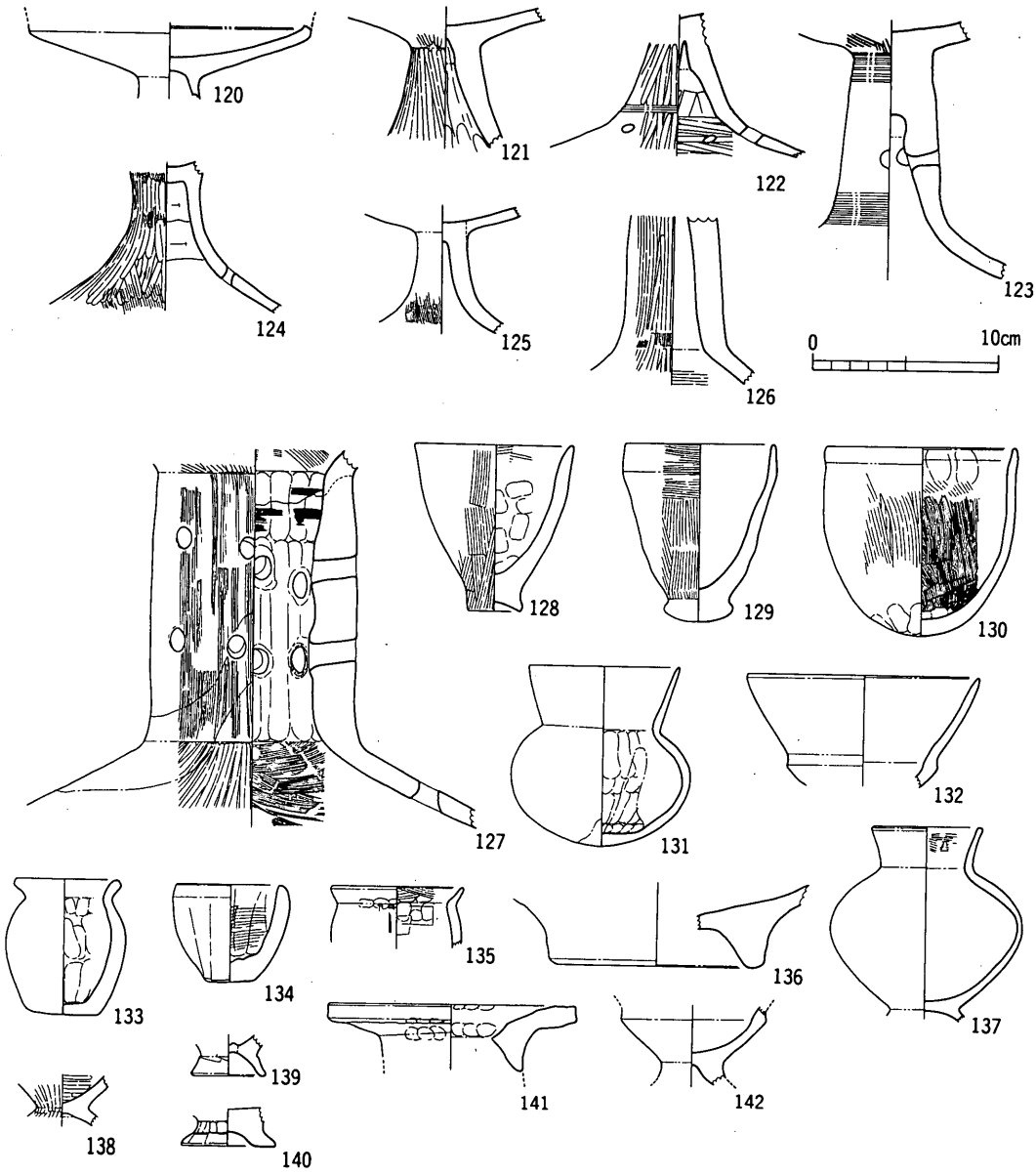
第154図　第８号集石墓伴出遺物実測図(4)



第155図　第８号集石墓伴出遺物実測図(5)



第156図　第８号集石墓伴出遺物実測図(6)



第157図　第８号集石墓伴出遺物実測図(7)

その他の器種

72，76，77，81は単孔式の甑形土器の底部である。総て焼成前の穿孔による。

127の器台形土器は直立する胴部はハ字に大きく開く脚部を有する。透孔を多く穿つ資料である。

128～130は小型の鉢形土器である。128，129の胴部の形態に類似点が認められるが，底部の形態が大きく異なる。特に129についてはその底部形態のために単独で固定することは難しい。130は「砲弾」形の形態を呈する。

131，137は小型の壺形土器である。前者はやや内湾する長い口縁部を有し，胴が張る器形であ

る。なお，同器種については後出する小型丸底壺(註6)の前段階の形態と考えられるのではなかろうか。後者の特徴は脚台を有する点である。また最大径が口径を大きく凌ぐために肩の張りが大きい。

133～135，138は非実用的な性格が考えられる小型品である。特に133，134は厚い器壁であることを特徴とする。

139，140は製塩土器の脚台部であり，Ⅰ－5類に分類される。指頭圧痕を多く残す粗い造作である。

136，141については原形を復元することが難しい。前者は底部状の器形であり，後者は器台形土器あるいは支脚形土製品の形態である。しかしながら共に機能，使途を決定する根拠はない。

132の下部構造は142の形態が考えられるのであろうか。

(2) 石　器（第158～160図）

1は大型の砥石である。最大長29cm，最大幅22cm，最大厚5.2cmの板状の形態であり，短軸方向にやや湾曲する。使用痕が広い2面に認められることから研磨による湾曲が考えられる。研磨は主に長軸方向に行なわれている。

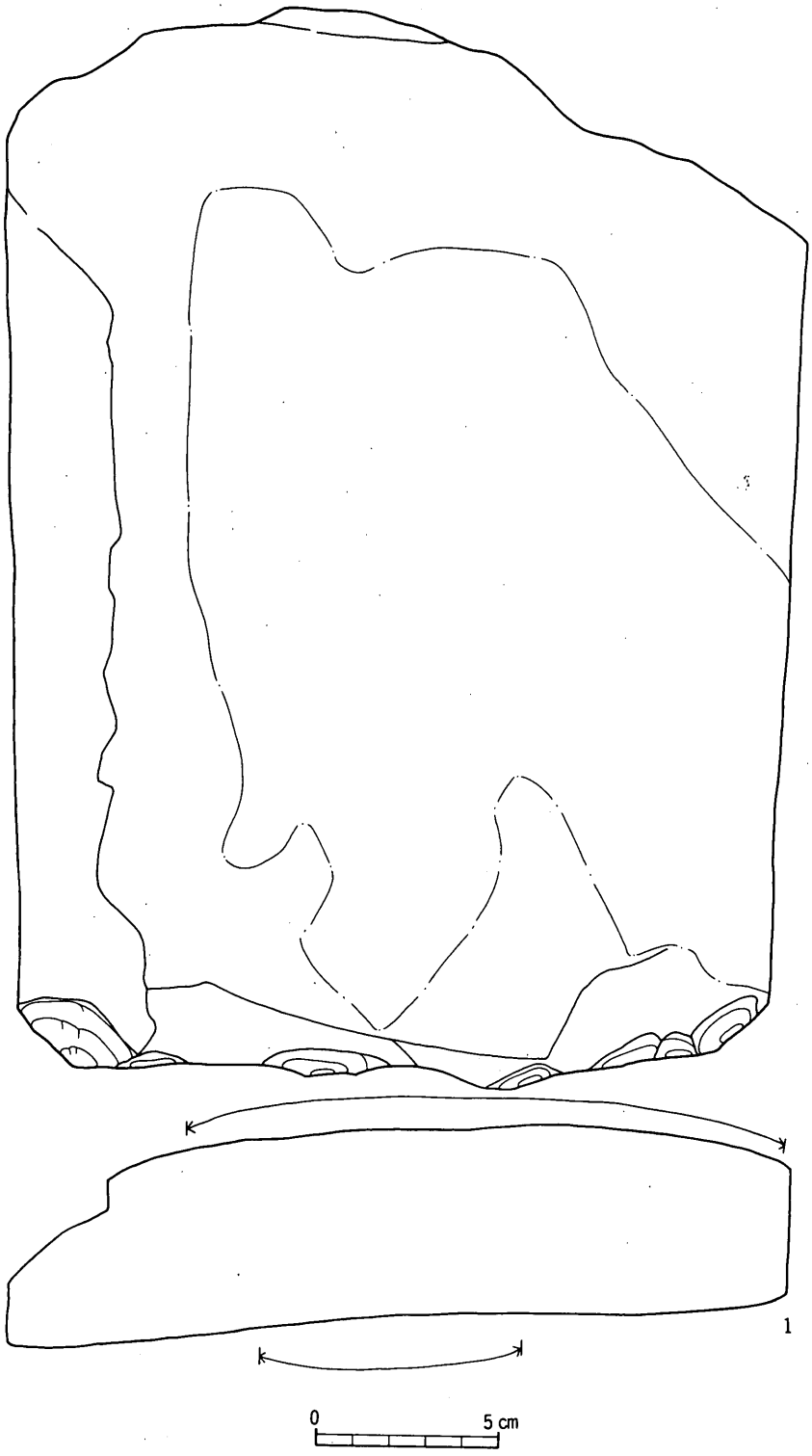
2の資料については機能，使途共全く判然としない。未加工の砂岩の自然石に孔を穿ったものである。

3については抉り入り打製石包丁の一端部と考えられる遺物である。中央部がくびれた形態であるのは両側縁が刃部として使用されたことにより摩耗したためであろう。

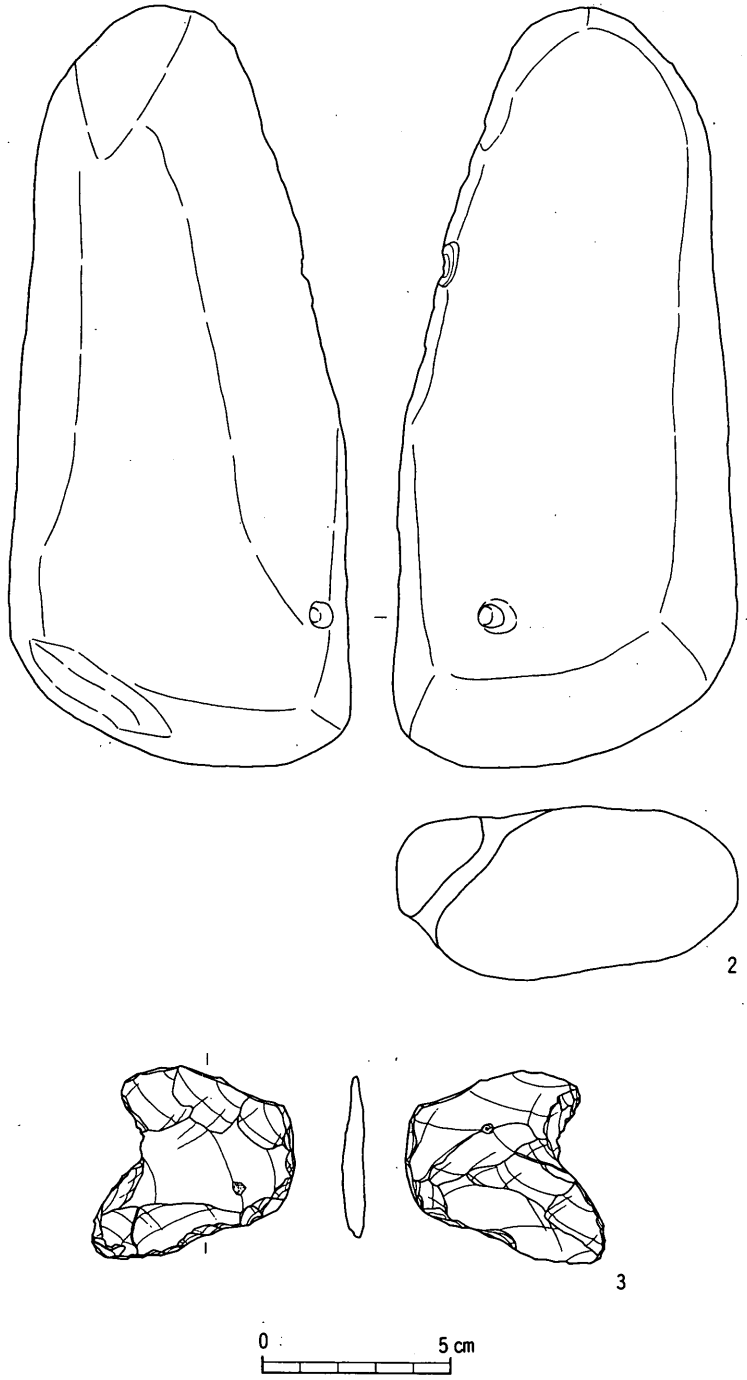
4，5は打製の削器である。いずれも円礫を原材料としていることが自然面に残された湾曲から判る。4はほぼ正三角形に整形されており，一辺に両面から調整剥離を施すことにより刃部としている。しかしながらエッジ部分の角度は鈍い。これは素材の厚みに起因すると考えられる。さらに他辺において一方向から加工された部分が認められるが，刃部として機能するか否かは明確でない。5の形態もほぼ正三角形を呈する。一辺を刃部として使用したことが摩耗の状態から判るが，既に調整剥離の痕跡は一部に認められるのみである。

6は長方形の形態の結晶片岩製の抉り入り打製石包丁である。片面には自然面を残す。刃部は両面からの調整剥離によって成形されているが，素材の性質上細かい加工は認められない。また既に実用による「つぶれ」が著しい。背部についても調整を施して薄く仕上げようとする意図がみられるが，やはり素材の性質に制限されて完全ではない形跡がうかがえる。さらに両端部の抉り部分の摩耗については紐擦れによることが考えられる。この点は磨製石包丁の穿孔と共通する性格である。

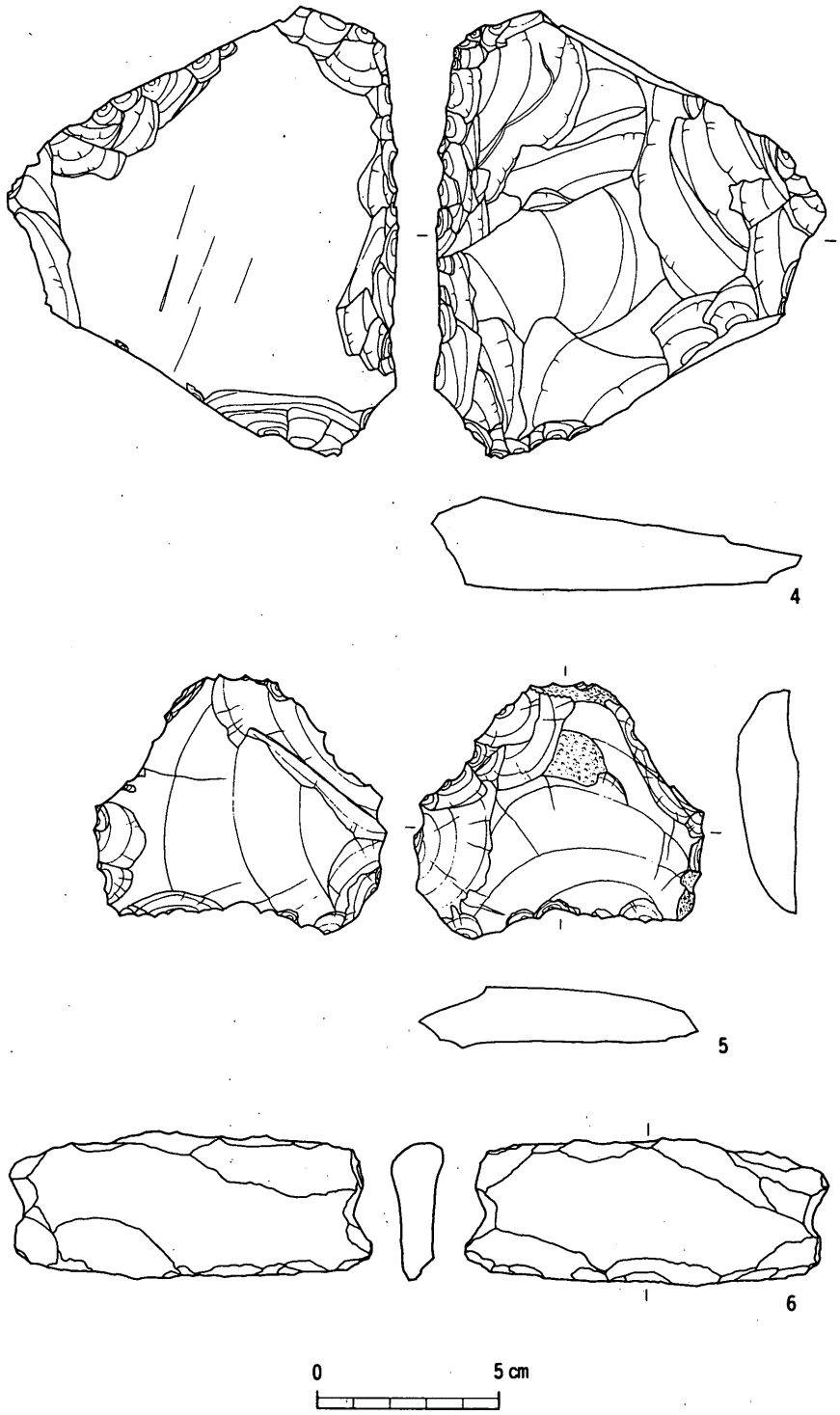
なお4，6が第1号主体部，5が第2号主体部より出土した以外は封土中からの出土である。



第158図　第８号集石墓伴出石器実測図(1)



第159図　第８号集石墓伴出石器実測図(2)



第160図　第８号集石墓伴出石器実測図(3)

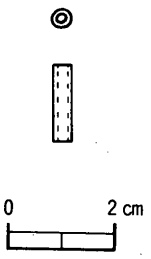
(3) 鉄製品（第118図6，7）

6は鉄鏃の茎部である。ほぼ円形の断面形態であり，基部ほど細い成形である。鏃身部は最大幅1cmが遺存する。

7の器形は全く判然としない。

(4) 石製品（第161図）

封土上位より淡緑色の碧玉を原材料とした管玉が1点出土している。全長9㎜，直径2㎜，孔径1㎜の小型品である。



第161図　第8号集石墓伴出管玉実測図

⑩ 第9号集石墓（ＳＴ19）（付図13）

1．立　地

調査区南端部の10・11－Ⅰ区の区画境において検出した。ＳＴ11同様Ⅵ層を基盤とするが，封土を有しないために，Ⅴ層中に埋没している。

Ｂグループに属し，最東端部に位置する。

2．形態と規模

東西約7.5m，南北約5.5mの範囲に円礫と弥生土器が散在しているが，遺物は南部と東部にのみ集中部が認められる。石材の散在状態から推測される旧状は，北東部の礫群の縁辺部約450cmの直線部分を一辺とする方形のプランである。したがってこの推測に誤りがなければ，遺構の南，北，西部の縁辺部は既に失われていると考えられる。

検出された遺構は総て基盤層直上に遺されていたため，封土の有無については明らかでない。

また，上記の復元によると南部の土器群が遺構の中心部に位置することが判明する。さらに東部の土器群は縁辺部外に存在しており，ＳＴ14に検出された土器群と共通点が見出せる。

なお，使用されている円礫は最大径5～30cmを測る。このうち大規模な石材は，北，東縁辺部に多く認められる。あるいは，構築時に，大規模な石材を縁辺部に集めた意図によるものであろうか。しかしながら，この点については，他の部分が判然としないために明らかにすることが困難である。また，標石と考えられる石材は認められない。

3．構　造

(1) 上部構造

墳丘を有しない点と基盤層直上に夥しい石材と弥生土器片を有する点が特徴である。もちろん前者については後世に破壊されたことが考えられるが，後者はＳＴ16，17に共通し，量的には圧倒的にこれらを凌ぐ。

基盤層直上において検出した石材の配置については，北，東の縁辺部に大規模な石材が配置されている点を除くと，他に規則性は認められない。

(2) 下部構造

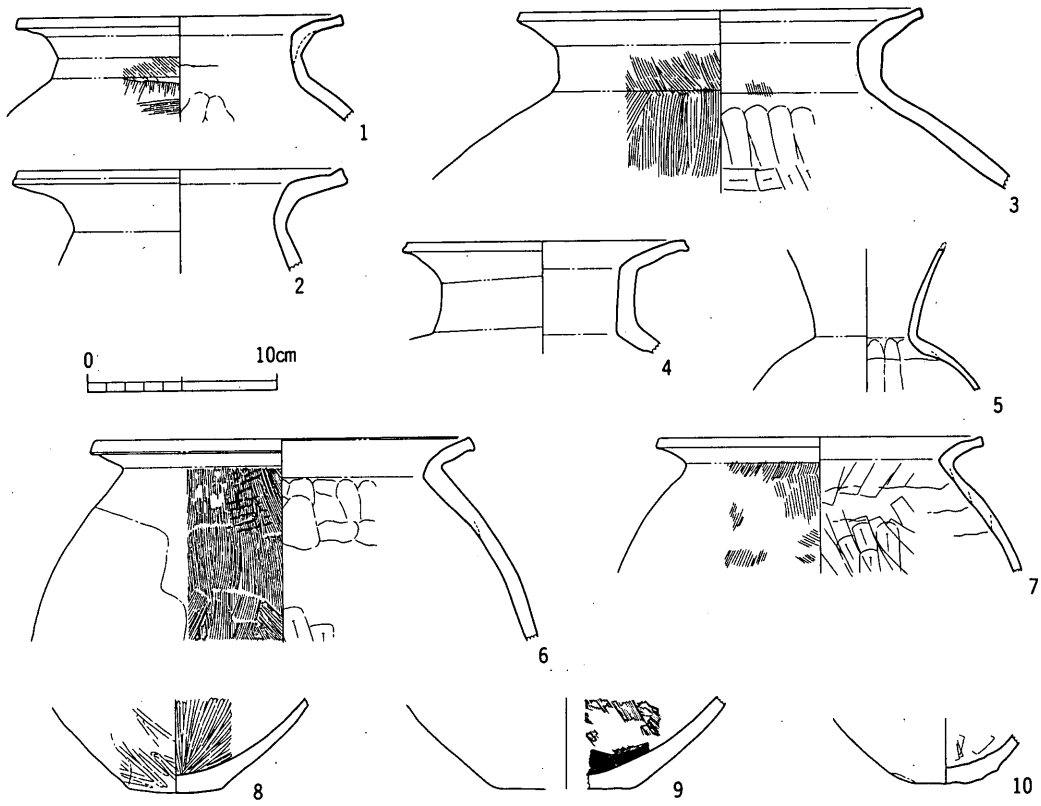
基盤直上に存在している石材と弥生土器を除去した結果，遺構は検出されていない。

また，土坑，周構などの施設は有しない。

4．伴出遺物概要

覆土から出土した遺物には，棒状鉄製品1点がある。基盤直上からは，多量の弥生土器が出土しており，特に土器群の遺存状態が良好である。

5．伴出遺物



第162図　第9号集石墓伴出遺物実測図

(1) 弥生土器（第162図）

図化の可能な遺物は少い。

壺形土器

1，2は口縁部に屈曲点を有する形態である。端部はやや肥厚するが，内面のナデ調整により特に上端部が突出する。3は直立する短い頸部と外反して端部を細く成形する口縁部を有する。胴の張る大型品である。5は器壁を薄く仕上げる。ラッパ状に開口する口縁部が特徴である。

甕形土器

6，7の口縁部はく字に外反し，端部をやや肥厚する。

底部は平底（8，9）と丸底(10)が認められる。

（註）

1　秋山忠他『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅴ）西方遺跡・大浦浜遺跡・羽佐島遺跡』，1982年。による。

2　都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第３号，1967年。による。

3　都出比呂志氏は「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』第20巻第４号，1974年。において「口縁叩き出し手法」が畿内第５様式の新しい階段に始まることを明らかにしている。

4　紫雲出山遺跡出土のＣタイプの高杯形土器に類例がみられる。小林・佐原他1964年。

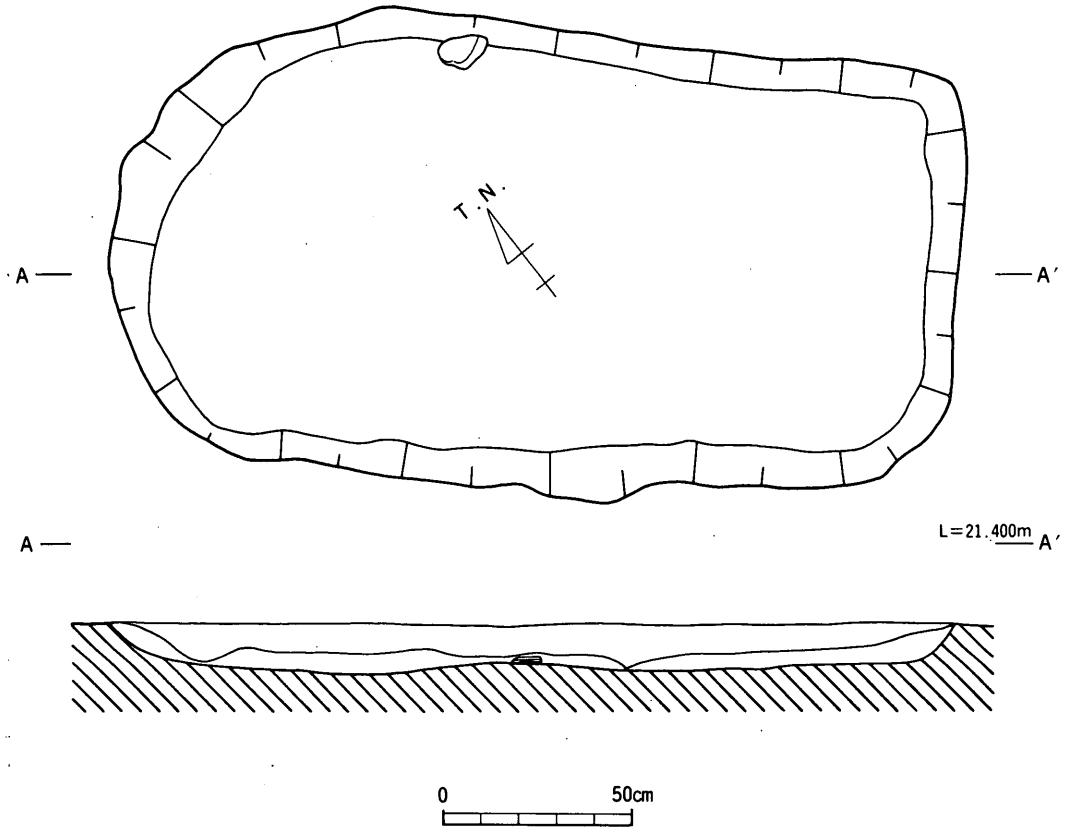
5　香川県においては紫雲出山遺跡（小林・佐原他1964年。），末則古墳北端ピット（松本他1983年。），高松市葛谷遺跡（小西正行・薦田耕作・松野一博他『香川県埋蔵文化財調査年報・昭和58年度』，1983年。）などに類例がある。

6　真鍋昌宏氏は香川県における小型丸底壺の出現を大浦浜Ⅲ期（畿内布留式併行期）に比定されている。秋山他1982年。参照。

4．土坑墓

① 第１号土坑墓（ＳＴ20）（第163図）

15－Ｉ区の第２号集石遺構を形成する円礫と土器片を除去した後に同一遺構面において検出した。平面形態は，北西小口部分が孤を描くが，ほぼ隅丸長方形であり，長軸方位はＮ－50°－Ｗである。規模は220×120cm，深さ14cmを測る。壁面は緩やかに傾斜し，床面は水平であるが小規模な凹みを有するために必ずしも平坦ではない。床面直上には遺物は存在しておらず，埋土中から弥生土器の小片が出土しているのみである。

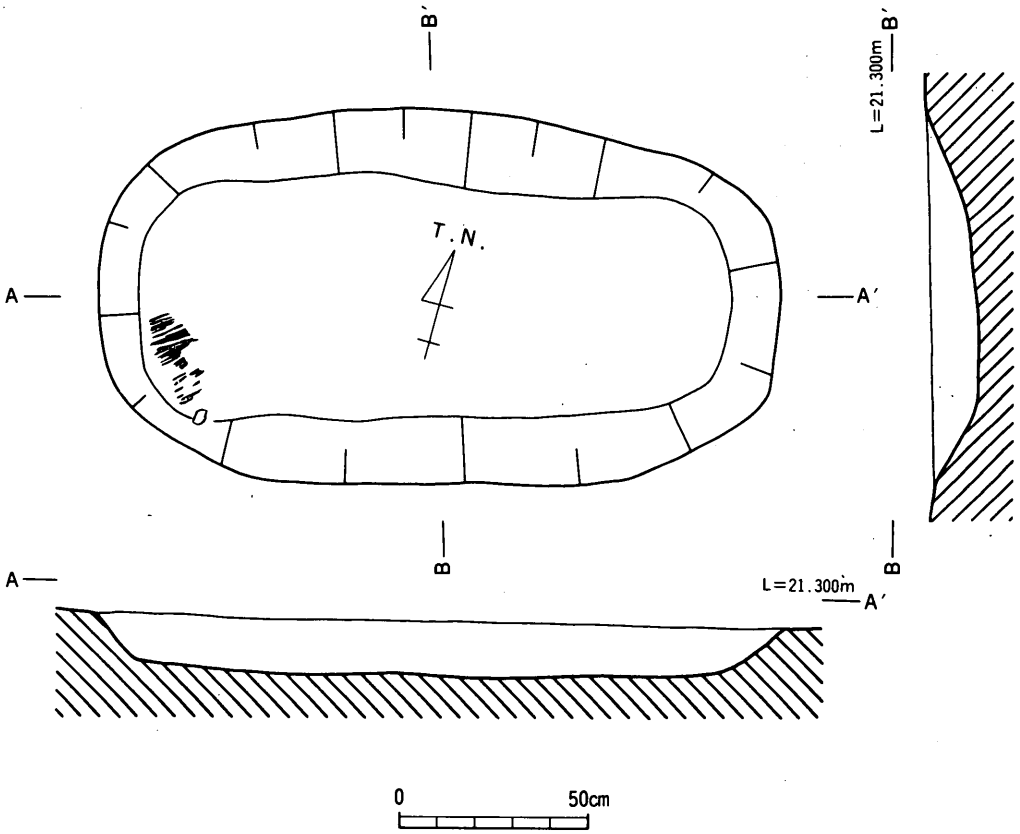


第163図　第１号土坑墓実測図

② 第２号土坑墓（ＳＴ21）（第164図）

12－Ｇ区に所在する。

平面形態は隅丸長方形を呈し，規模は100×180cm，深さ22cmを測る。Ｎ－73°－Ｅの主軸方位を有する。壁面は非常に緩やかに傾斜し，床面はほぼ水平である。床面直上に遺物は存在しておらず，埋土から少量の弥生土器が出土している。また南西隅部分において床面から数cm遊離した位置からウシの上・下顎骨が出土している。本資料の分析は香川大学教育学部仲谷英夫助教授に依頼した。次頁に結果を原文のまま掲載する。



第164図　第２号土坑墓実測図

稲木遺跡出土の哺乳類遺体

動物名

脊椎動物門

哺乳網

偶蹄目

ウシ科　Ｂｏｖｉｄａｅ

ウシ　Ｂｏｓ ｓｐ.

小型のウシであるが保存が悪いため詳しい分類学的検討はできない。

部　位

頭骨上顎骨歯槽部・下顎骨歯槽部

年　齢

成獣。上顎・下顎ともに第３大臼歯まで萠出している。

人為的処置

土壙墓の中に埋葬されていた。

その他

埋葬当時は頭骨・下顎骨とも揃っていた可能性があるが，保存状態が悪く現在は臼歯のエナメル質の一部が残っているだけである。

計測値

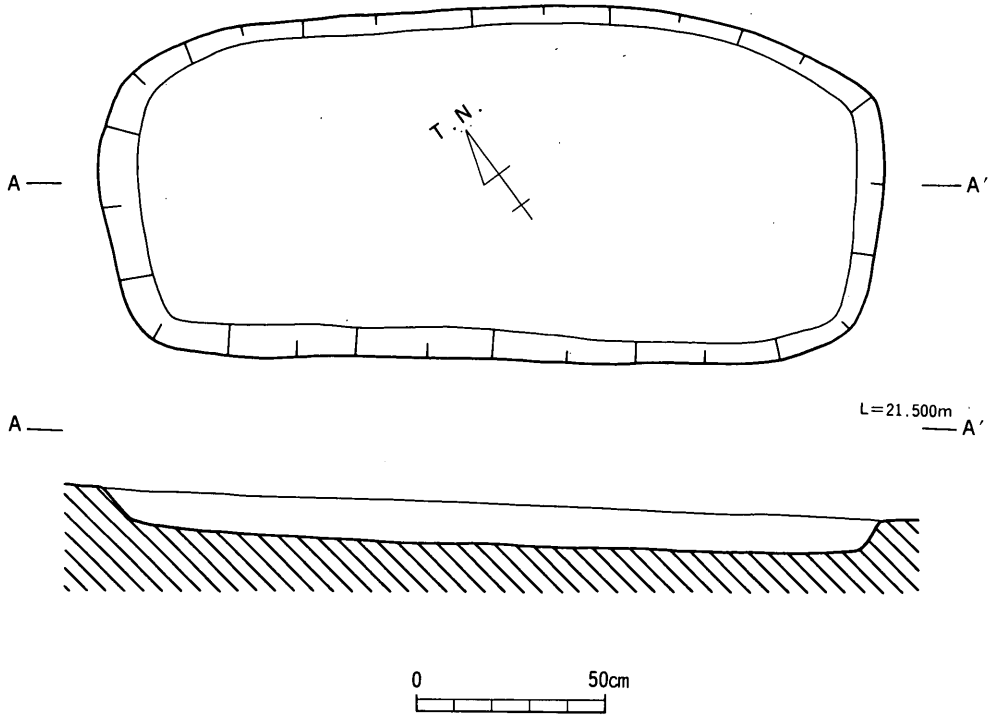
上顎頬歯列長（Ｐ４－Ｍ３）　149㎜前後

下顎大臼歯列長（Ｍ１－Ｍ３）　75㎜前後

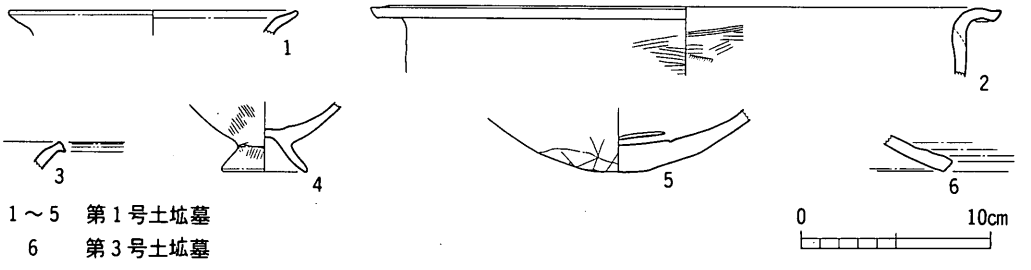
③ 第３号土坑墓（ＳＴ22）（第165図）

12－Ｇ区においてＳＴ21の東南方約５ｍに位置する。

平面形態が隅丸長方形を呈し，規模は長軸206cm，短軸92cm，深さ10cmを測る。床面はほぼ水平に穿たれている。遺物は，埋土中から弥生土器片が少量出土したのみである。なお主軸方位はＮ－53°－Ｗである。



第165図　第３号土坑墓実測図



1～5　第１号土坑墓
6　第３号土坑墓

第166図　第１・３号土坑墓伴出遺物実測図

④　土坑墓伴出遺物（第166図）

３基の土坑墓から出土した遺物は総て小破片である。したがって図化の可能な遺物は一部に限られる。器形が復元される遺物は総て弥生土器である。なおＳＴ21の遺物は遺存状態が悪いために図化することは困難である。

ＳＴ20の出土遺物は甕形土器（１，３），鉢形土器(2)，台付甕形土器(4)，壺あるいは甕形土器の底部と考えられる器形(5)である。

１は口縁部内面に強いナデ調整を施すことにより受け口状に成形する。３は口縁下端部をやや垂下し，端面に２条の凹線文を施す。２は口縁部が水平に屈曲する形態の大型品である。４の脚台部の規模から推測される器形は小型品であったことが考えられる。５は丸底の形態である。

ＳＴ22出土の高杯形土器は脚端部に面を有する。

5．壺棺墓

① 分布状態

9－Ⅰ区および12－Ⅰ区において，トレンチ調査を行なった際に出土した土器棺と考えられる大型の壺形土器を含めて10基の壺棺墓を検出した。このうち調査区北端部の12－F区検出のＳＴ09と東南部検出のＳＴ10を除いた他は分布地点により２群に分けられる。第１群は，遺跡の東端部（10－G・H区）に所在するＳＴ02・03・04・08の４基であり，第２群は南端部（12－Ⅰ区）のＳＴ01・05・06・07の４基である。両群の規模，性格などの比較検討は各遺構の報告後に行なうことにするが，共に複数の同じ性格を有すると考えられる遺構により群を構成する点は，遺跡の構造と当時の墓制を考察する上で注目しなければならない。

第24表　壺棺墓一覧表

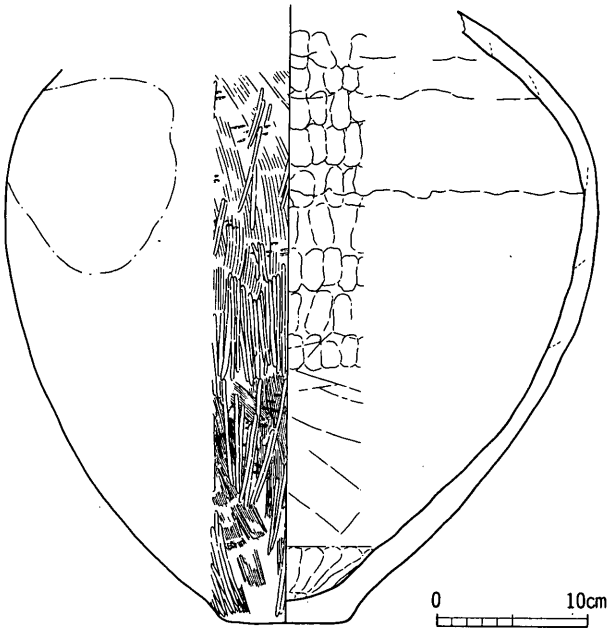
名称	略号	位置	土坑規模 L×W×D	中心軸方位	特記事項
第１号壺棺墓	ＳＴ01	12 － Ⅰ	不　明	不　明	
第２号壺棺墓	ＳＴ02	10 － H	134.8×111.6×44.8	S-12°30′-W	
第３号壺棺墓	ＳＴ03	10 － H	129.2×107.6×39.6	N-35°30′-E	土坑西壁に最大幅42.4cmの三ヶ月状のテラス部を有する。
第４号壺棺墓	ＳＴ04	10-G，H	150.3×100.7×22.7	推定 N-59°-W	遺存状態が悪い。
第５号壺棺墓	ＳＴ05	12 － Ⅰ	75×72×24	S-11°-E	
第６号壺棺墓	ＳＴ06	12 － Ⅰ	67×65.5×19.5	N-36°30′-W	
第７号壺棺墓	ＳＴ07	12 － Ⅰ	120×80×37.2	S-25°30′-W	
第８号壺棺墓	ＳＴ08	10 － G	93×78.5×51.5	N-29°-W	壺形土器と壺形土器の合せ口。ヒトの歯が遺存する。
第９号壺棺墓	ＳＴ09	12 － F	80.8×73.6×33.6	S-55°30′-E	
第10号壺棺墓	ＳＴ10	10 － Ⅰ	不　明	不　明	

L：長径　W：短径　D：深さ　　単位cm

② 第１号壺棺墓（ＳＴ01）

重機によるトレンチ調査時に12－Ｉ区南端部により出土した。既に原位置を失っており，遺構か否かの確認も難しい状態にあった。しかしながら遺物が大型品であることと，他の土器棺と同様に頸部以上の部位が人為的に打ち欠かれた痕跡が認められたため，土器棺との判断を下し，最初の発見例であったことから第１号壺棺墓の名称を与えた。したがって埋設状態，検出状況は全く判らず，遺構測量図，出土状況を示す写真類も保存されていない。

棺内部から遺物，遺体は出土していない。また，棺口を覆う施設，遺物も認められない。おそらく，発見時において失われたものと思われる。



第167図　第１号壺棺墓伴出遺物実測図

③ 第１号壺棺墓伴出遺物(第167図)

棺身と考えられる壺形土器は頸部以上の部位を欠く。最大径が上胴部に位置するために肩の張る形態であり，底部はやや突出した平底に成形されている。胴部外面はタタキ目をハケ目調整によって消した後にヘラミガキ調整により平滑な器面に仕上げられる。内面については上位は指ナデ調整，下位は板状原体による調整の痕跡が明瞭である。

④ 第２号壺棺墓（ＳＴ02）(第168図)

10－Ｈ区において検出した。棺の埋設用の土坑の規模は長径134.8cm，短径111.6cm，深さ44.8cmを測る。しかしながら棺の上部が破損していることから，埋設当初この規模を超えるものであったことは間違いない。

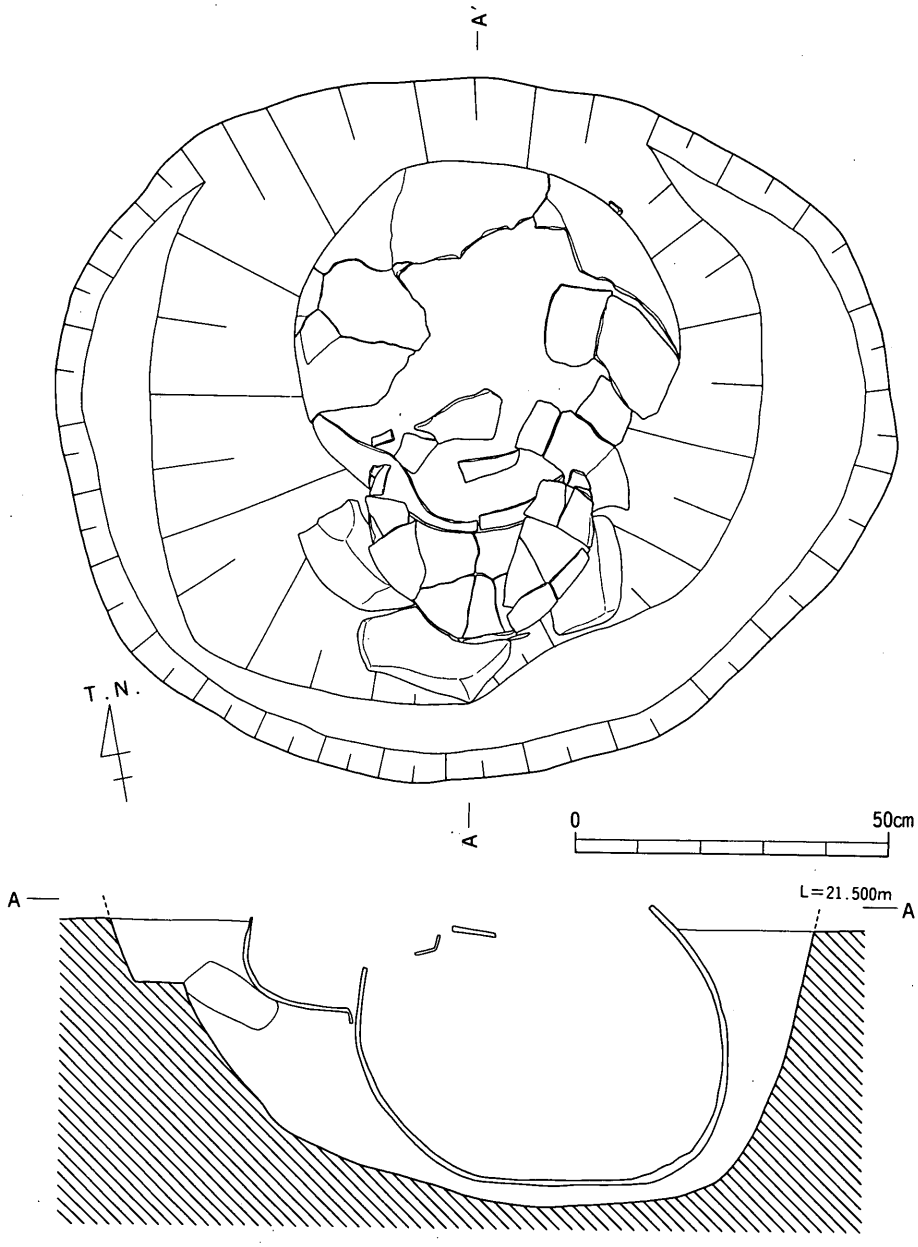
土坑は東西の壁面部に段を有する。これは掘削途上において，規模を縮小したために生じたものと考えている。また，埋土には２種類が認められた。上位は褐色を帯びる砂質土，下位が１～２mmの小礫を含む砂質土である。

さて，棺は壺形土器の頸部以上の部位を人為的に打欠いたものを棺身とし，鉢形土器を棺蓋としている。いづれも既に一部を欠損しており，さらに土圧によるものであろうが，全体が破壊され，棺内部には土砂が充満していた。

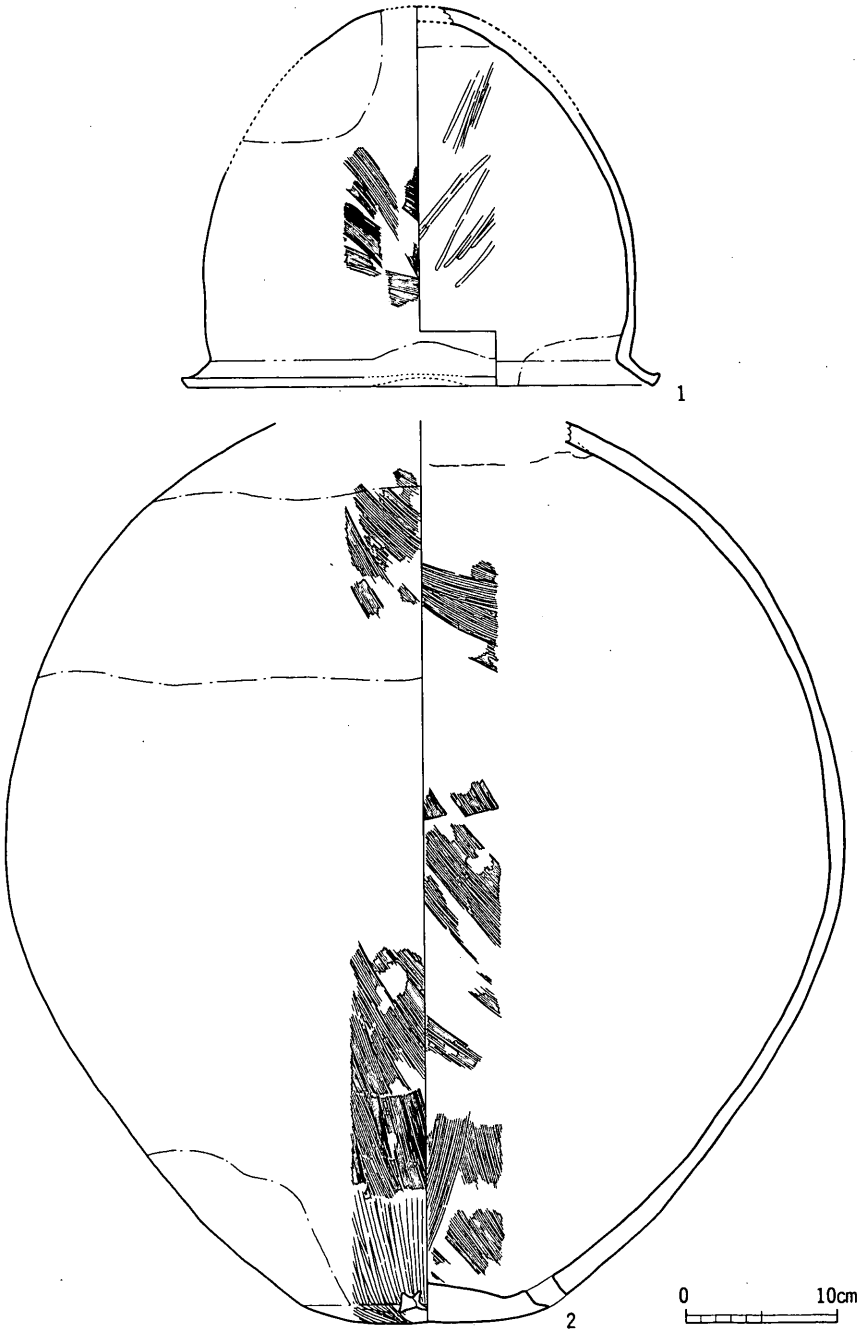
内部からの出土遺物は棺身・蓋の土器片以外は皆無である。したがって，埋葬された人物については何ら知り得ない。

この遺構の特徴の一つには，棺蓋を固定するために円礫が用いられている点もあげられよう。この構造は，他の壺棺墓の数基にも認められる。

棺の中心軸は真南から12°30′西に振る方位性をもつ。



第168図　第２号壺棺墓実測図



第169図　第２号壺棺墓伴出遺物実測図

⑤　第２号壺棺墓伴出遺物（第169図）

棺身の壺形土器は頸部以上の部位を欠く。胴部は最大径が中位に位置し，器高と近似した値を示すために球体状の形態となる。底部は屈曲の緩い丸底風の平底を呈する。調整は内外面ともハケ目調整によるが，底部外面は底面の一部を含めてヘラミガキ調整による丁寧な仕上げの状況が認められる。

ところで当資料は下胴部に１個の穿孔を有しており，これが周囲の器壁を破損していることから焼成後に穿たれたことは明らかである。しかも類例を彼ノ宗遺跡[註1]，仙遊遺跡[註2]，旧練兵場遺跡[註3]にみることができる。

さてこの穿孔の目的については明解な解答を与えることは難しいが，勝部明生氏の考察[註4]はその先駆的な業績と言える。さらに勝部氏の見解を踏襲した加藤安信氏は愛知県朝日遺跡出土の穿孔土器について検討を加えた結果，主に方形周溝基と溝状遺構から出土する事実から供献的な用途を考えている[註5]。また氏は土器棺に用いられた壺形土器の頸部以上の部位を故意に打ち欠く意図についても穿孔土器と同様な目的によるとしており，稲木遺跡の土器棺についても教示される点が多い。

棺蓋の鉢形土器はく字に外反する口縁部を有し，下端部を垂下する。胴部はやや胴が張る形態であり，高い器高を有するために容量が大きい。底部は丸底の形態である。

⑥　第３号壺棺墓（ＳＴ03）（第170図）

10－Ｈ区において，ＳＴ02の東方約0.9mの地点に検出した。土坑は長径129.2cm，短径107.6cmの楕円形のプランを呈し，遺存する深さが39.6cmを測る。

この遺構の特徴は，土坑の規模に比して，土器棺が土坑の東壁にほぼ接する位置に埋置されているために，西半部分に空間部分ができる点である。

さらにこの空間部分には，壁面からの最大幅42.4cmの三日月状のテラス部分が設けられている。ＳＴ02同様に土坑の掘削過程における計画の変更も考えられようが，規模がはるかに大きく，棺が意図的に壁面に接する位置に埋設されている点から，計画的にテラス部分が設けられた可能性は強い。しかしながら，この施設の使途を明らかにするには至らない。

棺は，ＳＴ02と同様，頸部以上を打欠いた壺形土器を棺身とし，鉢形土器を棺蓋としている。やはり，土圧による破壊が著しく，全体に亀裂が認められる。したがって棺の内部も埋葬直後の状況は保っていない。

構造上の類似点は，棺蓋の固定のために，数個の円礫が用いられる点である。

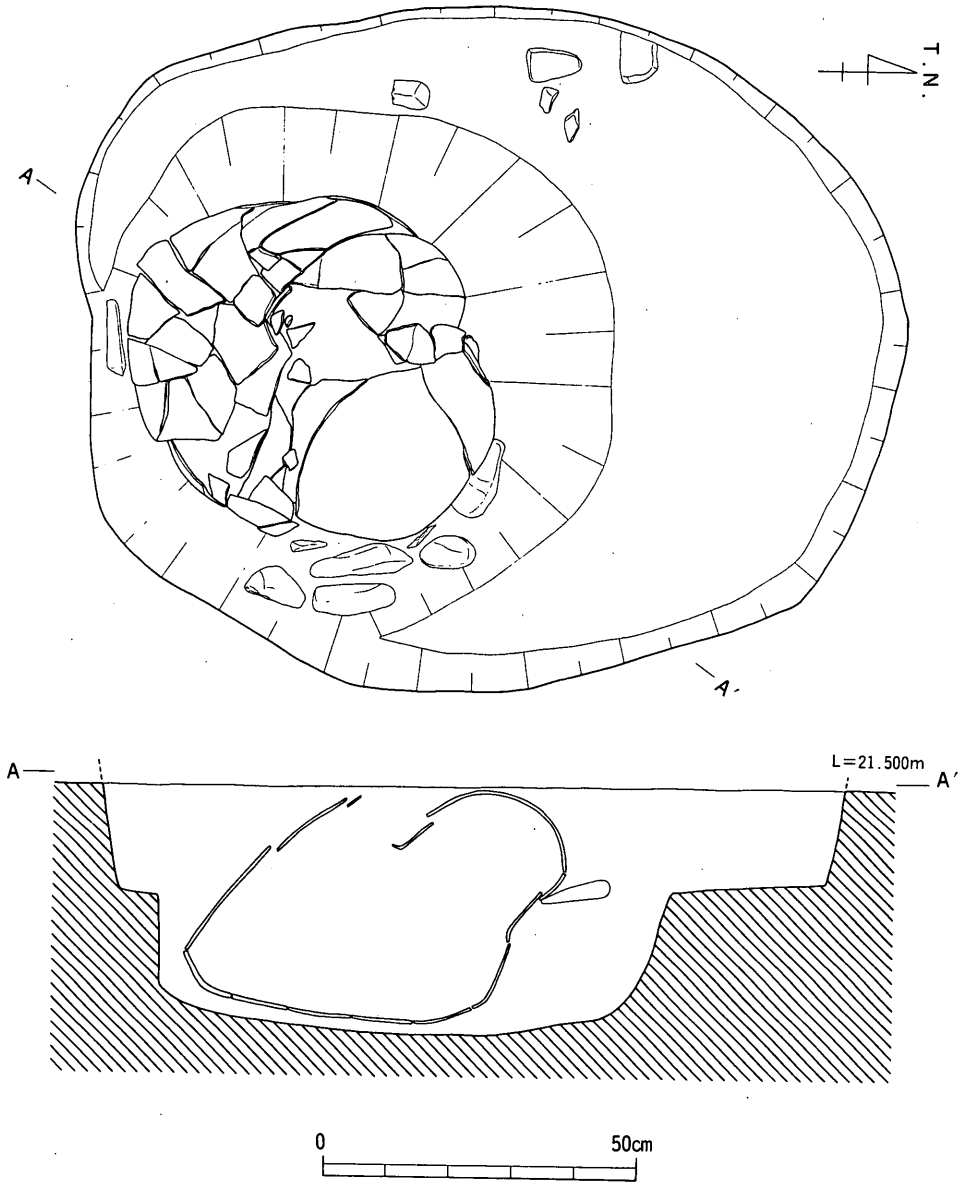
棺は蓋の位置を高くし，中心軸が真北から35°30′東寄りの方向になるように埋設されている。

⑦　第３号壺棺墓伴出遺物（第171，172図）

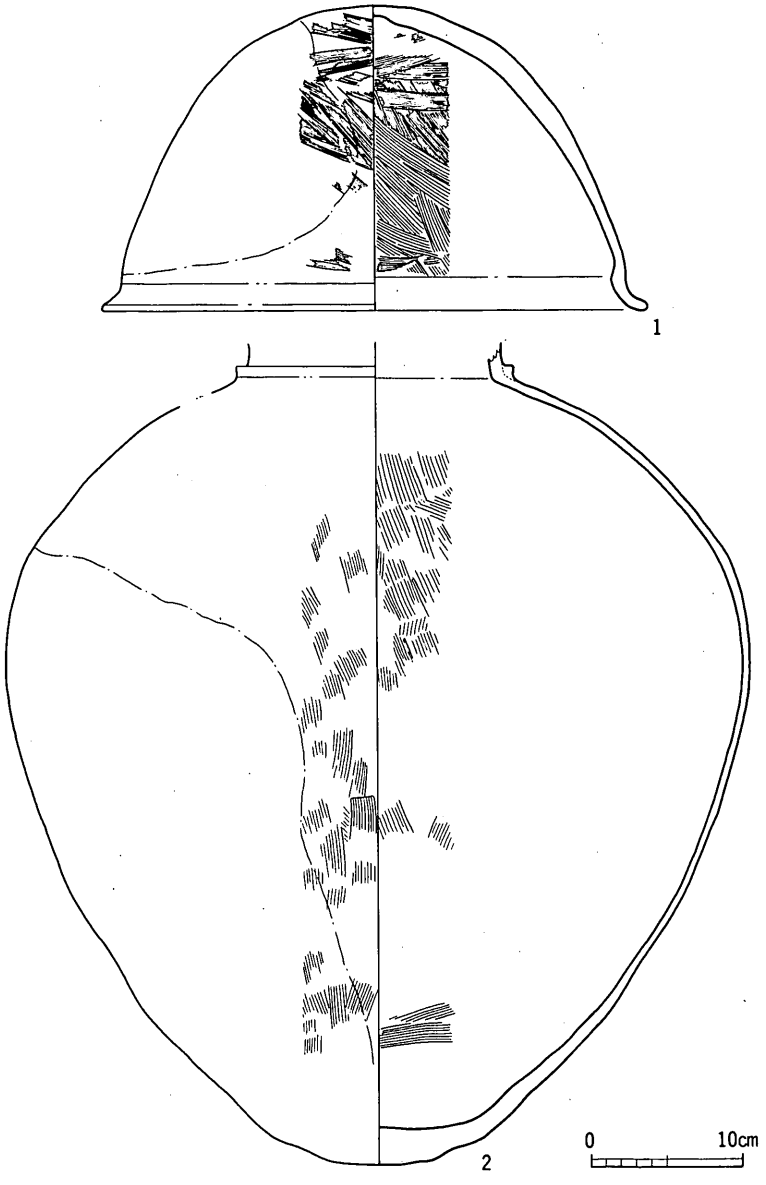
棺身の壺形土器は頸部の貼付突帯部を残して上部を打欠いている。最大径が胴部上位に位置するために肩が張る形態である。底部は丸底を呈する。

鉢形土器の口縁部は湾曲して外反する。端部は丸い成形である。器高に比して口径がはるかに大きく，胴部の湾曲が鈍いために浅い形態である。底部は丸底である。

共伴遺物としては土坑のテラス部分の床面直上から砥石１点が出土しているが，長軸に直交する方向に切断しており，7.3cmの長さを残すのみである。切断部分に人為的な打撃あるいは研磨の痕跡が認められないことから偶然に欠損したことが判る。



第170図　第３号壺棺墓実測図



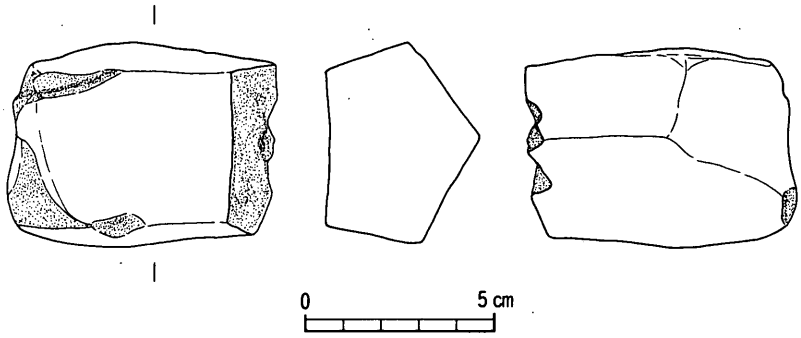
第171図　第３号壺棺墓伴出遺物実測図

⑧　第４号壺棺墓（ＳＴ04）（第173図）

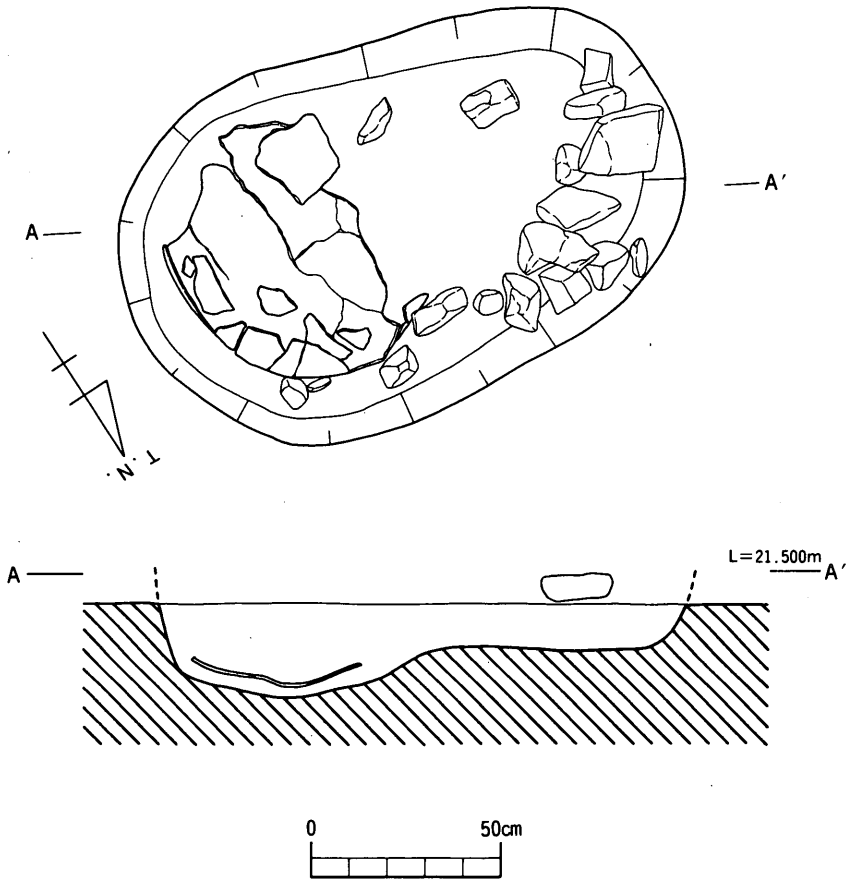
10－Ｇ・Ｈ区の区画境において検出した。ＳＴ01・02との距離は，共に１ｍという至近距離である。

遺構の確認された８基のなかでも最も遺存状態が悪い。土坑の平面形態は不定形な楕円形を呈し，規模は長径151.1cm，短径100.0cm，深さ25.0cmである。

棺身の大部分が失われており，棺蓋については全く遺存しない。しかしながら棺を固定してい



第172図　第３号壺棺墓伴出砥石実測図



第173図　第４号壺棺墓実測図

た石塊が原位置を保っており，棺の規模と方向性の復元は不可能ではない。推定される棺の中心軸の方位は，真北から59°西に振る。

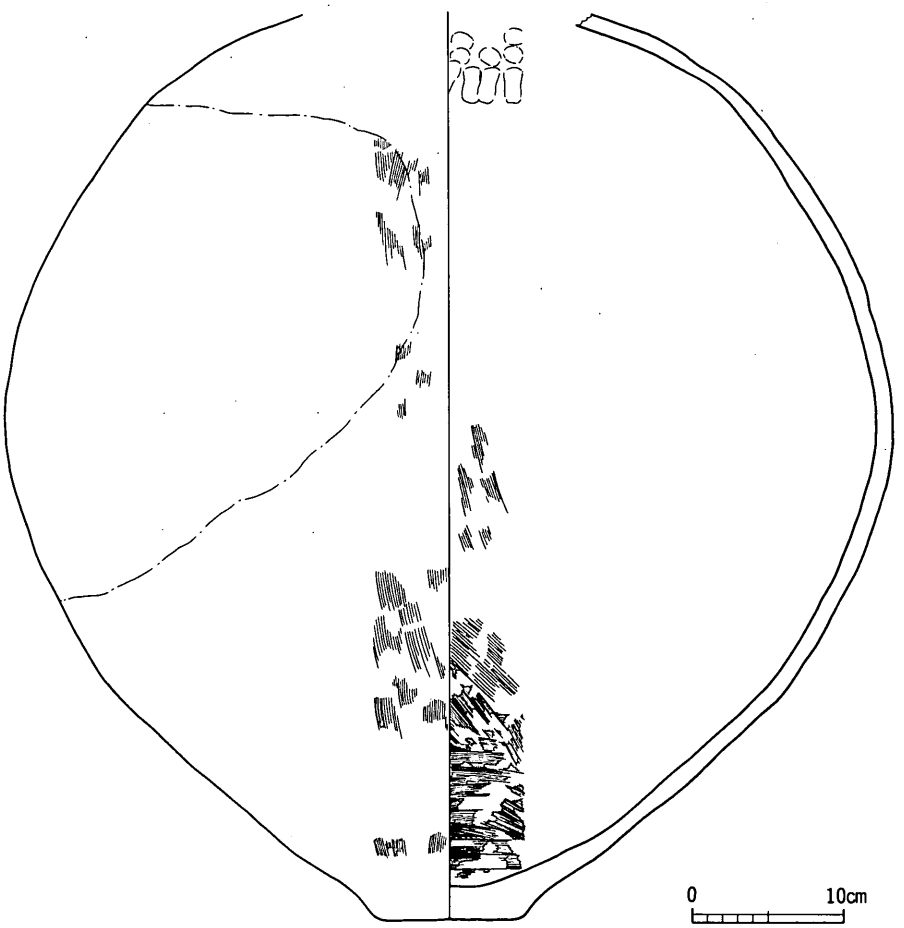
出土遺物には微細な骨片があるが，詳細な分析は行ない得なかった。

⑨　第４号壺棺墓伴出遺物（第174，175図）

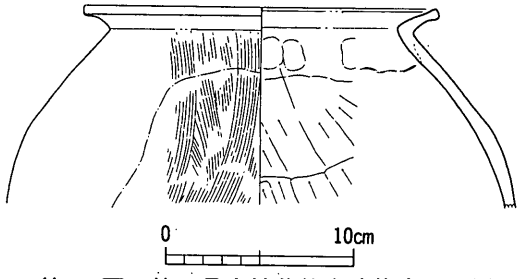
遺物の遺存状態は悪く，棺蓋として使用されたと考えられる遺物は全く遺存していない。もちろんこの点については本来棺蓋の施設を有しなかったことも考えられる。

棺身の壺形土器は最大径が胴部中位に位置し，器高と近似した値を示す。さらに肩部が大きく外湾することにより胴部は球体状の形態を呈する。底部は平底である。

２の甕形土器が伴出している。く字に鋭く屈曲する口縁部を有し，端部はやや肥厚して丸く成形する。胴部については肩が張る形態が考えられる。



第174図　第４号壺棺墓伴出遺物実測図(1)



第175図　第４号壺棺墓伴出遺物実測図(2)

⑩　第５号壺棺墓（ＳＴ05）（第176図）

12－Ⅰ区のＳＢ04の北方約２ｍの地点に位置する。

土坑の規模は長径75cm，短径72cm，深さ24cmを測る。しかしながら，検出作業に難行したため，ほりかたの上端部は棺の下半部の位置で確認しており，土坑がこれらの数値を上まわる規模で遺存していたことは確実である。

棺の遺存状態は良い。土圧による亀裂が全面に認められ，棺蓋の鉢形土器の口縁部が完全に破壊されていることを除けば原形を保っている。さらに，棺と壁面の間隙には，全周に円礫が設置されており，これらも棺を固定する目的を有することが判る。

棺の中心軸は真南から11°東に振る。

内部からの出土遺物は皆無である。

⑪　第５号壺棺墓伴出遺物（第177図）

棺身の壺形土器の胴部は肩の張る形態であり，平底の底部を有する。調整は外面がハケ目，内面が板状原体によるナデの痕跡が明瞭であり，丁寧な造作と言える。

棺蓋の鉢形土器の口縁部はく字に外反して端面を凹面化する。胴部は上位に最大径が位置することから肩の張る形態となる。底部は稜線の明瞭な完全な平底である。

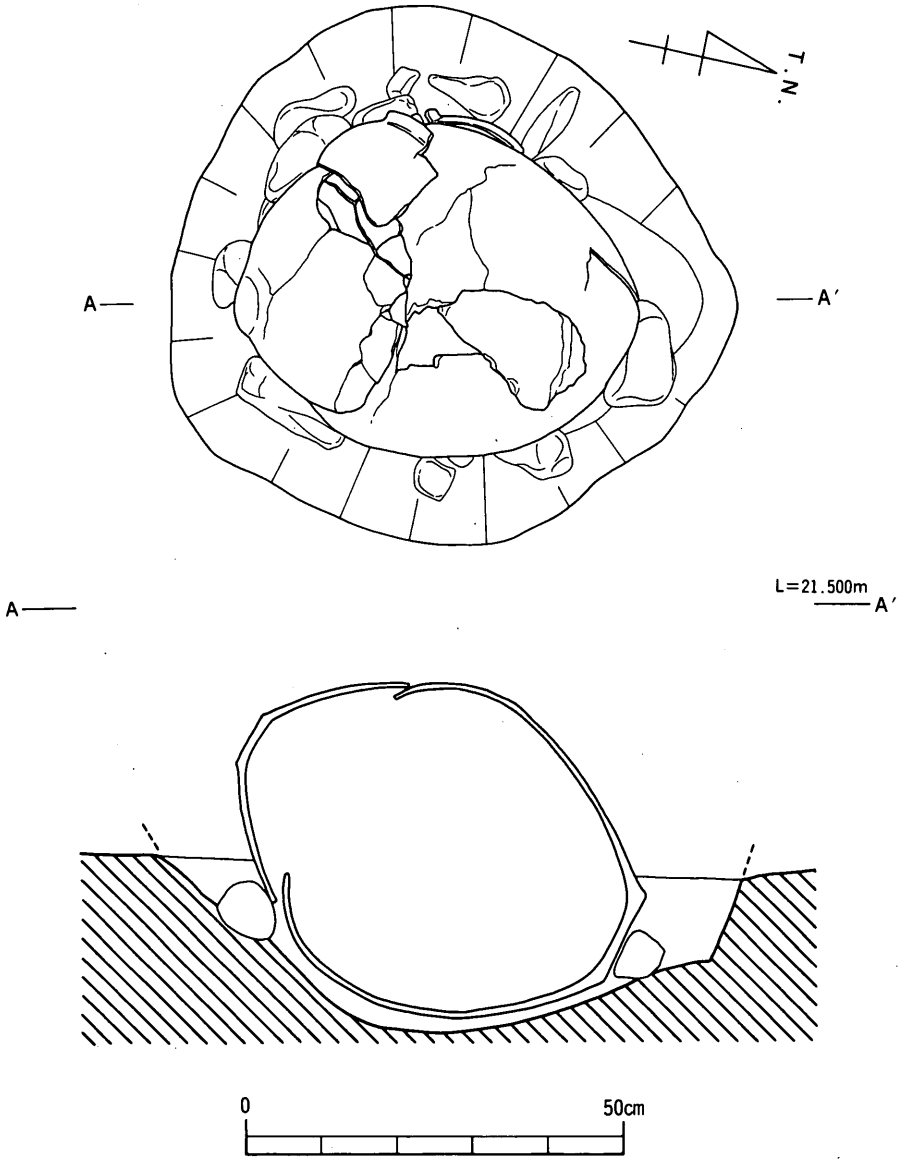
⑫　第６号壺棺墓（ＳＴ06）（第178図）

ＳＢ04の西方約0.8ｍに位置し，棺は中心軸が真北から西に36°30′振る方向に埋設されている。ＳＴ05の調査に併行して調査を実施したが，やはり検出に難渋し，土坑上面を過度に削取した。このため検出された土坑の形態は上位部分についての復元が難しくなっている。確認できた土坑の規模は径65.5cmのほぼ円形の平面形態であり，深さは19.5cmを測る。

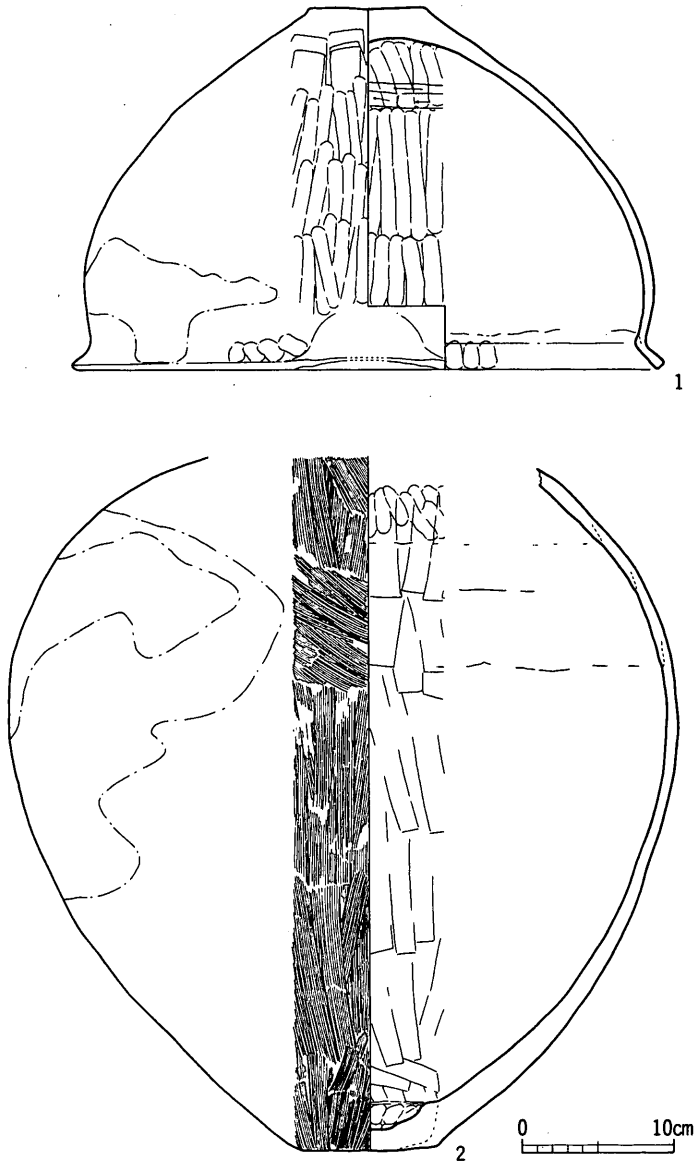
棺は土圧により著しく破壊されているが，ほぼ原位置にあり，旧状が推察できる。棺内部は土砂が充満している。しかし，棺身，蓋の土器片は転落していない。この点から土砂は，棺が破壊される以前に堆積したことも判る。

礫は棺蓋の周辺と，棺身の壺形土器の底部の位置にのみ認められる。

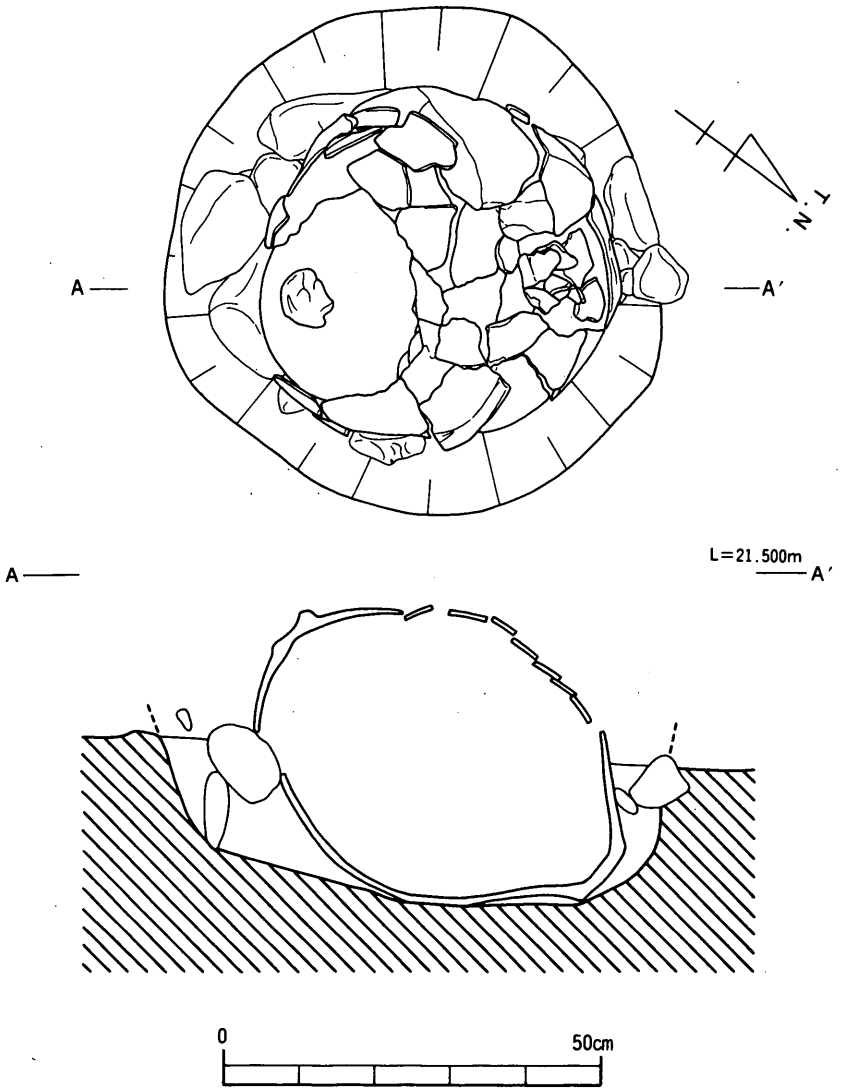
ところで，ＳＴ05，06に共通する特徴は，規模が小型である点である。これは遺体の収納方法の検討がなされていない現状では，速断はできないが，共に小児あるいは幼児の埋葬に用いられた可能性が考えられる。



第176図　第５号壺棺墓実測図



第177図　第５号壺棺墓伴出遺物実測図

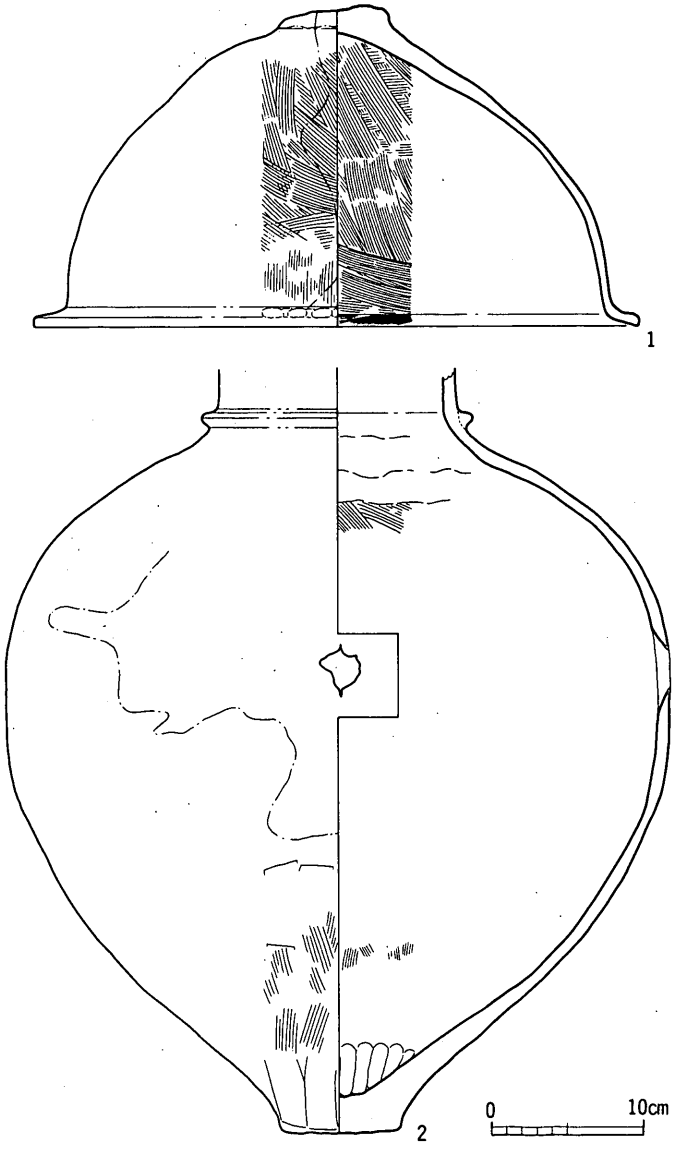


第178図　第６号壺棺墓実測図

⑬ 第６号壺棺墓伴出遺物（第179図）

棺身の壺形土器は頸部の中位以上の部位が欠損している。わずかに遺存する部位から頸部はほぼ直立する形態であったことが判る。胴部の形態は肩の張る球体状を呈し，下胴部において細く締まる。このため底部は突出する平底の形態となる。さて胴部中位に焼成後の穿孔が存在する。ＳＴ02の孔とは異なる位置に穿たれているが，同じ意識によるものと考えられる。

棺蓋の鉢形土器の口縁部はほぼ水平に屈曲する。胴部はやや肩が張る形態であり，器高が口径に比してはるかに小さいために容量の小さい器形である。



第179図　第６号壺棺墓伴出遺物実測図

⑭ 第７号壺棺墓（ＳＴ07）（第181図）

12－Ｉ区南端部において検出した。この位置は調査区の南端部であり，ＳＴ06の南方約1.5m，ＳＴ04の西方約0.5mに当たる。

掘削の誤りから土坑の北，東部分を削取したため，この部分の資料はない。そこで遺存する西，南部分のデータから旧状を復元すると，長径120cm，短径80cm程度の土坑であったことが判る。この土坑は，砂礫層の基盤を掘削しているために，不整形な形状を呈する。

棺は棺蓋が全壊した状態で出土した。土器片の散逸が著しいことから，埋設後に削取されたものと考えられる。棺身の壺形土器は，良好に遺存している。

また，棺を固定する礫は棺蓋の周辺にのみ認められる。

土坑の規模と棺の規模が大きく異なるが，これは，基盤の掘削が難行したことを意味するのであろう。

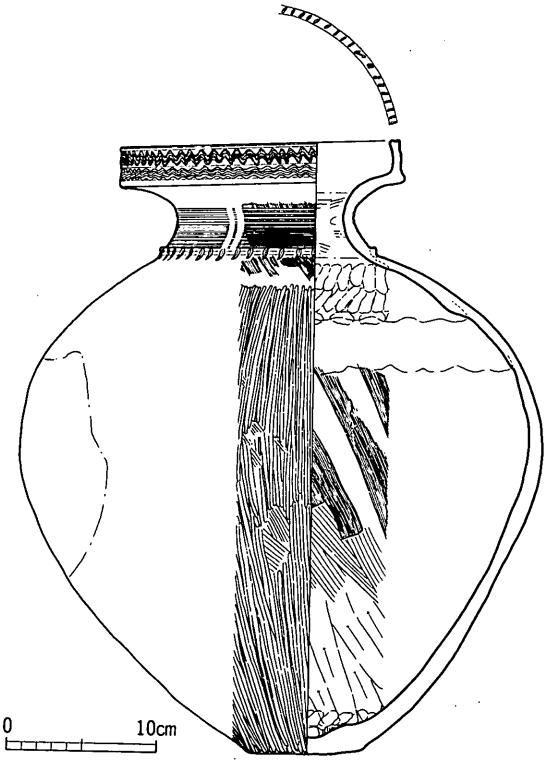
なお，当遺構も小児用の埋葬施設の可能性が強い。

⑮ 第７号壺棺墓伴出遺物（第180，182図）

棺身には頸部以上の部位を打欠いた壺形土器が使用されていたが，共伴する遺物によって原形に復することができた。すなわち不用となった部位についても同時に埋納されていたのである。この埋納方法は他の壺棺墓にはみられない。復元規模は器高40.5cm，胴部最大径34.6cmを測り，最も小型品である。

口縁部は端部が直立する二重口縁の形態である。内傾する短い頸部を有し，胴部は最大径が上位に位置する。底部は完全な平底である。

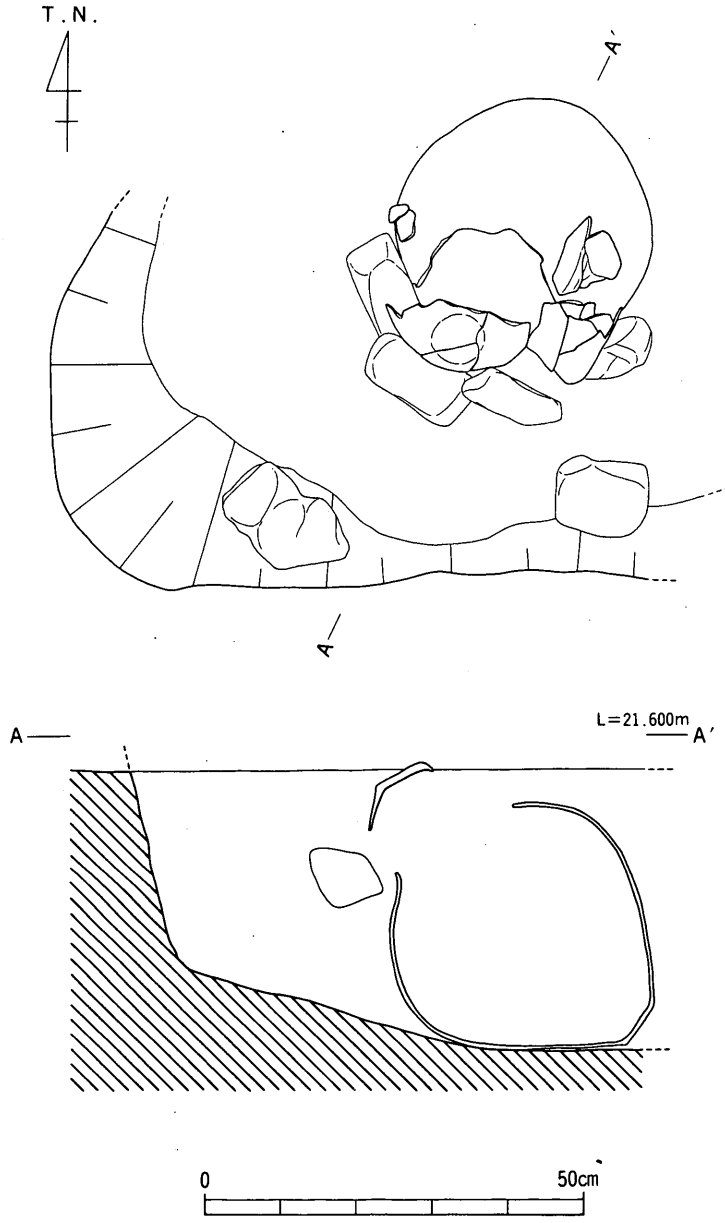
棺蓋は甕形土器の下胴部が転用されている。この点から蓋をする方法には完形の鉢形土器を用いる場合と棺身と同様に上位部分を破壊した容器を合せ身にする場合の２者が存在していたことが判る。しかしながら両者の差異が何に起因するのかは明らかにできていない。この遺物は平底の形態であり，胴部は中位に最大径を有する。調整については内面のヘラ



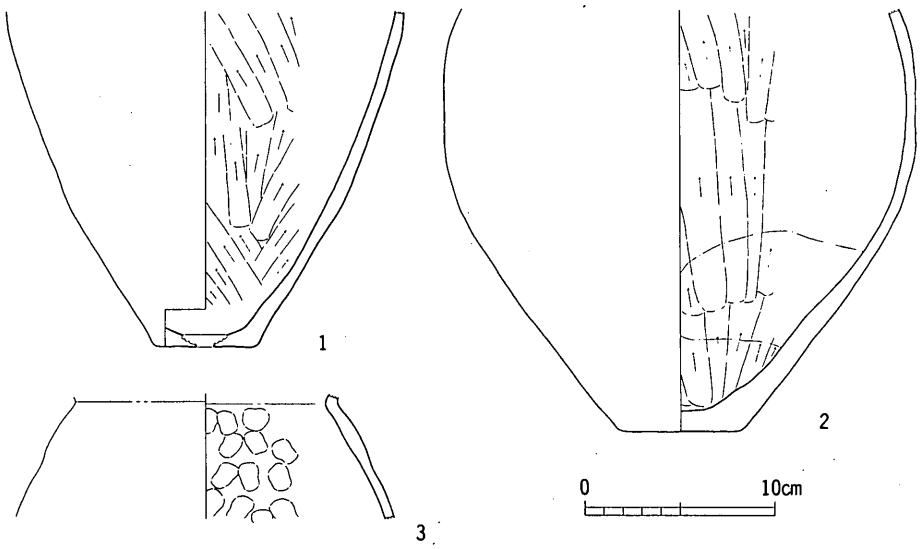
第180図　第７号壺棺墓伴出遺物実測図(1)

ケズリの痕跡が顕著である。

棺に使用された遺物以外に，底部を穿孔した甕形土器の下胴部１点と甕形土器の肩部と考えられる弥生土器片１点が出土している。前者は焼成後に孔が穿たれていることから，あるいはＳＴ02の棺身の穿孔と同様な意識により埋納されたことも考えられよう。



第181図　第７号壺棺墓実測図



第182図　第７号壺棺墓伴出遺物実測図(2)

⑯　第８号壺棺墓（ＳＴ08）（第183図）

10－Ｇ区に所在する。ＳＴ04の東北方約２ｍに位置し，ＳＴ17との距離は約3.5ｍを測る。

土坑の規模は長径93cm，短径78.5cm，深さ51.5cmであり，平面形態は長楕円形を呈する。

棺の遺存状態は良い。棺蓋の下半部が転落していることを除いて，他の部位と棺身は原形を保っている。なお，棺の中心軸は真北から29°西に振った方向性をもつ。

当遺構の特徴は，棺を固定するために用いられた礫群以外に，埋土中に，夥しい数量の円礫を包蔵している点である。とりわけ棺蓋の上部に集中箇所がある。

棺内部からヒトの歯の細片が出土している。詳しい分析結果は次頁に掲載する。分析は前香川医科大学法医学教室恒成茂行教授に依頼した。

⑰　第８号壺棺墓伴出遺物（第184，185図）

棺身の壺形土器の器高は70.6cmを測るが，これは本遺跡出土の壺棺墓中最大規模である。器高に比して最大径が小さいために長胴形の形態となる。底部は丸底の形態である。

棺蓋として使用されている壺形土器についても頸部以上の部位が打欠かれている。しかしながら残存する器高が47.9cmであることから合せ口の棺の全長は118.5cmとなる。したがってこの数値

鑑　　定　　書

昭和61年１月14日，香川県教育委員会　教育長　吉田　茂氏は香川県善通寺市稲木町の稲木遺跡（Ｃ地区）に於て土で埋められた壺の中から出土した歯牙について，香川医科大学法医学教室において下記事項を鑑定し，後日，書面をもって提出するように本鑑定人に依頼された。

鑑　定　事　項

善通寺市内の稲木遺跡における稲Ｃ壺棺墓に歯牙について

1　歯全体のうち，どの位置のものか

2　どの年齢のものか

3　性別

4　その他参考事項

以　　上

よって，私は歯科医師　十川　和彦氏（木田郡三木町，当教室研究生）及び香川医科大学法医学教室　大井　敏彦技官の各補助を受け，諸検査を行ない，法医学的に慎重に検討して本鑑定書を作成した。

鑑　定　主　文

稲木遺跡の稲Ｃ壺棺墓の歯牙の

1　部位は次表の通りである。

資料番号	歯　牙　の　部　位
No.１－１	左下顎第１小臼歯の頬側咬頭破片
No.１－２	右下顎第１小臼歯の頬側咬頭破片
No.１－３	左下顎第２小臼歯の頬側咬頭破片
No.２－１	右下顎第２小臼歯の頬側咬頭破片
No.２－２	左右上下不詳の大臼歯咬頭破片４個
No.２－３	咬頭以外の歯冠部の破片２個

2　推定年齢は10歳後半から20歳代である。

3　性別は不明である。

4　鑑定資料の歯牙は，何れも小豆大内外の破片であり，鑑定資料としての限界が著しい。今後，発掘現場における専門家の立会検査が望ましい。

以　　上

鑑　定　理　由

第1項　部位の判定

歯牙の部位は歯牙の形態によって判定する。本件資料の場合は，何れも小豆大内外の破片であり，実体顕微鏡で咬頭の形態を検査して部位を判定した。

即ち，咬頭頂からの傾斜面の長さが，短い方が近心側（正中に近い側）であり，長い方が遠心側（口腔の奥く側）である。また，咬頭の大きさと形状から小臼歯と大臼歯の区別を判定する。一般に，小臼歯の咬頭は小さくて横幅が狭く高さが高く，大臼歯の咬頭は大きくて横幅が広く高さが低いものである。

○　実体顕微鏡検査の結果，№1－1は左下顎第1小臼歯の頬側咬頭，№1－2は右下顎第1小臼歯の頬側咬頭，№1－3は左下顎第2小臼歯の頬側咬頭，№2－1は右下顎第2小臼歯の頬側咬頭，№2－2の4個は部位不詳の大臼歯の咬頭と判定され，№2－3の2個は咬頭以外の歯冠部の破片と判定された。

第2項　年齢の推定

歯牙から年齢を推定するには，乳歯と永久歯の区別，歯牙の萌出状態。咬耗程度を参考とする。

○　本件資料の場合，一般に咀嚼による咬耗が起こり易い臼歯部の咬頭であるが，咬耗はエナメル質に限局して極めて僅かである。従って，推定年齢は10歳の後半から20歳代である。

第3項　性別の推定

○　本件資料の場合，性別の判定に参考となるものは全く無く，性別は不明である。

第4項　その他

鑑定資料の歯牙は，何れも小豆大内外の破片であり，鑑定資料としての限界が著しい。資料は淡茶褐色～茶褐色に変色して，もろい状態であるが，発掘現場においては，歯牙の形態がより完全な状態であったことを否定できない。

○　今後は発掘現場における専門家の立会検査が望ましいことである。また，当研究室としても，古墳などの発掘調査にできるだけ協力する所存です。

以上をもって　鑑定主文の理由　とする。

この鑑定は昭和61年1月14日から同年3月15日までの間に行なったものである。

昭和61年3月20日

〒　761－07

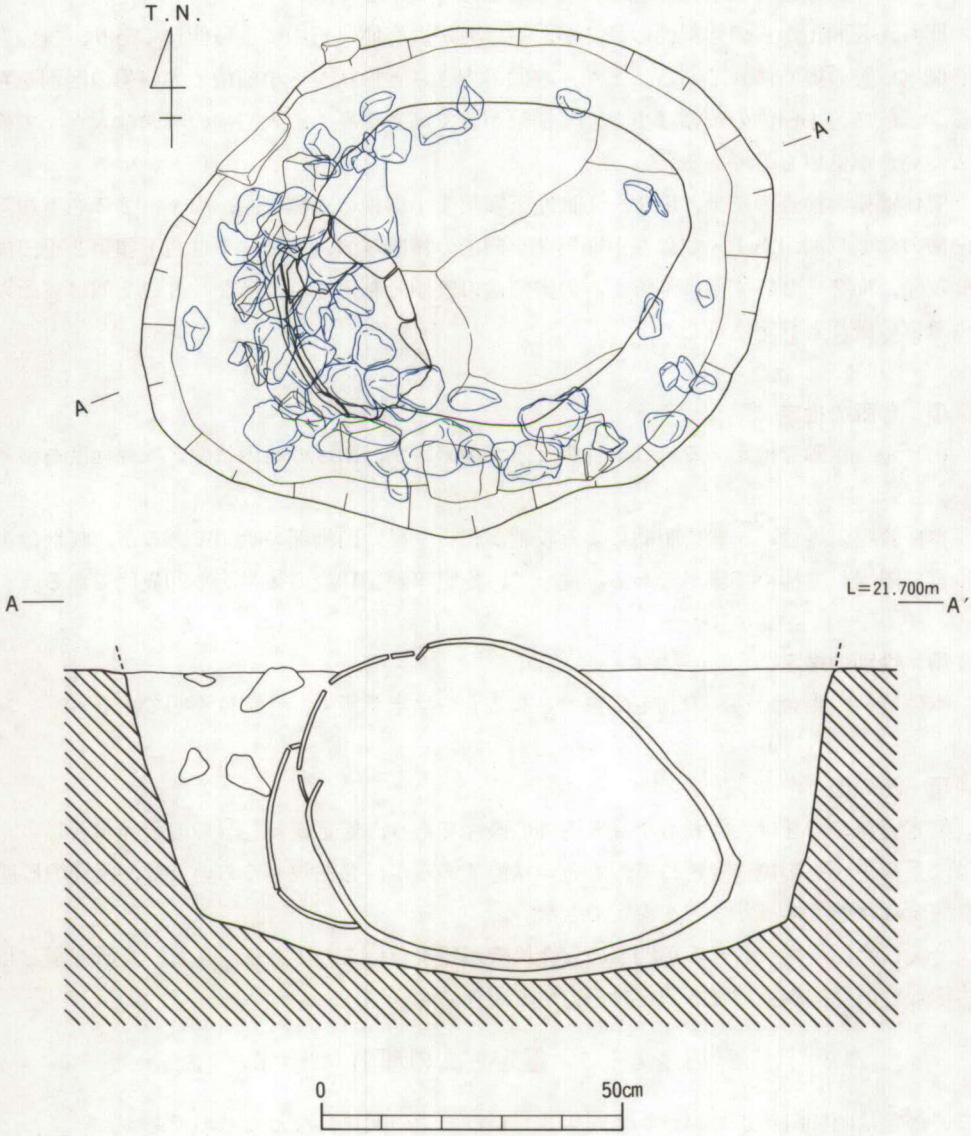
香川県木田郡三木町大字池戸1239番地の98

鑑定人

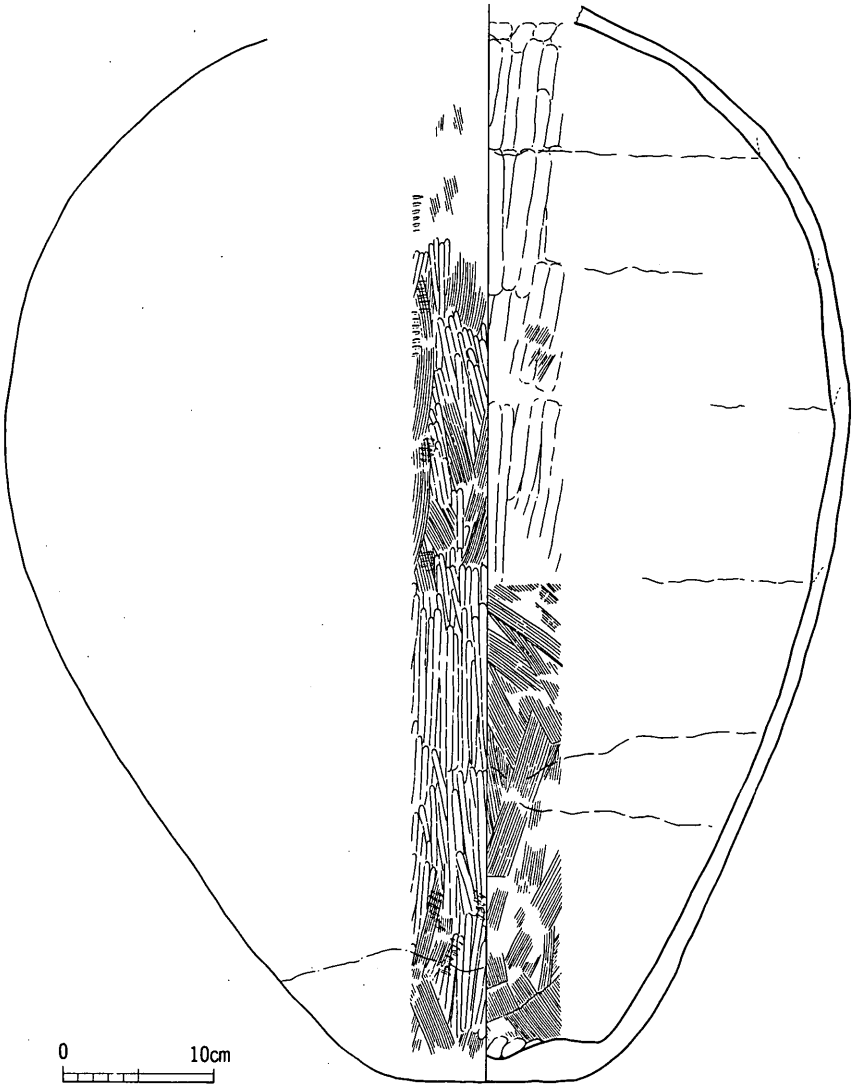
香川医科大学教授（法医学教室）　恒成　茂行

が遺体に10歳後半代から20歳代の年齢を与える場合に成人の埋葬に必要な規模と考えられる。

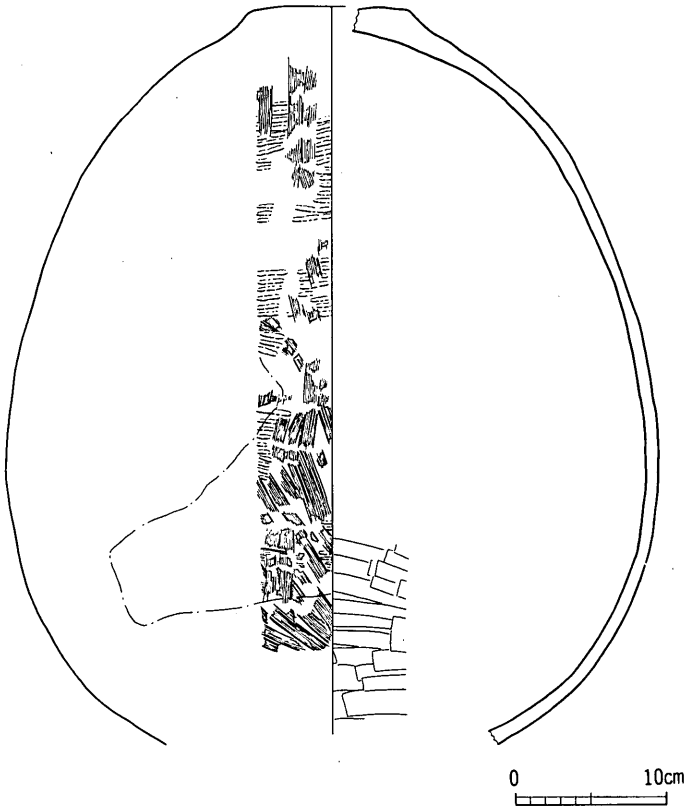
さてこの土器の形態については棺身に比して最大径が胴部中位に低下し，底部はやや突出する平底を呈する。



第183図　第８号壺棺墓実測図



第184図　第８号壺棺墓伴出遺物実測図(1)



第185図　第８号壺棺墓伴出遺物実測図(2)

⑱　第９号壺棺墓（ＳＴ09）（第186図）

調査区北端部の12－Ｆ区に所在する。当遺構は群を構成しない。

砂礫層を基盤とするため，土坑の平面形態は不整形であるが，長径80.8cm，短径73.6cm，深さ33.6cmを測る。

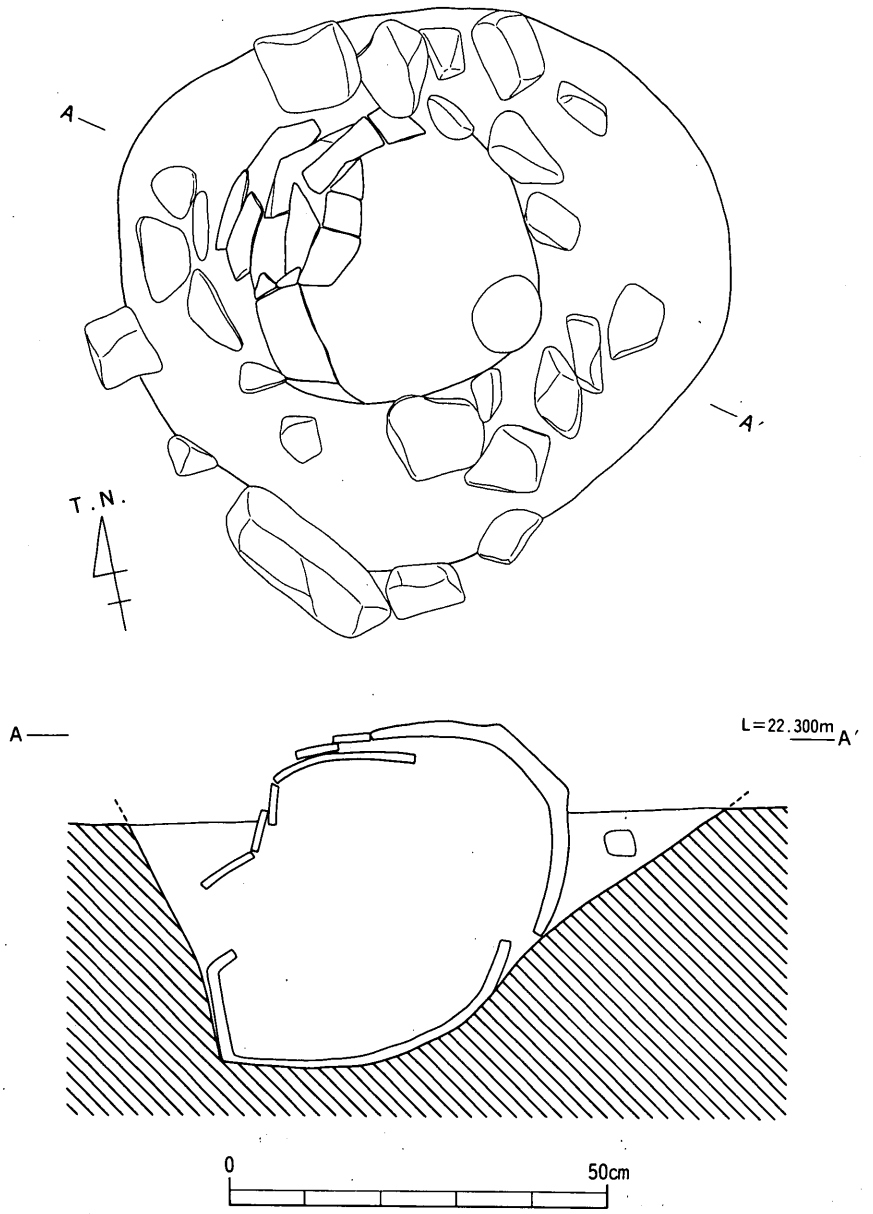
棺は上位の蓋よりも下位の身に亀裂が多く，上面部分の破壊が著しい。この点から土圧による破壊が想像できる。しかしながら，共にほぼ原位置は保っていると言えよう。中心軸は，真南から東へ55°30′振る。棺内部に遺物は遺存しない。

この遺構もまた，小規模であることを特徴としており，小児用壺棺であった可能性が強い。

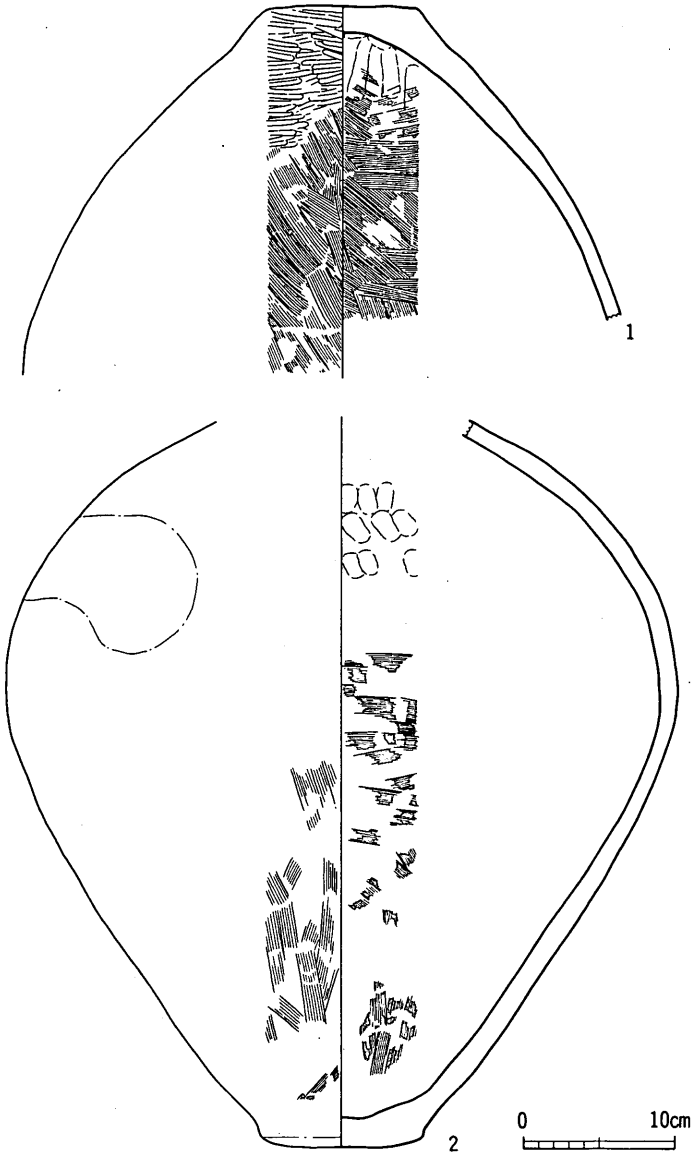
⑲　第９号壺棺墓伴出遺物（第187図）

棺身の壺形土器の形態は最大径が上胴部に位置するために肩が張り，下胴部が細く締まる。このため肩部の屈曲が急である。底部は平底である。

棺蓋には壺形土器の下胴部が使用されているが，この方法はＳＴ07に共通している。底部は平底の形態であり，外面にヘラミガキ調整の痕跡が顕著である。



第186図　第９号壺棺墓実測図



第187図　第９号壺棺墓伴出遺物実測図

⑳　第10号壺棺墓（ＳＴ10）

10－Ｉ区のトレンチ調査時に出土している。ＳＴ01同様発見時に原位置を失ったために土坑の検出は不可能であった。したがって棺の埋没状態，検出状況の記録は全く保存されていない。

土器棺内部より出土した遺物は棺蓋，棺身の破片の他に二重口縁を有する壺形土器の口縁部片がある。歯牙などの遺体の部位は全く遺存していない。

㉑　第10号壺棺墓伴出遺物（第188，189図）

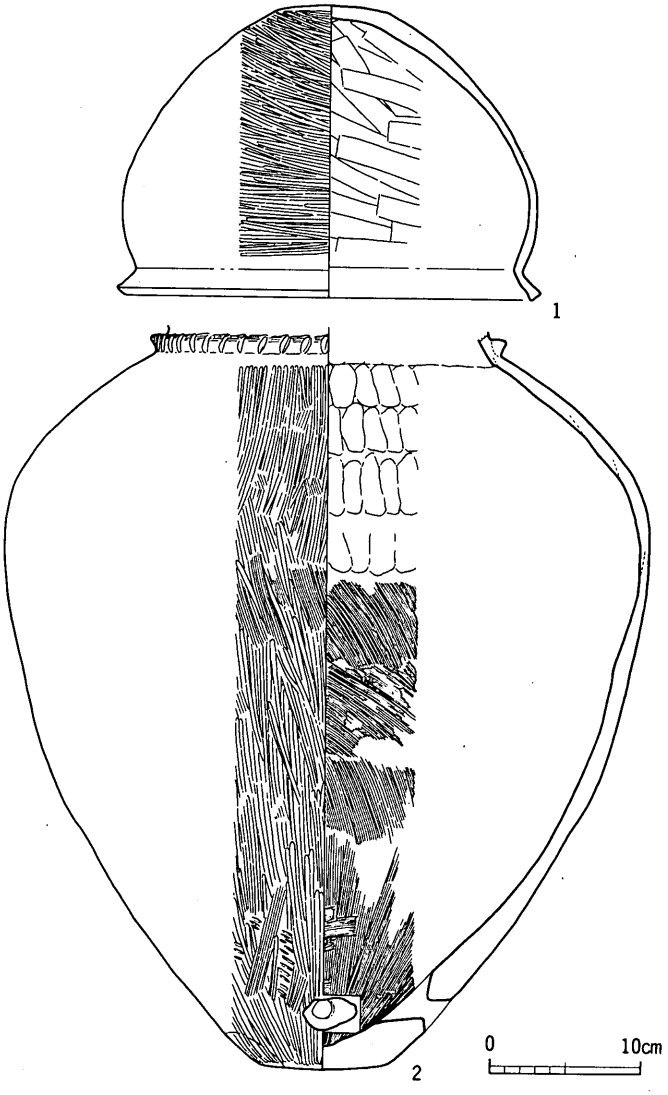
棺身の壺形土器は貼付突帯部を残して頸部以上の部位を打欠いている。胴部は最大径が上位に

位置するために肩が張る形態を呈し，中位以下が細く締まる。また下胴部には焼成後に穿たれた孔1個が存在しており，ＳＴ02，06に類する資料である。

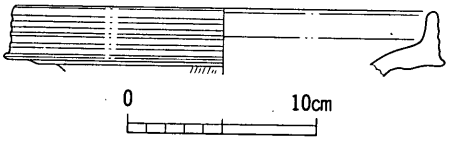
棺蓋の鉢形土器はく字に外反する口縁部を有し，端部を三角形に肥厚する。

胴部はやや肩が張る形態であり，最大径が口径に近似した値を示す。底部は不完全な平底であり，やや湾曲することから平底と丸底の中間的な形態と言える。

伴出する壺形土器の口縁部は端部がほぼ直立して立上がり，外面に4条の凹線文を施す。



第188図　第10号壺棺墓伴出遺物実測図(1)



第189図　第10号壺棺墓伴出遺物実測図(2)

（註）

1　彼ノ宗遺跡ＳＸ－03・08・10。笹川1985年。による。

2　仙遊遺跡ＳＫ－01。笹川1986年。による。

3　旧練兵場遺跡出土資料についてはかつて公にされたことがない。矢原1973年。の本文中に述べられている一文が唯一管見に触れることができる資料である。

4　勝部明生「穿孔土器の考察」『日本史論叢』，1976年。入手し得なかった。

5　加藤安信「第3節弥生土器の検討(3)特殊な土器Ｂ穿孔土器」加藤他1982年。

6．集石遺構

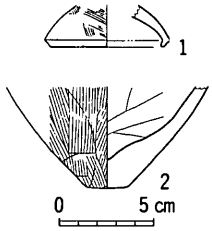
① 第１号集石遺構（ＳＸ01）（第190図）

第190図　第１号集石遺構実測図

11－Ｆ区において，Ⅲ，Ⅳ層を除去した後に検出した帯状の礫群である。規模は総延長420cm，最大幅80cmを測る。集石墓と異なり，墳丘は有しない。使用されている石材は最大径５cm前後の円礫が最も多く，径20cmを超えるものは少量を数えるのみである。これらの石材の配置に規則性は認められない。しかしながら礫群の中央部に大型の石材が集中する部分があり，半円形の構造を呈している。礫群中に包蔵されていた遺物は少量の弥生土器である。石材を除去した結果，基盤層上面においては遺構は検出されなかった。

この遺構については，形態，構造共に，集石墓とは異なる点から，性格を異にするものと考えられる。

② 第１号集石遺構伴出遺物（第191図）



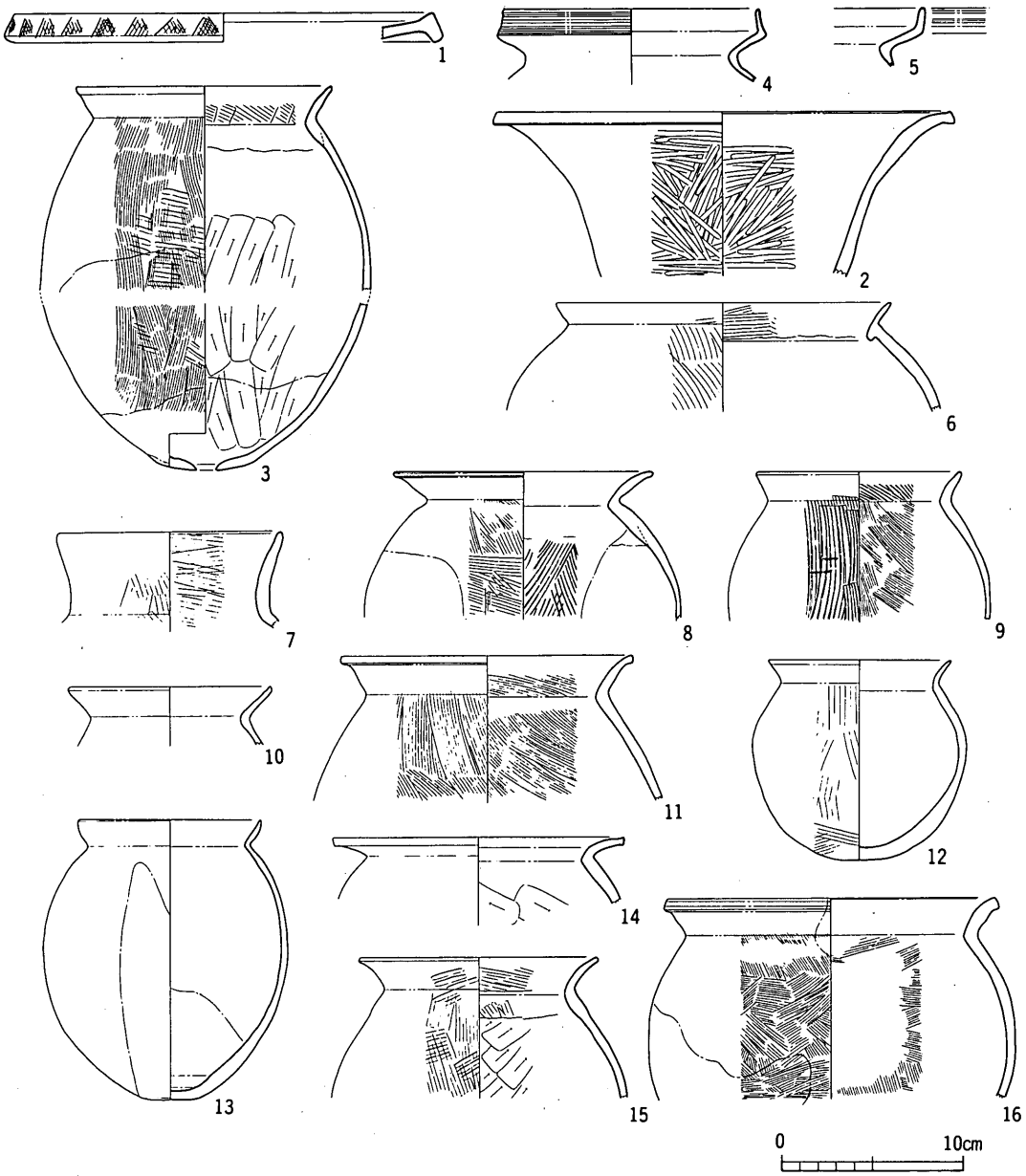
第191図　第１号集石遺構伴出遺物実測図

礫群の間隙より出土した遺物は少量である。ここでは２点について器形復元，図化を行なった。２は甕形土器の底部と考えられる。平底の形態であり，内面にヘラケズリ調整の痕跡が顕著である。１の使途については全く判然としない。復元口径が７cmを超えない小型品であり，容器として用いるには容積が小規模過ぎよう。しかも端部が内傾するために内容物の取り出しには不適である。そこで蓋状の器形を考えたい。

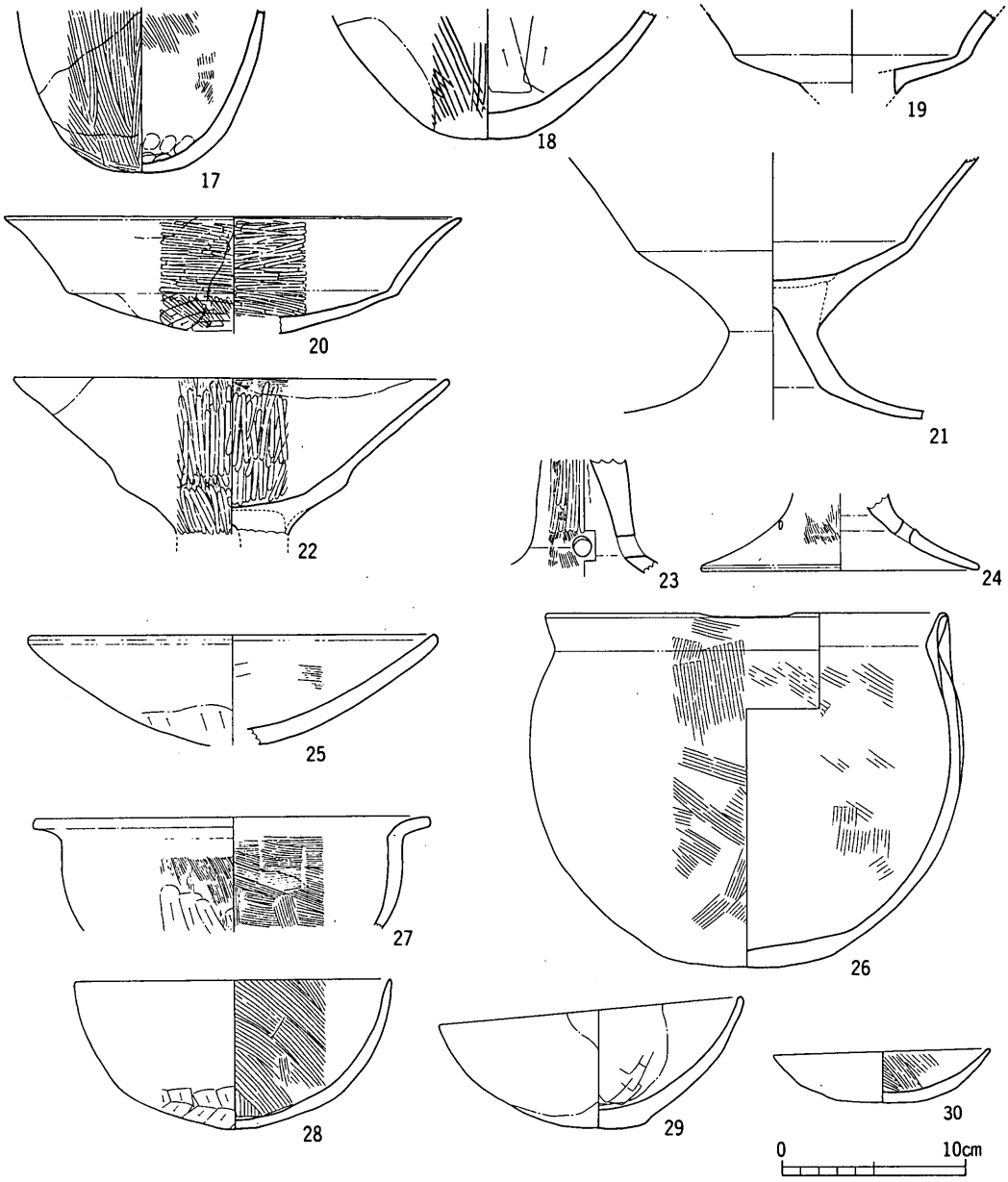
③　第２号集石遺構（ＳＸ02）（付図14）

15－Ｉ区において検出した円礫群である。総延長1380cm，最大幅360cmの広範囲にわたって所在するが，これらは２～５の小群により構成される可能性を有する。しかしながら石材の配置に規則性は認められない。ＳＸ01同様平面的な構造を有することから集石墓とは性格を異にするものと考えられる。なお礫群中からは多量の弥生土器が出土している。

④　第２号集石遺構伴出遺物（第192，193図）



第192図　第２号集石遺構伴出遺物実測図(1)



第193図　第２号集石遺構伴出遺物実測図(2)

１，２は壺形土器である。１は口縁部を広く開口し，端部を肥厚させて垂下する。端面はナデ調整により凹面化した後にヘラ描鋸歯文を施す。２はラッパ状に開口する長い口縁部を有する。内外面はヘラミガキ調整による丁寧な造作である。

３～16は甕形土器である。４，５を除き，総てく字に外反する口縁部を有する。３は口縁端部を丸く肥厚する。最大径が下胴部に位置する形態である。４，５は二重口縁の形態である。６の胴部は球体状を呈することが考えられ，また口縁部は小さく成形される。７の口縁部は湾曲が弱く，ほぼ直立する。10，11，13，15は胴の張らない形態である。10，13は受け口状を呈する。12

は球形の胴部を有する小型品である。14の口縁部はほぼ水平に開口して端部を上下に肥厚する。16は球形の胴部形態が考えられ，鉢形の器形の可能性がある。

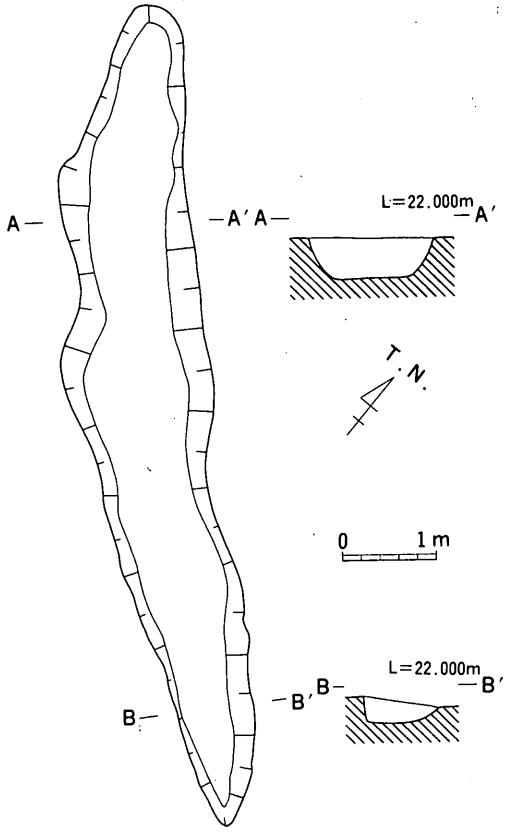
底部の形態は3，13，18の丸底風の平底と丸底（17）が存在する。

20は杯部の屈曲部以上の部位と屈曲部以下の部位の長さがほぼ等しいことを特徴とする。21の杯部は直線的な長い口縁部を有する深い器形であり，脚部は屈曲して広く開く。22は杯部の屈曲が明瞭でないために鉢形を呈する器形である。特殊な遺物と考えられよう。

25～30は鉢形土器である。25は口径が器高を大きく凌ぎ，湾曲の弱い胴部を有するために浅い形態である。26は胴部最大径が口径を凌ぐ球体状の胴部を有する深い器形である。27の口縁部は緩く外反するが，胴部以下の形態と造作は28に類する。共に底部外面にヘラケズリ調整の痕跡が顕著である。29はやや平底を有する。30は小型品であり，皿形の浅い形態を呈する。

7　不明遺構

①　ＳＸ03（第194図）



第194図　ＳＸ03実測図

11－Ｈ・Ｉ区にまたがって検出された遺構である。規模は全長430cm，最大幅79cm，最深部23cmを測る。埋土は黒色粘質土１種類であり，この土壌は本遺跡の自然堆積土壌中に認められないことから人為的に埋められた可能性は強い。埋土中には多量の弥生土器の破片が包蔵されていたが，遺構に伴う遺物は認められず，総て埋没時期の遺物と考えられる。

形態は，横断面がいわゆるＵ字形を呈し，溝状遺構に類する。さらに両端部分が中央部分に比して浅くなることから，原形は残存長を超える規模を有していたものと思われる。しかしながら，この延長部は検出されていない。当遺構の遺跡中における役割については疑問点のまま残さざるを得ない。

②　ＳＸ03伴出遺物（第195図）

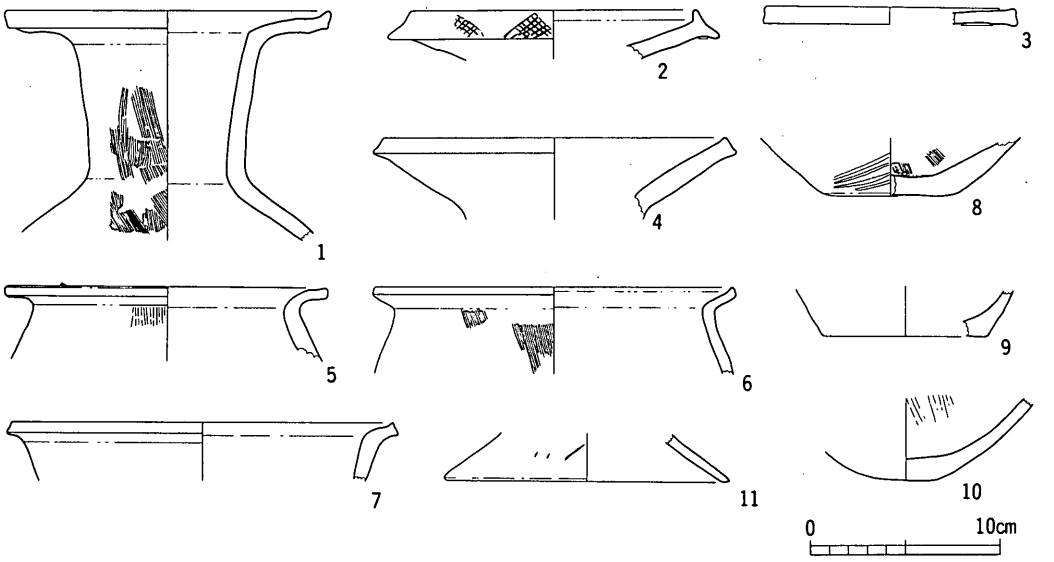
埋土から出土した遺物は総て弥生土器である。１～４は壺形土器と考えられるが，個々に形態上の差異が認められる。１は外反する長い頸部と水平気味に開口する口縁部を有し，口縁上端部が突出した受け口状を呈する。２は口縁端部を凹面化するとともに上下に大きく肥厚して端面にヘラ描鋸歯文を施す。３の口縁部は水平に開口した後に端部をやや肥厚する。４は大きく開口する点が特徴である。

５，６は甕形土器である。く字に外反する口縁部を有し，上端部を突出する。このため受け口状の形態を呈する。

７は口縁部をやや外反する鉢形土器である。

底部の形態は平底（８，９）と丸底風の平底(10)に大別できる。

11は高杯形土器の脚部であるが，遺存状態が悪いために原形の復元は難しい。



第195図　ＳＸ03伴出遺物実測図

③　旧河道（ＳＸ04）

15－Ｉ，16－Ｈ・Ｉ区において検出した北西流する河道跡である。規模は最大幅約17.8m,最深部約2.1mを測り,調査区内においては全長約26.8mが確認できた。

遺跡の微高地部分を周廻する方向性が認められる点から，西縁辺部の低地が流路化したことが考えられる。

また，16－Ｈ区においてその東岸がＳＢ03の西半分を削取していることから先後関係は容易に判る。しかしながら，両遺構から出土する弥生土器に時期差が認められない点と，住居跡の埋土中に洪水などの自然の強大な力による土砂の堆積状況が確認される点から住居跡の廃絶直後か，もしくは，存続中に当流路が形成されたものと考えられる。

④　旧河道伴出遺物（第196図）

埋土に包蔵される遺物量は少く，総て弥生土器である。図化した９点について報告する。

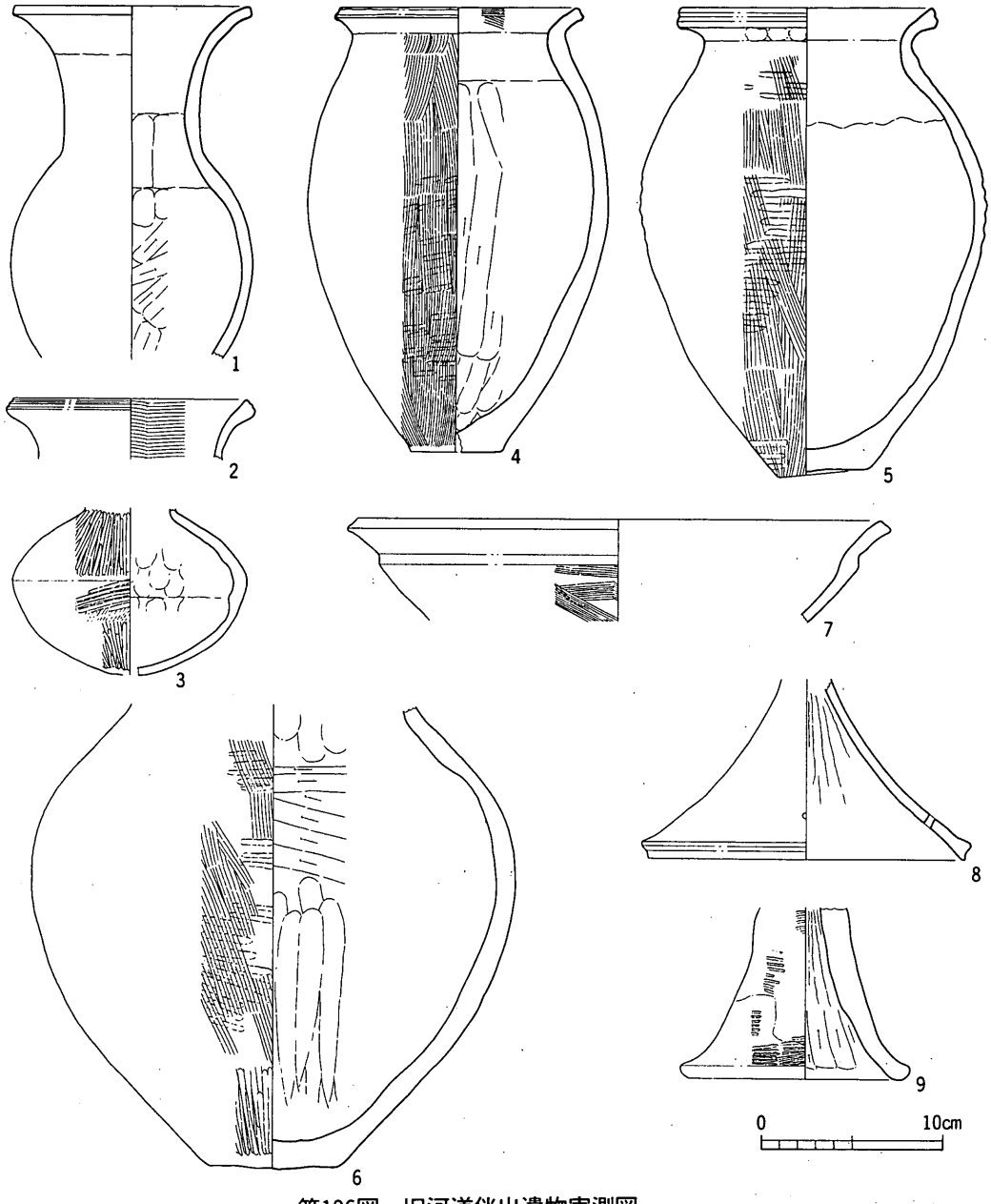
(1)　弥生土器

壺形土器（１～３）

１は口縁部と頸部の変化点が不明瞭であり，緩く外反した口縁部はラッパ状を呈する。肩部が張らず，胴部径が小さい長胴形であるために安定感を欠いた形態である。２は口縁端部を肥大して端面に凹線文を２条施す。３の形態上の特徴は胴部の最大径が胴部高を凌ぐ点である。このため珠算玉形に似る形態を呈するが，肩部と下胴部は緩く湾曲する。器面は縦位にヘラミガキ調整が施されて丁寧に仕上げられている。

甕形土器（４～６）

４，５はく字に外反する口縁部を有する。４は肩部の湾曲が緩く，胴部の最大径が口径に近似



第196図　旧河道伴出遺物実測図

した値を示すために長胴形の形態である。5はやや胴が張る形態であり，口縁端部を肥大化して端面に沈線を施す。

3個体の外面は総て横位の平行タタキ目調整後，ハケ目調整を施し，4，6については内面にヘラケズリ調整の痕跡が残る。底部は総て平底の形態である。

鉢形土器(7)

遺存する破片から復元される形態は器高の低い浅い器形である。口縁部に小規模な屈曲部を有する。

高杯形土器(8)

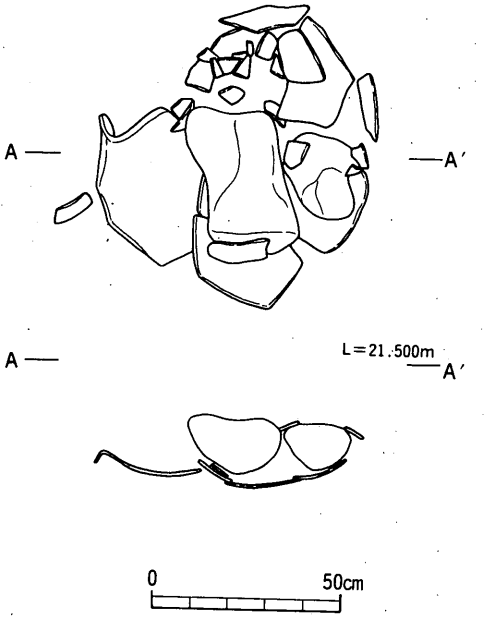
脚部のみ遺存する。端部が肥大し，凹面を有する。

(2) 土製品

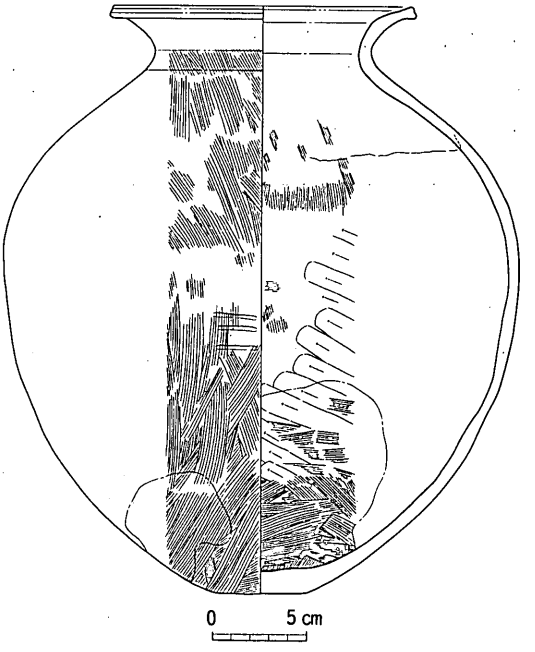
支脚形土製品(9)が1点出土している。脚部のみが遺存するため上部の形態と構造は不明である。したがって直立する器形であるのか，あるいは上部が湾曲する器形であるのかは全く判然としない。

⑤ 土器破砕遺構（ＳＸ05）（第197図）

12－Ｉ区のＶ層中に包蔵され，ほぼ原形に復することのできる弥生土器の甕形土器が2個の円礫によって圧し潰された状態で検出されている。この点から人為的に土器を破壊したことが考えられるが，この行為の意図については土器棺として使用した壺形土器の頸部以上の部位を打欠く行為，あるいは下胴部に焼成後に穿孔を施す行為に共通する要素が存在するものと考えている。ところが周囲に土坑あるいは構造物などの遺構が認められなかったことから当遺構を人工物と断定する根拠に欠けている点も付け加えておかなければならないであろう。



第197図　ＳＸ05実測図



第198図　ＳＸ05伴出遺物実測図

⑥ 土器破砕遺構伴出遺物（第198図）

遺存する遺物はほぼ完形の甕形土器1個体分であり，他の遺物の混入は認められない。この甕形土器は胴部最大径が口径をはるかに凌ぐ形態であり，特に頸部径が小さいために胴が張る。口縁部は緩く湾曲して外反し，端部をやや肥厚する。胴部は内面のヘラケズリ調整により器壁が薄く仕上げられている。

第4節　古墳時代以降の遺構と遺物

1．掘立柱建物跡

①　分布状態

総数5棟を検出した。ただし，調査区北半部に当る11－G，12－G区においても夥しい数量のピット群を検出しており，数個に規則性が認められることから柱穴としての性格を有するピットの存在も想像される。したがって旧状においては，5棟以上の建物跡が存在していたことはほぼ疑いのないところである。ここでは，復元の可能な5棟についてのみ解説を加え，他の規則性を有するピットについては対象外とし，後述する。

5棟の位置関係から群は認められない。ＳＢ06，08がやや近接した位置にあることに気付くが，他は各々の間隔に距離がある。

第25表　掘立柱建物跡一覧表

名　称	略号	位　置	形　態 梁行×桁行	規　模 梁行×桁行	主軸方位	特　記　事　項
第1号掘立柱建物跡	ＳＢ06	9，10-H	1間×3間	340×472	N-34°-W	梁行の柱間距離は，桁行の柱間距離の約2倍を測る。
第2号掘立柱建物跡	ＳＢ07	11－Ⅰ	2間×4間	384×660	N-67°-E	南東部に梁行1間，桁行2間の張出部を有する。
第3号掘立柱建物跡	ＳＢ08	9，10-H	1間×2間以上	148×352以上	N-30°-W	遺存状態が悪い。
第4号掘立柱建物跡	ＳＢ09	16－H	2間×3間	420×540	N-23°-E	総柱による。
第5号掘立柱建物跡	ＳＢ10	12－G	2間×4間	402×568	N-35°-E	総柱による。

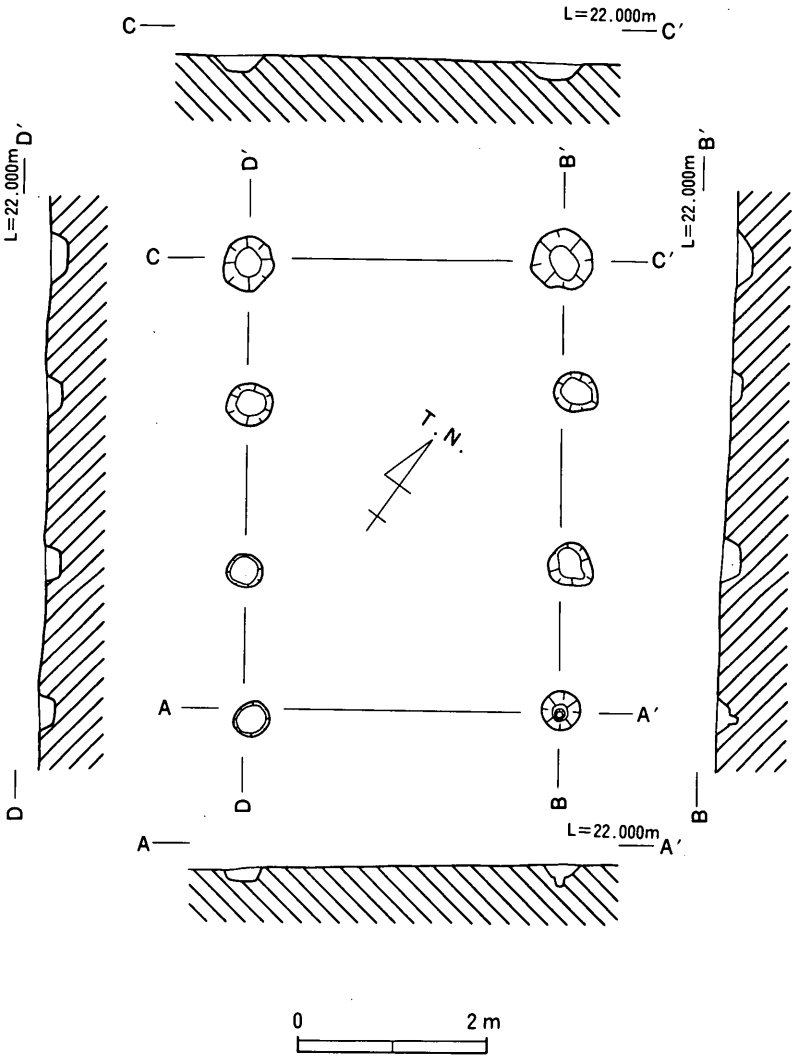
単位cm

②　第1号掘立柱建物跡（ＳＢ06）（第199図）

9－Hと10－H区の区画境において検出した。梁行1間，桁行3間を数え，8個の柱穴によって構成される。各柱穴間の距離は，梁行が平均340cm，桁行平均が157cmである。したがって前者は後者の2倍強を測る。すなわち他の建物跡は梁行の柱穴間の平均距離と桁行のそれがほぼ一致する点から当建物跡の構造が特異であったことが推察できる。

また，南東隅の柱穴にのみ，柱材の痕跡があるが，これは他の柱穴との深度の調整を目的として穿たれたことが考えられる。この痕跡から，使用されていた柱材は直径10cmを越えないことが判る。

なお，建物跡の長軸は真北から34°西に振っている。



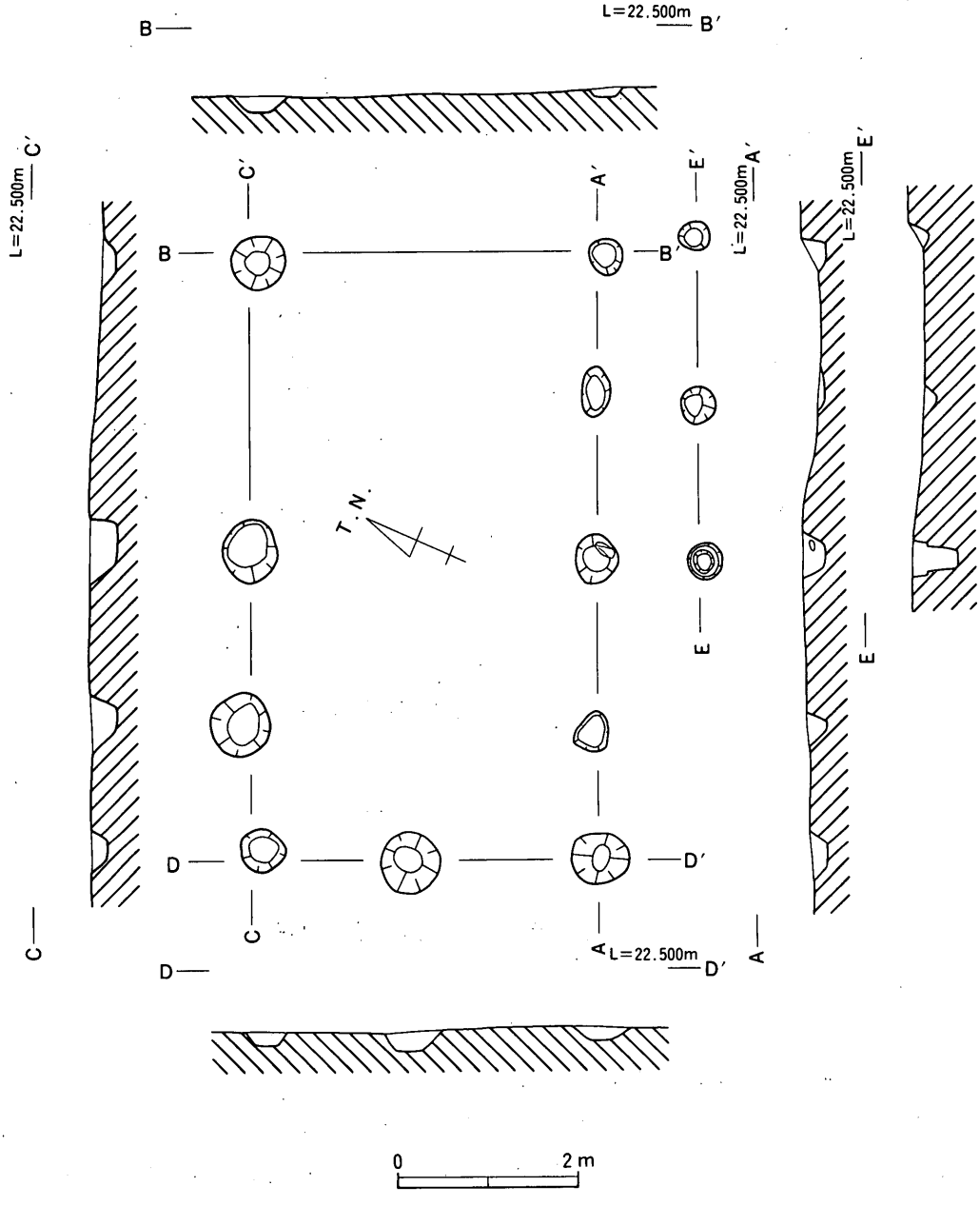
第199図　第１号掘立柱建物跡実測図

③　第２号掘立柱建物跡（ＳＢ07）（第200図）

調査区の南端部にあたる11－Ｉ区において検出した。梁行２間，桁行４間を基本構造とするが，東部は梁行１間から成る。また，南東部に梁行１間，桁行２間の張出部をもつ特異な構造である。したがって柱穴の総数は13個である。なお北部桁行の東北隅柱穴から２個目が未検出であるのは，下層のＳＸ08の埋土との判別を誤り，調査中に失った可能性が高い。本来柱は14本建てられていたものと思われる。

南部中央の柱穴にのみ詰石が認められる。また，柱の痕跡は張出部の南西隅の柱穴にのみ確認できた。柱材は直径28cmを超えない。

建物の長軸は真北から67°東に振った方向にある。



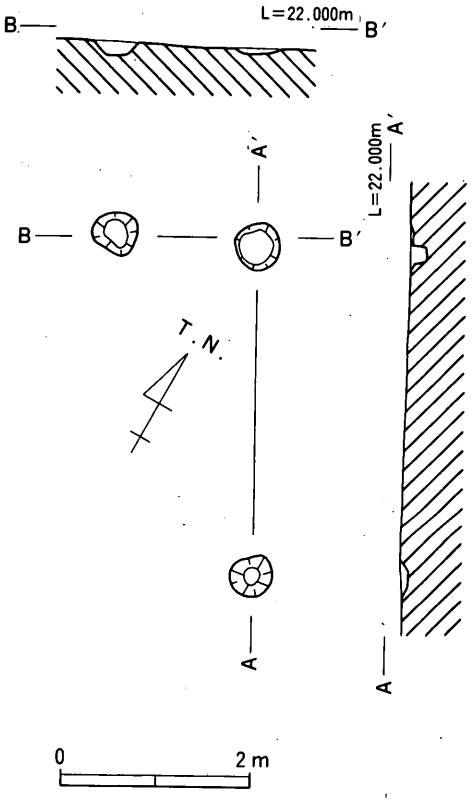
第200図　第２号掘立柱建物跡実測図

④　第３号掘立柱建物跡（ＳＢ08）（第201図）

ＳＢ01に南接する位置（９－Ｈ，10－Ｈ区）に所在する。北東部分の３個の柱穴のみ確認できた。遺存する柱穴の深度から，他の柱穴が削取されたことは容易に判る。

柱材の痕跡は北隅の柱穴に遺存しており，柱材の直径が16cm以下であったことが推測される。

残存する柱穴から推察すると建物の長軸は真北から30°西に振っている。



第201図　第３号掘立柱建物跡実測図

⑤　第４号掘立柱建物跡（ＳＢ09）（第202図）

遺跡の西部に当たる16－Ｈ区において検出された梁行２間，桁行３間の建物跡である。前３者の建物跡と異なり，総柱による点が特徴である。

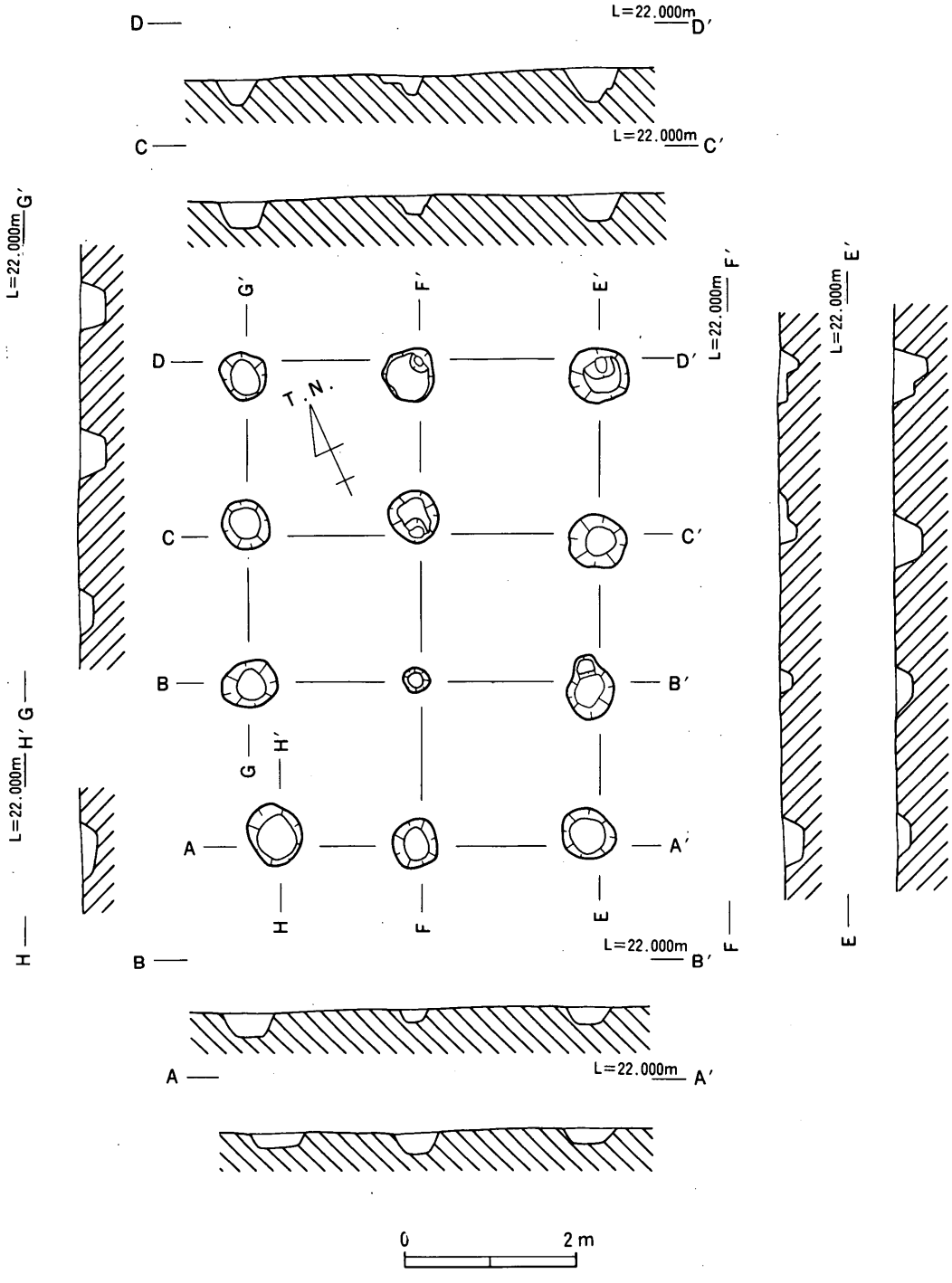
柱穴は12個を有する。このうち北部の３個に柱痕が残り，東部の１個に抜取痕が認められる。内部の柱穴２個のうち，南の１個が他の11個に比して小規模である。建物の上部構造を明らかにする上で，何らかの意味をもつのであろうか。

建物の長軸方位は真北から23°東へ振る。

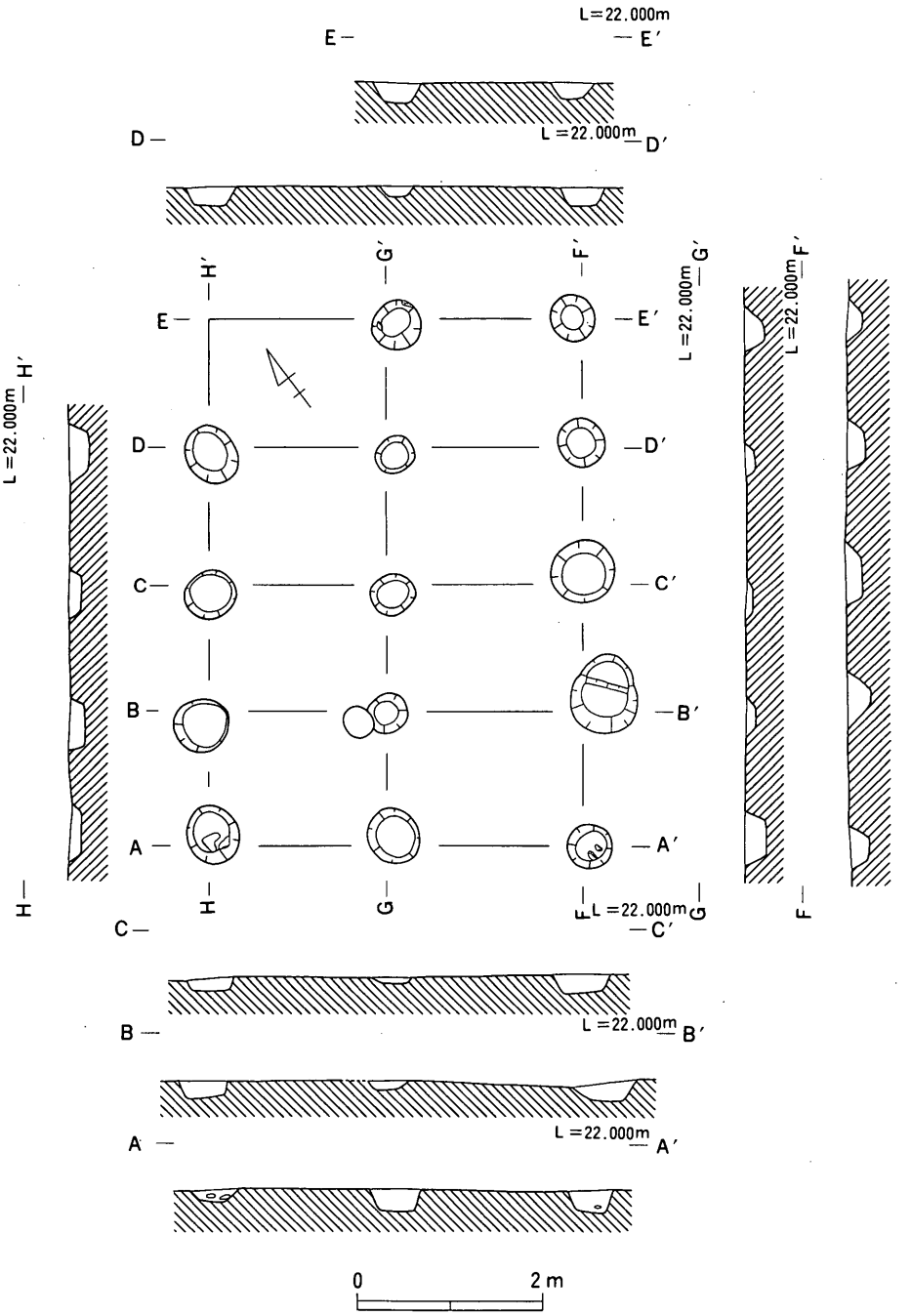
⑥　第５号掘立柱建物跡（ＳＢ10）（第203図）

12－Ｇ区において検出した。梁行２間，桁行４間から成る。ＳＢ04と同様，総柱の構造であり，15個の柱穴を確認した。このうち南部の２個に根石もしくは詰石と考えられる石塊が遺存している。石材は砂岩の円礫である。総ての柱が根石をもたない理由は基盤の土壌が砂礫から成るために柱が沈下する現象が起り得なかったことが考えられる。これはＳＢ10に限らず，他の建物についても同様であろう。

長軸は，真北から35°東に振っている。



第202図　第４号掘立柱建物跡実測図



第203図　第５号掘立柱建物跡実測図

⑦ 掘立柱建物跡伴出遺物（第204図）

掘立柱建物跡の柱穴の埋土に包蔵される遺物は，鎮壇具などとして用いられる一部の儀器を除き，その廃絶時に混入することが多いと考えられる。本遺跡の同遺構の出土遺物についても総て小破片であることから廃絶時に偶然混入したことが推測される。したがって遺物に与えられる年代観は遺構の構築時期とは異なる点をあらかじめ明確にしておく必要があろう。また遺構が遺物包含層を穿って構築されていることから，当然掘削時に微細な下層遺物が混入することも考慮しなければならない点である。

ＳＢ06は遺物を伴出しない。

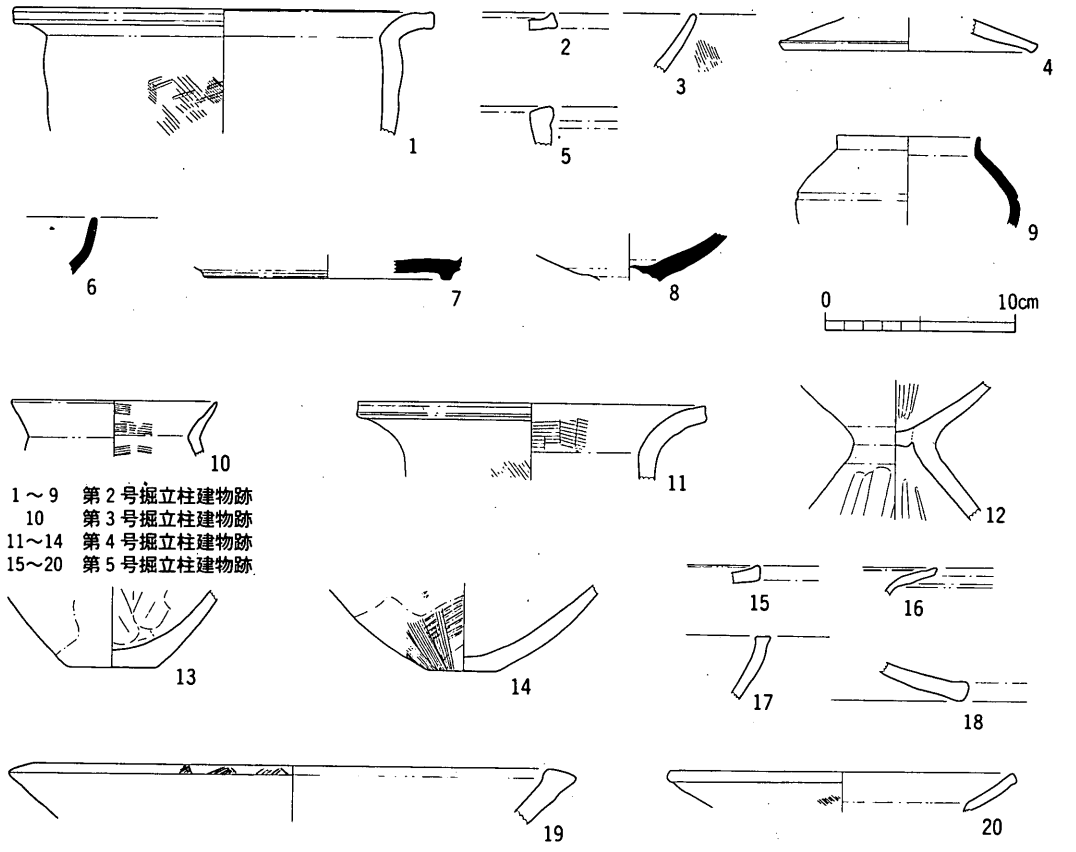
ＳＢ07の１～５は土師器であるが，香川県においては在地の土師器を出土する遺跡の調査例が少い点から，特にその編年研究は未着手の状況にある。このため本遺跡出土の土師器については特殊な遺物を除き，年代観を与えることができていない。１は水平気味に外反する口縁形態の鉢形土器であり，やや長胴を有すると考えられる。特に口縁部の器壁が厚い造作である。２は甕形土器の口縁部と考えられよう。３，５はいずれも鉢形土器であるが，前者は椀形の浅い器形，後者は口縁部がほぼ直立して端部を肥厚する器形である。４は高杯形土器の脚部であり，端面を形成する。

６～９の須恵器について時期を比定することが可能な遺物は短頸壺(9)である。ほぼ直立する短い頸部を有し，肩部から胴部にかけては緩く湾曲する形態である。肩部に沈線１条を施す。この器形はII型式第４段階の遺物に類することから６世紀後半頃に埋没したことが判る。ところが７の高台を有する杯が共伴しており，遺構の埋没過程は漸次的であったことが推測できるのである。ただし，７については遺存状態が悪く，明確な時期の判断は難しい。

ＳＢ08より出土した遺物について器形復元が可能な甕形土器１点を図化した。しかしながらその遺存状態は悪い。

ＳＢ09の伴出遺物は総て弥生土器あるいは土師器と考えられる。11の壺形土器は厚い器壁を有する点と口縁端部を凹面化する点が特徴である。12は高杯形土器であり，杯部内面にヘラミガキ調整の痕跡が顕著である。13，14については壺あるいは甕形土器の底部と考えられるが，いずれも平底の形態である。13の内面は底部までヘラケズリ調整を施す。

ＳＢ10の伴出遺物についても細片が多いために器形を復元することが可能な遺物は限定される。15，16，20は壺あるいは甕形土器，17，19は鉢形土器，18は高杯形土器である。19は口縁端部にヘラ描鋸歯文を施す。



第204図　第2・3・4・5号掘立柱建物跡伴出遺物実測図

2．土坑

① 第４号土坑（ＳＫ04）（第205図）

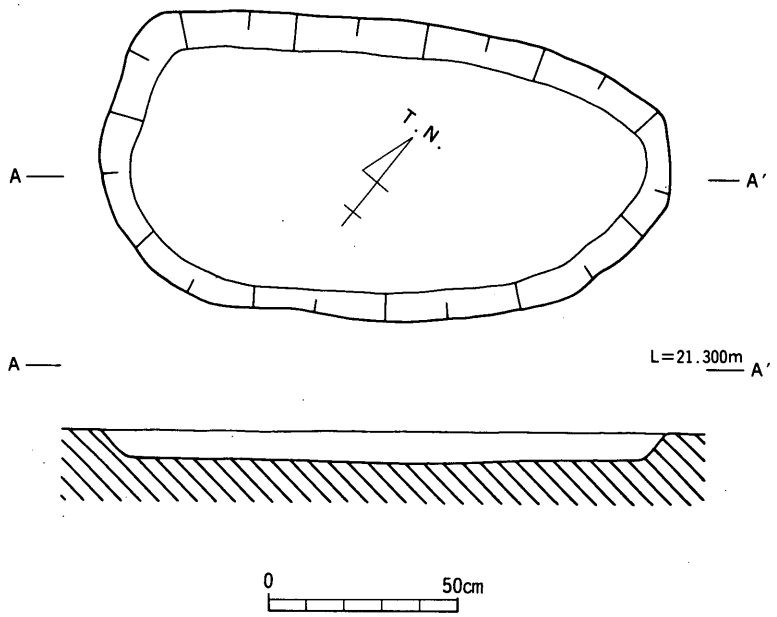
10－Ｆ区の南西隅部分において検出した。弥生時代後期の包含層であるＶ層を穿って構築されている。

埋土は黒色の砂質土を１種類確認したに止まり，複数の時期に及ぶ堆積の状況は認められなかった。

土坑の規模は長軸150cm，短軸80cm，深さ８cmを測り，平面形態は東北部分と南西隅部分が孤を描く不整形な長方形である。また，床面は，ほぼ水平に掘削されており，中央部が壁面下の部分に比して若干深い程度である。壁面は緩傾斜を有する。

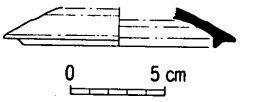
遺物は土師器，須恵器の破片が少量出土したが，総て埋土中に包蔵されていたものであり，床面直上から出土した遺物はない。須恵器の杯蓋片からこの遺構が古墳時代後期には埋没していることが判る。

形態，規模ともにヒトの遺体を埋葬するに適当であり，しかも埋土から一時期に埋没したことが判る点などを手がかりにすると，この遺構は埋葬施設の可能性をもつが，断定する根拠に欠けている。



第205図　第４号土坑実測図

② 第４号土坑伴出遺物（第206図）



第206図　第４号土坑伴出遺物実測図

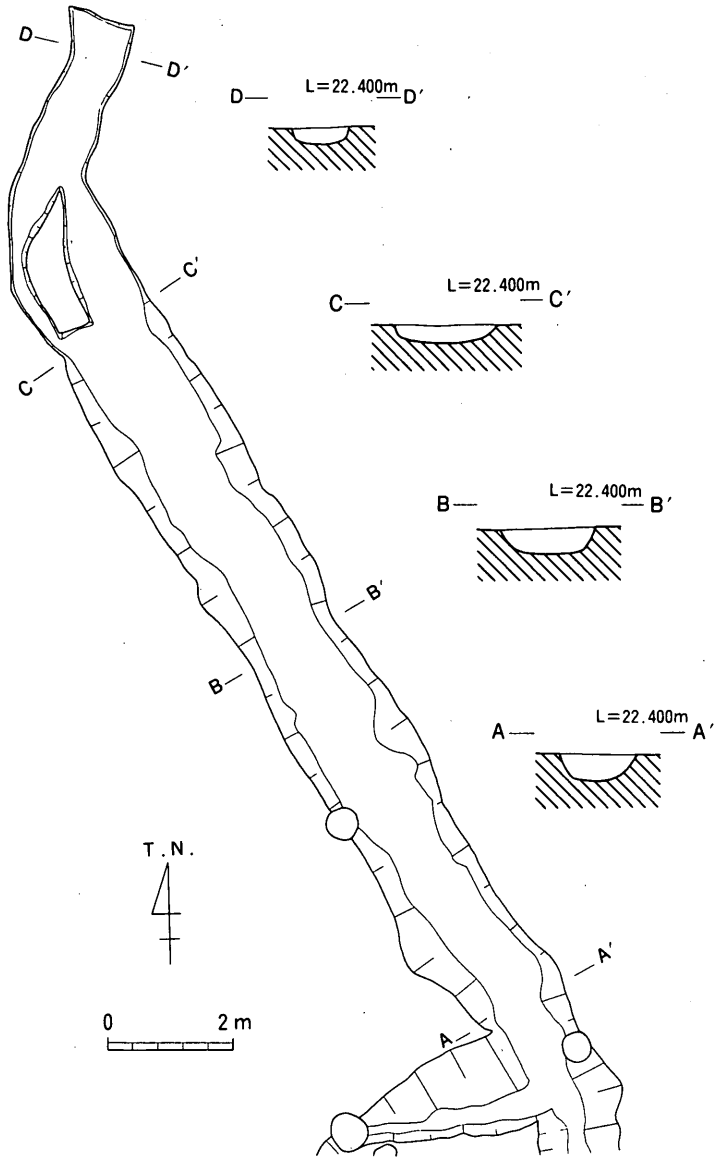
須恵器蓋杯の杯蓋１点を図化した。頂部を失っているために宝珠つまみを有するか否かは判らないが，復元できる器形は器高約2.5cmの扁平な形態である。かえりは内傾するものの口縁端部よりも依然突出する。これらの特徴からIII型式第１段階の遺物であると考えられる。したがって時期決定の資料が他にない以上，当遺構の埋没時期は７世紀前半頃と推定される。

（註）

本稿における須恵器による時期決定は総て中村浩氏の陶邑古窯跡群出土遺物の編年観に従った。中村浩「第６章和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」中村他『陶邑III』，1978年。

3．溝状遺構

① ＳＤ01（第207図）



第207図　ＳＤ01実測図

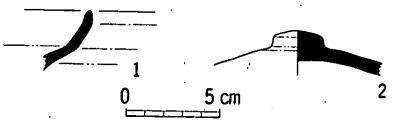
12－Ｇ区のⅣ層を穿っている。Ｈライン以南の部分は未検出であるが，全長約20.4mに及び，このうち約17.4mがほぼ直線的に遺存する。断面形態はいわゆるＵ字溝に属し，南端部から約9.4mの地点に最深部を有する。その深さは，約40cmを測る。一方，北部の遺存状態は悪く，北端部が最も浅い。

また，南端部においては直角に分流する遺構となることが判明している。しかしながら南西流する枝溝については，合流地点以外の部分を確認することはできなかった。

ところで，当溝状遺構の直線部分の中心軸は真北から西へ約30°振った方向を示す。これは現善通寺市域にみられる方格地割の方向性と，従前より多くの研究者により唱えられている旧多度郡の条里の方向性に一致する。しかも既に条里遺構と考えられる遺構が，稲木遺跡Ｂ地区，中村遺跡において検出されており，当遺構と同一の方向性を有することが確認されている。しかしながら当遺構については埋没時期および遺跡における役割などを明確にできるほど資料に恵まれていないのが現実であり，積極的な根拠を欠いている。

② ＳＤ01伴出遺物（第208図）

器形復元の可能な須恵器片２点を図化したが，これらが遺構の機能していた時期の遺物であるのか，あるいは埋没時に包蔵された遺物であるのかは断定できない。



第208図　ＳＤ01伴出遺物実測図

１は杯身形，２は杯蓋形の器形である。１の口縁部はほぼ直立して端部を丸く，細く成形する。胴部は外面のヘラケズリ調整により複数の稜線を有する。

２の宝珠つまみはくびれ部を有しない。したがって既に本来の形態を失い，形骸化する途上にあると考えられる。

4．不明遺構

① ＳＸ06（第210図）

12－Ｇ，13－Ｇ区の区画境南端部において検出した方形の土坑である。平面形態は東西方向に長い長方形であるが，北東部に長方形の小規模な張り出し部分を有する。規模は本体部分が長軸約888cm，短軸約538cm，張り出し部分が長軸約210cm，短軸約100cmを測る。壁面はほぼ垂直に穿たれており，北壁に沿う位置に最深部（約16cm）がある。一方，南壁の遺存状態は悪い。また，西壁部分のみ二段に掘削されているために最大幅約110cmのテラス部分が造られており，竪穴住居跡のベッド状遺構に酷似する形態が認められる。

床面は西部から東部へ緩く傾斜するが，凹凸はない。本体部分と張り出し部分の床面の比高差はない。

遺構の埋土は，上位が最大径５cmの小礫と砂を含む黒色を帯びた灰褐色粘質土，下位が褐色砂質土である。上位に堆積する土壌は，流水により運搬された土砂であろう。

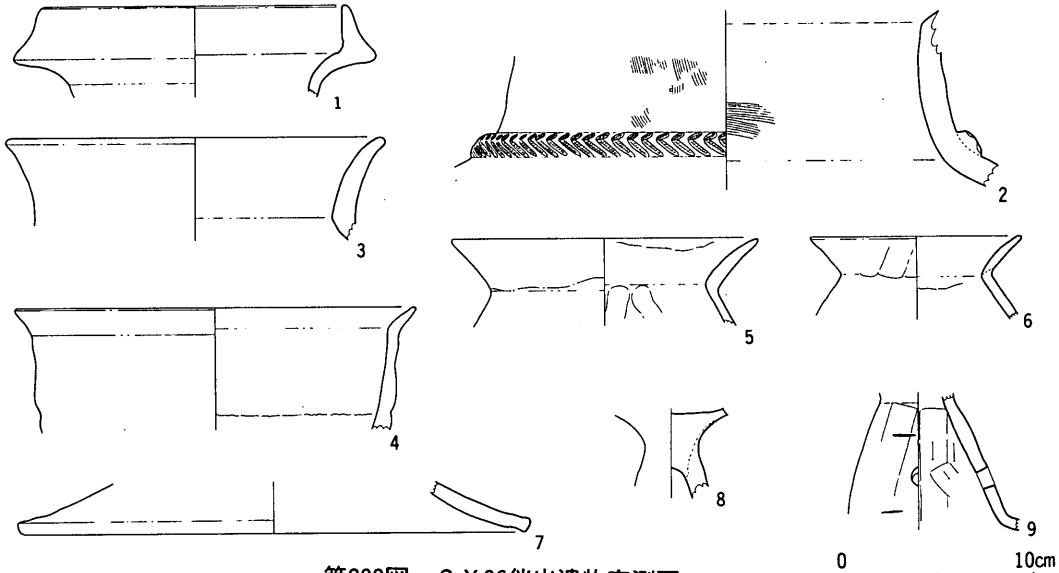
遺物は弥生土器と鉄鏃１点が出土している。床面直上において検出された遺物は少い。

床面にピット２個を検出したが，規則性は認められず，また，周溝，炉跡などの内部施設を有しないことから，竪穴住居跡とは考えられない。上部構造の有無の問題点をはじめ，不可解な点の多い遺構である。

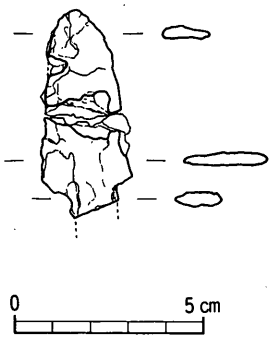
② ＳＸ06伴出遺物

(1) 弥生土器（第209図）

時期を明確にし得る資料は少いが，２は明らかに弥生土器の壺形土器である。１は二重口縁の形態であり，端部はやや内傾する。



第209図　ＳＸ06伴出遺物実測図



第211図　ＳＸ06伴出鉄製品実測図

3，5，6は甕形土器であるが，3が直立気味の長い口縁部を有するのに対して，5，6の口縁部はく字に外反する。いずれも端部は丸く形成する。ところで，これらの甕形土器の口縁部はほとんど湾曲しない点が特徴である。これは畿内第5様式に併行すると考えられる器形よりも新しい様相であろうか。

4の胴部形態は不明であるが，鉢形土器であろう。

7～9は高杯形土器の脚部である。9は屈曲部を有する。

(2)　鉄製品（第211図）

有茎式の鉄鏃1点が出土している。茎部の大部分を失っているが，鏃身部はほぼ原形を保っており，長軸長4.8cm，最大幅2.5cmを測ることができる。ただし既に劣化は著しく，剝離した部分も多く認められる。鏃身部と茎部の接点は直角に屈曲してかえしの機能を有する。

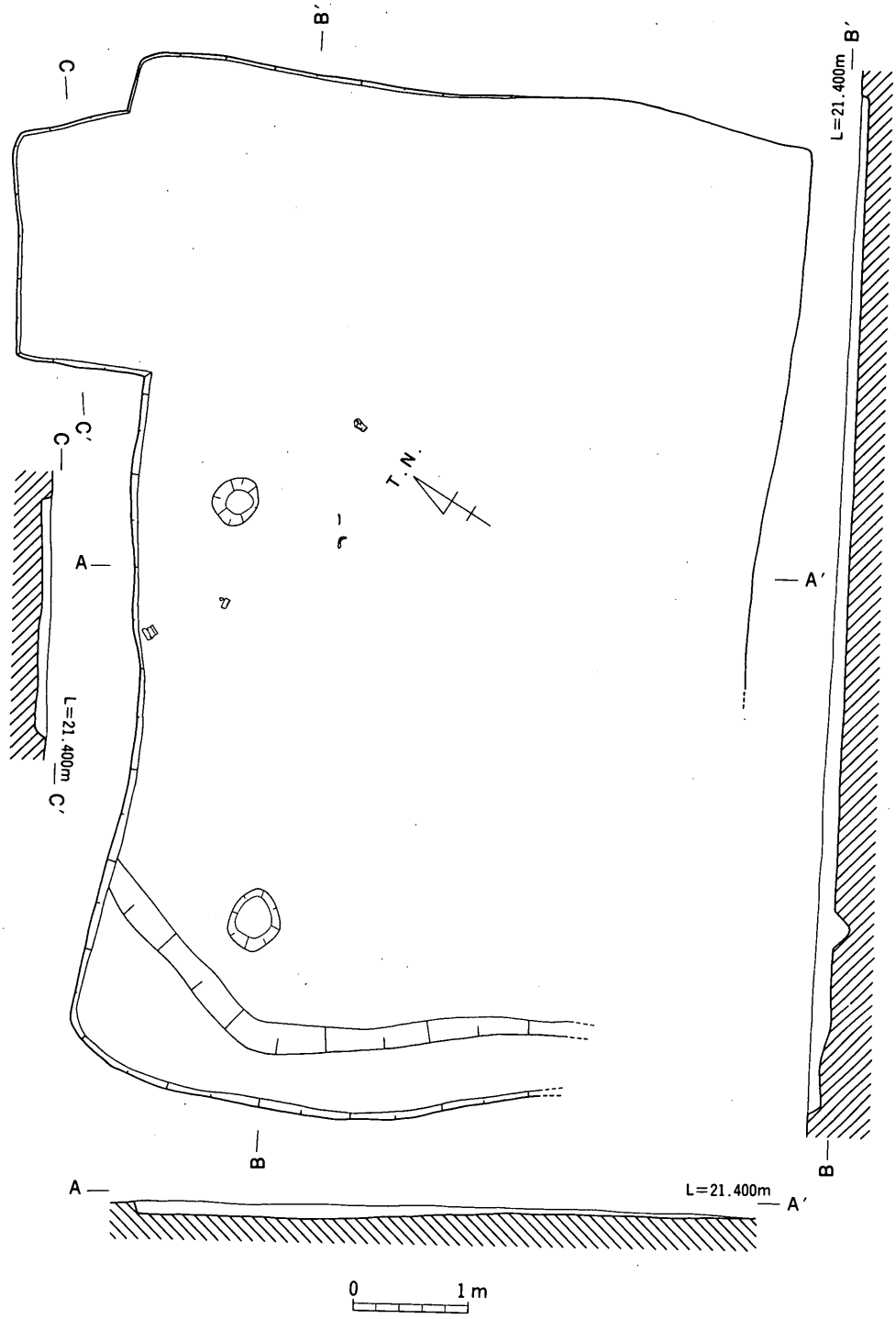
③　ＳＸ07（第212図）

10－Ｇ区のほぼ中央部に位置し，Ⅲ層掘削途中に検出された。Ⅳ層を基盤とする。

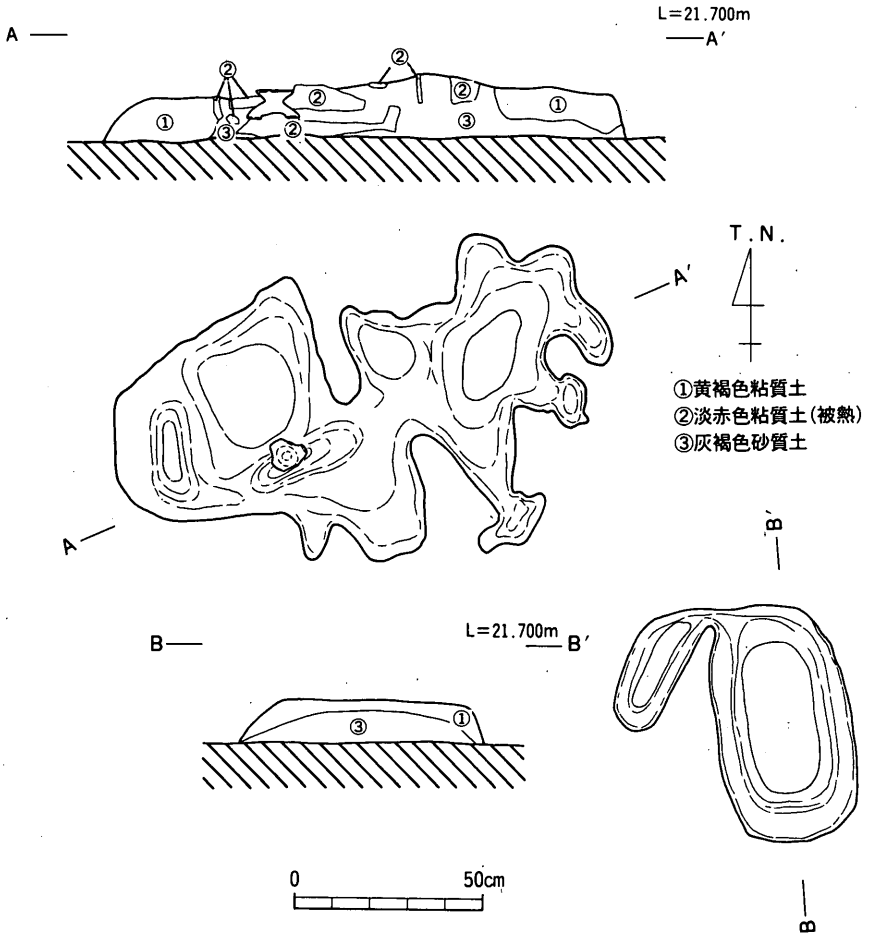
2基の粘土塊から成るが，共に不整形な形態である。とりわけ北西の遺構（これを第1粘土塊として，他を第2粘土塊とする）は崩壊が著しく，歪曲が激しいために既に旧状を復元することは難しい。そして2基の粘土塊が同一の遺構であったのか否かの確認も不可能である。個々の規模は第1粘土塊が最大幅136cm，高さ17cm，第2粘土塊が最大幅63cm，高さ36cmを測る。両者に共通する特徴は，粘土塊が灰褐色砂質土中に黄褐色粘土，赤色粘土が混在する点である。黄褐色粘土は，灰褐色砂質土を被覆するか，あるいは，その縁辺部の上位を覆う位置に認められ，赤色粘土は，灰褐色砂質土中に散在する。また後者には被熱の痕跡が認められ，一部が焼土塊化していることも判っている。

第1粘土塊においては転倒した須恵器高杯の完形品を検出した。脚部が，上面に露出しており，杯部は灰褐色砂質土中に埋没している。しかしながら基盤層上面からは約5cm遊離している。遺物の下位からは赤色粘土の焼土塊が検出されている。したがって遺物は遺構が構築された当初の位置になく，移動していることが考えられる。

以上のデータから，当遺構が火の使用を目的として築かれたことは疑う余地はない。すなわち竈あるいは炉跡に類する性格を有するのではなかろうか。すると転倒する高杯は脚部が土器を固定するために使われていたことも考えられる。京都府長岡京市下海印寺遺跡からは，古墳時代後期の高杯の脚部を支脚として転用した竈遺構の出土例が報告されている(註1)ことも参考にしたい。しかしながら，この遺構に関連する居住遺構などは他に認められない。



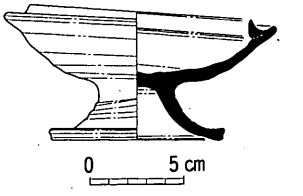
第210図　ＳＸ06実測図



第212図　ＳＸ07実測図

④　ＳＸ07伴出遺物（第212図）

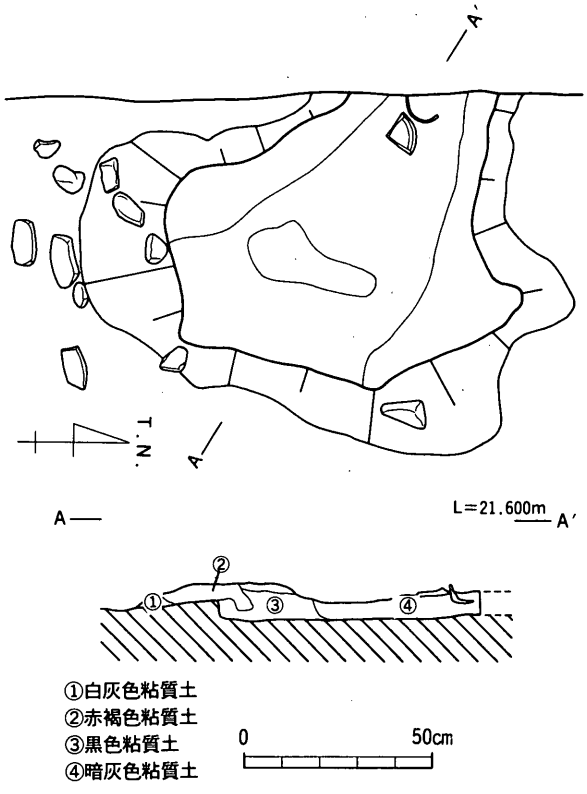
遺構に伴うことが確実な遺物は粘土塊中に倒立した状態で埋没していた須恵器高杯１点である。遺物の遺存状態は良好であり，口縁部と脚部の一部を欠くもののほぼ完存している。



第213図　ＳＸ07伴出遺物実測図

杯部は浅い形態であり，低いかえりを有する。また脚部は低い成形であり，脚端部はやや肥厚して凹面化する。これらの形態上の特徴はII型式第６段階の遺物に顕著である。したがって当遺構の構築時期は６世紀終末頃の時期を逆上ることはないと考えている。

⑤　ＳＸ08（第214図）

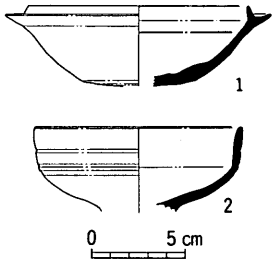


第214図　ＳＸ08実測図

11－Ｆ区南西隅において，Ⅲ層掘削時に検出した。最大幅132cm，高さ10cmを測る不整形な形態の粘土塊である。粘土塊は，黒色粘質土，暗灰色粘質土，赤褐色粘質土，白灰色粘質土の４種類の土壌によって形成されている。平面的な各々の層序関係は前２者を基盤として，白灰色粘質土がその縁辺部に堆積し，赤褐色粘土がほぼ中央部に認められる。

西端部上面において，須恵器杯身と高杯の一部を検出した。共に口縁部を上にして埋置されており，半分以上を滅失している。

当遺構の性格についても断定することはできないが，ＳＸ07に似た性格を有するものと考えている。ただし，炭化物などの遺物は全く確認されていない。



第215図　ＳＸ08伴出遺物実測図

⑥　ＳＸ08伴出遺物（第215図）

粘土塊上面に埋置されていた遺物は須恵器蓋杯の杯身１点と高杯の杯部１点である。前者は内傾する短いかえりを有する形態であり，器高の低い浅い器形である。高杯は蓋杯の杯蓋を逆転した形態の杯部を有する。既に外面に稜線が形成されることはなくなり沈線２条が施される。

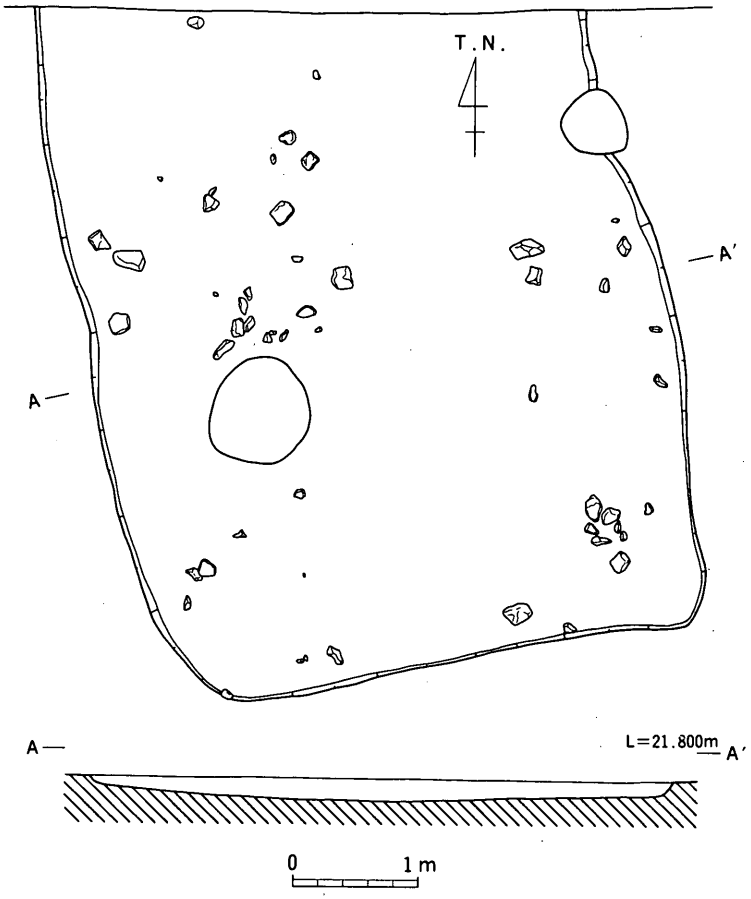
ところで当遺構についてはＳＸ07と同様に炉跡状の性格を考えているが，遺物に被熱の痕跡は認められない。さていずれもⅡ型式第６段階の遺物に類する器形である。しかもこれらの出土位置が上位である点に注意すると，遺構は６世紀終末頃までは機能していたことが判る。

⑦　ＳＸ09（第216図）

10－Ｈ区において検出された平面形態が隅丸長方形の浅い土坑である。ただし10－Ｇ区では確認できなかったことから，北端部分については明らかでない。そこで復元規模は長軸600cm前後，短軸464cm，最深部４～５cmであることが推定される。壁面は垂直に近く掘削されており，床面はほぼ水平である。床面には施設を有しない。

遺構はⅣ層を穿っており，褐色砂質土と黒色砂質土により埋没している。埋土からは弥生土器，土師器，須恵器が出土する以外に10～20cm大の礫が多量に検出されている。これらは特に床面直上に集中する。しかしながら，規則性が認められないことから人為的な遺構とは考えられない。したがって遺構が埋没する際に混入したものであろう。

さて，この遺構の性格については，形態上は竪穴住居跡に酷似しているが，床面に柱穴，炉跡，竈，周溝などの施設を有しない以上，その可能性はないと言える。もちろん上部構造の有無についても判明しない。したがって，現段階では，性格付けの手掛かりは皆無である。ただし，類似する遺構が他に２基（ＳＸ10，11）検出されていることは注目したい。



第216図　ＳＸ09実測図

⑧　ＳＸ09伴出遺物（第217図）

1～4は壺形土器である。1～3の口縁部はほぼ水平に開口する。1は端部を肥厚する形態の大型品と考えられる。4は二重口縁を有する。口縁部は内傾気味に立ち上がり，水平な端面を造出する。さらに外面を竹管による刺突文とヘラ描鋸歯文で飾る。

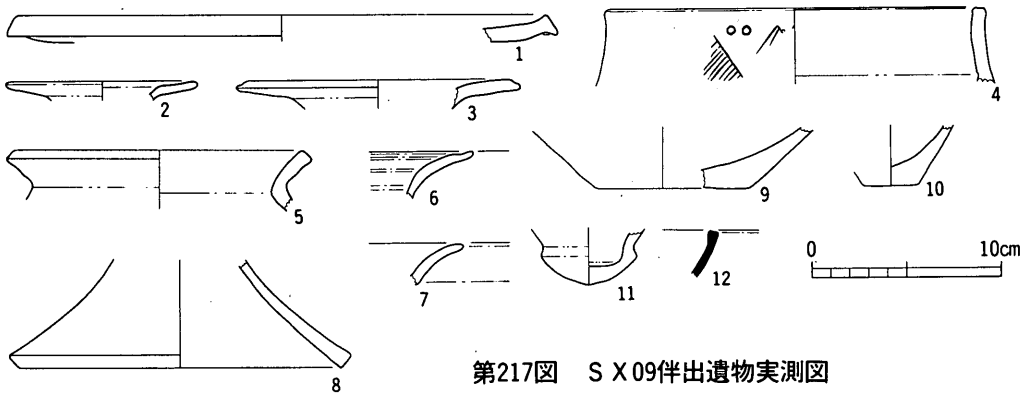
5はく字に外反する甕形土器の口縁部である。

6～8は高杯形土器である。6は口縁部内面に丁寧なナデ調整を施すことにより複数の段を形成する点が特徴である。8は脚端部を最も肥厚する形態である。

9，10は壺あるいは甕形土器の底部と考えられる。共に平底の形態である。

11は小型の容量の小さい胴部と長い口縁部を有する壺形土器である。底部は尖底状の形態である。

当遺構から出土した遺物は図化した上記の11点をはじめ大部分が弥生時代のものと考えられる土器片であるが，須恵器（12）の混在がみられる。したがって遺構の埋没時期を知る手掛かりとしては最新の資料である。12は細片であるために情報量は乏しいが，鉢形土器の口縁部であると考えられる。端部を凹面化する特徴を有する。



第217図　ＳＸ09伴出遺物実測図

⑨　ＳＸ10（第218図）

11－Ｆ区においてⅢ層除去後に検出された。Ⅳ層を穿って構築されている。平面形態は，長方形を呈し，長軸方向がほぼ東西方向に一致する。規模は長軸656cm，短軸556cm，深さ20cmである。

この土坑の特徴は，東壁中央部に方形の未掘削部分を残している点である。この部分の規模は東西幅168cm，南北最大幅224cmを測る。

遺構の壁面の傾斜は急であり，床面は水平である。また床面からは柱穴などの施設は全く検出されていない。埋土から出土する遺物は遺存状態が悪く，床面直上においては遺物の出土は認められない。したがって遺構が機能していた当時を知る遺物はない。

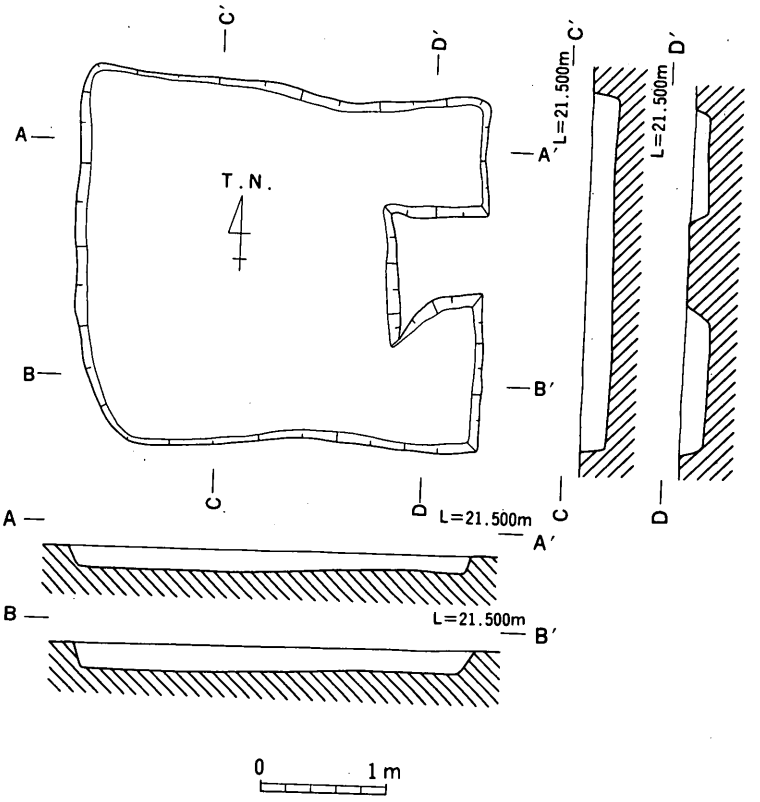
ＳＸ09同様，性格については皆目見当が及ばず，また，その特殊な形態も不可解であるが，形

態，規模から推測される遺構としては竪穴住居跡に最も類似点を多く見出せるのではなかろうか。

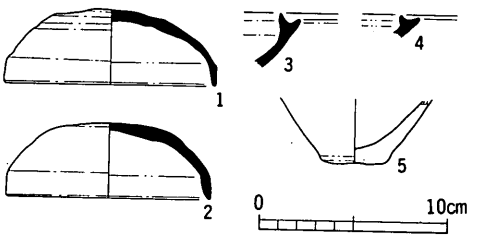
⑩　ＳＸ10伴出遺物（第219図）

埋土から出土した遺物は少量である。土師器底部１点，須恵器蓋杯の杯蓋２点，杯身２点を図化した。１は平底の形態であるが，他に特徴はない。杯蓋１，２は小型品であり，末端部を直立させる点にII型式の第５あるいは第６段階に分類される資料の特徴が認められる。ただし，頂部外面に回転ヘラケズリ調整を加える技法は前段階の名残りである。３，４の低いかえりを有する資料もまたII型式の第６段階に分類し得るであろう。

したがって当遺構は６世紀終末頃から７世紀初頭頃において完全に埋没したと考えられる。



第218図　ＳＸ10実測図



第219図　ＳＸ10伴出遺物実測図

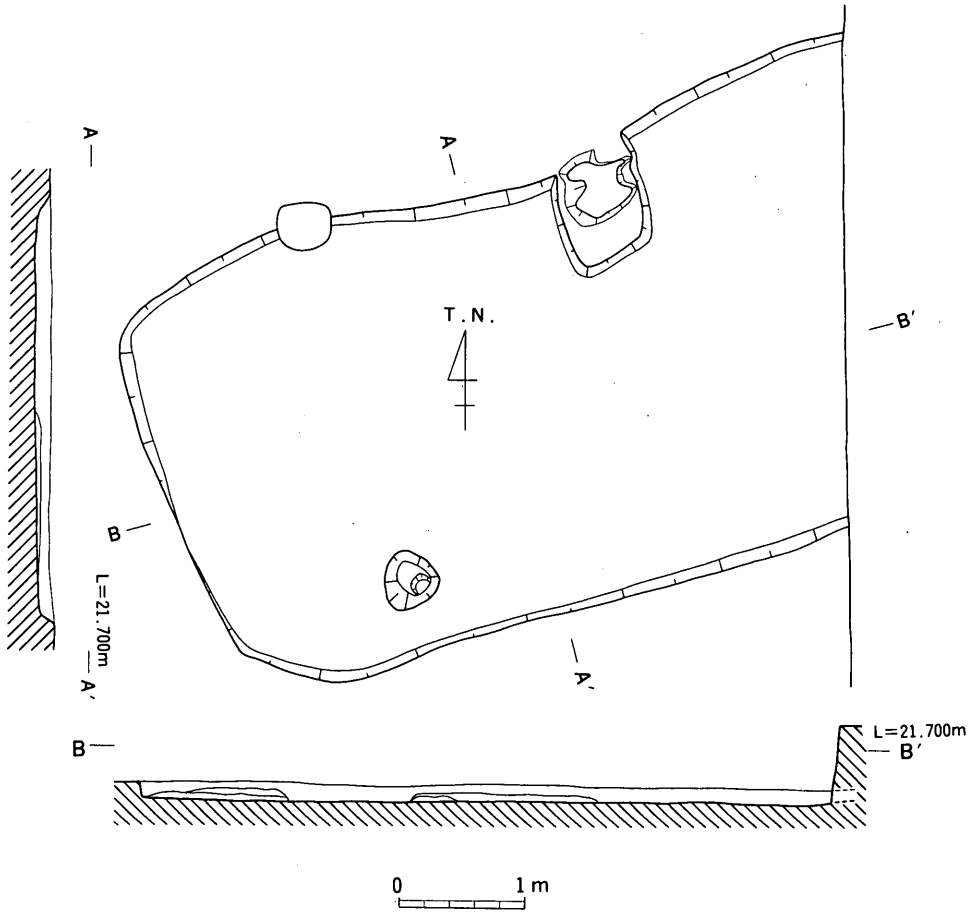
⑪　ＳＸ11（第220図）

11－Ｇ区東部において検出した。前述のＳＸ09・10同様に，性格不明の方形土坑である。東端部が判然としないが，遺存する平面形態は東西方向に長い長方形である。規模は長軸600cm以上，短軸336cm，深さ12cmを測り，壁面はほぼ垂直に，床面は水平に穿たれている。床面においては，南西隅部分にピットを１個検出している。このピットには柱痕が遺存していることから，上部構造を有していたことが判る。柱痕の最大径は16cmである。他には施設は検出されていない。

当遺構の特徴は，北壁中央部に方形の未掘削部分をもち，その上面に焼土塊が検出された点である。方形の未掘削部分は長軸96cm，短軸78cmの規模がある。この特殊な形態はＳＸ10に共通す

るが，ＳＸ10においては焼土塊は検出されていない。焼土塊は２層に分層できる。共に灰褐色砂質土を基盤としているが，上位に焼土，下位に炭化物が多く包蔵されている。その規模は最大幅56cm，高さ８cmを測り，形態は不整形である。性格は炉跡が考えられようか。

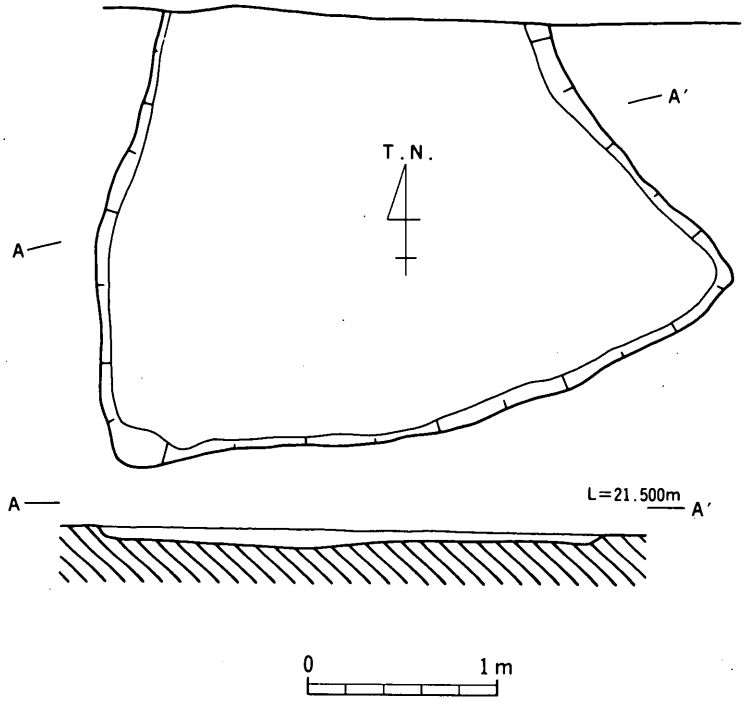
埋土中に包蔵していた遺物から，遺構の時期，性格を知る資料は認められない。また図化の可能な遺物は遺存しない。



第220図　ＳＸ11実測図

⑫　ＳＸ12（第221図）

11－Ｇ区において検出した。ＳＸ10の南方２ｍに位置する不整形な方形の土坑である。北部が遺存しないために，全体の規模は明らかでないが，最大幅336cm，最深部10cmを測る。壁面が緩く傾斜し，床面は東から西へ傾斜する。床面に柱穴，炉跡，周溝などの施設は皆無である。また，



第221図　ＳＸ12実測図

床面直上から出土した遺物はない。

形態が不定形であるために，人為的な遺構か否か断定することは難しいが，ＳＸ09～11とは明らかに異なる性格を有すると考えられる。

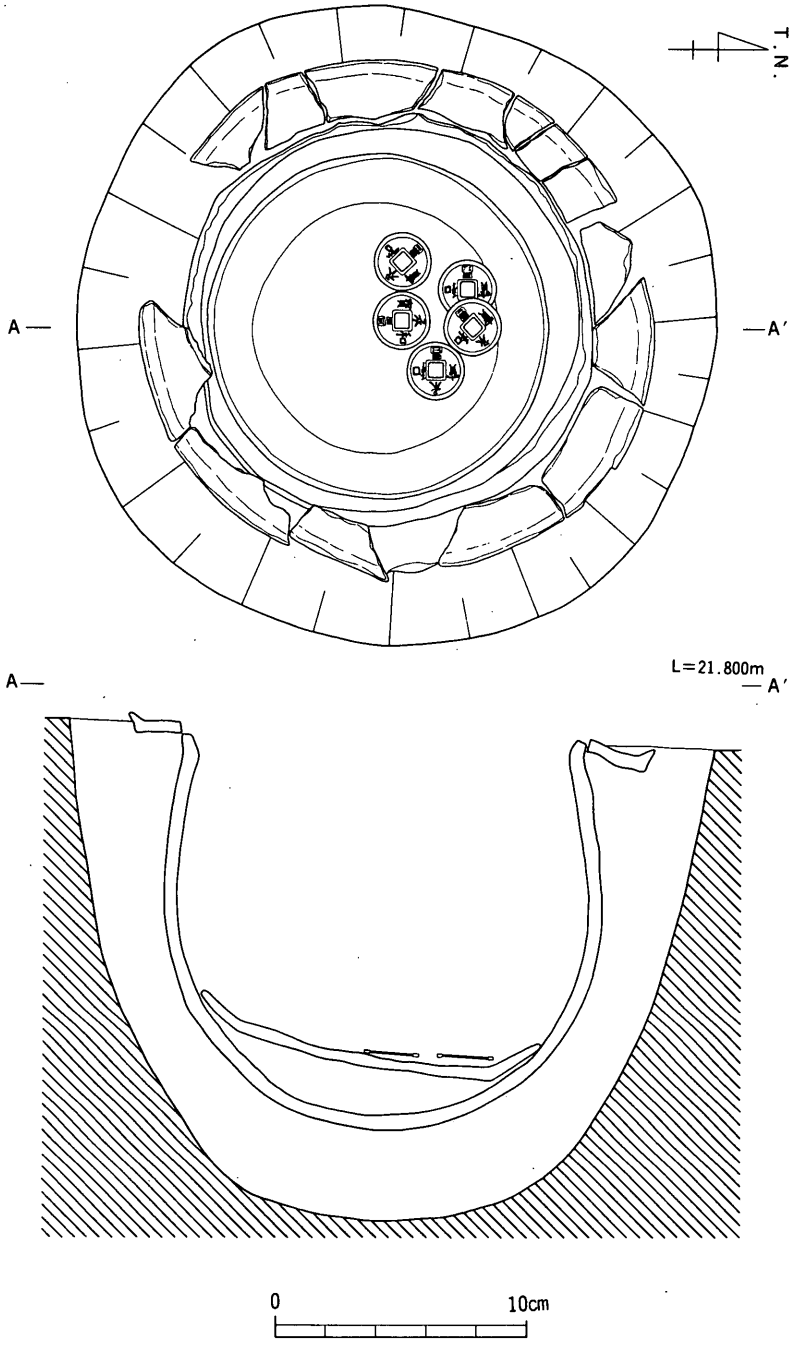
⑬　ＳＸ13（胞衣埋納遺構）（第222図）

土師器甕１個体を埋設した平面形態が円形を呈する小規模な土坑である。規模は径25.6cm，最深部20cmを測る。

甕内部より硬質の土師器皿１点が出土しているが，皿内部において銭文を表にした状態の銅銭５枚が検出されたことによりこれらが意図的に収納されたことは明らかである。銅銭は総て「承和昌宝」（皇朝十二銭の１種。835年初鋳。）である。遺存状態は比較的良好であったが，銭文の検出作業時に一部を破損した。

また甕の最下位において泥化した有機物質が沈殿しているのを確認した。これは皿の下位に存在する点と明らかに埋土とは異なる物質である点から内容物と考えられる。

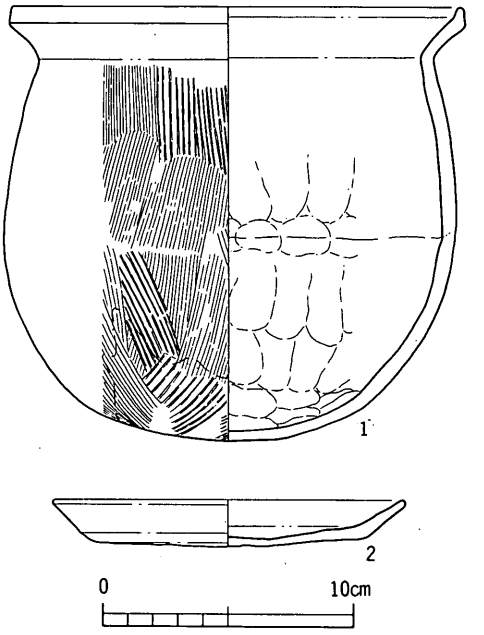
なお当遺構については蓋状の施設の存在は認められない。



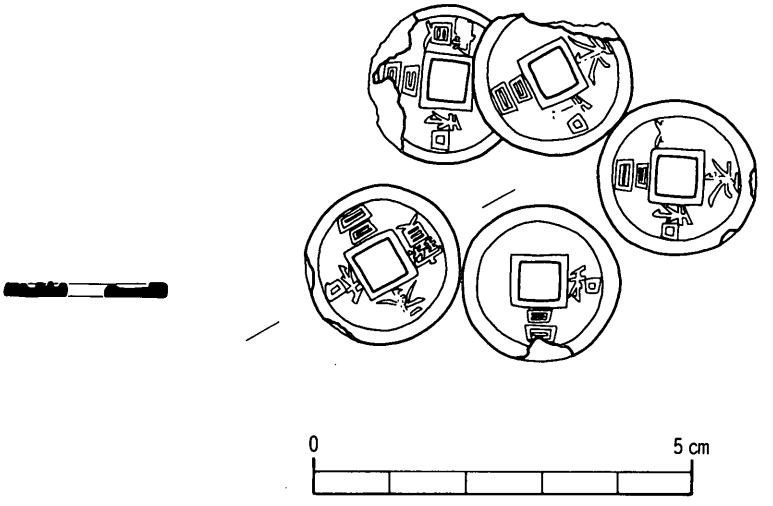
第222図　ＳＸ13実測図

ところで当遺構に類すると考えられる資料が奈良県平城京跡右京五条四坊三坪の調査により検出されている。(註2) 火葬墓ＳＸ030と呼称される遺構より出土した薬壺形の須恵器は内部に墨挺１点，筆管１点，和同開珎４点を有しており，特に骨片が出土したことにより蔵骨器の性格が与えられている。ところがこの資料について水野正好氏は骨片を犀角あるいは刀子の角柄と考えることにより，大概が文献史料の記載に一致する点から(註3) その性格を「胞衣」壺と考えられている。(註4) さらに氏は和歌山県岡田遺跡検出例(註5)と本資料についても言及されており，いずれもが胞衣の埋納遺構の可能性を有することを指摘されている。(註6)

また平城京跡検出の資料について，埋納位置が同時期に併存していたと考えられる建物ＳＢ025と密接な関連を有していることを明らかにされており，埋納位置が建物の出入口の柱許に当たるとの結論に至っている。この点からＳＸ13の埋納位置を検討してみたい。ＳＸ13の検出された10－Ｈ区において，併存していた可能性を有する遺構はＳＢ06，08，ＳＸ14である。これらは掘立柱建物跡と考えられる遺構であるこ



第223図　ＳＸ13伴出遺物実測図



第224図　ＳＸ13伴出銅銭実測図

とから，集落あるいは宅地の内部に埋設されたことは明らかであろう。しかしながら建物跡の柱許とする位置関係にはない，むしろ3棟の建物に包囲された空間地帯と考えられよう。したがって胞衣が屋敷内に埋蔵されることが一般的であったとする記述に従うならばＳＸ13が存在することにより，逆に3基の建物が同一の屋敷内に設けられていたことが推測されるのである。

⑭　ＳＸ13伴出遺物（第223，224図）

外容器として使用された土師器甕(1)はく字に外反する口縁部を有し，上端部が突出する。胴部は器高と最大径が近似した直を示すために球体状の形態を呈する。外面は全面に粗いハケ目調整が施される。底部は丸底である。

銅銭5枚が埋納されていた土師器皿は硬質であり，灰色を帯びる。口縁端部は丸く成形する。底部外面は回転ヘラケズリ調整により仕上げる。

銅銭5枚は完全に土師器皿に癒着しているために個々に取り上げることは不可能である。既に劣化が著しく，銭文の判読にも困難が生じつつあるが，総て「承和昌宝」である。

（註）

1　渡辺誠他『京都府長岡京市下海印寺遺跡第1次範囲確認調査概報』，1979年。

2　狩野久他『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』，1977年。

3　今川文雄校訂『玉葉』，1984年。の承元3年5月25日の記事。その他の史料については下記の水野論考に詳しい。

4　水野正好「想蒼籬記壹叢」『奈良大学紀要』第13号，1984年。

5　この資料については詳細を知り得なかった。

6　他に新聞記事ではあるが，1985年11月26日発行の四国新聞朝刊に平城京官営工房跡出土の資料（奈良時代中頃）をみることができる。

なお胞衣の埋納事例については水野正好（奈良大学），北条令子（香川民俗学会）の両氏より多くの御教示を得た。あらためてお礼申しあげたい。

第5節　その他の遺構と遺物

1．不明遺構

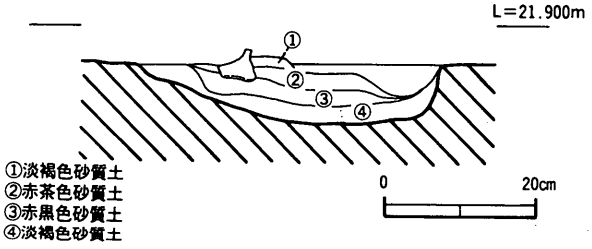
① ＳＸ14

10－Ｈ区のⅣ層上面において検出した。Ｌ字形の配列にあることから掘立柱建物跡の一部の可能性を有する。梁行２間，桁行１間が遺存しており，前者の柱間距離は約200cm，後者が約120cmを測る。中心軸は真北から37°西に振る。この値はＳＢ06，08に近似する。

構築および，埋没時期を判明する遺物は出土していない。

② ＳＸ15（ＳＰ20）（第225図）

10－Ｈ区において検出した。長径76cm，短径64cm，深さ18cmの規模を測る。壁面は北部の傾斜が緩く，南部は急傾斜を呈する。



第225図　ＳＸ15埋土層序図

埋土は，上層から褐色砂質土（Ⅰ層），赤茶色砂質土（Ⅱ層），赤黒色砂質土（Ⅲ層），褐色砂質土（Ⅳ層）が堆積しており，なかでもⅡ，Ⅲ層中には焼土塊と炭化物が多量に包蔵されていることが判った。しかしながら，遺構の壁面に被熱の痕跡が認められず，また，壁面が硬化した状態にない点から遺構内で火を用いたことは考えられない。したがって上記の堆積物は他所から持ち込まれたと考えるべきであろう。

これらの点から，当遺構が燃焼後の物質の廃棄のために穿たれたことが判る。

埋土からは土師器の破片が出土しているが詳細な時期を決定する資料としては情報量に欠ける。また廃棄された物質の同定は不可能である。

③ ＳＸ16

11－Ｆ区北部の４個のピットから形成される。東西方向に直線的に配置する点から，柵列状の遺構が想定されよう。規模は全長780cmを測る。最西端のピットに根石が遺存する。

当遺構と方向性の一致がみられる遺構はＳＸ10である。しかもＳＸ10の北辺部分が当遺構の延長線上にあることは，両者の関連が密接であることをうかがわせる。構築および埋没時期を判明する遺物は出土しておらず，またＳＸ10との関連を明示する遺物も包蔵していない。

④ ＳＸ17

11－Ｇ区と12－Ｇ区の区画境において検出した。７個の柱穴が遺存しており，北西部においてＬ字形の配置がみられる点と，桁行と考えられる４個の柱穴が等間隔に配列されている点から，掘立柱建物跡の一部と考えることができる。遺存する規模は，梁行１間（柱間距離約350cm），桁

行２間（柱間距離約190cm）である。梁行の柱間距離が桁行のそれを超える遺構はＳＢ06に類例をみることができる。

中心軸は真北から42°5′西方に振っており，この値に近似する遺構は他に検出されていない。

遺構の存続および埋没時期を明らかにする遺物は検出されていない。

なお，当遺構のSP196～199については調査中に埋土が同一であることが確認できたが，他は調査終了後の図面上の操作により構成したものである。したがって掘立柱建物跡としての復元が不可能な場合は，柵列状の遺構が考え得るであろう。

２．ピット群伴出遺物（第226，227図）

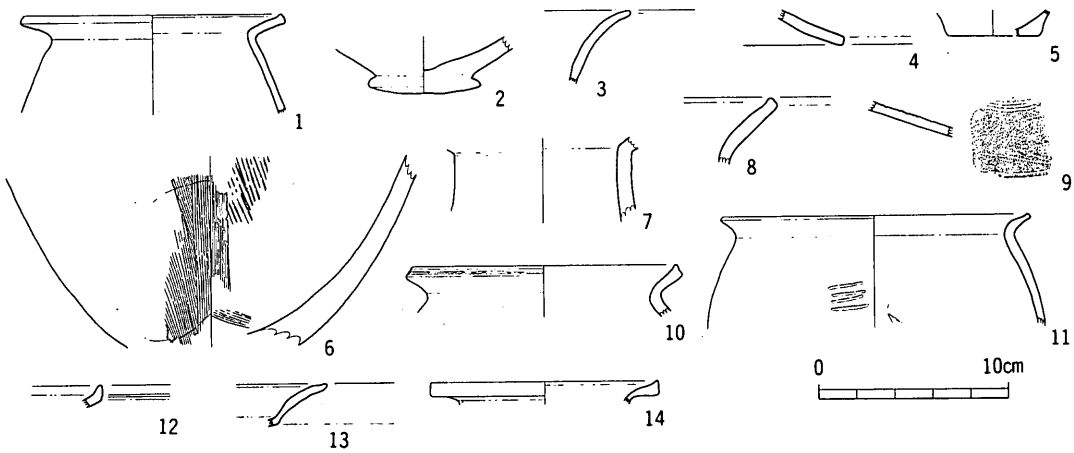
Ⅴ，Ⅵ層上面において検出されたピットは，上記の建物跡あるいは柵列状の配置にあるものを含めて251個を数える（ＳＢ06～10の柱穴を除く）。しかしながらその大部分については性格が判然としない。そこで本項においてはこれらの伴出遺物についてのみ一括して報告したい。

器形を復元することが可能な遺物はⅤ層上面では９個，Ⅳ層上面では17個のピットから出土している。しかしながらいずれも小破片であるために各ピットが有する性格について解明する資料としては情報不足である。そこで特殊な資料のみについて報告することとして個々の資料の詳細については遺物観察表に拠られたいと考えている。

15は小破片である点と内外面ともに摩耗している点から遺物の特徴の多くが失われている。ただし，口縁端部を丸縁状に成形する点はⅣ層出土の土師器杯（第253図178）の口縁部の造作に共通すると考えられる。そこでやはり８世紀後半頃の年代を与えたい（第４層出土遺物の項参照）。

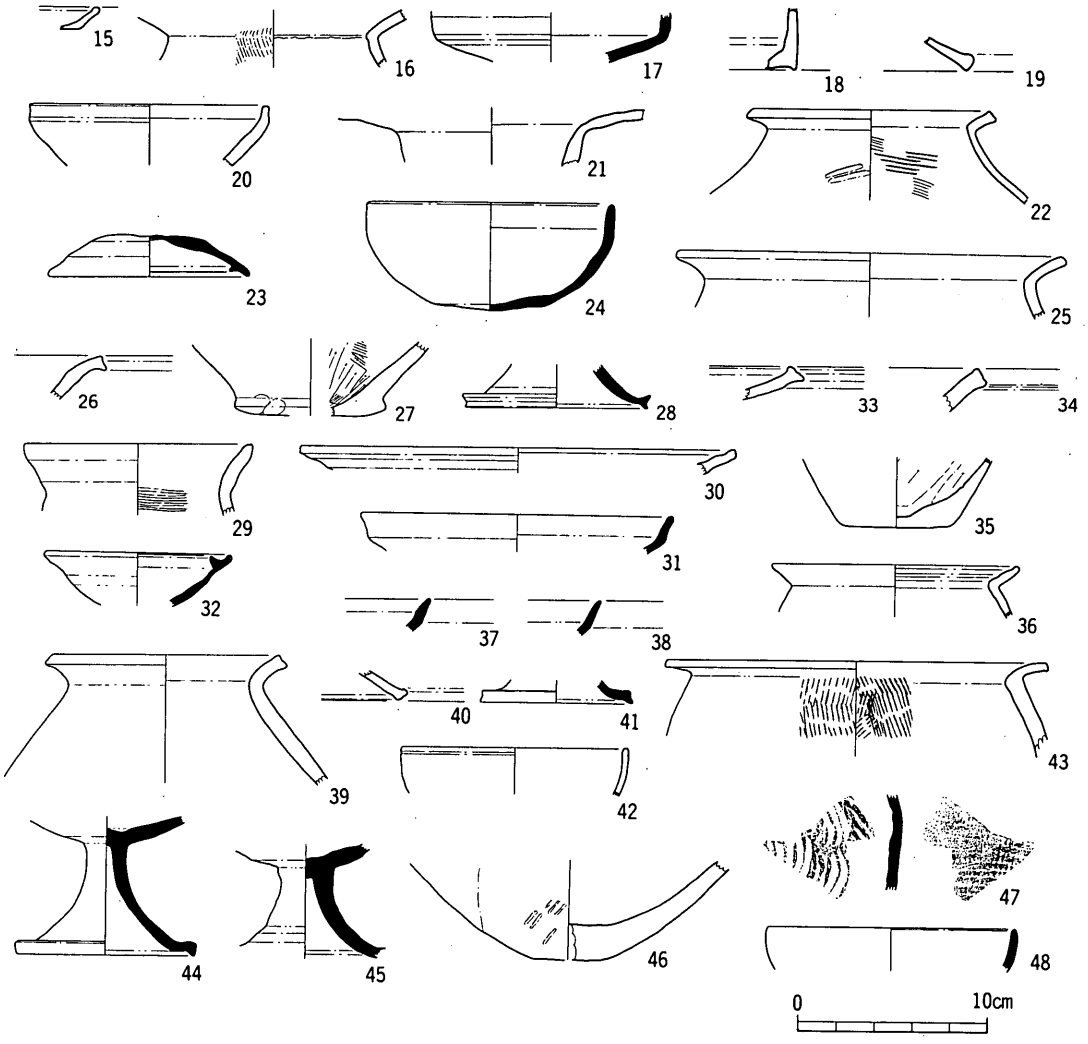
ＳＰ６，19，35，40，50，64，85，95，142，144より須恵器が出土している。

ＳＰ19の蓋杯の杯身は器高，口径ともに小型化している。口縁部のかえりは内傾して口縁部を越えない形態となるために本来の機能を失う過程にある。これらの特徴はII型式第５段階に属する遺物にみられる。



第226図　第５層上面ピット群伴出遺物実測図

また　ＳＰ35，64，85より出土した高杯の脚部はいずれも短脚であり，端部の形態上の特徴からII型式第４段階あるいはII型式第５段階の遺物と考えられる。



第227図　第４層上面ピット群伴出遺物実測図

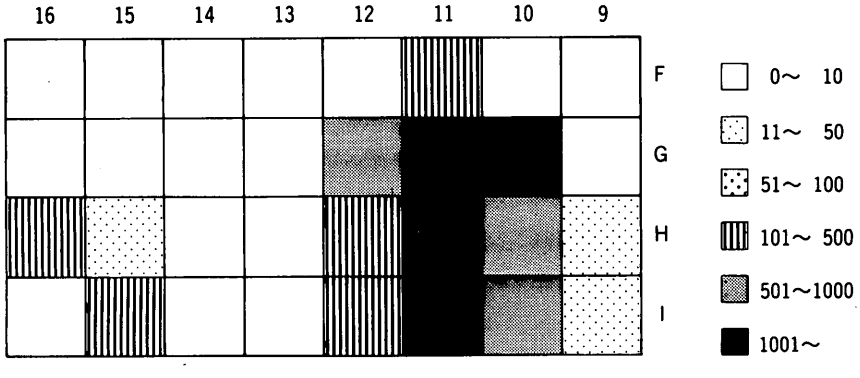
第6節　包含層出土の遺物

1．第5層出土遺物

(1)　弥生土器（第229～239図191～206，208～210）

壺形土器

1，2は外傾する頸部と水平に開口する短い口縁部を有し，端面を凹面化して上端部を突出する。1は球形の胴部形態である。3の口縁端部は上下に大きく肥厚するが，特に上端部の突出が大きいために受け口状を呈する。頸部はやや内傾する。4，6は口縁部の下端部を外部に拡張する。7，11は口縁部の屈曲が不明瞭であり，ラッパ状に広く開口する口縁部を有する。端部は特に下端部を大きく拡張する点が特徴である。11は最大径が上胴部に位置し，下胴部の湾曲が弱いために肩の張る形態となっている。8は直線的な頸部と口縁部を有する。下端部をやや垂下する形態である。9，10，13，14は外傾する直線的な頸部とほぼ水平に開口する短い口縁部を有する大型品である。端部は凹面化してやや上下に肥厚する。また10，13，14にみる様に内外面はヘラミガキ調整によって丁寧に仕上げられている。12は長頸の形態であり，口縁端部を肥厚する。15の口縁端部は肥厚した後に凹線2条を施す。16，17は口縁上端部がやや突出する受け口状の形態である。18については甕形土器として扱うべきであろうか。頸部が細く，肩の張る形態が考えられる。19の口縁部の造作は16，17に共通する。20は直立する短い頸部を有し，口縁部は直角に外反する。端部は肥厚して断面形態が三角形を呈する。21は口縁端部に2条の凹線文を施す。頸部外面に少量ではあるが丹塗の痕跡が認められる。22は外傾する頸部と短い口縁部を有する。23～25は口縁端部を垂下して広い端面を形成した後に刻目と凹線文を施す。26～40は総て二重口縁の形態である。26，38，40の口縁部は断面形態が三角形を呈し，内傾する。器壁が厚く，大型品に限られる形態と考えられる。32～35は器壁が薄く直立する口縁部を有する。外面に幅の細い凹線文が施される。この器形は甕形土器の可能性も考えられよう。36は下端部についても垂下するために口縁部外面には広い面が形成され，鋸歯文，竹管文，刻目が施される。37は内傾する大きい口



第228図　第5層弥生土器地区別分布図

縁部を有する。このため断面形態が逆く字形を呈する。39は頸部に比して口縁部が大型である。ところでこれらの器形に共通する特徴は装飾性に富む点である。したがって口縁部を複合する意図は飾る空間の確保と拡大にあると考えられる。46，47は頸部以上が大きく湾曲してラッパ状に開口する。48の口縁部はほぼ直立する形態である。49については頸部以下の形態が全く判然としないが，口縁部の外観は複合口縁の器形を模した形態と言えよう。

甕形土器

51～59の口縁部はく字に緩く外反して端部はナデ調整により仕上げるが，肥厚することはない。51，53，54，56，57は口縁部の外反度が弱いものの口径が最大径に近似した値を示す器形である。

60～83は口縁部がより水平気味に外反するために屈曲部の稜線は明瞭さを増す。口縁部は端部と内面において強いナデ調整を施すために特に上端部が突出した受け口状の形態となる。84～89の口縁部は内面に強いナデ調整を施すことによって受け口状の形態に仕上げる。また内面については頸部までヘラケズリ調整を行なう。90，91，93～95の口縁部は内外面と端部のナデ調整によって上下に大きく肥厚して端面を凹面化する形態である。96～101は口縁部内面のナデ調整により受け口状の形態を呈する。さらに外面に突出する屈曲部を設けることにより複合口縁を意図した外観となる。しかも外面については柾目間隔の狭い木口状原体を用いてナデ調整を施した精巧な仕上げである。また頸部以下の部位については直線的に大きく拡がる肩部を有することから肩の張る形態が想定される。104～106は口径が胴部の最大径に近似した値を示す広口の器形であり，器高に比して最大径が小さいために長胴の形態となる。口縁部の屈曲は弱く，端部を丸く成形する。底部は稜線の不明瞭な平底である。107，109についても同様の形態が考えられる。110，111は二重口縁の形態である。112は60～83に類する器形であろう。

高杯形土器

114～119は浅い杯部を有する器形である。114，115は屈曲部以上の部位が短く，口縁端部を丸く成形する。114の屈曲部はやや突出する形態である。116～119の口縁部は前2者に比して長大化する。120は杯部の深い形態である。121，122は口縁部内面に丁寧なナデ調整を施すことにより，複数の段を形成する。ただしいずれも遺存状態が悪いために杯部全体の形態は判然としない。123～125の杯部は口縁部と屈曲部以下の部位が共に外反するために屈曲部がやや突出した形態となる。端部はナデ調整により凹面化する。126，127は口縁部の湾曲が弱く，端部を拡張して水平な面を形成する。128についても端部の肥厚がみられ，端面を拡張する意図がうかがわれる。ただし前者に比して口縁部は長大化する。131，132は小型の浅い器形である。133～136は口縁部が長大化して屈曲部以下の部位の長さと近似した値を示す。口縁部の湾曲は大きく，先端部が尖る形態である。なお，136は同一の個体と考えられる脚部が伴出している。中央部に屈曲点を有し，く字に外反する形態であり，端部を丸く成形する。

脚部に明瞭な屈曲部が存在する例は137～145の資料にはみられない。総て緩く外反する脚部形

態である。137～139は端面に１～３条の凹線文を施す。

鉢形土器

146～148の口縁部は緩く外反した後，端部を肥厚して端面を凹面化する。胴部は頸部以下の径が小さく，器高が低いために容量は小さい。149～151，154～156はく字に外反する口縁部を有し，胴が張る形態である。さらに器高が高いために容量が大きい。157～162は口縁端部を水平方向に拡張して上面を広く成形する。157，160についてはこの面に２条以上の凹線文を施す。総て大型品である点が特徴である。163～165は口径が器高を圧倒的に凌ぐために浅い形態である。底部はやや平底気味であるが，丸底に分類できよう。

166～177は椀形を呈する小型品である。166，167，171が丸底の形態であるが，他は平底の形態である。特に175，176は突出した平底を有し，177は脚台付の器形である。なお152，153もこの群に類する器形と考えられるが，胴部の湾曲が弱いために容量は小さい。180は二重口縁の形態であり，口縁部は内傾して立上がる。胴部の最大径が口径を凌ぐ大型品である。182，185，187～190の胴部は湾曲が弱く，直線的な形態である。しかも器高が低いために，浅い器形である。187は口縁端部を肥厚する。188の口縁部は内面に強いナデ調整を施すことにより段を有する。また，口縁部の屈曲部は突出する形態である。高杯形土器（121，122）と同一の成形であると考えられる。

その他の器種

191～194は壺あるいは甕形土器を模造したと考えられる小型品である。191，194はやや内傾する口縁部を有するために受け口状を呈し，193は二重口縁の形態である。

195～197は小型の鉢形土器と考えられよう。

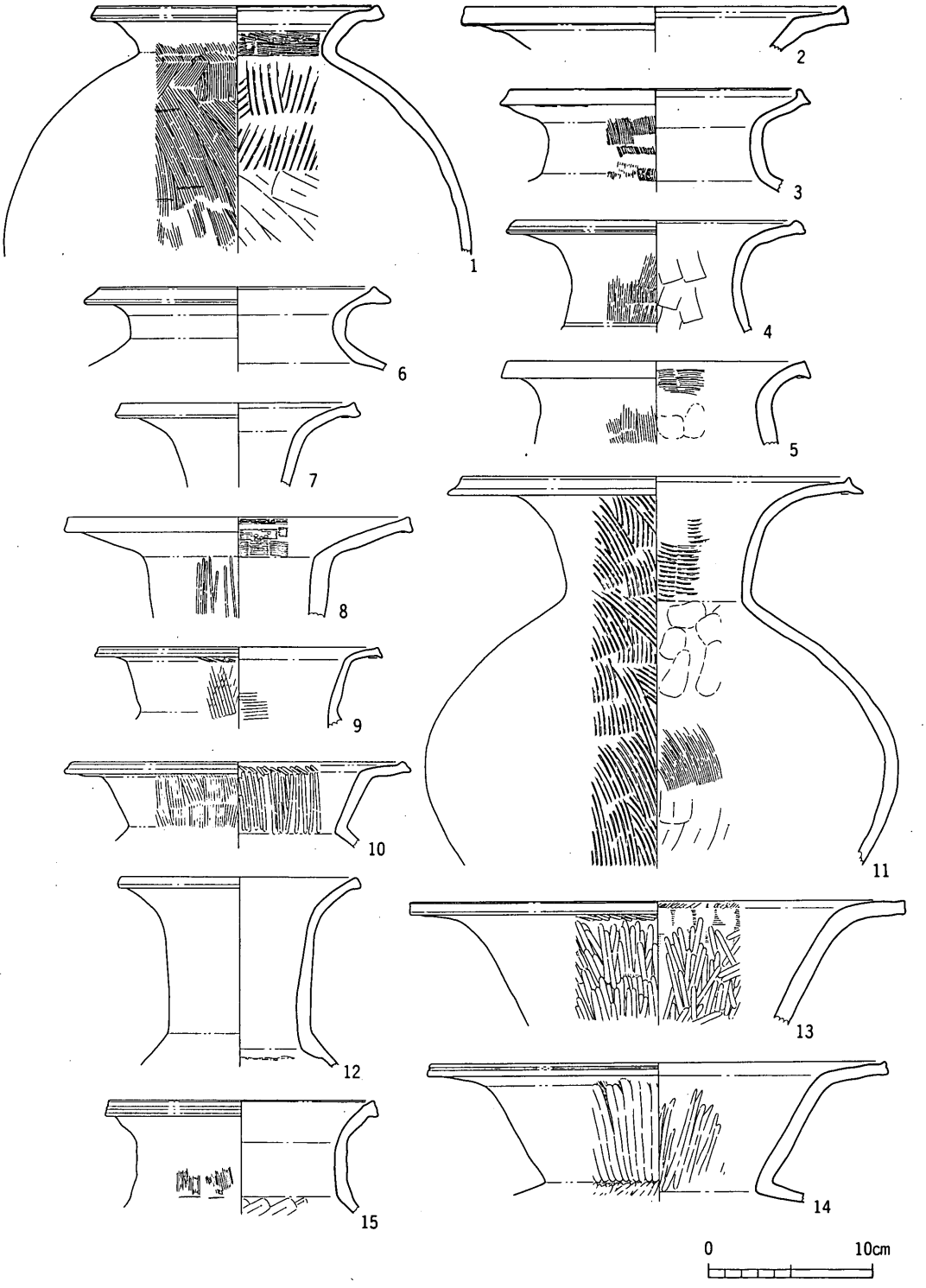
198～202は使途不明の小型品である。

203～206は小型の胴部と内湾気味に立ち上がる長い口縁部を有する。

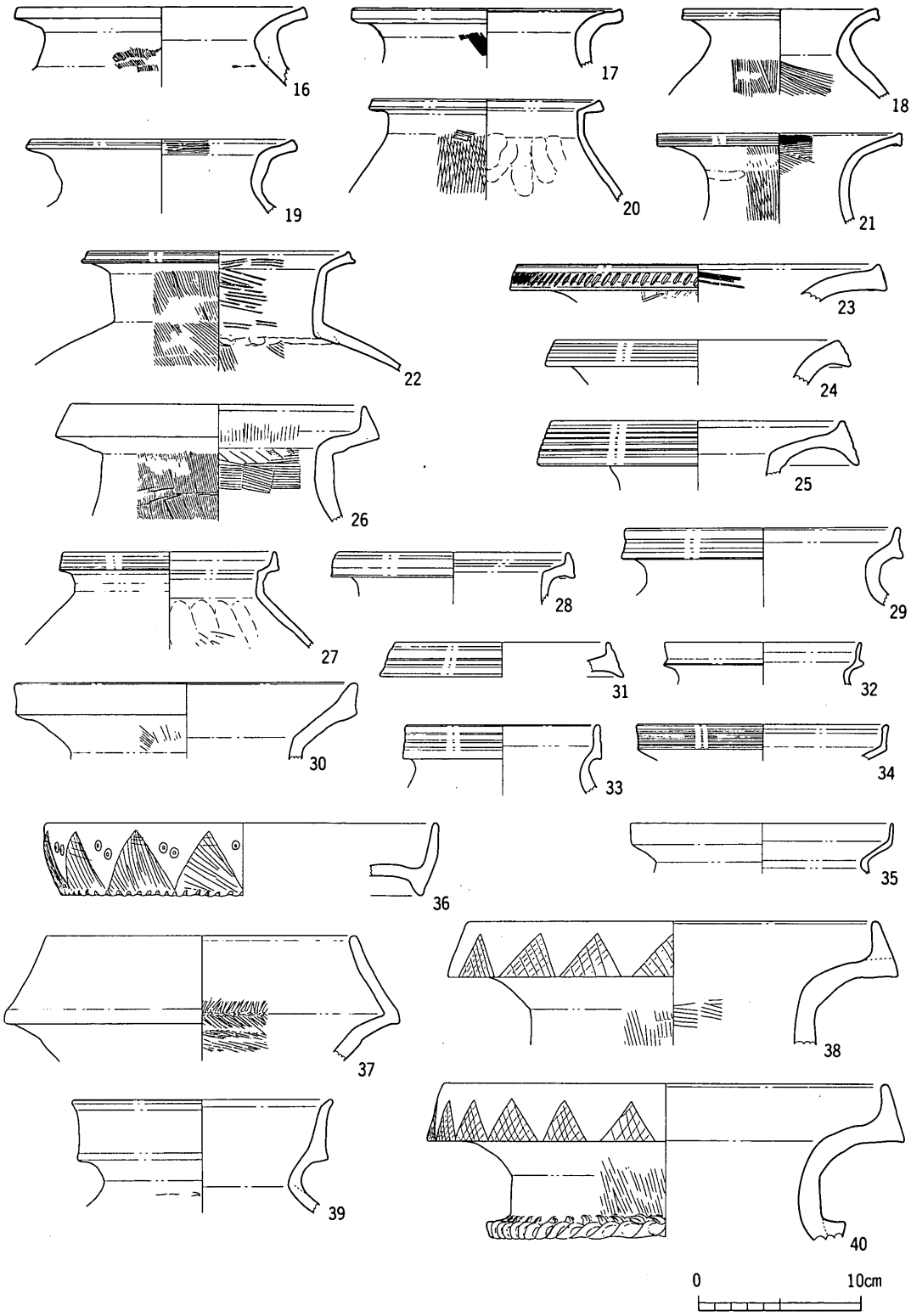
208，209は形態は異なるが，共に器台形土器である。前者は上端部の径が脚端部の径を凌ぐ形態である。後者は脚部のみが半壊して遺存しており，端部を肥厚して凹線文を施す。また外面はヘラミガキ調整を丁寧に施した後に丹を塗付して仕上げている。装飾性の強い遺物である。

210の器種については判然としないが，やはり器台形土器に類する器形の上端部と考えられる。精巧な造作である点が特徴である。

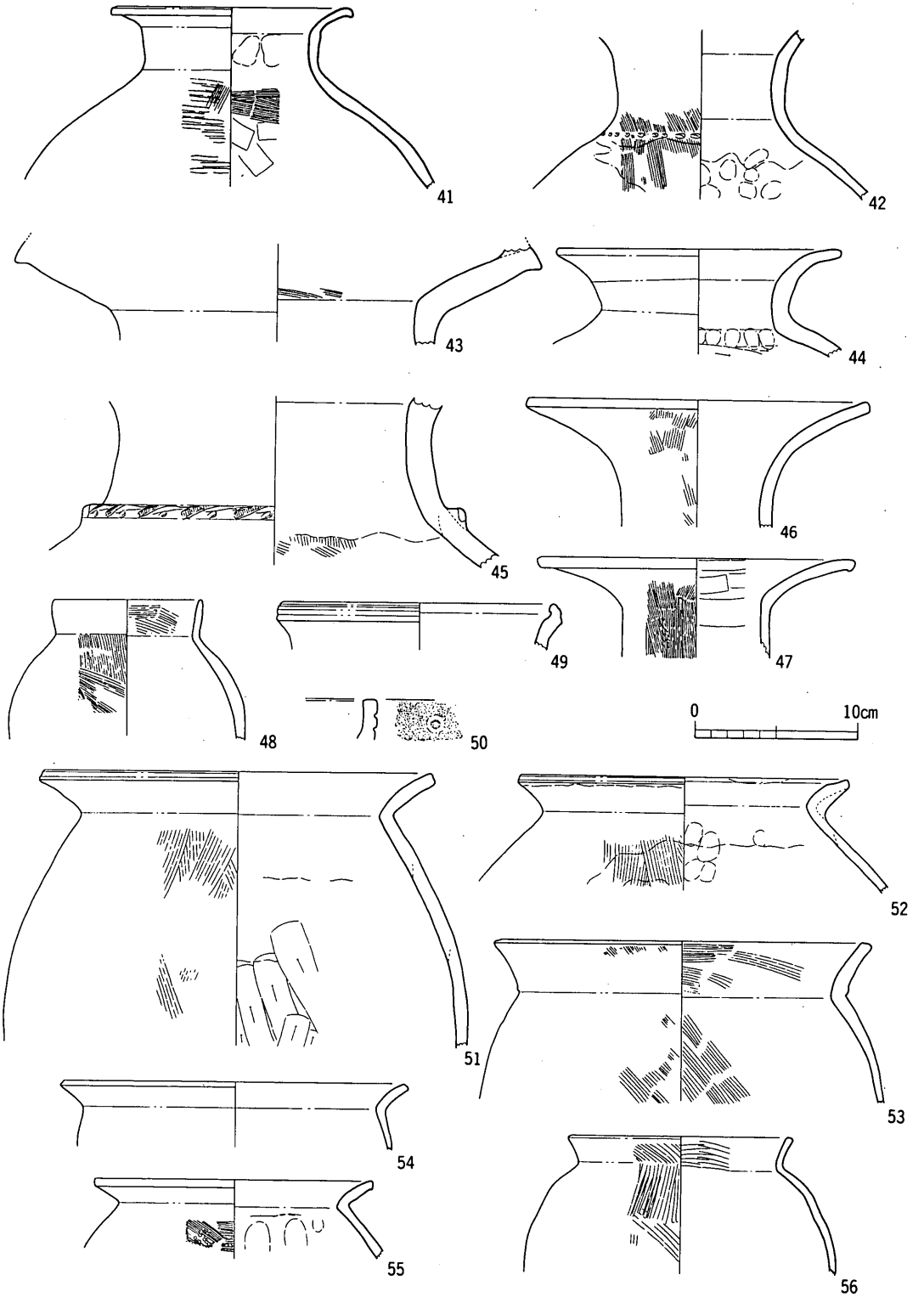
第240図２は現代の把手付のコップと酷似する形態の遺物である。把手付はコップ形土器と呼称したい。把手部は横断面が円形の棒状の粘土紐を湾曲して貼付したものである。



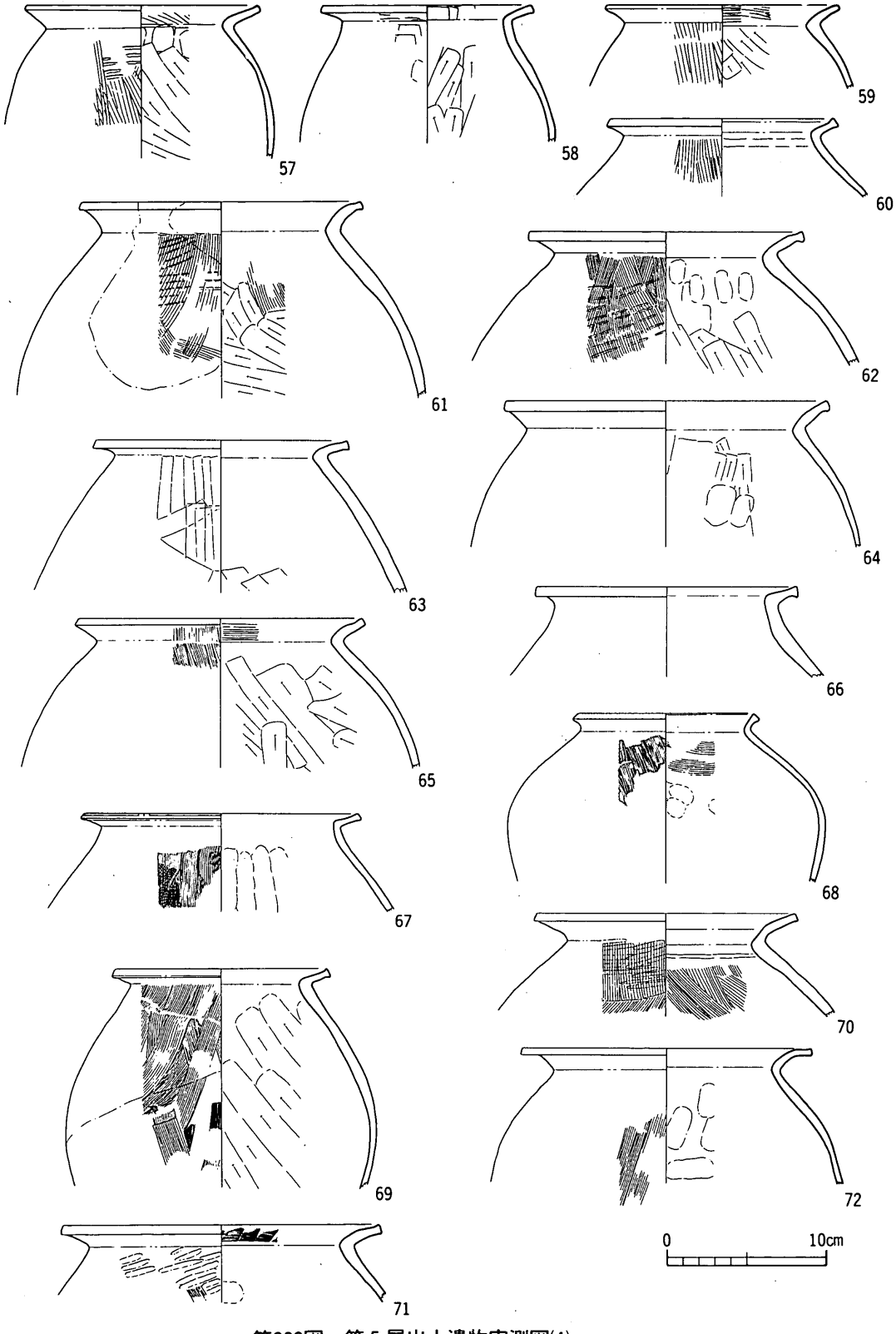
第229図　第５層出土遺物実測図(1)



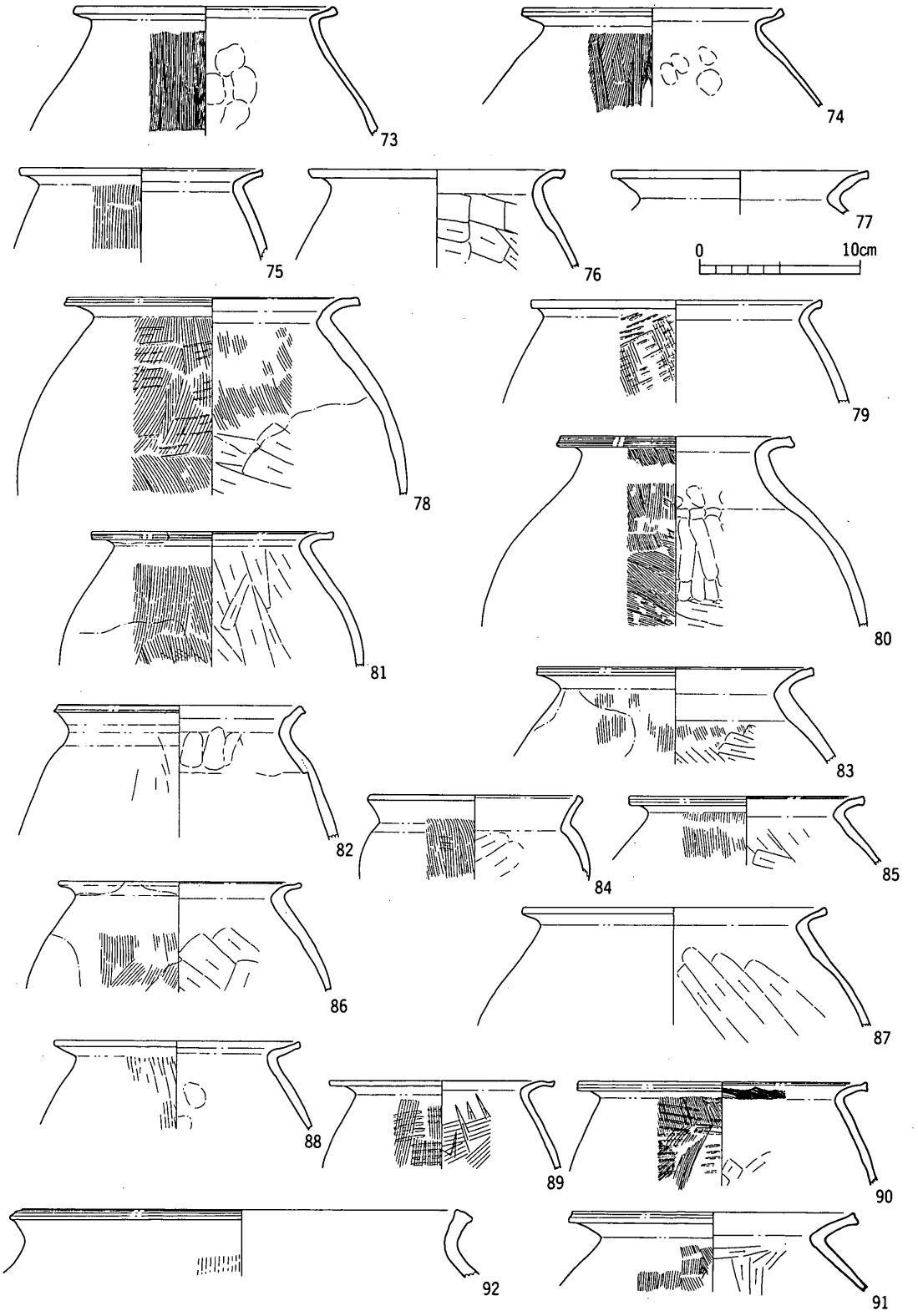
第230図　第５層出土遺物実測図(2)



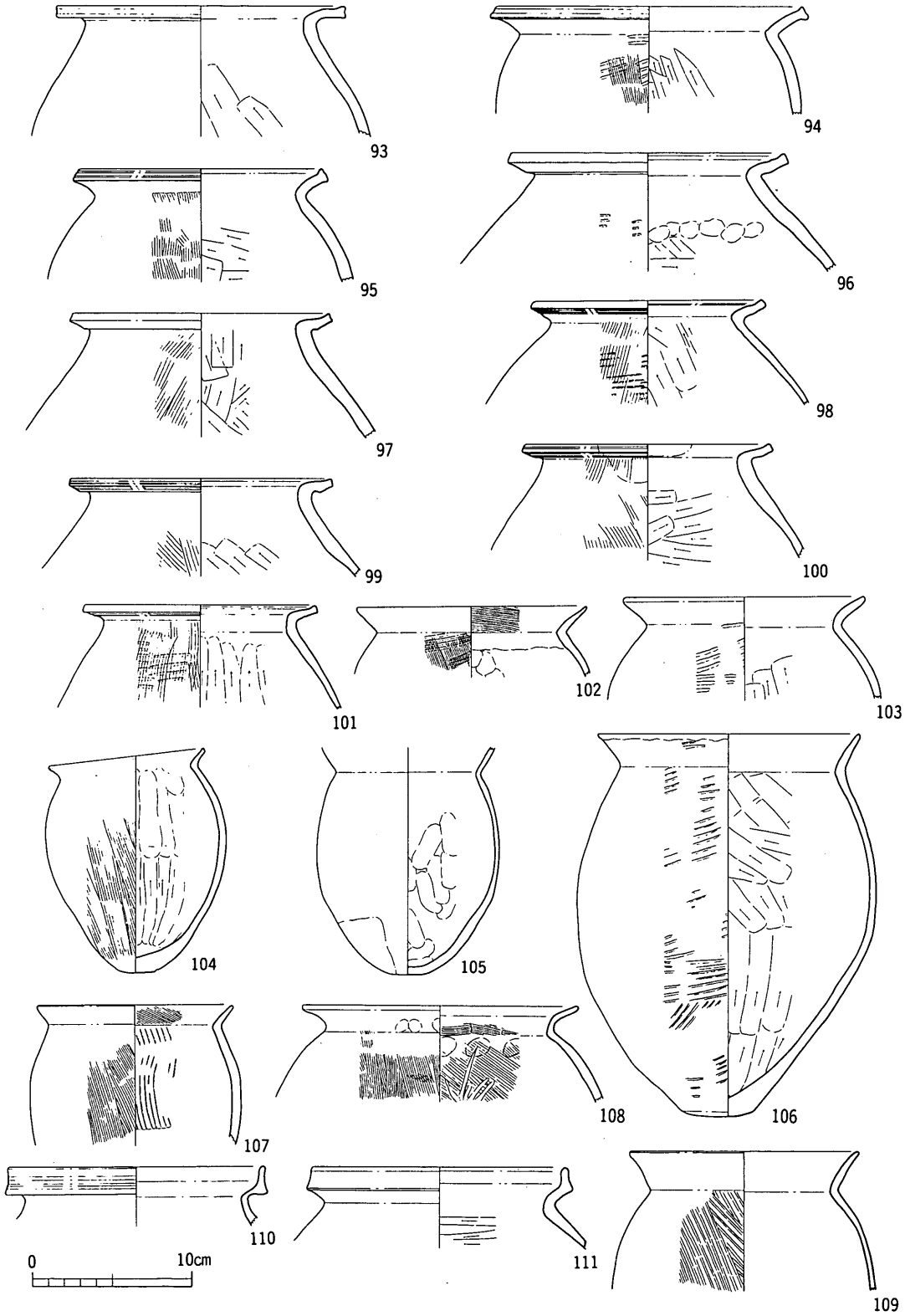
第231図　第５層出土遺物実測図(3)



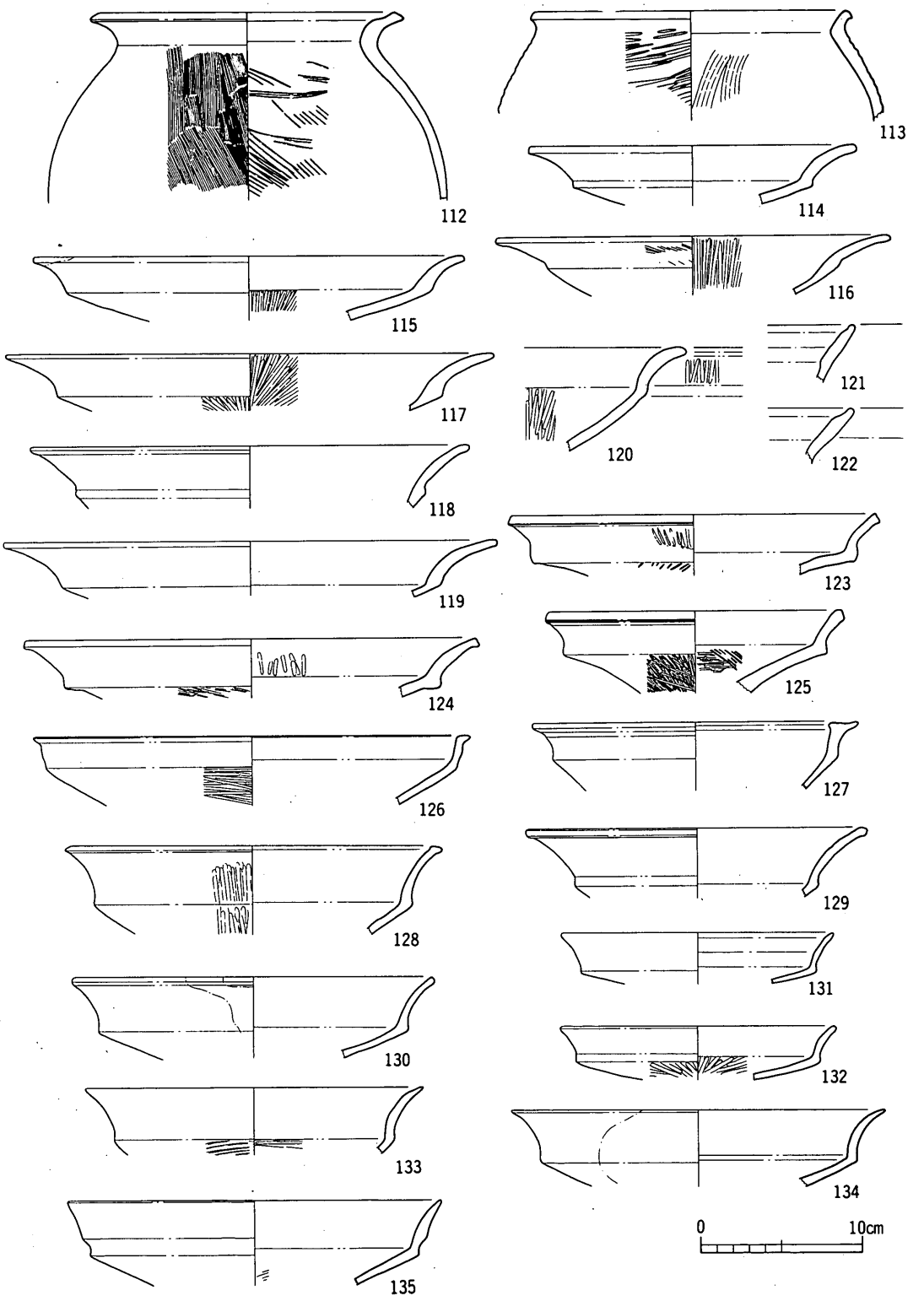
第232図　第５層出土遺物実測図(4)



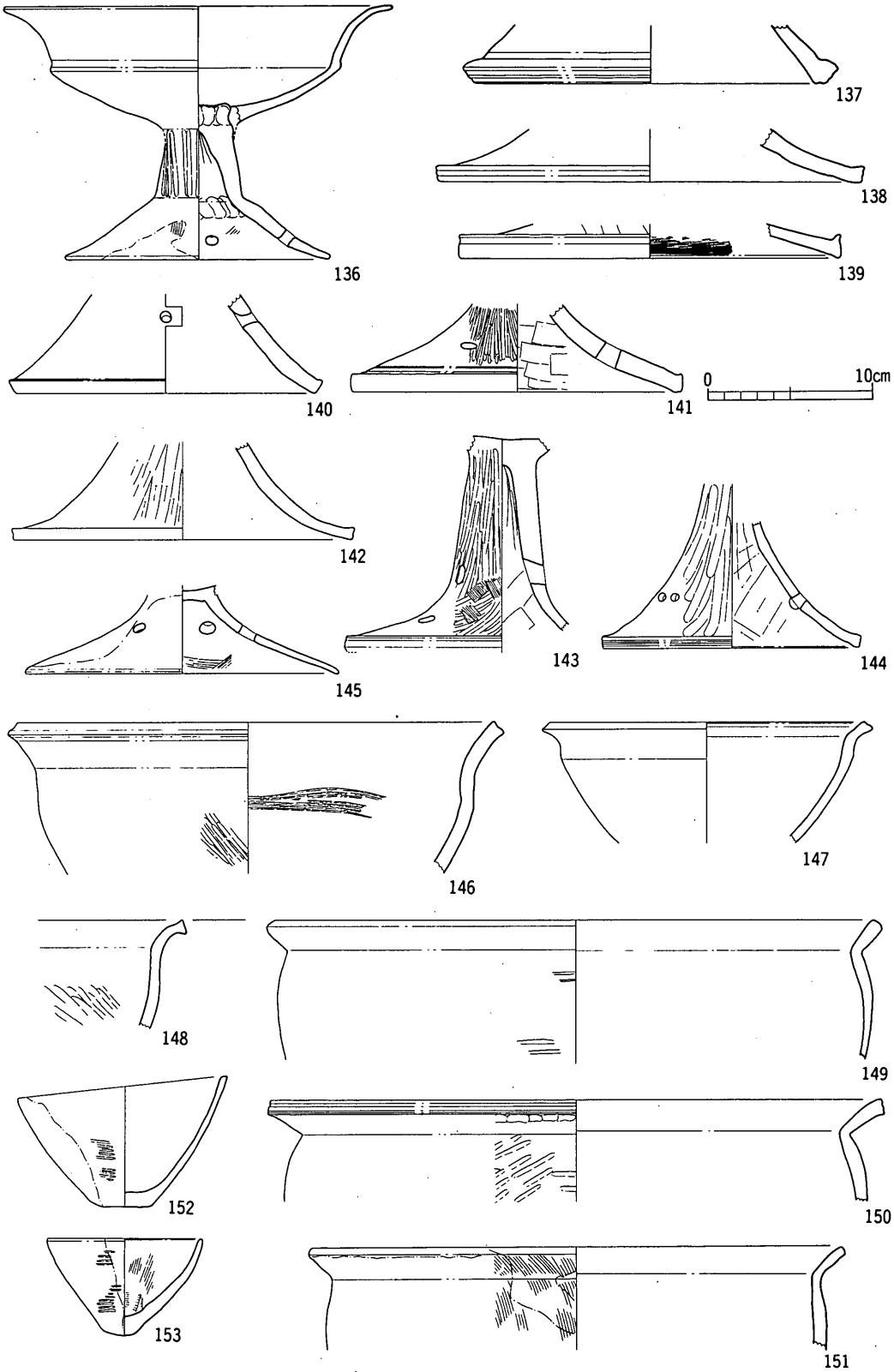
第233図　第５層出土遺物実測図(5)



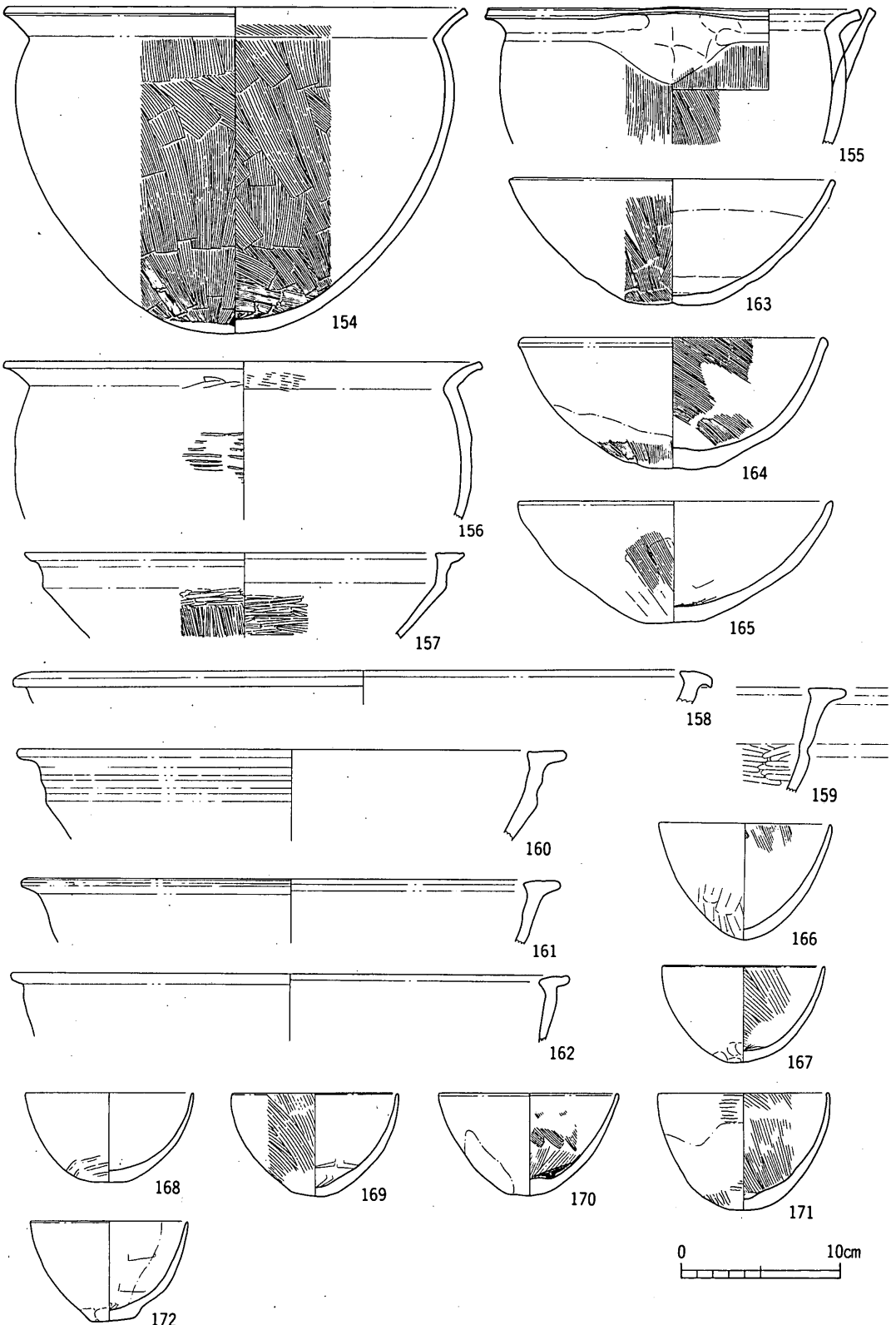
第234図　第５層出土遺物実測図(6)



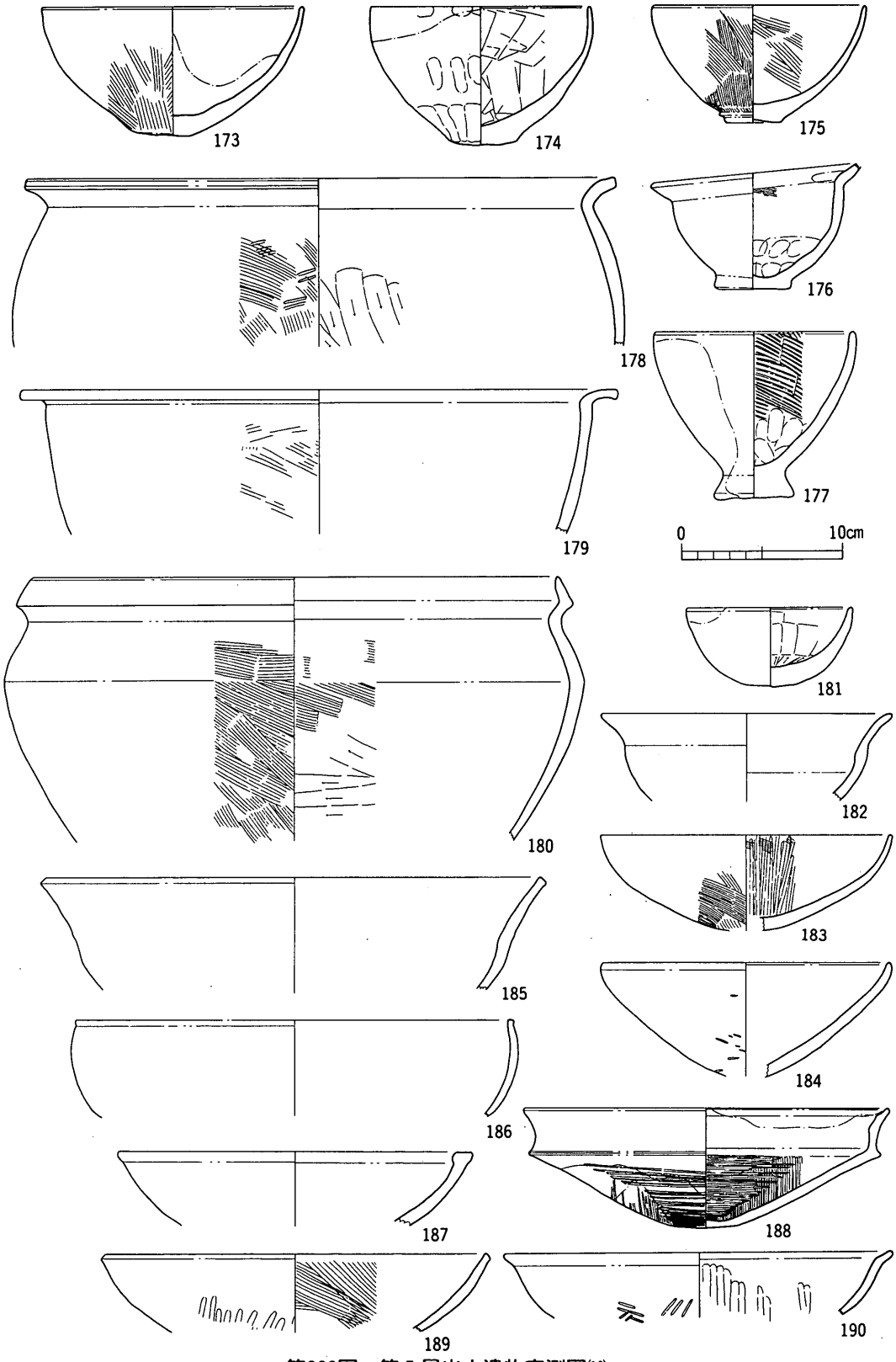
第235図　第５層出土遺物実測図(7)



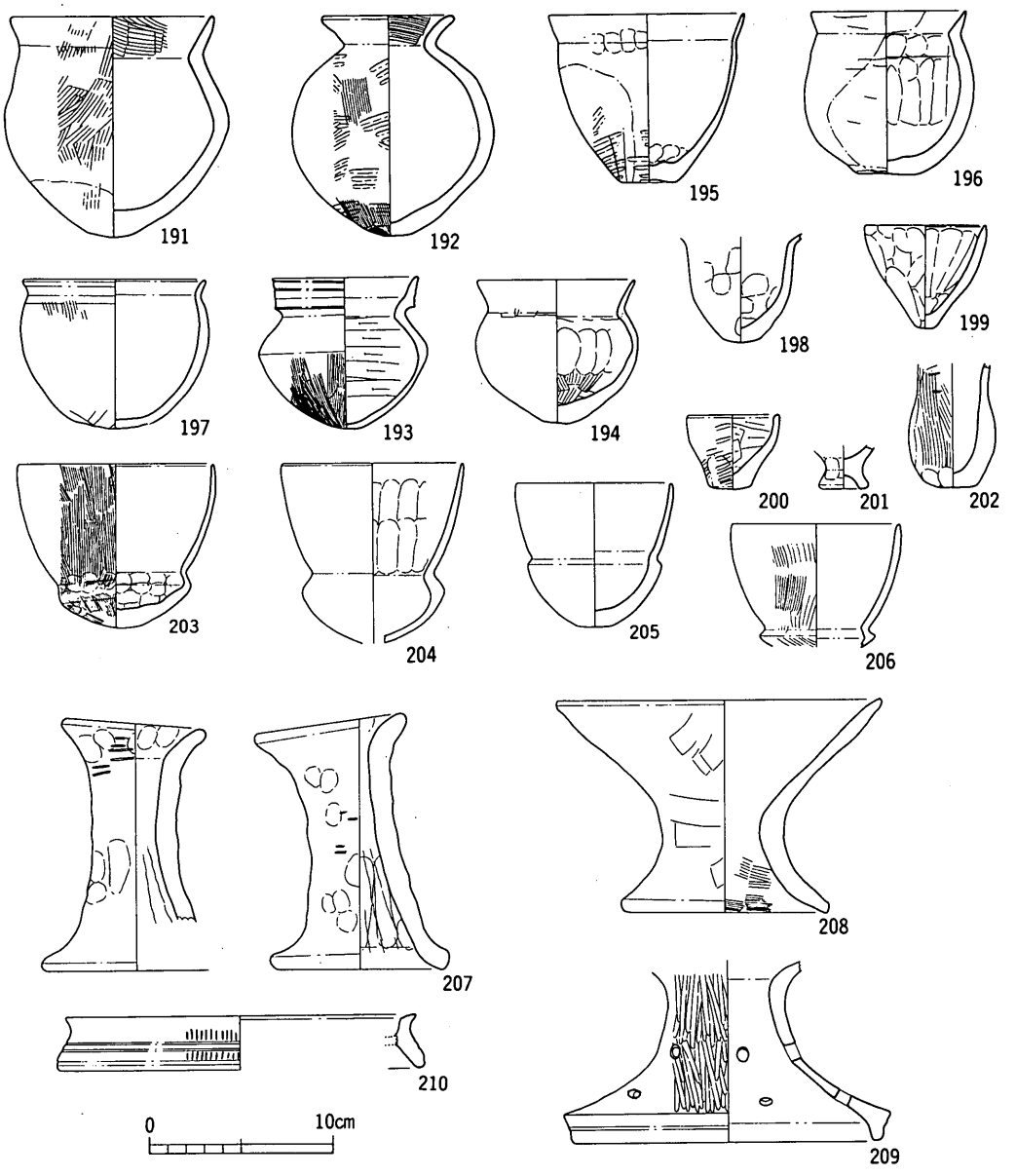
第236図　第５層出土遺物実測図(8)



第237図　第５層出土遺物実測図(9)



第238図　第５層出土遺物実測図(10)

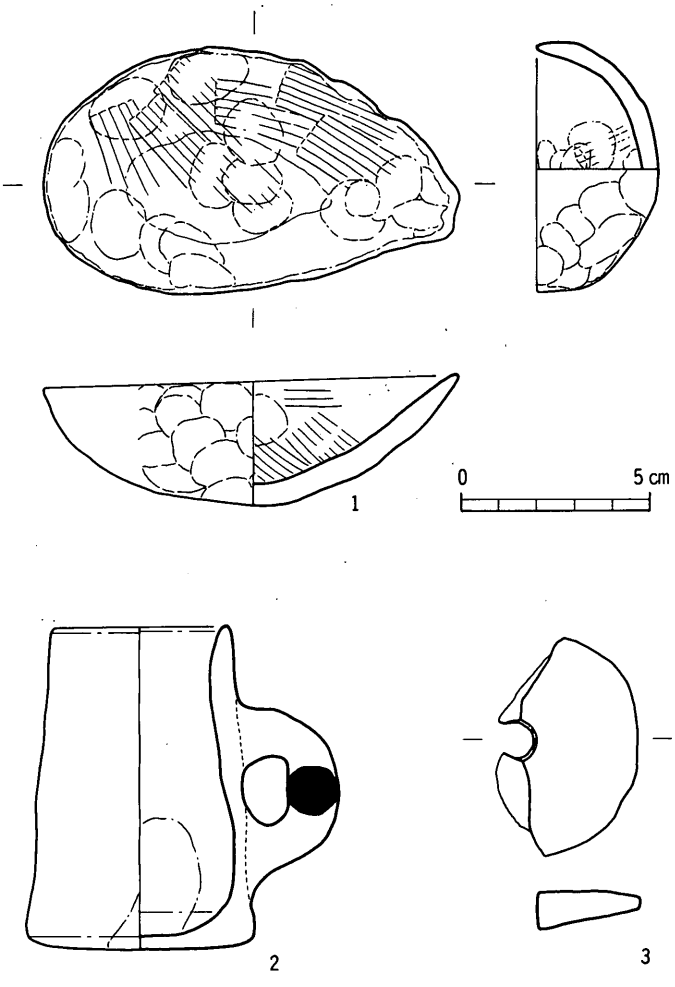


第239図　第５層出土遺物実測図(11)

(2) 土製品（第239図207，第240図）

207は支脚形土製品である。上端部が傾斜する形態であることから，複数の製品を用いて容器を固定していたことが判る。また傾斜面を緩やかに造出している点は，対象物の固定する位置が底面付近であることを意図していると考えられる。

第240図１については匙形土製品[註1]と呼称したい。全面に指頭圧痕を残している点から一個の粘土塊を引き延ばすことによって成形したことが判る。ただし内面についてはヘラ状の原体を用いたナデ調整を施すことにより指頭圧痕を消しており，実用のために内面を丁寧に仕上げたことが推測される。



第240図　第５層出土土製品実測図

第240図３は復元径約６cmの紡錘車である。残存片の重量は18ｇを量る。

(3) 石器（第241図）

１は端部に小規模な抉りを有する打製石包丁であるが，約２分の１を欠損している。調整剥離は両側縁部に施されるが，背部についてはエッジ部を敲打した痕跡が認められる。これは背部を握り部として加工したものと考えられる。

２は砂岩の自然円礫に一方向から穿孔した遺物である。ＳＴ18の封土から出土した穿孔のある遺物同様使途は全く判らない。

(4) 鉄製品（第243図11～13）

11の基部は直角に屈曲する。しかしながらこれが本来の形態であるのか，あるいは製作後に折れ曲ったものであるのかは肉眼観察では判断不可能である。屈曲部以上の部位の形態は刀子状を呈する。

12は刀子あるいは鎌の一部と考えられる。特に背部に緩い湾曲を有することから後者の可能性が強い。

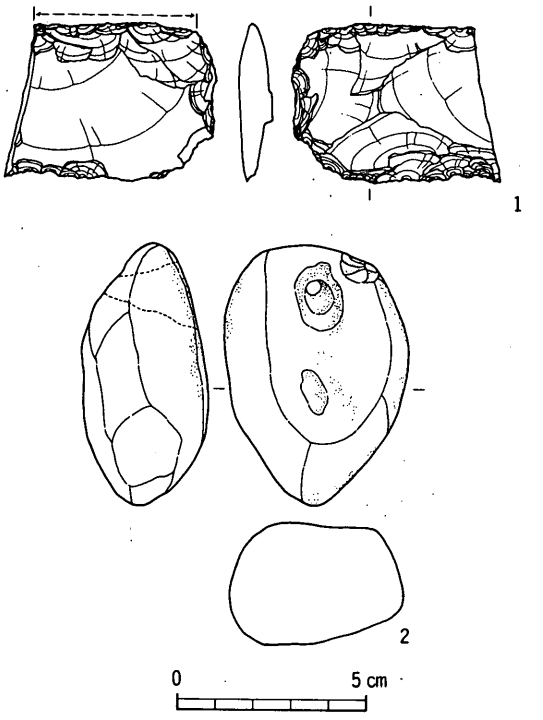
13は横断面が円形の棒状の茎部と先端部ほど拡幅される扁平な身部を有する。身部は両側縁部に刃部を造出していることから農工具または武器と考えられる。

(5) 玉類（第242図）

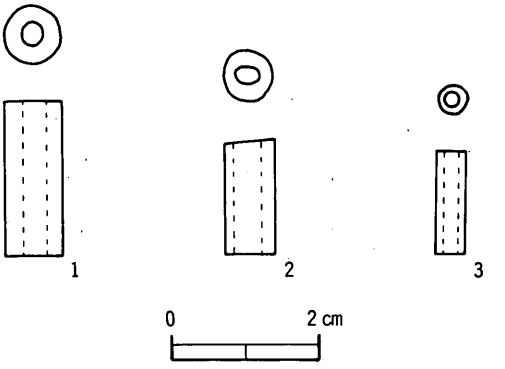
管玉3点が出土している。いずれも碧玉を原材料にしているが，1が最も緑色が濃く，2は白濁した緑色，3が淡い緑色を呈する。

（註）

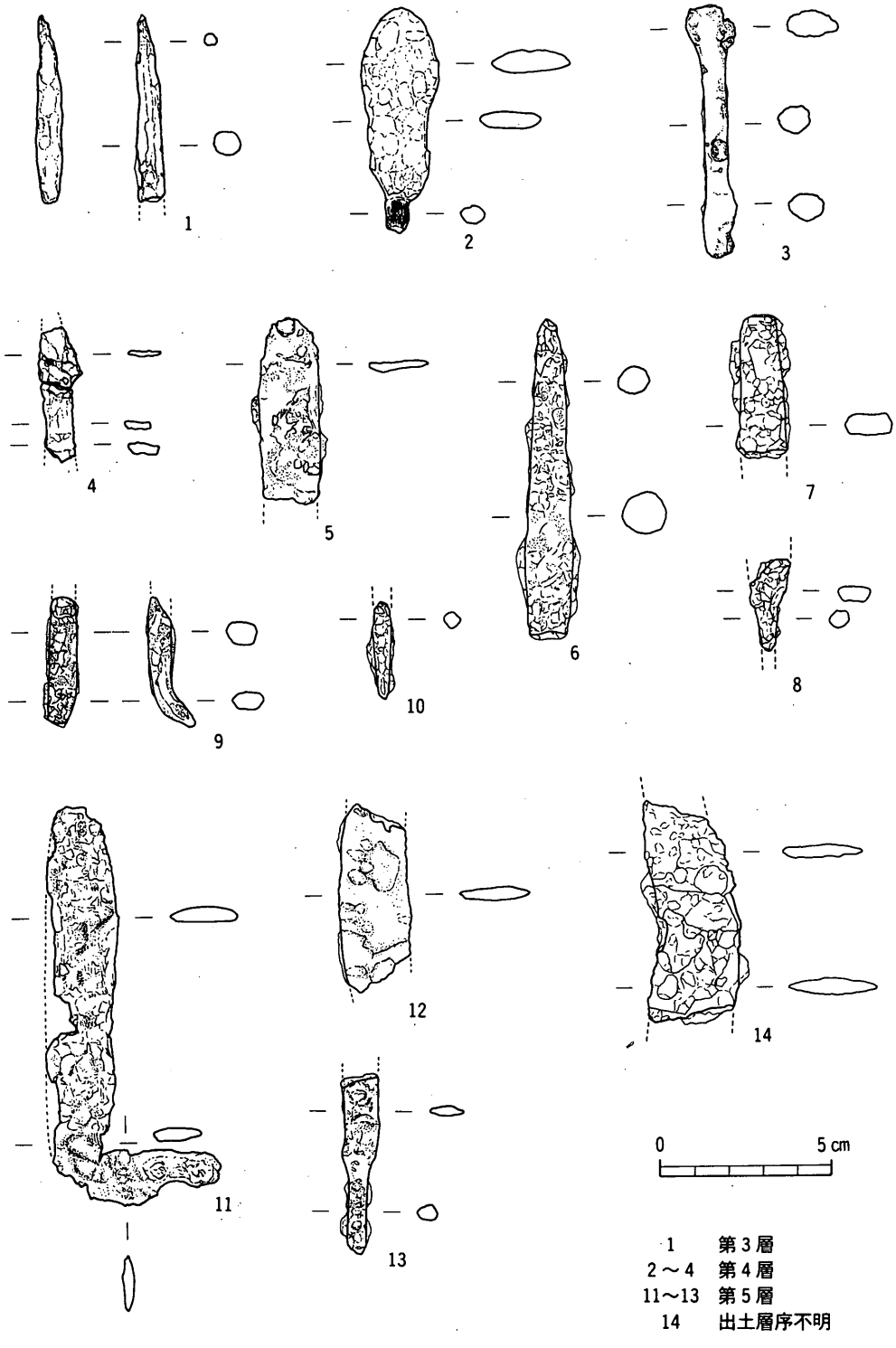
1　筆者の知り得た匙形土製品についての総括的な考察は小林康男「縄文・弥生の匙形土製品」『信濃』第33巻第7号，1981年。の一篇に限られる。同論考によると弥生時代の匙形土製品には4形態が認められるが，本資料が類する資料は報告されていない。また同遺物の使途については小規模であることを第一の根拠として非実用的な性格を考えるに及んでいる。すなわちこの根拠の下では本資料についても非実用品としなければならないのである。しかしながら外面に比して内面の造作が丁寧である点は外観の精巧さを必要とする非実用品の性格とは明らかに異質な要素と考えることができよう。したがって本稿においてはやはり実用的な性格を有する遺物として報告したい。



第241図　第5層出土石器実測図



第242図　第5層出土管玉実測図



第243図　第３・４・５層出土鉄製品実測図

2．第４層出土遺物

(1) 弥生土器（第245～252図147～168，第253図176，177）

壺形土器

１～10は口縁端部を大きく肥厚して下端部を垂下する形態である。端面は凹線文，沈線文，ヘラ描鋸歯文，竹管文，円形浮文で加飾される。大型品が多い点と器壁が厚い点が特徴である。９，10については上端部の突出も大きい。13～20は口縁部が水平気味に開口するため屈曲部の稜線が明瞭となる。端面は凹面化してやや上下に肥厚する。頸部は直立（20），内傾（15，16，18），外傾（17，19，20）の３形態が存在する。26～42は二重口縁を有する大型品である。口縁部は鋸歯文，波状文，凹線文，円形浮文，竹管文が施されており，装飾性の強い器形である。

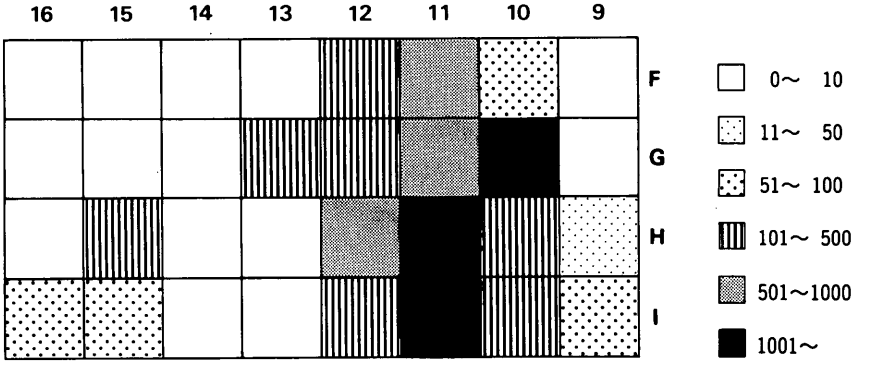
43，44は頸部が短く内傾し，肩の張る形態である。45も二重口縁の形態であるが，屈曲部の突出が著しく，口縁部の湾曲も大きい。

甕形土器

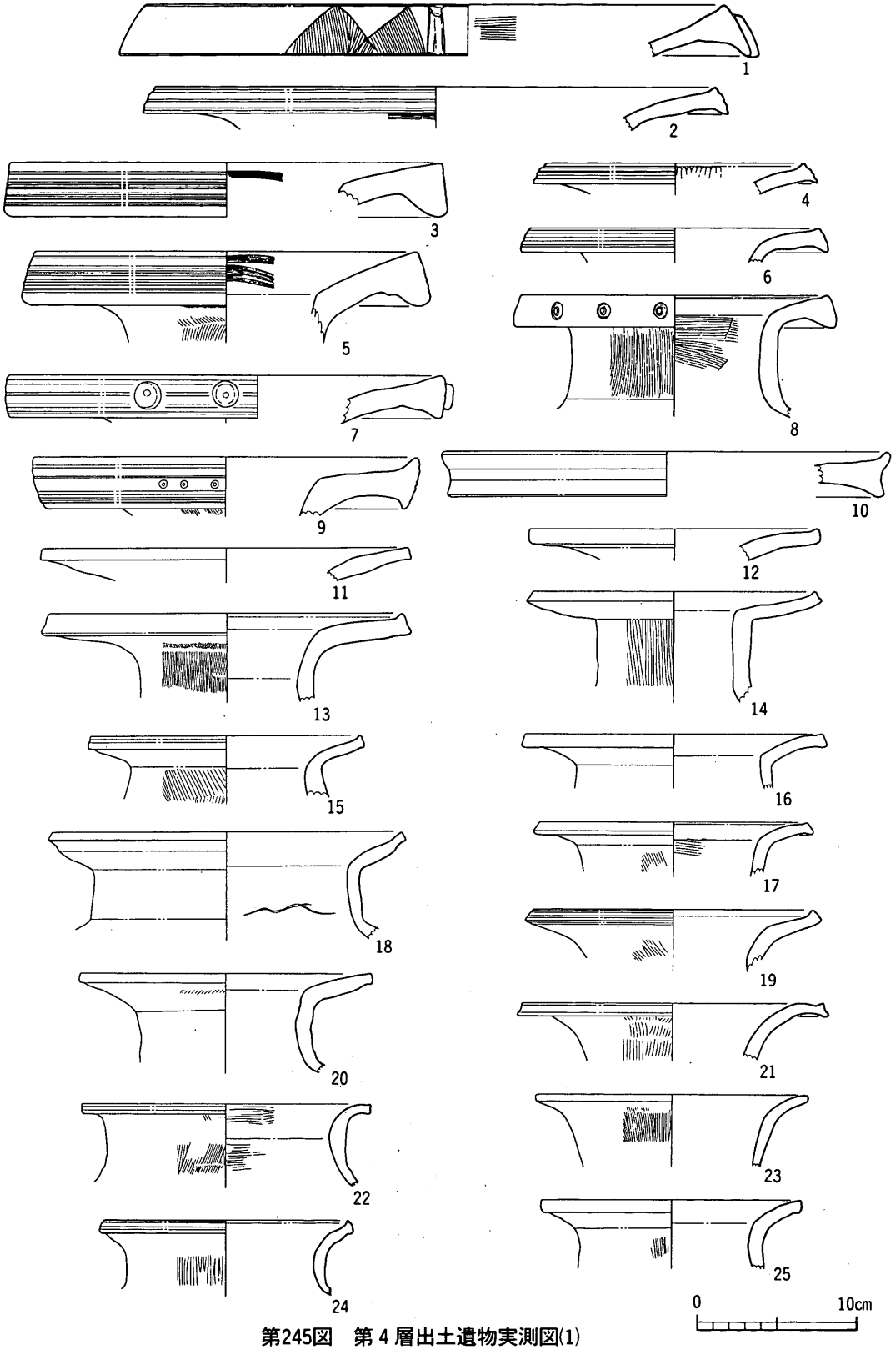
47，48，50，52，53は口縁部を薄く成形して上端部を突出する。肩部の湾曲は弱い。54～57は屈曲する口縁部を有し，受け口状を呈する。肩部の湾曲が弱い。58～73の口縁部はく字に外反した後に緩く湾曲する。端部は横位のナデ調整により凹面化して上下にやや肥厚する。61，62，68，71～73が直線的な肩部を有し，また66，69が長胴の形態である以外は球形の胴部形態である。75，76は口径が最大径と近似した値を示し，やや受け口状を呈する。77～82は二重口縁の形態である。口縁部はほぼ直立して外面に凹線文を施す資料（77，78，80～82）が存在する。

85の最大径は胴部中位に位置し，しかも口径と近似した値を示すために胴部はほぼ球体を成す。また底部も完全な丸底の形態である。く字に外反する口縁部は湾曲が弱く直線的である。ところで，口縁部外面には胴部から連続するタタキ目が認められることから，「叩き出し」の技法により成形されたことが判る。

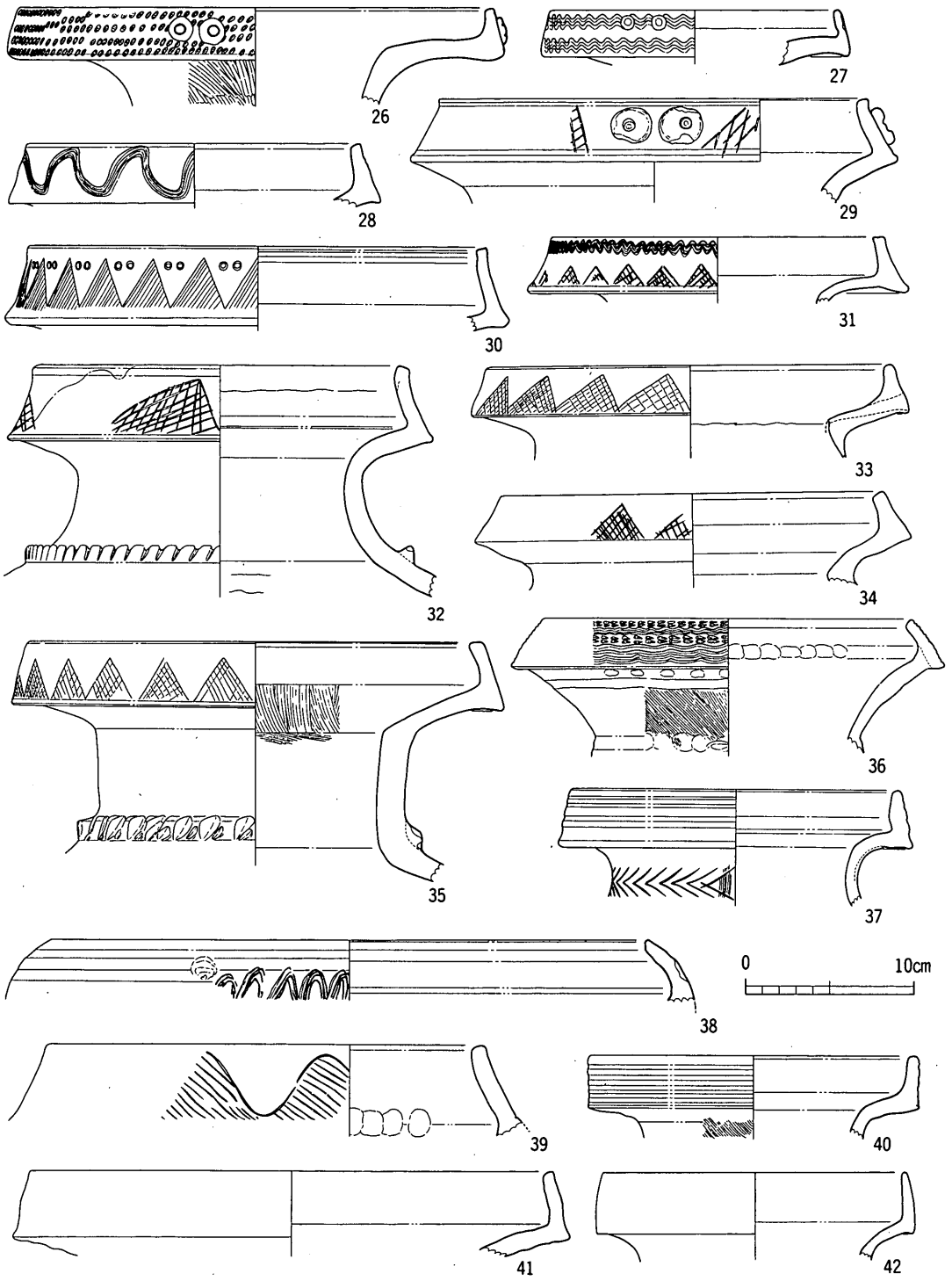
底部は93の丸底を除き，他は完全な平底である。89はやや突出する平底の形態である。



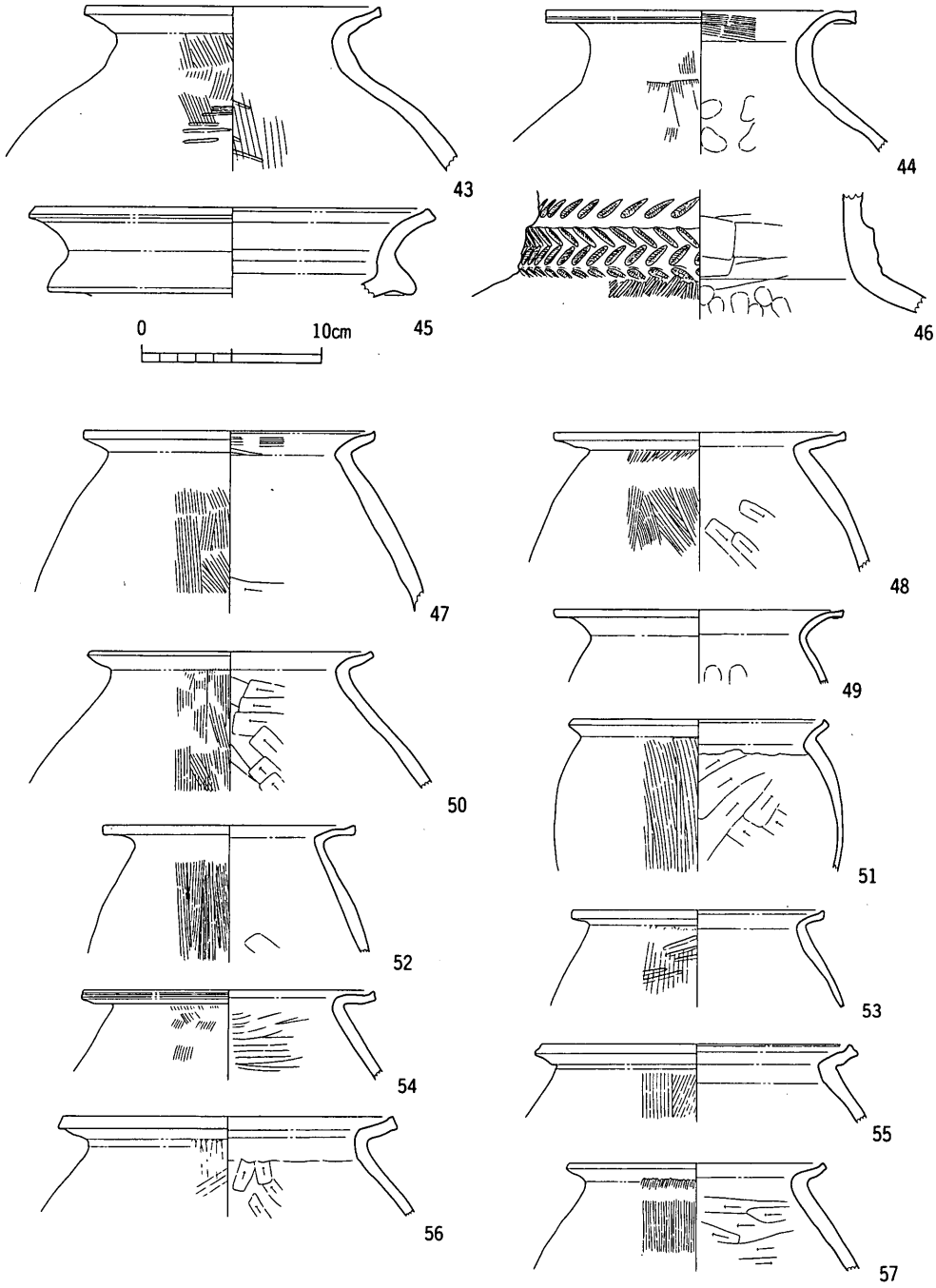
第244図　第４層弥生土器地区別分布図



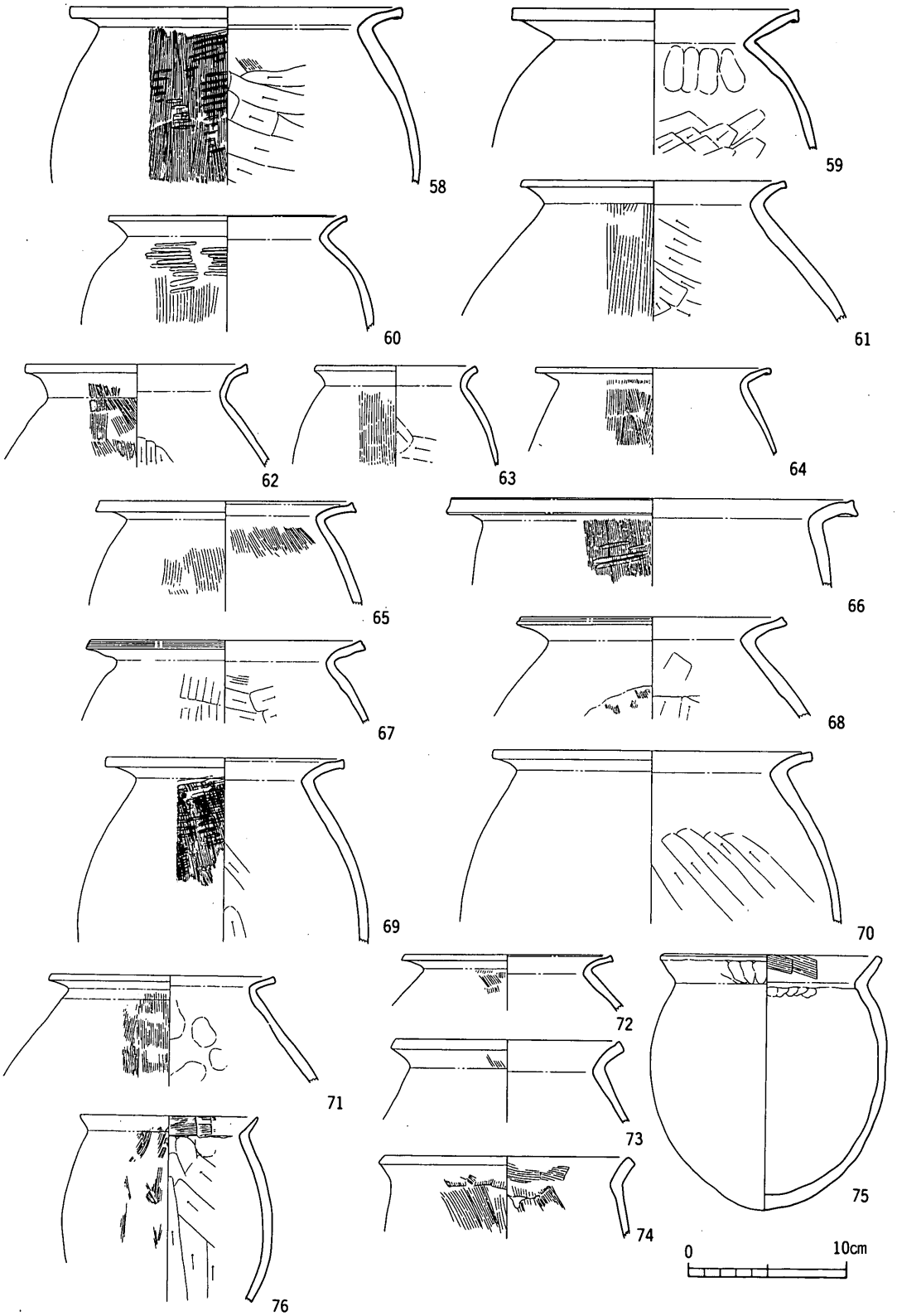
第245図　第４層出土遺物実測図(1)



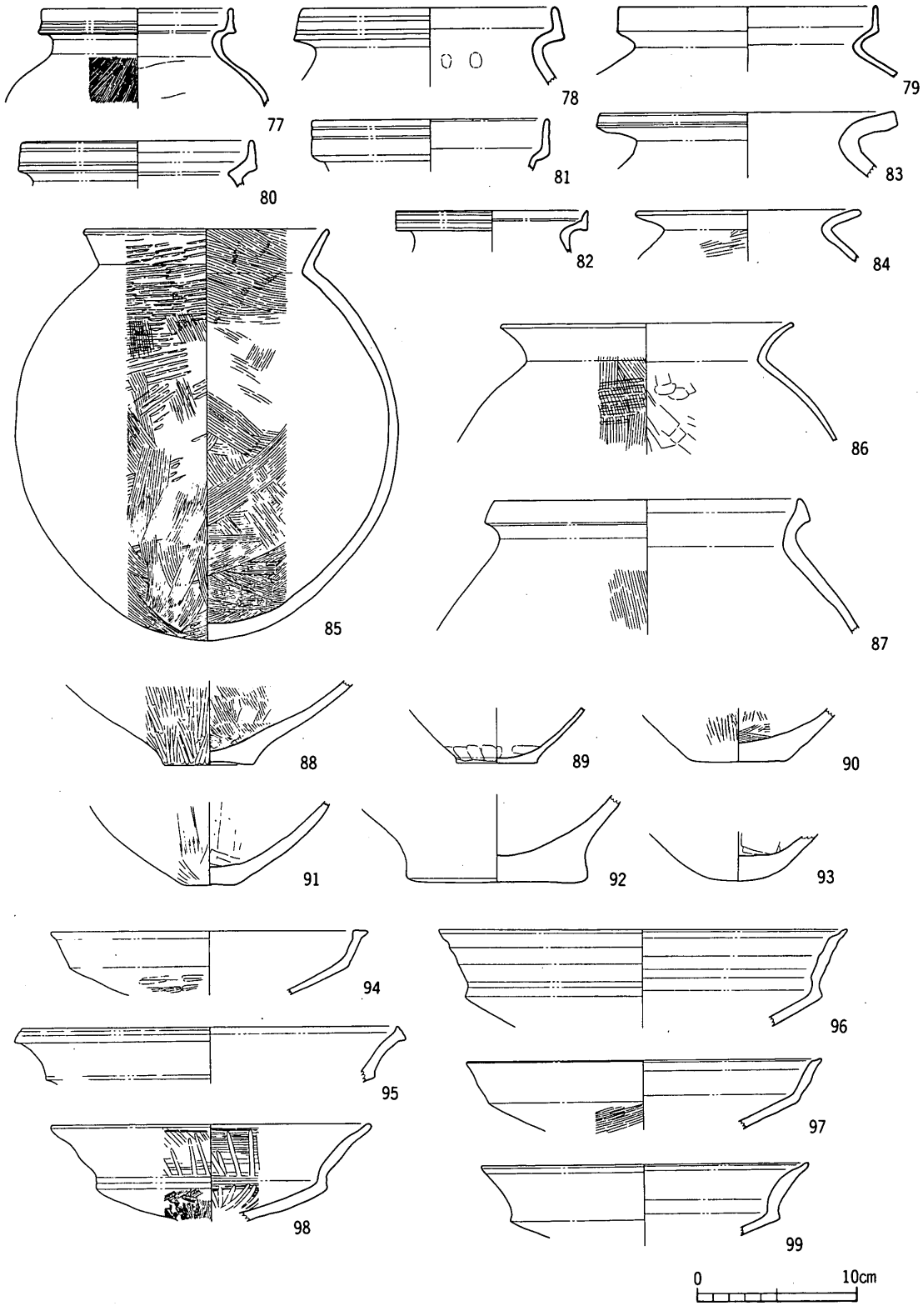
第246図　第４層出土遺物実測図(2)



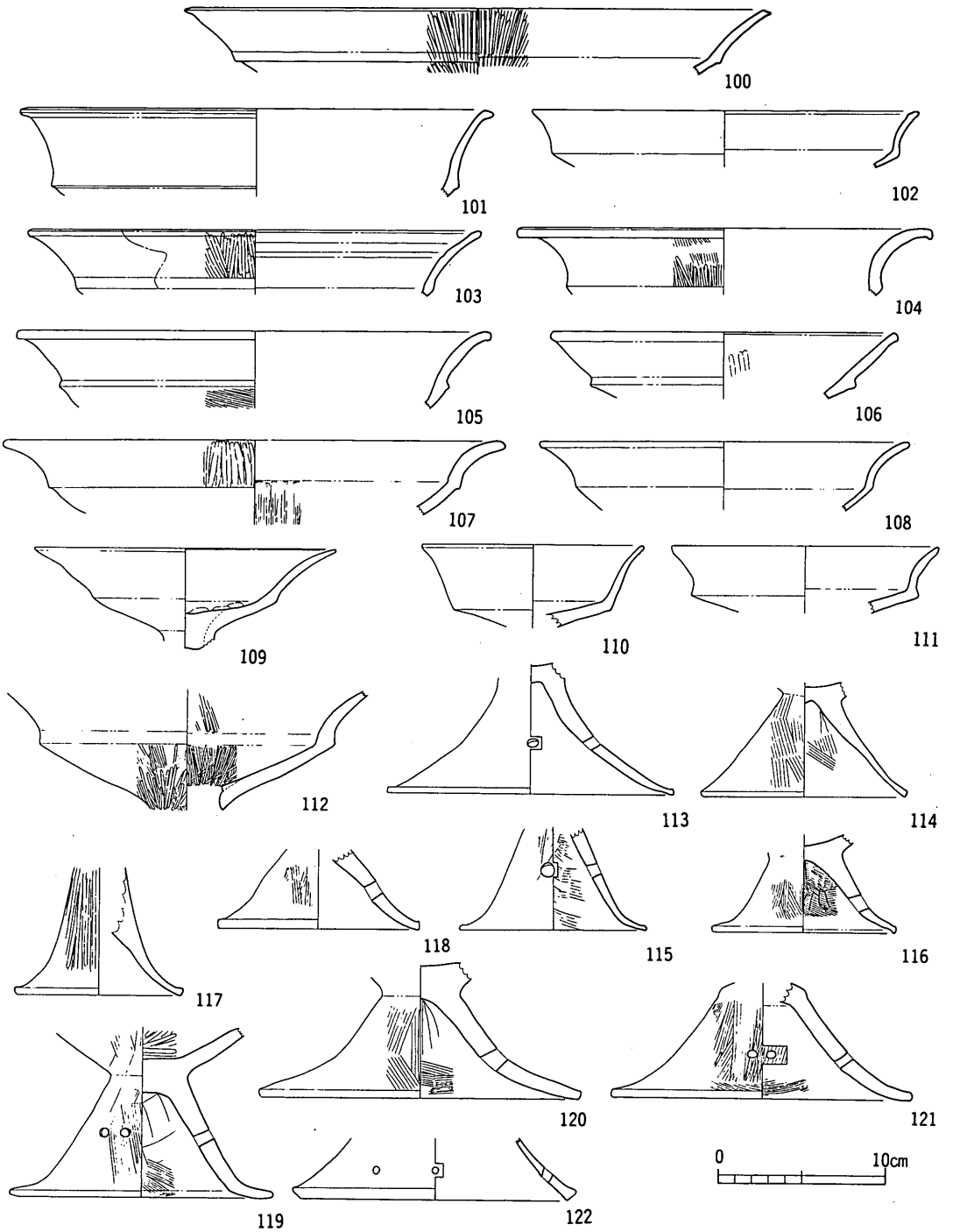
第247図　第４層出土遺物実測図(3)



第248図　第４層出土遺物実測図(4)



第249図　第４層出土遺物実測図(5)



第250図　第４層出土遺物実測図(6)

高杯形土器

94は杯部の屈曲部以上の部位が短く，端部に水平な面を形成する。端面は外部への張り出しが大きい。95は口縁端部を上下に肥厚して端面に2条の凹線文を施す。屈曲部はやや突出する形態である。96の口縁部は内外面の強いナデ調整により複数の段が形成される。97についても口縁部の形態は96に類似するが，既に口縁部内外面の段と屈曲部の突出は不明瞭になっている。96を簡素化した造作と言えよう。98の口縁部に認められる弱い屈曲は96，97に共通する形態であると考えられる。長い口縁部を有する点が特徴である。99は口縁部の器壁が厚く，端部が細く成形される。100，101，103，105，106は湾曲の弱い口縁部を有し，端部を丸く成形する。屈曲部は内面の変化点が不明瞭であるのに対して，外面を意図的に突出する。107，108は大きく湾曲する口縁部を有し，端部を丸く成形する。109は屈曲部以上の部位が屈曲部以下の部位を凌ぐ形態である。

脚部については屈曲部の有無により次の2者に大別できよう。

113，114は屈曲部を有しない形態であり，脚端部をやや肥厚する。115～121の脚部は緩く屈曲して水平気味に広がる。しかしながら，屈曲部は明瞭ではない。端部はやや肥厚するもの（115～118）と丸く成形するもの（119～121）が認められる。122は脚端部を肥厚して端面を成形する。

鉢形土器

123～125は小型品であるが，器高に比して口径が圧倒的に大きいために浅い器形である。総て口縁端部は細く丸く成形される。126～135は前者に比してやや深い器形であり，器高と口径の比率はほぼ1：2に相当する。136～138は胴部の湾曲が大きいために半球状を呈し，容量が大きい器形となる。136，137にみる様に内面のハケ目調整が丁寧である。139～142は浅い器形であり，基本的には123～125の形態と同一と考えられる。143，144は口径は大きいが，直線的な胴部を有するために容量が小さい。145は小型品であるが，深い器形である。口縁部がやや外反する。147～149は口縁端部を拡張して水平な面を形成する。

その他の器種

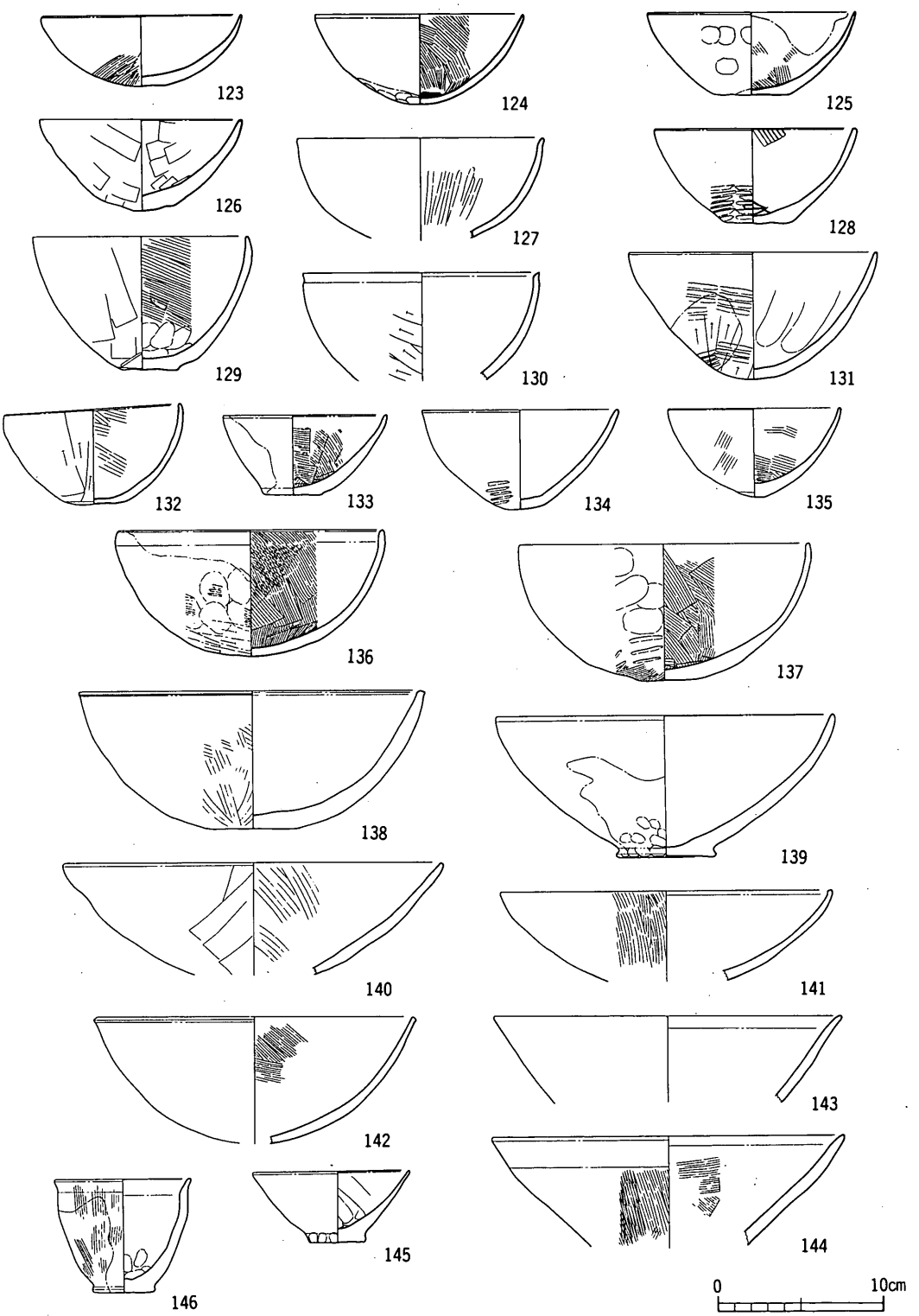
単孔式の甑形土器の底部（153）が1点出土している。

154はほぼ直立する口縁部を有する小型の壺形土器。

155は脚台部を有する深い器形の鉢形土器であり，特に外面がヘラミガキ調整によって丁寧に仕上げられている。形態上の特徴がⅠ－6類の製塩土器に酷似する点から模造品と考えられよう。

157～160は小型の皿形の器形である。

161，162は直線的な胴部の小型の鉢形土器である。小規模な平底を有するが，固定する機能はない。



第251図　第４層出土遺物実測図(7)